明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正六年八月廿九日印刷納本
大正六年九月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

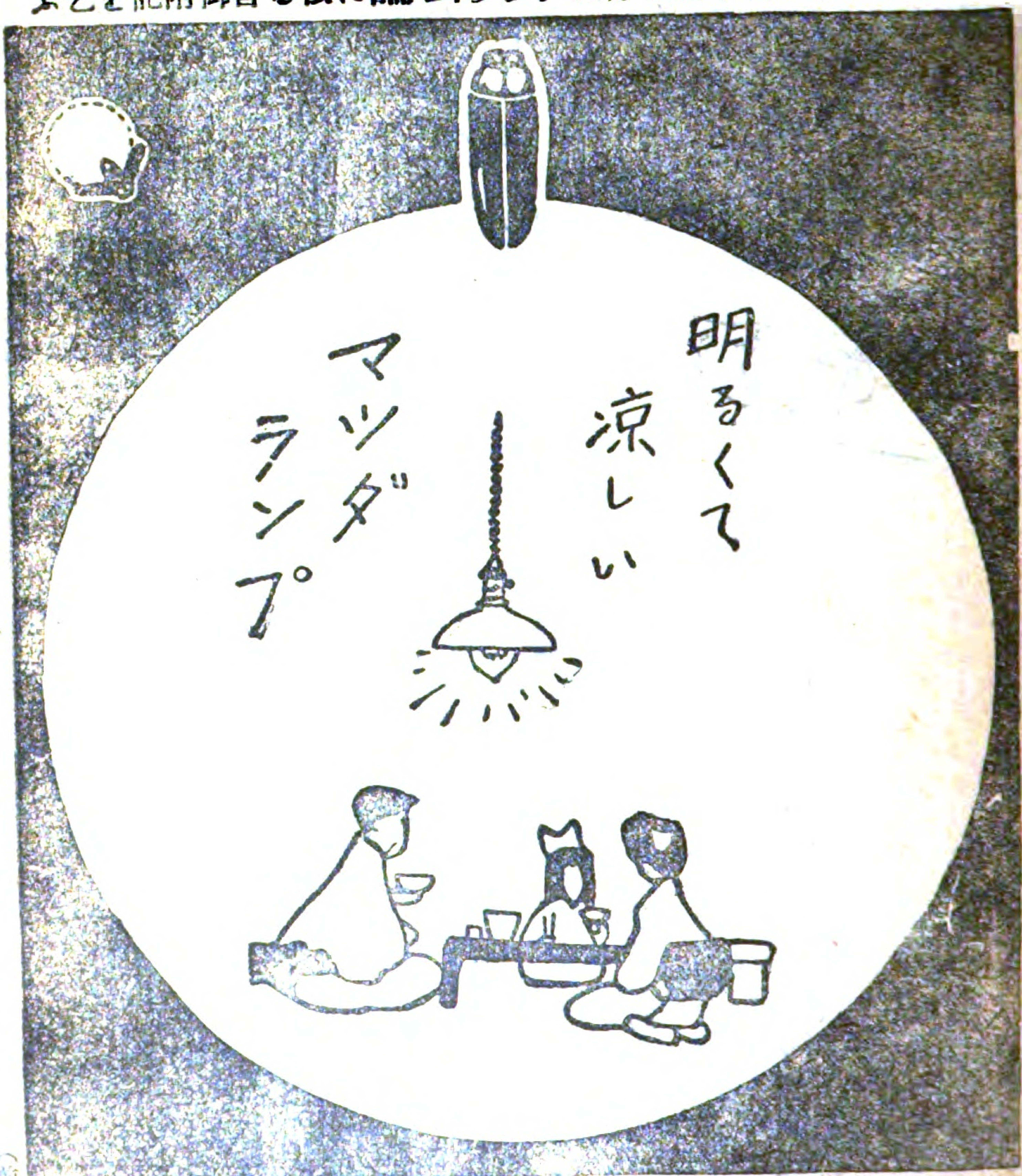
秋期大附録號

第三十二年第十號　第三百四十八號



染めたと見えぬ
自然の黒髪と全じ色に染る
志らが赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タッタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗で剥ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 東京大阪 丹平商會
全國化粧品賣藥店にあり

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ



（前付二の一）

信用ある店舗及確實なる品の廣告掲載は[illegible]紹介す

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"TESTA DELLA VERGINE"
SIGNORELLI

中央公論



第卅二年第十號
秋期大附錄號
第三百四十八號

現代に於ける人類解放の三使徒

田中王堂

一、解放とは何を謂ふか

「人類の解放」！　是れは過去二百年に亘つて、人間の天地を搖蕩しつゝあつた響の一つ、しかも、その優なるものの一つである。生活の改善を心にした、又は、其れを口にした多くの思想ある（若しくは思想なき）哲學者と、多くの思慮に富む（若しくは思慮に乏しき）政治家とは、時代の要求を看取する彼等の聰明と、其れに順應する彼等の善良とを標識せんがために、各々、先を爭つて、この標語を使つ

たのであつた、そして、交換し合つたのであつた。人類の解放！（彼等の想像に從へば）、如何なる希望も、如何なる光明も、如何なる奇蹟も、悉とく、この一句の咒文の中に孕まれて居つたのである。然し、その實蹟よりして、この標語も、他の多くの標語と等しく、その當時より今日に到るまで、其れの音響が傳播された程度に其れの意義は理會されて居らぬことをわたくし共は知るのである。

固より、解放なる言葉には、重大な、尊貴な意義がある。然し、この意義は靜的に、即ち、物質的に解釋することに依つては闡明されないで、動的に、即ち、精神的に體認することに依つて始めて發揚されるのである。さうであるのに、是等の哲學者や、政治家は、尠しも、其れを動的に、精神的に體認することをしないで、一向に、其れを靜的に、物質的に解釋しようとして居た。畢竟するに、彼等は正しき本能と、誤つた知識とに惡つて、解放なる事業を理會し、實現しようとして居つたのである。彼等があらゆる因襲は弊害を伴うと知覺したところに、彼等の本能の正しかつたことは證據立てられる。が、彼等が、この事實を誇張してあらゆる因襲は弊害であると判斷したところに、彼等の知識の誤つて居たことは證據立てられる。彼等の正しき本能は、コンヴエンションを嫌つた、そして、其れを打毀さうと志した。然し、彼等の誤つた知識は、一つのコンヴエンションを打毀すことは、その瞬間に、他の一つのコンヴエンションを打立てるのである、新たに一つのコンヴエンションを打立てなければ、到底、二つの舊きコンヴエンションを打毀すことは出來ないことに氣付かなかつた。嘗て、カントは、この種の人達を取つて、巧妙にも、其れを空氣の抵抗を無くすために、眞空の中に飛ばうとした鳩に喩へたのであつた。

この種の解放運動に於て、その假想とその實質との間に、どれだけの扞格が潜在し、且つは、發露するに到つて居るかを説明するために、わたくしは、之れが一つの照例を其れの先驅者の一人であつた、デカアトの事業より取つて見よう。

大形に彼れの告白するところに據ると、彼れは弱冠にして大志を抱いた。彼れは傳來の數學の生活の方針とするに足らざるを悟つたために、新たに之れが方針を創造しようと企てるに至つた。そして、この方針となるものは、どうしても其れの確實性の疑はれることの出來ぬもの、基礎の上に築かれねばならぬと彼れは考へた、彼れは斯かるものを發見する手順、斯かるものが存在するか、どうかを發見する手順として、總べて、彼れの身邊を取り圍む制度、教理、事象の存在と意義とを一つ、一つ、疑つて行つた。然し、彼れは最後に、どうしても疑ふことの出來ないどうしても、矛盾に陥らないでは、疑ふことの出來ない一つの實在に到著したと云ふのである。そして、其れは、『自分は考へる。故に、自分は在る。』と云ふ命題の形に由つて、彼れが表現した事實であつたのである。

然し、彼れがこゝに、極めて暢氣に聲言して居るやうに、彼れは果して、眞に彼れの身邊を取り圍んだ一切の制度や、教理や、事象の存在と意義とを疑つたであらうか。彼れは、決して、そんな事はしなかつたのである。彼れがそんな事をしなかつたことは、(勿論、彼れの想像の上だけで)、彼れが新たに知識を築き上げるに用ゐた工夫の經過からしても、よく解かる話である。

彼れの語るところに據ると、彼れが意識すると云ふ事實より、彼れが存在すると云ふ事實を推理して來ると彼れは、忽ちにして、信じ得られる觀念の有たねばならぬ特徴として、『明瞭』と『分明』との二つ

を擧げて居る。明瞭は或る觀念の內容の有つ特徵であつて、分明は或る觀念が他の或る觀念に對して保つ特徵である。そして、或る觀念が內に在つて、明瞭であり、其れが外に對つて、分明となつて居る時には、其れは、是れまで、生活の道具として重大な役目を滿たして來た成果とも觀られ、現に、滿たして居る格調とも觀られるのであるから、(さう云ふ特徵を有たないでも、生活に於て、重大な尊貴な役目を滿たして居るものに衝動もあり、想像力もあり、はた概念もあるが)、彼れが、依然たる一個のスコラ學徒として、是等の二つを以て、十分に信頼すべき觀念の內具しなければならぬ特徵としたのに大した無理はない。然し、事實、彼れのやうに、征服に依つて、この種の觀念を創造したのでなくして、總かに內省に依つて、そこに、其等を發見したのであるから、彼れの大形な揚言に似ず、彼れの態度は、徹頭、徹尾、反省的のものでなくして、沒反省的であり、沒批判的のものたるに止まつて、批判的のものとはなり得なかつたのである。斯くして、彼れが容易に攝取し、承認したものは夙に、先人の功利に依つて組織され、現に、社會の惰力に依つて保留されて居た神の存在に關する證明法と、精神と物質との性質に關する識別法とであつた。

　して見ると、彼れが全力を盡して、疑へるだけ疑つたと云ふことは想像の上では眞實であつたが、事實の上では虛僞であつたのである。彼れが眞にしたことは、しようと企てたことは、たゞ、彼れの生活の要求と、彼れの同胞の生活の要求を中心として、必要な風に、程度に、常時、現存したあらゆる制度と教理と、事象との改竄又は改價とに限られて居たのである。彼れは是れだけの事をすることを「絕對に疑ふ」と呼んだのである。されば、「自分は考へる。故に、自分は在る」と云ふ命題は、その樣式に就

いて見ればどんなに抽象的になつて居るにしても、その內實に到つては、極めて具體的のものであつたのである。この命題の中で、「自分は考へる」と云ふことは彼れが人間として生活するに必要な風に傳來の學統を肯定するより來たる意識であつて、「自分は在る」と云ふことは、彼れが市民として生活するに必要な程度に、日常の義務を實行するより生ずる信念に他ならないのである。若し彼れにして、彼れの爲し得る總べて、爲さねばならぬ總べては、たゞ、時勢の推移と理想の變遷とに應ずるために、必要な風に、程度に、當時の制度と、敎理と、事象との改整と改價とを圖ることに限られることを知つて居つたならば、何もあんな命題を提唱して、徒に人騷がせをするやうなことはしなかつたであらう。あんな人騷がせをしないでも、しないで、一層平坦な方法に由つた方が、一層價値ある効果を實にすることが出來ることに氣付いたであらう。然し、あゝしたところに、あゝしなければ止まれなかつたところに、一個の革命兒として、彼れが愛すべき意氣と、併せて、憫むべき無智との所有者であつたことを示して居ると云ふものである。

正しき意義を有つた解放は、こんなものであつてはならない、こんな覺悟と方法とを以て始められてはならない。

わたくし共は、現在を通じて常に未來を決定して居るのみならず、また、絶えず過去を改作して行つて居る。若し現在の一部に非難さるべきものが見出だされるならば、共れを非難するものも、亦、同じ現在の一部であらねばならぬ。現在は悉とく美でなく、善ではないことは確かである。然し、現在を外にして、どんな美も、どんな善も生じ來たらぬことは一層確かである。現在は天國ではない。然し、無

論、地獄でもない。其れは、前途に希望と光明とを有つた煉場である。斯くして、現在はわたくし共に取つて、あらゆる幸福の基本となり、動力となつて居るのである。されば、若しわたくし共にして、解放と云ふことに何等かの意義を持たせようとするならば、其れはわたくし共を現在の外へ解放することではなくして、現在の中へ解放することであらねばならぬ。つまり、わたくし共をして一層深く、一層眞實に、現在に生きしめることであらねばならぬ。

其れならば、一層深く、一層眞實に、現在に生きるとはどう云ふことであるか。どう云ふことであらねばならぬか。

個人に取つても、個人の團體たる社會に取つても、現在は彼れ、若しくは、彼等の感覺、思想、情操行爲等、實際に、彼れ、若しくは、彼等の行爲を動かし、決定して居るものの總稱である。そして、現に、等しく生活の內容を組織して居ると云ふ平明な事實からして、是等の總ては、それ、ぞれ、相當の價値を有つて居ることは爭はれない。然し、境遇の推移と、欲求の變遷とに應ずるために、生活の樣式を更改して行く必要のあるところからして、或る種の感覺、思想、情操、行爲は支配する役目を取り、他の或る種の感覺、思想、情操、行爲は支配される役目に服して居るならば是等のものの價値は、靜的に即ち、部分的に觀ては、平等であつても、動的に、即ち、有機的に觀ては差等あるものとならねばならぬ。其の故は、いづれも、現在を構成して居る要素には相違ないが、一方が新興の欲求として未來の生活の方向を指示して居るのに他の一方は纔かに過去の經驗の蓄積として、其れの材料たるに止まるからである。俗人が前者を理想と呼んで天來のものと尊重し、後者を現實と呼んで地生のものと卑下する

のは固より其の當を得て居るとは云へぬが、實際の功利に依つて養はれた氣分からすれば、さうすることに多少の根底のないわけではない。過去の經驗は、その初め、非常な苦心を以て構成され、又、是れまで、久しく貴重な役目を滿たして來たものであるから、未來の方針からして必要な風に、程度に、其れが改造を迫られても、容易に之れに應ずることを肯じない。反抗の態度を取る。さうなると、未來の方針は、無理にも其れを壓倒しようとして掛かる。征服の態度を取る。斯くして、一時にしても、生活の成立に必須なる是等二つの要素は、互に反目し、確執することになる。生活が、こんな變態に在ることの望しからず、好しからざることは、何人と雖も直ちに會得出來ることであらう。若し解放に一つの職分があるならば、それは固陋な過去の經驗を啓發すると同時に、輕浮な未來の方針を醇化し、兩者をして、彼等本來の機能に立ち還へらせることであらねばならぬ。解放がこの役目を滿たす時にわたくし共は、一層深く、一層眞實に、現在に生きることが出來るのである。

古來、世上に出現した優秀なる道德の敎師の一人として、基督は可なりの程度にまで、解放の理趣に徹底して居つた、とわたくしは考へる。彼れが爲したものとして傳へられてある「眞理は汝を自由にす」と云ふ宣言は、(其の實、誰れがなしたものにしても)、正しく、彼れ一代の事業の註脚となつて居る。其れならば、彼れはあの短い、然し、光輝ある生涯を通じて、彼れが全心を注いで鼓吹した「解放の福音」なるものの特徵は何んであつたか。

其れは、一口に云つて見れば、人間を敎育するに、彼れの行爲に關して區々たる規則を賦課することに依つてしようとしないで、總べて其等の行爲の源泉たる彼れの氣禀を陶冶することに依つてしようと

したところに在るのである。彼れは、金冊を収めるに、何にも優れて効果ある方法は、其れを産む金鷄を捕へることにあるの秘訣を知り、そして、其れを實行したのであつた。彼れの教訓は、其れが行爲の規則として取られるに方つて、落漠たる絶對主義と見える程、氣禀の陶冶として取られて來ると、潑溂たる個人主義となるものであつた。彼れの理會に從ふと、「眞理」とは、志向として生活を體認することと體認する知見とを指して云ふのであつて、「自由」とは、さう體認された價値に從つて、欲求の階統を整齊することと、整齊する力量とを指して云ふのである。

眞の意義を有する解放は批判的であり、徹底的である。或は、批判的であるがために徹底的であると云つてもよいし、又、徹底的であるがために批判的であると云つてもよい。そして、其れが、批判的であり、徹底的である唯一つの目的は現存の最深要求よりして、生活の最奥處に於て發見される個々の欲望又は、理想に最眞意義を賦與し、其等をして、自づから、一つの體系を組織せしむることである。其れは、生活を構成する要素である以上は、最も大なる思想より、最も小なる衝動に至るまで、一切のものの存在を認め、そして、其等の要權を尊重する。たゞ、然し、其れは、隨時に、臨機に、組織される體系に從つて、大なるものに大なる價値を與へ小なるものに小なる價値を與へるが、決して、小なるものに大なる價値を與へたり、大なるものに小なる價値を與へたりすることをしない。其れは、一時に於て一事をなすに全力を傾ける。然し、さうする間にも、其れと並んで存する、或は、其れに續いて起るところのものに對する關係を忘却しない、無視しない。其れは、或ることが必要である時には、其れを實現することに熱中する。然し、其れが、已に必要でなくなつた時には、其れと、其れの痕跡とを超脱する

ことに自由である。

解放の意義に關して、わたくしの理會するところのものは、ざつと、こんなものである。或る人は、この特色を形容して、瞬間の中に永遠を捉むのであると云つた。又、或る人は、部分の中に全體を觀ずることであると云つた。わたくしは、わたくしの見地に憑つて、其れは相對的に考へ、絕對的に行はうことであると云はうと思ふ。

二、吾人は既に解放を得たりや

解放の意義に就いて、こゝに、聊かわたくしの試みた解釋に從つて觀察する時に、わたくし共は現に解放されて居るであらうか、まだ解放されないで居るであらうか。

重ねてこゝに繰り返すが、さうして、繰り返す必要は十分にあると思ふが、解放は、わたくし共を現在の外へ解放することではなくして、現在の內へ解放することである。つまり、現在に於て、彼れが有てる聰明と、彼れが用ゐ得る力量とを、出來るだけ、强烈に、出來るだけ自由に有ち、且つ、用ゐることである。この見地よりして、わたくし共は、既に解放されて居るであらうか、或は、まだ解放されないで居るであらうか。

嘗て或る一部の人士の間に、自覺、無自覺と云ふ言葉が行はれた、或は、是等の言葉は、今日に於ても尙ほ彼等の間に行はれて居るかも知れぬ。然して、彼等の意見に依ると、生活する上に取つて、自覺を持つと云ふことと無自覺で居ると云ふこととは、例へば、白と黑との如く、或は、晝と夜との如く、

程度の相違ではなくして、種類の相違である。自覺を持つて生活するとは、自分の行爲の各々、及び、總ての志向を討尋して生活することである。之れに反して、無自覺で生活するとは、自分の衝動の各々及び總ての意義を理會しないで生活することである。然し、兩者の間には、其れの發生から觀ても、又は、其れの作用から觀ても、決して、彼等がこゝに想像して居るやうな相違はない、ある可き筈もない。

一人の哲學者は嘗て云つた。「人間は、彼れが六七歲に達するまでに、彼れが生活に必要なだけの知識を畜積し、判斷を構成して了ふ。この年齡以後に於て、彼れが爲すところのもの、爲し得るところのものは、たゞ、其れの空隙を充塡し、其れの分立を統合するだけである、」と。是れは確かに事實に徹底した觀察である。

誰れにしても、この世に生を享けたものは、必然に、先人の生活の成績たる或る文明の中に出現するのであるから、外觀よりすれば、彼れの生活の樣式は二段に別れることになる。第一段は、舊い文明を攝取することである。第二段は新らしい、文明を工夫することである。第一段は價値の包和を旨とする時期である、第二段は價値の創造を企てる時期である。然し、意義よりすれば、彼れの事業は、初めから終りに至るまで、一徹に彼れの能力を標準として、出來るだけ、自分の幸福と發展とを圖る爲めに、彼れの境遇を征服し、利用して居ることだけにも限られて居るのである。斯くして、各人の努力に依つて堆積された結果は、新時代となり、新氣運となつて現はれる。

俗人の見解に從ひ、俗人の稱呼を用ゐるならば、小兒の生活は無自覺の、若しくは、解放されない生活であつて、大人の生活は、自覺を有つた。若しくは、解放された生活である。して見ると、無自覺の

若しくは、解放されない生活と、自覺を有つた、若しくは、解放された生活との間には、一般に想像されて居る程の相違のないことは明らかである。が、其れならば、兩者の間には、何等の相違もないのであらうか。わたくしは決してさうは思はない、云はない。大人の生活と小兒の生活との間には、確かに、わたくし共の現に認めなければならぬだけの相違はある。そして、たとひ其れ程ではないにしても、同じ理法からして、一人の大人と、他の一人の大人との間には可なりの相違はある。わたくしは、十分に、その存在を認識し、その意義を理會して居る。たゞ、わたくしは、この相違は、種類の相違でなくして程度の相違であることを主張し、そして、さうすることに依つて、始めて、わたくし共は、或る生活が既に解放されて居るか、或は、まだ解放されて居らないかを判斷する一つの公準を得るのであることを主張するのである。

俗人の見解に從へば、解放された生活の特色は、其れが懷疑的であり、破壞的であることであつて、解放されない生活の特色は、其れが獨斷的であり、保守的であることであるとされて居る。然し、誰れにしても、尠しく、事實を觀察し、眞理を尊重するものならば、これは一片の空想に過ぎないことを知つて居る筈である。人間はその根本性よりして、獨斷的でなく、保守的でなくして到底、懷疑的であり破壞的であることは出來ないものになつて居る。つまり、懷疑は獨斷の一種に過ぎないし、破壞は保守の一種に過ぎない。わたくしは、こゝに、尠しくわたくしのこの宣言の意味を説明せねばならぬ。

かりに、機能の上から、生活の事實を構成する雜他の要素を大別して、本能と理性との二つとする。さうすると、本能は中核であり、理性は末梢である。本能は目的であるが、理性は方便に過ぎない。方

便である理性は、必然に、合理であらねばならぬ。そして、其れが合理であるところに、其れの理由はあるのである。目的たる本能は、當然、非合理であらねばならぬ。そして、其れが非合理であるところに、其れの尊嚴はあるのである。して見ると、解放は一切、理性に關したものであつて、本能に關したものであらぬことは明瞭である。わたくし共にしてアミイバの生活を語る時に、その概念は、動物の衝動と、合せて、其れを滿たす方便たる僞似足をも含まねばならぬ。そして、僞似足の變化に依つて、衝動そのものも變更を受けるやうに見える。然し、眞に變化するものは僞似足だけであつて、衝動は一つの不思議な與料として、永久に變更されることはない。

アミイバより出立し、幾多の變遷を閲して來た人間の生活に在つても、理窟は全然同樣である。彼れは何故に生きるか、生きなければならぬか。是れは、彼れに取つて答へることの出來ない疑問である。隨つて、結局、眞の疑問とはならないと云ふことになる。然し、この生の衝動がおのれの滿足を求めて來ると、こゝに、其れは其れの手段にまで分化して來る。衝動は批判の對象にはならないが、(手段には優劣があり、又、その優劣は經驗と反省とに依つて、或る程度には左右出來ると云ふ簡單な理由から)、手段は批判の對象となされ得る。美とか醜とか、善とか、惡とか、正とか、邪とか云ふ範疇は、悉とく手段にまで與へられるものである。

基督の生涯の中には、(彼れの傳記者の書き遺した、ところに從へば)、幾多の興味ある事件が起つた。然しこの場合に於て、わたくしは其等の一つに特殊の興味を見出だすものである。基督は或る安息日の朝に於て、彼れの弟子の二三子と共に或る麥ばたけを通過した。その時に、彼等の總べては非常に空腹

であつた爲めに、行く行く徑ばたの麥の穗を摘んで食した。彼れの敵は之れを見て、或は聞いて、彼れの弟子は神聖なるものとして守る可き安息日の掟を犯したものとして彼れを非難した。そこで、基督は反つて、彼等に問ふに、人は安息日の爲めに造られたものであるか、將た、安息日が人の爲めに造られたものであるかの一句を以てしたのであつた。この興味あるエピソオドに於て、難者は解放されない人物を代表し、基督は解放された人物を代表して居ると、普通に取られて居る。

この非難と答辯とに於て、眞理は悉とく基督の方にあつて、虛僞は悉とく難者の方にあつたか。わたくしはさうは考へない。基督が理性より安息日の意義を解釋しようとし、難者が本能より其れを保守しようとして居たことは明かである。然し、たゞ、それだけの事實で、直ちに基督は眞理を專有し、難者の所持して居たのは纔かに虛僞だけであつたとすることは、あまりに、功利と歷史とを無視した話である。

ユダヤに於て、安息日の制度が何人に依つて、如何なる時代に於て、定められたか解からない。然しそんなことを尋ねる必要はない、兎に角、一度、其れが制度となつた時に、あれ程までに、代々の人に依つて尊信され、嚴守された事實からして、其れが初めに生理上の必要より來たり、次に精神上の要求と化し、最後に、更らに、政治上の要件とまで進んで行つたことは明らかである。其れが宇宙創造の傳說と結び付けられ、神聖化されたのを見ても、其れが如何に彼等の日常生活の幸福と密接な關係を有つて居たかゞ知れる。たまたま、あの事件に對する非難の根柢とされたものが、當時に於てさへも、一願に價せざるほど薄弱なものであつたからと云つて、安息日を敬虔に格守すると云ふこと、其のもの丶

重大な意義に到つては、それの一分をも減じはしない。されば、安息日が人の爲めに造られたからと云ふ事實からして、其れであるから、何人でも、如何なる口實の下にでも、其れを勝手に左右してよいと云ふ結論は決して生じて來ない筈である。其れが人の爲めに造られたものであるとして、反つて、そこに、始めて、其れに服從する理由が生じて來るのではないか。

基督の答辯は、其れの價値に於て、極めて曖昧なものである。安息日は人の爲めに造られたものであるから、其れを守ることが、その當初の目的に反するとあらば、彼れが其れを變更し、若しくは廢止すると云ふことは稱讃さるべきことである。然し、さうするのは、生活に依つて、時々、刻々に、其れがらないのに、さうなつて居るか、居らないか解からない間に、其れが、たゞ、二三の場合に於て、極めて少數者に取つて、不便であるからと云ふ理由だけで、彼等の屬する團體の安定と幸福との保障を傷けるやうな行動に出ることとは認容すべからざることである。されば、この場合に於て、基督の引例が既に示して居るごとく、其れが對人論法であつたことを外にして、若し基督の態度に聊しでも是認されるだけの根柢があるならば、其れは、たゞ、(一)當時の一般人の理解に從つて、彼等の行爲は安息日の制度と抵觸しなかつたと云ふことか(二)安息日の制度は、既に、當時の多數人の生活に取つて、不便となり不合理となつた爲めに、彼等は進んで其れを破らうとしたのであると云ふことかの二つの理由に限られて居つた、とわたくしは考へないわけに行かぬ。

されば、安息日は人の爲めに造られたのであると云ふ眞理を發揮したのは、(若し當時の多數が是れ程

の事に氣付かずに居つたと云ふことが假定されるならば)、確かに、基督の功績に相違ない。が、若し難者にして其れを明らかに承認した上で、其れであるから、反つて、自分は其れを守ることを固執し、且つ、鼓吹するのであると答へたならば彼れはわたくしが前に暗示した二つの理由の孰づれかの一つを以つて、之れに酬ゆるの外はなかつたらう。固より、善惡、正邪、美醜の標準は、各個人に依つて、彼れの生活を中心として創設されたものでなければならぬ。「人は萬物の尺度である」と云ふあの有名な格言の中の「人」の意義を合理化するの方法として、其れに對して、或る平凡な學者が平凡な解釋を與へてるやうに、人類一般でなければならぬとして居る。然し、是れはどうしても個人を意味するものとしなければこの格言は其れの尊貴な價値の一切を失なうことになつて了ふ。眞の意義に於ては、保守も、改革も或る個人の體認と創造とであらねばならぬ。たゞ、深く考へ、正しく行はうとする人々に取つては、個人なる言葉は、自分を指すにしても、又は、他人を指すにしても、實存する個人を意味することでなければならぬことになる。卽ち、彼れと協同生活を營む無數の他人と幸福を分け、責任を頒つて居る個人でなければならぬことになる。如何にも安息日は人の爲めに造られたもの、個人の爲めに造られたものである。然しこの人、この個人は、長き期間に亙つて、出來るだけの幸福を獲得することを目的として他の同じ目的を有する無數の個人と共に、協同的に、合議的に彼等の欲求の選擇と、醇化とを圖つて來たところのものであらねばならぬ。こゝに、わたくしは、基督が安息日を破るとか、守るとか云ふことことに就いて擬議して居るのではない。たゞ、孰づれとするにしても、彼れに相當の用意と理會とがあつたか、どうかを問題として居るまでのことである。

眞の意義に於ける解放は、保守する爲めに保守することではない。また、破壞する爲めに破壞することでもない。現存する最深の要求から、彼れの所持するあらゆる能力を發揮し、彼れの掌握し得るあらゆる勢力を運用して、最大の幸福を實現することである。これは、固より淺薄な功利主義や、粗硬な民主主義や、獰惡な帝國主義や、偏狹な革命主義や、固陋な傳統主義やに依つては、到底、實現されないところのものであつて、是等よりも、一層も、二層も、深遠な、豐潤な、柔順な、寛厚な、そして、自由な主張であり、實行である。苟もわたくし共の生活を組織し、又は、其れに關係を有つものである限り、悉とく其等を正當な、的確なパアスペクチヴに依つて現實化し、個體化しようとする主張であり、實行である。

かゝる意味に於て、わたくし共は、(人類一般もさうであるが、特に日本人は)、果して、解放されて居るであらうか、どうであらうか。尠なくもわたくしだけはどうしても彼等が解放されて居るとは思はない。若しわたくしにして、これが實例を擧げることとの要請に迫られるならば、わたくしはあまりにその數と種との多さに當惑しなければならぬ程である。現に世の謂ふところの識者達が、熱心に或は不熱心に、然し、確かに盲目にだけには從事し、執着し居るところのものは、學問にしても、藝術にしても、政治にしても、教育にしても、道德にしても、將た産業にしても、これが實例となり得ないものは一つとしてないではないか。

わたくし共が解放されないことより生ずる缺陷は主として生活の機關たる學問や、藝術や、政治や、教育や、道德や、産業やに現はれるのである。是等を外にして現はれるところは殆どないのである。さ

れば、是等のもの〻改造に依つて、わたくし共を解放しようとする企ては間違つて居るとは云へぬ。然し、わたくしが是れまでに閲した經驗と、今、現に、持つて居る理會からすれば、わたくし共、日本人は生活の發現たる是等の機關に於てするよりも、其れの動力たり、源泉たる生活の奧處深處に於てする方が、一層深刻な、一層永雋な効果があるやうにわたくしは信ずるものである、信ぜざるを得ざるものである。

わたくしは、これまで可なりに多くの機會に於て、わが國の文明と、わが同胞の生活との缺陷を指摘した、そして、其れに對して、それ〳〵改善の方策を提唱して來た。わたくしの指摘が事實に的確であり、私の方策が救拯に適切であることを信じて居るものは、海內、獨りわたくしだけではあるまい。彼等は現代に生活するの必要から、近世文明の機關の殆ど總べてを使用して居る。然しながら、彼等は、まだ、彼等の容知に依つて、其等を一つの體系とするまでに、それ等を統一し、醇化するに到つて居らない。且に、夕に、數多くの矛盾と、撞著と、分裂と、消耗と、相殺とが頻出するのは、全く、是れが爲めである。この缺陷を匡正するの道は、是等の機關のはたらき振りを明徹に思考することに依つて、そこに含まれた志向をして、自づから互に湊合し、融合して、一つの體系を組織せしむることである。是のやうなものが、大體に於て、わたくしの言說の骨子であつた、是の目的を實現するには、何よりも先に、彼等は生きるに、善く生きるに必要なる誠實と聰明との孰づれの一つをも缺いてはならぬ。若し彼等にして、是等のものを缺くならば、世の中に如何に尊き經驗、若しくは、學說があつても、其等は彼等の生活と何等の關係をも持つことは出來ないであらう。何等の暗示ともなることは出來ないであら

う。總ては死重でなければならぬ。

然し、現にわが同胞は、彼等の生活の改善の爲めに、可なりに熾烈な意思を持つて居ることをわたくしは疑はない。たゞ、わたくしの憂ふるところは、其れを實現するに必要なる聰明が、彼等に缺けて居ることの一事である。

こゝに、わたくしは、これまでわたくしが鼓吹した方策の塡補とし、深化として、新らたに一つの方策を提唱したいと思ふ。其れは、わたくしから觀て、近世生活に於ける三大解放者としなければならぬものゝ情操と思想とを理會し、批判することである。

三、現代生活の要求する種の學者の輪廓

普通の見解に從へば、世の中に、歴史家と豫言者とぐらゐ、その職業を異にして居るものはないやうに思はれる。何故ならば、歴史家は過去の出來事を記錄するとを職分とし、豫言者は未來の出來事を宣言することを職分として居るからである。然しながら、一度、わたくし共にして、歴史家と豫言者とを彼等の意義、又は、志向に從つて取るならば、わたくし共は、彼等が外觀に於けるほど、實質に於て、異ならないことを發見するのである。彼等の興味は同一である、尠なくとも、極めて接近して居る。ただ、彼等は其の興味を支持し、培養する材料を、異なる方角に索めて居るだけのことである。

歴史家は何んの爲めに過去の出來事を記錄するか。豫言者は何んの爲めに未來の出來事を宣言するか。孰づれの場合に於ても、彼等の各をして、そんな興味を持たせ、そんな努力を爲さしめるものは、彼等

が現に營みつゝある生活の改善であらねばならぬ。彼等に取つても、一般の俗人に取つてと等しく、第一義に於ける現實なるものは、瞬間毎に生滅する知覺や、思想や、感情だけである。其の他のものは、總べて、たゞ、記憶と推理と、想像と、判斷とに依つて、性質の上と作用の上とでこの中核と關聯せしめられるために、其れからの距離に隨つて、第二義、第三義の現實となるのである。して見れば、歷史家が如何に遠き過去を追憶する時でも又は、豫言者が如何に遠き未來を豫想する時でも苟も彼等にして其の中に或る意義を發見するならば其れは、必然に、現在と、この過去、若しくは、この未來との間に同質の興味と同性の意識との共通して居ることを假定した上のことであらねばならぬ。畢竟するに、彼等の爲す總べて、爲し得る總べては、過去と未來とを材料として、現在の解釋を試みて居ることだけに限られて居るのである。されば過去の遺物が如何に異なつた生活を物語り、未來の傾向が如何に奇しき生活を默示するやうでも、其等の意義は、大體に於て、現在の生活の中にはたらいて居る狀態と理想とに依つて制せられて居るとは明らかである。

　眞の學者、特に、眞の哲學者は、現在の生活の解釋者として、必然に、歷史家であると同時に、豫言者であらねばならぬものである。一層正確に云へば、一人にして、豫言者たるの資格と歷史家たるの資格とを補角的に倂有することに依つて、兩方の長所を取り、兩方の短所を捨てるものであらねばならぬものである。其れの意義からすれば、現在の醇化者、統一者として、歷史家も豫言者も、共に、理想に依つて現實を啓發し、又、事實に依つて想像を制限して居らねばならぬのであるが、歷史家は事蹟に囚はれて理想を閑却し、豫言者は希望に欺かれて事實を無視することゝなる。然し現在、十分な意味で現

在と呼ばれ得るほどの現在は必然に現實と併せて理想を、事實と併せて想像を包含して居るものである。現在を現實、事實とのみ視るのは、物理的の偏見である。又、其れを理想、想像とのみ視るのは辨證的の謬見である。現實もこの不思議な結合の所産として、現在は秩序であり、同時に混沌である、靜止であり、同時に變遷である、安定であり、同時に不安定である。されば、昔、パアメニディスが萬物の本質を靜體と視たのも一つの眞理である。然し事實の全部ではない。之れに反して、ヘラクライタスが流轉を萬物の本質と視たのも一つの眞理である。然し事實の全部ではない。過去の蓄積を尊重するところから、わたくし共は現在を靜止と觀るのである。又未來の改造を欣求するところから、わたくし共は現在を變遷と觀るのである。

哲學者は彼れの時代の代言者たるべきものであると云ふことは、彼れは其れの靜止の一面だけに倚せず、又其れの變遷の一面だけに偏せずして、兩方に等分の同情と理會とを持つて、生活全體の眞相を捕捉し、其れの眞意義を發揮することを心掛けねばならぬ事實を指すのである。

其れならば、彼れは、どうして、如何なる態度に依つて、斯かる使命を果たすか。

こゝに、二人の人物があり、彼等の間に、意見、又は、利との相違よりして、一つの葛藤が醸されたとする。是等兩人のために代言者となつて之れが調停の任に當たるものは、實際にどうするか。彼れにして、單に是等兩人の勝手な主張を全然受け入れ、其等を其のまゝ、兩方に對つて、交互に繰り返すだけでは彼れは、決して眞實の意味にて、彼等のために代言して居るのではない。十分に兩方の主張に同情しながら、深く彼等の爭議の根柢を討ね行き、眞に、彼れにして、眞に彼等のために代言しようとす

るならば、彼れは先づ十分に兩方の立場を理會しながら、歩、一歩に彼等の爭議の根柢を討究し行き、批判し行くことに依つて、(彼等の承認出來る道理さへ示めされれば、相方ともに、多少の讓歩は辭せざる意志のあることが彼等に假定されるならば)終に、現在の爭點を融合して、彼等のまだ意識して居らない一致點に到著し、そこに立つて彼等に說得することを爲させねばならぬ。是れは、眞實に、是等兩方の利益に同情し其等を保障する最善の道であるのである。さうして始めて、彼れは是等不幸な二人者の爲めに代言の任務を盡したと云ふものである。

これは簡單な事例ではあるが、如何なる事件に關しても、代言の性質は斯の如きものであり、代言者の資格は斯の如きものである。して見ると、事件が重大となり、事相が複雜を增して來るに隨つて、其等を醇化し、統一してその時代の代言者たるものは、ます／＼、廣い同情と、深い理會とを有たねばならぬことになる。

人間の生活の特徵からして、昔から今日に至るまで、いつの時代に於ても社會は或る種の代言者を持つて居つた。そして、生活の樣式と理想との異なるに從つて、其れの代言者の典型の變つて來たことは無論である。嘗て、ヘエグルはロオマンチックの時代に生じた歷史は必然にロオマンチックのものであると云つたが、この觀察は歷史に就いてよりも、一層汎く、深く、生活を反映することを職分として居る哲學に就いてなされた時にわたくし共は其れの一層適切なことを知るのである。總ての觀察や、思考は、或る個人に依つて彼れの個性を通じてなされる外に道はない。されば、同一の時代に生存する二人の哲學者は、必然に二種の哲學を創出する。彼等の哲學が互に異なるものとなつて、始めて其れの孰れ

もが、眞實のものとなるのである。若し其等が同じであつたならば（そんなことはあり得る筈がないが）其の時には、其等の兩方か、然らざれば、いづれの一つかゞ虛僞であると云ふことにならねばならぬ。斯くして異なつて居るところに、わたくし共は、反つて、對立的に、或は、塡補的に、兩方がその時代を反映して居ることを見るのである。

この事實を超越して、哲學はその時代の代表でなければならず、哲學者はその時代の代表者でなければならぬと云ふことは千古の定論である。わたくし共は希臘の生活を知らないで、プレトオの哲學を解することは出來ない、又、中世紀の生活を知らないで、トオマス・アックイナスの神學を解することは出來ない。然し、この關係を裏面から觀察して、同じ程度の眞實を以つて、プレトオの哲學を知らなければ希臘の生活を解することは出來ないし、トオマス・アックイナスの神學を知らなければ、中世紀の生活を解することは出來ないとも云へる。

哲學者が、彼れの時代を代言すると云ふとは、そこに現存する行爲と、理想とに對し、若しくは、狀態と傾向とに對し、其等を一つ、一つ、正當に觀察した上で、其等の各々に潛在する意義を追究して、其れを志向にまで高揚し、さうして到達した見地より、其等に對して、新たに公平な評價を與へることである。かゝる手數と苦心とに依つて得られた評價は、一見したところ、俗人の持つて居るところのものと一致することもあらう。或はそれと相違することもあらう。孰づれにしても、彼等の持つて居るところのものを無視するのでも、抑壓するのでもない。其の實、最深の、そして、最眞の意義に於て其等を尊重し、助成して居るのである。

世の中には、禁慾の生活に意義を求めて居るものもある。放縱の生活に價値を置いて居るものもある。生活の中に、見出だされたる神祕の色讚に感激して居るものもある。そこに、要求される義務の實行に献身して居るものもある。平和を最上の目的とするものもある。戰爭を最高の理想とするものもある。其の他、數へ來れば、平民主義を取るもの、貴族主義を擇ぶもの、保守主義に偏するもの、革命主義に同ずるもの等、限りのないことである。然し、廣汎な同情と、徹底した理會とに依つて、人間の根本性と社會の自然勢とが、彼等に對つて、暴露され、説明される時に、彼等は、之れがために彼等が是れまで信仰し、執着し來たつた主義や主張を一朝にして放棄して了ふと云ふやうなことは恐らくあるまい。然し、さうすると、否とに拘はらず、彼等が、之れがために、彼等の氣分と行爲との起原と特徴とを始めて的確に、そして、劃切に鑑賞することが出來ると云ふとは多くの言葉を要しないほどに明らかである。

或る人士は現代に於ける哲學の勢力に就いて次のやうな疑惑を懷くかも知れぬ。元來、人間の生活は複雜であるが、其れは事實に於て日に月に複雜になりつゝある。實行が複雜になつて行くがために、之れが機關たる理論も複雜になつて行く。如何なる興味からにしても、比較的に單純な構造と、志向とを有する哲學が、この通りに非常な加速度を以て、複雜を增し、紛糾を重ねて居る現代生活に干與しようとする如きは大膽の極、無謀の極ではあるまいかと。然し、この疑惑には何等の根柢もない。斯かる疑惑は、彼等が全く哲學の永久に所有し、保留しなければならぬ作用を會得しないところから來たつて居るのである。俗人は、よく、口癖のやうに人間の生活は、ますます複雜になり、紛糾して行くと云ふのである。わたくしも、斯くの如きは、大體、事實に相違ないと信ずる。然し、哲學は其れの本來の職分

として、決して、是等個々の發現を取り扱はうとはしない。其等のものより、その含蓄に於て遙かに豐富でありながら、その輪廓に於て遙かに簡單である其等の原理と動力とを取り扱はうとするのである。

往々にして、哲學者は他の總べての人々の所有しない、又、想像することの出來ない獨自のヴィッジョンを享有するものと云はれて居る。この假定は一つの意味では眞實である。他の一つの意味に於ては純然たる虛僞である。一般人が、彼等の宗教や、藝術や、科學に由つて、旣に發見した世界を離れて、彼れは別に一つの世界を發見する奇しき能力を具備するといふ意味に於てはあの宣言は虛僞である。然し、彼れは一般人が是等の方便に由つて發見した世界を信用し、敬愛するがために、彼れは、その世界が提供する與料の上に、一層の反省と鑑賞とを施し、そこに一層の意義と志向とを揮擢することに志し、且成就すると云ふ意味に於て、あの宣言は眞實である。

哲學の意義を廣義に取れば、其れは人類の歷史と其の生命を等しくする。

生きると云ふ目的は單一であるが、この目的を滿たす方便は雜多である。そして、方便は互に協同しない限り、其等の各は、自他の機能を障害するとになるから、其れの根柢に於ては、協同しなければならぬものである、そして、事實、さうなつて居る。然し、其等の方便の一つが、おのれの實現を主張する場合に、動もすれば、他の方便と撞著することのあるのは、わたくし共が、時々、刻々に、經驗するところのものである。そこで、如何に單一な目的の利益のために、是等の方便を統一しようかと云ふことが、夙に人間に取つての問題となつた。そして、實際には、この問題は餘程こみ入つたものになつて居

る。何故ならば、ざつと觀察しただけでも、人間の有てる理想は絶えず變遷し、彼れの置かれた境遇も絶えず推移して居るが、是等の二つは、決して寸時も、同じ程度に、同じ様式に、又、同じ方向に進行しては居らぬ。この事實に加へて、如何に苦心して工夫された生活の方針でも、二度と其のまゝ使用されて、完全に役立つものはないのに拘はらず、一度創造されたものは、相應の理由はあつても、常におのれの解體に反抗して居ると云ふ事實がある。思想の上で、こゝにわたくしが暗示した事實の相關する結果を總合しただけでも、この問題が如何に重大な、そして困難なものであるかと云ふことが會得されると思ふ。

個々の欲望は、生活を組織する一切の材料であるから、人間にして、意義ある生活を營まうとするならば、彼れは其等の要請を尊重しなければならぬ。が、個々の欲望の乖反に依つて、幸福は破壞され、其等の協同に依つて、幸福は助長されるものならば、彼れは其等をして共同せしむることに努力せねばならぬ。放任すれば、個々の方便の色彩は豐富になるが全體の協同は之れがために强迫される。統一すれば方便の全體の整齊は保障されるが、個々の特性は之れがために萎縮する。こゝに、確かに永久に亘つてのジレンマがある。其れで、欲求の問題に關して、其れの豐富を尊重する主張にも、一通りの理屈はあるし、其れの統一を尊重する主張にも、一通りの理屈はある。どちらの主張を取るにしても、全然人間の理想に反して居ると云ふことは出來ぬ。されば、一方の代言者として、パアメニデスを生じた社會は、他の一方の代表者として、ヘラクライタスを生じたのであつた。其れより下つては、一方にエピキユラスの徒があれば、他の一方にストアの徒があつた。近代に到つても、一方に感覺論、快樂說があ

れば、他の一方には、合理論、嚴肅說があると云ふことになつて居る。

然し、人間の根本性に照らして、是等の主張の一つに執着して、他の一つを排斥することは、確かに間違つて居る。斯かる偏見を確執して居る間、人間の生活は、永久に、放縱と抑壓との兩極端の間を彷徨することに止まらなければならぬ。人間の生活の中に見出されるあらゆる計畫と、設備と、機關と、制度との動力たり、源泉たる欲望の理會と取扱ひとが、こんな狀態にある間、わたくし共はどうして、緊張するが狂熱しない生活、弛緩しないで和煦である生活を望み得ようか。

肉體の機關として、其れの調整を目的として起つた精神は、單一の性質しか有たぬ。然し、其れの機能が分化するに從つて、一つの組織體から、多くの觀念が生じた。是等の觀念は、もと、生活全體の利益の爲めに分化し行くのであるから、其れの一つ一つは特殊の作用を有しながら、又、全體に對して、關係を保たねばならぬ。こゝに於て、一つの觀念は、其れに特有の作用をはたらかす部分と、他の觀念と共同する部分とを倂有することになつた。是れが、知覺と呼ばれる中核と、概念と呼ばれる輪廓とである。そして、分化して來た必然の理屈から云へば、一つの觀念がはたらく時には、中核と共に輪廓がはたらかなければ其れの本來の目的を破壞することになるが、やゝもすれば、其れの動力たる中核は、其れの調節たる輪廓を凌がうとする傾きがある。斯かる傾向からして共同して、始めて、一つの目的を達することの出來る觀念の二つの部分は、昔から近代に至るまで、肉と靈、若しくは、衝動と理性と云ふ風に、互に反抗する二つのものと誤解されることになつた。そして、生活を整頓する方法として、注意は、先づ靈又は理性に依つて、肉又は衝動を抑制することに向けられたのである。是れは、甚だ偏頗な

處置ではある。が、然し、古來世に行はれて來た敎理と學說との多數は其れを鼓吹して來たのである。か丶る二元觀の鼓吹され、信奉された間、肉又は衝動を抑壓する見解は生活の方針の常道となつて居た。たま〳〵其れに反抗して其等の解放を主張する生活の方針は纔かに權道としてのみ說かれたのである。

如何なる事件を取扱ふにしても、始めに、積極的に極端な方法を用ゐ、次に、其れの偏頗な結果を匡正する爲めに、消極的に他の方法を用ゐるのは、決して賢しこいやり口であるとは云へぬ。然し、尠なくも、理論に於てだけなりと、之れに對して、不滿を感じて來たのは學術の進步と、社會組織の改良とに依つて、人間の根本性が新らしき光明を通して見られて來た近代のことである。

近世に至つて、生活の統一は、全く新らしき基礎に置かるることになつた。其れは生活のはたらき振りを在りのまゝに觀、そして、そこに自然に含まれた意義を發揮することに依つて、其れをなすことである、この氣運は、文藝復興期に於て、始めて其の端を發したのである。そして、宗敎改革も、佛蘭西革命も、心理學の勃興も、進化論の創設も、皆、この氣運の所產であつたのである。然し、この稱讚さるべき見地は、極めて最近に至るまで、永久に確立されては居らなかつた。

最近に至つて、人生を尊重しながら、其れを助長すると云ふ意味に於て、是れまでに類のない程に新らしい、さうして、徹底した方法で、人間を解放した偉人が三人ある。是れは、卽ち、ウヰリアム・ジエエムスとウオルタア・ペエタアとジオルジ・サンタヤナとである。ジエエムスは心理學に依つて、ペエタアは藝術批評に依つて、サンタヤナは文明史論に依つて。是等の三人は、何人でも人間を指導しようとな

らば、先づ、彼等に服從しなければならず、人間の忠實なる臣僕となることに依つて、始めて、彼等の權威ある敎師となることの眞理を知つて居つた。この意味に於て、彼等は近世文明の產出した最も徹底したヒユマニストの中で、最も寬厚なものである。彼等は、多くの共通點と、僅かな相違點とを有つて居る。其等の共通點は彼等が同じ理會と興味とを有つて居つたことより來たり、其等の相違點は異なる氣分と方法とを通じてこの理會と興味とを體現したことより來たつて居るのである。

人類の解放に取つて、彼等の事業が如何に尊いものであつたか、彼等の情操が如何に有り難いものであつたか、彼等の態度が如何にかう〳〵しいものであつたか。是等の諸點を明らかにするには、彼等の一々に就いて鑑賞する必要がある。わたくしは、順序としてわたくしの觀察をジエムスより始めることとしよう。

四、心理學者ウヰリヤム・ジエヱムス

現代は進化論の時代である。其れと同時に、又心理學の時代である。進化論的と、心理學的。是等の二つは、今日、わたくし共の生活の方針を形づくり、支配して居る觀方の、若しくは、考へ方の最も卓越した、最も深遠なものである。進化論は、如何にして生活の樣式が變はつて行くかを說明し、心理學は、如何に思想、又は、感情の評價が變はつて行くかを說明する。

心理學も、進化論も、共に、特殊の意味に於て、近世文明の產物である。一口に近世文明の特徵を云つて見れば、其れは、己れの威力と、尊貴とに關して、新らたに自覺を生じた人間が、この自覺を滿たす

やうに構成し、改良して行つて居る文明であると云ふことになるが、さうすると、心理學と進化論とは如何に近世文明の道具として必須のものであるかと云ふことがわかる。

大まかに、古代生活の特徴が絶對主義に依つて支配されて居たところにあるとするならば、相對主義に依つて支配されてあるものは近世文明の特徴であるとしなければならぬ。そして、相對主義に依つて支配される文明に根柢と支持とを與へて居るものは進化論と心理學とである。進化論一度出でて、固定した種と云ふものが無くなつたと等しく、心理學一度出でて、獨立した觀念と云ふものがなくなつた。形態の優劣はたゞ其れが絶えず推移する境遇に順應するの適否だけで定まるやうに、道徳の善惡は絶えず變遷する欲望を實現するの巧拙だけで決せられることになつた。心理學と進化論とがわたくし共の生活の機關たる政治や、道徳や、學問の精神となり、批判法となつて以來、わたくし共は、どの位、自由な、寛大な、そして、充實した氣分と標準とを以つて生活することが出來て來たか知れない。

英國に於て、倫理學が組織されたと同様に、心理學が養成されたことは必然であり、自然であつた。歐羅巴に於ても、英國人は他の諸國民に先きだつて、夙に自由の曙光に浴した國民である。彼等は、夙に外來の規範に頼らずして、內互の判斷に基いて、自他の行爲を整齊することを生活の方針として來たのである。彼等は他の國民が、なほ、傳說の惰性に依りて君主の神聖を擁護して居つた時代に於て、彼等は、既に、合理の根柢の上に立法者の權力を保障しようとして居つたのであつた。尠くとも近世生活に於ては、協同生活の本質は彼等の代表者たるホッブス、ロック、ヒユウム等に依つて始めて發見され、確定されたのであると云つてもよい。

一度人間の道徳の標準が神の命令として奉ぜられずに、實際の効果の上から守れることになつて來ると、彼等の判斷は、いつか、心理學的の領域に入つて居る。何故に、或る行爲は善であるか、何故に或る行爲は惡であるかと尋ねて來ると、其れは、一方は幸福を來たし、他の一方は不幸を來たすからである。然し、幸福とか不幸とか云ふことの標準を追究して行けば、結局、個人の好惡から生ずる判斷に外ならないことがわかつて來る。こゝに、道徳の判斷は心理學的にならざるを得ない。孰づれの國も、太古に於て、或る行爲の價値を判斷するに方つて、之れが與料となるものは其れの結果であつて、其れの動機の如きは全然不問に附せられて居た。例へば、過失からの殺人も、執意からの殺人も、一樣に判斷されたものである。中古まで汎く慣習として行はれて居たと云ふ、かの斧を以つて遭難船を伐つ型の如きは、確かにこの草莽時代の司法官の道徳標準を說明して居るものである。

然し、過失より生じた殺人罪と執意より生じた殺人罪との底に横たはる動機の相違を認めて、是等の各に對して異なる刑罰を適用するほどのことは、可なり早くから行はれて居たものであつて、是れだけでも、人間の判斷は、段々に心理學的になつて來たと云へる。が、卓越した意味に於て、道徳に關する判斷が心理學的になつて來たのは全然近世のことである。そして、それは民主思想と協同作用の發達した社會に於てである。政治に於て、自由制度の勳爵士であつたジョン・ロックが道徳に於て、解放思想の開拓者たらうとして、心理學の創造と皷吹とに心血を注ぐに到つたのは極めて自然であり、必然であつたのである。

あの「人間悟性論」の結論に於て、彼れは、どうして、人間の心靈の研究にまで導かれたといふことを

說明して居る一節がある。其れは、簡明に心理學の起源と動機とを說明するものとして、わたくし共に取つて、永久に興味あるものである。そこで、彼れは、大略、次のやうなことを語つて居る。今、僧侶は僧侶、貴族は貴族で、他の階級に對して、不都合な特權を樂しんで居る。そして、其等の特權の由來を問ふて來ると、彼等は、結局其れを生得觀念の作用に歸するのを常とする。然らば、人間に果して、そのやうな生得觀念があるか、どうか。自分は自分の觀察から、その存否を確めようと志したと。して見ると、人間の心靈に關する彼の研究は、(總ての種の研究がさうであらねばならぬし、又、實際、さうであつた如く)全く政治上道德上の利害を決定する興味から企てられたのである。實を云ふと彼れの研究の態度は、まだ、當時の社會に大分彌漫して居た偏見や、傳說に囚はれて居たところが多くあつた。隨つて、其の方法も結果も、十分に徹底したものとは云へない。然し、兎に角、彼れは自然又は客觀も、道德又は主觀と等しく、心靈の工夫と創造とにかゝることとの結論に到着したのであつた。そして、この直接の結果は、本質の存在の否定であつた。

一度、ロックに依つて捲起された最深の意味に於ける解放運動は、バアクレエ、ヒユウム、カントの諸豪傑に依つて、取り上げられた。勿論是等の人々の事業にも矛盾と不徹底とは相應に含まれては居る。然し、彼等が是れまで、絕大な威力を以つて人間に臨んだ自然も、道德も、其等の法則と共に、人間が己れの幸福を實現するの目的を以て構造したものであると云ふことの眞理を、ますます確立したことは人間の解放に取つて、何物にも優れて、偉大な、そして、永久の効果のあつたことを否むわけには行かぬ。然し、ロックを始めとし、カントまでをも含めて、是等の人々の興味は、主として過去の制度、習

慣より人間を解放することに注がれて居た。彼等の興味は眞に要求される制度習慣を彼等に與へることには大して向けられて居なかつた。畢竟ずるに、彼等の努力は消極的のものであつた。積極的のものではなかつた。

彼等は、彼等の惡んだ、そして、實際に有害となつた制度や習慣を破壞するに餘まりに急であつたが爲めに、一度、心理學的に其れの成立を説明すれば、其れと同時に、其れの事實と價値とをも、併せて、一掃してしまつたと想像した。然し習慣や制度の事實と價値とは、其等の起源の説明にだけに依つて、無化さるべきものではない。バアクレエの "esse est percipi" 又は、ヒユウムの "tendency to feign" そのものが、彼等の見解の不徹底なること、不十分なることを暴露して居るではないか。『在ることは知覺すること』ことであるとバアクレエが云ふ時に、彼れは、既に、在ることは知覺することとは同一でないと云ふことを告白して居りはしないか。若し在ることが知覺することと全然同一ならば、彼れは何んの必要あつて、其れを一つの命題に由つて、斷定しようとするのであるか。彼れが、斯かる斷定をするには、彼れは、其れをトオトロジイでないと見て居るからであらねばならぬ。知覺が無いならば、知覺を材料としないならば、無論、在ることの生ずる筈はない。されば、バアクレエが眞に爲す可きことは、知覺がどうして、どう云ふ場合に、在ることの性質を持つに至るかと云ふことを解釋することでなければならなかつたのである。

ヒユウムの認識論にも大なる缺陷はある。因果の觀念の起源に關するヒユウムの分析の周匝にして精到なることは、千古に亙つて、哲學思索の典型たる可きものとして、世に既に定論あるものである。然し、

彼れは、印象と知覺との間に、（彼れに在つては、無論、不用意のものであつたが）重要な區別を立てながら、其れの含蓄に到つては、彼れは、平然、其れを沒却して居る。隨つて、彼れは、あの非常な苦心に報ひられた貴重な獲物たる習慣に對しても、其れの意義を細心に反省することをせず、たゞ、如何にも無雜作に、其れを目して、纔かに、同一經驗の反復が作り出す『想像せんとする傾向』であるとして了つて居る。彼れが閑却して居るところのこの習慣こそ、わたくし共の生活に取つて一大事件であるのではないか。習慣は神祕な人間の心靈が產出する最も大なる神祕であつて、彼れの生活の統一と成長とに必須の特徵となり、道具となつて居るところのものは、この習慣である。

總ての知覺が習慣となるのではない。習慣となるのは、生活の經濟よりして、選擇され、組織され醇化された知覺に限られるのである。彼れは『想像せんとする傾向』と云ふ一語を以つて、因果觀念の起源を說明しようとしたが、其れは、全く、彼れの無智を隱す口實に過ぎない。若し彼れにして一層愼重にこの『想像せんとする傾向』を考察したならば、そこに、確かに彼れは。彼れが一旦破壞したと同じ手段に依つて、再び生活を建設することが出來たものである。

普通に行はれて居る理會に從へば、カントはヒユウムの破壞したものを一層深い省察と原理とに依つて再建したと云はれて居る。これは、事實、どうであらうか。わたくしは、決して、さうは信じない。思はない。成る程、カントの事業の中には、破壞的の部分と、建設的の部分とが雜然として含まれて居る。然し、彼れは同一の精神と方法とに依つて、破壞と建設とを企てゝ居るのではない。彼れは、心理學で破壞したものを、其れとは異なり、其れより劣る形而上學に依つて建設しようとして居るのである。

彼れは淺薄な心理學に依つて、經驗を分析し、其等の要素に依つて構成される經驗を價値なきもの、顧りなきものとして、其等の要素に依つて構成される經驗に含まれないと彼れが想像する他の要素から其れを補綴し、支持しようとして居る。わたくしは、一概に、彼れが生活の完成に必要なものとした神や自由や靈魂不滅を生活に無用のものとして排斥するものではない。然し、是等の觀念が彼れが云ふ通り、さほど生活に重要なものであるならば、彼れは、何故、其等を知覺より成り立つ自然の經驗の中に發見するやうな卓越した、徹底した心理學を創造しなかつたかと、わたくしは非難するのである。

ロック、バアクレエ、ヒユウムの傳統を承けた英國の心理學者は、大して、その遺産を改善することはしなかつた。然し、英國の自由制度もその極に達し、もはや、社會の制度や習慣に對抗して、個人の權利や解放を説くことも漸く其の必要を失して來た。この大勢に於て、從來、分子的であつた心理學が段々に、有機的の色彩を帶びて來たのに何んの不思議もない。そして、是れが代言者であつたものに、アレキサンダア・ベエンとジエ・エス・ミルとシヤドウオス・ホジソン等がある。

然し、眞に天成の心理學者として、ロック、ヒユウムの徒が破壞の事業として始めたところのものを、建設の事業、批判の事業として、心理學を大成したものはわがウキリアム・ジエエムスその人である。若し現代の科學がダアビンの進化論を通じて呼吸して居ると云ひ得るならば、一層の眞實を以つて、現代の哲學はジエエムスの心理説を竢つて、始めて其の靈魂を得たと云はねばならぬ。

動もすれば、精神よりも外形に、事實よりも流言に重きを置かうとする俗人は、ジエームスは、彼れの一生を通じて、三度までも學者としての資格を變へたと想像されて居る。(彼れが生理學者であり、哲學

者であつたことは、姑らく措いても)、彼れが、一度、心理學者より哲學者へ、再度、哲學者より神秘家へ移つて行つたことが其れであるとされて居る。然し、是れは尠くも事實に基かざる空想である。彼れは心理學者を以つて終始を一貫した思想家である。そして、この事實は、確かに、彼れの光榮であり、現代に於ける人類の光榮であらねばならぬ。彼れ程に、學術の精神と、學者の職分とを理會して居つたものが、一旦、心理學者たるの要地を占領しながら、どうして、輕々しく其れを放棄するやうなことをしようか。否、彼れは心理學者として、一生を終はるの天命を受けて、この世に生れたのである。

彼れは、何故に、あのやうに、心理學を尊重し、其れに愛著したか。其れは、彼れが正しく理會した通り、心理學は生活の批判と統一とを目的とするあらゆる學術の中で、最も生活に親切であり、忠實であるからである。如何なる種の學術にしても、例へば、神學のやうなものにしても、形而上學のやうなものにしても、苟くも生活の必要から其れの機關として起つたものであるならば、一つとして生活に不忠實であり、不親切であらうと心掛けるものはあるまい。然し、其れを批判し、統一しようとするものが色々の事情から、其れの形式や興味に制限を受けて來ると、其等は第一次の生活を取り扱はないで、つい、知らず、識らず、第二次の生活を取り扱ふことになる。そして、其れを誇とすることになる。其れであるから、必らずしも是等の學術は無價値であると云ふことにはならないが、生活の機關としては、如何にも、硬直な、如何にも空疎なものとなることは爭はれない。そこに、平生、わたくし共が日常生活に於て見出だす親しみあり、懐かしみのある感情は殆ど見出だされない。是れが事實である以上は、普通人が神學や、形而上學を不自然なものとして嫌ふのには多少の理由はある。されば、生活に親切であ

り忠實であらうとする學者は、何よりも先きに、彼れの學說に雋永な感情を保留せねばならぬ。無論、この感情は彼れ自身の感情であるに相違がないが、其れは、彼れが一般人の日常生活に於て經驗する感情を忠實に尊重し、鑑賞することに依つて、自然に彼れの心の中に醱酵させた感情である。

ジェエムスは生活の中にはたらく感情を尊重した。隨つて、生活の機關たる可き學術の中に動く感情を尊重したのである。彼れは、どこかに、感情を外にして哲學はない、何んの價値も持たぬ、何物でもないと云つて居る。そして、是のジェエムスの意見に從へば、彼れは、確かに、最も價値ある哲學を創設し鼓吹して居つたのである。彼れが一代の文章家であつたことは誰れでも知つて居ることであるが、彼れが工夫した、あの淸新な造語も、あの豐潤な句法も、畢竟するに、彼れの胸中に磅礴して居た感情の發露に過ぎなかつたのである。

彼れが、斯くまでに、生活の中に含まれた感情を尊重し、そして、其れを表現する爲めに、感情に富んだ哲學を尊重したのは、彼れが生活そのものを尊重したからである。哲學は經驗の統一を其れの職分としなければならぬ。然し、其れは、生活が既に始めたところのものを取り上げて、其れを醇化して居るだけである。又、哲學が其れをするに用ひる方法にしても、生活が既に用ひて居るものの洗練されたものに過ぎない。このやうにして、彼れの學說の出立點は、彼れの謂ふところの徹底經驗主義でなければならなかつた。其れならば、徹底經驗主義とは如何なるものであるか。如何なることを目的として居るものであるか。

徹底經驗主義とは文字が明らかに示す如く、徹底的に經驗を尊重して行くところの主義である。其れ

は、實證主義、不可知主義、若しくは、科學上の自然主義の名の下に行はれて居る他の多くの中途、半端な經驗主義のやうに、經驗に先きだつて、獨斷的に一つの學說を固執することをしない。其れは、其れの造る最も確實な結論も、未來に於て、經驗の進行に隨つて、いつでも變更されることのあり得る假定として置くものである。生活の事實は、確かに、複雜であり、多元である。生活は其等を統一しようとする努力から始まり、又、絕えず、この努力を續けて居るのである。然しながら、いつまで行つても、どこまで進んでも、これで經驗が統一され盡したと云ふことはない。統一されない或るものは常に殘つて居る。絕對の一致と云ふやうなものは、到底、この世の中で實現され得ない空想であると云ふのが是の學說の眼目である。

生活が經驗の統一を目的として居るやうに、其れの機關たる哲學は、經驗の統一を職分としなければならぬことは云ふまでもない。そして、哲學が其れをするのには、なほ、どこまでも生活が其れをして居る方法に倣つてしなければならん」と謂ふのが、ジェエムスの意見である。其れならば、生活は、實際に、どうして其れを統一して居るか。其れは個々の事件を處理するために、其等の中に自づから含まれた共通の要素を把つて其等を統一して居るのである。哲學は、無論、常識ではない、常識の一層發達したものである。然し、哲學は、個々の事件を尊重するところから、經驗を統一するに、常識の工夫した方法を無視したり、若しくは、其れに超越したりする方法を工夫しないで、其等を承認しながら、其等を一層醇化することに依つて統一すべきである。

斯くして、彼れは實質的に經驗を統一することをせずして、ただ空想的に統一して居る從來の一元論

若しくは、合理說に、極力、反對した。彼れが、どの程度までに、彼れの主唱にかゝるこの徹底經驗主義に忠實であつたかと云ふことは、彼れが特殊を尊重して普通を排斥したのでも解かるし、彼れが信仰に關する種々の經驗を丁寧に研究したのでも解かるが、特に、今日に於ては、既にクラシックとなつた、あの自我の性質の考察に於て最も顯著に解かるのである。

彼れは、夥しく極端に趨るくらゐに宗教上の信仰が生活に大切なることを力說した。彼れは世人の誤解を招ねく風に、心靈研究が眞理の發見に重要なことを鼓吹した。又、彼れは、彼れの立脚地からしては、確かに、その正鵠を失する程度に、ベルグソンを稱揚し、フヒネルを讃美し、マイヤアスを推薦した。然し、其等は、たゞ、苟しくも經驗の中に發見されるものならば、何物に對しても、何事に關しても、寛大な態度を取り、公平な判斷を下さうとした彼れの氣分を證明して居るものである。この爲體を皮相に揣摩すると、經驗の價値は其れの混沌たるところにあると彼れは理會して居つたやうに想はれるかも知れぬ。然し、その實は、彼れとて、經驗の價値は、其れが統一されたところに在ると確信して居たのである。たゞ、彼れは、その多元主義に依つて、經驗の統一はどこどこまでも、そこに見出される復雑に紛糾して居る要素を包容するものでなければならぬことを主張して居るだけである。

何處までも、生活の事實を尊重しながら、其れを統一しなければならぬとしたこの彼れの氣分と態度とは、遂に之れが當然の報酬として、彼れを導いて、彼れをして人類の思想史に於ける一大發見にまで到達せしめたのであつた。

嘗てチルゴオは思想の發達する經路を觀察して、其れは、抽象的より具體的に進んで行くのであると

謂つた。彼れのこの見解は、直ちに、學問の發達する經路を說明して居るものである。總ての學術は、生活の統一を目的として起る。然し、生活が、外觀上、互に反對するやうに見える二つのはたらきぶりを呈する時に、幼稚の狀態にある學術は、必らず、一時の事情と興味とに取つて一層顯著に見えるはたらきぶりを力說して、其れに依つて、その全體を說明しようとする。さうしても、斯くして、一時見落されたはたらきぶりも、なほ、生活を組織する一つの要素であるからには、長く、かゝる不完全な偏頗な取り扱ひに滿足して居る筈はない。必らず、其れは、いつか反抗の聲を擧げて來る。こゝに於て前のと同じくらゐ、幼稚な學說は、是の新たに起したはたらきぶりを力說して、又、その全體の說明に擬さうとする。

このやうに、甲說と乙說との間の隆替を繰り返して居る間にも、生活に對する省察は多少の進步を來たすに相違ない。が、學術にして、斯かる程度に低迷して居る間は、到底人生の解釋として滿足な議論は得られない。是等の謬見を破る唯一の道は、たゞ、在來の學說を精しく思考するよりも新たに事實を正しく諦察することである。是れは、非凡に英敏な知力と、非凡に眞實を愛する感情とを併有した豪傑を竢つて、始めて企てられ、成就される事業である。そしてジエエムスはさうした種の豪傑であつた。彼れは非常に事實を尊重したが爲めに、空疎に徹底した學說よりも、寧ろ、眞實に不完全な學說を建てることに滿足して居た。彼れの所說には、到るところ、不備の特徵が附き纒つて居る。然し、其れだけ彼れは愛し、虛僞を避けることに忠實であつたのである。彼れはその狀態に滿足するほどに、卓越して眞理の追求者であつたのである。

彼れは、これまで學界を支配して來た合理說と感覺說との所說を取つて、其等を實際の事實と比較して見た。そして、實際の事實は、是等の二說が要求するやうに、都合好く、片方付いて居ないことを彼れは發見した。感覺說の所說に從へば、心靈の內容は全然混沌たるものであつて、その中に、何等の凝結をも含んで居らぬのである。是れに反して、合理說の所說に從へば、その內容は全然明確な輪廓を持つ獨立體のみより成り立つて居るのである。ジエエムスは極めて微妙な內觀に依つて、是等の孰づれの所說も、共に事實を誤つた想像に過ぎないことを看破した。そして、心靈の內容は、混沌と獨立體との不決定にして不安定の結合より成り立つことを發見した。この事實を一層精しく云へば、時々の異なる興味の向けられるに從つて、中心點と樣式とを變へ、いつでも、混純たる緣暈を持ちながら中核となつて現はれるものであることを發見した。

更に、同一事實を動的に觀察すれば、人間の思想は、其れが、どんなに大きくつても、又、どんなに小さくつても、二つの稍異なつた部分より成り立つて居ると云はれ得る。ジエエムスは是等の各に過程的と低徊的との名稱を附して居る。心靈のはたらきは、いつでも同し速力で進み、又、其れはこの進行のどの部分にも、全然、同じ興味を拂つて居らないと云ふのである。是れは、一つの斷定に於ても、一つの行爲に於ても、わたくし共が容易に實驗し得る事である。わたくし共の生活は、永遠に繼續して行くが、其れは欲望の實現の連續であり、そして、欲望の實現は必然に或る手段に依つて一つの目的を達することであるから、手段は過程的の部分に依つて代表され、目的は低徊的の部分に依つて代表される。さうすると、ジエエムスの觀察は正確なものであるとせねばならぬ。

なほ、わたくしは、心靈のはたらきに就いて、ジエエムスの一大發見として、暴示することを禁じ得ない一つの事件がある。

ジエエムスは、又心靈のはたらきぶりの性質に關して、是れまで、合理說も、感覺說も、共に氣付かなかつた、是等の學說では、到底、氣付くことの出來なかつた一つの發見をなした。其れは、わたくし共の生活が、必然に、過去と、現在と、未來とを通じて一つの繼續體である以上は、わたくし共が、どんな事件を經驗するにしても、決して、單にその事件だけを經驗することは出來ない。其の經驗が、その時に於て、意識の最も明瞭な中心となつて居ることは明らかであるが、其れは必然に、其れに先きだつた經驗の餘波に依つて色付けられると同時に、其れに次いで起る經驗の豫影に依つて色付けられて居る。この事實は、わたくし共が平常暗誦しつけた詩文を朗詠するときに最も明らかに經驗される。例へば、わたくしが小供の中より暗誦して來た月落烏啼霜滿天の詩句を朗詠するとすると、わたくしが月落と誦するときに、その意識と共に、既に、次の烏啼の意識は微に起りつゝ、その豫影を月落の意識の上に投じて居る。されば、その時に、わたくしの意識するのは純然たる月落の意識ではなくして、烏啼の意識に依つて色付けられたところの月落の意識である。又わたくしが進んで烏啼と誦するときになると月落の意識はまだ全く消え去らぬのに、はやく霜滿天の意識は將に起らうとして居るから、今、意識の中心となつて居る烏啼は、月落の意識の餘波と、霜滿天の意識の豫影との二つに依つて色付けられて居るわけである。

ジエエムスは是の理法より觀察を進めて、わたくし共が、俄に閑寂を破つて轟く雷鳴を聞いた場合に、

わたし共が實際に聞いたのは、雷鳴そのものではなく、そのものだけではなくして、その前にあつた閑寂を破ぶつたところの雷鳴と云ふものである、と云つて居る。又、彼れは、同一の理法からして、わたくし共が人名を忘れた場合にも、優に證明される通り、この場合に、わたくし共が、實際に經驗して居るのは、意識の空虚ではなくして、空虚の意識であるとも說いて居る。

わたくしは、彼れ一代の事業の中で、生活の事實を尊重する白熱の誠實に依つて創造された是等の智見を以て、最も偉大な、最も幽遠な、最も悠久な價値を有つて居るものと信じて居る。是等の見解の意義が十分に理會されたときに、どれ程までに、是等の見解がわたくしどもの政治や道德や學術の形に於て體現されて居るわたくし共の想爲の細胞と組織とを闡明するところがあるかは、何人と雖も想像に難からざるところであらう。

わたくしはかう云ふ理由からして、ジエエムスを以て、現代に於て、人類を解放した最優者の一人と見做すものである、見做さざるを得ぬものである。

ジエエムスが心理學の研究者として立論したところのもの、創說したところのもの、是等の發見に止まらないことは、何人と雖も知悉して居るところのものである。そして、其等の中には、極めて稱讃す可きものがあるが、又、其れ程に稱讃す可からざるものもある。然し、其等の多くは、わたくしが上に略述したところの根本氣分と根本見地とより發して居るものであり、發しなければならなかつたものであるとわたくしは推定し、斷言する。

ジエエムスは個人主義者であり、又、プラグマチストであつた。そして、世人は是の二つの特徴に依

つて、ジエエムスを評價しようとして居る。わたくしから觀れば、是等の見解も、無論、結構なものであるに相違ないが、然し、畢竟するに、是等のものは、彼れが親切に、自由に、寛大に、そして、深遠に、人間の生活のはたらきぶりを觀察し、理會した結果として、彼れが自然に到着したヒユウマニズムの傍系であり、副產物であるに過ぎない。わたくしが是等のもの丶關係を考察する時に、其れは、コムトに在つて、彼れの實證哲學と彼れの實證政策との關係に酷似することを見出だすのである。誰れにしても、彼れの實證哲學をしてコムトを代表させないで、纔かに、彼れの實證政策をして彼れを代表させることの彼れに對して正當な處置でないことを知るものは、又ジエエムスの個人主義とプラグマチズムとをして彼れを代表せしめて、彼れのヒユウマニズムをして彼れを代表せしめないことは、彼れに對して、甚だ不當の處置であることを感じないわけにゆくまい。彼れの個人主義やプラグマチズムは彼の天才を竢たずして構成されることの出來るものである。獨り、彼れのヒユウマニズムに到つては、天地間、彼れの天才を竢たなければ、決して、出現することの出來ないほどのものである。

わたくしが、こゝに、改めて、わが同胞に對つて、ジエエムスを紹介しようとするのは、彼れを一個のヒユウマニストとしてであつて、決して、一個の個人主義者、若しくは、プラグマチストとしてではないことをわたくしは明瞭にことわつて置くので何る。

五、藝術批評家ウオルタア・ペエタア

基督教の神話に於ては、モオゼスと、基督とは、共に、人間の解放者であるとして說かれて居る。モ

オゼスは、ユダア人を埃及人の虐待より救ひ出したことに依つて、基督は萬人を罪の桎梏より救ひ出すことに依つて。そして、同じ神話に於て、靈魂の解放を圖つた基督は　肉體の解放を圖つたモオゼスよりも遙かに偉大なものとされて居る。わたくしは、近世に於て、他の何人にも優ぐれて、審美的に、藝術的に、わたくし共を啓發し、教養したウォルタア・ペエタアを以て、現代に於ける人類の解放者の最優なものの一人と見做すものである。何故ならば、人間の解放とは其れの最高の、そして、最後の意味に於て、如何なる方法に依るも、彼れの幸福を増すことに限られねばならぬが、ペエタアはわたくし共の幸福と多大の關係を持つて居る自然と人生とに含まれた美の成立と意義とに對してわたくし共を開眼してくれたからである。

人間は、始めから、功利的たると審美的たるとの二重性を享けてこの世に生れて居る。そこで、彼れの衝動は、一つとして一方に遊戯として發展すると同時に、他の一方に實用として發展しないものはない。例へば、手足の運動は、一方に歩行となり、他の一方に舞踊となつた。彼れの音聲は、一方に言語となり、他の一方に音樂となつた。更に、この言語は、一方に散文となり、他の一方に詩歌となつた。そして、人間が經驗と反省とを積んで行つて、彼れに如何に多くの衝動と方便とがあるにしても、彼れの目的は、たゞ、最も深い、最も自由な意味に於て善く生きると云ふ一つであることを理會して來るまでは、是等の外見上異なつた興味は、別々に、そして、時としては矛盾してはたらいて居るのである。この結果として、彼等の遊戯は醜惡であり、彼等の實行は散漫であるを免れない。彼等は、或る時は、狂熱的にこの醜惡な遊戯に溺れ、或るときは、發作的にこの散漫な實行に從つて居るのである。然し、生活が進

歩し、發展するに隨つて、遊戲と、實行とは、單一な生活の兩翼として、共に其れの幸福に關係のあることを發見する。十分な意味に於ける道德と藝術との生じて來るのは、この發見以後のことである。「生活は嚴肅である、藝術は遊戲である」と云つたのはシラアであつた。然し、これは生活に對しても藝術に對しても正當な評價であるとは云はれない。生活は嚴肅であり、同時に、遊戲である。嚴肅の要素と遊戲の要素とを併有して、始めて、十分なる意味に於ける生活が出現し、さうして、存續し得るのである。生活は嚴肅を主として遊戲を從とするのではない、又、遊戲を主として、嚴肅を從とするのでもない。是等の二つの性質の協同に依つて、こゝに、始めて、生活が組織されるのである。人間が、今日、持てる性格を持つ間は、彼れは勞作せねばならぬ、又、享樂せねばならぬ。勞作しながら享樂し、享樂しながら勞作せねばならぬ。そして、勞作の中核は道德を作り、享樂の中核は藝術を作るのである。

このやうに、わたくしが分析的に觀察すれば、勞作と享樂と道德と藝術とは、非常にその性質を異にするやうに見えよう。が、生活に於て是等が實際にはたらく場合には、そんなに反對してはたらいて居るのではない。わたくしはも少し、精しくこの道理を説明するであらう。

一體、生活とは何んであるか、特に、其れの幼稚な階段に在つて、何んであるか。わたくし共が、まだ事實を十分に意識しない前から、內に衝動を持ち、外から刺激に襲はれて居る。衝動はどう云ふ風にか滿されねばならぬ、そして、其れを滿すものは刺激である。刺激はどう云ふ風にか支配されねばならぬ、そして、其れを支配するのは衝動である。こゝに、衝動と刺激との間に交渉が成り立つて來る。この事實を、わたくし共は、生活と呼ぶのである。この交渉は單一な經過である。然し、刺激の方から

るのと、衝動の方から觀るのとに依つて、二つの異なつた側面として現はれる。刺激の側に立つて、其れを觀れば、色彩的經驗の整頓である。衝動の側に立つて其れを觀れば、價値的關係の評價である。して見ると、是等二つの興味は、人間の生活の初期よりして、絶えず、協同して來たのであるが、彼れの注意は先づ色彩の享樂に向けられ、其れが價値の統一に向けられたのは、其れより後のことである。されば、人間の興味の發動から云へば、遊戲が先きに起つて、勞作は後から生じたものである。

野蠻生活の研究はわたくしがこゝで語つて居ることの事實であることを立證する。野蠻生活に於ては、色彩的享樂が常態であつて、價値的統一は變態に過ぎない。野蠻人の生活は、最大限度に遊戲の氣分をはたらかせ、最小限度に實用からの必要を滿して居る生活である。彼等の生活の大部分を占めて居る戰爭、祭典、狩獵、身體の裝飾等は、皆、遊戲の氣分から發したものである。そして、わたくし共の祖先は無論、彼等と同じ衝動の下に生活して居つたのみならず、わたくし共の生活と雖も、その奧底には今日に到つてもやはり、彼等と同じ衝動が潜んで居ることは、わたくし共の遭遇する時々の機會が十分に證明するところである。

然し、ながく生活して行く間には、かゝる生活には消耗が多く、從つて、不都合の多いことがわかつて來る。隨つて其れを適度に支配する價値的統一の必要がます〳〵感ぜられて來るのである。そして、其れの制裁と感化とに依つて狂熱的、發作的の生活は、段々に中庸的、恆久的のものとなり、野蠻生活は段々に文明生活に入つて來るのである。こゝに、わたくし共が、よく〳〵、考へなければならぬことは、色彩の享樂と價値の統一との關係に就いてである。わたくし共の本性からして、わたくし共の生活の

大部分は、色彩の要素から成り立つて居る。隨つて、其れの享樂に絕對の興味を持つと云ふことは、當然のことである。其れならば、出來るだけ、生活より滿足を獲得することを職分として居る價値の統一には、其れを整頓する役目はあるが、其れを抑壓し、減殺する權利は尠しも持たぬのである。

兎に角、人間の根本性に照らして、一方に價値的統一、卽ち、道德と、他方に色彩的享樂、卽ち、藝術とは完全な生活を構成する二つの活動として、同等の段階に置かれ、同等の權利を與へらるるものである。事實さうなつて居らないのは、色々の行掛りから、過去の奴隷生活の陋習の遺物に過ぎない。然し、若し、わたくし共にして、自由な、豐富な生活を營んで行かうとするならば、わたくし共は、是非とも、かゝる標準を變更せねばならぬ、轉換せねばならぬ。最近に於て、ウォルタア・ペエタアは、この高貴な事業を企て、そして、成就したところの人物である。

ペエタアの事業が、如何に獨自のもの、意義あるものであつたかを知る爲めに、わたくし共は、少しく彼れの屬した英國の文明と國民性とを點檢するの必要がある。

英國人が歐羅巴の他の國民に先んじ、且つ、秀でて、夙く、政治と、道德とに於て、自己の尊嚴と權利とに就いて自覺を得たことは爭はれない事實である。然し、この自覺なるものは、常に、彼等に依つては、パンとバタとの考慮を離れて獨立の原理として研究されたことはなかつたので。是れは、エドマンド・バアクもかの獨立戰爭に際して、叛逆者の主張を辯護した彼れの演說の中に指摘した事實である。そして、彼れは是れを自由を纔かに理論として理會する佛國人などに比して、英國人が彼等の主張を固守することの一層執拗なる原因として居る。

マシユウ・アアノルドは或る論文に於て、獨逸人、若しくは、佛蘭西人は、彼等の政治を原理にまで醇化して、其れに對する彼等の理會を透明にすることが出來るのに、英國人は、彼等の政治をたゞ實際問題として取り扱ふだけである、彼等は、その中に、原理を發見することが出來ない。隨つて、獨逸人、若しくは、佛蘭西人の政治思想は洗練されて居るのに反して、英國人の政治思想は蕪雜であるのを免れない。バアクの觀察とアアノルドの觀察とは、全然興味と場合とを異にして居るから、一方が長所とするものを他の一方は短所として居るが、彼等が英國人の政治思想の特徴として居るものに到つては、全然同一の意見を有して居る。そして、わたくしは、バアクのやうな、又、アアノルドのやうな、卓越した事實の觀察者の言には、十分に信頼さるべき根抵があると信ずる。英國人が最も多くの教養と才能とを持つ政治に於てさへも、彼等が具體的の事件よりして、其れを取り扱ふ機關として、一般的の原理を發見することの出來ないことはこの通りである。彼等が、今日に至るまで、政治や道徳に關する經驗の外にはたとひ、其れが、實際に於て、彼等の幸福を保障するに何れ程重要であつても、あらゆる他の種の經驗に對して、彼等の感覺と理會との洗練を努めることをしないのに大した不思議はない。

斯くして、英國人の解放されたのは、生活の全體に於てではなくして、纔かに、其れの一半たる政治生活、道徳生活に於てだけであつた。其れの他の一半たる色彩生活に於ては、彼等の多くは、まだ解放されて居らぬ、解放されることを望んでも居らぬ。

勿論、英國は、歐羅巴に於て、最も舊い、そして、最も根抵ある文化と文明とを持つて居る國である。英國が美の鑑賞と藝術の創作とに於て大天才を産出したことは事實である。然し、彼等は極めて少數

であつた。そして、多數の同國人は、言葉の上だけでは、彼等を誇りとして居るが、事實に於ては、彼等と沒交渉であつた。彼等は政治、道德、一點張りの國民であつた。この缺陷は、一國の社會生活の上に色々の形で顯著な程度に現はれざるを得ない。他國人より見れば、英國紳士の典型とも見られ得る二人の中、マシユウ・アアノルドは氣分と修養との方面より英國人が淸朗と和煦とを缺くことを歎息し、ジエ・エス・ミルは作法と社交との方面より彼等が氣品と嫺雅とに乏しいことを非難して居る。かゝる缺陷を持つて居る國民は、決して、十分な意味に於て、自由を會得し、其れを實行して居る國民であるとは云へぬ。かゝる缺陷を含んだ社會は、決して、十分な意味に於て、自由の發達に都合のよいものではない。されば、苟しくも、この狀態に窮屈を感じ、不滿を抱いた少數の人々は之れが改善を企てたのであつた。たゞ、彼等の方法が淺薄であつたり、或は、彼等の智見が深刻でなかつた爲めに、多くは、その效を奏して居らない。最近に於て、わたくしは、拔群の奏効者として、たゞ、二人を擧げることが出來る。其れはホイスラアと、こゝの主題たるペエタアとである。

　わたくしは、ペエタアの前に、外に、英國には批評家がなかつたとは云はない。わたくしは、批評家があつたのみならず、美の鑑賞と、藝術の創造とを鼓吹した批評家のあつたことをさへも知つて居る。無數の小星は措いて問はず、一代に名聲を馳せた第一光力の大星だけにしても、カアライル、ラスキン兩ミル、ニユウマン、アアノルド等、實に多士濟々たるものである。然しながら、彼等は廣義に於て、悉く道德の批評家であつた。彼等にして、たまたま美感や、藝術を題目とすることがあつても、其れは、たゞ、其の中に、道德の意義を發揮し、さうすることに依つて、道德生活を鼓吹する方便としようとす

るに、過ぎなかつた。美の鑑賞と、藝術の創造とを、評論に取つて、獨立の題目とするだけの價値あると觀ることは、わがペエタアより始まつたのであると云つてもよい。彼れは、如何なる方法を以て、其れを企て、そして、如何なる効果を收めて居るか。わたくしのこの研究の興味は、こゝにあるのである、こゝに限られるのである。

彼れの意見に從へば、わたくし共の最後の目的は、自分の生活を美化することでなければならぬ。然し、其れには順序がある、工夫が要る。そして、順序とし、工夫として先づ來たるものは、自然の中に見出だされるにしても、實際の若しくは創造された人物の中に見出だされるにしても、若しくは、藝術の中に見出されるにしても、何んでも美しきものに親炙し、薫染することである。も尠し、正確に語れば、自分の生活の完成を目的とし、一生を通じて、美しき印象と感化とを以つて絶えず、心を滿たして行くことに依つて、この目的を時々刻々に實現することである。彼れは、この新らしく、そして、深い意味を有つた福音を宣傳する爲めに、彼れの一生を費したのである。彼れの著書に依つて、取り扱はれた題目の數は、尠なくはない。彼れは哲學を論じ、藝術を論じ、歴史を論じ、人格を論じて居る。然し是等のを終始一貫して居るものは、美感修養の一事にあるのである。

彼れは、如何なるものが美であるか、如何に、其れを發見すべきかの考察から、彼れの議論を始めて居る。嘗て、クリフオドは云つた。「昔の哲學者と云ふのは、自分で物を考へる人のことであつたが、今の哲學者と云ふのは、多く、他人の書物を讀んで、自分では尠しも物を考へない人のことである」と。この定義に從ふと、ペエタアは、幸にして、今の哲學者の一人ではなかつたのである。彼れは、現代に

於ける少數の賢き思想家と等しく、獨逸派の哲學者が、よくやるやうに纏め、美と云ふ抽象概念を作り其れに依つて、實際に存在し五官に現はれる個々のものに含まれた個々の美を說明しやうとする僞似理論を極力排斥した。さうして、美を發見し、鑑賞する唯一の方法は、或る經驗、又は、物體が果して、眞にわたくしに美であるかと尋ね、そして、其れが眞に美であるならば、その美は、どう云ふ關係から成り立つて居るかと尋ねて、其れの組織を分析するだけである。之の外に、正當に、適當に、美を發見する方法は、一つもないと彼れは說いて居る。さうすると、たゞに、風景、人格、藝術等に含まれて居る美は、それ〳〵、互に殊ならなければならないのみならず、等しく藝術と呼ばれるものにしても、繪畫と、彫刻と、音樂とに含まれて居る美は互に異なり、又、等しく音樂と呼ばれるものにしても、モツアアトのものと、ベエトオヴエンのものとに含まれて居る美は互に殊ならなければならない譯である。そして、最も高い、最も純なる美から、最深い印象と感化とを受けることの出來る人格が、最も多く敎養された人格であるのである。

かう云ふ見地から、彼れ自づから、成るだけ廣く、美の對象を搜索して、其等の中に、成るだけ多くの種類の美を發見して、其れの組織と、其れに對する自分の鑑賞とを世人に頒たうとしたのである。

彼れが美の研究に關する著述の中で、The Renaissance は最も有名なものの一つである。彼れは、人間の歷史の中で、文藝復興期を以て、彼れの美の欲求と表現とが、最も强く最も明らかに動いた時代としこの時代の人格と藝術とを通じて、人間の美の發動の最高樣式を見ようとしたのである。然し、彼れの興味は、其等が同一系の美を體現したからではなくして反つて、其等が、同じ程度の卓越を以つて

非常に違つた様式に於て、美を體現して居るからである。例へば、彼れが、美しく描叙し、識別して居る通り、ルカ・デラ・ロビアロの彫刻に現はれて居る思想と、ジョルジョオネの金屬細工に現はれて居る思想とが如何に違つて居るか。又、ピコ・デラ・ミランドラに依つて示された性格とレオナルド・ダ・ビンチに依つて示された性格とは、如何に違つて居るか。又、ルネサンスの初期の豪健な精神の代表として、ペエタアが擧げた二つの佛蘭西の小說と、其れの末期に於ける頽敗の氣分の代表として、彼れが擧げたジョツキン・デュ・ベレエの詩とが如何に違つて居るか。彼れは是等の違つた様式と發現とを持つた美の孰づれにも、等しき同情と理會とを與へて居る。そして、其等の各々に含まれた特殊の神祕を發揮することを努めて居る。

彼れが審美的に、藝術的に、英國人を解放し、併せて、現代の人類を解放した點に於ては、何人と雖も、彼れと功績を爭ふことは出來ない。然し、彼れの天才にも制限があつた、あらゆる天才に制限があるやうに。わたくしから見ると、彼れは美の對象の鑑賞と、創造との間に、無理に峻然たる區別を立て過ぎた。そして、彼れは、完全な修養は美の創造の努力を必要とすることを考へずして、たゞ、其れの鑑賞の享樂のみから沈澱されるものと考へて居た。これが、彼れの學說全體を通じての大なる誤謬である。色彩生活を道德生活の抑壓の下より救ひ出したことは、無論、彼れの功績である。然しながら、さうした後、道德生活を無視して了つて、色彩生活だけで、完全を意義ある立體生活が成立すると思つたのは、確に彼れの空想である。

ジョルジョオネの流派と題する章に於て、彼れは異なつた藝術が、互に已れ以外の他の藝術に近寄ら

うとして居ることを論じた上で、彼れは終に、『總ての藝術は、絕えず、音樂の狀態に近寄らうとして居る』と云つた。これは『印象派、象徵派、其の他、現代に於て榮えた他の流派に屬する人々に依つて、殆ど、豫言者にも等しきものの言として、敬虔の態度を以て信奉されて居る有名な句である。そして彼れのこの宣言の主趣は、音樂に於ては、最も完全に、其れの內容と樣式とが融合して居るが、總ての藝術は、この狀態を理想として居ると云ふことから出て居るのである、そして、實際にこの狀態を理想とする印象主義、象徵主義を奉ずる人々が歡迎して居るのを見ると、彼れは、如何にもこの宣言に依つて、千古の眞理を道破したやうにも思はれる。然し、わたくしは、前にわたくしが引いた『總ての藝術は、絕えず、音樂の狀態に近寄らうとして居る』の宣言の中で『總ての藝術』と云ふ言葉に對して、大なる異議を挾むものである。何故ならば、ペエタアの理會に從つても、『總べての藝術』の中に、詩は其れのあらゆる形式を以て、當然、含まれて居るに相違ない。さうすると、その性質のやゝ音樂に近い抒情詩は別として、叙事詩等の如きは、近世に到つて、ますます、音樂の狀態より遠ざからうとする傾向があるからである。音樂は、たゞ、漠乎として深い、汎い感情を惹き起すことを其れの職分として居るが、劇や、叙事詩は、一方に、因襲の自然と人生とを毀しながら、他の一方に於ては、可なりに明確な輪廓を以つて、新らしく、一層美い自然と人生とを築くことを其れの職分として居る。かう云ふことは、音樂の能するところのものでなく、又、其れの欲するところでもない。

ペエタアが藝術の性質に關して、このやうな理解を持つて居たのには確かに理由がある。彼れは、どこまでも鑑賞家の心理を說明して居るが、決して、創作者の心理を說明して居らないからである。鑑賞

家の態度は被動的だけで十分であるが、創作家の態度は活動的でなければならない。彼れは、或る目的を達するに、其れの方便を發見し、醇化し、運用して行かねばならぬ。こゝに、努力があり、爭鬪があるから、彼れの活動は自づから道德的の性質を持つて來なければならぬ。斯くして、鑑賞の態度は往々にして人を墮落に導くが、創作の態度にはその虞は殆ど無用である。されば、カアライルが「強くありながら、惡であると云ふことはあり得ない」と謂つたのはこの眞理を洞察してからのことである。

誰れにしても、彼れの「文藝復興」を精讀したものは、其れの結論と結論のとの間に氣分の相違のあることを發見しないものはあるまい。前者にあつては、美くしい對象を憧憬するは、自己の改造を計る爲めである。結論にあつては、美しい刺戟を歡迎するは、自己の悲哀を忘れるために、瞬間々々を塡めて行く工夫に過ぎない。そして、彼れが、この態度に陷るに到つたのは、彼れが、始め、藝術に含まれた色彩的要素を力說しようとして、藝術の完成に必要なる道德的要素を全然閑却した、自然の結果でなければならない。

彼れが Marius the Epicurian に進んでからは、尠なくも、外觀だけは、美感敎育の方針も、再び、消極的より積極的になつて來て居る。主人公メリヤスは靜肅な、然し、敬虔な氣分を以て、彼れの遭遇する經驗を悉く自己完成の材料たらしめようとして居る。風景、旅行、交友、哲學、是等のものは一つとして何かしら、彼れの性格の完成に貢獻しないものはない。最高の、最深の意義に於て、この世の中には自已完成より尊い正しいしごとはないのであるから、今、メリヤスがさうして、其れを彼れが生活の唯一の目的として居ると云ふならば、わたくし共は、メリヤスに對して 少しも非難の言葉を投ずる理由

はないやうである。如何にも、たゞ、文字の上だけで考へれば、其れに相違ない。然し、こゝに、わたくし共は、なほ、進んで問はなければならないことがある。其れは、彼れの自己完成は無理の手段に依つた空想的のものであつたか、或は、合理の手段に依つた實際的のものであつたかと云ふことである。そして、わたくしが判斷するところでは、彼れの謂ふところの新快樂主義の主張は、快樂でなくして生活の充實であると云ふ彼れの辯明があるに拘はらず、彼れの欲求を立體化するに必要な道徳的情熱は見出だされない。彼れが、一旦、色彩的要素を力説する爲めに、不自然に其れより引き離され、遂に、全然閑却された道徳的要素は、どうしても回復されて居ない。

主人公、メリヤスは、あらゆる經驗を重ね、あらゆる修行を積んで居た途中で、彼れは、不圖した機會から、基督敎徒の群に出逢つた。彼等は、質素な服裝と單純な食物で生活しながら、人目に觸れぬ隱家に時々の會合を續けて居た。メリヤスの怪訝に禁へなかつた一事は、歡喜と希望とが常に彼等の形容と態度とに顯はれて居たことであつた。メリヤスはこの祕密はどうしても解せなかつた。彼れは、ますますこの祕密を解したいと云ふ好奇心を持つて來た。一日、彼等、基督敎徒は羅馬の兵士のために襲はれ、そして、彼等の囚となつた。メリヤスは誤つてこの災厄の分受者となつた。彼れは彼等と共に羅馬へつれ行かれる途中、兵士からの虐待の犧牲となつて、彼等の情深き、しかし、不思議な介抱の中に、この世を去つたのである。憐む可きメリヤスよ！　始めに誤まつた審美修養を採つた彼れは、死に至るまで、是等の人々の歡喜と希望とは、彼れが全く閑却して居た生活と實在との意義の半面たる社會的知覺と社會的感情とであつたことを覺らなかつた、又覺ることが出來なかつたのである。

彼れの見解には、確かにわたくしがこゝで、指摘しようと試みた缺陷が含まれて居る。其れは、彼れが是れまでよりも、人間の根本性を深く、精しく、省察することに依つて、これまで何人と雖も發見することが出來ない程度に美の要求の意義を發見しながら、其れを生活全體の成分として、究極、道徳の要求と協同し結合するところまで追求せず、其れを低級のところで獨立せしめた結果である。然しながら、この缺陷のあるに拘らず、審美的に、藝術的に、人間を解放する點に於て、彼れの暗示はわたくし共のために、無限に、光明と希望とのヴイスタを開いたものと云つてよい。クロチエは、彼れを評して英國の產出した唯一の哲學者であると云つて居る。彼れが、眞にさうであるか、どうかは、別問題として、若しわたくし共にして、彼れの知見の感化は、オスカア・ワイルド、アアサア・シモンズの徒を造り出したところに盡きて居るとするならば、其れは、あまり彼れの事業の價値を見縊つたのであらう。

六、文明史論家ジョウジ・サンタヤナ

今より、百年前に當つては、わたくし共の文明は、一つの失敗であるかと云ふやうなことは、何人に依つても發せられなかつた問題である。たとひ、發せられても、何等の意味をもなさなかつた問題である。然しながら、今日に於ては、この問題を發する人々が出來た。そして、この問題は、或る嚴肅な意義を有つて來た。

十八世紀の初頭より、今日に至るまでの期間の特徴を、簡單な名稱で指明する必要があるならば、「科學の時代」の其れが、一番、適當なものであらう。實に、この二世紀間は、善い意味に於ても、又は、

惡い意味に於ても、科學の時代であつたのである。當時、其れまで、久しく、生活の機關として、宗敎の案外に無力と無効とであつたのに失望した人達は新たに、生活の機關として起つた科學に多大な、否、無謀な希望を寄せない譯に行かなかつた。彼等の現に目擊して居た貧困と、疾病と、罪惡とは、宗敎の悉く造り出したものである。是等を一掃して、社會に、貧困と、疾病と、罪惡とに苦しむものゝ一人をもなからしめるのは科學である。彼等の眼中に於て科學は人間に取つて唯一の萬能藥であつたのである。この希望を持つて、彼等は、恰も長男の失敗に失望した父母が、其れの反動として、不合理の期待を次男に掛けるやうに、彼等の運命の一切を科學の成長に依つて解決しようとした。然し科學は、果して、彼等のこの期待に報ゆるところがあつたか、この期待を裏切るところはなかつたか。

　この二世紀に亙つて、科學が社會にその根柢を深め、その感化を弘めるに隨つて、其れはつぎ、つぎに、不思議な業を持つて、人間を驚かした、悦ばした。科學の力の及ぶところ、生活の樣式のみならず、自然の組織までをも變更された。これが爲めに、若し二百年前に、地球の上に棲息した人々をして、今日、再び、九泉の下よりこゝに立ち返らせたならば、多分、彼等は、今日の地球を彼等が嘗て生活して居たものと同一のものとは認めることは出來ないであらう。それ程に、この二世紀間に於て、改革と革命とは、わたくし共の生活を中心として、科學に依つて行なはれた。然し、正直に事實を語ると、科學の齎らした効果は、始め、其れの發達を主唱し、擁護した政治家、學者等の豫期したものとは非常に異なつたものとなつて現はれたのである。科學は光明を齎らした。然し、其れは豫期された光明ではなかつたのみならず、同時に、暗黑をも齎らしたのである。科學は幸福を齎らした。然し、其れは豫期され

た幸福ではなかつたのみならず、其れと共に、不幸をも齎らしたのである。或る種の貧困と、疾病と、罪惡とが減じたことは事實である。然し、さうした努力は、反つて、他の種の貧困と、疾病と、罪惡とを增しはしなかつたか。

こゝに於て、合理にせよ、不合理にせよ、漸くにして、科學を呪詛するの聲が發せられ、聞へるやうになつた。

世の中には、物の非難者は多い、又、謳歌者も尠なくない。然し、眞の批判者、其れの功德を知りながら其れの弱點を忘れず、其れの弊害を察しながら、其れの長所に盲ならざる批判者は極めて尠ない、殆どない。今、科學が人間に或る利益を與へたことゝ、又、其れが、或る缺陷を伴ふことゝは何人と雖も、爭ふことの出來ない儼たる事實であるならば、其れに對する正當の態度は、たゞ、一つしかないわけである。其れは、それの存在を是認しながら、其れの意義を明確に理會することに依つて、其れをして、よく、人間の幸福に合せしめるやうに、其れを運用することである、醇化することである。今日、科學の非難者と、其れの謳歌者との多い世の中に於て、どこに、其れの眞の批判者を求む可きか、見出し得可きか。

わたくしの見るところでは、想像から科學に附與される弊害と、實際に科學が包含する弊害とは、三つの源泉から生じて來て居るのである。一つは、科學そのものゝ幼稚なところから來たつて居るのである。も一つは、其れに對する世人の誤解より來たつて居るのである。最後のも一つは、科學の幼稚と科學に對する世人の誤解との結合から來たつて居るのである。是等の弊害が、互に、錯綜し、紛糾した結

果は、一口に云へば、知識と智慧との分離となり反目となつた。

こゝには、人間の根本性に照して、智慧を定義して、生活全體の幸福を圖る考慮であるとし、知識を定義して、その幸福の實現のために、個々の方便を作る計畫であるとする。さうすると、人間は、彼れが現に有つて居るやうな性情を有つて、この世に出現して以來、彼れは、絶えず、智慧と知識との協同に依つて、彼れの生活を維持して來たのである。若し、智慧と知識との協同がなかつたならば、彼れは、夙に彼れの生存をこの地球の上に絶たなければならなかつたのである。神話を生活の方針として居つた時代にも、智慧と知識とは協同して居つたのである。宗教を生活の方針として居つた時代にも、智慧と知識とは協同して居つたのである。然し科學を生活の方針として來るやうになつて以來、智慧と知識との協同は非常に困難になつた。是れは、どう云ふわけであらうか。是れは、智慧と知識との性質と關係とが必然に、自然に、非常に變化して來たのに拘はらず、世人は、なほ、神話、若しくは宗教を生活の方針として居た時代の理會に囚はれて居て、新たに、科學を中心として、的確に、智慧と知識とが、當然、受けなければならぬ改釋と改價とを怠つて居るからである。

昔より、大體に於て、智慧は生活全體の幸福を圖る考慮であつて、知識は其れを個々に實現する方便を作る計畫であつたのであるから、或る意味に於ては、智慧と知識との職分はいつの時代に於ても、識別され得るものになつて居たと云へる。然し、全體の幸福を圖る考慮を滿す程に、個々の方便を作る計畫が進んで居らなかつた時代に於ては、(例へば、神話の時代若しくは宗教の時代に於ける如く)是等兩方のはたらきは、いつでも、明確に分立しながら協同して居つたとは云へぬ。やゝ違つた方法ではあつた

が、智慧も知識も、往々、一樣に、個々の方便を作る計畫とされて居たのであつた。病氣を癒すために、醫術と魔法とが同時に行なはれ、穀物の安全な發達を望むために、耘耕と祈禱とが同時に行なはれて居たやうなものである。然し方便の計畫が段々に正確になるに隨つて、嘗つて、魔法や、祈禱の形に依つてはたらいた智慧の部分は、段々に、知識に依つて啓蒙され、知識の中に汲收されて來た。輕卒に、この經過を考へると、知識の領分が、段々に擴められるに隨つて、智慧の版圖は、段々に狹められて來たやうに思はれやう。然し、事實は決してさうではない。この經過に依つて、智慧も、知識も、共に醇化されて、その本來の職分を發揮するやうになつて來たのである。この經過に依つて、智慧の性質は稀薄となつたのではない、反つて、普遍となつたのである。知識の性質は、偏狹となつたのではない、具體となつたのである。

今日、一方に、科學を主張するものがあると他の一方に、ヒユウマニズムを皷吹するものがある。遠く過去に遡るに及ばず、近世文明の創造者、助成者の意見に依つても、ヒユウマニズムの完全なる機關は科學でなければならず、科學の最高の精神はヒユウマニズムでなければならぬとされて居たのである。然し、今日に於ては、科學とヒユウマニズムとは、互に反對するものゝやうに想像されて居る。然し、かゝる見解には、何等の根柢のないものである。若しヒユウマニズムの理想が、生活全體の幸福を圖るのにあつて、科學の目的が其れの個々の方便を造り出すのにあるならば、そして、かう考へる外に、どうしてもヒユウマニズムに理想があり科學に目的があるとすることが出來ないならば、ヒユウマニズムは智慧の別名であつて、科學は知識の別名に過ぎないではないか。

こゝに、わたくしが、知識と智慧との關係に就いて、詳しく、考察を試み、そして、現代の生活の特徴としてそこに、わたくしの把住したものが、其れの眞相であるならば、わたくし共に一つのヒントは與へられてある。其れは、現代に於けるわたくし共の生活を、人間の性情が其れの完成を求めながら開展して來た結果と見、生活の根本義から、其れに含まれ、そこに發見される總てのものに相當の價値を與へるが、其れの孰づれの一つにも法外の價値を與へないことに依つて、生活の意義を求めることであらねばならぬ。一層、正確に云へば、さうして、生活をして、自然に、其れの意義を發露せしむることでなければならぬ。若し或る一人があつて、彼れがわたくし共の爲めに何人にも優れて、この事實を發揮してくれるならば、彼れは、確かに最高の意義に於て、人類の解放者でなければならぬ。然し、今、そんな人があるか、どうか。幸にして、わたくしは、尠なくとも、斯の如き人が一人あることを知つて居る。其れは、ジョルジ・サンタヤナその人である。

まだ、このごろのこと、プレトオを呼んでアテンスの産出した最賢者と謂つた一人の學者がある。わたくしはサンタヤナを呼んで、現代に生存する最賢者の一人とするに躊躇しないものである。何人にしても、彼れの著書を讀むものは彼れの示した博大な知識、雄深の見識、寛厚の同情、そして、精到の判斷をあの驚く可き程度にまで、あの驚く可き均齊に於て、所持して居ることから彼れを目して、たゞに、學界に於てのみならず、汎く、人界に於ての第一人者とせざるを得まい。

サンタヤナは現代に生活し、現代に經驗を積んだ現代人である。されば一個の市民とし、學徒としての彼れの最後の理想は、彼れ自身の生活と、彼れの同胞の生活とをして、現代の要求に應ぜしめんが

ために、其れの統一と醇化とを圖ることに限られて居ることは云ふまでもない。然し、彼れの性格と、教養とは、最優、最醇のものとして、これが標準を希臘人の生活の様式の中に求めたのであつた。彼れは希臘の思想家を嘆美した、特に、彼れは穏健にして醇化なるアリストオトルに深く私淑し、後者の闡明し、解釋した人生の意義に至つては、前者の尊崇して止まるところを知らぬものである。サンタヤナの著書に於ては、到頭、アリストオトルに對する評價が散見する。次の如きものもその一つである。「アリストオトルに在つては、人間の性情に關する思想は、徹頭、徹尾、健全なものである。何んでも理想的のものは、悉く自然的基礎を持ち、何んでも自然的のものは悉く理想的の發展を持つて居る。されば、一度、彼れの倫理説が十分に咀嚼され、吟味されるならば、特に、その貧少な輪廓が、プレトオの一層、委細を盡した説明に依つて塡補されるならば、彼れは、全然、最後のものとして現れるに相違ない」この一節に依つて見ても、彼れは如何なる程度にまで、アリストオトルの人生觀に傾注して居つたかゞ解かるであらう。

希臘人の生活の様式を嘆美し、アリストオトルの生活の理想に關する解釋を景仰したサンタヤナの思想の傾向は、一言にして盡すことが出來ると思はれる。其れは、希臘思想の簡明と近世生活の豐富とを融合することであつたのである。若し同一事質を一層、精しく言ひ換へる必要があるならば、わたくしは、之れを飜して、現代生活の要求に應ずるために、其れの細目を變更し、若しくは、増減しながら、希臘生活の理想を標準として、一つの人生觀を立することであつたのである。

から云ふ理由で、現代の狀態と理想とに對しては、彼れの理解は極めて正確であり、彼れの判斷は極

めて徹底したものであつた。が、卒然、彼れの所說を讀むものは、彼れの意見は善い意味に於ても、或は惡い意味に於ても、一種の時代違ひであると見えるに相違ない。究極、或る人の學說が、眞に彼れの經驗と苦心とからして出來て居るものならば、其れの樣式と內容とは必然に不可分の關係を有つて居らなければならぬ。この眞理は、ジエームスも、ペエタアも頻に力說したところのものである。わたくし共はサンタヤナに於ても、之れが證明されて居るのを見るのである。

尠なくも十九世紀以後の哲學者は、人世を論ずるに方つて、必らず「認識論」、と稱するものゝ中間物を通して其れの事實を觀察することになつて來て居る。然しサンタヤナはさう云ふことはしない。さうすることを欲しない。サンタヤナはプレトオ、アリストオトル及び、其の他の賢き學者達がしたやうに一切、さう云ふ中間物を排し端的に生活に卽して、たゞ、人間の根本要求が、永い歲月に亙つて育成した常識を一層深く分析し、一層汎く追求することに依つて、そこに、哲學的原理を發見しようとして居るのである。されば、若し他の多くの哲學者等の哲學を指して、學究的の方法の上に築かれたものと云ふならば、サンタヤナのは藝術的創造、若しくは、人生的興味の上に立てられたものであると云はねばならぬ。

「哲學者の有ち得る最高のアンビッションは、彼れの種屬の記憶と判斷とに對して、一個の代言者となることである」是れは、彼れの名著「理性の生活」第一卷の卷頭に書かれた言葉である。この言葉からしても、彼れは、一個の哲學者として、如何なることを自分の職分として居るかと云ふことが、ほゞ窺はれるのである。つまり、彼れは彼れの同胞の爲めに代言者とならうとして居るのである、代言者たる外

に、何等の職分をも持たないことを告白して居るのである。彼れの意見に從へば、哲學者たるものは、基督の試みたやうに天國を地上に立てることを試むべきものではない。又、ニイチェの企てたやうに、價値の轉換を企つべきものではない。たゞ、どこまでも、在來の生活の中に見出たされるあらゆる事件と物件との、現在の意義と價値とを尊重しながら、極度に其等を尊重するが爲めに、最深の意義に於て最も完全に、其れを保障する方法として、其等の整齊を企てるのである。

是の見地より、彼れは、如何にして知覺より實在が生ずるか、如何にして衝動より理想が生ずるか、如何にして苦痛と快樂とより、善と惡とが生ずるかを説明して居る。そして、彼れの立つて居る根柢、彼れの取つて居る原理は、いつでも同一である。其れは、總て理想的、永久的のものは、生活の經濟と智慧とに依つて、自然的、生滅的のものより作られるものである。自然的、生滅的のものを外にして、理想的、永久的のものゝ造られる材料はないと云ふのが、彼れの意見である。されば「なんでも理想的のものは、悉とく、自然的の基礎を持ち、自然的のものは、悉く、理想的の發展を持つ」と云ふ言葉は、アリストオトルの思想の特色を指摘しようとして、彼れの用ゐた言葉であるが、是れは、直ちに移して以て、彼れの思想の特色を指摘して居るものとすることが出來ると信ずる。

然し、是れを云つたゞけでは、まだ、彼れの思想が現代の思想界に於て、如何に稀有のものであり、優秀のものであるかと云ふことは、少しも發揮されて居ない。今日、世間に於ては、大した思想家であると、ないとに拘はらず、一元論や、進化論に依つて、人間の經驗と、生活との解釋を試みて居るものは尠なくない。されば、わたくしが、彼れの思想を稀有のもの、優秀のものとして、稱揚し、推擧する

には、別に據りどころがなければならない。其れは、彼れが人間のあらゆる欲望、あらゆる行爲、あらゆる事件、あらゆる機關の意義と關係とを評價するために、彼等の精神作用の顯微鏡的分析と、社會生活の顯微鏡的觀察とを、同一の假定と、方法とに依つて融合して居ることである。こゝに、彼れは、彼れが示した思慮と、彼れの收めた效果とに依つて、眞の哲學者は、同時に、眞の歷史家でなければならぬと云ふ彼れの宣言の眞實なることを證據立てゝ居る。現代の哲學研究に於て、極めて重要な位地を占む可き『理性の生活』五卷の中で、彼れが、其れの第一卷の初頭に於て、經驗の發端として、衝動の分化を論じてより、第五卷の終末に於て、科學の頂點として倫理學の志向を論ずるに至るまでの間、或は社會生活の成立を稽へ、或は、宗教の進化を討ね、或は、藝術の發達を究めるところ、一つとして、彼れが、一身にして、非凡な程度に、夙に、哲學者と歷史家との資格を併有し、兩者の力量を併發して居ることを證據立てないものはない。

精神作用の分化と發達とに關する說明に於て、(例へば、自然と精神との分化の如き、同類精神の發見の如き、理論と存在とに於ける具體化の如きものに就いて、彼れは驚く可き創見を示して居る。又、社會生活の成立と變遷とに關する觀察に於ても、例へば、藝術と實利との相關の如き、神話と科學との比較の如き、宗教の進化の如き、萬有科學と辨證學との差別の如きに就いて)彼れは、驚く可き創見を示して居る。中には、事實の眞相に徹して、敬服に禁へないものもあるし、中には、あまりに想像に馳せて信賴出來ないものもある。が、兎に角、人間の活動と發達との一切を擧げて、其れを、理性が衝動を材料として、永久に、實在を建設して行く、或は、其れを鞏固にし、豐富にして行く一つの道程と、彼れ

が觀察して居ることは稱讃に價する意見である。

彼れは、希臘文化の嘆美者であり、アリストオトルの私淑者であつた。是等の感化は、彼れが、人間の性情の發展とか、社會の文化の變遷とかに關する一般の觀察をする上には、便宜を與へるに相違ないが、其れを取つて、直ちに、希臘とは大に狀態と理想とを異にする現代の制度や傾向を批判しようとすると、そこに、大なる錯誤は生じて來る。然し、サンタヤナは、實に其れをして居るのである。隨つて彼れは、實際に、彼れが持つて居たよりも遙に尠なき同情と理會としか現代の社會と文明とに對して持つて居らなかつたやうに想像されるのである。

今日の產業制度に對して、彼れが持つて居つた意見も、彼れの誤謬の一つであつたし、又、代議政治に對して彼れが持つて居つた意見も、彼れの誤謬の一つである。是等のものには、確かに、彼れの指摘したやうな缺陷は含まれて居る。そして、通例、是等のものに信仰を置き、是等のものを鼓吹して居る人々にあつても、其等のものに包含されて居る眞に稱讃す可き志向を發揮し得ずして、纔かに、其等は世界の大勢であるとか、或は、其等は一層優れた生活に進むに必要な過程であるとか云ふに過ぎない。そして、その大勢とか、必要な過程とか云ふことは、何を意味するか、又、其等は彼等の生活や、意思と如何なる關係に在るかを、彼等は、一度でも考慮して見たことはないのである。そして、サンタヤナは、主として彼等の理會を根柢として、是等のものを批判して居るのである。然しながら、わたくしは產業制度にはサンタヤナが見出したよりも、以上に、敎化の要素が含まれ、民主主義には、彼れが想像したよりも以上に、才能と卓越との要素が含まれて居ると信ずるのである。つまり、わたくしは、美術

と工業との間に、サンタヤナが立しようとした程の差別を認めず、人才政治と民主政治の間に、サンタヤナが認めようとした程の相違は認めないのである。

然し、是等の彼れの見解は、たとひ其れが誤謬であるにしても、或は誤謬に近いものであるにしても全く、彼れの思想の根柢をなして居るものでもなければ、其れの特色を形造つて居るほど重大なものでもない。彼れの思想全系に取つては、ほんの一片の過誤に過ぎない。全體として、あのやうな宏大なる輪廓を有し、あのやうな精緻な組織を有つた彼れの哲學は、その個人的な、實驗的な、そして、作用的な精神を以て、生活の根本性と根本義とに就いて、多くをわたくし共に敎へ、且つ、更に多くを暗示することに依つて、たゞ、わたくし共を解放するに役立つだけである。何故ならば、何かわたくし共を解放するかと云つて、眞理、卽ち、事實の理會に優つて其れをするものはないが、彼れは、現に、わたくし共に、眞理、卽ち、事實の理會を與へて居るからである。

ジェエムスは心理學的に人の心のはたらき振りを發見することに依つて、人間を解放した。ペエタアは、審美的に、藝術的に、道德の壓制から、色彩の鑑賞を救ひ出すことに依つて、人間を解放した。サンタヤナの仕事は、是等よりも、更に大なる、そして、更に崇高なものであつた。彼れは、個人の經驗と、社會の活動とを通じて、如何に、衝動が理想となり、如何に、理想が機關となり、最後に到つて、如何に、機關が變化し、發展するかを示すと同時に、是等は、總べて、人間の理性が永久におのれの完成を求め行く經過に過ぎないことを示すことに依つて、人間を解放したのである。

わたくしは、先に、現代の缺陷は、智慧と知識と、又は、ヒユウマニズムと科學とはもと一[illegible]

でありながら、其れが、まだおのれの形體と精神とを一貫し、統一するまでの自覺に達しないために、主として化醸されたものであると云つた。そして、是等の缺陥を匡正する見識と手腕とを有するものは、極めて、少數であるが、サンタヤナは確かにその一人であると云ふことをも云つた。其れでは、どう云ふはたらきに於て、どう云ふ意味に於て、サンタヤナは其れを匡正することが出來るか。

總べて、人間の精神の發現であり、體現であるものゝ形體は、其れの精神に依つて形造られて居るのである。その精神がなければ、その存在は得られないものである。然し、始め精神は已れの機關として其れを創造したのであるが、既に製造して了ふと、其れを改造するには多くの努力を要することになる。そこで、精神は時としては、其れを改造するとこはあるが、多くの場合に於ては、不便を忍んで、其れを用ひて居るか、或は、其れをそのまゝにして置いて、別に、新たに、形體を造つて居る。是れが概して、人間の生活に、矛盾を齎す一大原因である。智慧と知識との間の矛盾、ヒユウマニズムと科學との間の分裂も、一切この道理から發したのに外ならない。隨つて、是等の矛盾と分裂とをなくす方法としては、どの位、知識と科學とがどのくらゐ分化して行くにしても、其れをさうさせて行くものは、智慧と科學とであるから、わたくし共は、何處までも、知識と科學とを取つて、其等を、智慧とヒユウマズムとの支配の下に置かねばならぬ。そして、サンタヤナが、生活と、其れの道具との關係に就いてわたくし共に與へる彼れの敎訓は、確かに、この葛籐の解決に多大の光明を投ずるものと、わたくしは信じて居る。

第一義生活の提唱

北　昤　吉

一、絶言絶慮の境地

古語に曰く『達磨禪を會せず、夫子字を知らず』と。之れ正に實在の眞風光、第一義生活の眞味は、之を體驗し味讀した當人に於ても、筆端や口頭を以て到底表現し得べからざることを道破した言である。否、之を體驗し味讀した當人なればこそ、却つて其の表現し得られざる所以を痛感し得るのである。されば、嚴密に云へば、『第一義生活の提唱』など〻云ふ標題其物が一の自己矛盾である。僅かに言句に亘れば則ち蹉過す――第一義の第一義たる所以は實に其の提唱を許さゞる點にある。例せば臨濟禪師は衆に請ぜられて上堂するや『山僧今日事止むを得ずして曲げて人情に從つて方に此の座に上る、若し大事を稱揚せば直に是れ開口することを得ず』と說いてゐる。由來禪は第一義に生くるもの、而も之を求むる者は黃卷赤軸を一笑に附し、寒氣と戰ひ睡魔と戰ひ蚊群の來襲と戰つて、其の上師家の熱喝と痛棒とを甘受しつ〻二十年三十年と實參し實究する。此の事實こそ卽ち文字禪に對する雄辯なる否定ではないか。更に碧巖集は禪門第一の書なるに拘はらず、此の圜悟和尙苦心の作をば、後世の子孫を誤るものとして燒棄した明眼の師家もあつたと引合に出せば、第一義が言句の末に表現し得られざる所以は、如何なる沒分曉漢と雖も知るであらう。殊に門外の漢に向つて門内の大事を說くが如きは、下戶に酒の趣を說き、羅漢に密月の快を談ずると同斷、啻に寸效なきのみならず、徒らに臭口を開いて家醜を外に揚ぐるの愚を招く。

而して此の不可言の境地、父子不傳の消息は、單に

禪に限らず儒教に於ても認められる。孔子も『予れ言ふ無からんことを欲す』と言語の不充分を歎き、又『二三子我を以て隱せりと爲す、吾れ爾に隱すこと無し』と述べて反復鄭寧の說明も到底縹渺たる境地を髣髴せしむるに足らざる所以を告白してゐる。又雄辯宏辭を以て稱せらるゝ孟子すらも浩然の氣に就いては『言ひ難し』となしてゐる。而して饒舌と概念の陳列とを以て上丈の哲學と心得る歐米人に在つても『雄辯は銀、沈默は金』なる通語があり、又エマーソン等の神祕論者に於ては『賢き沈默(ワイズサイレンス)』なる語を用ひてゐる。要するに一切の定義は限定であり、否定である。從つて最も自由にして充實せる第一義生活に徹せる者は、必ず言語を賤しむ。さればこそ、維摩は强いて人の問ふあれば一默を以て應じ、釋尊は四十餘年間橫說縱說しながら而も『一字不說』と一切を否定し、又儒禪二教の合一を高唱した明治の大德洪川和尙に至つては其の名著『禪海一瀾』を結ぶに『何が故に人無きに獨語す、其の鄙きこと鼠の如し』との語を以てした。

實在の眞風光、第一義生活の眞味は到底不可言底のものであるとせば、此は抑も何故であらうか 其は云ふまでもなく、第一に吾人の使用する言語の性質に基づく。言語の性質を餘蘊なく論究するは言語哲學に屬するを以て、吾人は玆に深く論及しないが、唯言語が第一に社會生活の必要より發生したといふ一事を指摘せざるを得ない。言語は元來自家獨特の思想と感情とを表現する記號ではない。其は寧ろ自他の間に思想と感情とを交換すべき信號である。而して信號は經驗の共通的要素を豫想する。從つて人格の眞に人格的なる要素は言語に依つて表現し得べからざるものである。言語の表現し得るは、人格中の非人格的要素、換言すれば人格中の社會的實際的方面、更に換言すれば、人格中の借用的寄生的自我と稱し得べき方面に限られてゐる。吾人の意識中客觀的と認めらるゝ知的要素を表現する言語の發達に比して、純粹主觀を表現すべき言語が極めて幼稚なる發達の階段にあるは、正に之を立證してゐる。果して然らば、功利的社會的生活以上の境

涯を經驗せざる滔々たる一般世人に向つて、第一義生活——選まれたる少數者の獨り有する特權的生活を表現することの不可能なるは、言語其物の性質より自から明瞭である。故に若し强いて言語の社會性に背いて之を借りて獨自の深秘なる内的經驗を表現せんとせば、言語は直ちに其の信號たる所以の性質を喪ひ、記號となり象徵となり迷語となりうる。かの大哲カントがスエデンボルグ一流の神秘家を『見靈者の夢』に於て嘲り、司馬君實が『禪家好んで隱語をなして後世を離ます』と憤つたのも亦宜なる哉である。吾人はカントの愚直や君實の迂濶を笑ふよりも、寧ろ言語を濫用せる神秘論者の惡戯を否認せんと欲する。永久に開かれざる寶庫、到底處置し難き遺產とも云ふべき神秘論者の著作の如きは恩惠に非ずして寧ろ煩累である。

更に第一義生活の不可言なる所以は、言語の背景をなす概念の性質にも基づく。概念も言語と同樣、元來は吾人の實生活の要求より派生せるものである。實在は混融し滲透し流動する一多不分の世界なるが、之を分析して各部分を孤立せしめて雜然たる細部を與へて得られたるものが、動物と云ひ植物と云ひ愛と云ひ正義と云ふ概念である。斷じて思議すべからざる、單に直觀の對象たり冷暖自知の風光たるものを吾人の支配と利用との爲めに改造復製せるものが、卽ち概念の世界である。現にベルグソンも、概念的の見方とは、純一の對象を構成要素に分析し、之を更に一定の見地より構成し直すことであると見做してゐる。斯くて概念的思索は、純一獨自の一人格を觀ずるにも、其の特有性其物に於てせずして、他人との共通的要素に於て、詳言すれば、他人との共通的要素の特殊の結合として觀ずる。卽ち概念的思索は一人格に對してすら、必ずや統一の形式と被統一の內容とを峻別して、其の一方を注意の焦點として然る後に他に向つて移動せんとする。斯くて或者は一より多を、形式より內容を、而して或者は多より一を、內容より形式を演繹せんとする。本體論に於ける一元論對多元論、宇宙論に於ける目的觀對機械觀、認識論に於ける觀念論對實在論、はた唯

理論對感覺論、倫理學に於ける實現說對快樂說、社會的範圍に於ける國家主義對個人主義、藝術上に於ける古典派對浪漫派——として概念的思索の產物たらざるはない。概念は既に說ける如く、純一なる實在の各部分が截然たる輪廓と鞏固なる外殼とを得て互に排外性を有するに至つたものである。從つて二個の概念は同時に吾人の意識の同一地點を占むる能はざること、尙ほ二個の物體が同時に一空間を占むる能はざるが如くである。而して一切のイズムは一個の概念を基點として成立する以上、而して互に排斥し合ふ概念が「AはBなると同時に非Bたる能はず」との命題を信條とする以上、イズムとイズムとの扞格と相殺とは必然の結果である。故に非心にして非物、極大にして極微な實在の眞風る光を體驗し、淸濁併呑と攝取不捨とを第一義生活を味讀せんと欲すれば、一切のイズムを超越し、又從つて一切の概念的思索を離脫しなければならぬ。而して此等を超越すれば自から言語をも超越し得る。蓋し言語も亦截然たる輪廓を好み互に排除すること概念と同一ではないか。イズムと概念と言語との超越境——哲學者は之を稱して無智(イグノランス)と呼ぶ。

此の無智の一境こそ、實に第一義に徹せる兆候である。さればこそ、ソークラテースは無智を以て彼の哲學の標語となしつゝ、而も內心にダイモンの聲を聞き、カントは本體の不可認識を以て理論哲學の結語となしつゝ、而も實踐理性の活動に本體の全相を捉へんとした。而して殊に中世紀の煩瑣なる形式を解脫して、漸く人間本來の自由を呼吸し得たる文藝復興期の諸哲學者、例へばクザーヌス、ブルーノ、ガリレイ等が『賢き無智』(docta ignorantia)を高唱したのは、最も驚嘆に價するではないか。併しながら、こゝに所謂無智は人智の制限を痛感し、概念や言語を超越せる一境を標示せんが爲めであつて、單なる無智ではない。『道は知にも屬せず、無知にも屬せず、知は是れ妄覺、無知は是れ無記』と——田夫野人の無智、道と畢竟何の交涉する所ぞ。吾人の所謂無智は最も敬虔にして最も深刻なる思想家の殆んど命根を斷絕して到達せる一境であ

る。此の境地は最大充實最大自由の獨一無類の境地なるを以て、吾人の有ゆる思議と表現とを超越してゐる。されば、素朴古勁なる筆致を以て有名なる信心銘にも『多言多慮轉た相應せず、絶言絶慮處として通ぜずといふこと無し』と喝破してゐる。

二、自己讚美と折伏

然り、嚴密に言へば、第一義生活は斷じて表現し得られない。否、表現し得られざるのみならず、表現の必要さへもない。蓋し此の境地は既に踏破したる者には言說の必要なく、而して未だ踏破せざる者に取つては千言萬語畢竟空に歸するからである。さもあれ、意識は自他互に流通する。衆生病めば、我も亦病まざるを得ない。『詩は會人に向つて吟じ、酒は知己に逢ふて飲む』と空嘯いて莊周の高踏を學んで世外に遊び、或は單に同好の士と共に清談を事とするが如きは、天下の名器を私するもの、寧ろ冷酷利己の沙汰と云はざるを得ぬ。されば古より第一義に徹せる者は、必ずや自から卑下して第二義に下り下化衆生の大法輪を轉じなければ止まない。勿論個性の差と共に說得の方法は異なる。雲門の如き懇切なる說法もあれば、倶胝の竪指の如き不得要領の暗示もある、又德山の三十棒臨濟の四喝の如き毒水を注ぐ惡辣至極の方法もある。斯くの如く其の說得の形式にこそ差あれ、苟しくも第一義に徹した者に於ては、其の精髓は一である。其は必ず對手をして先づ大疑情を起さしめ、更に此の大疑團を解決すべき大憤志を激成せしむる方法である。世人は說得と云へば直ちに摩訶不思議の法を傳へるのかと想像もしやうが、最上の說得は決して斯かるものではない。元來第一義は未だ徹せざる人から見ればこそ神秘ならんが、徹せる人に於ては投臂咳唾卽ち是れ第一義の光明である。世尊も雪山に於て豁然大悟するや『奇なる哉一切の衆生如來の智慧德相を具有す』と歎美したではないか。佛性は衆生にあつて一物を減ぜず佛にあつて一物を増さざる人々箇々本具底のものなる以上、嚴密には說得とか傳道とかは、あり得べからざる筈である。此の點から云へば、以心傳心とか敎外別傳とか云

ふことすら既に不當である。ソークラテースは教育は産婆術であると述べたが、如何なる名産婆と雖も妊めるものを産み出すに助力するのみであつて子種まで與へ得る筈のものではない。從つて說法や提唱の意味は自から明かである。其は第一に自己の眞生活に對する讃美――佛家の所謂自受法樂を意味し、第二には周圍の謬れるイズムの折伏を意味する。而して第一の自己讃美は密室の祈りとなり、點頭自から許す微笑となり、更に一切を讃美する偈頌となる。第二の異端折伏は棒となり喝となり冷罵となり危語となり或は人文の潮流を否認する彈劾となる。更に切言すれば、前者は活人刀にして、後者は殺人劍である。要するに、共に對手をして自憤せしめ自得せしむるに外ならない。

然るに世人は說法や教育の意味を餘りに誤解した。即ち世人は哲學者に期待するに第一義生活の提唱を以てする。而して、哲學者と自任する者自からも、世人に代つて人生觀を說述すべき信言者なりと誤解し、自からを汚辱し他をも汚辱してゐる。教育を産婆術に比して開發教育の意義を正解したソークラテース其人すら徳の教へ得べきを力說するや、自己を單なる代辨階級の一員たらしめた。されど、之れ誠に由々しき誤解である。說法や教育やは對手に既成の或物を授與するに非ずして、對手をして眞理感を激成せしむるにある、切實に人生觀を追求する熱情を喚起するにある。更に對手にして此の熱情を有すれば、此の熱情の充實を妨ぐる一切の障礙を除去するにある。ルソーが教育を以て消極的なりと唱へた眞意も亦此處にある。教育は決して惡人を善人に豹變せしむる外科手術ではない。寧ろ本然の性質を障礙なく開展せしむるが教育の能事である。故に極端に云へば、小盜を馳りて大盜たらしむる教育者こそ、能く其の配下に英雄を出し天才を生ずる。吾人は其の使徒の一人としてユダを有せしことに於て基督の偉大を思ふものである。惟ふに教育の眞意義を自覺する者は、必ず對手の素質より來る教育の制限をも自覺してゐる。釋尊も『緣なき衆生は度し難し』と說き、孔子も「上智と下愚とは移らず」と述べてゐる。

又自から教育者の資格なき煩悩の囚れなれども、しかも教育に就いて一隻眼を有したショペンハウエルは『若し教育や訓戒に實効があるならば、セネカの弟子にネロが出る筈はない』と叫んでゐる。要するに說法や敎育は對手の素質を豫定し對手の自己教育を條件とする。されば、斯の人生觀を他人の解決に待つが如きは、既に眞理追求の努力を棄てゝ安價なる結論を求むるもの、畢竟教育の豫定條件を缺如する教へ甲斐なき人物である。然るに斯かる人々に對して敢て人生觀の代言者たらんとするが如きは、自から人の師たる資格なきことを告白する者である。吾人の認めて最上の說法となすものは、第一義に徹底せる者が、自己の眞生活を讃美しつゝ、而も其が同時に他人に暗示となり、發憤となるが如き性質のものである。

此の故に、吾人は世の所謂傳道なるものに甚だしき反感を懐く。之れ多くは好んで人の師となるもの、孔子の夙に戒しめ、吾人の常に唾棄する所である。世に醜悪なるもの多しと雖も、ミッションスクールを出立ての青年牧師の齒の浮く樣な輕佻な說教や、色氣たっぷりの青年僧侶の聲色使ひの地獄極樂の怪談ほど甚だしいものはない。『我れ叫ばずんば石叫ばん』との熱烈なる要求よりの傳道は、天來の聲として吾人は其の前に襟を正すであらう。併しながら多くの場合、吾人の熾烈なる熱情も一度外化されて行動となるや、利害の打算と虛榮との爲めに其の純粹なる性質が害はれる。殊に衆人環視の前にて容姿を作り、大聲を張り揚ぐる傳道の如きは、必ず一種の誇示である。吾人の自由なる思想も之が表現たる行爲の習慣化の爲めに窒息せしめられ、吾人の熱烈なる感情も言語に移さるゝ刹那、多く言語の爲めに裏切られる。古人も『一丈を說かんよりは一尺を行ずるに若かず、一尺を行せんよりは一寸を悟るに若かず』と教へてゐる。若し夫れ、行爲の習慣化を自由と誤想し、言語の誇示を充實と錯覺する者に至つては、習慣化を習慣化とも感ぜず、誇示を誇示とも意識する能はざる墮落である。

既に名器を懐いて之を私することが出來ず、又所謂

傳道者の庸榮と誇示とを潔しとせざれば、吾人は言はんと欲して言ふ能はざる一種のディレンマに陷ゐる。勿論既に述べし如く唯一の可能なる方法としての自己讃美がある。されど自己讃美の上丈なる者は、密室の祈りとなり點頭自から許す微笑となる。而して密室の祈りは公開すべき性質のものではなく、又微笑は永久の迷語である。二者共に維摩の一默と何の選ぶ所がない。而も幸ひ吾人には尙ほ一の殘されたる方法がある。其は先に指摘せる誤れるイズムに對する排除と折伏とである。迷信の害毒は無信よりも甚だしい。されば吾人若し對手をして自憤し自得せしめんと欲するならば、先づ彼を迷信より解放する必要がある。冷罵と危詰と彈劾との必要は斯くして生ずる。さもあれ、此は第一義生活と何の交渉があるか。又吾人をして斯かる態度に至らしめる內的動機は何ぞ。先づ第二の疑問に答ふれば、吾人の破邪と折伏とは、消極的には自衞を動機とし積極的に自己擴大を動機とする。卽ち誤まれるイズムは吾人の內生活に對する一の凌辱であり脅威である。從つて之を排除し折伏するは、正しく正當防衞權の行施である。又積極的には吾人の自我は常に擴大を求める。自我は凡ての對象に自己の生命を投出して之を共鳴器たらしめ、自由の範圍を擴大せんと欲する。凡ての對象に對する內面的改造の要求は斯くして生ずる。而して此は自から破邪と折伏とを必要とする。

然らば誤れるイズムの否定は第一義生活と何の交涉があるか。『人を是非する者は卽ち是れ是非の人』と云ふではないか。一のイズムを否認する者は自己自からをイズムの人として立證する所以ではないか。此は一見道理ある疑問なるが如くして、實は然らざるものである。勿論第一義的生活を表現する爲めには二つの方法があり得る。卽ち一切のイズムを否定することなく適當の位置と關係とに於て之を攝取し綜合して超イズムの一境を髣髴せしむる積極的方法と、一切のイズムを否定して超イズムの一境を提示する消極的方法もある。さればこそ、神學に積極的神學と消極的神學とがある。前者は萬有の何れの一も神の完全相の一方面を分有す

るものと觀じ、個々物を補足し理想化することに依つて構成的綜合的に、又多くの場合には擬人的に神を說明せんとする。之に反して後者は、個々物は神の完全相の大部分を否定して有限化せる消極的存在なるを以て、個々物の否定は否定の否定即ち大肯定なりと見做し、斯くして神を捉えんとする。前者はヘーゲルの方法であつて、後者はプラトーンに於て不完全に印度の思想に於て完全に採用せられたる方法である。然れども、第一の積極的方法は、吾人が曩に否認したる概念的思索法であつて、人間の認識に制限あるが爲めに、一切の概念を補足し綜合せんとする企ても多くはヘーゲル一派の牽强附會に終る。之に比すれば、消極的方法は有ゆる概念やイズムを打破して端的に最高境涯に躍入せんとするを以て、眞に直截であり痛切である。之れ吾人が誤まれるイズムの排除と折伏とを以て第一義生活の闡明に交渉ありと見做す所以である。殊に末法の世異端橫行の甚だしきに於ては、四個の格言を獅子吼する日蓮の態度こそ最も有效である。實に顯正は破邪に卽し、神は魔の死を待ちつゝある。

三、享樂主義の破綻

吾人は異端折伏の途に上るに當つて、先づ有ゆる種類の快樂主義と功利主義とに攻擊の鋒先を向けざるを得ない。蓋し此等は第一義生活の自覺に對して障礙たるのみならず、又最も多數者の生活を墮落せしめつゝあるからである。勿論世には快樂主義や功利主義を生活の指針として露骨に宣傳する者は尠ない。されど、此の主義の隱れたる遵奉者や實行者に至つては擧世滔々として然らざるはなしである。又此の主義の豫定と是認との上に道德上の敎說を立て、政治上の經綸を行ふものも亦頗る多い。從つて避苦附樂や自家保存の要求は吾人の行爲を支配する最强動機たることは自から明かである。されば快樂主義や功利主義をイズムとして樹立せんとする者は、必ず此の心理的事實に對して銳敏である。現にホブスの如きは人間の心理に對する悲觀的觀察を以て倫理說の根據とした。併しながら、吾人はこゝに人性論を論議する餘裕がない。吾

人は唯人間の性質如何に拘はらず、快樂や功利を生活の最高目標とするイズムが成立し得るや否や、又成立せしむべきものなるや否やを論究すれば足りる。

先づ順序として快樂若しくは功利の意義を明瞭にする。快樂とは云ふまでもなく吾人の生活機能の障礙なき活動に伴ふ主觀的情調である。其が幸福と區別せられたる場合には、後者との比較上瞬間的斷片的滿足と稱し得らるゝ。然らば功利とは何であるか。其は元來或る目的に到達するに必要なる事物の性質である。其は絶對價値に非ずして相對價値、目的價値に非ずして方便的價値である。ベンサムも功利を『裨益、便利、快樂、利福、幸福又は不幸を其の關係上に與へる傾向ある事物の性質』であると定義してゐる。されば、今若し快樂を生活の目的とすれば、功利は其の條件であり方便的價値である。而して功利主義の功利主義たる所以は單なる快樂主義と異なり、快樂殊に其の永續的全體的なる意味の幸福の追求が一定の條件を必須とするを認め、此の條件の確保を目的とするにある。從つて、功利主義は快樂主義の純化せられたるものに相違なきも、畢竟快樂主義若しくは幸福主義を豫想してゐる。併しながら、功利主義は現今に於ては更に限定せられたる意味に於て使用せられてゐる。即ち其は個人的功利主義と區別せられたる社會的功利主義の意味に限定されてゐる。故に吾人は此の用語例を維持して、前者を利己主義後者を單に功利主義と稱し、而して快樂を瞬間的斷片的のものと認め快樂獲得の諸條件を輕視して享樂自體を重視する快樂主義を享樂主義と稱する。

然らば、利己主義並びに功利主義と區別せられたる享樂主義は果して生活の主義として成立し得るか。享樂主義は刹那々々の生活の總和が人生の目的其物であると思惟し、人生を一歩々々に充實せる意義ある漫遊と見做し、生活の主要なる內容として衝動と欲望とを神聖視し、窮屈なる理性の勸告よりも寧ろ本能に指導權を與へて日々之れ好日の氣分で生活を享樂せんとする主義である。此は快樂てふ主觀的狀態を生活の標的

と認める點に於て一のイズムであるが、快樂を追求するに於て愼慮と打算とを排斥して悠々自適せんとする點に於ては、超イズムを特色とする第一義生活に髣髴してゐる。之に關して論語に一佳話がある。一日子路、曾皙、冉有、公西華等が孔子に侍坐してゐた。孔子は腹藏なく各自の理想を告白せしめた。子路と冉有と公西華とは各其の抱負を述べた。獨り、曾皙は鏗爾として瑟を舍いて作ち、先づ自己の抱負が二三子の撰に異なるを前置きして『暮春には春服既に成り、冠者五六人童子六七人、沂に浴し舞雩に風じ詠じて歸らん』と答へた。夫子も喟然として歎じつゝ『吾は點に與せん』と同感の意を表した。儒家には色々附會の説明はあるが、要するに曾皙は他の二三子の答へが餘り娑婆氣の多い月並の答へであつたので、自から奇狂にも享樂生活の風光を述べた。然るに其の形容が孔子の『心の欲する所に從ふて矩を踰えず』との第一義に偶中した爲めに同感の意を表したのである。之れ享樂生活が大乘の遊戲三昧の境涯に髣髴たることを證明する好適例である。從つて享樂生活には吾人の共鳴を得る何物かゞあることは事實である。

今享樂主義を評價するに、此の主義が生活の刹那々々に充實した意義を認めんとするは、正に力説に價する眞理である。惟ふに生命の進化は決して一筋道ではない。嘗て希臘のアリストテレースは感覺的(動物的)生活が植物的生活の上に、而して理性的生活(人間的)生活が感覺的生活の上に開展し來ることを指摘したが、此は生命の樹枝狀的進化を知らざる當時の謬見である。植物が動物の準備期であり、動物が人類の序樂であるとは、單に或る特種の性質に就いてゞあつて凡ての性質に就いてゞはない。今動物と人類とに就いて云はゞ犬の嗅覺、燕の移住本能の如きは人類の夫れ以上の進化を示してゐる。殊に動物國家卽ち蟻や蜂やの社會生活に至つては、順應と進歩とに於てこそ人間社會に及ばされ、分業が生來の本能に依つて確定し、其の統一の鞏固にして相互扶助の精妙なるに於ては、遙かに人間社會の上に出てゐる。又等しく人間に於ても、自

人と文明人とを比較すれば、後者は或る點に前者の進化ではあるが凡ての點に於て然りとは認められない。自然人の直觀の鋭敏なることは文明人との比較を絶してゐる。されば直觀を生命とする宗教の如きは恐く古人の獨特の産物である。更に小兒と大人とを比較せよ。功爲り名遂げたる大人と雖も、自己を圍繞する追從と虚飾とを離れて其の少年期を回顧する時、果して彼が有ゆる方面に於て少年期の發展なりと思惟し得るであらうか。彼にして正直なる心根があらば、必ずや追懷の涙があらう。此の涙は果して何を意味する。之れ實に實現の傍に否定があるからである。少年期は無限の可能性を宿す未決定の狀態である。殊に天才的少年に於ては、詩人の感懷もあれば、哲學者の想像もある。又軍人の氣慨もあれば政治家の經綸もある。然るに長じて社會の必要に應ずべく專門化すると共に、無限の可能性中の大部分は滅ぼし盡さるゝ。果して然らば、少年期は決して凡ての方面に於て大人への準備期とは見做すことが出來ない。少年は少年として、青年は青年として、夫々存在の意義と權利とを有する。理想的に云へば、生活の何れの刹那と雖も、單なる準備期として、單なる手段として取扱つてはならぬ。生活の或る時期を單なる準備期と見做すのは、餘りに甚だしき功利的見解である。斯くては、小兒の遊戲を大人の勞働の序樂と認め、享樂を苦役の前提と見做すことゝなる。されど二十の戀は三十の名の爲め、三十の名は四十の錢の爲め、四十の錢は五十の安泰と子孫の美田の爲めとは、如何にして思惟せられやう。享樂主義は刹那の意義を重視するに於て、金光を放つの觀がある。鐵は須らく赤熱せる間に打つべし、美味は宜しく空腹の際に食ふべしである。人生の大半を老後の計の爲めに枯淡にするが如きは、掌中の玉を棄てゝ水中の月を追ふが如きものではないか。

享樂主義は刹那の意義を認むる點に長所があると共に、人生の目的を遠く生活外に求めず、衝動を神聖視し、且つ本能の指導に信賴せんとする點にも長所がある。若し快樂と幸福とが人生の目的であり、而してべ

ンサムの說ける如く『快樂の量にし同一ならば、プシピン(小兒の遊戲)とポエツトリ(詩)と何の選ぶ所がない』ものならば、本能は快樂の選擇に於て賢明なる指導者たらねばならぬ。かの『日出て丶作し日入つて息ひ田を耕して食ひ井を鑿つて飮む、帝力何ぞ我れにあらんや』と鼓腹擊壤する太古純朴の民の如きは、一に本能の指導に依つて享樂を恣にしつゝあつたではないか。カントも快樂や幸福の選擇に於て理性よりも本能の有力なる所以を指摘してゐる。即ち彼は理性と意志とを有する人間に於て、若し其の眞の目的が自己の保存、自己の安寧、自己の幸福であるとすれば、此の目的を果す爲めに理性を選んだことは、造化の失敗であらう。蓋し、人間が此の目的の爲めに爲す凡ての行爲及び凡ての法則は、本能に依つて遙かに精確に指示せられ、而して此の目的は理性に依るよりも遙かに確實に到達せられたであらう。若し斯かる惠まれた生類が本能以外に理性を有するとて本能の幸福追求の巧みなるに驚嘆するのみで、敢て薄弱にして誤多き理性の指導を以て干涉することはあるまい。『自然は幸福追求の目的のみならず、其の手段をも凡て本能に一任した』と述べてゐる。又カントは、若し人間が享樂と幸福との爲めに敎養せられたる理性を利用するならば、必ず眞の滿足を得ることが出來ないと論じ、且つ彼は理性を崇拜する者が、理性や科學の力に依つて目的とする幸福を得んとして失敗し、此は幸福を得るよりも寧ろ負擔を增す所以を知つて一種の理性嫌ひの念を生じ、かの本能の指導に信賴して理性をして行爲を指導せしめざる俗人を輕蔑するどころか、寧ろ之を羨むであらうと述べてゐる。要するにカントは享樂主義の反對者ではあるが、而も快樂の追求には本能の有力なることを知るに於て、如何なる享樂主義者よりも徹底してゐたのである。『人生字を知る憂の始め』とは即ちこざかしき理性が享樂の爲めには有害無益なる所以を道破したものである。さればこそ、ルソーもショペンハウエルも、共に人文の進步が幸福なる生活と兩立せざる所以を高唱したのである。

以上吾人は享樂主義を攻擊せんとして、却つて其が有する長所の爲めに餘りに長々しき辯護の辭を弄した。併しながら、吾人は享樂主義が其の長所に即する缺點の爲めに破滅すべきを信ずる。第一に吾人は吾人の生活並びに周圍の世界が享樂を保證するに都合よく組織せられたるかを疑ふ。現に有名なる快樂主義者ルークレシウスは云つた。「第一に此の茫々たる蒼天に蔽はるゝ全地表中、一部は野獸の棲む山岳や森林に占められ、一部は岩石や不毛の沼澤に占められ、又一部は陸地と陸地とを隔つる海洋に占められてゐる。耕作に殘された部分とても人力を以て自然に抵抗し、常に生活の爲めに頑丈なる鍬を執つて呻吟し、犂を握つて營々として地を耕さなければ、自然は荊棘を繁らすであらう。鋤頭を執つて沃地を打ち起し、土壤を耕して吾人の栽培せんとする作物に手を入れなければ、作物は獨り手に地中より萌え出ない。而して、粉骨碎身僅かに獲られた作物が地上に葉を生じ花を開くや、天上の太陽は過度の熱度を以て之を燒き、急雨寒霜は之を滅ぼし、或は大風襲來して之を枯死せしめる。又何故に自然は人類に危害を與ふる水陸の獸類に食物を與へて之を繁殖せしめるか。何故に春夏秋冬續いて疾病を齎らし來るか。何故に死は終に外より襲ひ來るか。又人の肉體は自然が產みの苦しみを經て母體内より生の境に送り出すや否や、無情の波にて難破せる水夫の如く、赤裸々となつて地上に横はり、口もきかず、何等の生活の資料もない。人は終生幾多の不幸を經ざるべからざる命數を有するものゝ如く、悲痛の泣聲を以て室内を滿す」と。又ショーペンハウエルも此の世界と人生とが享樂に適せざることを證明せんが爲めに彼の有ゆる雄辯を利用した。即ち彼は『人類に於ても亦、生活は決して享樂の爲めの賜物としてゞはなく、事業即ち爲さるべき苦役として現はれてゐる。……或者は計畫し或者は活動し、人々悉く努力する。其の雜然たる狀態は筆狀の及ぶ所ではない。されど此等凡ての終局目的は何であるか。之れ短かき生涯の間朝生暮死の苦悶せる個人を維持せんが爲めのみである、而も其の最も幸運なる場合

に於ても、缺乏と苦痛とより比較的自由なることゝ、而して種族の再生と又其の努力のみである』と說き又『欲望の滿足は意志作用を終らせども、滿足せられたる一個の欲望に取つては少くとも否定せられたる十個の欲望がある。且又欲望は永續し要求は無限である。然るに滿足は短くして殆んど測定し難い。滿足は乞食に投ぜらたる施物の如く、今日は乞食の命を繋がしめ其の不幸は明日まで延される』と述べて人生の享樂に適せざるを描いてゐる。彼は世界に就いても『リスボンの地震、ハイチの地震、ポンペイの破壞は何事が可能であるかを示す僅かの戯れの暗示に外ならない。大氣の僅かの變化は、幾百萬の人々を亡ぼす虎烈剌、黃熱病、黑死病を生ずる。之より聊か大なる變化は一切の生命を斷絕するであらう。……人類の理性の武器は有力でも、十中の九は不斷に戰ひつゝ生活し、困難と努力とを以て破滅の緣に動搖不定の位置を保ちつゝある』と說き又『ダンテは地獄を描く材料を此の現實世界より取り來つたが、而も彼は眞の地獄を作り得た。然るに彼は天國と其の歡樂とを記述するに當つては、吾人の世界は何の材料を供せないから、踰え難き困難を感じた』と述べてゐる。

吾人の世界と人生とが果して享樂の追求に便利なるものでないとしたならば、享樂主義は大部分破綻せざるを得ない現に享樂主義者にして求めて得られざる悲哀よりして、却つて厭世觀に走るものもあつた。即ちエピクーロースは『吾人が快樂を感ずる時は快樂なきに悲しむ時である』と述べ、ヘーゲシアスは『生命は愚人に取つて善事と見ゆるのみで、聖者に取つては可もなく、不可もない』と說いてゐる。併し之にも拘はらず、享樂主義者は刹那の意義を重視し本能の指導に信賴する。されど刹那生活とは何であるか。生活は刹那と共に繼續を豫定する。吾人の生活欲は其の實質を變じ其の對象を異にする。小兒の欲望の對象は玩具と交友とである。靑年の夫れは、冒險と戀愛とである。壯年の夫れは、權勢と黃金と功名とである。而して老年の夫れ、は平安と子孫の美田と來世の信仰とである。

實に斯くの如く、吾人の欲望は走馬燈の如く一の對象より轉々として他の對象に向ふ。然るに二十にして戀に專念すれば、之が爲めに心身を消耗して三十の功名を得る能はず、又三十の功名に熱中する時は動もすれば老後の計をなす能はざるは人生の常である。理論上より云へば、生活の繼續は刹那の總和である。從つて各刹那に於て最上に生活する者は生活の勝利者たり得る筈である。併しながら、吾人は恐るべき心理的惰性の法則に支配さるゝ弊がある。されば一の對象を追求し享樂すると共に、直ちに之を超越し閑却するの洒脱なく、徒らに之に習慣的に固執する時は、一度覺醒するも時機既に遲く蹉跎たる白髮の年を悲しむことゝもなる。吾人にして享樂すべき時に享樂に徹底し、一度飽滿を感ずる時は直ちに超越して他の對象に轉ずる氣慨あらば少年としても靑年としても又老年としても共に理想的たり得やう。然るに滔々たる享樂主義者に至つては享樂を超越するどころか、「一杯人酒を飲み、二杯酒酒を飲み、三杯酒人を飲む」との語の如く、却つて享樂の奴隷となり、享樂の爲めに氣力も衰耗して辛うじて廢頽の殘骸を維持するのみである。人生を漫遊と心得つゝ此處に花を眺め彼處に月を賞するも、漫遊半ばにして路銀を消費し遂に無錢旅行をなすが如き、比々として皆然りである。故に享樂主義者にして、苦役も遊戯と感じ、職業をも趣味と考ふる眞の生活の勝利者たらんと欲すれば、享樂に徹底すると共に超越し「日に日に新たなる」活力を養成する必要がある。食物の滋味を快啖せんには胃腑の健全を條件としなければならぬ。眞に刹那に充實し、日々之れ好日の生活を送らんとするには、腕頭拔山の力あるが如き大道力を要する。かの單に浮草の如く情波に漂はさるゝ浮華輕佻の徒輩に享樂を恣にするを得んや。

次に又享樂主義者の信頼する本能とは何であるか。勿論本能は目的を遂行するに於て、精確なることは驚くべきものがある。海山萬里を隔つる燕が一路直往舊巣に歸り來るや、羅針盤もなく海圖もなく、唯一個の本能に滿腔の信頼を寄するのみである。蟻や蜂やの動

物國家に於ても、警官もなく鐵鎖もなくして、偏へに本能の指導に依つて、精妙なる機械の各部分の如く協働する。胡蜂が其の餌食とする生物の神經中樞を刺戟して麻痺せしむる樣は博學なる昆虫學者と堪能なる外科醫とを兼ね併せたる如くであるが、之亦一に本能の作用である。されど、本能は精確に於て得る所があると共に、其の活用の範圍の狹隘なる點に於て缺けてゐる。燕や蜂や蟻やは單に一藝の士である。されば若し人類にして本能にのみ信頼せんか、之に依つて追求さるゝ快樂は生活の一斷片に過ぎない。彼は此の斷片に專念し沒頭することに於て、彼の周圍の廣大なる世界は彼の眼界より閉される。かの刻々の快樂を追求して生活を絢爛にし豐富にし得たりと錯覺するが如きは、憐むべき精神の偏狹である。從つて享樂主義は畢竟精神の盲目を主義とするものである。

最後に享樂主義は快樂のみを絶對視し、苦痛の意義を否認する。されど吾人の生活は苦痛なくして活き甲斐があるか。何等の苦痛なき生活は寧ろ倦怠の生活である。假りに苦痛なしとせば、一切の危險も衝突も失敗も去る、又從つて努力、奮鬪、冒險、勝利の感も去る。斯くて生活は障碍なき滿足、抵抗なき成功となる。此は必勝を期し得る遊戲、一歩々々に獲物を得べき狩獵に等しい。而して不確實と困難と失敗とがなければ、遊戲の興味と勝利の快感は消失する。困難と失敗と障碍とがあつてこそ、詩と劇とは存立し得べく、英雄の生活も光彩を放つ。されば享樂主義は、苦痛なき生活を望むことに於て、寧ろ生活を平板にし、無味乾燥にせんとするものである。其は畢竟生活其物を呪ふものである。斯くて享樂主義は生活を破綻せしめることに依つて自己自からを破綻せしめる。

四、利己主義の醜惡

享樂主義の破綻は、必ずや吾人をして快樂の價値の比較と快樂の條件とに眼を注がしめる。而して快樂の價値の比較は吾人をして將來の大なる快樂の爲めに現在の快樂を犧牲にせしめ、快樂の條件に對する注意は本能の指導よりも寧ろ理智の勸告に傾聽せしめる。斯

くの如く無打算を棄てゝ打算的となり、人生を漫遊視することを止めて旅行視すると共に、享樂主義者は「賢明なる利己主義者」となる。利己主義は斯くして其のイズムとして成立する。

利己主義者に從へば、人間の凡ての行動は利己心を動機とする。ホッブスは人性を皮肉に觀察した。「人は旅行する時は武裝して充分の供人を伴はんと求め、眠らんとする時は其の戸に鍵をかけ、其の家人の間にあつても猶ほ其の棚に錠を下す。而も自己に加へらるゝ一切の傷害を復讐する爲めに、法律あり武裝せる官吏ある場合に於ても」と、彼は斯く人性を解釋したが、人に敵視の狀態は最强者をも枕を高ふする能はざらしめるが爲めに、「死を恐るゝ念と便利なる生活に必須なる事物に對する欲望」とに驅られて平和を愛し、社會を形成し、他人の權利と利益を尊重せしめると考へた。されば利己主義者に取つては、道德は一の購買であり安全なる投資である。奪はんとすれば先づ與へなければならず、尺に伸びんとすれば寸に屈しなければならぬ。利他的行動は賢明なる利己心よりの派生である。節制や勤勉や正直やも自利を追求する爲めの必要なる方便である。道德其物の爲めの道德はあり得ない。個人が國家に忠勤を盡すも、其が畢竟最大なる利己心に貢献するからである。卽ち租稅を納附して國家に奉仕するは、自己の生命と財產と位置との安固を得る爲めの代償としてゞある。兵役の義務に從ふは、斯くして異民族の征服と殺戮とより保護されんが爲めである。蝦躍れども斗を出でず、如何なる境遇の改善と修養とに依つても、人間は利己的動機の埒外を出ることは出來ない。人間の能事は與へられたる境遇に於て吾人に可能なる最大の利福を追求する事に外ならない。修養とは利己心を抑壓することに非ずして、却つて之を旺盛ならしめ之を賢明ならしむることである。

吾人は利己主義を批評するに當つて先づ其の心理說の獨斷的なるを認める。吾人は吾人の凡ての性情が利己心の變形であるとは認めることは出來ない。ロシュフーコーの如きは「人間は深き感情を有すとの外觀を

示さんが爲めに、或は他人より憐まれんが爲めに、或は泣かずとの不面目を避けんが爲めに泣く」と、流涕といふ單なる事實をも利己心に基くものと説いたが此は甚だしき附會である。勿論利己心は自然の狀態に於ては最も早く發露し、吾人の意識に於て優勢である。併しながら、既にアリストテレースが説ける如く、自然には二義がある。即ち發達の階段に於て最も早く現はるゝ性情を指して自然と云ふことも出來、又發達の階段に於て後れて發生するも而も吾人の本質をなす性情を指して自然とも云へる。而して第一の意味に於ては利己心は自然であるが、第二の意味に於ては決して左樣ではない。從つて吾人は利己主義の心理的根據を否認する。されど、心理的根據如何に拘はらず、『賢明なる利己主義者」たれとの主張は規範として成立し得やう。されば吾人は次に此の點を吟味する。

　利己主義は快樂及び其の條件卽ち功利を最高價値と認め、之を追求すべき行爲を善なる行爲と稱し、之を追求し得たる人を賢人と稱し偉人と稱する。此の主張は果して吾人の道德的意識と一致するか。功利は一の結果である。而して有ゆる結果は、意志に依つて影響せらるゝのみならず、又偶然なる運命に依つて支配せらるゝ。富豪となるとは、必ずしも吾人の正直なる努力を唯一の途としない。吾人の自力以外に福の神の意志がこゝに作用する。又成功者となることは、必ずしも吾人の賢明なる打算を條件としない。吾人の計畫を嘲笑する運命の女神の助力を要する。人事眞に計るべからず、理外の理があり算外の算がある。吾人の行爲は必ずしも豫期の結果を生じない。さればとて、吾人は單に徒勞として、骨折損の疲勞儲けとして吾人の努力を嘲笑し得るか、吾人の正直なる努力、吾人の本質共物の活動は、單に其の不結果の故に、無價値と見做し得べきか。吾人間には自己の利福を犧牲にしつゝ、而も自巳の行動を尊嚴なるものとして、之に道德的價値を認めんとする傾向がある。野蕃人すらも、他人に對して小さく見へざらんが爲め、又自己自から卑屈なるものと感ぜられざらんが爲めに、自己の享樂と利

福とを犠牲にする行動に自負を感ずる。又小兒すらも安價なる奏功の喜びと離れて、彼の努力に對する歡喜がある。人格に依屬し人格の方便たる功利以外に、人格の本質をなし、人格の精髓をなす或物に對する誇りの念がある。享樂に背き困苦に抗して、眼を光らし、唇を嚙む少年の雄々しき姿を見よ。彼をしも打算的利己主義者ならずとして輕視するか。更に身を殺して仁をなす勇者、愛兒を飢に泣かしめ、病妻を床中に放棄して、俗衆の惡罵と權力者の强迫と逆運の翻弄との間に立つて「我獨り立つ時我れ最も强し」と敢然と自己の途を進む殉教者――彼等が其の功利に盲目なるの故を以て、利己主義者は之を嘲笑するの殘忍を敢てするか。利己主義者は快樂と利福のみを着目することに於て、却つて道德的に偏狹であり盲目である。其は享樂主義と同樣なる意味に於て破綻する。

吾人は轉じて利己主義を信條とする者の生活を觀察しやう。其は無氣力と冷酷と醜惡との有ゆる不德を暴露する。利己主義者は享樂と利福とを追求する以上、決して殉教者の如き險路を進まない。卽ちスペンサーの所謂最小抵抗に向つて進む。從つて或者は「岸邊の安全なる隱場より、嵐に難まさるゝ沖合の船を、余自からの災難ならざる他人の災難なりと考へて靜かなる滿足を感じつゝ眺むる如く、余は超然として浮世の悲慘なる潮流を眺めやう」と云ふが如き人生の冷然たる傍觀者となるであらう。少くとも、利己主義者の多くは、自己の周圍の傳統に、此の傳統を代表する俗衆に、俗衆の偶像たる權力者に、又權力者の利用しつゝある國家觀と宗教的迷信とに追從し叩頭する醜態を暴露する。勿論利己主義者は自利の追求に失敗して自暴自棄する時、又は自己が暴君の威を揮ひ得る實力を有する時は、何時にても偶像を破壞する叛逆者たり得る。自由と平等と博愛とを標榜する革命黨は、往々にして利己主義者の團體たることがある。併しながら、利己主義者は其の實力の缺乏する間は、權力者の足下に匍匐する。暮夜權門をくゞるのみかは、權門の番犬にすらも愛嬌を振りまく。殊に貧富の懸隔甚だしく黃金大名の

跋扈する現代に於ては、忠勤と私利と相半ばする足輕中間の如何に多きことよ。彼等は追從と游泳とを處世と心得、道德と思惟する。故に『服從の美德』なる語がある。服從は或る意味に於て美德であらう。卽ち服從が眞の道德的自由と兩立し得る場合には、其は美德である。對手の命令が自己の要求たる道德的價値の表現たる時は、對手の命令に對する服從は道德的價値を追求する自由と全然一致する。されど、下級官吏が上級官吏に叩頭し、下級會社員が重役殿に禮拜するが如きは、多くは權力者の人格價値に對する服從ではない。權力者に叩頭するは、求むる所があるからである。世人は斯かる服從を稱して盲從と云ふ。併し其は盲從に非ずして明從である。彼は鋭き利己心より服從しつゝある。小兒が嚴父の命令に、善男善女が虚僞の說敎と陸離たる光彩の淫祠とに叩頭するは、盲從である。然るに下級官吏や下級會社員の服從は、權力者の御機嫌と自己の昇級の辭令とを對象としつゝある明從である。否彼等は自家の米櫃と妻女の晴着と半ダースの豚兒とを禮拜の對象としつゝあるのである。要するに利己主義は道德を購買道德と化し、多數の奴隷階級を作成した。

更に利己主義は弱者の多數を奴隷たらしむると共に、强者の多くをして暴君たらしめる。此の意味に於て利己主義は醜惡なる專政主義の母である。若し功利主義を以て長生安民の主義利用厚生の主義と見做せば、少くとも高貴なる或物が含まれてゐる。其は少くとも人格の平等權を是認してゐる。『王何ぞ必ずしも利を言はん、唯仁義あるのみ』と喝破した孟子に於てすら民生安民の意味の功利主義はあつた。併しながら、權力者が國家主義の名に於て自己の權勢と榮華とを維持せんとするが如き功利主義は權力者の利己主義を背景とするが爲めに、孔孟の徒は之を覇道として排擊した。吾人は國家統一の名に於て國論を鎭壓し、富國强兵の名に於て進略慾を逞ふせんとするが如きは、權力者の利己主義の故に之を蛇蝎視する。スペンサーは小弱國に對して非人道的壓迫を加ふる國家は、必ず國內に於て權力者が一般國民を奴隸視すると言つたが、之れ明か

權力者の利己主義の如何に危險なるかを暴露せる言である。

若し夫れ、强者の利己主義と弱者の利己主義との合體は橫暴なる暴君と卑屈なる奴隸との共犯となつて現はれる。かの親分と乾兒との關係は實に此共犯關係の最も露骨なるものである。利己主義に禍ひせられたる我が國に於ては官廳に於ても政黨に於ても又最も公明なるべき教育家間に於て、先輩と後輩との關係は常に親分乾分の關係である。而して、此關係たるや、今日に於ては、昔日の如き美はしき情誼もなく。偏へに冷頭なる打算に依る利用關係である。卽ち今日に於ては親分も乾兒の援助なくしては大事を成就することは出來ないが爲めに、常に自己の公的位置を濫用して優秀なる乾兒の養成に力めつゝある。「某は余の助推挽に依つて今日あり、故に某は余に忠勤を擢んずべし」「某は余の努力に依つて馘首を免れたり、故に某は余の爲めに犬馬の勞を取らん」とは多く公器を濫用して私恩を賣る者の常套語である。之れ上官として盡すべきを盡しつゝ、而も私恩に利用するもの、其の心事の陋劣なる官金橫領と何の撰ぶ所がない。又乾兒なるものも、常に親分の私情を動かすことに汲々として、一度其の目的を遂すれば、親分の威光を笠に同僚をも眼下に見下す。而して曰く「余は某の周旋に依つて今日あり、故に某に對して誼あり」「余は某の命令に依つて洋行するを得たり、故に某に對しては絕對的服從の義務あり」と。親分乾兒の惡緣は斯くの如くして生ずる。而して乾兒等は互に一親分の寵を爭ひて或は好言令色の押し賣りをなし、或は離間中傷を事としつゝ餓鬼道的競爭をなす。其の甚だしきに至つては親分の暗黑面を握つて自己を疎外するに備へる。更に一の親分は一自己の權勢慾を滿さんが爲め、又一は自己の乾兒に利せんが爲め、太陽の惑星を率ふるが如く、幾多の乾兒を引率して他の親分と繩張りを爭ふ。黨同伐異とは卽ち是れである。要するに一に利己主義の結果である。利己主義の恐るべきこと虎よりも甚だしく、利己主義の醜惡なること娼婦にも優る。

五、功利主義の愚劣

嘗てベンサムは『最大多數の最大幸福』を道德の主義とした。之れ即ち功利主義の黃金律である。彼は此の黃金律を立つるに各個人の避苦附樂の傾向に心理的根據を求めた。併しながら『自然は人類を快苦の二人の主權者の支配下に置いた』との彼の心理的快樂說と『最大多數の最大幸福』を主義とする倫理的快樂說との間には踰え難き一の間隙がある。勿論スペンサーが理想的社會の特長と認めた私利と公利との一致する狀態に於てはベンサムの學說には矛盾はない。されど少くとも現在に於ては、二者は必ずしも一致しない。從つて天性自己の快樂のみを追求せざるを得ない人々を驅りて如何にして多數者の幸福を目的とせしめ得るかは一の疑問である。斯くてミルはコントの同胞一體觀を根據として、他人も吾人と同胞なる以上、他人の幸不幸は吾人の關心の對象となり、從つて吾人をして功利主義者たらしめ得ると說明した。此は說明としてはベンサムよりも巧妙である。併し吾人はこゝに其の說明の根據如何を離れて、功利主義が生活の指針たり得るかを攻究する。

功利主義者は主張する。吾人の行爲の價値又は其の基礎たるべき人格の價値は、行爲の結果が社會に利益を與ふるか否かに依る。從つて社會の利益に貢献することを以て生活の方針とせよと。此は道德的に少しく覺醒せる者の例外なく信條とする所である。されど吾人は斯かる主張に對して協贊を拒む。何となれば吾人の行爲又從つて吾人の人格の價値が、社會に與ふる利益如何に依つて決定さるゝならば、吾人の人格價値は利用價値となつて物格化する。吾人の行爲にも增して自然界の諸の事物は人間の利福に寄與する。例へば、國家の危急に際しては、一人の忠實なる兵卒よりも數個の砲彈と數俵の米麥を必要とする場合がある。功利主義者に從へば、前者は後者よりも無價値なりと云はざるを得ない。之れ功利主義當然の結論であるが、果して道德的意識は之を容認し得るであらうか。又吾人の行爲は單に其結果の社會的價値に依つてのみ評價せら

るゝならば、吾人は道德的懷疑論に陷らざるを得ない。何となれば、既にカントも指摘せる如く、行爲の結果は無限に相續し、一の時代に於て有利なりしもの必ずしも次の時代に於て有利なることが保證されず、從つて行爲の評價も永久に終極的なることが出來ないからである。こゝに功利主義の危險がある。斯くて功利主義者は轉論する。曰く、行爲の結果が實際に社會の利又は不利を來すやを離れて、社會の利益を目的として行動することに道德的價値があると。斯くて又主張する、個の意志と行爲とを出來得る限り社會の利に貢獻するが如き態度に出でしめよと。吾人は此の轉論に對しても疑問を有する。何故に吾人は他人の快樂や幸福を無條件的に尊敬すべき義務があるか。元來他人の快樂や幸福を其の內容如何に關はらず尊重せよとは、對手の享樂主義を無條件に是認するものではないか。功利主義は既に享樂主義を豫想してゐる。從つて享樂主義の多くの缺點も功利主義の負擔とならざるを得ない。吾人は先に一樂主義の無條件的是認に對して抗議した吾人は對手が吾人の要求する道德的人格なる限り、之に相應する享樂を希求する。之に反して若し吾人の反感を有するが如き道德的人格ならば、寧ろ彼より其の下劣なる享樂を奪つて道德的に覺醒せしめる要求を感ずる。

更に又功利主義者が社會の幸福なる場合に於ても、其の功利主義者が道德的自覺に不充分なる限り、却つて社會を毒する。泥醉者が其の周圍に向つて酩酊の快を共有せんことを强いるが如きは、寧ろ嫌惡に價するではないか。類は類を好む低級なる功利主義者は、社會一般が自己と同一享の樂を共有せんことを欲する。彼は斯くすることに依つて自己の享樂が是認せられんことを欲する。「己れの欲する所を人に施せ」との黃金律を文字通りに實行せんとする功利主義者の害毒の爲めに、吾人は將に窒息せんとしてゐる。慈愛深き父母も、單に道德的に無自覺なるが爲めに、其の子女を道德的に破滅せしめつゝある。愛女を嫁せしむるに當つて、單に對手に財産あり地位あるとの理由に依つて、

個人の意志を蹂躙し愛なき結婚を强ふる愚劣なる父母の如何に多きか。之れ實に女子の最も尊重すべき節操を犧牲にして、其の動物的快樂を保證せんとするものである。其は恰も娘を妾婦に賣りて、月々の生活を輕易ならしめて彼女の幸福を來せりと思惟するが如きものである。斯かる父母は其の行爲に依つて自己の妾婦たる心事を暴露しつゝあるものである。

道德的自覺なき爲政者か功利主義の信者となり實行者となる時は、益々吾人の反抗心を挑發する。かの善政主義の標榜の如き何たる陋ぞ。之れ、國民の言論と思想との自由を奪ひ、國民の精神的盲目を强ひ、國民の參政を拒否し、單に動物愛護の意味にて、國民を『御仁政』の對象として取扱はんとするものである。『人民の爲め』の政治を以て善政となし、社會政策の實行を强者の弱者に對する恩惠となし、而も愚民政策の强行に依つて馴致し易き奴隷を作らんとする爲政者は、娘に愛なき金婚を强い又は之をして妾婦たらしめて、豚の如く肥滿ならしめんとする低劣なる父母に類する。

斯くの如きは孔孟の徒が管仲晏嬰の徒として賤しみしもの、而も聖代の今日幾多管晏の徒が吾人の頭上に跳梁しつゝあるとは、誠に奇怪ではないか。

世に慈善家なる者がある。其の最良なる者も多くは功利主義以上の道德的信念を有しない。惟ふに今日に於ては、貧困も犯罪も單なる個人的責任ではない。此等は現代社會の必然的產物として一般的現象であるから、責任の主體は主として社會である。從つて貧者と犯罪者とに對しては、社會は道德的責任を有する。別言すれば、貧者や犯罪者に對する慈善は、社會自身の懺悔的行爲でなくてはならぬ。殊に我が國は家族的情誼に依つて成立する世界無比の國家なりと標榜する者が、其の家族の憐むべき一員たる貧民に向つて慈善呼はりは何事ぞ。殊に況んや慈善家の行爲が、ときに賤品の一部を分與するが如きに於てをや。慈善とは動物虐待防止の意味か、自然の風致を保存する意味か。吾人は慈善家の名を聞いて嘔吐を催し、又夙に第一義を離れたるが爲めに慈善事業を羊頭として僅かに其の面

目を維持する宗教家を見て憫憐を感ずる。

世に教育者なる者がある。彼等は多くは功利主義者である。教育の能事は、對手の自己感情と自己批評とを喚起し、獨立獨歩に堪ふる人格の力を激發せしむるにある。然るに見よ、現今の教育は比々として對手の功利的精神に媚びつゝあるではないか。曰く『斯くては成功せざるべし』曰く『斯くすれば罰すべし、』と。斯かる教育は單に對手の功利的精神に訴て、成功と無罰との呼吸を會得せしめるのみである。斯くて專制治下の民は作らる。即ち『國道あらば現はれ、國道なくんば隱るゝ』事大主義の國民、『明哲身を保つ』怜悧なる國民『其の智や及ぶべく其の愚や及ぶべからざる』遊泳と踏晦の國民、『免れて刑なきを欲する』横着なる國民は斯かる教育の結果として生ずる。而して權力者は依然として飽食し暖衣しつゝ、法律に盲從する者を良民と稱し、而して斯かる良民を養成する學者を穩健なりと形容する。

最後に我が國の學者を見よ。口に人格主義を唱へつゝあるも、其の行爲は悉く事大主義の徒なる事を立證してゐる。由來學者は代辯階級に非ず、寧ろ指導階級たるべきものである。理想的には、天津橋上杜鵑を聞いて天下の亂を知る豫言者でなくてはならぬ。さればスペンサーの如きは嘗て代議士に選出せられんとした時に、人民の代表者ではなく、人民の指導者であると任じて、之に應じなかつた。然るに我が國の學士は辛ふじて一陣笠代議士となりて無上の光榮と心得るものがある。而して他の滔々たる者に至つては、民論の指導者どころか、寧ろ民論の追從者である。基督教の入り來るや、俗衆に媚びて、之を以て國體に害ありとし『宗教教育の衝突』を論ぜしもの、今や却つて二者の調和を説くに腐心しつゝあるものがある。進化的動物と云はゞ云ひ得らるゝが、之れ社會を指導するものに非ずして、社會に指導さるゝものである。斯くては十字架に附けよと叫ぶ群衆の一人と何の異なる所がある。されば、我が國の學者は民論の沸騰する大事件に對しては、常に沈默の美徳を嚴守し民論の趨勢を觀測して

漸に口を開くのみである。從つて我が國の學者にして危險視せらるゝ言論を吐くものは極めて尠ない。此は國家の爲めに慶賀すべしと云はんも、要するに學者が單に凡俗の代辯者たるを實證するものである。凡俗標準の法律より見ば、法律以上の思想も法律以下の思想も危險たることに於ては一である。されば學者の所説が穩健なりと稱せらるゝは、畢竟學者に法律以上の思想なしとの侮辱となるのである。

凡てが功利主義の弊害である。爲政者若し之を奉ずれば、愚民政策を以て善政主義なりと盲信し、異域に流浪する笑賣婦を指して國威發揚の兆候と見做すまでに墮落する。弱者之を奉ずれば、明哲保身となり好言令色となり、面從腹背となる。學者之を奉ずれば飽暖階級の代辯となり俗論に對する追從となる。宗教家之を奉ずれば眞俗不二の功利敎となり現世利益の祈禱宗敎となる。功利主義は享樂主義よりも一見道德的なるが如くして、實は却つて醜惡である。其は科學的野蕃主義であり、組織的惡魔主義である。吾人は功利の奴隷たらんよりは寧ろ狂者たらんと欲する。現に重厚なる孔子すらも「鄕愿は德の賊なり」と呵し、又「中行を得て而して之に與せずんば狂狷乎」と激語したではないか。吾人は好言令色の輕薄兒が嬉々として樂園に舞ひ、剛毅朴訥の硬骨漢が獨り嶮難の路に蹌踉たるを見て、現代の功利主義的傾向に反抗の心を懷く。

六　文化主義の空疎

享樂主義も功利主義も快樂乃至幸福を最高價値と見做す點に於て共に精神の偏狹を立證した。されば單に此等に偏せず、全體としての意識を實現せんとする主義が成立する。實現説若しくは完成説と稱せらるゝもの之れである。併しながら實現説は實現の意義如何に依つて人格實現説となり社會實現説となり宇宙實現説となる。而して其の内、人格的實現説は餘りに個人的主觀的に偏し、宇宙的實現説は宇宙の目的を確定するに困難なるが爲めに、今日一般に採用せらるゝものは社會的實現説である。即ちヴントは自己完成人格實現は餘りに空疎にして、形式的表出に外ならずとなし

て、吾人の努力の目的を藝術、宗教、法律的秩序、歴史的過程にあると認めた。之れ要するに人間の價値感の事實化、人間の能力の客觀化を以て主義とする所謂文化主義である。又パウルゼンも國民的文化の價値は世界的人道より、世界的人道は宇宙目的より確定さるべきものであるが、世界的人道の理想が宇宙目的の爲めに部分たり手段たり機關たる意味は具體的に決定し難く、而して人道の概念より國民的文化を評價する歴史哲學は未だ成立せずとなして、結局個人生活と國民生活との相卽不離の關係を指摘して社會的歴史的實現を努力の最高目標とした。

現今に於ては、學者は遠く天涯に眼を放つて宇宙の究竟目的如何と思辨し、又深く自己に沒入して自我の具體如何を反省することなく、此の現實の世界に國民的文化を實現すべしと提唱しつゝある。例へばオイケンの如き外的文明に反對して内的文明の價値を高唱しつゝある學者すら、獨逸人が詩と哲學との世界のみならず、產業と軍備との世界に努力するを以て獨逸人の墮落に非ずして多面化であると辯護して國民的文化を神聖視してゐる。又かの國際法を一片の反古と見做し小弱國民の節操を蹂躙するも不可なしとなしてマキアベリズムを露骨に宣傳しつゝあるベルンハルディすらも、國民的文化の實現を絶對視して自己の主張を神聖化しつゝある。實に現代は、基督教の超越神も佛教の內在神も其の影を潜め、人間の集合的努力の產物たる『人間神のみ獨り信仰を繋ぎつゝある時代である。今や『文化禮拜』は學俗を通ずる一般的宗教となつてゐる。

されど、吾人は一般世人に雷同して現代人の『文化禮拜』を無條件的に謳歌することが出來やうか。云ふまでもなく價値感の事實化、能力の客觀化を正當の意味に解すれば、吾人は文化を咀呪すべき理由を有しない。吾人はルツソーと共に人文の潮流が全然誤まれる方向に進めりと思惟するものではない。又ショペンハウエルの如く人類の歴史を以てあらずもがなの悲劇と觀ずるものではない。又元より老子の顰に倣つて『民をして結繩の昔に返らしめん』と欲し、又『禮は忠信の

薄にして亂の首なり、知識は道の華にして愚の始めなり」と文明の世を罵り『褐を衣て玉を抱く』を聖人の理想とするものではない。吾人は進化は有限化であり、有限化は否定であるとは信ずるも、而も此の故を以てルソーの如く自然に復歸せんとし、プロテーヌスの如く宇宙の大原に逆行せんとするものではない。姙まれたるものは生れざるべからず、鬱屈するものは遂に發散しなければならぬ。復生復初の說は如何に詩人の感懷を動かすとも、吾人は決して文字通りに復古者たることとは出來ない。併しながら姙まれたるものが生れ來りたることゝ、生れたるものゝ價値を批判することゝは自から別事である。從つて吾人は現代の文化禮拜に對する評價の權利を有する。

吾人は先づ何故に現代の文化主義者が表現てふことを重視するかを怪しむ。云ふまでもなく表現の眞意義は價値の創造である。意識內の混沌たる價値が明確なる形式に於て表現せらるゝことは、吾人の價値感をして一層鮮明ならしめ深刻ならしめる。他面吾人は表現に依て、吾人の共鳴者を作り得る。而して其等の共鳴者に於て、吾人は擴大せられたる自己を認め、時にはより善き自己を認める。此の意味に於て表現は擴大であり創造である。此の故にこそ、價値感は事實化を要求し、能力は客觀化を强請する。併しながら此は理想的の意味に於ける表現である。斯かる表現は自己讚美が同時に暗示たるが如き場合に限らるゝ。斯かる表現はショペンハウエルの言へる如く、無意識的に行はるゝものであつて、表現其物を目的とする場合に於ては全然不可能である。古人も、無爲の爲、爲之れより大なるはなく、不言の言、言之れより大なるはなしと云つてゐる。されど不幸にも、表現の多くは、行爲事業言語の何れに依る場合に於ても、內的價値を減殺し生命の源泉を涸渇せしめる。蓋し行爲は思想の自由なる發展なるも、身體のメカニズムの爲めに却つて思想其物を窒息せしめ、事業は理想の事實化たるも社會の事情と偶然の運命とに飜弄されて理想を低下し、言語は觀念に反逆し、文字は精神を逆殺する。故に最大の教育

家は聲色の民を化することと末なるを知悉し、最大の詩人は文字の窮屈にして呪ふべき所以を痛感する。從つて詩人にして詩作せざる者があり、思想家にして著作なき者があり、陰德家にして事功を立てざる者がある。惟ふに詩人にして詩作を超越し、思想家にして著作を超越せる者こそ最も偉大なる者であらう。詩にも『無聲無息至れる哉』とあるではないか。要は事業に非ずして感懷であり、表現に非ずして境涯にある。かの常に密室に祈る宗教家、自己讃美を事とする思想家、自受法樂の境地にある詩人――豈に狗々として外的表現にのみ腐心せんや。されば吾人は社會的實現を標的とする文化主義に於て誇示と虛榮と內心の空虛と自我の喪失とを認める。

又殊に文化主義を以て享樂機關の精微なることのみを主義とするものとなさば、其は明に道德的唯物主義である。吾人の價値感が一定の物的條件を通じて表現さるゝ以上、又吾人の精神の自由が生物的生存の自由を條件とする以上、物質的文明の價値は承認されなければならぬ。併しながら物質的文明は精神的能力の發現の機會たらずして障碍たることが如何に多いことであらう。個人に於て健康であり長壽であり富裕であることは精神的作業の必要條件であるが、而も此等あるが爲めに、却つて精神的活力を消耗し精神的に昏睡する人々の如何に多いことであらう。之を國家に就て見るも富國强兵の實擧りながら、而も世界史の極めて價値なき頁を占めて消滅したる國民も決して尠くはない。されば、物的條件の獲得は一の努力であり、此等を利用して精神的偉大に向ふことは別種の努力である。前者は後者の條件であるが、決して原因ではない、空腹は人を墮落せしむると共に、飽食も亦人を墮落せしむる。享樂の機關に圍繞せられたるが爲めに、精神的盲目を强ひらるゝ富豪の子女があり、天惠に幸ひせられたるが爲めに、高貴なる哲學と生活とを缺く羅馬と合衆國とがある。

最後に現代の文明には少くとも三個の恐るべき弊害が伴ふてゐる。第一に其は餘りに分業的にして個人を

不具ならしめる。現代の文明は各個人を驅りて機械の附屬となし、一個の生產機關たらしめた。人格は日給と月俸とに表現せらるゝ物格となり、需要供給の鐵則に支配されて市價を有するに至つた。而して高き市價を有せんが爲めに、人たるに先だつて軍人となり醫師となり企業家となる。俯仰天地に耻ぢざる不羈獨立の生活、致して臣となすべからざる唯我獨尊の境涯の如きは過去の夢である。第二に現代の文明は餘りに無秩序であり餘りに亂脈である。從つて各個人は社會の大波小波に漂はされ、殆んど自我に對する反省の機會を喪ひ自我を喪失しつゝある。吾人の終極目的如何の自覺なく、結局は老齡と缺乏と病苦とにて醜く皺れる人たらんが爲めに、不幸の僅か許りの輕減と苦痛の猶豫と欲望の一時的沈靜とに慰められて、努力し奮鬪し轉々反側しつゝ徒らに世界歷史の悲喜劇中の一人となつてゐる。其の少しく醒めたるものも、自己に反照して人生の意義を極めんとはせず、怠慢にも古書積中に之が解決を求めつゝある。其の狀宛然土を堀つて青天を求むるが如くである。今や讀書すらも、其の本來の意義を失ひ、直接經驗の偏狹と貧弱とを補足せんとはせず、却つて直接經驗を壓迫し之に取り代はらんとしてゐる。斯かる借用的自我の優勢、寄生的自我の支配、是れ現代文明の最大病弊に非ずして何であらう。第三に現代の文明は、人間の要求を滿すべき自然的機關を補足せんが爲めに發生した人爲的機關が、却つて自然的機關を退化せしめつゝある點に於て重大なる危險がある。人類は本能の力弱きが爲めに理智を以て之を補ひ、自然的機關の不備なるが爲めに人爲的機關の助力に俟つは止むなしとするも、後者が前者を壓迫し無力ならしむるは、人類の不幸である。交通の便が脚力を弱め圖書館の設備が内省力を亡ぼし、精微なる法律が自由の精神を殺すは、奴隸たるものが主君たるものを驅使する轉倒事である。されば斯かる危險があるにも拘はらず、滔々として『文化禮拜』に走りつゝあるは、之れ燦然たる文物制度に眩惑せられて內心の空虛を意識せざるものである。大賈は深く藏す　吾人は社會的

歷史的實現を目的とする文化主義の空跡を思はざるを得ない。

七　第一義生活の風光

以上吾人は有ゆるイズムを折伏し來つた。享樂主義と功利主義とは快樂や幸福を絕對視する精神的偏狹の故に文化主義は外的表現と客觀的實現とを能事とする精神的空虛の故に、到底吾人の生活のイズムとなすに足らない。併しながら、吾人は以上各イズムの排擊に依つて果して第一義を暗示するを得たであらうか。先に顯正は破邪に卽すとは云へるもの丶、吾人は魔の死と共に神の誕生を喜び得たであらうか。吾人は遺憾ながら、未だ此の目的から遠ざかつてゐる。之れ恐らくは吾人の誤まれるイズムに對する折伏の不充分なるが爲めであらう。而して之れ卽ち吾人は口頭に於て誤まれるイズムを打破しつ丶も、未だ心情に於ける自己自からの誤まれるイズムを打破せざりし爲であらう。切言すれば、未だ第一義に徹底せざるが爲めであらう。吾人は明かに此の事實を認める。されば吾人は吾人に許されたる特權として第一義を體驗の內容としてゞはなく、單に憧憬の、若しくは想像の對象として、少しく敍說を試みやう。第一義は之を體驗するものは却つて之を描く能はざるを痛感し、而して之を描く者は多く之が憧憬者であつて、未だ體驗せる者ではない。第一義諦の風光が永久の閉されたる秘密たる所以は、實に此の理由に依る。然らば憧憬者の想像する第一義生活とは如何なる風光ぞ。

第一義生活は第一に普遍的生活である。一切の存在を包容し一切の事象に同感し得る濶大なる精神生活である。元來個々の有機體は種族的生命の潮流が宿る一時の借家であり、個人的生命は宇宙的リズムを組成する一音に過ぎない。從つて個人的生命の奏づる一音にのみ耳を傾けては、宇宙の管絃樂を聞くことを得ないのは理の當然である。されば古來より第一義生活を提唱する者は必ず個人的生命の離脫を說く。例へばスピノザの如きは、自己保存欲を永恒の相より觀察して神の自己保存欲なりと觀じ、斯くて神の自己愛まで徹底

せざれば神的生活に入ることが出來ないと述べてゐる。之れ畢竟第一義生活は普遍的生活であつて經驗的有限的自我の生活と兩立せざることを敎へたるものである。第一義生活が普遍性を以て本質とすることは、カーライルの偉人の定義にも認められる。彼の主張に從へば、偉人も時代の要求に應じて軍人僧侶文人等の特殊的形容を取りて現はるゝが、而も偉人の偉人たる所以は此等の特殊性に非ずして、斯く顯現し得る一の普遍性にあるのである。されば單なる專門家としての政事家又は文學者の如きは、才能の士とは稱し得らるゝが眞の天才と稱することは出來ない。果して斯くの如く第一義生活の眞髓が普遍性にありとしたならば、斯かる生活を送るものは畢竟天地の心を心とするものであつて、一見孤獨なるが如くして實は古人と語り後人と談じつゝあるものである。彼の眼よりせば、五尺の形骸に包まれたるものは、此れと云ひ彼れと云ひ要するに三千世界海中の漚に過ぎない。彼は自他を見ること猶ほ此の經驗的自我の埓內に於ける個々の欲望の對立消長を見るが如くである。從つて自他の紛爭の如きは常に自他を超越する公平無私なる大我の解決に委する。然るに此處に疑問がある。斯く第一義に徹せる者も何が故に經驗的自我の保存に汲々たるかとの疑問即ち之れである。吾人は之に答へて云はんと欲する。第一義的生活は天與の恩惠ではない。吾人の努力に依る穫物である。而して第一義に徹底するが爲めには先づ生物的に生きなければならぬ。人は眞に生活するに先だつて先づ假りに生活しなければならぬ。殼を破つて雛鳥として誕生するに先だつて、卵として生れなければならぬ。朝に道を聞けば夕に死すとも可なれども未だ道を聞かざる者は是非共生存しなければならぬ。此は決して經驗的自我其物の爲めの主張ではない。實に超越的普遍的自我其物の命法である。されど又此處に疑問がある。一の經驗的自我の存在が他の經驗的自我の存在と兩立せざる場合は如何。第一義を體得せる者は、此の場合同一生命の矛盾せる內容として戰ひを是認する。自己の經驗的自我にも他の經驗的自我にも

戰の權利を是認する。而して前者の敗をも悲しまず、後者の勝をも惡まない。第一義より見ば勝敗もなく生死もない。寧ろ永久の勝利と永久の生とがあるのみである。吾人は結核菌に犯されて死する際にも、自己の死を悲まずして黴菌の繁殖に普遍的生命の榮えを認むる者こそ、眞に第一義に徹せる人と思惟する。斯かる人は自己の勝利にも微笑し、自己の失敗にも微笑し得る。未だ第一義に徹底せざりしストア哲學者すら成敗と得喪とは臆見に過ぎない。從つて臆見をだに去らば、成敗得喪なしと敎へ、又死に對してすら喜劇を見るが如くなれと敎へてゐる。況んや『我が門に生死なし』と喝破する關山和尚の如きに於ては、生も之れ歡喜死も之れ歡喜あるのみである。而して斯くの如き境涯は一に普遍的生命を體得し、現實的自我を見ること一泡沫の如くなる人に於て始めて可能である。

第一義生活は普遍的生活なる以上、其は勢ひ絕對自由の生活たらざるを得ない。不自由とは常に束縛すべき外物を豫定する。從つて不自由は有限的生活に於てのみ可能なる者であつて、普遍的生活に於ては唯自由あるのみである。成敗得失の情波に漂はさることなく、此處に敗れて彼處に成ると達觀すれば、一物の我を煩はすものなく、一法の我を縛するものもない。スピノザやカントは自由を解して外的强制を離れ自己の內的本質別言すれば內在的法則に支配せらるゝ自律的生活なりと說いたが、斯かる自由は未だ道德的自由に過ぎない。眞の自由は內的本質の自然の成熟流出に外ならないから、小兒の遊戲と同樣無動機無法則の生活である。孔子も此の境地を『心の欲する所に從つて法を踰えず』と形容してゐる。此の境地にある者に取つては、所謂德行も力行に非ずして一の趣味となり遊樂となるのである。彼は無法を以て法となし、傍若無人の法外人(アウトロー)である。而も一言能く般若を談じ一舉手能く眞如を弄んで人々の讚美と摸倣との對象となる。佛家は之を稱して遊戲三昧の境涯と云ふ。

世人は此の大自由と遊戲三昧の生活が努力と改造との生活と兩立せざるが如く思惟する。されど之れ重大

なる誤解である。安息と傍觀とを以て遊戯三昧と同一視する者は其の人の無氣力と怠惰とを立證する。一度普遍的生命を體得し之に依つて大道力を養ひつゝ者は安息よりも努力を傍觀よりも改造を要求する。唯常人の努力や改造やは道力不足の爲め鞭撻と强制とを必要とするも、潑溂たる意氣の青年が冒険其事に興味を有する如く、百戰の勇士が出陣の合圖を耳にして後方餽波の群に止まる能はざるが如く、眞に第一義生活に徹底せる者は必ずや人生の陣頭に立たんと欲する。人生の傍觀者は必ずしも遊戯三昧の境地にある者ではない。眞の遊戯は多く危險と努力とを伴ふ以上は、第一義に徹せる者が單に人生の傍觀者たるべしとは謂れなき推測である。かの人生の戰陣より退きて清談を事とするが如き徒は、多く人生の不如意なるを感じ努力の無效なるべきを恐れ寧ろ滿されざる欲望の悲哀を避けんが爲めの軟骨漢である。其は恰も、戰場の危險を恐れて陣後に隱るゝ臆病武士、若しくは難破の懸念の爲めに船を岸上に引上げて海上の危きを說く水夫に似てゐる。第一義の第一義たる所以は、其の普遍的生命の體得の故に、又之に依つて生ずる大道力の故に、常人の堪え得ざる苦役を趣味と感じ遊樂と考ふる點にある。而して之れ成敗と生死とを超越する者に於て始めて可能なるものである。

　最後に第一義生活は無目的の生活である。元來目的活動は缺乏を豫定する。從つて目的活動は有限的存在に於てのみ認め得らるゝ。宇宙全體の目的などとは自己矛盾である。かの宇宙目的を捕へ得て之より人生の目的の確定を確立せんとの哲學者の企ての如きは、百年清河を待つの類である。さればスピノザも神に目的を考ふるが如きは不完全なる人間の擬人的解釋に依るものにして之れ神の尊嚴を冒瀆するの甚だしいものであると思惟した。又ベルグソンも斯かる目的觀は機械觀と同一に人間の實用的見地を直ちに實在其物に應用した一大謬見であると述べてゐる。即ち彼の考へに依れば目的觀は世界並びに人生の目的と之を達成する一切の手段とが既に與へられたるものならば、吾人の生

活に豫定せられたる軌道を進むべく餘儀なくさるゝもの、畢竟吾人の生活は機械的となる。更に目的は個體に於てのみ認めらるものなるが宇宙には截然自餘の生命より孤立せる絶對的個體はない。從つて一の個體を取りて考ふるも、其が空間的に發展の極に達すれば新たなる子孫の出生の爲めに分裂し死滅する。此の意味に於て個體は何れも皆常に獅子身中の蟲を藏する。實に個體は時間的に永續せんと欲すれば空間的に死滅せざるべからざる矛盾に陷ゐる。從つて斯かる個體に於て目的を認めんとするは、猶萬有の歸趣として一の超越的目的を想像せんとすると同樣に誤謬である。寧ろ凡ての個體と凡ての種族は一の宇宙的生命の大衝動に驅り立てられて内面的に成熟し發展するのが實在の眞相であると。然り眞に充實せる生命の自由なる活動は内部よりの自然の成熟こそあれ、自から目的を意識して之に向つて努力するものではない。要するに目的觀は、人間が實用的目的の爲めに事物を製作する態度を實在其物に移し考へたものである。併しながら斯かる見解は生活の刹那々々に絶對的意義を認め、小兒も壯年も共に夫れ自體に於て完全體であると見做す見解とは兩立しない。世人は小兒を以て不完全なる未熟のものと思惟する。さりながら、此は小兒を母の愛と懐とより引き放して孤立的に見たる抽象的見解であつて、若し斯くの如くんば大人をも之を載する大地と之を圍繞する大地とより引き放して、憐むべき不具者なりと言ひ得らるゝ筈である。或る物の爲めに活動するとは、或る存在を他の物の方便として手段として觀察する結果である。小兒は大人に成熟せりとて其は決して大人たらんが爲めに活動せるものではない。況んや第一義的生活の如きは常に滿ち足れる自由の生活である。從つて凡ての實利と實用とを超越しなければならない。釋家は此の種の生活を生活する者を閑古錐と稱する。之れ天も罰する能はざる底の無用の長物である。臨濟の所謂一無位の眞人である。莊周は此の種の生活を形容して無用の大用と稱した。之れ人の役をなさず致して臣となすべからざる眞人の境涯である。かの世の俗衆

の爲めに大功ありとせられ偶像視せらるゝ者は、多くは之れ自から器とし奴隷とする者である。

此の目的を離脱し功用を超越した生活は同時に超意識の生活である。元來意識は活動の自由が喪はれたる時之を恢復せんが爲めに生ずるものである。吾人の要求と實行との間の間隙が大なれば大なる程、意識は明瞭であり鋭敏である。されど活動の自由が恢復せられ一切の障礙が排除せられたる時は、意識は無用に歸する。故に最も道力に富み活動の最も自由なる者は、常に無念を以て念となし、無想を以て想となすものである。かの歐米人等が自意識的活動を以て眞の人格的活動となし之を生活の眞面目となすが如きは未だ小乘末悟の境涯である。未だ超意識超イズムの境を去ること遠いと云はざるを得ない。又此の超意識の眞相を劍に就いて說かば、其は卽ち無想の劍である。眞に迅速なる劍は內に充實する所があつて敵の虛を衝くこと水の低きに附くが如き無分別の劍である。敵手の虛を思慮分別して切り出せば旣に活機を逸せる死劍となる。況んや胴を切らん面を打たんとの豫定觀念を以てするが如きは尙更ら死劍となる。かの無念流と稱し神影（今の眞影は元來は神影である）流と云ふ皆此の意を現はせるものである。勝海舟が江戶城明渡しの對西鄕談判に何等の腹案を有しなかつたとは有名なる話であるが此は彼の無刀流の極意である。之れ孟子の放心の戒しめに對して澤庵和尙が反對に放心を說いたと同一の心事である。宮本武藏の佛眼といふものも要するに此の一切を放下せる無心の境を指したものである。此の意味に於て劍と禪とは常に此の超意識超イズム卽ち最良なる意味の機會主義を敎ふる絕好の武器であつたのである。

八　向上の二路

以上吾人は吾人の憧憬の對象としての第一義生活を說き了つたが、問題は現實の如き自己をして如何にして斯かる境涯に到達せしめ得べきやにある。旣に說ける如く第一義生活は無限的生命の體得にあるを以て、之に達するには個人的生命を離脫するの外はない。而

して其の方法としては少くとも二種類がある。第一は自己の有限的生命を痛感し、之を補足するに他の有限的生命を以てし、斯くして漸次に普遍的生命に到着せんとする方法である。惟ふに神は其の完全性を萬有に分與した。從つて吾人が自己に於て感じ得る完全性は極めて制限的のものであるから、之を補足すべき他の或物を求めざるを得ない。斯くて自己を普遍化せんとする要求は多くの思想家をして忠實なる學究たらしめた。例へばオイケンの如き精神生活の眞髓は强烈深刻なる直觀の努力に依つて捉へらるゝと主張しつゝ、而も歴史的研究を最も重視し歴史に實現せられたる理想に依つて精神生活を捕えんとした。而して彼はプラトーンとフイヒテとに最も負ふ所があつた。又ベルグソンの如き最も傳統を排斥し全然新奇なる路を開拓せんとしたるにも拘はらず、彼の宇宙的生命衝動の直觀は、シエッリング、ライプニッツ、ショペンハウエルは勿論遠く文藝復興期の學者に負ふてゐる。又殊に彼は人間に實現せられたる以外の生命の相を捕えんが爲めに廣く生物學の研究にも亘つて、一般的生命の眞髓と其の活動の樣式とを捕えんとした。又近代哲學の鼻祖として最も自家の獨創を誇るデカルトすら『世界てふ大なる書物を讀まんが爲めに時に書齋を去つて實生活に踏み入つた。之れ一に自己の有限的生命を無限化普遍化せんとする努力である。

之に反して第二の方法は自己を普遍化せんが爲めに直ちに自己の眞髓に徹底せんとする努力である。之れ大海は何れの一滴も其の一滴を異にするものに非ずとの信念より內省に依つて自己の實體を捕へんとする努力である。神秘家の辿れる道は主として之れである。彼等は讀書と外的觀察とを第二義と見做して宇宙の本質を自己の內部に於て捉えんとした。而して其の方法は精神的勢力の集中と緊張とである。されば西洋の神秘家も一に此の方法に依らざるはない。又殊に東洋に於ては殆んど之が修養の常道である。印度人が菩提樹下に浮世を忘るゝも、修禪の徒が『直指人心、見性成佛』を信條として髑髏に鞭つて大死一番を蹄するは 一

に内觀に依つて第一義を捕へんとする努力である。此は啻に西洋の神秘家若しくは印度の流を汲める修禪の徒に限らない。最も常識的功利的なりと稱せらるゝ孔孟に於てすら明かに認められる。例へば大學明德の章に『大學之道、在明明德、在新民、在止至善、知止而后能定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得』とある。明德は即ち第一義であつて、之を體得する方法は慮つて得る方法である。之れ内觀に非ずして何であらう。又孔子は日に三省せりと云はるゝが、吾人は孔子の三省せるもの何なるかに就いては世の儒者流と解釋を異にせざるを得ない。又孟子も浩然の氣に就いて『直を以て養ふて害無くんば則ち天地の間に塞がる』と述べてゐる。直とは要するに至誠である。心的勢力の集中である。又孟子は『其の心を盡す者は其の性を知り、其の性を知る者は則ち天を知る矣』と云つてゐる。彼が内省の努力に依つて第一義に徹せんとしたことは疑ふの餘地はない。

以上の二方法の優劣乃至補足の問題は本文の主題でないから、此處に詳說することは出來ない。唯第一の方法は萬有を綜合して神を髣髴せんとする綜合的積極的方法であつて、既に述べし如く多くはヘーゲルの附會に陷ゐる。個々の事理を明かにしたりとて暗黑の天空に星光を數ふるが如きもので、日々に領解する所があつても背景其物の暗黑なるが爲めに、胸中決して長閑なることは望まれない。然るに内觀に依つて自性を徹見する時は、暗黑の天空其物が大光明を放つて群星も其の光を藏むるが如く感ずる。内觀に沒頭するが爲めに現象的知識に暗く處世の術に迂なりとて、既に第一義を體讀せる者に取りては多く顧慮するに足らない。世の徒らに小智と小能とを誇る者の如きは、金貨の尊きを棄てゝ、單に數の多きを以て銅貨を撰ばんとするが如き類である。されど知識や信仰やは、數の問題に非ずして質の問題である。

米國人の解剖

野口米次郎

米國人の純正な血は高慢な英國から相續したものである上に（英國人の血は無智な樂天に捕はれるに至つて反省力の無い唯健康性に富んで居る）、地理上の孤立——面積こそ廣大だがその點も英國と同樣に——が彼等を『世間知らずの高慢痴氣』にして仕舞つた。英語にcomplacencyといふ語がある、辭書には滿足快意の意味とある。現狀をひたすら謳歌して小供ぢみたヲプチミズムの狀態をいふのである。自分（又自分の國）を世界の第一だと別に比較研究などする面倒を取らずに（比較研究などゝいふ緻密な頭が米國人にあるものか）單獨に定めて、あくまで無邪氣な樂天振を廣い大陸の上にさらけ出して居るのが米國人だ。ボストン人は『ボストンの州會堂は太陽系の轂である』世界は自分を中心として動いて居ると考へて居る。馬鹿〳〵しい次第だ。ボストン人はそれで、紐育人も市俄古人も、更に進んでは桑港人もネバタの山男に至るまで米國人はこの偉大な樂天敎の大信者である。米國人のこの心持は『單に自分を愛し自分の鄕土を懷しがる』といふ抒情的のもので無い（實際米國人位衝動的ではあるが純な抒情的氣分を欠いて居る國民は無い）、自分は幸福だ自國は富有だ北米合衆國は世界の一番だといふ一種の迷信に捕はれて居る有樣である。米國人彼等は譬へると、金持ちのおぼつちやんだ、苦勞を知らぬ懷育ちのやんちや坊主である、彼等は世間を知らぬ人間を知らぬ。この『世間知らずの高慢痴氣』を脫しなくては駄目だ。生きた世界の實驗を嘗めなくては駄目だ。自分と他人——自國と他國との眞實な比較研究をして見なくては駄目だ。單にお山の大將では駄目だ。世間へ裸で飛出して

自分の眞價を知らなくては駄目だ。所で米國の今回の參戰加入であるが、――これが果して米國人をして眞實な自分を發見せしめるだらうか。或は又昔のやうに高慢で無邪氣が樂天家として終らせるだらうか。經驗は何物を敎へぬかも知れぬ、米國人は自分以外に見る眼威ずる心を持たぬかも知れぬ。(實際さうゆう例を澤山擧げることが出來る。)米國人はいつまでも依然として『世間知らずの高慢痴氣』で眞實な人間になれぬかも知れぬ。

サッカレーは『愚昧の大性質は自ら晏如たる所にある』と書いて居る。米國人はこの愚昧の大性質を完全に備へて居るやうだ。米國人は自國の外世界の地理を知らぬ。米國人位旅行をして外國に金を撒布してあるのある國民は少い。又旅行し乍ら何物をも敎へられずく習慣(自分を墮落させるが落ちだから確に惡習慣だ)に本國の溫い應接間の煖爐の側へ歸へる國民も少い。旅行しても自國即ち米國を至る所に見物して歩いて外國の實際を見やうとせぬ。必竟彼等は自國の外世界の地理を了解せぬやうに出來て居る。旅行や學問の出來る連中でもそうである。況んやその他の米國人に於ては極めて狹い範圍の自國の外何んにも知らぬ、又知ろう譯がない。日淸戰爭以前に渡米した僕等は日本と支那との區別を語るに苦しんだのを忘れない。彼等は一應語られるまゝに了解しても直ぐ忘れて仕舞ふ。日露戰爭當時日本人は再び米國人に日本の所在地(地圖をあけて見ると如何にも貧弱なゝゝゝの島だ)を語る必要に迫はれたのを忘れまい。戰爭が濟むと彼等は日本の所在地などは直ぐ忘れて仕舞つた。近頃渡米する日本人(その中に僕の友人もあるが)が彼地に着いて『なぜあんなに米國人は日本の智識に乏しいのか』と驚くのも無理はない。彼等は自分の外何物も取入れる理智を持たぬ。彼等は世界を知る必要が無いとして居る。世界は彼等を中心として遣つて來たと思つて居る。又實際に於て世界の一部は蟻が砂糖に對するやうに米國に向つて近づいて來るのである。歐洲からも東洋からも、どしどし移民が米國へはいり込もうとする。米

國人は是等の下等な移住民を見て『自分は彼等から一頭地を拔いた高等國民』と自惚れざるを得無い。そして彼等は自分を『世間知らずの高慢痴氣』と祭上げるに至つたのである。

一言で蔽ふと米國は田舍である。言ひ替へると開化した田舍である（ある意味では日本は開化せぬ文明國だといふことが出來るやうに）。如何に米國の一二の文學者は此『田舍的』から米國を救はうとしたか。エマソンは千八百三十七年八月三十一日にハーバード大學で米國文壇の獨立を獅子吼した。それでその八月三十一日は正しく米國文壇獨立の紀念日であるとさへ考へて居るものがある。ポウとウヰトマンとソウロウの三人（標準次第で其外にいくらも有らうが）を取除くと米國には世界的文學者が無い。ソウロウは少くも日本と本國の米國では（預言者郷里に喜ばれない格で）ポウやウヰトマン程知れて居ない。ソウロウは大工左官殊に鉛筆の製造人として立派な腕の先生で、一年に六週間以上は勞働せず（衣食にはそれで充分であつたさうで）其他の時日は沈思默想に捧げた。南北戰爭頃の戰爭稅を拂はなかつたので、牢屋に入れられた。此事を聞いて一番に驅付けたのは友人エマソンで、エマソンはソウロウに『お前なんだつてこんな所へはいつたのだ』と云つた、するとソウロウは『お前はなんだつて此處へはいらないのだ』と返答したと傳へられて居る奇矯な變人である。エマソン初め米國の文學者はそれ〴〵敎區を持つて居る牧師みたやうなもので、敎區に住んで居る信者だけに讀ませする文字の所有者だ。近頃になつても米國文壇は田舍の文壇（前にいつたやうに米國は開化した田舍である）で、すば拔けた米國の文學者で世界的のアスパイレーションに動いたものは米國を弊履のやうに捨てゝ仕舞ふ。その一二の例を示すと、ヘンリー・ジエームスだ、ブレット・ハートなどはジエームスのやうに英國に歸化こそしなかつたが、一生米國に歸へらなかつた小說家である。今日活動して居る文學者でもハウエルス又はアザトン夫人の如き擧げて地方的名聲を得たに止つて居るのはいふまでもない。米

國の文壇を近頃やゝ世界的ならしめたのは米國の青年詩人殊に自由詩詩人のロウエル孃或はマスターの連中の力で、これとても米國の詩壇が世界的運動を創造したので無く、歐洲に芽を出し花を開いた世界的詩の運動に參加したに過無い。將來を見れば米國文壇（米國の國運と同様に）は非常に有望だといへるが、今日までは所謂旦那衆の藝——素人藝、酷評をすると廻覽雜誌の寄書家以上でないといはねばならぬ。

故ミユンスターベルヒは書いて居る『米國のやうに教育を一番安い入札者の手に委ねて平氣で居る國民を見たことも無い。』これは重もに米國に於ける小中學校の教育が月給の安直な女に支配されて居るのを痛罵したものである。實際米國では女教師が男教師を教育の大部分の領圍から放逐して仕舞つて居る。一家を支へる責任を擔つて居る男は給金の安い教師などなつて居られない。そして教師の給金を安くしたのは女教師の外だれでも無い。男子は學校の大部分の支配權を女子に與へて、自分は他へ向つてもつと澤山の給金にあり付かうとするのだが、この給金だけに閉服して居る文明位野卑な文明はあるまい。人間最初の教育（最初ばかりで無い大學教育を受けない米國人は男の教師を知らぬものが多からう）が女の手一つに任せきりである米國に、若し文明なるものが有りとすると、その文明が女性的文明であるのは自然の數といはねばならぬ。然り米國の文明は徹頭徹尾女性的文明である——丁度米國の文學が女性的文學であるやうに。

男子は二六時中外に居て金錢のため働くのを普通の生活とする米國は、今日に至るも『女崇拜』から脱することが出來ぬ。この女崇拜を多少は有意味な實行として最初の歴史の頁の上で見ることが出來るけれども、今日では空證文一枚に苦しめられて頭が上らぬと同様で馬鹿の骨頂である。女崇拜を打切るには持つて産れた世間知らずの理想論が邪魔をする。現實の力の弱いこと米國の如きは無い。力のある現實文學を露國から習はうとして盛んに露西亞文學を移植しやうとする傾向はあるが、それを受入れるにしても日本のやうに自

由であることが出來ぬ。又それを讀むものが皆な女（米國の男位讀書を嫌ひ或は讀書の時間を持たぬのは稀れだ）であつて見れば、女自身が無反省で非現實な理想論を切捨てゝ『女崇拜』を進んで辭退しない以上は、男子は永久にその不思議な邪教から救はれまい――女が主として作つた女性的文明から逃出すことは出來まい。これは今日米國の最大問題で、或は今日の歐洲戰爭加入を機として何分たりとも女性的文明を阻碍制遏して男性化せしめることが出來れば幸である

已に米國の文明は女性的である。如何にも弱い文明である。故に何んぼ米國は開化して居るといつても、今日までの所世界の進歩の上に何物をも投げることが出來なかつたのである。女性的文明はいつも感情的である。米國の文明はしかく感情的である、何處迄も非現實である、非科學的である。物質的な米國に於て感情的な文明が產れたといふ事實は一見矛盾らしく思はれるがそうで無い。物質的な現象を男が作り感情的な文明を女が作つて、此二箇の狀態が一國の表面には顯れて居る丈けである。物質的現象と感情的文明との間に了解が有る譯がない樣に、米國人の男と女との間には完全な了釋が無いと云へる。此宣言は如何にも大膽に思はれやうが事實は確にそれを證明するのである。

佛蘭西の男は女房を養ひ乍ら女房と一所に公園を散歩もすれば買物にも出掛ける。英國の男も商賣時間以外には學童にかへつて家外運動に汗水垂らしもすれば家長として小供の學校にも注意し又娘の戀人の選擇にさへ蔭乍ら心配をする。然るに米國の男は何うか。大部分の米國の男は朝から晩まで金錢のために時間を奪はれて自分の仕事以外、如何なる重大な事であつても擧げて女房の手に委ねる。して米國の男は自分の斯かる狀態のうちに生活するのを滿足して居るかといふに決してそうで無い。然らば米國の女の方は何うかといふに、性質上感情的生活の完全を希望するのであるから、斯ゝる事情の男を以て滿足が出來やう筈がない。米國では男も女も異つた路を歩き乍ら到着する場所は一である――神經衰弱に罹るのが最後である。米國人の

勞働する習慣は非論理で不條理な場合が多い。彼等の多くのものは仕事をする必要が無いのでせつせと仕事するのは、畢竟彼等の血が病的現象に感染して居るからであらう。彼等が中途で勞働を止めると、丁度阿片喫煙者が急に阿片を止めたやうに、馬鹿になつて餘命を送るに至るやうに成る。かうなると米國の男の勞働は米國國家の大問題と云はねばならぬ。實際に於て輕視することの出來ぬ大社會問題である。米國の女の『のらくら生活』が大問題である如く男の『あくせく働く』のも確に大問題である。兩者等しく完全に人生を了解したるものとは云へぬ。彼等は人世の何物たるを知る必要を感ぜぬ程彼等の頭腦は（或る意味から）荒んで居る。又或る意味からは彼等は無感覺な樂天家である。然るに近頃漸く『人生は果して何物』といふ問題に覺醒し初めたやうに見へる。さあ其處が大問題となる所なので、米國の今日は實に重大なる秋と云はねばならぬ。

最近の事情は知らぬが、筆者が米國に滯在した時分は金持ちな米國の娘が歐洲の貴族に結婚するのを一種の奴隷商賣と稱して、いつも新聞の三面を賑はしたものだ。米國の娘——男子と異つて仕事は無い、其上金は澤山持つて居る所謂ヤンキー娘(ガール)が歐羅巴の男に誘拐されるとすると、その罪は米國の男にある。娘よりまづ第一に娘の母親が愛戀の領土で達人ともいはれべき歐洲の青年に捕はれて仕舞ふのだから始末に成らぬ。米國の男は歐洲の青年に比較するとお話にならぬ位野卑である、好く云へば素朴である。讀書をして文藝の何物たるを歐洲の青年（殊にある貴族となると歷史的に文藝の保護者であつた系圖を持つて居る）が解して居るが、米國の青年はまるでその門外漢である。音樂芝居何れも米國では女の支配のもとに置かれて男子は餘り干與しない。米國では女に嫌はれたが最後何んな音樂でも芝居でも存在の餘地を發見せぬ。文學でもそうである。女に愛讀されて女の部屋の卓上に置かれるや否やでその成功不成功はトせられる。タゴールなどが米國で流行するのは澤山な女の讀者を持つて居るから

で、タゴールも米國の女に相當する程度の詩人であらう。雜誌を見ても流行する雜誌は何れも女性的雜誌で、讀者が女であるばかりか寄稿者の大部分は女であると斷言するに憚からぬ。女の讀者といつても巨萬の讀者を持つて居る十五仙雜誌（十年前は十仙雜誌であつたから其後五仙丈け上品に成つた譯だが）賣子や女書記を目あてにして居る。かういふ種類の讀者は痛切な現實から無責任な樂天の境地に逃れて金銀の匙を夢見たり玉の殿堂を現に築く。であるから米國の雜誌が讀者の希望に從つて、たはい無い目出度し〳〵の理想的愛戀談で滿たされて居るのは自然の理である。一方で米國文壇を進歩せしめやうとすると他の方では漸く墮落せしめて純然たる商賣化せしめるに盡力して居るのである。談話が幹道から逸れたが、文藝の修養を怠つた米國の青年は決して談話家（コンバセーショナリスト）でない。彼等は單純に獨語家（モノロジスト）となつて人に說教は出來る。又演壇に起つて演說もし時には小話を利口に語つてのけることもある。けれども彼等には談話が出來ぬ。この談話の技倆は世間を知り人世の表裏を辨別し得る男で始めて所有することが出來るのである。『世間知らずの高慢痴氣』の米國青年に談話家の無いのは無理がない。かういふ譯で愛戀の競爭場裡で米國の男は歐洲の伊達者にいつも負かされて居る。それは米國の男が全然愛人としての資格を欠いて居るからで、切言すると米國の社會組織の罪ともいふべきである。

筆者は種々な國を訪問して有らゆる國人に接する機會を持つたが、米國人位生氣はあるが所謂生まで、一分でも平靜なることが出來ぬ不幸な人間は見ない。一般にいへば米國の男は勞働の機關で、女は無責任な遊蕩を生命として居る。兩者共に極端に走つたもので、男子の方が物質的文明の實際を自覺し、女子が感情的文明の多くの場合に於ける無智を是認して始めて米國文明が世界に何物かを貢獻するだらうと思ふ。まづそれまでは米國は地方的であり田舍的な國で、世界の文明とは餘り深い交渉が無い。

米國人は隨分と長日月の間他の國が襲はれて居る。

人の失望悲慘の現實に觸れずに理想國（極めて安價で誠實を欠いた理想國ではあるが）を築いて惰眠を貪つて來た。もうそろ〳〵眠から醒めてもよい頃合である。

米國は未知數であつたが、將來の數年間に何か我々に示す所のものを持つであらう。

明治生れの人に檄して老人跋扈の一掃を勸む

石川半山

露國のケレンスキイ氏が僅かに三十五歲の身を以て、大宰相に任ぜられ、一億七千萬の大國民の利害休戚を、其の一身に荷うて立て居るのを見て、我が日本人の間に於ては、如何にも驚いて居る者が多い、能くアンな若かい男が、アンな重要なる地位を占めて、其の事業を經理して往くことが出來る事だと呆れて居る者が多い、然かしながら之れは驚き呆れる方が間違ひで、少壯の人物を國家の重要なる地位に用ふるのが正式で有る、我が日本の今日の如く老人萬能で、重要なる政事機關の何れの方面にも老人を用ひて居るのは、國家の爲めに喜ぶ可き現象では無い。

元老の勢力

今の日本の政治上の中心は、誰れが何と云うても、事實は元老の手に握られて居るのだ、元老も追々凋落して、今では山縣公と松方侯ばかりになつたが、山縣公は八十歲で松方侯は八十三歲で有る、其の齡の傾きたる如く、其の腦の働きも、頗る鈍重になつて居るが、それでも此等の老翁が自ら其の老耄せることを知らず

して、依然として政權を掌握し、若し之を老人扱ひにすると、大に怒て始末が附かなくなると云ふのだから堪まらない、事實に於て寺內首相が如何に威張て見ても、山縣公が一トッ冠を橫に振れば、何事も實行し得ないのだ。

日淸戰爭の時に、滿洲に出征して居た山縣公を勅命を以て廣島へ召喚して、實戰に關係せしめない樣にした時にも、公は大分不平で有つたが、當時の將軍等は、最早や山縣公の時勢で無いと定めて居たのだ、日露戰爭の時にも、公は自ら出征軍總司令官になりたかつたのを、桂公や兒玉大將が抑制して、之を參謀總長にして、滿洲へ出さなかつた、此の當時からして何人も山縣公の頭腦の、既に大半老耄せることを認めて居たので有る、然るに桂公や兒玉大將が居らなくなつた爲めに、今日では老人の我儘を制する者が無くなり、二十年前に於て、既に老耄と刻印の打て有つた山縣公が、今日尙天下の政事の中心となつて居るのは、實に國家の爲めに慨嘆せざるを得ない。

松方侯に至ては日淸戰爭前に『ボク界首相』の名を博した頃から、其の頭腦は頗る怪しかつた、松隈內閣時代には一層甚しくなり、新に『後入齋』の異名を受取り、終に其の內閣を境の浦に漕ぎ附ける迄、遺憾なく其の頭腦の頹敗を暴露した者で有る、然るに近年に至る迄、尙其の自家の老耄を自覺する能はず、『大隈さへも出馬する位なら、自分もモウ一度內閣を組織して見たい』と乘り出し、能く其の父君の實力を知れる令息達をして、之を諫止するに手古摺らせると云ふ位だ、其の元氣は感服すべき者かも知れぬが、此等の老人の我儘が通るのは、國家の爲めに良い事とは思はれない。

現に山縣公は樞密院議長の重任に在ても、其の定例の會議に議長を務めることなく、議長は常に副議長をして代理せしめ、松方侯は內大臣の重任に在ても、常侍輔弼の責任を全うする能はず、其の事務は御用係の平山成信君に一任して居るではない乎、實際自ら其の任務を全うするだけの身體を有せずして、徒らに此等

の重任を汚がし、而して重要なる國務に關して、自分の私的感情を挾さんで、種々なる異見を立て、當局者を苦しめることを、是れ事とするが如くになつては、甚だ良からぬ事で有る。

我輩は元老攻撃を試むること、于茲二十年一日の如しで有る、憲法上に規定のない元老なる一階級を存在せしむ可らずとは、永い間之を繰り返して居るが、今以て行はれない、然かしながら歳月と云ふ味方は、さしもに頑强なる薩長兩閥の元老をも打撃し、殘す所は唯此の二老になつたが、彼等も亦他の元老の如く、死する迄其の非を悟らざるかと思へば、一種氣の毒にも感ぜざるを得ない。

内閣總理の年齡

内閣制度の設けられて以來、久しい間内閣總理大臣は天保の占有で有つた、伊藤、黑田、山縣、松方、大限の五天保が、明治十八年から同三十四年に至る十六年間、之を占有して決して後進に渡さなかつた、而して明治三十四年に初めて桂公の弘化が之を繼承し、それから西園寺侯、山本伯、寺内伯の嘉永迄は降下したが、未だ安政生れの内閣總理を出さない。

安政元年生れと云へば、既に六十四歳の老人で有る、安政の人としては原敬、伊東巳代治、犬養毅、尾崎行雄、武富時敏、大岡育造、元田肇、箕浦勝人、大石正巳、後藤新平、其他英雄豪傑雲の如く多しと雖も、未だ嘉永以前の人傑を凌駕して、内閣を其の一手に引受ける人物の出でざるは、我輩の甚だ遺憾とする所で有る、今日の情況を以て之を見ると、安政が内閣を受取て、それから萬延、文久、元治、慶應と順々に渡した日には、明治生れの内閣總理大臣を出す迄には、尚數年の歳月を要するで有らう、之れは我等明治の後進の堪ふる所でない、若し我輩共の正直なる意向を告白することを許すならば、寺内内閣の次ぎには、直ちに明治生れの内閣總理大臣を出して貰ひたい者だ、明治にしても既に本年五十歳で、決して若かい者ではない、最早や老人の部に入れて良い者だ。

明治生れの國務大臣

大正五年の冬迄、國務大臣に一人の明治生れの男が無かつたことは、正さに明治ッ子の恥辱と謂て宜しからう、大隈內閣迄は一人の明治生れの大臣が無かつた寺內內閣も其の組織の時には、未だ一人の明治生れの閣僚が無かつたが、昨年の冬、帝國議會の開會前に勝田次官が明治二年の生れを以て、初めて大藏大臣に陞任した、是れ實に明治大臣の皮切りで有る。

然るに世間には愚昧なる人が有て、勝田君の此の陞任を非難し、或は『未だ若かい』と言つた者が有る、四十九歲の老人を、未だ若かいとは何の事だ、或は又『貫目が足らぬ』と評した者が有る、勝田君は瘦せて居るから其の肉體の斤量は或は多くはないかも知れぬが、其の學識から言ふても、其の閱歷から見ても、國務大臣として少しも不足な所はない、此の人の陞任に對して、此の如き批評の起つた事は、明かに日本國民の間に、古物崇拜の病氣が有ることを證した者で、誠に嘆息せざるを得ない、我輩共は今日に於ては、明治以前に生れた人間を國務大臣に任じない樣にすることそ、寧ろ時勢に適應したる方針で有らうと思ふ。

樞密院の老人揃ひ

樞密院に至ては、其の年齡の古るいこと、實に言語同斷で有る、全體樞密院なる者は、天皇陛下の諮詢機關で有て、重要なる國務に關して、陛下から此の院へ御諮詢に相成るのだ、されば苟くも顧問官として此の院に列する者は、必ず十分に御諮詢に奉答し得るだけの能力ある者でなくてはならぬ、然るに從來の樞密院は、一種の養老院で有て、多くは老碌した者を收容する事になつて居る、それ故に御諮詢案が出ても、之を十分に研究するだけの能力ある者は、此の院には至て少かつた、麒麟も老いては駑馬に如かずと云ふが、駑馬の老いたる者ばかりを揃えて、樞密院に並列する慣例だから堪まらない、貴族院を氣樂院と稱して、老いたる駑馬の收容所として有るが、樞密院は此の氣樂院に於て一層甚しく老碌した者を選んで、之を收容する內規らしい、實に驚き入つたる事で有る。

試みに現任顧問官の年齡を調べて見ると、何人も其

の古物の共進會たるを感ぜざるを得ないで有らう、定員二十六名の中に就て、八十歳以上が六人も有る、即ち山縣有朋、樺山資紀、福岡孝悌、細川潤次郎、九鬼隆一、杉孫七郎の諸老で有る、七十歳以上が七人で、南部甕臣、河瀨眞孝、曾我祐準、三浦梧樓、蜂須賀茂韶、黑木爲楨、有地品之允の諸老で有る、最も多いのは六十歳以上で淸浦副議長を初め、濱尾新、岡部長職小松原英太郎、金子堅太郎、伊東巳代治、末松謙澄等の諸老で有る、五十代の人と云へば僅かに安廣伴一郎都筑馨六兩君と新任の一木喜德郎君だけで有る、一木君は現在に於ても一番若かいが、樞密院設置以來、一番若かい顧問官で有る、然るにそれでも慶應の生れで有て、明治生れの男は未だ一人も此の院の古るい臭ひを嗅いだ者が無い。

我輩は國務大臣に若かい人物を登庸するの必要を感ずると同時に、此の樞密院へも明治生れの人を入れて眞に陛下の御諮詢に奉答し得る能力ある者ばかりにしたいと考へる、老臣優遇と云ふことは、決して惡事ではないが、其の方法は他にイクラも有る、功の有つた人なら、爵を陞すなり、無い者には新に授けられても宜しければ、又位階を上げることにしても宜しからう、又相當の金を御下賜になつても宜しからう、之れは宮內省の係りの役人に於て、それ〳〵然るべく詮議をするが宜しい、樞密院とか內閣の重要なる官職へ、老臣優遇の意味を以て、耄碌した人物を推薦するのは、閥族が從來執り來りたる所の最も宜しからぬ方法で有る、之れは是非共改めて貰らひたい者だ。

新時代は新人物

畏くも今上陛下には、明治十二年の御降誕にして、本年は三十九歳にならせ玉ふ、誠に今が最も御壯の時で有る、明治大帝は嘉永五年に生れさせ玉うたので有るから、大帝の御治世に於ては、天保、弘化、嘉永、安政の生れの人々が、左右に奉仕して、之を輔翼し奉るのも適當かも知れぬが、明治十二年に生れ玉ひし現代大正の皇帝陛下を輔翼し奉るには、必ず明治生れの人でなくてはならぬ、古るい人物は最早や不適任で有

るべき筈で有る。

新らしい時代の新らしい建設には、新らしい人物の新らしい頭腦を要することだ、吾人は大正の新皇帝の新らしい皇謨を翼賛し奉るが爲めには、宮内省の官吏は勿論、内閣、樞密院に明治生れの有力者を推薦し、一切の老人を退隱せしめて、以て人心を一新するの必要が有ると考へる。

乃木大將と德大寺公

明治大帝が崩御になると、乃木大將は之に殉死をせられた、殉死は我輩の反對する所で有る、從て乃木大將の殉死と雖も、我輩は決して之を讃美する者ではないが、然かしながら大將が明治大帝の忠臣として、冥途迄も御伴を申すと云ふ志は、實に美しい心だ、大正の新皇帝の補翼は、之を後進有爲の人物に一任して去つた志は、誠に清い者で有る。

其の方法は異なつて居るが、德大寺公も其の志は乃木大將と同じ事で有る、明治大帝の崩御と同時に、退隱を決定して、最早や世間の事に一切容喙しない事になつた所は、如何にも美しい心事で有る、我輩は乃木大將以上に德大寺公の性格を尊敬せざるを得ない。

今の元老や樞密院に居る連中が、乃木大將や德大寺公の心になつたなら、決して君恩の優渥なるに馴れて何等の補翼し奉る所もなくて、今のやうにして居らるべきでは有るまい。

壯年の事業

凡そ人間は老いては役に立たない者だ、人類の偉大なる事業は、大概壯年の時に出來て居る、二十代から五十代迄の人が、國家の中堅に坐して、此の國家を荷うて往く樣でなくては、國運の發展は期し難い事だ、七十歳から八十歳の老翁にして、國家を負擔し得る者も、決して絶無とは言はないが、そんなに澤山有る者ではない、日本の現代の如きは、寧ろ老人跋扈時代とも謂ふべき者で、國家の爲めに宜しくない現象だ。

耶蘇は三十三歳にして十字架に罹つたが、彼れの宗敎は千九百年を經過して尚滅びず、世界の四隅に傳播して今尚盛に行はれて居る、釋迦は二十九歳にして出

家し、六年の修行の後、三十五歳から說教した者が、今日の佛教となつて居る、孔子は二十二歳から書生を敎へて、其の儒敎を建した、マホメットは四十一歳から其の回々敎を說き始めた、我邦に於ても親鸞上人が一向宗を立てたのは三十六歳で、日蓮上人が日蓮宗を開いたのは三十一歳の時で有る、吉田松陰は三十歳で斬られたが、それ迄に敎へた門弟が、維新の改革を成功して、今では世田ヶ谷の松陰神社の主人となつて居る。

宗敎家ばかりでは無い、科學者でも發明は大概少壯者流が行うて居る、ワットが蒸汽機關を發明したのは彼れが二十九歳の時で有る、それから四年の後に特許を得た時に、尙三十三歳で有つた、グラハム、ベルが電話の發明も、彼れが三十代の事業で有る、フランクリンの電氣の硏究は大に遲かつたが、それでも四十代で既に大家で有つた、現代の大家でも、大概二十代から三十代、遲くも四十代迄に、世上に頭角を現はして居て、其の以後は唯其の惰力で進むばかりで有る。

歴史に於て絕倫の大業を行うたる者は、何れも少壯の人物で、老人は唯守成の一方だから、決して花やかなる成功を收むることは出來ない。

アレキサンドル大王は紀元前に於て、最も輝ける大王で有るが、其のバビロンに死したる時は、年齡僅かに三十歳で有つた、二十歳で帝王の位に卽いて以來、十三年の間に、大帝國を建設し、遠く波斯を征服して印度に及んだ所は、老人に出來る仕事ではない、シーザルが三頭政治のコンスルに選擧されたのは、彼れが四十三歳の時で有つた、而して其の殺されたのは五十六歳の時だから、其の十餘年間にアレだけの功業を爲したが、決して老いて後の事ではない、ナポレオン一世がセントヘレナで死んだ時は五十二歳で、彼れの活動は三十代から四十代に於て盛で有つた、初めて佛國皇帝の位に卽いたのは千八百四年で彼れが三十五歳の時で有る、今の露國のケレンスキイ氏と同年で有る、露國のピートル大帝が其の大帝國を建設したのも、三十代から四十代の事業で、死んだ時は五十四歳で有つ

た、米國共和政治の最初の大統領ワシントンが、獨立の旗を樹立したのは、彼れが四十三歳の時で、爾來八年の歳月に於て、能く其の國務を處理し、終に米國獨立の大業を成功し、巴里に於て平和條約を訂結したのは、彼れが五十一歳の時で有つた、之を支那の歴史に徴するも、秦の始皇は三十歳にして韓を滅ぼし、三十二歳にして趙を滅ぼし、三十五歳にして魏を滅ぼし、三十七歳にして楚を滅ぼし、三十八歳にして燕を滅ぼし、三十九歳にして齊を滅ぼして、天下を統一した、彼の長城を築いたのは彼れが四十六歳の時で、其の死する時は五十歳で有つた、我が日本に於ても源賴朝は三十三歳にして兵を擧げ、三十八歳にして平氏を討滅し、建久三年四十五歳にして征夷大將軍となり、幕府を開いて居る、太閤秀吉が微賤より起て、關白となつたのも、亦四十五歳にして其の五十一歳の時には、既に關白を秀次へ讓て居る。

有名なる政治家で、天下の政權を掌握したる者、ピットの如く二十代で内閣を組織した例も珍らしいが、伊太利のカヴールは、四十二歳にして初めて内閣を組織し、佛國のガムベッタも亦四十二で内閣を組織した、現に英國の内閣首相ロイド、ジョーヂ氏も本年五十四歳で、佛國の大統領ポアンカレイ氏は本年五十七歳だから、之を我が寺内首相に比すると、凡そ十年若かく、之を山縣公や松方侯に比すると、二十年以上の差が有る。

此の如く人類の年齡と事業に付て、研究して見ると今日の日本の如く老人を餘り多く政局の中心に坐せしめて置くのは、決して國家の爲めに良い事と考へられない。

米國紳士の驚愕

昨年の六月、米國からプリンス氏とミレット氏が來朝した、彼等はボストン市に於て、米國の有力者が、「獨逸の軍國主義を討滅する迄は、講和をしてはならぬ」と云ふ決議をしたので、其の趣意を聯合國へ遊說する爲めに來た者で有る、世間では之を平和使と稱したが、其の趣意を能く聞いて見ると、單純なる平和使

ではなくて、永久の平和を目的とする爲めに、獨逸の軍國主義を討滅すると云ふので、寧ろ聯合軍後援使とも謂ふ可き人々で有つた、此の兩氏は共に七十歲に近い老人で有つたが、或る歡迎會の宴席上、プリンス氏は其の隣席に坐したる我輩に向て曰く、

自分は此の老年で有るから、最早や世間から退隱しても宜しいので有る、然るに今回此の使節に推されて、先づ歐洲に赴き、英國に往くとキッチナル元帥と云ふ老人に面會し、又佛國に往て見ると、そこにジョッフル將軍と云ふ老人の元氣なるを發見した、而して此の日本へ來て見ると、內閣總理大臣が大隈侯で、實業家には澁澤榮一、森村市左衛門、大倉喜八郎の諸老人が元氣に活動されて居るのを見て、自分等も大に奮發する心になつた。

昨年キッチナル元帥は六十六歲でジョッフル將軍は六十四歲で有つた、日本の老人とは代が違うのだが、それですらもプリンス氏を驚かした、大隈侯は本年八十歲、森村男は七十九歲、澁澤男は七十八歲、大倉男に至ては八十一歲で有る、而して此等の老人が、尙勢力が有るのだから、外國人から見たら、日本は一種の老人國と見ゆるかも知れぬ、政治界でも經濟界でも敎育界でも、其他あらゆる方面に於て老人が跋扈して居て、少壯の人物は其の老人の前に拜跪し叩頭し、秩序を重んじ、先例を調査し、慣習に從ひ、グズ〳〵とやつて居るが、之れで果して世界列强の駸々として進步して居る情勢に遲れずに居ることが出來る乎、我輩は今の時に於て、國家の深憂大患は、此の老人跋扈に在りはせぬかと恐れる者だ。

老衰は事實なり

人間は何故に老衰する乎、之れは老人の研究すべき問題で有ると同時に、一般人類の十分に研究すべき問題で有る、何人も老衰を望まないけれど、又何人も老衰を免れない。

佛國の醫學博士メチニコフ氏は、犬の腸から取つたグリコバクテルと云ふ細菌を以て、人體中の有害なる黴菌を殺せば、人類の長命を期することが出來ると言

て、人類が二百歳の長壽をなし得る說を公けにして居たが、彼れ自身は七十歳で死んだ、そこで彼れの說きし所の『人體中の有害なる細菌が、人類の長壽を妨ぐる』との說も果して眞なるや否や、分らなくなつた。

又歐洲の多くの學者は、老衰の原因を色情に歸し、『人間にして色情を禁止すれば、必ず長命する』と言て居る、ゲルウヰエ氏は『每年產卵する金翅雀は、六七年以上生活し得ないけれど、之を別居させると能く二十年の生命を保ち得べし』と云ひ、フゴデ、フリツツと云ふ植物學者は、植物にも同じ原則を應用し『ライグラスと云ふ草の花の咲く前に、之を斷てば靑くして何年でも生きて居る』と云て居る、之には勿論反對說も澤山有り、未だ色情を禁止して老衰を防ぎ得た實例の澤山でない以上は、十分に之を證することは出來ない。

支那でも秦の始皇が、徐福をして不老不死の藥を東海に求めしめて以來、随分種々の研究をなし、特に食物に付ては随分人體に適する進歩した物が有るが、それでも老いないと云ふワケには往かない、張之洞などは虎肉のソツプを飮んで、長壽を望んだが、それでも八十歳迄は生きられなかつた、日本でも長壽の法として、種々の說が有るが、兎に角今日迄の所では老ひないと云ふワケに往かない樣で有る。

曾て人類の壽命を平均した統計に依ると三十八歳が人間の平均年齡となつて居る、果して然らば其の以上は先づ長命の方で有ると見て宜しい、或る學說に依ると、二十五歳を以て成熟すると云ひ、三十五歳が最高潮で、それから段々衰へると言つた、四十歳を初老と云へば、四十歳からは最早や老人の部と見ても良いかも知れぬ、細川賴之は人生五十にして功なきを恥おて起て禪榻を尋ねて、淸風に臥するに決したが、近代の文明は、人間の衛生情態を改良したから、五十を初老とし、六十で退隱せしむる位が適當かも知れぬ、今日の如く、八十代の人が跋扈するのは、決して國家の爲めに良い事とは思はれない。

角力取りを見よ、四十歳になると如何に强い男でも

取れなくなるではない乎、二十五六歳から三十四五歳迄が人間の最盛時で有る、此の精神も肉體も張り切つた時の人物を、重要なる地位に用ひないのは、國家の損失で有て、之を老人の壓力の下に用ひて、其の技倆を十分に伸張せしめず、而してそれが體力も氣力も衰へた頃になつて、漸く重要の地位に置かれるとは、國家の人物經濟上から考へて、甚だ不得策の事と考へる。

教育上の改革

それに今日の教育も良くない、學校の年限が餘りに長きに過ぐる樣だ、三十年前の東京大學を卒業した人は、二十二三歳で學士になつた、三宅雄二郎君でも奥田義人男でも阪谷芳郎男でも、加藤高明子でも高田早苗君でも皆其の連中だ、而して何れも一代の俊秀で、何處へ往つても立派に尊敬されて、十分に一人前の仕事をして來た者だ、尾崎行雄君などは十八歳にして新潟の新聞主筆を務めたと云ふことだが、少しも怪しむことは無い、硯友社の俊秀が、小說界を風靡したのも尾崎紅葉、嚴谷小波、石橋思案、江見水蔭、何れも二十歳前後の學生時代で有る、人間は十八九歳から社會に頭角を現はし得る者に違ひない。

然るに今日の教育法は極めて不完全にして、此の活氣の充溢して居る時代を、學校の教科書に沒頭せしめ大學教授の腐敗した粗末なる生命のない講義の筆記を事とせしめ、之に依て青年の元氣を沮喪せしめて居る、青年の多數は、此の精神的去勢術のお陰で、何れも一定の型にはまつた人間に作られ、二十六七から遲きは二十八九になつて、社會に出てヽ後も、秩序の鐵鎖に繋がれ、階級の壓迫に會して、狹くなり小さくなり、心はヒネくれて御殿女中の如くなり、望む所はコツコツと階段を昇りて、或る一定の地位に達するに在る樣になつて居る、是に於て三十代の人間は、尚子供の如く取扱はれ、六十か七十の老人になつて初めて一人前の人間と視らるヽとは、實に世界の歷史に先例の無い馬鹿氣切つたる社會で有る。

老人跋扈は近年の事

然かし此の現象は誠に近年の事で、日本も決して昔からコンな風ではなかつた、明治維新の改革は其の頃三十代の人が中堅となり、二十代の人が其の股肱となつて出來た者で有る、大久保甲東の殺された時、四十九歳で有つた、彼れが内務卿として權威赫々たりしは四十代の時で有る、明治十八年伊藤公が初めて内閣總理大臣になつた時、彼れの年齢は四十四歳で有つた、されば今から三十年前迄は、決して今日の如く老人跋扈の風は無かつたので有る。

第一次大隈内閣の時、尾崎君は三十九歳にして文部大臣となつた、尾崎君が罷めて之に代つた犬養君も四十二歳で有つた、今日の如く六十歳以上にならぬと内閣總理大臣になれず、五十歳以上にならぬと、國務大臣の候補に數へられないと云ふのは、全く近年の事で此の弊風は十分之を打破して、新進氣鋭の士を用うる樣にしなくてはならぬ、政黨の首領にした所が、加藤子は五十代で有るが、犬養君や原君は既に六十歳以上で有る、還暦以後の人は大概に切り上げさせて、餘り失態を繰り返へさせない樣にするが老人に對する慈悲では有るまい乎、一面から見れば今の社會は老人跋扈で有るが、或る一面から言へば、老人虐待とも謂ふ可しだ、山縣、松方、大隈諸老から、寺内、犬養、原、西園寺、山本などゝ云ふ老人を政界へ引張り出して、流血淋漓の戰ひをなさしむるのは、實に慘酷の次第で有る、鳳と大錦の角力なら、面白く見る事も出來るが若し今日の土俵へ、老年の常陸山や大砲を引張り出して相撲を取らせた所が、唯氣の毒なばかりで、決して面白いことはない、今日の日本の情態を評すれば、常陸山や大砲が昔强かつたと云ふので、イツ迄も土俵に出で、見物も之を土俵に出すのを許して居る樣な者だ。

伊藤公の實力論

然かしながら此の忌むべき現象を呈したるに付ては、老人の自ら退隱しない罪も有るけれど、後進の無氣力も亦與かつて罪の有ることで有る。

先年赤坂の三河屋に於て、伊藤公を中心として或る

小集の催されたことが有る、其の席上に於て、鳩山和夫君が公の前に杯を貰ひに往き、雜談の際、「閣下の如き元老が、永く御退隱下さらない爲めに、我れ〳〵後進が誠に困まります」と言うと、伊藤公は憤然として「之れは鳩山君の言として受取ることの出來ない意外の事で有る、凡そ天下の事は、實力に依て決する者だ、政治上の權力も亦常に實力の存する所に歸するので有る、君は元老が地位を塞いで困まると云ふが、何故に元老を叩き落して、其の欲する所の地位を奪はざる乎、敵に向て自ら退隱して吳れとは、卑怯なる言草ではない乎、元老が國家の爲めに役に立たない、若くは有害なりと認めたならば、公等堂々と之を攻擊して、其の地位から叩き落すが良いではない乎、今や日本は自由競爭の天地で有る、實力ある者が天下を取り得る世の中だ、決して遠慮は入らない、我輩は上は至尊の御信任あり、下は國民の信望に依て、常に政治上重要の地に立て居るのだ、我輩は陛下の御前に出でゝも、何人にも讓らない御信任を持て居る積りだが、各地方を周遊して、各地の有志に會見して見ても、現代の政黨員よりも勢力を持て居る自信が有る」と滔々と說き出したる後、鳩山君が頗る恐縮して居る態度に氣が附いたと見えて、急に舌鋒を柔かにして、「試みに此の席に居る大小の美人にした所が、我輩と君とが競爭すれば、屹度我輩が取て見せる　之れも亦實力競爭で我輩が如何に威張て、元老だと云うても、美人が應じなければ仕方が無いが、此の座中の美人の誰れでも、我輩が目を着けたら、屹度取るがドウだ」と言て、大口を開て笑はれたことが有る。

誠に伊藤公の言はれたるが如く、天下は實力の競爭で有る、老人が如何に良くないと思うても、實力に於て若かい者に優さつて居れば仕方が無い、此の老人跋扈が國家の爲めに良くないと思うても、後進の英雄にして彼等を叩き落す者が無くては、如何ともすることが出來ない。

山縣公が八十歲で、樞密院の會議に出席せずして、我儘をしながら、尙政權を其の掌中に握て居るのは、

甚だ良くないと思ふけれど、公を支持する者が多くて之を叩き落すことが出來なければ仕方が無い、寺内伯が六十六歳の老人で、然かも糖尿病の身を以て内閣總理大臣の地位に居るのは、甚だ良くないと思うても、政友會や國民黨が之を助けて、樞密院も貴衆兩院も之を支へて居る以上は、如何とも仕方が無い、是に於て日本國民中の少壯者流の無氣力を嘆息せざるを得ない、老人跋扈は直ちに少壯者流の無氣力を證明する者で、是れ豈國家の深憂大患に非ずや、老人の先輩諸君も、一念茲に及べば、恐らくは憂慮に堪へない者が有るで有らう、我輩が此の文を草して、少壯者流の奮起を促かすのも、亦全く此の國家の深憂大患を憂ふるが爲めで有る、我輩は茲に天下の明治生れの人に檄してあらゆる方面に於て一齊に老人を退隱せしめ、我等明治生れの者を以て全力を擧げて、此の國家を支持する様にしたい、今我等の力の充實したる時を以て、此の國家を受取らず、六十や七十や八十の老年に及びて、後進の者から國家の料理を委托されても、それは却て迷惑で有る、又國家の爲めにも決して良いとは思はれない、願くば古物崇拜の空氣を一掃せよ、新人の新らしい實力を發揮するに務めよ、新人互ひに相助けて進み、老朽に依賴する風を止めよ、是れ新らしい人々の務む可き所で有て、同時に我が國運の隆興を來すべき道で有る。

殖民政策の根本方針を論じて滿鮮統一に及ぶ

早大教授　永井柳太郎

（一）

本國政府が頻りに殖民地の事業に干渉し、強いて之を統一せんとして種々術策を弄する事は、決してよい事ではない。殖民史上に於て一時、各殖民地の本國が

種々の術策を弄して、人爲的に其殖民事業を統一せんとした時代があつた。之は重商主義の思想に基いたものである。即ち出來得る限り多く本國の貨物を殖民地に賣らしめ、出來得る限り少く殖民地の貨物を買ひ、其差額を貴金屬によつて支拂はしめ、出來得る限り多くの金銀を所有する事が即ち其國の富む所以であると考へて居つた。そこで當時の本國政府は、或は殖民地に本國の生産業と競爭すべき危險性を有する生産業の發生する事を嚴禁し、或は殖民地が本國と貿易せずして外國と貿易するにしても政府の特許を受けたる商人に限り之に從事する事を許し、又或は本國の船舶にあらざる船舶によつて貿易品を輸送する事を嚴禁するが如き、種々なる術策によつて人工的に拓殖事業を統一せんとした。例へば、西班牙の如きも其殖民地の貿易は總て政府の獨占として、只少數の政府の特許を得たる商人のみが之に從事する事になつて居つた。然し、此政府の特許を得たる少數の商人にても、自由に殖民地と貿易し得るのではない。其貿易すべき港はセギール港及びカアヂッツ港の二つに限られたるのみならず、其貿易品は毎年二十隻乃至二十七隻よりなる商船隊に積込んで二回丈け輸送する事となつて居つた。斯くの如く貿易をして得たる利益は、一部分金銀を以て之を政府に納めねばならなかつた。其税金の割合は、最初三分半位であつたが、後次第に高めて一割二分に至つた。斯くの如く本國よりの貿易業を統一すると共に、殖民地に對しても外國船の出入を嚴禁し、本國の生産業と競爭するが如き性質を有する生産業を抑壓して、殖民地の住民をして本國よりの輸入品に依らざれば生活が出來ないやうにして了つた。此結果は何うなつたかといふと、殖民地に於ける物價は暴騰し、住民の本國に對する不平は次第に鬱積したるのみならず、生活の必要上自ら密貿易は發達し、密かに外國と結んで西班牙政府に反抗するといふが如き機運を促した。而して機敏なる外國の商人は巧妙なる方法を用ゐて盛んに密貿易をなし、西班牙の貨物が獨占的になつて居るので高價なるに反し、極めて廉價に販賣した。そこ

で、西班牙本國と殖民地との貿易は萎靡として振はざるに反し、殖民地と外國との貿易關係は非常に親密となり又大規模に發達した。此關係は西班牙殖民地が總て本國に反抗し本國より獨立したる後に於て最も明かに表はれて居る。現に西班牙の舊殖民地たりしペルーの如き、一千八百五十四年に於ては本國に對する輸出が年僅かに二萬フラン、本國よりの輸入が一年僅かに二百萬フランであつたに拘らず、英國との貿易は非常に發達して、英國よりペルーに對する輸出は一千八百萬フランを越へ、ペルーより英國に對する輸出は三千萬フランに達した。斯くの如く殖民地貿易を強いて統一し、強いて獨占せんとしたる結果は、却つて對殖民地貿易の衰微を來たし、其上西班牙本國の生産業にまで多大の不利益を齎らした。なんとなれば、本國の生産業者が殖民地に賣出して多くの利益を博する目的を以て盛んに貨物を生産しても、本國から殖民地に出る船の數が制限せられて居るから、其生産品が意の如く賣り捌けない。それが爲めに本國の倉庫には貨物が推積し、屢々生産過剩となつて大損失を惹起したるのみならず、西班牙政府が盛んに殖民地から金銀を輸入した結果、金銀の價格は下落し、延いて物價の騰貴となり、本國に於ける一般人民も亦物價の暴騰の爲めに苦まざるを得なかつた。之が十九世紀の初めに至るまで西班牙が殆んど其領土に太陽の沒する事なき大帝國を有したるに拘らず、而かも西班牙自身は大いに富む能はず、却つて殖民地が相次いで本國に叛し、ナポレオン戰爭を機會として獨立したる重大なる源因である。然し、斯くの如きは一西班牙の失敗のみならず、佛國も之を試みて失敗し、英國も亦之を試みて失敗した。米國が英國より分離して獨立したのも、決して漠然たるフランス革命の思想に動かされたのみではない。其根本は即ち英國の東部十三州に對する極端なる統一的及び獨占的政策の弊害に堪へずして、之より脱出せんとする強烈なる要求が其根本をなして居るのである。

(二)

然しながら、極端なる拓殖事業に對する自由放任主義も決してよろしくない。現に英國の如きは、米國の東部十三州の獨立に懲りて早く極端なる統一的及び獨占的政策の弊害を覺り、其他の殖民地に對しては自由主義を以て之に望むやうにした。玆に於てか、カナダに對しても、濠洲に對しても、ニユージーランドに對しても、又南アフリカの諸州に對しても、政治上及び經濟上、本國との從屬關係を失はざる範圍内に於て完全なる自治權を與へた。從つて之等の殖民地に於ては如何なる種類の生産業を起す事も隨意であり、如何なる國と貿易する事も自由となつたのである。が、然し餘りに自由放任に傾いた結果、本國と殖民地との間に時々利害の衝突を惹起し、時としては殆んど外國に對するが如き不便をさへ感ぜざるを得ざるに至つた。例へば、英國が本國より殖民地に通ずる關税同盟を組織して、大英帝國の經濟的基礎を確立せんとするに方つても、殖民地の利害關係が矛盾して居るので、何うしても實現する事が出來ない。例へば、關税同盟を組織するか、或は互惠關税政策を適用せんとするに方つても、カナダ其他の殖民地に於ける製造業者は英國の製造品を無税、又は特別なる低率の關税で輸入せしむる事は斷じて許さぬ。何故なれば、無税又は低税とする事に依つて優等なる英國の製造品が盛んにカナダ其他の殖民地に輸入せらるれば、其地に於ける幼稚なる製造業は直ちに壓倒せられるに相違ない。從つて彼等は英國の製造品を無税、又は低税で從來よりは容易に輸入せらるゝ事を許さないのである。それから、英國の製造業者も亦關税同盟及び互惠關税政策を喜ばぬ。例へば綿糸綿布の製造業者の如きも、其原料たる綿花は主として北米合衆國より輸入して居つたのであるが、自國の殖民地内に於ては棉花の栽培が發達して居らぬ。印度綿及び埃及綿は多量に生産するけれども、其品質に於ては到底米國綿に及ばぬ。然るに、今關税同盟又は互惠關税政策によつて一切の外國品に高率なる關税を課する事になると、性質のよい米國綿を使用する事は困難となつて來るに拘らず、自國の殖民地に於て

なる綿花を得る事が出來ない。故に、自由の殖民地内に於て優等なる綿花を多量に生産し得るまでは、關稅同盟とか又は互惠關稅政策には反對だと言ふ。

それから、又關稅同盟及び互惠關稅政策が適用せられた時は、米國及び露國から輸入せられたる小麥が騰貴する事となつても、カナダ其他の殖民地から生產する小麥が之に代り得る程多量でない。故に高價な小麥で作つたパンを食べなければならない。從つて、勞働者の如きも關稅又は互惠關稅政策に反對する爲めに、之を實現する事が不可能なのである。殊に最近に至つては、カナダと米國の經濟的關係は寧ろカナダと英國の關係より密接になつて、遂に米國とカナダとの間に却つて互惠關稅同盟を組織せんとするが如き形勢をさへ生じた。それが爲めに大いに英國を驚かし、故ジョッセフ・チャンバーレンは『カナダと米國との經濟的結合は、軈て米國とカナダとの政治的結合を惹起するに至らん事を恐る』と歎じた程であるが、斯くの如きはまた餘りに殖民地に對する極端なる自由放任政策の弊害である。

(三)

玆に於て、本國政府の拓殖事業に對する方針は、本國と殖民地とをして相依り相賴ましむるといふ事を根本として、其經濟的利害の衝突を惹起させぬといふ事に努力しなければならぬ。此根本方針を確立する事は殖民地に在住する人民の自由意志に放任してよろしい。同じく殖民地と言つても、朝鮮又は南滿洲の如き溫帶殖民地に於ては、溫帶地に獨特の產業が起らねばならぬ。臺灣の如き熱帶殖民地の如きは、熱帶地特有の事業がある。此自然の方則に基く生產業の種類は人爲的に變更し、又は人爲的に統一し得るものではない。そこで、殖民地に於て如何なる種類の生產物を以て最大の利益を收め得べきかといふが如き事は、之は住民の自由意志で撰擇すべきものであつて、本國政府より命令すべき限りではない。本國政府としては、本國と殖民地との經濟的關係をして出來得る限り相依り相助くるの方針を保たしめ、其方針を維持し得べきやう本

國政府と殖民地官吏とが氣脈を通じて、號令の統一を保つといふ事は頗る必要である。此點より觀る時は、今度の滿鮮統一の如きも頗る緊急の事であると思ふ。例へば、朝鮮鐵道と南滿鐵道との連絡にしても、之は亞細亞大陸に於ける日本の經濟的基礎を確立する上に缺くべからざる事である。從來朝鮮鐵道と南滿鐵道とは、恰かも外國鐵道の如きであつた。南滿鐵道會社の車輛は、其客車たると貨車たるとを問はず、僅かに一週二三回西比利亞急行列車に接續して釜山に直行する場合の外、凡て鴨綠江を渡る能はず、安東驛に到着すれば、晝夜の別なく旅客も亦貨物も、共に朝鮮鐵道の車輛に積み換へらるるのであつた。朝鮮鐵道の車輛も亦之と同じく、西比利亞急行列車に接續する目的を以て釜山より急行する者の外、凡て鴨綠江以北に及ばず安東驛を限りとして停止するのであつた。加ふるに小包郵便の如きも、鴨綠江以南の宿驛より內地に向けて發送したる者は、直に釜山に急行し、關釜連絡船に依て內地に配達せらると雖も、鴨綠江以北の宿驛より內地に發送する者は、僅かに鴨綠江の鐵橋一ツを隔てたる安東驛よりする者と雖も、朝鮮鐵道に依るを許さず凡て之を安東線に依りて奉天、大連に迂廻せしめ、大連より船によりて內地に輸送する事となつて居つた。之が爲め時日を要する事夥しく、朝鮮鐵道に依るを便とする者は孰れも先づ其郵便物を朝鮮に運搬し、朝鮮より改めて之を發送するの手續を採るのであつた。

惟ふに斯如不調和は、南滿鐵道と朝鮮鐵道とが各々別個の經營機關に屬し、兩者互に其經營方針を異にせる限り、之を矯正するは容易であるまい。全體南滿鐵道の經營方針は、滿洲の貨物を出來得る限り南滿鐵道に吸收し、大連をして日滿貿易の中心點たらしむにあると雖も、朝鮮總督府は滿洲の貿易を安東線及び朝鮮鐵道に吸引し、之を釜山に集中するを經營方針として居つた。從つて兩者が競爭し、又反目するは自然と言ふべく、嘗て朝鮮總督府が鐵道院に交涉し、對滿洲輸出奬勵を名として大正三年五月一日より安東線直通の朝鮮鐵道列車運貨を大連奉天間の運賃と同一率に低、

せしむる事としたる時の如き、南滿鐵道會社は之を以て從來採り來れる大連集中主義に一大打擊を與ふる者として鐵道院に種々の苦情を申出で、遂に同年七月一日より內地發滿洲直通貨物に對してのみ安東線同樣に運賃三割減を實施し、一旦大連若くは營口に陸揚げ後更に仲繼者の手を經て滿洲內地に向ふべき貨物に對しては減貨をなさゞる事に決定して、漸く事件が落着したのであつた。蓋し南滿洲鐵道の全線は六百九十五哩にして、之に朝鮮鐵道一千哩を加ふるも、尙ほ一千七百哩を出でぬ。如斯き短距離の鐵道を二つの機關に分掌して、其盛衰を爭ふ事、實に不見識の極致と言ふべく、誰か我國の爲め之を痛歎せざる者ぞ。若し南滿鐵道及び朝鮮鐵道の全線が同一機關の經營に屬するか、又假令同一機關の經營に屬せざる迄も、眞に和衷協同の精神を有せる二つの機關に屬するに於ては、車輛の如きも必要に應じて有無相通ずるを得べく、貨物の如きも眞に帝國の將來に有利なる地點に集中せらるゝ事となるであらう。軍事的必要に應じて南滿鐵道の車輛を朝鮮に利用すると同時に、冬期滿洲の大豆其他の穀物が大連に集中せんとするに方り、朝鮮鐵道の車輛を移して南滿鐵道の車輛の不足を補ふを得ば、如何に便宜なるぞ。前述の如く亞細亞大陸の關門に位する二ッの機關が互に其盛衰を爭ふやうな狀態で、果して帝國の大陸政策を確立し、滿蒙に關する日支交渉の成果を確實に收むる事が出來たであらうか。

(四)

又南滿洲に於ける三頭政治の弊害は夙に之を耳にしたるが、余は一昨夏親しく南滿洲の地を踏みて、其實際の風評よりも更に顯著なるを目擊した。南滿洲に於ける我行政機關は(イ)領事館、(ロ)關東都督府、(ハ)南滿洲鐵道會社の三であるが、此三機關は其權限に於て頗る曖昧なる者なるのみならず、其政策に於ても亦屢ゝ相容れぬのであつた。加ふるに此三機關は各々所屬系統を異にし、領事は外務大臣の指揮監督を受くるのみなれども、關東都督は一般政務に就いては內閣總理大臣、作戰及び動員計畫に就ては參謀總長、軍隊敎育

に就ては教育總監の指揮監督を受くるのであつた。南滿洲鐵道會社に至ては直接に其業務を監督するのは關東都督府であるけれども、究極の管理權は內閣總理大臣に屬して居つた。爰に於てか三機關は同じ南滿洲の土地に於て各々任意の行動を採り、領事館の爲すところは關東都督府の意思に反し、關東都督府の施設は南滿鐵道會社の方針に悖り、彼此互に相背き、相妨ぐる結果を生じて居つた。

前關東都督大島大將は領事館と關東都督府との調和を計るに苦心し、在滿洲の各領事をして都督府事務官を兼ねしめ、之を統轄する事としたるが、領事等は關東都督府を見る事外務省の如くならず、關東都督の命令にして自家の意見に一致せざるものあれば、直ちに之を外務省に訴へ、外務省も亦關東都督府が陸軍に關係深きを以て之を視る事繼子の如く、兩者は依然として相合はなかつた。嘗て之を聞く、領事館警部にして都督府官吏を兼ねたる某地警務署長は、或報告を都督府に致さんとするに方り、俄かに領事より之を見合すべき內命を受け、暫く其提出を差控へたるに、此事の爲め種々の不都合を生じ、同署長は遂に辭職せざるを得ざるに至つたので、其地の官民合同して送別會を催したるところ、其席に列したる領事は公然同署長の行爲を是認するの演說を試みたるのみならず、其後此事件に關係したる都督府官吏某は外務省より警告を受けたりと。其他司法上に於ても領事は初審裁判を掌り、終審は之を都督府の高等法院に移す規定なりしが、最近數年間の事實に徵するに、高等法院に移されたる領事裁判の判決にして破棄せざられざる者は半數以下であつた。如斯きは領事が法律の智識に暗く、民刑法、民刑事訴訟法等の復雜なる條文の適用を誤るに由るところ大なるは勿論なりと雖も、また兩者の間に存する感情の齟齬も、尠からざる原因をなして居るのであつた。

領事館と南滿鐵道會社との關係も亦決して調和して居つたとは云へない。南滿鐵道の沿線に於ける主要なる都市には同會社の經理主任なる者が駐在して、會社

附屬地に對する或程度の行政權を掌握して居つた。固より外交事務、警察事務、徴稅事務、郵便事務等の如きは關東都督府の權限なれども、其他の行政事務卽ち敎育、衞生、土木、産業等に關する者は凡て經理主任の權限に屬し、經理主任は此等の行政費を支辨する目的を以て又或程度の公費を徴收するのであつた。而して領事館に至つては會社附屬地に對し、或程度の司法權の外、他に何等の管轄權をも有して居らなかつた。此結果として同じ南滿洲の土地に居住せる內地人が其會社附屬地に在ると、領事館管轄區域に在るとに依り負擔の輕重を異にし、又諸種の取締規則を異にするが如き奇觀を呈するのみならず、右兩地域に跨がる事業を起さんとするに方りては、會社及び領事館の兩方より許可を受くる必要を生ずるのであつた。從つて其手數は容易ならざるのみならず、時には一方が許可するも、他方が許可せざる爲め、有利なる事業を起さずして止む事も尠くなかつた。如斯き狀態で南滿洲に於ける內地人の活動は頗る不便に出來て居つたのであつたが、然かし、領事館と會社との關係よりも更に不調和なのは、關東都督府と會社との關係であつた。之を既往の成績に依て判斷するに、同都督府の存在は南滿洲の經營上唯に無用であるのみならず、寧ろ幾多の點に於て有害であつた。例へば、土地調査事業の如き、南滿鐵道會社は夙に其必要を認め、唯に會社附屬地のみならず、苟くも重要なりと認むべき土地に對しては、之を勵行するを怠らざりしに拘らず、都督府に至つては關東洲の小地域に於てすら嘗て土地調査を試みたる事なく、漫然として露人が一時的に規定したる地租率を踏襲し、空しく十年の歲月を消費したのであつた。從て地租の收入は一年尙まだ十萬圓に過ぎず、土人の土地を盜耗し、若くは申告を詐りて納稅を肯んせざる者年に多く、近年初めて土地臺帳の必要を悟り、其調査に着手したといふ有樣であつた。其他奉天の地を卜して日本赤十字病院を建設せしめたるが如きも、又都督府の不見識を曝露して餘あると思ふ。奉天に於ては明治四十年既に南滿鐵道所屬の大連病院奉天出張所が

置かれ、次で之が擴張せられて大連病院奉天分院となり、其規模に於ても、又其設備に於ても、內地の大病院に比して遜色なきものとなつたのであつた。故に都督府は、若し日本赤十字社が奉天に病院を設立せん事を要求するも、之を諭して或は長春、或は吉林等の如き、尙まだ大病院の設備なき地點を擇ばしめ、以て國勢の發展を計るべきであつた。然るに都督府は明治四十二年奉天城內に日本赤十字病院を新設するを許可し、事實に於て、患者を滿鐵醫院と赤十字病院との双方に割き、兩者をして經營の支辨に困難ならしめて居る。如斯く三頭政治の弊害は南滿洲の地到る處に於て之を發見するのであつたが、之れで果して日本の勢力を南滿洲に扶殖し、列强の侵略に對抗する事が出來るであらうか。

（五）

以上の點から觀ると、今度の朝鮮鐵道が南滿鐵道の委任經營となつたのは、予としては年來の持論が實行された譯である。又關東都督をして事實上南滿鐵道を兼ねしめたといふ事は、三頭政治の弊を除く上に一步を進めたものである。今日の關東都督たる中村男爵は久しく南滿鐵道の總裁であつたのみならず、頗る達眼の士であり、拓殖政策に對しても一隻眼を有する人であるから、經綸も見識も十分にある。此人が關東都督として南滿鐵道を統理する事は、寧ろ適材を適所に用ゐたものであると思ふ。けれども、關東都督が南滿鐵道といふ營利會社を總裁し、朝鮮及び滿洲を通じての經濟的殖民的發展に對する支配權を擔ふ以上は、其都督を陸軍大將又は中將に制限して置くといふ官制をも變更しなければならない。少數なる現役陸軍大中將の間に於て、關東都督に任じ南滿鐵道及び朝鮮鐵道の經營に應ずる人を求めんとするから、既に後備役に編入せられたる者を現役に復せしめて世間の非難を招くといふが如き事をしなければならぬ。若し之を文官に求むる事を得るとしたならば、中村中將と比較し得べき人は澤山居るに相違ない。予は中村中將が去つた後に果してよく少數なる現役大中將の間より眞に日本帝國

の亞細亞大陸に於ける經濟的地步を確立するに足る有爲なる關東都督を繼續的に得る事が出來るか何うかを危むものである。又それと同時に、政府が滿鮮鐵道統一及び關東都督府と南滿鐵道の行政的統一を斷行したるに拘らず、進んで其中心となるべき關東都督を現役陸軍大中將に限るの陋習を打破するの勇氣を有せざりし事を惜み、龍を繪いて而かも睛を點じ能はざりしを甚だ遺憾とするものである。

日本造船業の過去・現在及び將來

工學博士　寺野精一

太古の日本造船術に就いては、何等確實な記錄の據るべきものがないから、今之れを知ることは出來ないが、四面環海の島國であるから、有史以前既に舟楫の便大に開けてゐた事は疑を容れない。現存する記錄に、種々古代の船に關する記述の有るのを見ても、船の利用されてゐた事は明かである。而して當時の船は主として筏、又は獨木舟の類であつた事は、之れ亦一般の船船發達史に徵して想像することが出來るのである。原始時代では、筏又は獨木舟のやうな簡單なものを以て水上運搬の用に供した事は、世界各國皆其軌を一にしてゐる。

日本と朝鮮とは古代から交通が開けて居つた爲めに、朝鮮式の造船術最も早く我邦に傳來した事は明かで、船の構造に於ては彼我著るしく似寄つて居る。現に日本在來の船形と、今日殘存してゐる朝鮮のそれとの間に、幾多の類似點を見出す事が出來る。後に遣唐使の制度が開かれて、支那との交通が漸く旺んになり始めて以來、支那からも船舶航海に關する種々の知識が輸

入されて我造船術も大に進歩し、大形の航洋船を建造し得るに至つた。而して支那式造船法が我邦に傳つた事實は、繪卷物などでも之れを知る事が出來る。例令へば壇の浦海戰の繪卷物にある平家の御座船の如きは、其大さに於ても、又其形式に於ても當時の日本船とは著るしく異つて、明かに支那風の船である。又鎌倉時代に、源實朝が七里ヶ濱で、宋の陳和卿に命じて船を造らせた事などもある。

平安朝に及び唐との交通が絶えてから航洋船の建造も自然衰へた。鎌倉時代に於ても或る程度迄日宋貿易は行はれたが、航海及び造船の業は萎靡して振はなかつた。其後足利時代に及び、幕府が京都の天龍寺其他の寺院、諸大名に海外貿易の特許を與へたので、天龍寺船などの名稱のある海外交通船が出來て、久しく衰へて居た我造船業も再び振興の機運に向ひ、遠洋航海に適する大船が建造さるゝに至つた。

更に下つて豐臣時代から德川幕府の初期には大に海外通商を保護奬勵したので海運業は隆盛を極め、所謂御朱印船と稱するものは、特に幕府の允可を受けて遠く暹羅、交趾、呂宋、東浦塞等の西南洋諸國と交通した。當時寺院などに奉納した繪畫等から想像しても、此時代の海外渡航船は啻に其形が大きかつたのみならず、形式が著るしく當時の歐羅巴船に似てゐることが分る。當時和蘭、西班牙、葡萄牙などの歐洲文明が、西南洋諸國を經て我邦に移植されたから、西洋式造船術も從て輸入されたに相違ない。勿論御朱印船の納には支那式、或は純日本式と認めらるゝものもあるが、是等は當然の事で、當時海外の渡航免狀を得て居た者、大名、寺院、商賈、外國人等を通じて六十餘の多きに上つたのであるから、彼等の所有せし御朱印船の中には或は外國より輸入せられたものも、日本内地で外國式に倣ひて建造されたものも、或は支那製のものも、純然たる日本式のものもあつたことと思はれる。然し不幸にして御朱印船建造に關する正確なる記錄は餘り現存して居らぬ。

慶長十四年家康が英人ウヰリヤム、アダムス（慶長

四年平戸に漂着せし和蘭船の水先案内にて、後家康に寵遇せられて三浦按針と稱す）に命じて伊豆伊東に於て西洋形船二隻を製造させた。是れ關東に於て西洋形船を建造した始である。後同十八年伊達政宗が家臣支倉六右衛門を羅馬に遣す爲めに、幕府の船大工を借りて長十八間幅五間半の西洋形船を造つたと傳へられて居る。

十五六世紀頃の歐洲海運業は未だ頗る幼稚で、其使用船舶の如きも皆小形であつた、例之ば十五世紀末コロンブスの亞米利加發見の際乘用に供された「サンタ・マリア」は其長さ僅々七十餘呎であつた。然るに我御朱印船の中には角倉所有船の如き長二十間幅九間にて四百人乘のものあり、又支倉六右衛門が上述の船に坐乘して呂宋を經て太平洋を横斷しメキシコのアカプルコ迄航行した事實等に徴するも、當時の我海運業造船業が、歐洲に比して餘り遜色のなかつたことが想像される。

寛永十八年徳川三代の將軍家光は、天主敎の普及と、それに伴ふ弊害とを恐れて、之を禁遏する爲めに五百石以上の大船製造及び邦人の海外交通を禁止し、支那和蘭以外の外國船の來航を拒絶して、有名なる鎖國令を發布した。之れが爲め漸く發達し來た造船業も海運業も共に衰微して了つた。爾來二百餘年間は、內地沿岸の海運のみ次第に發達し、之れに用ゆる回漕船の製造は依然として衰へなかつたが、皆千石以下の小船で、到底遠洋の航海に耐ゆることの出來ない頗る弱い不完全なるものであつた。

斯くて我國は鎖國主義を固守し外界との交通を絕ちて、國民は徒に太平の惰眠を貪つて居たが、嘉永六年偶偶亞米利加の黑船艦隊が相州浦賀沖に出現するに及んで、上下周章狼狽、國防の一日も忽せにすべからざるを悟り、幕府は家光以來の大船製造の禁を解き、國內各藩に西洋形船の建造を奬勵し、自ら率先して安政元年浦賀に造船所を設け、鳳凰丸と云ふ三檣の帆船を造つた。（其時代に修繕用に供した船渠は近年迄浦賀船渠會社の構內に殘存してゐた。）之れが鎖國以後に我邦で

西洋型船を造つた始めである。鎖國令が布かれてからも、獨り和蘭のみは交通を許され、其商船は毎年長崎に來航してゐたから、我國人は實際に西洋形船の外觀を見てゐたし、一面には蘭學の勃興と倶に、和蘭の書物に依りて造船上の知識が傳へられたので、島津齊彬公の如きは箕作阮甫、川本幸民などの蘭學者に相談して、安政元年昇平丸以下二隻の西洋形帆船を造つた。水戶の公烈も夙に意を國防に注ぎ、三檣の帆船(長三十間)を設計して安政三年隅田河口の石川島に於て之れを建造し自ら工事を監督して竣工の後旭日丸と命名した。然し此船は計畫を誤つた爲めに成績宜しからず、航海頗る困難であつたから、水戶の厄介丸と云ふ綽號を取つた。

安政元年十一月露西亞艦隊が樺太修交條約の爲め日本に來航し、伊豆の下田に碇泊中、箱根の大地震に伴つた大海嘯で、使節の坐せる軍艦ダイヤナ號が坐礁して艦底を損じた。艦長はプーチャチンと云つて使節を兼ねてゐたが、幕府に乞ふて修繕の爲めに適當な地を求め、伊豆國君澤郡戶田村(現今の東京帝國大學水泳場所在地)の地を選んだ。然るにダイヤナ號は下田から回航して來る途中遂に沈沒して了つたので、更に戶田で船を造る事を幕府に乞ふて其許可を得、天城山の材木を伐り出してプーチャチン自身が部下の水兵を指揮して「スクーナー」形帆船を造らせた。伊豆の村民の之れを手傳ふ者が少くなかつたが、之が事實に於て日本で正式に西洋型の船を造つた嚆矢である。嚮きの鳳凰丸や各藩の造船は、和蘭の造船書より得た不十分の智識を基にして、和蘭船の外觀を模倣したのみで、內容に於ては在來の大和形船と大差なかつたのである。露西亞軍艦ダイヤナの不慮の椿事は、却つて日本造船史上に重大な意義と有益な暗示とを與へた。之れが爲め日本の造船術が如何程刺戟され、促進されたか分らない。先年品川臺場で造船所を經營して居た緒明菊三郎と云ふ造船家の如きも戶田の人で、露人の造船を手傳つた一人であるが、其當時造船を手傳つた船大工は、後に橫須賀造船所其他各地で重く用ひられた。露西亞人が幕府から造船の許可を得たに就いては、伊豆韮山の代官

江川太郎左衛門の斡旋に待つ所が多かつた。幕府は曩に石川島で旭日丸製造に從事した木工鍛冶職其他のものを傳習生として戸田に送り、露西亞人の指揮の下に造船を見習はせ、尋で江川太郎左衛門に命じて、戸田村に於て露西亞人製の「スクーナー」と同型の帆船を六艘造らせ、又石川島に於ても四隻建造した。之を君澤型と云つて、西洋形船の模範として各藩に示した、其一隻たる帆船蜻蜓丸は明治二十年頃迄日本船籍に殘つてゐた

安政二年和蘭政府は徳川幕府に觀光丸と云ふ軍艦を獻じた。是れに依つて幕府は其海軍の基礎を造つたので、次いで三艘の軍艦を和蘭に注文した。而して之れと同時に榎本釜次郎以下十數名の留學生を和蘭に送つて、軍艦操縱及び造船の術を研究せしめた。現存してゐる赤松海軍中將(則良)の如きは、其時派遣された和蘭留學生の一人である。斯くの如く幕府が海軍に意を用ひるに至ると共に、是等艦船の新造や修繕の必要から、和蘭政府に依頼し技師職工を傭聘して、安政三年長崎に製鐵所を設立し、(今の三菱製鐵所がそれである。)海軍傳習所と併せて、各藩から送られた傳習生に造船、航海の知識を與へた。尋で翌四年是等傳習生の修業の爲めに蘭人指揮の下に長崎形と稱する小形の帆船を製造し、其後更に長十五間の汽船瓊浦形を建造した。之れ我邦最初の汽船である。斯樣に一面に於ては長崎で和蘭人から造船の知識を與へられ、一面に於ては戸田で露西亞人から偶然正式の造船術を習つたので、西洋の造船術が漸次日本に普及した。是等の人々のみに依りて計畫製造せられた第一船は千代田型(百四十噸)と云ふ木造の砲艦で、文久元年石川島に於て起工し、同三年を以て竣工した。之れ本邦建造の最初の軍艦である。

斯の如く幕府が一度び開國の方針を執るに至りてより、西洋の造船術は浸々として我國に傳つて來て、造船所も各地に設立されたが、幕府は長崎の地が首府と遠く隔りて不便であると云ふので、更に江戸の附近に軍艦の新造及び修繕場所を設くる必要を感じて、元治元年時の佛蘭西公使レオン・ロシウに諮詢することとなり、

當時の勘定奉行小栗上野介が主として其衝に當つた。是に於て佛國公使は其艦隊司令長官と共に江戸灣の沿岸を調査した結果終には軍造船所として横須賀、修理工場として横濱の地を選んだ。尋で同公使の推薦で佛蘭西の海軍大技士ベルニーと云ふ造船家を傭ひ入れて造船所の設立及び經營一切を託した。そこで慶應元年に工を起し、横濱本村に設立した横濱製鐵所の方は一ヶ年を出でずして竣工したが、横須賀造船所は維新の當時未だ完成の域に達してゐなかつたので半成の儘で明治政府の手に移り海軍造船所となつた。之れと同時に長崎の製鐵所も工部省の手に歸し、横濱の製鐵所は石川島造船所と共に一時海軍の手に移つた。其後石川島は民間に貸與し、次で拂下げられて長崎の人平野富次の所有となり、現今の石川島造船所の基礎を造つた。然しながら明治の初年は政府も只管國内統一の事業に鋭意努力してゐた時代であるから、大體に於て造船業海運業の方面を顧る餘裕がなかつたので、微々として振はなかつた。唯神戸だけは内外交通の要路でもあるし、外國人の滯在するものも多かつたから、種々の造船所が外人の手で經營されてゐたが、或は合併せられ或は廢業轉業して今日迄現存して居るものはない。大阪には古來大和形船を建造する造船所が多數にあつたが、西洋形船の發達に從ひ漸次減少して少數のものが現今迄存續して居る。尤も大阪でも明治の初年に小形の鐵船數隻を建造した記錄はあるが、皆試驗的のものであつた。

舊幕時代加州藩が能登の七尾に造船所を設け其所有艦船造修の用に供して居たが、後兵庫に移されて兵庫製鐵所となり、更に夫れが明治維新と共に政府の手に歸し、工務省の管轄に屬して工作局分工場になり、最後に初め東京の築地に小造船所(今の北海道炭鑛會社の所在地)を持つてゐた川崎正藏氏の手に歸して、今日の川崎造船所の基礎となつた。

明治の初年英人キルビーが神戸の小野濱に造船所を設けたが、後海軍の注文に依りて大和艦の造船中に死亡したので、建造中の船と共に其の造船所が海軍の手

に歸し、小野濱造船所となり、後に吳の海軍工廠に合併された。斯樣にして明治の初めには工作局が主に商船を造り、軍艦は海軍造船所で之れを建造すると云ふ有樣で、ぼつ／＼西洋型船が造られるやうになつたが、其當時は一般に海事思想缺が乏して居て造船業の如きは一向に振はなかつた。石川島造船所を讓り受けた平野富次は先見のある人で、小形の蒸汽船を多數に建造し、之れを賃貸して大に沿岸航海の發達に資する所あらんとしたが、之れも終に成功せずに了つた。

明治の初年に大阪で鐵船を造つた事は前に述べたが、夫れは稀有の特例で當時は多く木製の帆船を造る事が行はれてゐた。明治六年橫須賀造船所で初めて佛蘭西人の指導の下に建造された軍艦は、淸輝艦と云つて八百噸の木造砲艦であつた。然し日本が開國した頃は歐羅巴先進國では、木造船が既に廢れて、鐵鋼船の需要が漸く盛にならんとする時節であつた。從つて歐式の造船術を趁つた日本では比較的早く鐵船を造る事が行はれて、餘り大形の木造船は日本に於て終に建造される機會がなかつた。唯長崎造船所が工作局より三菱會社に讓り渡された後、明治十六年同所に於て製造された千五百噸の小菅丸は本邦建造の木船中最も完全なる標本で、日淸戰役前に於ては內地新造船中の最大なるものであつた。其外にも二三の大形木船が製造せられたが之は特例である。但し我國は鐵鋼材を自國に於て得ると困難であるが爲めに、小形木船の新造は近年に至る迄も尙依然として衰へない。殊に今次の戰亂に伴ふ船腹缺乏と外國より鐵鋼材の輸入困難なるとに依りて、最近各地に於て大形木船の建造を見るに至つたが、之れは時局に伴ふ一の變調で到底永續すべきものでもなく、又目下建造中の木船も唯一時焦眉の急に應ぜんとするもののみで、餘り完全なる構造とは認められない。

明治十七年神戶小野濱造船所に於て朝日丸と云ふ約五百噸の鐵船が進水せられ、又海軍の橫須賀造船所でも明治十七八年の交に鐵鋼軍艦愛宕を造つた。是等が本邦鐵造船の初めである。次いで石川島造船所で姉妹

艦鳥海、小野濱造船所で摩耶が造られ、更に進んで鋼製軍艦の建造となり、横須賀造船所では明治十九年に高雄艦、同二十年に八重山艦、二十一年には四千五百噸の巡洋艦橋立次で秋津州、須磨明石の諸艦が起工せられた。長崎の三菱造船所や神戸の川崎造船所でも其後引續きて大阪商船會社其他の注文で多數の鐵及鋼鐵船が建造された。斯の如くして日本造船業は漸く進歩發達の緒に就いたが、然しながら日清戰爭が起る以前は、政府の經營する造船所でも民間で經營するものでも、皆規模の小なるもの許りで、大艦巨舶を新造することは勿論、之れを修繕する事さへも六ケ敷しい有樣であつて、其當時の最大商船たる三池丸（三千噸）などを修繕する船渠が無いので、横須賀海軍造船所まで持つて行つたものである。其頃から漸く海事發達の爲め、航海業と共に造船業を保護奬勵しなければならぬと云ふ輿論が唱へ出された。同時に海軍の方でも第一期の大擴張が實行され、明治二十二三年の交より吳、佐世保の各鎭守府に一つ宛の造船廠を設立する事になつた。就中吳鎭守府のものが設備も大きく、發達も早かつた。斯く漸く海事が隆盛ならんとする機運に向つた時、偶々日清戰爭が突發して、玆に益々造船海運の事業を促進するに至つた。

日清戰爭が始まると軍事上の必要から、商船の全部が徵集された。爲めに貨物の大停滯を來たしたので、其急に應ずる爲めに盛んに外國から古船を買入れて、之れを一般交通の便に供した。であるから日本の商船は戰爭の結果遽かに增大した。平和克復の後には戰後の經營として各般の事業が勃興したが、就中戰爭が與へた困難に鑑みて、海事の方面は特に一般の注意を惹き、航海業及造船業は國家の存立上是非急速に發達せしむることが必要と認められた結果、明治二十九年の帝國議會に於て、航海奬勵法、造船奬勵法の成立を見るに至つた。

斯樣にして幕末から徐々として發達し來たつた我造船業は、日清戰爭に由つて大革新を促されたのである。航海・造船奬勵法の實施と共に外國航路が或は新設さ

れ、或は擴張されて商船の需要が遽かに劇增した。一方海軍でも益々軍備の擴張を認め、大に軍艦の增加を企劃したが、內地の造船事業は其設備未だ不完全であつたが爲め、官民共に其供給を外國に仰がざるを得なかつた。則ち我海軍は英獨佛米の諸國に向て大小多數の軍艦を注文し、日本郵船會社も、大阪商船會社も、當時新たに設立された東洋汽船會社も、皆船舶を外國に注文した。同時に國內の官私立造船所も時運に促されて大擴張を來した。就中吳の海軍工廠には造船部以外に造兵部、製鋼部等を設けて大々的の擴張を行つた。

民間の造船所にも獎勵法の施行の結果として小型船舶の注文が殺到したが、此間に特筆すべきことは、日本郵船會社が英國に注文せる六千頓級貨客船と同型の常陸丸を三菱造船所で造らせた事で、之れ實に日本造船史上に一新紀元を劃したものである。戰前辛うじて千五百噸の須磨丸を造り得たに過ぎなかつた三菱造船所が、一躍して六千噸級の常陸丸を引受けたことも、又郵船會社が之れを三菱造船所に依賴したと云ふとも、共に大なる決心と獻身的覺悟とを要したに違ひない。本船の設計は全然英國に於て建造した同型船のものを受け繼ぎ、又顧問技師を新に外國から招聘して萬事に遺漏なからしめ、明治三十二年に至つて首尾能く竣工した。其完成に至る迄は日本の職工に果して斯の如き大船を製造し得るだけの技倆力量がある哉と內外から疑はれ、現に外板の鋲が充分に締まらないと云ふやうな疑問さへ起つたので、其の爲め英吉利のロイド船級組合からは特に經驗ある檢査員が派遣されたが、何處にも缺點は認められなかつたのみならず、外國製に比して何等遜色なしと證明された。之れが日本で大型の造船を始めた端緒である。(此常陸丸は不幸にして日露戰爭の當時、玄海灘に於て露艦の爲めに擊沈されて悲壯な最後を遂げた事は、世人の尙ほ記憶に存する所である。)此結果に依り我邦造船技術の進歩は弘く世界に紹介せられた。其後郵船會社は更に六千噸級の商船數艘を三菱造船所に注文し、神戶の川崎造船所も亦相當に大型船を建造した。次いで從來小型の造船のみをやつ

てゐた各造船所も、造船奬勵法の下に大型船の建造を始め出した。石川島造船所、大阪鐵工所などが其例である。斯ういふ有様で日清戰爭後俄に日本の海事が進步し、造船業も亦從て大いに發展した。北清事變の起つた時にも多少の影響はあつたが、然し造船業の上に大した刺戟を與へずに終つた。

尋で日露戰爭が始まつたが、此戰爭は日清の役に比して更に一層大規模の擴張を促した。當時我船籍にありし大型の商船は悉く軍用に徵發されて、忽ち輸送船腹の不足を生じた爲めに、外國より多數の古船が輸入せられ、民間の造船所は皆其改造修繕に忙殺された。海軍の方面では戰前から英國に注文してあつた鹿島、香取の兩戰艦も、英國が儼正中立を守つた爲めに日本に回航する事が出來なかつた。加之、初瀨、八島を初め戰艦巡洋艦の多くが水雷などの爲めに失はれて、我海軍力は一時に激減せられ、大に心配に堪へなかつた。其結果として大規模の造艦計畫を立て、內地に於て未だ曾て造つた事の無い甲鐵艦を建造するに至つた。卽ち先づ吳で一萬四千噸の巡洋戰艦筑波、橫須賀では一萬九千噸の戰艦薩摩の製造に着手したのであるが、何れも從來大型の軍艦を造つた經驗が無いので、非常の苦心を費したけれども成績は頗る良好で、續いて同型の戰艦及巡洋戰艦が多數に新造された。而して此大規模の軍艦製造に伴ふて、軍器の獨立を實行しやうとした。卽ち兵器、甲鐵板は全然內地で製造し、其他の船用品艤裝品も出來る限り內國製を採用する方針を執つたのである。之れに依つて海軍造船所を發展させると同時に、造船に必要なる各般の補助工業を盛んならしめやうといふのであるが、充分に此目的を貫徹することが出來て、今日の內地造船業獨立の基礎を造つた。

日露戰役が終局を告ぐると共に、戰後の經營として各般の事業熱が沸騰し、從つて海外航路の大擴張を促し、一層大型商船の必要を生じた。日清戰後にも同じく戰後の經營として、航路の擴張や大型商船補充の必要を感じたが、內地には其要求に應ずるだけの設備が具はつてゐなかつた爲めに、其供給を總て外國に仰だ

六、日本に於ては金利が高いこと。

七、工程能力の低いこと。技術が進んだ爲め勞力の節減は大分出來るやうになつたが、然し西洋の勞力と比較すると遙かに劣つて居る。即ち其工程能率は日本の一に對して英國の如きは約八割程高い。尤も賃金も西洋の方が數倍高いが、能率が高いから結局工費は大差ないのである。

右の如き理由で日本の船は高價であるから、社外船の船主は、多く必要の場合外國に其供給を仰いだ。外國船の輸入には高い關税を課すると云ふ保護的條件を附帶させてあるにも拘はらず、内地の新造船は竣工に長時日を要すると、船價の不廉との理由を以て其需要は尠かつた。尤も軍艦は軍器獨立の當然の結果として内地で建造されてゐた。之れが日露戰爭以後歐洲大戰爭の突發する迄の日本の狀態であつた。

日本造船業が斯かる狀態に在る時突發した今回の歐洲大戰亂は、斯業に甚大な影響を與へずには居なかつた。即ち戰亂に伴ふ世界的船舶の不足は、日本の造船業者、海運業者をして空前の大活躍を爲すに至らしめたのである。一面に於ては、從來主として東洋近海の航路に跼蹐してゐた、政府の命令航路に據らざる所謂社外船は、戰爭の開始と共に世界の各方面に縱横に活動するやうになつた。其盛況の結果として他の一面に於ては、非常に貨物船の不足を來たした。從來船腹の不足した場合には、外國から供給を仰いで一時の急に應じたが、今や其供給を受くべき國が戰亂の禍中にあるのを以て、夫れを補充するに途が無い。已むを得ず内地の造船所に多數の新造注文を發した。之れが爲め大小の造船所は非常の大繁忙を告げて、茲に我國造船界は未曾有の活況を呈し、昨大正五年中の造船高は二十五萬噸を越へた。之れを大正三年の十三萬餘噸、大正四年の九萬八千噸に比すれば其産額は殆んど二倍して居る。而して本年に入りて進水せるものは既に十數萬噸に達し、更に今後二ヶ年程の間に建造せられんとするもの約百萬噸である。之れを明治二十九年造船奬勵法實施以後大正四年に至る十九ヶ年間に該法に據り、内

地に於て建造せるもの四十九萬噸に比するときは、本邦造船業の進歩の迅速顯著なることは驚歎の外はない。加ふるに日露戰爭後軍器の獨立を唱道し、補助工業を奬勵した結果として、艤裝品船用品は內地でも出來るやうになつて居たが、戰爭と共に外國よりの輸入が全く杜絶した爲め、益々此方面の發達が促進され、今や鋼鐵材以外の船用品は充分に獨立自給する事の出來る迄に進歩した。

更に各造船所の生產能力に就て云へば、今次の盛況に應ずる爲め、從來の造船所は皆工場を擴張して、或は造船臺を增設し、或は修繕を專らとした工場も新に船臺を急設して造船業に手を染め、出來る限りの能力を發揮した。それでも尙ほ急に應ずる事が出來ないので、新たに造船所が急設されると云ふ有樣である。例之ば戰前には總噸數千噸以上の船も造る事が出來なかつた小造船所でも、現今では三千噸位迄の船舶を建造し得るやうになり、一千噸以上の船を建造し得る造船所及其船臺の數は、戰前十餘個所三十餘臺でありしものが、現在では約三十ヶ所九十臺を超へた。其進歩の急激なるは驚歎せざるを得ない。而かも此進歩に伴つて、各造船所の機械工具を初め一般の設備が改善されたると技術の熟達とによつて、造船期間が著るしく短縮するやうになつたから、造船能力に至つては更に一層增加して居る。若し前記の船臺が何れも全能力を發揮し、材料の供給に於ても毫も澁滯なきものとすれば、本邦一ヶ年の造船力は將に六十萬噸に達する。殊に從來は種々の型の船舶を造船した爲め仕事の段取りが困難であつたが、現今では建造するものが皆純粹の貨物船で同一の型式を有する簡單なものが多數なので、仕事の段取が速に着き、幾分か工費を節減する事が出來る上、竣工期間も亦非常に短縮されるやうになつたのである。元來貨物船の船型統一は其利益が極めて多いから、目下英米でも其實行に努めてゐるが、日本も今次の戰爭の結果其點に於て大に成功を收める事の出來るに至つたのは、造船工業の一大進歩と云はなければならぬ。工事期間短縮の實例を擧ぐれば、神戸の川崎

造船所に在ては、載貨九千噸位の船が龍骨を据へ付けた以後、約四ヶ月乃至四ヶ月半で進水され、戰爭前ならば如何しても一ヶ年半の日子を要したものが、僅々五ヶ月以内で竣工されるのを見ても、如何に工程の能率が增進したか分るであらう。

斯樣な有樣であるから戰前と戰後の今日を比較すると、其進歩の急激なる、洵に隔世の感がある。殊に需要の激增と船價の暴騰は實に古今未曾有で、戰前には到底夢想だもする事の出來ないものであつた。然しながら、之れは戰時の一時的變態であつて永續すべき性質のものでは無い。やがて平和の克復を見る曉には、忽ち常態に戻つて到底今日の如き注文の殺到を見る事は困難である。然うなつた場合には一時膨脹擴大された設備は如何なるであらうか。みじめな悲慘な日の必ず來る事は火を睹るよりも明かである。今日の盛況に醉つて徒らに前途を樂觀する事は許されない。戰亂の爲めに我國の造船業が驚くべき發達を遂げて、從來外國の[illegible]其他の造船材附屬品を充分に獨立自給する事が出來て、爲めに今日まで造船業の進展を阻害してゐた要素の一部が除かれて、恰かも斯業獨立の觀を呈するに至つたのであるが、然しながら之れは極めて表面的な現象であつて、尙ほ幾多の根本的缺陷は、依然として其舊態を更めずに殘つてゐる。就中造船上の最も主要の材料たる鐵鋼材の供給の極めて乏しい事は其最も重大なる缺陷である。日本では昨年二十五萬噸位の造船高を示してゐるが、それに用ひたる鐵鋼材は殆んど全部外國に供給を仰いたのである。現在建造中及び建造確定の商船は約百萬噸に達し、之れに要する四十四五萬噸の鐵鋼材は、皆外國の供給を仰いで、内地では僅かに二三萬噸位を製出するに過ぎない。戰時のどさくさ仕事には或はそれでも間に合ふかも知れないが、一旦戰火收まつて歐洲諸國が全力を擧げて其產業の恢復に努め、又他を顧る餘裕の無い場合には、材料を供給されない日本は大不利益を蒙つて、再び造船、海運業の經營難を喚ずるに至るべきは想像するに難くない。現に曩きにも英國の鐵材輸出禁止で、

婦人公論秋季特別號「家庭悲劇號」豫告

家庭悲劇論　文學博士　三宅雪嶺

（連載長編小說）

秘めたる戀　徳田秋聲

女人神聖　谷崎潤一郎

春宵記　小山内薫

十月一日發行（特價三十五錢）　中央公論社發行

婦人公論秋季特別號「家庭悲劇號」豫告

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

洛陽堂圖書秋季大特賣

□今回大方各位平素の御眷顧に酬ゆる爲め弊堂發兌圖書全部大割引特賣仕候間何卒御引立御賛上の榮を蒙り度伏して願上候
□期限九月十日より十月卅一日迄左は其一部にて詳細目録は御通知次第進呈可仕候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵税
△我等何を爲すべき乎	トルストイ	一、六〇	一、三〇	〇、一二
△我等何を信ずべき乎	同	一、五〇	一、二〇	〇、一二
△神人論	ソロイヨフ	一、二〇	、八〇	〇、〇八
△トルストイ民話集	塚本弘	一、一〇	、九〇	〇、〇八
△滅び行く宇宙及人類	兒玉昌	一、四〇	一、一五	〇、〇八
△おめでたき人（小說）	武者小路實篤	、六〇	、四五	〇、〇六
△世間知らず（同）	同	、八〇	、六五	〇、〇八
△生長（感想）	同	一、二〇	、九六	〇、〇八
△心と心（脚本）	同	一、〇〇	、八〇	〇、〇八
△彼が三十の時（同）	同	一、五〇	一、二〇	〇、〇八
△向日葵（同）	同	一、五〇	一、二〇	〇、〇八
△後に來る者に（感想）	同	一、六〇	一、二八	〇、〇八
△小さき運命（脚本）	同	一、二〇	、九六	〇、〇八
△ある青年の夢（脚本）	同	一、四〇	一、一二	〇、〇八
△留女（小說）	志賀直哉	一、〇〇	、七〇	〇、〇八
△銀（歌集）	木下利玄	一、〇〇	、五〇	〇、〇八
△蝙蝠の如く（小說）	有島生馬	一、〇〇	、七五	〇、一二
△彼等の運命（小說）	長與善郎	一、九〇	一、四〇	〇、〇八
△求むる心（感想）	同	一、二〇	、九〇	〇、〇八
△死の舞踏	ストリンドベルヒ	一、三〇	、九六	〇、〇八
△痴人の懺悔	同	一、六〇	一、三〇	〇、〇八
△自分達二人	小泉鐵	一、三〇	、六〇	〇、〇八
△三の勝利（上卷）	同	一、二〇	、六〇	〇、〇八
△ノア、ノア	同	一、〇〇	、七〇	〇、〇八
△ストックホルム殉教者	ストリンドベルヒ	、五〇	、二五	〇、〇四
△スタルコッド	同	、五〇	、二五	〇、〇四
△ロダンの藝術觀	木村莊八	一、五〇	一、三〇	〇、一二
△藝術上の理想主義	赤木桁平	一、三〇	、九〇	〇、〇八
△ハイネ評傳	藤浪由之	一、〇〇	、六〇	〇、〇八
△ヘッベル傑作集	吹田順介	一、六〇	一、一〇	〇、一二
△ドストイエフスキー	新城和一	一、三〇	、九〇	〇、〇八
△近代音樂家評傳	ロマンロラン	一、四〇	一、〇〇	〇、〇八
△ベエトフエンとミレエ	同	一、五〇	一、二〇	〇、〇八
△ミケルアンヂエロ	同	一、八〇	一、五〇	〇、一二
△茶話	薄田泣菫	、六〇	、四五	〇、〇六
△文學に現はれたる我國民思想の研究 貴族文學の時代	津田左右吉	二、〇〇	一、七〇	〇、一二
△同 武士文學の時代	同	二、五〇	二、一二	〇、一二
△本然生活	加藤一夫	一、〇〇	、五〇	〇、〇八
△文藝復興の三大藝術家	中山昌樹	一、〇〇	、五〇	〇、〇八
△泰西の繪畫及彫刻 全五卷	小泉鐵	各冊一、〇〇	一、三五	〇、一二
△アダム以前	ジャクロンドン	、八〇	、五〇	〇、〇八
△藝術の革命	木村莊八	一、七〇	一、四〇	〇、一二

東京市麹町區
平河町五丁目
洛陽堂
電話番町四二五六
振替東京二〇九一四



縁緑綺談

朝妻双紙

村松梢風

一

明治卅年の、秋も餘程に深み渡り、銀砂子を蒔いたやうな星の間から湧いて來るそよ風が、ひら〳〵と柳の葉を瓦斯燈の光の中に躍らせたり、道ゆく人の懐をひやりと掠めて通つたりする物靜かな夜、まだ露店の盛んな銀座通の煉瓦地を、一人の年とつた西洋人が、泣き喚く女の子を襷に掛けて洋服の上に負ひながら、あちらこちらと歩き廻つてゐた。

往來の人々は、不思議さうな眼を向けて振り返つた。

西洋人は、脊中で暴れる子に取られない要心と見え、黒のソフト帽の上からタオルを掛けて、頤のさきでしつかり結んでゐる。圓く刈り込んだ頤髯には少しく白髪が混つてゐるが、顏の色の艶々した、眼付の優しい、軀の小造りな男である。脊中の子は、お河童にした三四歳位の日本人の子で、美しい友禪のちやんちやんこを着せられてゐる。

子どもは、圓々肥つた顔を眞赤にして、有らん限りの聲をあげて泣いた。そして時々思ひ出したやうに「お内――母ちやん――」など、云ひながら、一生懸命にふん反り返つたり、ばた〳〵足で蹴つて見たり、帽

のである。然るに日露戰爭に伴ふ大擴張は、殆んど日本內地の造船所だけで其需要を滿たす迄になつた。東洋汽船會社は北米航路改善の爲めに天洋丸級（一萬三千噸）の大客船を三菱造船所に注文した。從來は漸く六千噸級の船舶を造つてゐた三菱造船所が、一躍して一萬三千噸級の船を引受け、而かも非常の好成績を擧げ得たのである。天洋丸は在來の內地製造のものと違つて、其構造設備に於ても、速力に於ても、歐羅巴先進國の大客船と比較して毫も遜色が無いのみか、其機關の如きは當時歐米諸國でも未だ餘り流行してゐなかつたタービン式を採用し、汽罐には液體燃料を使用せるなど、頗る斬新の設計に成つたもので、東洋汽船會社の英斷と三菱造船所の勇氣とは、寔に敬服するに餘りある。其他郵船會社大阪商船會社でも各々其航路の擴張改良の爲めに大形の客船を內地の造船所に注文したので、民間造船所は皆非常の繁忙を極め、其結果としてやがて著るしい進步を齎した。斯樣にして日本の造船上の技倆が歐米各國に紹介され、其技術に於て毫も遜色の無いのを承認されるやうになつたのも此頃からであつた。明治二十九年造船獎勵法が實施されて以來短日月の間に、如是の偉大にして迅速な進步を見たのは洵に嘆賞すべきである。

然しながら內地で新造された商船は、概ね政府の受命航路に用ひられて、自由航路による一般貨物の運輸には、外國から購入した古船を改造修繕したものを以て之れに充てた。此の理由は是等の不定期貨物船を運用する民間の社外船主には、十分なる經濟上の基礎が無かつた爲め、自然僅少な資金で早く利益を收めたいと云ふ眼前の利害に趁はれて、廉價である處より西洋から古船を購入して使用したのである。他に補助を受くる途の無い船主は、却々新造船を注文する餘裕は有たなかつた。加之、偶々新造船の必要ある場合でも、內地の製作による船舶は、外國のそれと比較して竣工期間が遲緩で、且つ造船費が不廉である爲めに其供給を外國に仰いだのである。政府の命令航路に就役する船舶には、政府から一定の補助金が下附される。而し

て若し日本建造のものを用ひずに外國製の船を採用すると、其補助金は半減されるのである。然るに自由航路による船は、何等政府から恩惠を施されてゐないから、自然內地製に比して廉價で且つ竣工の迅速である利便の爲め、新造船をも外國に注文したのである。畢竟日本の造船術は、技術に於ては歐米先進國に遜色の無い程進歩はしたが、一の產業として外國と競爭する時は、遙かに夫れに及ばなかつた。

日本建造の船舶が外國製のそれに比して高價なる理由には種々なる原因もあるが、其主要なるものを列擧すれば、

一、材料を得るの困難なことである。政府は造船用原料として、鋼鐵材の內地獨立自給の必要を認め製鐵所を設けたけれど、技術の幼稚なると其產額の少なきと價格の不廉なるとで到底需要を充たすことが出來ない。已を得ず外國から高い運賃と關稅を拂つて不廉な材料を輸入するのである。政府から下附される奬勵金は唯纔かに運賃及海關稅とを相殺する位に過ぎない。

二、造船に必要なる凡ての艤裝品船用品等は、內地の補助工業が幼稚なる爲め、外國から良いものを輸入する。之れに對しても多額の運賃及關稅を要すること。

三、注文される新造船の船形が一定してゐない爲め、夫れ〳〵の注文に應ずるには如何しても大規模の設備が必要となる。從て設備費の增大を來たすが、而かも其割に注文數量が尠い爲め、各一般に對する經常費の割當てが過大となるを免かれないこと。

四、新造船の注文が乏しい爲め、造船所自ら造船以外の事業を起すこと。其の爲めに諸般の設備を要するから、それだけ資本の固定を來たすのである。

五、船舶建造に要する各般の附屬品は、外國では各専門の製造所を有するが、我國では未だ分業組織が充分發達せざる爲め、細末なものまで造船所で一切製造せなければならない。爲めに各般の設備を要するので、之れがまた資金の固定を誘致する。

六、日本に於ては金利が高いこと。

七、工程能力の低いこと。技術が進んだ爲め勞力の節減は大分出來るやうになつたが、然し西洋の勞力と比較すると遙かに劣つて居る。即ち其工程能率は日本の一に對して英國の如きは約八割程高い。尤も賃金も西洋の方が數倍高いが、能率が高いから結局工費は大差ないのである。

右の如き理由で日本の船は高價であるから、社外船の船主は、多く必要の場合外國に其供給を仰いだ。外國船の輸入には高い關稅を課すると云ふ保護的條件を附帶させてあるにも拘はらず、内地の新造船は竣工に長時日を要すると、船價の不廉との理由を以て其需要は尠かつた。尤も軍艦は軍器獨立の當然の結果として内地で建造されてゐた。之れが日露戰爭以後歐洲大戰爭の突發する迄の日本の狀態であつた。

日本造船業が斯かる狀態に在る時突發した今回の歐洲大戰亂は、斯業に甚大な影響を與へずには居なかつた。即ち戰亂に伴ふ世界的船舶の不足は、日本の造船業者、海運業者をして空前の大活躍を爲すに至らしめたのである。一面に於ては、從來主として東洋近海の航路に跼蹐してゐた、政府の命令航路に據らざる所謂社外船は、戰爭の開始と共に世界の各方面に縱橫に活動するやうになつた。其盛況の結果として他の一面に於ては、非常に貨物船の不足を來たした。從來船腹の不足した場合には、外國から供給を仰いで一時の急に應じたが、今や其供給を受くべき國が戰亂の禍中にあるのを以て、夫れを補充するに途が無い。已むを得ず内地の造船所に多數の新造注文を發した。之れが爲め大小の造船所は非常の大繁忙を告げて、玆に我國造船界は未曾有の活況を呈し、昨大正五年中の造船高は二十五萬噸を越へた。之れを大正三年の十三萬餘噸、大正四年の九萬八千噸に比すれば其產額は殆んど二倍して居る。而して本年に入りて進水せるものは既に十數萬噸に達し、更に今後二ヶ年程の間に建造せられんとするもの約百萬噸である。之れを明治二十九年造船奬勵法實施以後大正四年に至る十九ヶ年間に該法に據り、内

地に於て建造せるもの四十九萬噸に比するときは、本邦造船業の進歩の迅速顯著なること驚嘆の外はない。加ふるに日露戰爭後軍器の獨立を唱道し、補助工業を奬勵した結果として、艤裝品船用品は內地でも出來るやうになつて居たが、戰爭と共に外國よりの輸入が全く杜絕した爲め、益々此方面の發達が促進され、今や鋼鐵材以外の船用品は充分に獨立自給する事の出來る迄に進歩した。

更に各造船所の生產能力に就て云へば、今次の盛況に應ずる爲め、從來の造船所は皆工場を擴張して、或は造船臺を增設し、或は修繕を專らとした工場も新に船臺を急設して造船業に手を染め、出來る限りの能力を發揮した。それでも尙ほ急に應ずる事が出來ないので、新たに造船所が急設されると云ふ有樣である。例之ば戰前には總噸數千噸以上の船を造る事が出來なかつた小造船所でも、現今では三千噸位迄の船舶を建造し得るやうになり、一千噸以上の船を建造し得る造船所及其船臺の數は、戰前十餘個所三十餘臺でありしものが、現在では約三十ヶ所九十臺を超へた。其進歩の急激なるは驚嘆せざるを得ない。而かも此進歩に伴つて、各造船所の機械工具を初め一般の設備が改善されたると技術の熟達とによつて、造船期間が著るしく短縮するやうになつたから、造船能力に至つては更に一層增加して居る。若し前記の船臺が何れも全能力を發揮し、材料の供給に於ても毫も澁滯なきものとすれば、本邦一ヶ年の造船力は將に六十萬噸に達する。殊に從來は種々の型の船舶を造船した爲め仕事の段取りが困難であつたが、現今では建造するものが皆純粹の貨物船で同一の型式を有する簡單なものが多數なので、仕事の段取が速に着き、幾分か工費を節減する事が出來る上、竣工期間も亦非常に短縮されるやうになつたのである。元來貨物船の船型統一は其利益が極めて多いから、目下英米でも其實行に努めてゐるが、日本も今次の戰爭の結果其點に於て大に成功を收める事の出來るに至つたのは、造船工業の一大進歩と云はなければならぬ。工事期間短縮の實例を擧ぐれば、神戶の川崎

造船所に在ては、載貨九千噸位の船が龍骨を据へ付けた以後、約四ヶ月乃至四ヶ月半で進水され、戰爭前ならば如何しても一ヶ年半の日子を要したものが、僅々五ヶ月以内で竣工されるのを見ても、如何に工程の能率が增進したか分るであらう。

斯樣な有樣であるから戰前と戰後の今日を比較すると、其進步の急激なる、洵に隔世の感がある。殊に需要の激增と船價の暴騰は實に古今未曾有で、戰前には到底夢想だもする事の出來ないものであつた。然しながら、之れは戰時の一時的變態であつて永續すべき性質のものでは無い。やがて平和の克復を見る曉には、忽ち常態に戻つて到底今日の如き注文の殺到を見る事は困難である。然うなつた場合には一時膨脹擴大された設備は如何なるであらうか。みじめな悲慘な日の必ず來る事は火を睹るよりも明かである。今日の盛況に醉つて徒らに前途を樂觀する事は許されない。戰亂の爲めに我國の造船業が驚くべき發達を遂げて、從來外國の給供に俟つた艤裝、船用其他の造船附屬品を充分に獨立自給する事が出來て、爲めに今日まで造船業の進展を阻害してゐた要素の一部が除かれて、恰かも斯業獨立の觀を呈するに至つたのであるが、然しながら之れは極めて表面的な現象であつて、尙ほ幾多の根本的缺陷は、依然として其舊態を更めずに殘つてゐる。就中造船上の最も主要の材料たる鐵鋼材の供給の極めて乏しい事は其最も重大なる缺陷である。日本では昨年二十五萬噸位の造船高を示してゐるが、それに用ひたる鐵鋼材は殆んど全部外國に供給を仰いたのである。現在建造中及び建造確定の商船は約百萬噸に達し、之れに要する四十四五萬噸の鐵鋼材は、皆外國の供給を仰いで、內地では僅かに二三萬噸位を製出するに過ぎない。戰時のどさくさ仕事には或はそれでも間に合ふかも知れないが、一旦戰火收まつて歐洲諸國が全力を擧げて其產業の恢復に努め、又他を顧る餘裕の無い場合には、材料を供給されない日本は大不利益を蒙つて、再び造船、海運業の經營難を嘆ずるに至るべきは想像するに難くない。現に曩きにも英國の鐵材輸出禁止で、

婦人公論秋季特別號『家庭悲劇號』豫告

家庭悲劇論　文學博士　三宅雪嶺

（連載長編小説）

秘めたる戀　德田秋聲

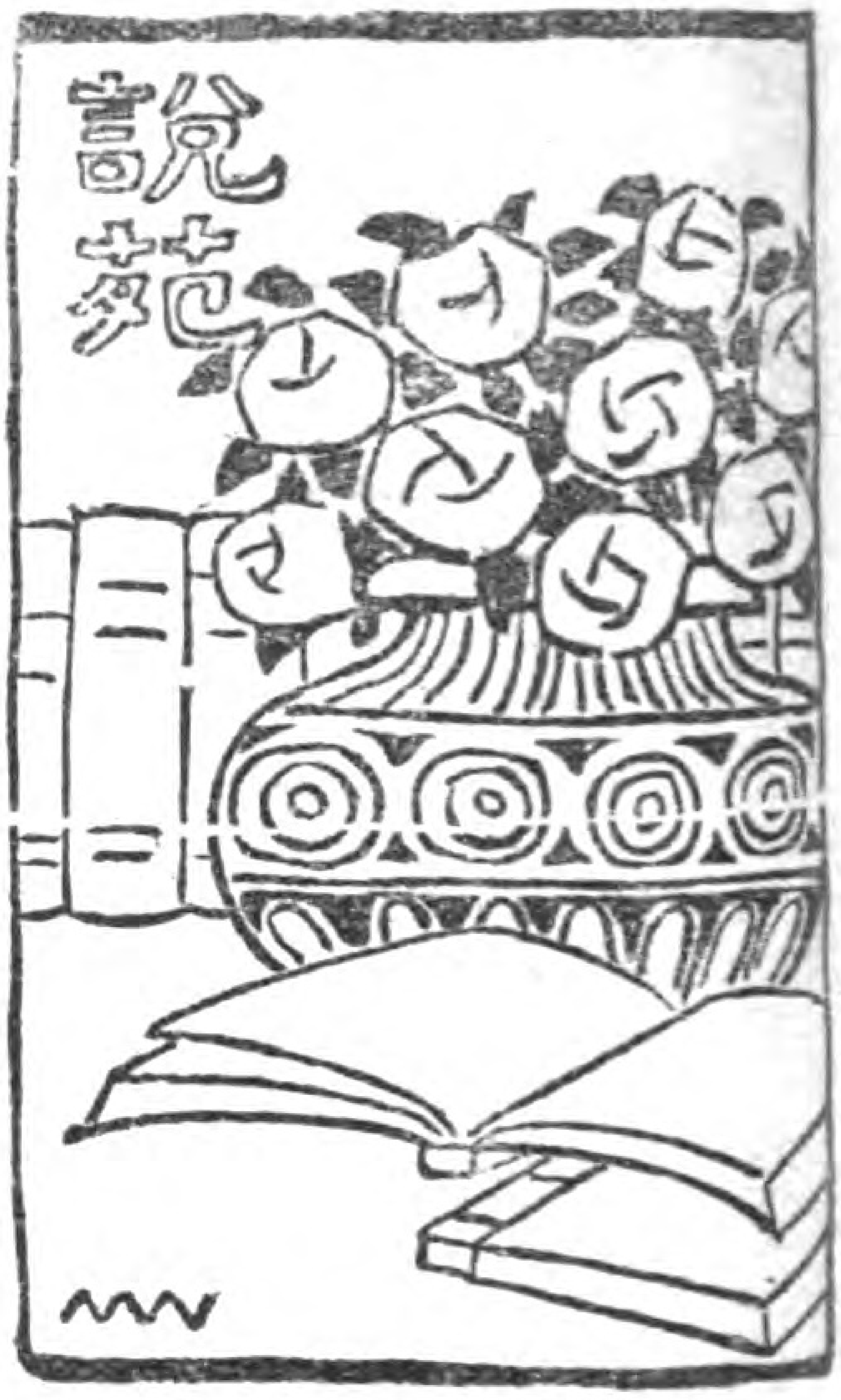
女人神聖　谷崎潤一郎

春宵記　小山内薫

十月一日發行（特價三十五錢）

中央公論社發行

婦人公論秋季特別號『家庭悲劇號』豫告



綠緣綺談

朝妻双紙

村松梢風

一

明治卅年の、秋も餘程に深み渡り、銀砂子を蒔いたやうな星の間から湧いて來るそよ風が、ひら〳〵と柳の葉を瓦斯燈の光の中に躍らせたり、道ゆく人の懷をひやりと掠めて通つたりする物靜かな夜、まだ露店の盛んな銀座通の煉瓦地を、一人の年とつた西洋人が、泣き喚く女の子を襷に掛けて洋服の上に負ひながら、あちらこちらと歩き廻つてゐた。

往來の人々は、不思議さうな眼を向けて振り返つた。

西洋人は、脊中で暴れる子に取られない要心と見え、黑のソフト帽の上からタオルを掛けて、頤のさきでしつかり結んでゐる。圓く刈り込んだ頤髯には少しく白髮が混つてゐるが、顏の色の艶々した、眼付の優しい、軀の小造りな男である。脊中の子は、お河童にした三四歲位の日本人の子で、美しい友禪のちやんちやんこを着せられてゐる。

子どもは、圓々肥つた顏を眞赤にして、有らん限りの聲をあげて泣いた。そして時々思ひ出したやうに「お內――母ちやん――」など〻云ひながら、一生懸命にふん反り返つたり、ばた〳〵足で蹴つて見たり、帽

子の上から西洋人の頭をぴしや〳〵叩いたりして暴れた。それを不器用に抱へたり搖すつたり、老西洋人は途方に暮れた表情をして「ダンブン〳〵」と賺しながら歩くのであつた。

と、ある骨董類を並べた露店の前で、彼の西洋人は足を停めた。貫入や緒じめの玉類、古時計、鎖、古錢、そんな物を綺麗に並べた向ふには、紫檀の臺、花瓶、或は古びた佛像や怪しげな額などが、手際よく飾つてある。

彼れは、向ふの隅にある西洋人形を指差しゝて、商人の手から受取ると、

「君江さん、お人形上げませうね」と稍ゝ異しい發音で云ひながら、それを高く差し上げて脊中の子に持たせてやるのであつた。

露店の商人に金を拂つて、またもや老西洋人は「ダンブン〳〵」と云ひながら歩き出した。子どもは人形に氣を奪られて暫らくの間泣き止んでゐたが、何時の間にかそれを抱きしめたまゝ、西洋人の脊中に頬を押し當てゝ無心な睡りに落ちてゐるのであつた。

其の時の話を、君江はよくワットソン老人から聞かされた。

「君江さんは憤つてわたしの脊中へ小便を掛けた」と云つてワットソンは笑ふのであつた。

それは君江を自分の家に連れて來たばかりの頃であつたが、是非共二三日東京に滯在しなければならぬ用事が出來ると、ワットソンはまだ自分に懷きもせぬのに君江を置いて行くのを惜しがつて東京迄連れて行き、築地のホテルに泊つた最初の夜のことであつた。

銀座の露店で買つて貰つた人形を君江は何時迄も大切にして持つてゐた。丈は一尺五寸ばかりで、古風な型の服を着て薔薇の花の飾りをつけた羅紗の帽子を阿彌陀に冠り、そして赤皮の靴をはいてゐる。額に渦を巻いてゐる金色の柔い髮、くぼんだ眼、林檎のやうに圓い頬。見るから愛らしい其の人形は、西洋でも餘程古い時代の作で、骨董の鑑識に長けたワットソンの言葉に依ると、それは千八百年頃の伊太利出來であると

いふことであつた。
「エルザ」といふのが、ワットソン老人によつてつけられた人形の名である。

二

君江の生れた家は、代々紀州家の御典醫であつた。祖父の土方宗耆も、最初は醫者になるつもりで長崎へ行つて蘭學を修業したのであつたが、半途にして志を變へ、當時洋式兵法の大家として鳴り響いてゐた江川太郎左衛門の門下に走つた。それは德川の礎が漸く搖ぎ初め、世間の物情騷然として事々に風雲の急なるを想はせられる時世にあたり、碌々として長袖の身を以て終ることを、性來覇氣に富んだ宗耆は飽く迄潔しとしないからであつた。

宗耆は數年の間江川の敎へを蒙つてゐたが、軈て業を了へて藩に還る時分には、坦庵門下でも屈指の砲術家として人に許される程になつてゐた。何しろ世間が長い夢から醒めかけて矢鱈に新規の物が歡迎され、所謂人材登庸が行はれはじめた時であるから、宗耆はお抱醫者の家柄から、一躍して鐵砲方の隊長に拔擢されたのであつた。

或る年の夏、宗耆は急用を帶びて日の暮れ方に江戸の屋敷を發ち、夜徹し東海道を上つて行つた。其夜は朧月夜で、田面をつたふ涼風が、心地よく鬢の毛を吹いて渡つた。神奈川へかゝる頃はあだかも眞夜半で、晝はさしも賑はふ街道も狗の子一匹通らぬ程の淋しさであつた。

其の時向ふから來る人影を宗耆は認めた。近づいて見ると、それは矢張り大小を差した侍であつたが、何故かこの快い夜風さへ憚るやうに、深編笠で面體を包み、道の片端を急ぎ足に行き過ぎるのであつた。「怪しい者に違ひない」と宗耆は直感的に覺つた。

「もし、お武家」

いきなり後から聲を掛けると、件の侍は、何と思つたか一目散に驅け出した。宗耆は續いて追つ驅けたが、もの丶半町と行かぬうちに追ひ着いて、逃げてゆく侍の刀の鐺をぐつと摑んだ。續いて編笠に手が掛つたと

思う間もなく、忽ち相手の顔が蒼白い月明りに照し出された。

「あッ！」と聲を立てゝ、宗耆は思はず後へ退つた。彼れが驚いたのも無理はない。それは侍風に姿をやつしたまだ若年らしい異人なのであつた。

異人は早口に叫びながら兩の手を高く差し上げて敵對せぬ容子を示した。宗耆は其の異人を道端の松の根方に連れて行つて、手眞似で其處へ腰を掛けさせた。

「お前の本國は何國であるか、それから此の眞夜半而も侍の姿などして通行するのはどういふ譯であるか」といふ意味のことを、宗耆は長崎で覺えた怪しい蘭語で訊き始めた。

「自分は決して日本の國家に讎をする者ではない」と、若い異人は恐怖に戰きながら云ふのであつたが、宗耆が己を害する者でないことが分つて來ると漸う〳〵落着いて、可成り詳しい身の上話などをするのであつた。

異人は名を「ウイリアム・ワットソン」と云つて、英吉利國スコットランドの小さな田舍町の生れであつた。彼れは州立の大學を卒業してから暫らく學校の敎師をしてゐたが、近頃新聞や雜誌で熾んに紹介され初めた東洋の「日本」といふ島國の事情に限りない興味を持ち出して、最初のうちは書物や地圖などで研究してゐたが、終ひには矢も楯も耐らなく「日本」へ行つて見たくなり、到頭敎師を辭職して印度通ひの汽船に水夫を志願して乘り組んだ。其の後一年ばかり、東洋の港々を渡り歩いて、漸う〳〵横濱に上陸することが出來たのは今から半年ばかり前のことであつた。爾來横濱に滯留して、大學に居る時習つた和蘭陀語の通辯をしたり、時には商館の書記などに傭はれたりして暮してゐる。今日も實はそんな方面の用事を頼まれて至急江戸迄行くところであるが、彼の攘夷派の亂暴を避けたるために、斯様に姿を變へて道中をしてゐる譯である、——

「わしは攘夷派ではないから安心するがよい」と、宗耆は高らかに笑つて云つた。

彼れは此の若い異人の意氣を面白く感じながら、自分の身分などを話してきかせた末に「次第によつては主君に願つて、特別の庇護を加へてやることが出來るかも知れないから、近いうちに江戸の屋敷へ訪ねて來るがいゝ」と云うと、異人は非常に喜んで「必ず行くから頼む」と固く〳〵宗耆の手を握りしめるのであつた。軈て二人は反對の方角に向つて、廣い寂しい松並木の道を歩き出した。

三

ウイツアム・ワットソンは、土方宗耆の斡旋を得て、内密に紀州藩の保護を受ける身になつた。是れが爲めに彼は、在留外人の間に於ける一種の勢力家になることが出來た。其の後數年間、明治維新の際まで、彼れは盛んに闇中飛躍を試みた。當時彼れの行つた運動が、間接に日本の政治に及ぼした影響は決して鮮少なものではなかつた。かの佐幕派の重鎭たる某々の藩が、×國の公使から莫大の軍用金を借り入れたことなどは、史家の間に於て公然の秘密とされてゐる事實であるが、其の際裏面に隱れて兩者の間を奔走したワットソンの事績を、見遁すことは出來ないのである。

明治の代になつてから、暫らく東京で宣教師をしてゐた時代もあつたが、それは永い間のことではなく、彼れは其の頃開けはじめた平沼に邸宅を構へて、まだ餘り人の手を染めぬ石鹸製造の事業を始めた。機敏なワットソンは、其の時すでに巨萬の富を作つてゐた。彼れは實に夥しく澤山の書畫骨董を所藏してゐたが、それだけでも何れ程の價格の物か分らないと云はれたゐた。それは例の軍用金を貸付ける際、諸大名から抵當に取つた品物であつたが、それをワットソンが保管してゐるうち、急轉直下の勢ひで時世一變して終ひ、双方とも表立てゝ云ひ出すことが出來なくなつて、何時とはなしにワットソンの所有物の如くになつて終つたのであつた。

赤手空拳で祖國を飛び出して來たワットソンが、着々として夢の世界を實現してゆく間に、一方土方宗耆は、遂に何物をも摑むことが出來なかつた。それは維

新の際に於ける紀州藩の立場が、是非とも中立的（尠とも表面上）の態度を執らなければならない事情の下にあつたゝめに、勢ひ其の家臣たる者は、如何に有能の士と雖も風雲に乘ずる機會を得なかつたといふことも、宗耆が遂に碌々として終はらねばならなかつた一面の理由である。兎に角、宗耆は王政復古と共に一介の士族となり、止むを得ず、一旦捨てた醫術に依つて生計を立てなければならない身の上になつてゐた。彼れがワットソンの肝いりで、横濱で醫者を始めたのは明治十二三年頃のことであつたが、其の後いくばくもなく宗耆は此の世を去つた。跡目は長子の宗衞が襲つて、矢張り父の業を繼いでゐた。

君江は宗衞の三人目の子に生れた。彼女が生れた時は巳年の巳月巳の日であつた。生れた時、彼女は絲のやうな前齒を持つてゐた。それが宛も蛇の齒のやうだと云つて家内の者は氣味惡がつたが、いくら拔いてやつても、あとから／＼と同じやうな齒が生へて來た。

或る時、高島嘉右衞門翁が、ぶらりと宗衞の家へやつて來た。高島翁と宗耆とは舊い友人の間柄であつたが、宗耆が死んでからも、時々思ひ出したやうに遊びに來たりするのであつた。其の頃君江は漸く歩けるやうになつたばかりであつた。高島翁は、門の脇に遊んでゐる君江の人相をつく／＼眺めてゐたが、驚て眉間に太い／＼皺を寄せた。

「宗衞さん、此の子は智慧の優れた好い子ぢやが、どうも行末が思はしくない。成人したら、何か家の寶物を此の子の身につけて置きなさるがよい」と、翁は君江の頭を撫でながら云つた。

君江がワットソンの處へ娘分にやられたのは四歳の時であつた。其の時宗衞は、曾て高島翁に云はれた言葉を思ひ出し、家重代の小柄を鑄潰して江の島辨才天の像を作らせ、それを娘の守り袋に入れてやつたのであつた。

四

其の頃の平沼は、まだ現今の三分の一も開けてゐなかつた。漸く一側並びに出來た町の後には廣漠とした

埋立地が展がつて、其の間を、汚い小川が幾筋も流れてゐたり、處々に殘つてゐる蘆の茂つた沼ではいつも葭切などが鳴いてゐた。ワツトソンの家はその町端れにあつた。嚴めしい赤煉瓦の門内には櫻や楓の植込が一杯に技を擴げて、其の間から洋館の白壁がチラ〱と透けて見えた。

ワツトソンの家族は、彼れが平沼に移り住む當時、千葉縣のある酒造家から迎へた妻と、其の妹のお林といふ妻、お林の連れ子の修三、ワツトソンの處へ來てから生んだ桂二、それに君江と主人とで六人、そのほかいつも二三人の召使が居た。

京濱間にはじめて汽車といふものが出來た頃、當時の何にも知らぬ人達は、わざ〱動いてゐる汽車に觸れたりして、思はぬ大怪我を招くのであつた。ワツトソンの妻も其の一人で、彼女は汽車に撥ね飛ばされて以來、ふた眼と見られぬ醜い顏になつて終つた。彼女がワツトソンのために、乳呑子の修三を抱えて實家に戻つてゐたお林を連れて來たのもつまりそんな譯からであつた。

お林が桂二を生んだのは、ワツトソンの處へ來てから三年目であつたにも關らず、生れた桂二が純粹の日本人であるといふことで、其の時可成り紛紜が持ち上つた。しかしそんなことは疾うの昔忘れて終つたやうな顏をして、お林は姉に代つて、一家の主婦として振舞つてゐた。彼女は段々肥つて來て、年よりは廿も若く見える顏に、いつも大きな束髮など結つてゐた。君江は其處から近い處にある學校へ通つた。それは縣立の學校で、小學校と、高等女學校と、女子師範とが、皆同じ校舍の中にあつた。同じ様な姿をした女生徒の中でも、愛くるしい君江の姿が、追々際立つて人の眼を引くやうになつた。

ワツトソンは、晩年石鹸の製造を止めて、大抵江の島の別莊に起臥してゐた。彼れはずつと以前一度祖國へ歸つたことがあつたが、直きに日本へ戻つて來た。久し振りで祖國を見た時の感想などを聞く人があると、彼は何故か厭な顏をして默り込んで終ふのであつ

た。

ワットソンが君江を可愛がることは一と通りでなかつた。何處へ行くにも君江を連れて出掛けた。お下げにして華美な西洋服を着た君江が、小鳥のやうに飛んだり跳たりして行く後から、鳥打帽を冠つて太い杖を持つたワットソンが、にこ〳〵笑ひながら隨いて步くのを人々は始終見た。土曜日には、必ず君江を連れて江の島へ行つた。別莊は山の頂にあつて、其處からは海も町も一と目に見下した。其の邊にはワットソンの持つてゐる地所が澤山あつた。

「君江さんが大きくなると、江の島の財産をみんな上げますよ」

ワットソンはよくそんなことを云つたりした。

ワットソンの君江に對する愛情が尋常でないのを、お林は何より不快に感じてゐた。

「孫つてもないあんな子供を、一體どうしようといふのだらう」と、お林は時々忌々しさうに陰口を利くのであつた。

五

お林の連れ子の修三が英國から歸つて來たのは、君江が女學校の三年になつたばかりの時であつた。

修三は廿二から廿九の年まで、足掛け八年を英國で暮して、彼地で冶金學を研究して來たと云つたが、歸朝してからは一向さういふ方面の仕事に携はる樣子もなかつた。彼れは女のやうに柔い皮膚と艶々しい髮の毛を持つた男であつた。

君江を連れて來たのは、ゆく〳〵修三の妻にするつもりであつたから、お林や君江の兩親などは、今でも其のつもりでゐるらしかつた。

君江は、最初のうちはそんな話を聞かされると、恥しいやうな嬉しいやうな氣がしてゐたが、段々修三の性行が解つて來るに從つて、修三に對する考が違つて來た。

修三は年中劇場やホテルのやうな處ばかり遊び步いてゐて、身持の惡いことは一と通りでなかつた。歸朝してから一年と經たぬ間でも、彼れが關係した女の數

は餘程澤山に上つてゐた。それが殆んど素人ばかりで、中には身分の高い家の令孃や夫人なども交つてゐた。

彼れは、美貌と、地位と、獨特の交際術とを利用して、女の愛を樂しむだけ樂しんで終うと、蜜を吸ひ盡した蝶が仇花へ飛んで行くやうに、惜氣もなく次の戀へと移つて行く男であつた。

幼い時分兄妹同樣に育てられて親しみ過ぎてゐるうへ、まだ白粉けもない君江のことなどは、修三はてんで問題にしてゐないやうであつた。

「君ちやん、いゝ物を見せて上げるからお出で」

修三はよくそんなことを云つて君江を自分の居間へ連れて行き、女の寫眞や手紙などを出して見せた。西洋で關係したといふ女の寫眞だけでも箱に一杯あつた。

「どうしても一緒に日本へ行くと云つて困つたから、アメリカへ廻つて歸るのを、東洋行の汽船へ乘ると云つて、欺して置いてきぼりを食はせてやつた」

そんなことを云つて修三は面白さうに笑つた。それは、最後に英國で關係した女で、その父親は學校の教師をしてゐたと云つた。寫眞で見ると一寸日本人のやうな眼つきをした、內氣らしい娘である。

「そんなことして可哀相ぢやなくつて？」

「可哀相だつて仕方がないぢやないか、そんなお荷物を負(しよ)つて來ては—」

「それくらゐなら初めから手を出さなけりやいゝのに—」

「それはまだお前などには解らないのさ。男といふものはね、誰でもさうは行かないものなんだ」

「なんといふ薄情な男だらう？」と思ひながら君江は、女のやうに優しい修三の顏を見詰めた。

そんなことが度重なるにつれて、君江は純粹な處女の感情から、修三に對して憎惡の念をさへ抱くやうになつた。

六

君江には學校の友達で親友が一人あつた。其の名は山村芳子、伊勢の津の生れで兩親も兄妹(けうだい)もない氣の毒

な身の上、矢張り同郷出身の伊澤といふ辯護士の家に寄食して、片手間には他家の家庭教師などしながら、同じ學校ではあるが師範の方へ通つてゐた。芳子は大して優れた美人といふ譯ではないが、圓顔で眼元の凉しい、そして束髪に取つたくせの好い髪（かみのけ）が房々と眞白い額や襟足にかゝる具合が、妙に年齢よりは仇めいて見える。其の上一體內氣な性ではあるが、子供の時分から他人の手にかゝつて苦勞をしてゐるだけに、何處ともなく人ざはりのよいところを持つてゐた。

二人が仲善になつたのは一寸した動機からであつたが、今では學校へ行くにも歸るにも、運動場に居る時でも、必ず手を繋ぎ合つてゐなければ氣が濟まない。そして互に他愛のないことでも語り合つて、泣いたり笑つたりするのが何よりの樂みである。こんな風で、芳子は自然ワットソン一家の者とも懇意になつた。修三と三人でオルガンやヴイオリンの合奏をして遊び暮したり、日曜日には君江と二人で江の島の別荘へ行つたりした。

二人が卒業する前年の暑中休暇の時、修三と君江は芳子をも仲間に入れ、三人連れで鹽原へ避暑に行つた。

晝中は大抵宿に閉ぢ籠つて、骨牌をして遊んだり、修三に西洋の芝居や小説の話を聞かせて貰つたりして暮した。太陽が、直ぐ背後（うしろ）を圍んでゐる大きな山の蔭に落ちかける頃から、三人はよく揃つて散歩に出た。滴るやうな翠の山、岩を嚙んで奔流する谷川、つゞら曲りの山路、總ての景色が物珍らしくて、君江と芳子は、國語の教科書にあつた紅葉山人の鹽原紀行の文章などを思ひ出しながら歩いた。狹い溫泉町で、三人の姿は特に人の眼を引いて見えた。

君江は、平常寧ろ嫌つてゐる修三にも、かうして旅へ出てみると、さすがに深い親みが感じられた。肩を並べて睦しげに語り合つて行くのを、往來の人に見られることさへ何となく誇りがましいやうな氣がするのであつた。

そんな時芳子はよく後に遲れて、何か考へてゐるやうに一人ぼつちで歩いてゐることがあつた。二人が氣

がついて立停ると、芳子は少し顔を赫めながら慌てゝ追ひついて來た。

一週間目あたりに、君江は急に横濱へ歸らなければならぬ用事が突發して來た。それは、實家の祖母が急病だといふ電報が到着したのであつた。

「わたしも一緒に歸りますわ」と、芳子は一人殘されるのが心細いやうに云ひ出した。

「あなたは歸らないでもいゝことよ、折角遠々來て、又來られるかどうか分らない處ですもの。それに兄さんだつて一人ぢやつまらないでせうから、もう少し入らつしやいよ、あたしも行つて見た様子で又出直して來るかも知れないから」

さう云つて、無理に芳子を殘して置き、君江は一人で横濱へ歸つた。祖母の病氣は老病で存外重く、到頭君江が着くと三日目に死んだ。祖母は病中にも君江の身の上が案じられるやうにいろ〳〵のことを云つた。

「世間で惡い噂を立てるさうだからの、取り返しのつかぬことにならぬうちに、早く生家へ戻るやうにおしよ」

そんなことを祖母は君江に云つた。「惡い噂つて、どんなことだらう？」と君江は不思議に思つたが、それを問ひ返しても見なかつた。

祖母の葬式から引續いて、君江が實家の方へ十日餘りも泊つてゐる間に、修三と芳子が鹽原から歸つて來た。

七

或る日授業が了つてから、君江が書物などを包んで歸りかけた處へ小使がやつて來て、「杉田先生が御用があるさうですから應接間へ來て下さい」と云つた。君江は何の氣もなく、包みを抱えたまゝ長い廊下を驅けて行つて應接間の扉を明けると、先生は前に來て待つてゐた。

杉田先生は君江の組の受持教師で、物理と數學を教へてゐたが、瘠せこけた顔に强度の鐵縁眼鏡をかけ、胡麻鹽頭の、まださほどの年でもないのにすつかり老人じみた容子をしてゐる。不愛想な代りに、滅多に笑

つたことも笑つたこともない表情の動かないところから、生徒は木乃伊といふ綽號をつけてゐる。

君江が丁寧に禮をして立つてゐると、杉田先生はテーブルの向側を指して「お掛けなさい」と云つた。

「どんな話だらう？」と君江が凝と見詰めてゐるにも關らず、杉田先生はいつ迄も口を切らなかつた。性來無口な先生は、どう話し出したらよいかと、ひどく途方に暮れてゐる容子であつた。

「ワツトソン氏と土方さんのお宅とは何ういふ間柄ですか？」と突然杉田先生は、ぶつきらぼうな調子で云つた。

「詳しいことは存じませんですけど」と云つたが、君江は其の問題は度々人に訊かれる事だから、維新前からワツトソンと自分の祖父との間に親交のあつたことや、祖父の沒後女の子を持たぬワツトソンから望まれて、正式に養女になつた譯ではないが、兎に角ワツトソンの娘分になつて今日まで育てられて來た、といふことを簡單に話した。

「さうですか、よく分りました」

と杉田先生は、君江の言葉が切れると大きく領いたが、又候默り込んで終つた。問題がまだ其の奥にあるらしいことは、先生の眼色で窺はれた。

「實はあなたの一身上に就いて、近頃面白くない風說があるやうですが、あなたはそれを知つてゐますか？」

「いゝえ、ちつとも……」と云つたが、君江は胸がどきりと鳴つた。その時は深く氣にも留めなかつたが、祖母が死ぬ前に云つた「惡い噂」といふ言葉が電のやうに頭に閃いた。

「先生、一體どんなことでせう？いけないことでしたら、是から氣を付けますから」

「なに、つまらん事で……。勿論取るに足らぬ中傷でせうが、あなたは前途のある今が一番大切な時期ですから……」

と、杉田先生は頻りに云ひ淀んでゐた末に、漸う漸う其の噂といふのを話した。それは、ワツトソンと君江との間に怪しい關係がある、といふことであつた。

ワットソンが極度に君江を愛するのも、君江が修三を嫌つてゐるのも皆それが爲めである、とそんなことを書いた投書が、既に何本も學校に屆いてゐるといふのであつた。

君江は餘りのことに言葉さへ出なかつた。名狀の出來ない不快な感情が、大波を打つて胸に迫つて來ると、彼女は其處に居たゝまれないやうに、椅子の上に顏を埋めて泣き出した。

數學には堪能だが、こんなことには至つて不得手の杉田先生は、どうしたらよいか分らないやうな顏をして、激しく揺れる純白のリボンを見詰めて立つてゐた。

君江が實家の方から學校へ通ふやうになつたのは、それから間もないことであつた。それでもワットソンの家へは始終出入りをしてゐた。君江は、縱ひ忌はしい濡衣を着せられたからと云つて、あの年とつた、孤獨なワットソンを、全然捨て去ることは忍びないと思つた。妻も、お林も、修三も、貞二も、一人としてワットソンにとつて、眞の味方になる者でないことが君江には分つてゐた。小造りで血色のよい、すべて身綺麗なワットソンは、一寸見ると二三十も若く見えたが、已に八十を超してゐるのであつた。

「でも、もしや……？」と思はれるやうな節が、今になつて考へると、ワットソンの素振りの中に認められないでもなかつた。

「君江さんはいつ迄もわたしの側に居てくれるでせうね？」

ワットソンは、君江の額や眼のあたりに接吻を與へながら云つた。

「えゝえゝ。あたし何處へも行かなくつてよ」

と、少女のやうに甘へた眸で見上げる君江を、ワットソンは愛しくて耐らぬやうにぐつと抱きしめたりした。しまひに君江が苦しくなつて、無理にその手を解いて飛び退くと、

「あはゝゝ」と、ワットソンは態とらしい力の無い笑ひ方をした。

八

芳子は、君江が實家から通ふやうになると、餘り君江の處へ顏を見せなくなつた。學校で會つても、何となくよそ〳〵しくて、以前のやうな親しい調子がない。時によると、態と君江の視線を避けるやうな素振りさへ見せる。君江は、あらぬ噂を芳子までが信じて、自分を疎外するのかと思ふと心外で耐らなかつた。

「あなたばかりは、あたしを信じて下さると思つてゐたのに」

と、或る日君江が恨みがましく其のことを云ひ出すと、芳子は吃驚したやうな顏をした。

「決してあなたを疑ぐらない、あたし誰よりもあなたの潔白を信じてゐるつもりなの」

「それなら何故あんなによそ〳〵しくなさるの？」と君江が責めるやうに云うと、

「あたしが惡かつたから勘忍して頂戴」

と云つて芳子は、君江の肩に顏を當てゝ泣き出した。君江も共に泣いた。

然し、矢張り二人の仲は元のやうになれなかつた。依然として、二人の間に眼に見えぬ溝が出來たやうな氣拙さを君江は感じた。

それは卒業期が迫つて來た頃のこと、君江は特別親密な友人七八人と一緒に、校庭の一部で寫眞をうつした。勿論、芳子も其の中に加はつてゐた。

其の時血色の惡い顏をしてゐた芳子は、漸う〳〵寫眞をうつして終うと運動場の砂利の上へ吐瀉した。一同は駭いて、芳子を小使部屋へ連れて行つて介抱した。嘔吐は直きにをさまつた。他の友達が皆歸つて終つてからも、君江は一人殘つて、脊中を擦つてやつたりしてゐた。

芳子は君江に少し話したいことがあるから、一緒に教室まで來て吳れと云つた。二人は手を繫いで運動場の藤棚の下を通つて、人の居ない二階の教室へ行つた。

「話つて何？」と、君江は並んで腰を掛けると直ぐ、友の顏を見て云つた。

「君江さん。あたしはね、疾うからあなたに懺悔しようと思つてゐたの」

「懺悔？一體どんなことなの？」

「あたし、とんでもないことしちやつた」

と云つて、芳子は聲を立てゝ泣き伏した。それから永い間かゝつて、君江が芳子から聞いた話はかうである。――去年の夏、君江が鹽原から歸つたあと、芳子は修三と二人で宿屋に暮してゐた。修三と君江との關係を以前から知つてゐる芳子は、隨分身を守つてゐたつもりであるが、どういふ魔がさしたのか修三と戀に落ちて、到頭道ならぬことをしてしまつた。横濱へ歸つてからも、度々人眼を忍んで男と逢つてゐた、といふのであつた。

「まあ――」と君江は暫らく呆れてゐるばかりであつた。「それであなた、姙娠でもしたといふの？」

「どうもさうらしいわ」

と芳子は、泣き腫した顔に羞らひを見せて云つた。

君江は突嗟の間、今まで誰にも經驗したことのない異常な憎惡を友だちに覺えた。とり亂した芳子の姿が、いつもより一層艶めいて見えるさへ腹が立つて、小突き廻してもやり度いやうな氣がした。

「そのことを兄さんに話して？」

「えゝ。でも近頃ちつとも逢つて下さらないんですもの」

芳子は術なげな顔をした。「到頭此の人も修三の毒牙に罹つた」と思ふと、君江はあの時芳子を殘して歸つたことが自分の不注意であつたやうにも思はれて來た。

「あたし兄さんに談判して何とかするわ」

「あなたにそんなことして頂いちや濟まない」

「いゝのよ、あたしはどうせあの人と結婚する氣はないんですから。餘り心配しちや毒よ」

さう云つて君江は、戀に窶れた友だちの顔を憐れむやうに見た。

九

ワットソンの石鹸工場は、平沼の町を離れた埋立地の、どす黒い水を湛へた川沿ひの處にある。平屋建總

赤煉瓦造りの大きな建物に、木造の倉庫が三棟、周圍には木棚が繞らしてある。ワットソンが石鹸製造を中止してから七八年も捨てゝあるので、柵は破れ門は傾き、心のまゝに伸びた雜草があたり一面に生ひ茂つてゐる。工場の内部には、埃と錆に塗みれた大きな機械が、永久の沈默の中に据え付けられ、試驗室らしい部屋の棚の上には、空になつた藥品の瓶がぎつしりと並んでゐる。

蜻蛉やばつたを追ふ子供のほか、滅多に人の訪ふこともない此の工場へ、初夏の宵闇を提燈の明りに道を照しながら、幌を掛けた二臺の人力車が横濱の方から走つて來た。門の前で俥が止ると、中から降りたのはどちらも若い女であつた。門の扉は一寸押すと音もなく明いた。すると内から平藏といふ番人の老爺が、待つてゐたやうにランプを提げて出て來て、浴衣の色だけほの白く、露に濡れた草の中に立つてゐる二人を工場の中へ連れて入つた。それは君江と芳子であつた。

二人が座つた所は、以前は事務員でも寢泊りした所と見え、節だらけの板で張りつめて、ぼろ／＼に腐つた疊の敷いてある狹い部屋である。蒸されるやうな暑さと黴の臭ひに耐え兼ねて、一方窓の硝子戸を明けると、遠く停車場あたりの燈火がチラチラ見えて、涼しい夜風が流れ込んで來た。

「隨分ひどい所ですけど、當分だから我慢なさいな」

と、君江は窓を離れて元の處へ座ると、慰めるやうに云つた。

「いゝえ。結構ですわ」

芳子は、さうは云ふものゝ內心氣味惡げに、薄暗くて馱々廣い機械場の方など見廻して肩をすぼめた。

君江が初めて芳子の告白を聞くと間もなく、其の問題を修三の前に持ち出した時には、流石の修三も極り惡げに頭を搔いてゐた。

「お前の友人に手を出したのは、如何にも僕が惡かつた。重々謝る」

「謝るだけぢや仕方がないわよ」

「それぢやどうしろと云ふんだね、一體？」

「極つてるわ。あなた芳子さんと結婚なさい」
「結婚？……冗談云つちやいけない」と修三は飛んでもない話だといふやうな顔をした。
「何が冗談です？あなたは處女の操を汚して子までこしらへたんぢやありませんか。結婚するのは當前の義務です」
「僕は決してそんな義務は負はない」
修三はきつぱり云つて、冷やかな笑を浮べながら、大股にのし〳〵部屋の中を歩き出した。かうなると修三の性質として、相手が何と云つても耳に入れない。君江が口惜し泣きに泣きながら武者振りついて「人非人」「色魔」などゝ、あらゆる惡罵を浴せても、修三は恬として相手にならなかつた。
其の後何遍ぶつかつて見ても、修三の態度は一向變らなかつた。最後に君江が根氣負けして、せめて分娩する時の面倒だけ見てやつて呉れと賴むと、修三は不承々々に承知した。
その春、君江と芳子は學校を卒業した。芳子は卒業はしても、就職口を求める譯にいかなかつた。次第に體の容態が外部に現はれかけ、今は伊澤辯護士の家にも居たゝまれなくなつて來た。
修三が、芳子を匿(かくま)ふ場所に撰んだのが此の古工場であつた。「あんな所へ？それは餘り殘酷です。何處かの病院へ入れてあげて下さい」と君江が云うと、修三は「病院へ入れるのは造作もない事だが、それでは反つて世間へ知れ易いから、芳子さんの將來の爲めに宜くあるまい」と云つた。然し是は修三の口實に過ぎない。一體修三といふ男は、非常に華美好きで且つ贅澤な人間であると同時に、一面に於て極端に吝嗇な性質を持つてゐた。彼れが多くの場合素人女を撰ぶといふとも、かういふ型の男は玄人より素人の方に一層受けがよいといふことゝ、又彼れ自身の趣味性にも依ることは勿論であるが、同時に、素人の方が比較的金が要らないといふことも重大な理由をなしてゐる。素人なれば、間違つたところで高が手切金だが、それも大抵の場合、相手が自身の名譽を怖れてさまで根強くは云ひ出

さない。縦んば今度の芳子のやうな羽目になり、子を産む世話までさせられたうへ、萬一養育金をつけて里子にでもやらなければならないといふやうな、極度の災難がふり罹つて來たとしたところで、それを年中の遊蕩費に比較する時は眞に九牛の一毛である、とこんな明確な打算を置いて掛つてゐる仕事である。だから芳子を石鹼工場へ圍まふといふことも、其所なれば一文も金が掛らないからであつて、露聊かも親切氣から出てゐる譯でないことは、修三の平常を知つてゐる君江には幾ぶん其の邊の消息が分つてゐないでもなかつたが、全く修三の云ふ通り、石鹼工場なれば絶對に人に知られる怖れはなし、名譽といふ弱味を持つてゐるだけに、うまく〳〵修三の手段に乘つてゐるより仕方がないのであつた。

芳子は暑い盛りの二月餘りを石鹼工場で暮した。其所で彼女は玉のやうな男の子を產んだ。其の間君江は、殆んど毎日のやうに來て、世話をしたり慰めたりしてゐたが、修三は到頭一度も顏を見せずに終つた。

是れ程殘酷に扱はれても、芳子はまだ修三のことが思ひ切れないやうであつた。生れた子には「修」といふ名をつけた。或る日君江が入つて行つたのも知らず、芳子は窶れ果てた姿で襤褸蒲團の上に起き上つて、赤ン坊に頬ずりをしながら「修さん、お前のお父樣はね、それは立派な方ですよ。大きくなつたらお父樣にお目に掛るんですよ」と、獨り言のやうに云つてゐた。餘りといへば淺ましさに淚も出ず、君江は其の場に立盡して終つた。

番人の平藏爺さんの世話で、赤ン坊を神奈川在の農家へ里子にやつたのは、そろ〳〵涼風が立ち初めた頃であつた。君江が里扶持の問題を修三に掛け合つてやらうと云うと、芳子は、この後どんな苦勞をしても、自分の手から仕送り度いと云つて斷つた。そして無けなしの衣類を解きほぐしては、赤ン坊の着物や襁褓を作へて持たせてやつた。

それから二三日過ぎてから、芳子は一と先東京の知邊を頼ることにして、君江一人に見送られながら平沼

驛から汽車に乘つた。

一〇

君江は、ワットソンの家へ滅多に足踏みをしなくなつた。無論ワットソン老人に對する愛情は今も昔も變りはなく、又修三とても、芳子の事件では大分睚み合つたものゝ、根が惡人といふ譯ではなし、殊に君江に對しては、妹のやうに思つてゐるせいか厭らしいことを云ひ出すやうなこともなかつたから、遊び相手とすれば誰よりも氣の置けぬ面白い男であるが、たゞお林と仲の惡いことが、君江を疎遠にする原因であつた。子どもの時分はさ程でもなかつたが、君江が大きくなるに從つて、お林の君江を疎んじる容子が現れて來た。それは負けず嫌ひな君江の性分が同じやうなお林の性質とは、先天的に反が合はないといふ點もないではなかつたが、一番主な原因は、ワットソンが餘りに君江を可愛がり過ぎるといふお林の嫉妬からであつた。勿論それには財産問題などに就いての憂慮も尠なからず混つてゐた。然しそれも、修三と君江が何の障害も無く結婚して終へばお林の心も霽れる譯であつたが、それが現在のやうな狀態になつて見ると、お林は吾が子の缺點は眼に入らず、限りなく猜疑心を募らせて君江を憎むのであつた。こんな風であつたから、自然君江の方からもお林に對して惡感情を抱かずには居られなかつた。君江は、自分とワットソン老人との惡評なども、原を糺せばお林の口から世間に吹聽されたのに違ひないとまで思つてゐた。こんな具合であつたから、修三と君江との結婚問題なぞは何時となく立消えになつてゐた。

君江の家は、兩親と、兄の驍一と、小學校と中學へ通つてゐる妹に弟、書生、車夫、下女、それに彼女を加へると可成り大暮しであつた。尙此のほかに一番總領の姉があるが、農學士の夫を持つて久しく札幌で暮してゐる。兄の驍一は醫者が嫌ひで、學校は法科を選み、横濱の自宅から汽車で本郷の大學へ通つてゐた。

君江は追々家庭の事情に通じて來ると、外見は相應に暮してゐる我家の内政が、思ひの外危險な境に臨ん

でゐることに駭かされた。父の宗衡は、天下の志士を以て任じてゐた祖父の宗耆の血を受け繼いだとしては、餘りに溫好な人物であつた。殆んど人中では、口を利くさへ遠慮勝ちな程溫和し過ぎて、其の上醫者としても、大した修養も特殊の技能も有る譯でない彼れは、横濱の如き進取的な人氣の激しい土地で生活するには、まつたく不適當な人物に出來てゐた。こんな風で彼れの玄關は年々寂しくなるばかりであつたから、以前は相應にあつた財產も何時となく消えて終ひ、僅に殘つてゐる現在の住居とても疾うに借財の抵當に入つて、絕えずその利息に追はれてゐる有樣であつた。

「この先どうなるだらう？」と思ふと、君江はいつでも大きな不安に包まれた。

詳しい狀態を知つてか知らでか、驥一はそんな問題を大して苦にしてゐる樣子がなかつた。誰も居ない時君江がそれとなく話すと、驥一は一寸曇つた表情を見せたが忽ち晴れやかに笑つて、

「君江は急に世帶じみて來たね。宜し、今に兄さんが成功してみんなを立派にしてやるから心配するな」

と云つて、驥一は擊劍で鍛へた武骨な腕を突き出して一寸滑稽けた顏をして見せた。こんなところが驥一は餘程祖父に似通つた性質を持つてゐた。

驥一の友人に海野豐といふ青年があつた。同じ法科の同期生で、矢張り横濱から通つてゐた。豐は一人息子で、父は船の事務長をして年中留守勝ちなのを、母親と二人で靜かに暮してゐた。色の淺黑い、細面の、眉目のキリッとした青年である。

以前は必ず驥一と停車場で待合せることにしてゐたのに、豐は近頃よく廻り道して、わざ〳〵驥一を呼びに來る。大學の制服を着た豐が、さも遠慮らしい容子で門を入つて來る姿を見ない日は、君江は何となく物足りぬ心地がするのであつた。

「近頃大層よく海野さんがお見えになるぢやないか」

と、氣の好い宗衡でさへ異しく思つたらしく云ふことがあつた。そんな時君江は、自分のことでも云はれたやうに、思はず顏を赫らめた。

一一

ワツトソン老人が死んだのは、其の年も殘り尠なになつてからであつた。

危篤の電報を受けて君江が江の島の別莊へ驅け着けた時は、已に老人の顏は白い布で覆はれて、靜かにベツドの上に眠つてゐた。宿痾の腎臟炎が滅切重くなつて、夏の初め頃から江の島へ行き切りになつてゐたのであつた。

君江が最後にワツトソンに會つたのは、死ぬ二月ばかり前のことであつた。老人は君江の顏を見ると非常に喜んで、彼女に扶けられてベツドの上に身を起した。その時は已に見違へる程瘠せ衰へ、若者のやうに美しかつた皮膚の色も灰色に褪せてゐた。秋の色をした空と海が、病室の窓越しに眺められた。

「君江さんにはもう會へないと思つてゐました」と、ワツトソンはさも懷しげに力の無い聲で云つた。君江は直ぐ胸が一杯になつて、少女時代のやうに老人の胸に顏を押しあてゝ泣きたかつた。老人は、君江が彼れの家を去つた原因が、自身と君江との間にあらぬ噂が立つた爲めであることなどは少しも知らない樣子であつた。君江は殘らず打ち明けて、養育の恩を忘れた譯でなく、老人に對する愛情は少しも變りのないことを知らせ度いと思つたが、さながら監視人でもあるかのやうにお林が傍を離れぬので、到々それも話すことが出來なくてしまつた。

生前の遺言で、葬儀を凡て佛式で執り行ひ、遺骸は茶毗に附して鎌倉の寺院に埋葬した。「英祥院雲山智賢居士」裏に「英國人ウイリアム・ワツトソン之墓」と書いた墓標が、三門の朱塗もいと寂びた禪寺の、松籟爽々たる丘の上に建てられた。

ワツトソンの死後間もなく、彼れの遺族に對して、青天の霹靂ともいふべき意外な大事件が湧いて來た。それは横濱駐在の×國總領事から、故人の遺產處分に關する民事訴訟を起したのであつた。此の訴訟は約一ケ年に亘つて世間を騷がせたが、其の結果は、妻やお林の名義で登記してある土地建物などを除くの外、總て

の財産に關する處分權が×國官憲の手に移つて終つた。誰しも一番金目な物に計上してゐた骨董品、天下の珍器什寶の類も、悉く×國官憲の手で運び去られて終つたのである。

二

「いつそ自分の軀を犧牲にしてしまはふかしら?」

何の聯絡もなく、時々そんな考が君江の頭に浮ぶことがあつた。君江は直ぐそのあとから、自分の考を打ち消すやうに苦笑した。あれ程自負心の强かつた自分が、無智な階級の女かなどのやうに、假初にもこんな淺ましいことを考へるやうになつたことが、不思議なやうにも思はれるのであつた。

それ程、彼女の家は窮境に沈んでゐた。現在住んでゐる家屋は、或る金貸の手へ最初は千五百圓の借財の擔保に入つてゐたが、今では利息が滯つて二千圓以上になつてゐた。年一割二步の利子に、半期〳〵の書換で五步宛取られる手數料を合算すると、結局二割二步の高利で、なほ此のほかにも借財のある宗衛は、利息ばかりを月々五十圓以上拂はねばならぬ仕末であつた。おまけに宗衛の妻は元來痺弱なたちの處へ、打ち續く世帶の苦勞に負けて、近頃寢たり起きたりしてゐた。君江は母に代つて、苦しい一家の經濟を切り盛りしていかねばならなかつた。

可成りあつた君江の衣類や指輪のやうな物も段々失くなつていつた。下女に給金が渡せなくて、さつさと包みを作へて出て行かれてからは、彼女は家のことを一人で働いた。靑春の血しほも世帶の窶れで色褪せて終つたやうに感じた。「金、金」彼女は年中さう思つて暮した。

豫期してゐたことが、目前の動かぬ事實となつて現はれる日が來た。或る日債權者と執達吏が來て、君江の家の一切の物品に封印を押して行つた。宗衛は今更のやうに狂奔したが、到底纒つた才覺のつかう筈もなかつた。お林の處などは、勿論相談して見る迄もないことであつた。破滅を眼の前に看る捨鉢な、荒びた氣分が幾日も一家の人達を襲つてゐた。

「わたくしの躯を犠牲にしてお金を作つて下さい」と、君江が兩親の前に云ひ出したのは、幾夜も睡らずに考へた末であつた。卑しい、人として恥ずべきことをして迄も、親同胞に盡さねばならぬといふ理由は更にない、然し、此の身一つを犠牲にして、一家を奈落から救ひ上げ得るならば、感情の上で深いことである、—君江は極度の感傷的氣分に浸されて、幾夜を涙の枯れるまで泣き明したことか知れない。

「とんでもない事だ。そんな事は第一先祖に濟まぬ」

兩親は頭からさう云つたが、最後までさう云ひ通す氣力はなかつた。

一三

君江が吉原の稻本樓へ目見えに行つて來たのは、其の年も九月の末であつた。型通り六ヶ年の年期を入れて、千五百圓の身の代金を受け取つたが、年齡の關係で、鑑札が下りる迄二月ばかり間があつた爲めに、君江は暫く暇を貰つて家に歸つてゐた。札幌に居る君江の姉婿から寄した金など合せて二千圓餘り、金貸の方はさつぱりと片づいた。

「まつたくお前に濟まない」と兩親は、吾子の前に手を突いて涙を流した。駿一には、愈々といふ時までそれを隱して置いた。

君江は愈々事が極つて終うと、反つてさつぱりした氣持になつた。初めて看て來た廓の有樣などが眼に浮んだ。

「何事も時世時節で、どんないゝ所の娘さんでも親のためなら仕方がありません。それに又、此の稼業をしたからつて心掛け一つですからね、反つて出世して結構な身分になる人も幾らもありますよ」

去年夫に死なれたばかりの、眉のあとの青々した、芝居にでも出て來さうな女主人は、同情の深さうな眼を君江に注ぎながら云つた。君江は其所の御内所で一週間ばかりの日を暮して來たのであつた。結ひ綿や元祿などに結つて、人形のやうに化粧した女達を君江は見た。賤しい、苦しい勤めの悲しさなどはどの顏にも見られない、女達は誰れも彼れも、芝居でもしてゐる

やうに華やかな、明るい生き〳〵した顔をしてゐた。

或る日君江は豊の家を訪ねた。今迄にも、驥一と三人で活動寫眞を觀に行つたり、郊外へ遊びに行つたりしたことはあるが、豊を家に訪ねるのは初めてゞあつた。彼れの家は居留地に近い閑靜な屋敷町にあつた。

丁度母親は用達に出て留守であつた。豊は包み切れぬ嬉しさを顔に現はしながら、君江を自分の居間へ連れて行つた。

「此の頃中お留守のやうでしたね」

「えゝ、一寸東京へ行つてましたの」

と君江は何氣ない容子をして云つた。一つ二つ話すと、直ぐに二人の會話は杜切れて終ふ。心に思つてゐることを話さうとする程、言葉が硬張つて來るやうないら立たしい心持を感じながら、互の身に關係の乏しい會話ばかりを取り交してゐた。

「わたくし近いうちに、あなたにお目に掛れなくなるかも知れません」

と、君江は兩親と云ひ合せてある通りに、急に縁談が進行して北海道へ行かねばならなくなつたと云つた。自分は勿論、親達なども餘り進まない縁談ではあるが、種々の義理づくでどうにも斷れない、——そんな風に話してゐるうち、君江は段々感情が昂ぶつて來て、それがいゝ加減な作り言のやうには思はれなくなつて來た。豊は吃驚して聞いてゐたが、軈て云ひ樣ない絶望と憤りの色に變つた。彼れはいら〳〵した感情の遣り場がないやうに、無闇に煙草をふかしたり、机の上の物に當つたりしてゐた。

「さうですか、それはお目出度いことですね」と豊は聲を顫はせて云つた。

「わたくし、お目出度いことなど御坐いませんわ」

「結婚がお目出度くなくて、何が一體目出度いんです」

「そんなにあなたに憤られちや、わたくしどうしたらいゝんでせう？」

「僕が憤るものか、第一憤る資格が無いぢやありませんか」

「まあ、あなたさうお思ひになつて?」と、君江は悲しげな眼つきをして男の顔を見詰めた。戀人さへ手を觸れぬ肉體(からだ)のまゝで、見も知らぬ男達の凌辱を受けることは耐えられない、――さう思ひながら、君江は戰く軀を疊の上に投げ出すやうに突つ伏した。

そこへ豊の母が外から歸つて來た。君江は挨拶もそこ／＼に起つた。

賑やかな通へ出てからも、君江は上氣したやうな眼をして歩いてゐた。「お母さんが歸らなかつたら」さう思うと、軀に熱でもあるやうな異常な興奮を覺えて、到底此のまゝ家へは歸れないやうな氣がした。彼女は前後の思慮もなく、丁度來かゝる俥に乘つた。久し振りに會ふ修三の面影を空に描きながら――。

一四

流石に師走の月となれば、素見の群れも絶え勝ちに、流しの三味や太皷の撥音のみ遠音(とほね)に冴えて、滅切り廓は寂しくなる。その月初め、角町の稲本に朝妻といふ新規の花魁が現はれた。そして大籬中に並びない、飛び切り美しい花魁といふ評判は、早くも仲ノ町に知れ渡つた。桃色手絡の結綿にした細面の、飽くまで華車な襟姿は、まつたく誰が眼にも美しいものであつた。いふまでもなく朝妻とは、姿をやつした君江の名である。

松の葉越しに往來を見下す表二階の、六疊の次の間の付いた本座敷、某(なにがし)畫伯が醉筆梅の掛物も適はしく、衣桁に掛けた友禪の部屋着はまたなく艶めかしい趣を添へてゐる。

客を歸したあとの獨り寝の夢から醒めた午過ぎ(ひるすぎ)、三味の音はおろか廊下を行く人も暫し杜絶えて、物賣の鳴らすチャルメラの音がうら哀しい氣分をそゝる。次の間では上新と下新が、海老のやうに屈んで木綿蒲團を引つ被ぎ(かつぎ)ながら、慾張つた夢でも見てゐる時刻。――

――過去の出來事がまざ／＼と君江の胸に浮んで來るのであつた。銀座の街を泣きながらワットソンに負(おぶ)はれてゐる幼な姿が現はれたり、紫紺の袴をはいて學校へ通ふ時分のことが思はれたりした。悲しい涙を誘は

る前に、君江は不思議な心持で、變り果てた現在の姿を見るのであつた。

今でも、ワットソンに買つて貰つた人形のエルザは、硝子の箱に入れられて、碁盤、手箪笥、寫眞立て、そんな物がごちや／＼置いてある脇床の上にゐる。尤もエルザのほかに、銘仙の筒袖に縮緬の帶をしめ、巾着をぶら下げた男の人形もゐる。是は新造のお福さんが十軒店から買つて來たのだが、菊五郎贔負のお福さんが名づけ親で「丑之助」と呼ばれてゐる。

最後に横濱で暮した一月餘りの生活が、君江の胸に蘇生つて來る。あの時火のやうに熱い軀を初めて修三の腕に投げ掛けたのは、以前ワットソンの居間であつた洋館の一室の出來事である。骨董類の失くなつた其の室は、新しい家具や油繪などで飾られてあつた。

「どうして僕は今迄お前を捨て丶置いたのだらう？」

其の時修三は燃ゆるやうな眸で、暫く見ぬ間に滅切り女らしさの増した君江を見ながら云つた。

二度目に豐に會つた時は、君江は自身に驚く程大膽になつてゐた。

「北海道へ行けば、もうあなたにお目に掛れないんですもの」と、君江は泣きながら男の胸に顏を押し當てた。

感傷的な豐の心に適はしい澄んだ月のある夜を、二人は小船に乘つて港の沖合に更したこともある。そんなことのあつた翌日を、君江は身も魂も溶けて終ひさうな、激しい修三の愛情に浸つて暮したのであつた。

慌たゞしい歳の暮が廓にも來た。床の間や縁喜棚にお飾りが吊されたり、橋場の宗匠が來て、座敷毎に松竹梅を活けたりした。暮の廿七日から、花魁達は要事を附けて初會の客を斷つた。呉服屋だの炭屋の掛取りが、次の間までやつて來た。

元日の朝は、金房を掛けた島田に鼈甲の笄をさし、新しい裲の褄をとつて、白扇を前半に衣紋を正した新造を供につれ、先づ御内所から始めて朋輩の部屋々々を門口から御祝儀を陳べて廻つて終うと、廊下のあちらこちらから追羽根の音が聞えて來る。君江も誘はれ

ると廊下へ出て、重い草履を曳づりながら羽根を突いた。

月日が夢のやうに流れて行つた。君江は其の間に數限りなく樣々な男に逢つた。中には豫てから、名前だけ知つてゐる人も混つてゐた。いつも大勢の取卷を連れて來て、駄々羅遊びをする田×さんといふ實業家、ぐつと粹に砕けた貿易商の高×さん、花魁達が鼻つまみの芳×や清×の御前樣、さては恐ろしく脂ぎつた松×さんといふ文士。——君江はいつとはなしに、そうした男達に接することが、辛くも悲しくもないやうになつてゐた。

君江の處へ、せつせと通ひつめる男が二人あつた。一人は津崎と云つて田舎では相應な物持の息子株、溫和しくて生一本な、型通りの優男だが部屋住のかなしさ、兎角溜り勝ちな茶屋の拂ひを氣にしながら、思ひ上つたやうに通つて來た。もう一人の方は小折といふ新派では可成り賣れてゐる役者であつた。年は彼是四十からみの、色の淺黒い苦味ばしつた、それで何處ともなく物柔かなそつのない男、家には藝者上りの內儀があつた。

うぶな津崎も、苦勞人の小折も、どちらも君江は憎からず思つたが、どうしたものか戀めいた心持はどちらに對しても起きなかつた。ある時は修三や豐の面影を浮べつゝ、津崎にも小折にも泣いたり笑つたりして見せた。

一五

君江が朝妻と名乘るやうになつてから足掛三年目の春、廓に久しく絕えてゐた花魁道中の催しがあつた。

「花魁に脫けられてどうするもんですか、今度は是非とも出て貰はなくつちや」

其の相談があつた時君江が御內所へ斷りに行くと、女主人はさう云つてきかなかつた。目も綾な道中の衣裳が出來て來た。「知つた人に見られたらどうしよう？」そんな不安に驅られながら、君江は每日八文字を踏む稽古をしてゐた。

それは仲ノ町の櫻がチラチラ散り初める四月の末、

花曇りの空はまだ明るかつたが、今點いたばかりの誰ぞや行燈の灯影が、ほのかに花暖簾に照り添へてゐた。路の兩側にぎつしりと立つた人垣の間を、紺の腹掛も〻引に角つなぎの袢天、八端の平絎を脾腹に結んだ茶屋廻りの若者が伊達に曳く金棒の音を先に立て、新造、禿、藝者、幇間、さては羽織袴で警護に立つた茶屋の主連を隨へて、長柄の傘をさしかけさせ、朝妻はしづ〳〵と八文字を踏んで行くのであつた。鐵漿を含んだ厚化粧に眼の醒めるやうな立兵庫、銀絲の瀧に鯉を躍らせた帶を前結びにして、褶の裾も重たげに、緋と燃ゆる蹴出しを素足に絡ませた、眩ゆきばかりの朝妻の容色は、絕えて並ぶ者がないと評された。

千圓の札を懷にして、宗衞が突然娘の處を訪ねたのは、それから一と月ばかり過ぎてからであつた。――秘密にしてゐた君江のことが、どうして知れたか札幌の姉夫婦に分つた。妹がそんな淺ましいことをしてゐると聞いてから、夫婦は夜も碌々眠つたことはない、この上は一日も早く救ひ出してやつて與れといふ血の涙で書いたやうな手紙と共に、義兄は苦しい工面で得た千圓の金を宗衞に送つてよこしたのである。

君江は顏を袖で蔽ひながら小娘のやうに泣き沈んだ。われにも非ず仇な心で暮してゐた彼女の胸に、忘れ勝ちであつた親身の愛情が、烈しい勢で目醒めて來た。

幾ら稼いでも減らない前借のほか、吳服屋の借金や新造の立替、引祝ひの費用などを計算すると、どう內端に見ても、千七八百圓の金が缺けては君江は廓を出られなかつた。賴めば出しさうな客は幾人もあるが、端したを足して貰ふがために心に染まぬ人に義理は持ちたくない。大阪へ興行に行つてゐる小折の處へ云つてやればどうにかなるには違ひないが、浮氣稼業の役者のそれも妾になり、日蔭で暮すのも肩身の狹い話。獨身で而も貧のあり過ぎる程ある男と云へば津崎だが、近頃不身持が國元へ知れてからばつたりと詰つて終ひ、偶さか來ても愚痴ばかり云つて君江を困らせるやうな始末であつたから、これは勿論相談して見る迄

もないことであつた。君江は千圓の現金を持つて、幾日かをまご／＼して過ごした。

近頃ちよい／＼君江の處へ來る客に、同じ廓内の貸座敷の主で井村といふ男があつた。何でも人の噂に依ると、赤馬車の馭者から妓夫になつたのが始まりで、是れまで叩き上げるには並一と通りでないこともして來たといふ話だが、兎に角現在は小格子でも相應な店の主として、廓内では可成りいゝ顔に成り濟してゐる。でつぷり肥つた眼つきの鋭い、何處ともなく下司張つた處はあるが、流石に遊びは冴えてゐた。

「花魁なざめまつたく容貌は好し教育はあるし、かう云つちやあ何だが、花魁て云ふのもお氣の毒な樣だ。きけば大分いゝ客があるさうだが、まだ廢業やうな相談も始まらないのかね？」

稼業柄だけに井村がそんな話をしかけたので、君江は何心なく、實はしかじかの譯で千圓だけは持つてゐるのだが、あと金の都合を思案してゐるところだといつて話した。すると井村は暫らく考へてゐたが、

「是は巳の心持だけを話して見るのだが」と前置をしながら、それ位のことで濟む話なら、其の金は自分が出してやつてもいゝ。尤も金を出したからと云つて、それを義理に君江をどうかしようといふ譯ではない。其の邊のことは、自分も苦勞して來た人間だから滿更解らないことは云はないつもりだ。「云はゞ罪滅しに、殊勝な眞似の一つもして置かうといふやつさ」と云つて井村は蟠りのない笑ひ方をした。

餘り突然の話だから、君江は卽答はしなかつたが、なまじ關係の深い客に賴んであと／＼面倒な思ひをするよりも、いつそ此の男の云ふやうにした方がいゝかも知れないと思つた。それに井村といふ男は、無教育で不作法なところはあるが、世間の人が云ふやうな惡黨ではなく、寧ろ交際つて見ると、存外淡白で親切氣のある男のやうにも思はれた。

「御親切はよく解りました。兎に角二三日考へさして下さい」

其の日はそんなことでしまつた。

一六

君江は一旦千束町の新造のお福さんの家に落ちついて、其の上で身の方向をつけることに決め、店の者などに送られて廓を出た。

思へば呪はしい生活ではあつたが、それでも最後となれば、多少の愛着を感ずるのであつた。欄干に凭れて看る廓の朝景色に常と變りはなかつたが、毎朝聞き慣れた納豆賣の呼聲にさへ怪しく心を引かれて、ちらほら朝歸りのある往來を、君江はしみじみと眺め入るのであつた。

直ぐ後から寄こす筈になつてゐる君江の荷物が午過ぎても屆かぬので、お福さんが店へ電話を掛けると「先程井村さんの方から人が來てすつかり片着けて行つたから、もう疾うに屆いたことに思つてゐた」といふ挨拶であつた。

それから暫らく經つた頃、表へ車夫が來て、「井村さんの使です」と云つて手紙を出した。

——一寸會つて話し度いことがあるから、此の車に乘つて直ぐ來て呉れ。——といふ文面であつた。

「こつちへ來ればいゝのにさ」

「まさか——旦那がうちなどへ入らつしやられるものですか。何處か公園あたりの料理屋にでも入らつしやるんでせう」

と、お福さんが云つた。君江は朝出たまゝのなりであつたから、一寸顏を直したばかりで、表に待つてゐる俥に乘つた。

俥は、公園の後を拔けて狹い裏町を曲り曲つた末、花川戸の電車路を突つ切ると、又候横丁へ入つたが、とある露地の行詰りにある門構への、黒塀の掛つた家の前で停つた。其處からは聖天の森が間近く見えて、一寸した庭を圍つた平屋造りの、妾宅か隱居所とでも云ひさうな好みである。

君江は少し怪しみながら俥を降りると、内から井村がにこ〳〵笑ひながら現れて「突然だから喫驚いたらう。まあ〳〵詳しいことはあとで話さうから」と、君江を奥の座敷へ連れて行つた。

君江はほつと胸をついた。其所らに君江の荷物が、而も包みを解いて片着けてあるのであつた。初めて井村の眞意が判つた。
「井村さん、あなたはわたしを此所に置いて、妾にでもなさらうと仰しやるんですか？」と、君江は座るが否や血相を變へて云つた。
「まあ〳〵、お前のやうにさう一途に憤つて終つちや話が出來ない、是にはいろ〳〵譯のあるこつたから」
「どんな譯があるか知らないけど、それぢや約束が違ひませう。あなたも世間で何の彼のと云はれる立派な男ぢやありませんか、卑怯なことは止して下さい」
「さう云はれると一言も無しだ。今度のことは全く己の失錯なんだから、何と云はれても仕方がない」
　井村はさも困つたらしく頭を掻いたりしながら、今度のことに就いて、ちよいとした行き掛りから、かうでもしなければならないやうな羽目に立到つた自分の立場を説明し始めた。井村の云分に依ると、彼れは今度君江を廢業させる爲めに何の彼ので小千圓の金を費つたが、それは勿論最初から君江に呉れて遣るつもりで出した金だから、今更それを楯にとつて君江の自由を拘束しようなどゝいふ考は毛頭ない。然し、爰に一つ困つた事といふのは、君江の廢業についての彼れの立場が世間へ公然になつたことである。それは親元身請の體にすれば、入費の點でも尠なからず違ひ、彼れの名前も出ずに濟んだのだが、それでは君江が肩身が狹いと云ふので、公然と井村の名で引祝ひ迄させたからであつた。處が斯うなつて見ると井村にしても稼業柄、まさかに端下だけ出したなぞといふ吝なことも、女が可哀相だから只呉れてやつたんだといふやうな甘い話も出來なくなり、懇意な人などに對つても、今後君江の世話をするやうに話さない譯にはいかないのであつた。で、彼れとしては、此の儘君江に行かれて終つたのでは全く顔が潰れて終ふ、と云つて君江には、最初の約束もあることだから野暮なことも云ひ度くない。――就ては茲が相談だが、決して關係なぞは無くても宜いから、暫らくの間自分の世話を受けるといふ

ことにして世間體を繕つて貰ひ度い、其の代り先へ行つて必ずそれだけの償ひはしようから。——といふ話である。

「お前の身になれば、ぺてんにでも掛つたやうに思ふか知らないが、己もまさか年甲斐もなく色戀でもあるまいし、茲は一つお前に察して貰ひ度い」

と、井村は金口の煙管で除かに莨をふかしながら、じつと君江の顏を見据えて云つた。

君江は浮々井村の甘口にのつて、とんでもない關係をつけて終つた自分の輕卒を後悔した。井村の名で引祝ひをしたことなども、出て終ふ自分にとつては肩身が狹いも廣いもあつた譯ではなかつたが、新造や茶屋の女將などが兎や角云ふために、云はゞ遣ふだけ遣はせてやれといふやうな淺はかな考でしたことであつたが、それが今になつてはのつぴきさせぬ口實を井村に與へる原因になつて終つた。君江は何だか、周圍の者が總て共謀になつて、自分を罠に陷れたやうな氣がした。——それは兎に角、一旦から云ひ出したからには、井村が此のまゝ手を引くやうな人間でないことは分つてゐる。今こそ穩やかに話してゐるもの丶、自分の出樣次第では、どんな亂暴なことを仕出かさないとも限らない、——

「それでは、きつと關係だけは無しにして——」と、とゞの詰りが、此の言質をせめてもの力にして、君江は井村の云ひなりに成るよりほかに仕方がないのであつた。

一七

其の家は、現今は廢業してしもた屋で暮してゐるが、昔から吉原隨一の大籬として人に知られた金瓶大黑の、隱居所として建てられた家であつたが、近頃明いてゐるのを幸ひ、井村が日頃の懇意づくから君江のために借り受けたのである。豪奢に慣れた隱居の好みで建てた家だけに、眼に見えぬ一枚の板にも、庭の置石一つにも、駭くべき贅澤と數寄が凝らされてゐた。君江は井村の方からよこした婆やと、新規に雇つた女中と、三人で其所に暮した。

井村は毎日一度は必ずやつて來た。來ても、君江の酌で酒でも飲んで歸るくらゐのことに過ぎなかつたが、彼れはそれが何よりの樂しみらしく、どんなに忙しい中をも拔けて來るのであつたが、夜はいゝ加減な時間になると自分から歸り支度をして、決して泊つて行くやうなことはなかつた。

君江は最初のうちこそ井村に對して危惧の念を抱いてゐたが、段々井村の人物が解つて來ると共に、そんな不安は消え去つて終つた。井村は、根が無教育な人間だけに、敵に廻すと隨分無鐵砲をし兼ねないやうな處はあるが、其の代り一朝味方になれば頼もしい、といふより寧ろ可愛氣のある、つまり相手の出樣一つでどうにでもなる人間である、とそんな呼吸を呑み込んで終つた君江は、井村に對して何事も我儘不遠慮に振舞つて、殊更に高壓的の態度に出る習慣をつけた。すると井村は君江に我儘を云はれるのが反つて嬉しくて耐らぬかのやうに、いつでもにこ〳〵相恰を崩して君江の云なり法題になつてゐるのであつた。

肥つてゐるので人一倍暑がり屋の井村は、よく素裸などになつてちやぶ臺の前に大あぐらをかいたりした。

「うちではそんな雲助のやうな眞似は眞平です、わたし不作法なこと大嫌ひなんだから」

君江が眼角を立てゝつけ〳〵云うと、

「ホイ、こいつあ大失錯だ。お孃さんに會つちやあ敵はねえ」と、井村は怒りもせず、素直に浴衣を引かけて座り直すのである。

君江はすつかり井村を甘く見て輕蔑すると同時に、自身の持つてゐる魅力と威嚴に對しても私に自負しない譯にはいかなかつた。最初の約束とは云ひながら、井村が一度も云ひ寄つたりしないのは、君江自身の側に隙が無いからであると思つた。

嚴しい殘暑が街中を炒り付けてゐる日であつた。君江は下女を連れて上野の博覽會を觀に行つた。

好い加減に會場を出て、雜閙してゐる公園の道路をぶら〳〵山下の方へ歩いて來る途中、向ふから來る

絣の浴衣に麥藁帽を冠つた若い男、近寄つて見るとそれが思ひ掛けない豊であつた。

双方吃驚して立停つたまゝ一寸言葉も出なかつた。

「あなたにお目に掛るなんてほんとに夢のやうですわ」

「僕も全く意外でした。時に君江さん何時こつちへお歸りでした？ちつとも聞かなかつたが」と豊は不思議さうな面持をして云つた。

「え……」君江は云ひ澱んで終つた。今でも豊が矢張り北海道の方へ緣付いてゐるものと思つてゐるらしい様子を見ると、墮落した現在の身分を知られるのは恥かしいことであつたが、かうしてゆくりなくも邂逅した昔の戀人と、此の儘別れて終ふことは出來ないと思つた。

「實は澤山お話しゝたいことがあるんですが、あなたわたしと一緒に入らして下さる？」

「然しそんなことをしても構はないの？」

「えゝ、いゝのよ」

君江は程よく云ひ含めて下女を先へ歸してやり、豊と並んで歩き出した。豊は、二年足らずの間に見違へる程豐麗な趣を添へて來た君江の、上品な束髮に結つた橫顔などをちよい／＼偸むやうに見ながら「僕も漸う／＼卒業しましたよ」と、そんな話などしながら歩いた。豊は鼻下に薄い髭など蓄いてゐるのであつた。

山下から俥に乘つて、君江が豊を連れて行つた家は、其所の女將が、君江が稻本に居る時分ちよい／＼客に連れられて來て懇意になつた瓢といふ仲町の待合であつた。入ると直ぐ女中に耳打ちなどしてゐる君江の振る舞ひに豊は度膽を拔かれた顔をしてゐたが、直ぐに二人は一番奥まつた、三坪ばかりの庭を見る小座敷に通された。

君江は殘らず豊に打ち明けて終つた。豊は云ふべからざる駭きの態を現はしていち／＼君江の話を聞いてゐたが、

「ちつとも僕は知らなかつた。然し何だか僕には事實とは信じられない」と、繰り返し／＼云つた。

「嘘あなた愛想が盡きちやつたでせうねえ。そりやどうせあたしは諦めてますけど……」

さう云つて君江は、眞赤に泣き腫らした眼をあげて男の顔を見た。

一八

それから十日ばかりの日を君江は豊と一緒に、瓢の奥座敷で暮した。最初の二三日は、君江は男を瓢に殘して置いてちよい〳〵家へ歸つたりしてゐたが、後には夜も晝も豊と一緒に瓢に泊り續けて、家のことなどは忘れて終つたやうに暮してゐた。實際彼女は、歸りたくても歸れぬ程戀の快樂に疲れ切つた軀を、一寸の間でも男の側から離れることが侘しかつた。暑い日盛りを氷水ばかり飲んで、息苦しい小座敷にごろ〳〵してゐる男女の容子を見て、こゝの女將や女中達はさも可笑しいことのやうに笑ふのであつた。

男は一と先横濱へ歸らなければならない日が來た。

「直ぐに出て來るから、ねい、だらう」

豊はもう出るばかりに身支度をしてからも、まだ髮など亂したまゝで萎れ切つて座つてゐる君江を見ると心がゝりのやうに云つた。

其の日から君江は明け暮れ豊の便りを待つて暮したが、幾日經つても何の音沙汰もなかつた。手紙を出したが其の返事さへ來なかつた。

「若し兩親が反對しても、何とかして漕ぎ付けて見せる。要するに僕の決心さへ動かさなければそれで問題は無いんだからね」

思ひ上つたやうにかう云つた豊の言葉なども、まだ君江の耳に新しく殘つてゐたが、然しそんなことは今の場合どうでも宜かつた。彼女は只男に逢ひ度かつた。

豊が、飄然として支那へ行つて終つたといふことを君江が兄の手紙によつて知つたのは、別れてから一月餘も過ぎてからであつた。豊は愈々出發といふ前夜驥一を訪ねて、君江との關係を話した。――結婚が出來ないと知りつゝ曖昧な關係を續けてゐるやうな事は、双方の不得策であるばかりでなく、自分の性格と

到底出來ないことだ。幸ひ支那には知己もあるから、暫らく大陸の山河を放浪して胸の苦悶を忘れて來るつもりだが、君江さんには君から諦めるやうに云つてやつて呉れ――かう云つて豊は男泣きに泣いたといふ。

君江は、生一本な男の心が恨めしかつた。戀愛は男にとつては第一義のものではない、豊とても兩親が承知せぬとは云ひ條、矢張り名譽を思へばこそ自分を捨てたのだ、野心があればこそ支那へも行つたのだ――と思へば猶更恨みであつた。

君江は氣分が勝れぬと云つて、毎日寢たり起きたりして日を過した。秋がいつしか冬になつて、庭の樹々にも、向ふの屋根の上に見える聖天の森の梢にも毎日けたゝましい凩が鳴つて、雲がちぎれ〳〵に飛ぶ日が續いた。靜かな夜などは隅田川から水鳥の鳴く音さへ聞えて來て、ひとしほ淋しかつた。

井村は相變らず毎日やつて來たが、近頃君江の浮かぬ容子を見て、可笑しい程氣を揉んで心配するのであつた。それでも君江は氣の向かぬ時など、夜具を引被いだまゝ物も云はなかつた。

或る晩、夜半過ぎた頃、近い處に小火があつた。半鐘の音や人の足音が入り亂れて暫らく夜の空氣を騷がしたが、間もなく以前の靜寂に歸つた。そこへ井村が驅けつけて來た。

「何しろ莫迦に寒い、冷でいゝから一杯くれ」

井村は君江の寢てゐる側へ來て、コップの冷酒を飲みながら、「丁度一と眠りした處だつたが、店の奴が來て花川戸邊が火事だつて云ふから駭いて來たんだ。お前は病氣だし、女ばかりだから心配したが、まづ〳〵大した事に成らずに濟んで宜かつた」と、そんな話をしてゐたが、直きに煙草入など仕舞つて腰を浮かせかけるのであつた。どてらを被つても火のけの絶えた座敷では寒くて耐らぬやうに、井村は身顫ひをしてゐた。

流石に君江も井村が氣の毒になつた。かうして寒さも厭はず來てくれた井村に對して、自分が夜具にくるまつてゐることが濟まないやうな氣がした。考へて見れば、永い間厭な顏一つ見せたこともなく、自分の氣

隨氣儘をきいてゐる井村の身も並大抵なことではない、——と、そんな風にも考へられた。

「あなたまだいゝわ、それに外は寒いんですもの」

井村が歸りかけた時、君江はさう云つて床の中から引止めた。

一九

猛獸は飽く迄も猛獸であつた。井村が今迄したことは全部假面であつた。何處迄も親切らしく、何處迄もお人好らしく、見せかけたのは、何時かは君江に油斷をさせるための、井村の策略に過ぎなかつた。

火事の夜のことがあつて以來、君江に對する井村の態度は、掌を反すか如く一變した。慣らされた野獸が一度血の味を覺えると本來の猛惡な性質を發揮して來るやうに、井村は一旦君江の虚に付け入ると、益々深く喰ひ入つて來て、永い間隱忍してゐた怖ろしい正體を現はし始めた。若し最初から井村がかうした態度に出るのであつたならば、君江にしても執るべき手段がない譯ではなかつたが、飽く迄油斷をさせられた上句、自分から許したといふ弱點があるだけに、氣がついた時分にはもうどうにもかうにも出來なくなり、厭應なしに井村の暴虐を甘受してゐなければならないやうな羽目になつてゐた。

井村は怖ろしく亂暴で嫉妬深かつた。以前は君江が留守の處などへ來ても、獨りで温和しく酒でも飲んで歸つたのが、それが近頃、君江が勝手に家でも明けようものなら手のつけられぬほど猛り立つて怒るのであつた。

「大方あの書生ぽうにでも逢つて來やがつたらう。何にも知らねえと思つてやがるだらうが、瓢の一件だつて疾うから己あ知つてゐるんだ」

さう云つて或る時など、井村は瞋恚の炎にもゆる惡鬼のやうな形相をして、君江の髻をとつて引倒した上打つたり蹴たりするのであつた。

「此の儘井村の手に捕つてゐたら、自分の身は終ひにどうなるだらう？」かう考へると、君江は云ひ樣ない恐しさに戰慄した。

君江は强いヒステリーに罹つて、夜など睡られぬことが屢々あつた。そんな時彼女の胸に、知らず／＼犯して來た自身の淺ましい所業が一々思ひ返された。「お前が井村に苦しめられるのは自業自得だ」と耳元で囁かれるやうな氣がした。

後からピカ／＼光る刀を振り上げて井村が追つ驅けて來る、君江は走らうと思へば思程軀が竦んで動けない、それを皆が笑つて見てゐる、ワットソンや祖母なども其の中にゐる。――そんな夢から醒めた時、君江は疲れ切つてびしより汗をかいた軀を薄團の上に起き上つて「わたくしが惡う御坐いました、どうぞ許して下さい……」と云つて泣き伏したりした。

井村の女房といふのは、以前は貸座敷に新造などしてゐた女だといふが、まだ井村がつまらなかつた頃から一緒になつた謂はゞ糟糠の妻で、其の上今では中學へ通ふ程の息子まであつたから、流石の井村も女房にだけは幾分憚つてゐるのであつた。近頃井村が殆んど君江の處へ入り浸りで夜も歸らぬことが多かつたから、それが原因で時々夫婦喧嘩なぞするらしかつた。そんな話なぞ聞かされると、君江は耐えられない恥辱を身に感じた。

しと／＼雨が降つてゐた。もう三日も我家へ歸らない井村は、障子なぞ閉め切つた電氣の明るい座敷で、君江を相手に炬燵で酒を飲んでゐた。稍々蒼白く窶れた顏にかゝる束髮のおくれ毛を掻き上げたりしながら酌をしてゐる君江の、襟の掛つたふだん着にお召の袢纏を肩から辷らせた姿態が、弱々しく艶めいて見えた。

表に俥が停つたと思ふ間に、荒々しく門の戸を明けて人の入つて來る音がした。

「誰でもいゝんだよ、お前なぞに用はないんだから」と、續いて甲走つた女の聲が玄關から手に取るやうに聞えた。

「おい、一寸何處かへ隱れろ」と、井村は盃を置いて君江に眼配ばせした。君江は慌てゝ茶の間へ驅け込んだ。四十前後の丸髷に結つた女が、取り亂した姿で座

敷へ暴れ込むのをチラと見た。座敷では一言二言罵り合うと、忽ちガチャンと物の毀れる音がして、續いてどたんばたんといふ恐ろしい物音が始まつた。君江は半ば夢中でお勝手へ驅け込むと、いきなり其處にある汚い足駄を突つ掛けて、破れた番傘を半開きに水口から外へとび出した。

白い糸のやうな雨が、街の燈火を煙らせて、君江の體を包んだ。

「逃げよう――」

さう思つたばかりで、君江は降る雨の中を驅けた。

君江は上野の停車場の前に立つてゐた。何處を何う歩いて來たかそれは自身にも分らない。――彼女は構内へ入つて、二等待合室の隅の方の長椅子に腰を下した。

「どうしたらいゝだらう――?」

何處へも行く處はない、何處へ行つてもあの恐ろしい井村に捕まつてしまふ、――君江は譬へやうない哀愁が胸一杯に迫つて、壁の方を向いて小娘のやうに歔欷した。

ふと幼い時のある記憶が君江の胸に浮んだ。それはまだ七八つの頃、祖母と母に連れられて、此處から汽車に乘つて善光寺へ行つたことである。祖母と母が授戒を受けに行くといふ時「あの子は生れ年月が宜くないし、いつぞや高島さんに云はれたことも氣にかゝるから、今のうち如來樣を拜ませて置く方がいゝ」と頻りに祖母が云つたので、母は君江をワットソンの方から呼んで來て一緒に連れて行くことにした、と君江は後になつて其の話をきいた。

「さうだ、善光寺へ行つて尼にならう」

穢れた、罪深い此の身は、それよりほかに行く道はない。尼になつたと聞いたなら、執念深い井村でも諦めてくれるに違ひない――。かう思うと、それが自身の宿命であつたやうにも考へられて、強い〱信念が胸に湧き上つた。頭を圓めて、墨染の法衣を身に纏つた自身の姿を、君江は心ゆくばかり胸に描いて見るのであつた。

帯の間に挾んでゐた蟇口には三圓ばかりの銀貨があつた。君江は其の中から二圓足らずの金を出して、長野迄の切符を買つた。十一時廿分の直江津行の汽車が間もなく出る時刻であつた。

大勢の人に混つてプラットホームを歩いてゆく君江の肩をぽんと叩いて「おい」と呼ぶ者があつた。吃驚して振り返ると、それは豫て懇意な角力取の浦の濱であつた。

「あら關取」と云つたが、君江は追手でないのにほつと息をついた。浦の濱は怪訝さうに、異つた君江のなりを看てゐたが、

「今時分何處へ行くんだ？なんだか異な寸法がありさうだなあ」と、にや／＼笑ひながら云つた。

君江はそれどころではない。何にも知らぬ浦の濱が「一緒の室へ乘らうよ」と云ふのをこそ／＼遁げるやうにして人混みに紛れ込んだ君江は、軈て一番後部の三等室の隅に身を縮めて座つてゐた。

信濃の山々は、何處も彼處も眞白な雪を頂いて、此の國ばかりはまだ春の訪れる氣色も見えなかつた。

善光寺では、近ごろ尼上人の御殿に仕へてゐる若い女の身の上が、解き難い謎の一つとなつて、僧房の若僧達や、數珠屋の上さんなどの間に噂の種を蒔いてゐた。それは年比廿ばかりの、まだ髮をおろさぬ美しい女であつた。黎明は三時の撃柝と〻もに朝の看經の支度に忙しく、夕べは六時の鐘を合圖に狗の子一匹門内に通はせぬ嚴かな僧院の生活を、絶えて苦しげな樣もなく、昔は學院の講義を聽きに通つたり、くさ／＼の用事など實々しく働いてゐるのであつた。

下げ髮にして、薄鼠色の着物に黒の帶を貝の口に結び、古風な狀箱など抱えて行く女の、美しくも淨らかな姿に、往來の參詣人が吃驚して、ぽかんと口をあいて見送るのであつた。（完）

早大問題の嚴正批判

——高田博士對天野博士——

鷺城學人

一

從來早稻田學風は我邦私學界の誇りであつた。自由が獨逸の森林から生れた如く、日本の健全なる立憲政治は早稻田より生れるとまで稱せられたが、其の早稻田學風も近年頹廢の氣味で、少くも早稻田學風を慕ふて此に學んだ人々の間には、脫線振りを見て失望するものが多い。特に今回の紛擾——高田對天野事件——は、縱令ひいづれの是でいづれの非なるにせよ、早稻田大學の醜態を暴露したもので、最早末路とするものもある。問題は如何に解決せらるるか今後に徵するの外ないが、啻に早稻田大學に汚點を印したのみならず、多數の校友及び學生に及ぼすべき精神的影響の如何なるかを思へば、此の紛擾を惹起した人々の責任は輕くない。從來世間に傳へられた處は單に表面の事に止つて、未だ眞相に觸れて居ない。而も事は一朝一夕の問題でなく、其の由來する處遠きのみならず、事情もなかなか錯雜して居る。そこで余は少しく問題の眞相を捉へて、嚴正なる批判を試みて見たいと思ふ。

世間に傳へらるゝ表面の原因は、本年八月に學長三年の任期が來たので、何人も博士天野爲之氏が學長を繼續するだらうと思ふて居た。又た氏は純然たる學者にして政黨政派に關係なく、一昨年博士高田早苗氏の

後を承けて以來、學長として何等の失錯がなかつたし、特に高田氏は現に憲政會總務の位置にある人だから、誰しも天野氏の學長繼續を豫期したのは無理もない。然るに高田氏が學長運動を企てた爲めに、天野氏との間にいろ／＼纏綿したイキサツを生じて、終に問題の火の手を揚げたといふのである。斯ういへば事情は簡單であるが、學長問題は表面の結果であつて、裏面の因に及ばなければ是非曲直を明かにすることが出來ない。高田派と言はれる人々の中堅は維持員中の理事市島謙吉、鹽澤昌貞、田中穂積、田中唯一郎氏等、で初め此の人々は天野氏を無能だと言つて高田氏に學長たらんことを申込み高田氏亦た一も二もなく承諾した。そこで市島氏は直に天野氏を訪うて暗々裏に學長辭退を諷すると、天野氏も無論自分は高田氏に學長を讓つて差支ないと言つた。蓋し高田氏と諸氏とは二身同體の關係にあるから、豫め諜謀して作つた詰腹案である。諸氏は天野氏の言を鬼の首でも取つた如く思ふて、直に十數名の維持員を召集し、其の席上に於て市島氏から、天野氏は辭職したいと言つて居るから、高田氏を推すの已むを得ざることを表面拵へて報告すると、維持會員は四人の理事の報告の眞僞を質す必要があるといふので、天野氏の出席を求め、君は實際辭退の意なるか否かを問ふた。其の時氏は自分は高田氏を適任と認めるが故に、氏を推すが好からうと思ふが、若し他に人がなければ自ら學長を繼續しても好いとの意味を言明して其の席を外した。然るに其の後で市嶋氏は、天野氏の無能にして職員を統馭する力なしと罵り、我々四人は斯くの如き學長の下に理事たるを屑しとせぬから、辭職する決心であると申出た。他の維持員も此の不穩の言を聞いて殺風景の感に打たれたが、兎に角今一應高田氏の意嚮を質すべしとて直ちに其の邸に行くと、氏は一議に及ばず學長の任に就くことを承諾した。

天野氏は初め必ずしも學長を繼續する意志でなかつたかも知れぬ。又た高田派が陰險なる詰腹案を作製して氏に臨もうといふ深い目論見のあることを知らなか

つた。然るに市島氏が維持員會で無能呼はりしたことを聽いて、流石の天野氏も且つ驚き且つ激昂し、特に高田派の策略がます〳〵明かなるに及んで、敵愾心を起さずには居られなかつた。是に於て學長問題は發展して、終に高田派と天野派の對抗となつたのである。

二

高田氏が學長を承諾したといふことが知れた時は、丁度憲政會に於て代議士會を開きつゝあつた時で、何人かゞ此の事を憲政會に通じて來た。是れを聞いた一部の人々は高田氏の態度を非難し、爾餘の議員中にも共鳴するものが多かつた。

蓋し氏は早稲田大學を代表し、舊大隈伯後援會を代表し、早稲田系三十餘名の代議士を代表する理由に依て文部大臣に任ぜられ、又た現に憲政會總務に擧げられ、更に憲政會を代表して貴族院議員にも推薦されたのである。然るに憲政會が悲境になると直に元の學校へ復歸するが如きは、他と違ひ法律上政界との關係を斷つもので、得手勝手も餘りに甚だしい。既に總裁を引退するといふ以上、縱令ひ形式にもせよ、少くも一應總裁と相談の上決すべきが順序である。然るに一言の相談もせずに自儘で學長になることを明言したのは、憲政會を無視した沙汰であるといふ感情は何人の頭にもあつた。特に早稲田系の代議士は高田氏に賣られたとして憤慨し、其の中の二三子は刻を移さず氏を訪ふて事の實否を質すと、氏が言下に答へた處は、自分は大隈侯の懇請に依て大臣となり總務となつたので、別に憲政會援助の爲めでない。侯をして老後の誤なからしむる趣旨に外ならぬ。それ故に此の度の事も早稲田大學は侯の學校であるから、學校の爲めに將た大隈侯の爲めに盡力するのは自分の素志である。此の意味より當分政界を去りたいと言ふにあつた。(其の後憲政會の或る一人が再び氏を責めて貴族院は如何すると言つた時、場合に依ては貴族院議員も辭して好いと答へたさうである)處がそれでは後に殘つた三十餘名の代議士が困ると、數回早稲田倶樂部に會合して氏を學長にさせないことに相談を定

めた。若し氏が見す〳〵德義を無視する行爲を敢てするならば、場合に依ては憲政會から除名されるかも知れぬし、除名されぬまでも攻撃されれば、學長になつても早稻田の名譽でないといふ議論が勝を占めたので、道の高田氏も一時當惑せざるを得なかつた。

高田氏は周圍の空氣が己れに不利なるを見、殊に天野氏の憤怒せるを知つて、一先づ學長を斷念するの餘儀なきに至つたが、氏の早稻田大學に對する執着心は依然として強い。表面學長にならぬまでも、少くも早稻田大學の實權を握らなければならぬといふ考へがある。そこで多智多策なる氏は更に第二策を案じた。學校制度改良案即ち是れである。

此の第二策は氏が小田原の別莊で考へたもので、直ちに一味の人々と謀つて今後の手順を定め、先づ維持員會の再會を求めて之れに附議した。其の申出の理由といふは、最早今日となれば天野氏も學長を罷め、自分も學長にならない。そこで是れまでの制度を改めて教授會と維持員會と評議員會の三機關の決議に依て、共和的に學校を治めて行くようにしては如何かといふのである。而して此の制度の必要を力說するに當て頻りにデモクラシーの語を用ゐ、今日の社會はデモクラシーの主義に據らなければならぬことを露骨に言つた。そこで或る一人の如きは此のデモクラシー若くは共和的といふ語を捉へて、早稻田大學に一種の共和制を布くといふが如きは、一たび文相の職にあり、又た多年教育の任に當つた高田博士としては、言語上不穏なるのみならず、斯ういふ思想が學生の頭に入るようなことがあつては頗る憂ふべきことであると難詰した。是れに就ては種々議論の末、一先づ斯ういふ制度にして置いて、萬一學長を必要とする場合が起つたならば、三會合の委員中より互選するの案を出した。兎に角案其の物は一通り理窟だけは立つて居る。

三

早稻田大學一切の問題を三機關に依て定め、而して學長を互選するの制度は、飽まで天野氏を排斥せずんば已まぬといふ結論になる道理で、斯くすれば自然高

田派に主力は歸し、是れに依て高田氏が實權を握らうとの策に外ならぬ。

維持員會も評議員會も高田案を決議し、此の決議を以て天野氏に、此の際双方學長を辭退して、共和團體に學校の主權を附與せんことを申込んだ。が、天野氏は斷然之れを刎ねつけたので、問題はます〳〵面倒を加へた。天野派は此の申出を峻拒すると同時に、學長の名を以て直に全國校友大會を開く手續を取つた。元來校友大會は毎年七月卒業式に例會を開き、幹事を改選する慣例になつて居るのを、本年に限つて舊幹事をそのまゝにして置いたから、新幹事若干名を獨斷で選任し、新幹事の名義を以て臨時校友大會の期日を定め、事の是非曲直を聽くことにした。既に印刷物まで出來上つた頃、高田派の方では之れを聽いて俄に狼狽し、天野派に爾ういふ事をさせては味方の不利此の上もなしと、高田氏と市島氏とが專ら采配を振つて直に舊幹事を早稻田倶樂部に召集し、幹事の名を以て大隈總長に急を告げると共に、維持員會に對して、臨時校友大會を開くことを差止めて貰ひたいと要求した。又た一方天野氏に對しては、早稻田系の代議士數名が行つて斷然大會を見合せて貰ひたいと申込んだ。そこで天野派も強ゐて固執せず、一先づ大會を中止することになつた。

早稻田大學の評決機關中、評議員會が最も有力で、主もなる敎授と校友とに依つて組織され、校友は東京在住者約三十名、地方在住者約三十名之れに加つて居る。其の評議員會は早稻田の紛擾を耳にするや、數回會議を開いて高田氏と天野氏の間を調停せんと試みたが、高田派は評議員を自派に引込むことに極力運動し、一時高田が政界を退くといふので驚いた早速整爾氏なども、元々後援會の爲めに代議士に當選し、衆議院副議長を僥倖した關係から、終に說伏せられて高田派に變つた。其の他引入れ運動効を奏して東京在住の評議員の殆んど過半は高田氏に味方し、地方へは特使若くば長文の電報を發して手を著け、鹽澤昌貞、田中唯一郎、黒川某、山澤某等專ら遊說の役割をつとめた。

高田派の評議員は早稻田倶樂部若くば中央亭に密會し、遊說の結果自派に成算ありと認めたので、さてこそ築地精養軒に臨時評議員會を開いたのである。其の席には高田派の外に天野派も出席し、兩派に臨せずして冷笑の態度を執るものも少くなかつた。初め高田派は抑へつける勢ひで臨んだが、天野派の正義の叫びが案外强かつたので、思惑通り行かなかつた。兎に角双方の間に隨分議論があつたらしいが、結局東京より松平賴壽、山田英太郎、大阪より砂川雄峻、平田讓衛、小川爲次郎の五氏を委員に擧げて善後の相談を託した。が、是れは單に形式的委員であつて、此の五氏の力で圓滿にケリを附けることは困難で、或はこれから益々內訌の火の手が盛んになるかも知れぬ。早くも九月の學期までに問題が解決しさうにない。假りに臭い物に蓋をする筆法で、無理押付に始末をつけても、一且穿たれた龜裂は容易に復舊すべくもない。特に幾分なりとも高田派の勢力が裏面に殘つて居る間は、早稻田大學を伏魔殿より救ふことは困難である。

四

以上は紛擾の徑路の眞相を敍したのであるが、これより更に進んで果に對する因の眞相を論すべき順序である。早稻田學風の頹廢に就ては原因の種々なるも、既に大隈內閣のとき早稻田大學を政權の具に利用し、更に高田氏が文相に任ぜられて全然或る政黨の機關學校化するに及んで、其の獨立の位置と權威とを失ふて居る。少くも職員生徒が有頂天になつて後援會騷ぎをした時に早大の脫線を事實に示したのである。

先づ第一に起るべき問題は、何故高田氏が罪も業もない天野氏を逐ふて、自ら學長を取つて代るべく比周畫策するに至つたかと言ふことである。文相を罷めて以來氏は頓に一身の寂寥を感じ、政權に換ゆるに校權を以てしようとの野心から來て居ることは爭ふまでもない。氏は早稻田系を代表して憲政會總務の位置にあるけれども、氏と加藤派との間は豫てから圓滿を缺いで居る。蓋し氏は前內閣時代から大隈侯の參謀長を以て任じ、事毎に侯を笠にきて憲政會を瞰下す氣味があ

つた。特に憲政會から土佐派を放逐しなければ獨立することが出來ないなどと公言したとかで、安達、仙石、片岡、富田氏等はます／＼氏を忌んで、兩者の間に越すべからざる溝渠が穿たれることになつた。加藤總裁の如きも豫てより氏を面白く思ふて居ない。昨年大隈内閣が行詰つて總辭職と決し、首相の侯が加藤子を後繼者に推薦までした時、其の間に明かに手落ちがあつて、山縣や寺内に空間を突かれたのは事實である。是れは高田氏が自分に知つた顏をして機會を誤らしめ、或は仲に入て侯と加藤派の面會を妨げた爲めに、終に敵に乘ぜられるに至つたのだといふので、憲政會中には其の罪を氏に歸して居る。現に安達、片岡、町田氏の如きは公々然之れを明言して居る。處が憲政會に言分ある如く、高田氏の側にも言分がある。氏が文部大臣の紀念として殘さうとした例の學制改革案に對し、憲政會は纔にお義理一片に黨議の一に加へただけで、氏は甚だ之れを遺憾に思ひ、其の不熱心なる態度に就て加藤一派に嫌焉たらざるものがある。斯ういふ理由で、氏は憲政會にあつても餘り居心地の好い方でない。

　氏は進歩黨時代より自分の不平と野心の爲めに、いろ／＼小刀細工をして黨内を攪亂したといふので、一部のものに忌まれて居た。又た最近の出處進退に就て言へば、初め大隈侯の出盧を侯晩年の爲めにも、早稻田大學の爲めにも、不可なりとして諫止しながら、後に至て無雜作に入閣し、益々學校を黨爭の渦中に引入れたことを批難する人々も尠くなかつた。今度も憲政會の側から見れば、態度の輕薄を云々すべき理由がある。氏が貴族院議員に任ぜられたのは、憲政會を代表し、早稻田を代表する以外に、貴族院の鬪士としての意味がある。然るに過ぐる特別議會には政府と鬪はずして憲政會の窮狀を餘所に見たのみならず、總務辭任の結果となるべき復校問題に關しても、總裁に一言諮らなかつたのは、多少德義に病む處なしとは言へぬ。

　昨年氏が憲政會に入つたのは思惑違ひの結果になつた。蓋し氏が三派合同の策士として熱心に憲政會の

めに奔走したのは、必然政權の憲政會の手に落つべきを期待したからであるが、事は總て豫想に反して寺內伯が內閣を組織する、選擧には散々な敗北を遂げる、憲政會は段々左前になる、自分に對する反感が黨內にある。それやこれやで氏は足もとの明い中に憲政會を逃出す爲めに、さてこそ「天野殺し」の一策を案じたのである。

五

若それ高田氏及び其の與黨が早稻田大學の主權を握らんと焦慮する第二の眞相に至ては、第一の理由と異り、歸する處金錢問題にあつて、場合に依ては由々しき問題の起らぬとも限らぬ。

殊に大隈內閣の出現するや、早稻田大學の職員學生及び一部の關係者は恰も早稻田大學が政府を取つて代つたかの如く心得て後援會なるものを組織し、特に一昨年の選擧に際して早稻田系の候補者の爲めに應援大に努め、從て後援會が前內閣擁護に投じた經費は可なり莫大なものである。併し此の經費は大隈侯の懷から出たと思はれぬ。內閣の機密費を流用したとも思はれぬ。又た關係者中斯かる學校事業と沒交渉な運動に寄附したとも思へぬ。そこで問題は金の出所であるが、實は高田氏が大學基金の中から假拂ひの形式で支出したのである。此の基金流用問題の外に、下戶塚村の運動場買收、理工科機械費の紛紜、巢鴨の不用地買入事件なども、總て基金中から不正支出になつて居る。元來高田派は早稻田大學を一の利益事業に利用し、日清生命保險といひ東洋印刷といひ、孰れも一派の營利機關で、高田氏を中心として之れを圍繞する人々の內部は一の伏魔殿である。高田氏の學長中は臭い物に蓋して來たし、天野氏に至ても固より箇中の消息を知らぬではないが、氏の圓滿なる性格に加ふるに早稻田大學の名譽の爲めに、之れを表面の問題とするに忍びない。況んや經濟上の主權は高田派が握つて居るから如何ともしようが無い。然るに高田氏の術策は學長問題から暴露し、流石の溫厚なる天野氏も多少意氣地になつて學長を辭さないと明言したので、弱點ある高田氏と其

の一味は空恐ろしい痛みを感ぜずに居られない。そこで如何しても天野氏を逐ふて主權を自派に收めなければならぬ必要を生ずる道理で、其の目的を達するか達せぬかは高田派に取つて死活問題である。

高田氏及び氏の野心を援助する某々理事の早稻田大學を誤る小人的行爲は固より指彈すべきであるが、斯くまでに糜爛せしめ、斯くまでに脫線せしめた抑々の責任者を嚴格なる意味に論ずれば、總長たる大隈侯其の人ではあるまいか。

六

大隈總長は從來早稻田大學に對して如何の態度を執つたか、又た今回の紛擾問題に對して何樣の處置に出でたかといふに、批議すべき點が多いのである。少くも學長問題に至ては、侯自ら紛擾の種を播いたと認むべき理由がある。前年進歩黨に改革派非改革派の內訌沙汰が起つた時も、侯としては進歩黨の生みの親であり又た總親分たる立場から、公平に捌きを附くべきであるに、兩派の爭ひを鎮撫せずして却て煽揚する傾きがあつた爲めに、終に分裂の避くべからざるに及んだ。今度の遣口も是れに類して居る。

高田、天野、坪内の三氏は早稻田の三尊であるけれども之れを侯から看れば自分の書生同然の人々で、面前に呼付けて說諭すれば誰れ一人反對するものもなく、何事も雜作なく解決するのである。今度關係者中の心あるものが學長問題の爲めに熱心に奔走しなかつたのは、大隈侯があるから萬事侯の裁斷に一任して好いとしたからでもあらう。然るに侯は自分の位置を忘れて私情に囚はれた偏頗な裁判をした。最初の出方が誤つて居るから、却て薪に油を注いだような結果になつたのである。

侯は從來高田氏を贔屓すること尋常一樣でなく、一にも高田二にも高田で、他の何人も寵を爭ふものがなかつた。それ故に今度の問題に就ても、初めより高田派の運動に利なるが如き態度に出で、一方の天野氏に對しては面と向つて學長を辭退せよと言つた。其の時氏は熟考すると言つて引取つたが、後に至て書面で

長を辭するを得ずと答へ、是れが紛擾の導火線となつたのである。

何故侯が天野氏を抑へて高田氏を庇護するかといふに、是れには二つの原因がある。侯は今猶ほ政治上の野心があつて、高田氏の遣口の是非は別としても、猶ほ氏を政治上に用ゆる未來を豫想して居る。之れに反して天野氏は君子人にして學者であるから、政治上に利用することが出來ない。是れが第一の理由である。第二は牝雞の晨することである。由來氏は臺所より入込むことが得意の人と見え、嘗て前島密男が校長たりし時、臺所から出入して男の息女たる今の夫人を得た。乃ち此の筆法で綾子夫人に取入り、夫人も二なきものに思ふて夫侯爵に吹込むから益々顧みられる。高田氏なら案内なしに大隈家の奥へ通れるが、天野氏は玄關口に案内を乞ふ丈けの區別がある。昨年の秋大隈侯の銅像が芝公園に建てられた時、大學部内に綾子夫人の銅像を建てるといふ議が起つたが、是れは無論高田氏が綾子夫人に媚悅する爲めである。當時天野氏は侯に次いで早稻田の恩人たる故小野梓氏の銅像を立てるなら格別、夫人の像を造る必要を認めぬと言つて反對した。少くも是れなどが綾子夫人の逆鱗に觸れ、延いて今度牝雞の晨になつた原因の一になつて居りはせぬか。

斯くの如く大隈一族（信常氏は初め天野派であつたが、今は高田派に豹變した）が高田氏に厚くし、一部の理事が利益關係から氏に結び、職員及び校友の多くは從來直接間接に世話になつて居るから、自然高田氏に味方し、從て天野氏の勢力は初め微弱であつた。然るに正義派が天野氏に味方し、學生の多數も之れに共鳴したので、漸く氏は血路を見出すに至り、又た初め高田派に傾きつゝあつたもので少し旗色が好くなつて來ると天野派に加はるようになつたのもある。嘗て高田氏は故鳩山和夫氏を毒殺して校長の位置を取つて代つたとがある。其時政治上反對の位置にあつたものも其の非、高田にありとして鳩山に同情した。此の先例を見て今度も第二の毒殺事件とするのは無理もない。

公平なる社會の判斷から言へば誰が何と辯解しても、事體其の物は高田氏に不利である。縱令ひ複雜した裏面の事情を離れて、單に學長といふ點から評しても、早稻田學風の獨立を維持する爲めには、純學問の上に立脚する天野氏を適任としなければならぬ。高田氏の早稻田大學創業の功は沒すべからざるも、而も實權を高田派に委ぬるは、早稻田大學の利益でなく、改革のキーノートは其の點にある。少くも高田氏側近の市島謙吉田中唯一郎二三號は其態度を改めねばならぬ。兎に角高田氏は自己の野心と術策の爲めに自殺の結果となつた。(八月八日稿)

湯女物語「若僧の妄念」

松崎天民

■

死だ桃中軒雲右衛門のために、心易い仲間であつた極く小數の者が集つて、追悼會を營まうと云ふ議が起つた。私が其の要件で、淺草公園六區の常盤座の樂屋に、新俳優佐藤歲三氏を訪ねたのは、七月下旬のことであつた。

常盤座では、ジャスマンの作詩を松居松葉氏が譯した(血染の戀)を演じて居た。女主人公の盲女マルガレーには、新劇壇出身の女優村田榮子が扮して、死だ新派の女形小島文衛を偲ばせる樣な、仇氣ない女性の表現に、特殊の天分を發輝して居た。

私は佐藤氏との要件を果して、階段の降り口に在る榮子の部屋の前を通つた。汗になつた洋裝を脫ぎながら、榮子は莞爾して、「暑いぢやありませんか」と

た。「舞臺勞働も大變ですね、斯う暑くては……」私は何の氣もなく、榮子の部屋に入つて、煽風器の前に座つた。榮子の隣には老女優の淺野壽磨子が、「野村三千造」に出る雛妓の扮裝をして居た。

「私、何時か、貴郎に聞いて頂かう〳〵と思つてます、面白いお話がありますのよ。貴郎は情話家を以て、任じてはおいでなさらないでせうけれど、それはそれは面白いお話なのよ。」

「大變、功能入りの話なんですね。あなたの樣に云はれると、是非聞かして下さいと云ひたくなる……。全體、どんなお話？」

「え、申上げますわ。これも何かの功德になることつてすから……。書いて上げて下さいましよ。」

村田榮子は、圓い顔に微笑を湛えながら、それでも極めて眞面目に、次の樣な譚をした。――

■

仙臺から十二里の山奥に、鳴子と云ふ溫泉場がある。仙臺で乘換へて、新庄行の汽車に乘れば、岩手山驛で下車して、そこから鳴子溫泉まで、馬車も自動車も行く。然し仙臺から古川までを自動車で行き、そこからガタ馬車で行く方が、普通の道順でもあれば、また便利でもあると云ふ。

聳え立つ山又山の麓を、幾曲折したどん底の溪間に、鳴子溫泉の淋しい村は、雪の中に埋れて居た。十二月も大晦日に近い山國には、名を知らぬ鳥が啼いたり、山猿がキヽと物凄い聲を立てたり、四邊は悉く白い色の中に、すべての物が氷り着いて居た。膝の上まである深い雪の一筋道を、辿り〳〵した背後から背後から、吹雪は足跡を埋めて積つた。

鳴子には溫泉宿が六軒あつた。小さい三軒の宿屋には、内湯と云ふが無く、何れも外の共同湯へ入浴に行かねばならぬ。三階造りの大湯宿は、三軒とも内湯を造つて、そこには數多い湯女を置いて居た。殊に湯泉樓と云ふのは、鳴子第一の湯宿で、湯女にも美人のお濱、お政など、取沙汰に上つて居た。鐵が銀色に化ると云ふ銀泉と、銀が金色に化ると云ふ金泉と、それが

鳴子の特色であつた。湯泉樓の前を流るゝ溪水は、同じ一つの流れでありながら、行く水の方は、熱くて、歸る水の方が冷たいのも、鳴子溫泉の評判になつて居た。

新劇壇の地方巡業に、不覺の御難が續いて、一座は別れ〳〵に離散してしまひ、遂に村田榮子たゞ一人が、人質同樣の囚はれの身となつて、此の鳴子溫泉に辿り着いたのは、大正元年も雪深い、師走であつた。戀人の門脇と、南へ北へ別れ路の、賣られ行く身に似た憂さの眼に、榮子の涙は、絞るに餘りある袂に氷つた。ふりかへり見れば仙臺は、何處やら、榮子は東京戀しと泣いた。

湯泉樓には、雪に降り込められた土木技手や、請負師の群などが泊つて、淋しい雪の中にも、溫泉宿の悠たりとした氣分が漾うて居た。その女中部屋に隣した六疊の室に、小さい信玄袋を下した時、榮子はそれでも、「まアよかつた」と云ふ樣な、輕いあきらめに、初めてホツと吐息をした。——

「面白いお話つて、その湯泉樓に居た湯女の身の上話なんですよ」

現實に復つた榮子は、斯う云つて、アイスクリームを口にした。「野村三千造」の仕合が舞臺から勇ましく聞えて來た。

■

「その湯女は、お若と云つてました。二十八か、九に見えましたが、もう三十か一位でしたらうよ。斯う眼の釣り上つた、細面の色の白い、凄いほどの美人でしたわ。それが貴郞、深夜の二時、三時頃になりますと、ソーツと起きましてね、長火鉢の前に立膝をして、何か知ら呪文みたいなものを唱へるのです。洗ひ髮を長く背後に垂れまして、色の褪めた少し黑つぽくなつた緋縮緬の長襦袢一枚に、淺黄の伊達卷を締めてるのでせう。長火鉢の四隅には、お線香を一本づゝ立てまして、ホノ暗い洋燈の下で、斯う合掌して、一心に何か云つてる姿つたら、凄いぢやありませんか。その線香の匂と、お若さんの何か唱へる小さい底力のある

聞きますと、何も知らぬ私達まで、引き入れられる樣で、氣味の惡るさつたらありませんでした。それが殆ど毎夜の事なんですからね……」

榮子は斯う云つて、不思議な其の女の過ぎ來し方を、落着いた口調で語り續けた。――

さうした不思議が、恰度三晩つゞいた夜明けの六時頃、榮子は遂に堪り兼ねて、お若の部屋へ入つて行つた。線香の烟は、曉の狹い部屋へくもつて、四邊は陰に、冷たい氣持に閉ざゝれて居た。

「あなた、見たの……」

最初に言葉をかけたのは、蒼白い顏のお若であつた。その姿は、病人の樣に、力が無かつた。

「えゝ、何うしたの、お若さん。毎夜の事なんでせう、私、もう怖くて〱……。だけど、何か、事情がお有りなさるのだわ、ねえ。一人で思ひ詰めなさるよりは、私の樣な者にでも、ね、お若さん、打明けて下さらない?……」

「御覽になつたのなら、もう隱しはしませんわ。あなたの樣に、御深切に云つて下さいますと、私、泣きたくなりますのよ。……此の話を、千人の方にしてしまはなければ、私、死なうと思つても、死なれないんださうです。今、あなたに打明けますと、恰度、八百六十一人目、あと百三十九人の方にお話して、それで私は死にますのよ……」

「死ぬるの、生きるのと、そんなこと仰るもんぢやないわ。けども、よく〱の事がお有りなさる樣だわね。お顏色も惡いんだし、私、こゝに來た時から、何だかあなたのこと、妙に氣にかゝつて居たわ」

「御深切にね、ほんとに同情して下さいましな」

お若の打明けた身の上話を聞きながら、榮子は運命と云ふものを、呪はしい氣持になつて、恨みもし、哭きもし、嘆きもした。

■

――お若の身の上話――

秩父大宮の宿屋に、一人娘と生れてから、お若の十六までは、平和な歳月が續いた。

お若は早熟の方であつた。店の番頭武井仁四郎を、其のまゝ婿養子にして、お若は十六の秋から、大一番の丸髷に赤い手柄を懸けて居た。「秩父屋のお若、好い女房、十六娘が丸髷結うて……」町の子守女は、口々にお若の美貌を囃し立てた。

けれどもお若は、仁四郎を心から厭がつて居た。店の商賣上の便利や、生活向の方便のために、無理强いに仁四郎を押し付けた父母の量見を、お若は心から怨じて居た。それに仁四郎は、美しいお若の良人となるべく、餘りに齢長であり、餘りに好い男振りではなかつた。丸髷に結つたのも、ほんの當座だけで、お若は何時も、銀杏返しやS巻にして、帳場の奥に引込み勝で居た。果は良人の仁四郎と、ひとつ寢するを嫌つて、お若は離座敷の佛間に、香ばかりを炷いて居た。

その佛間には、月の七日と十三日とに、必ず山の宿から若い僧侶が來て、經を誦するのが例であつた。祖父の忌日の七日には、在世の頃から好きであつた白骨の御文章を、若僧は美しい聲で詠んだ。祖母の命日の十三日には、お若の知らぬ經を讀むで、南無阿彌陀佛々々々々々々々々と云つて居た。十四五歳の時から、その若僧の接待は、お若の受持であつた。番頭と夫婦になつてからも、お若は若僧の前に出ると、何時も生娘の様な、仇氣ない嬌態をつくつて茶よ菓子よと勧めた。時には二時間も三時間も、二人で話し合ふ事さへあつた。

若僧は了寛と云つて、二十四歳になつて居た。青味を帶びた恰好の好い坊主頭、濃い一文字の眉、隆い鼻、引締つた口許、霑ひのある眼許など、一切是空の僧侶に置くは、惜しいほどの器量に見えた。色白の脊はスラリとして、黑い法衣の袖袂に、抹香の移り香は、痛ましいとさへ眺められた。町の子守女達は「山の宿の了寛さん、木の股からでも生れはしよまい、たまにや此方へ向かしやんせ」などゝ、唄つて居た。そして「了寛は名僧智識になる、まア見て居さつしやい」と云ふがあれば「あの若さと、あの器量では身が持てまい、堕落破戒の生臭坊主にならねば宜いが」などゝ、口善

悪なく取沙汰するもあつた。

お若は十三四の頃から、人知れず此の了寛に、綿々の思念を寄せて居たのであつた。それと明ら様に、言ひ寄る術もなくて、遂に番頭仁四郎と夫婦になつた事を、お若は何んなに本意ない事に嘆いたであらう。了寛とても、佛の道に分け入つて、色即是空の悟道を體して居ても、若い其の心の一隅には、堪え難い熱情が潜むで居た。お若のさうした心持を、淺間しと見て捨てかえり見ぬ程に、了寛は未だ修業を經て居なかつた。

二人は遂に、父祖の佛間に於いて、取返しのつかぬ罪業を重ねた。——

「お若さんは、その番頭と夫婦になつてからだと、たしか左様、云つた様ですけれど、どうもねえ、夫婦になる前からだつたらしいのですよ」

榮子は、斯う註釋した。

■

三峰山の中腹に、一筋、帶の様に雲が懸つた。その雲、或る時は峰に漂ひ、また或る時は麓にこめて、風を起し、雨を降らした。

けれども中腹に懸ることは、三年に一度か、五年に一度しかなかつた。町や村の人達は、これを稀有の事にして、恐れ且つ怖れて居た。

「雲の帶が懸つたぞい、異つたこと、無かつぺいかな。皆、氣い付けろ、よう」

土地の人々は、これを「雲の帶」と呼で、三峯山に此の帶が現れた時には、必ず人界に異變が起る由を、古へから言ひ傳へて來た。何者かゞ天の赦さぬ不淨、惡事、罪科を犯した時、山靈はそれに誅罰を加えるため、怒つて雲の帶を卷くのだとも、古老の間に言ひ傳へられて來た。

その雲の帶が、土地の平和を惑亂して、戰々競々、寄ると障ると其の噂ばかりの中に、了寛とお若とは、人目を忍んで駈落した。

「言はねえことか、寺の坊主と宿屋の若女房だんべ。道理で雲の帶、濃かつたゞよ」

然し、戀に狂うた若僧とお若とは、雲の帶の祟りな

どを、寄る心持にはなれなかつた。二人はたゞ狹い秩父の山奥から、廣い自由な世界を求めて、其の日〳〵の不安な快樂を追ひながら、兩國橋を渡り、雷門を過ぎた。そして、馬道のおでん屋の二階を、當座の隱れ家にして、先づ生計の道を尋ね求めた。

身を助ける程の藝もなく、手内職にも馴れぬ二人は、日蔭の隱れ家で、因果の子を生まねばならぬ貧しい冬を迎へた。山の宿の坊さんとしては、村の娘の心を動かした了寛にも、女と二人口を支へるだけの手腕は無かつた。着のみ着のまゝの中に、生れ落ちた男の子を抱いて、お若は今更に途方に暮れた。

「何も彼も、雲の帶樣の祟りであらう」

斯う思ふと、嬰兒(あかんぼ)に含(ふく)ませた乳の疼(うづ)きが、一層、身を殺す樣に切なかつた。

色も、戀も、其の日の乏しい糧の前には、何の力にも、何の慰藉にもならなかつた。二人が吸み合した不義の戀の甘酒には、微ながらも未だ溫さが通うて居ても、二人には先づ何よりも、生きねばならぬ問題があつた。そして遂に女の口から、別れ話を持出すべき日が、生れた嬰兒の十五日目に來た。

了寛は容易に承知しなかつた。今更、秩父へ歸つても、住職に叱られるばかりとのみで、一向、意氣地と云ふものがなかつた。けれども、道ならぬ戀をしたほどのお若には男に見られぬ雄々しさと、一所懸命さとが萌して居た。子供の始末やら、自分一人の糊口やら、思ひ餘るほどの重荷を背負ながら、遂にお若は了寛を突き放した。

「あなたはあなた、私は私、當分さうして暮すより他に、好い思案はありませんから……」

斯うして男と別れたお若は、淺草千束町の桂庵に賴んで、嬰子を豐多摩へ里子に遣り、漸と一人身になることが出來た。——

「流轉の生涯は、これからなんですね」

私は斯う云つて、榮子の顏を見た。

「これからが、物凄い怪談になるのですわ」

榮子は斯う云つて、私の額を見た。

■

千葉の小料理屋に、酌婦となつたお若の姿を見たのは、佐倉神社の櫻が、咲き初めた頃であつた。十九になつて居たお若は、子供を生だ女とは見えぬ程の若々しさで、色好みする男達の仲間に、持囃されて居た。

その年も、やがて薄ら寒い秋の晩がた、思ひ設けぬ消息が、秩父の方から來て、お若を驚かした。それは實家に居る母親が、病氣やら心配やらで、「お若、お若」と、三日三晩と云ふもの、云ひつゞけ呼びつゞけて、呼吸を引取つたと云ふ、痛ましい知らせであつた。

二三年の間と云ふものは、濁れ傾つて居たお若の心も、その時ばかりは、謂ひやうの無い眞面目さに、引戻された樣な感じがした。生きて秩父に歸るべき身ではないが、然し久しい間忘れて居た家居の樣なども、思へば堪え難いほど戀しくなつた。罪に暗い追恨の彼の佛間で、佛に成られた母上樣に、亂れた此身を何と御詫して宜いやら……。お若は一切の恥辱を忍んで、たとへば屠所に引かれる小牛の遲々として、生れ故郷へ連れて行かれた。

良人を捨て、實家を捨て、許されぬ戀の營みに、二年餘りの月日をさすらつて居た間に、秩父の世間も大分、樣子が違つて居た。好人物の良人仁四郎も、お若の不行跡には、さすがに胸を亂したものか、それとも男一人の寂しさに、自棄氣味さへも手傳つたのか。家には土地の小料理屋の酌婦上りを入れて、妻同樣に遇らつて居た。天の赦さぬ不行跡に、心も身をも痛め煩つて居たお若は、たゞ良人仁四郎の純潔な感情に縋つて、新しい道に入らうと、おぼろ氣ながらも、その事のみを唯一の賴みにして居たものを。折角、歸つて來た秩父の我が家も、もう昔の儘ではなかつた。そこには一抹の暗い陰影が搖曳して、蘇生らうとしたお若の心を、又してもあらぬ方へ引き摺り込むのであつた。

それに尙ほ一つ、お若の胸を驚かしたのは、東京で突放す樣にして別れた了寛が、山の宿の寺に歸つて居たのであつた。讀經勤行の他には生計の道を知らぬ了寛は、破戒の佛罰を怖れ戰きながらも、幼い頃から育

てられた山の宿に、哀憐を乞ふより他に途がなかつた。寛仁大度な住職は、尺に餘る長髯を撫しながら、「色則是空ぢや、未だ修業が足らぬ、判つたか」と、たゞこれだけを言つて、汚れた了寛の身體に、冷たい山の水を浴びせた。了寛は新しい法衣に復活して、一日一夜を御堂に籠り、御厨子の蔭に慟哭した。

やがて其の年も秋が來て、寺の大きな公孫樹に、冷たい風の吹く頃となつた。お若は沈み勝な念の上に、兎もすれば浮かび出やうとする、過ぎし日の歡樂を描きながら、山の宿の方を仰ぎ見る樣になつた。そこには母の墓があり、また彼の了寛さんが棲で居る……。黄菊白菊三五輪、母のお墓へ手向けの殊勝さに、狹い土地の噂を欺むきながら、心は寺の了寛の皮膚の香を慕つて燃えた。

了寛とても同じ思の、一度び破つた戒めの怖ろしさは、秋風と共に忘れる樣になつた。夕に撞く鐘の音よ、お若の胸に響けとばかり、冷たい法衣の思念の底は、昔の睦言に波立つた。

斯うして、二人は又、人目を忍んで逢引する仲になつた。「坊主、迷はしや、七代たゝる」とお若はそんな事を、思はうともしなかつた。

■

「斯うした戀の大詰は、どうせ悲劇なんですわ。二人も矢張り、小說や芝居のやうに、飛でもない道へ迷つたんですね」

榮子の表情は、次第に緊張して來た。――

思ひ詰め迷ひ詰めた二人は、天にも地にも身の置き所ない、破滅の戀に囚はれたのであつた。佛罰の怖ろしさと、不貞の戀の報ゐと、了寛もお若も、生きて現世に添え遂げ得ぬ因果の戀を、死で暗い地獄の道に微笑まうと覺悟したのであつた。

斯うして二人が、秩父の町外れに落合つたのは、木枯し寒い十一月二十七日の黄昏であつた。三峰山には、不思議や又「雲の帶」が懸つて、村人は此の忌はしい異變の前徵を、呪はしい氣持になつて眺めて居た

「ピストルも、刄物も無い。住持の部屋の抽斗から

この藥を盜つて來た。阿砒酸と云つて、服めば直ぐ大往生が出來る恐ろしい毒藥ぢや。これを服で歩きながら、行ける所まで行つて死なう」

了寬は蒼白な顏をして、慄へ聲に力を入て云つた。お若はもう、大きな魔物にでも、深い淵瀨の底へ引込まれる樣な氣持で、おづ〳〵しながら男の背後に從いて行つた。

秩父の町を小一里も放れた頃、了寬は持て居た毒藥を二つに分けて、其の一包をお若に渡しが

「今更、何も言ふ事はない。私の樣な者と、道ならぬ戀をして、死なねばならぬお若さんを、私は心から不憫に思ふ。恕してくれ、恕してくれ……。次の世には、明るい月日の下に生れて、晴れて夫婦になれるのぢや。何も彼も因緣ごと〻、あきらめて貰ひたい。南無阿彌陀佛、々々々々々々」

了寬は涙をこぼしながら、お若の手を握つて、歔欷いたり、啜咽いたりした。

「濟みません、濟みません。何も彼も私が惡いからです。勘忍して下さい、勘忍して下さい」

お若も斯う云つて、聲を上げて泣いた。けれども心持の何處やらには、「死では詰らない」と云ふ强い囁きが、お若を引き戾さう〳〵として居るらしいのを感じた。芝居の眞似事でもして居る樣な、輕い馬鹿々々しい感じが、何と云ふ事なしに、お若を戰慄させた。

男は遂に毒藥を服だ。

「服だよ、服だよ。お前もお服みたか。さア一所に手を引き合つて行かう。死ぬるまで、此の手を放してはいけない、放してはいけない……」

お若も服だらしい樣子をしたが、實は男に隱して、ソッと其の白い粉末を棄てたのであつた。そして生死の境から、漸とのがれた安心に、胸撫で下しながら死に行く男の斷末魔から、一刻も早くのがれ樣とあせつた。

「あゝ苦しい、苦しい、苦しい。お若、お若、お前も苦しいか。苦しいか。早く殺してくれ、殺してくれ、殺してくれ。苦しい、苦しい、苦しい」

了寛は一歩も動けなくなつて、路傍に倒れた。

「お前も苦しいか、濟まない、濟まない。許してくれ。許してくれ。ウーン、ウーン」

七轉八倒の苦しみとは、毒死の斷末魔を云ふのであらう。男はお若の手を握つたまゝ、次第に冷たく、硬張つて、兩足をピリ／＼とさせた。それなり、呼吸は絶えた樣であつた。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！」

お若は、男の冷たい死骸を捨てゝ、一散に逃げた。了寛が「すまない、すまない」と叫ぶ苦しい呻きが、何處までもお若の胸に響いた。

三峯山の雲の帶は、その夜の未明になると、痕跡もなく消えて居た。山の宿の公孫樹には、烏が厭な調子で啼いて居た。

■

それから後のお若の月日には、悲しい零落と悶えの流轉とがつゞいた。

何の深い思慮もなく、たゞ「怖しい死」からのがれたお若の半生には、罪の報ひが執念く附きまとうて、仰ぎ見る日の光さへ、灰色に曇つて鬱陶しかつた。お若はやがて東京に出て、其所此所の桂庵に出入しながら、身の落着きを求めて歩いた。烏森の待合俵屋に女中奉公して、二月ほど客席に出たけれど、それも長くは續かなかつた。

血の道を病で居る女の樣に、お若の頬は蒼白く痩せて、額の生え際から、脱毛が白粉の瓶に落ちたりした。廣い東京にも身の置き所なかつたお若は、宇都宮、水戸、福島を經て、仙臺の小料理屋に、酌婦となつて住込でも見た。けれども其處でも、「陰氣な厭な女」とのみ云はれて、安らかに睡眠ることさへも、思ふにまかせぬ幾夜がつゞいた。北の涯の青森は、雪風寒い宿屋の廊下に、我が世の變轉を嘆きながら、お若の胸は冷たく慄へた。この儘で斯うして、朽ち果て行く身かと思へば、今更の樣に先立ち行つた了寛が戀しく、里子に渡した一子の面影さへ、堪え難く慕はしうなつた。

遂に津輕海峽を渡つて、北の島北海道へ、生き行く

道を探ねばならぬ、本意ない其の日が迫つて來た。さすらひの旅から旅を、思へば遠くも來つるものかな。斯くまでして生きねばならぬ我が世ならば、一層彼の時、了寛さんに手をとられて、あのまゝ死で居た方が、何んなに幸福(しあはせ)であつたらう。お若は斯うも考へながら、初めて見た北海の荒磯に、沖のかもめを羨んだりした。函館に旅寢の夢枕、覺め易い曉の汽車に乘つて、其の身を札幌に運んだ時、明治四十四年の秋更けて、大通りの街路樹には、故郷(ふるさと)遠い鳥の幾群が、悲しい音(ね)を立てゝ飛で居た。

札幌では大黑座の横手にある、旅宿相模屋に奉公して、朝な夕の客座敷に、お酌お給仕の日夜を送つた居た。心の悶え煩ひと、身體の疲れ勞れとで、病みほうけては居たものゝ、お若の顏にはまだ女らしい、男を惹き付ける力が漲つて居た。夕に泊つて晨に歸り行く旅から旅の男達も、「相模屋のお若」が色香を、取沙汰するが多かつた。旅寢の浮かれ心から、人知れず言ひ寄つて、思の丈けを口說くもあつたが、お若はたゞ淋しく笑つて、伏し目になるが例であつた。幽鬱らしい其の顏色は、飽に冷たく淋しい中に、笑つて男の出來心を、恐いものにして斷つて居た。

けれどもお若の胸の底には、男戀しさの烈しい血汐が、渦を卷いて高鳴りし初めた。遂には若干の代償を得て、男の前に出ねばならぬ、淫蕩な生活を、誰からともなく强いられて、そこに立つ瀨を見出す樣な月日が、何時の間にか、身近く迫つて居た。

過ぎ去つた一切を、夢現の空に歸して、そこに新しい自分の世界を見出さう。……お若はさう思ひながら、知らずの間に、漂泊し、流轉し、零丁して、淪落の群に入つた。

もとより了寛の事や、子供の事などは、思ひ出さうともしなかつた。——

■

「初めてお客を取つた晩にわ、お若さんは何うしても寢つかれなかつた相ですよ。北海道では好い且那が出來まして、引取つて世話しても好いと云つたんださう

ですけど、何う云ふものですかねえ。死だ了寛があなた、屏風の上から顔を出すと云ふではありませんか。妄念ですわ、ねえ」

弟子が斯う云つた時、「野村三千造」の舞臺から歸つた壽磨子は、鏡臺の前に座りながら、

「面白さうな怪談ね、よく有ることつたわ」

と云つて、顔をしかめてニッコリした。――

數多い男の執念の中でも、別して怖ろしいのは、僧侶の執着心であつた。男戀しさの宵々、枕屏風を漏る冷たい夜風に、何處からともなく、お若の耳に響くのは、了寛の力無い讀經の響であつた。次いで襖の外に、忍びの足音が聞えて、「濟まない、濟まない」と云ふ斷末魔の呻きが、魔の様に細く、力なく聞えた。お若は冷たい汗を流して、その切ない聲を聞き、その怨めし氣な姿を見た。

お若の色香に迷つて、若干の金を投げ出した男も、遂には氣味を惡るがつて、次第にお若から遠退く様になつた。「相模屋のお若には、男の妄念が着いて居るぞ」斯うした噂が立つと共に、お若は其の相模屋にも、長く居る事が出來なくなつた。此國の北の際涯まで、彷徨うて來て居ながら、安住の家を見出し得ないとは、何んと何ふ不幸な事か。生きて死にまさる心の攻め苦に、痩せ衰へた昨日今日、男の肌近く寢る夜に限つて、迷ひ出る了寛さんの妄念は、まだ此の身に未練があるのか。……お若は怨めしい男の妄念に引かれながら、盛岡を經て仙臺へ、惱ましい旅路の日數を重ねた。

仙臺では、枕流亭へ女中に住み込んで、半年餘は事もなく過ぎた。了寛の怪異を見る様になつてから、お若の色香は俄に衰へて、三つ四つも老けて見られた。「男など、もう凝り〳〵だわ」淋しくさう云つて、故人への心づくし、操を守らうと覺悟しても、色香の誘惑は、朋輩女中衆ばかりでなく、自分自身の性來の血汐にも激しく流れて居た。

浮かれ男との關係事が、形に現れやうとする時に、こゝでも了寛の妄念は、必ずお若の心をおびやかした。或る時は庭の垣根越しに、其の蒼白い姿を見たり、ま

た或る時は押入の横、床の間の前、屛風の蔭、障子の彼方と云ふ風に、絶えずお若の神經を惱ました。さうして日一日と瘦せほゝけ行くお若の影に、薄氣味惡い「死の色」が漂ひ初めた頃、土地の祈禱師は白幣を振つて、いろ〳〵の呪文を唱へた。

「長袖の祟りぢや。加治祈禱も、斯うなつてはもう無益ぢや。それお前の左の肩のところから、紅い舌をペロリと出して、ニヤ〳〵と笑つて居るわ。あれ小氣味好さ相に、ペロ〳〵と舌なめづつて、笑つて居る、笑つて居る……」

祈禱師は斯う云つて、瞑目しながら幣を納めた。

お若は身も世もあられぬ思を抱いて、過ぎし日の雲の帶、丁寛一人を殺した夕を、罪恐しい事に悔ひ恨むだ。「死ぬより他に道はないのか」祈禱師の前に泣き伏して、生き行く道の敎えを乞ふた。

「駄目ぢや、駄目ぢや。千人の男と女に、懺悔さつしやれ。千人に打明けてしまうまでは、お前の命も現世のものぢや。念佛さつしやれ、お題目を唱へなされ。女は罪の凝結、死んだ男は善人ぢやつたに、お前は妖婦ぢや、惡婦ぢや、淫婦ぢや、毒婦ぢや……」

お若は泣いた。聲を上げて泣いた。――

■

「それから、鳴子溫泉へ、身體の保養かた〳〵、湯女に住み込だのださうです。今日までにもう足掛け六年になりますが、未だ千人に打明けないか、それとも今頃は丁寛のあとを追つてますやら。何しろ凄いほどの美人でしたから、死だにしましても、まだいろんな曲折がありましたらうよ……」

榮子は語り終つて、又ニコとした。

舞臺では「己ヶ罪」の海岸の場が開いたのか、關根達發の扮した作兵衛の「玉坊や、玉坊や」と叫ぶ聲が、二階の樂屋まで響いた。

空卽是色――色卽是空――

村田榮子の話には、未だ此の他の怪談があつた。

大正六年八月十三日。脚氣を病みて故郷美作の山中へ歸國する前日、匆忙として記す。

岡田播陽氏著

（是れ地底の熱火乎晴天の霹靂乎天下の奇著）

新刊發賣

東京 京都 大阪 三都生活

四六判最上製美本

正價壹圓卅五錢 郵税金八錢

挿畫執筆者 太田喜三郎 大谷句佛 土田麥仙 北野恒富 野田九浦 水島爾保布 島成園 菅盾彦

三色版四葉 寫眞版十數個

此書恐らくは大正出版界に於ける空前絶後の最大奇書たるべし。著者は現代都會生活の一切を呪ひつゝしかも新生活新生命が都會の那邊に潜在し夜明けむとしつゝあるかを叫びつゝあるものそして本書の内容は政治、實業、藝術、思想、宗教等のあらゆる方面より東西三京の生活を嘲評痛罵したるものなり。「贅六町人」たる著者播陽氏素より賣文賣名の徒にあらずして此の奇書を公にす豈に胸中細濁たる不平の氣終に已むを得ずして發するものに非らざらんや。敢て大方の一讀を希ふ。

目次の一班

都會—獄の都大阪—女性の京都と男性の東京—八百熊親分—三都の女—三都と人形—三都の玄關口—三都の言葉—三都盲人待遇法—三都の家庭—贅六と金—極重惡人—殺人犯罪—狂蕩子無腸—私生兒—三都の子供—煩惱即菩提の都—古い京都—乞食—生のつかれ—寐入り込んだ京都—三都の火事—帝都と大阪—江戸ッ兒と嘔吐ッ兒—三都人の特質—山の手と下町—贅六と喧嘩—大阪人と支那人—京都人と朝鮮人—三都商人氣質—盜む東京賣る大阪貰ふ京都—金招牌の飲人—人員調査—箱根と有馬—土臭い都會—贅六と信仰—大阪の藝術—文展—繪畫より觀たる江戸と京阪—三都の名畫家—大鹽中齋—文明の兩性と共消長—

内ヶ崎教授序 一條忠衞著
男女道徳論 全
（最新刊）金壹圓卅五錢 郵税金八錢

稻毛詛風氏新著
父と子 全
（最新刊）金壹圓貳拾錢 郵税金八錢

東京帝國大學講師 紀平正美著
改訂人格の力 全
（好評再版）金壹圓貳拾錢 郵税金八錢

文學士 龍居松之助著
大江戸の思出 全
（好評激甚）金壹圓參拾錢 郵税金八錢

東京帝國大學助教授 宇野哲人著
四書講義 大學 全
（好評再版）金壹圓貳拾錢 郵税金八錢

上司小劍氏著
小ひさき窓より 全
（大好評）金七拾五錢 郵税金八錢

日蓮宗大學講師 小林一郎著
日蓮主義講話 全
（好評四版）金壹圓卅五錢 郵税金八錢

第五高等學校教授 西澤富則著
歐洲文藝界の逸話 全
（好評激甚）金壹圓貳拾錢 郵税金八錢

（中付一の一）

東京市神田區表神保町七 **大同館發行** 振替貯金口座東京八七貳番

（中付一の二）

美術界必須の大著述

研究家鑑賞家座右の寶典

宮中顧問官 平山成信閣下題字 大町桂月先生序文

前文部省美術展覽會審查委員 松本楓湖先生題字 竹内楓橋先生編著

日本繪畫名家詳傳 上卷

附 古今書畫名家年表

和裝、緞子表紙、帙入和紙四百三十餘頁、定價金四圓五拾錢、郵稅內地金拾貳錢、臺、滿、韓金四拾錢

賜梨本宮殿下御買上榮

●本書は竹内楓橋畫伯が揮灑の餘暇編述したるものにして畫家各派の系圖は固より上千載の古昔より下現世に至る迄繪畫諸派名家の事蹟を悉く網羅し之を各派傳統別に詳述して遺憾なく而もよく未聞の逸事を採り細大之を錄したれば苟も斯道に志あるもの丶此上もなき好材ならむ尚巻末掲載の古今書畫名家年表は大化元年より大正の今日に至る凡そ千二百七十年間の故人書畫家は勿論儒者、詩人、國學者、俳人、戲作者其他貴顯高官の人名をも加へたれば斯道研究家及鑑賞家の參考資料として蓋し無二の寶典たるべしと信ず（御一報内容見本送る）

現代紳士趣味涵養の源泉

發行所 春潮書院

東京神田美土代町三丁目
電話本局三八八五番
振替東京五〇七六番

九州アルプスに馬を驅るの記（下）

黒頭巾

其八

●九州アルプスの前景、漸々、車窓の前に展開し來る。祖母山は山脈を爲し、蜿蜒として日向を劃る。九重山は、巍然、高原の中に獨り峙つ。天、特に、一大山を下して、大磐石となして、九州を鎭護するなり。

●九重山は、其の左腹に大仙山、黒岳を隨へ、突兀、崢嶸として、九州アルプスの大宗となる。吾が車窓の右に、黒岳、先づ其の全姿を現はし、次に大仙山、次に漸く九重山見ゆ。初は九重山甚だ莊嚴ならず。大仙山、殊に英爽に見ゆ。

●此の三山は、各、全く類型を爲さゞる山姿を有す。九重山が此の三岳の配合より組成せらるゝ事は、既に九重山に接近して、適當なる地點に立ち、其の全姿と風景とを鑒賞するを得る時、此の山系に、尤も複成的の美感と其尤も堂々たる偉觀とを與ふるものなり。

●黒岳は、頗る奇異なる山容を有す。山色赭紫、遠くより見れば黒し。一にお多福岳といふ。山形、宛然、極めて巨大なる「お多福」の假面を横さまに中天に捧ぐ。

●世間、此山ほど、理想的のお多福面を見ること難かるべし。吾輩も、生來、かくばかり見事なるお多福面を見たるは、是を始とす。天帝、惡戲を試みて、お多福面の下圖を描きたる乎。或は、此の黒岳は、天帝、閑餘の彫塑に、戯れに粘土細工を試みて、一のお多福岳作りしならずんばあらざるべし。而して世上のお多福面といふは、恐らくは、此の山を模型としたるなるべし。

●吾輩はお多福嶽を眺めつゝあれば、獨り微笑するを禁ずる能はず。此の山、四壁削秀、海拔、また阿蘇山に劣らざるべし。馬車、馳せ、黒嶽、漸く觀を改め、大仙山、正面に出現し來る。

●大仙山は、黒岳よりも高し。山容、整齊にして、黒

岳の山頂の平凝なるに對照して、美しく削りたる頂を有し、山形、山色ともに極めて眞面目にして、勇氣を含める表情を爲す。黑岳の滑稽的なるは、此の山氣をして、一層、謹嚴に見えしむ。

●黑岳は、削成の一峯にして、遠眺すれば林木見へず、草色も無し。全然、堅土の彫塑なり。大仙山は、山色、鮮美にして、全面、岩石を鏤め、所々、濃き森林、模樣の斑點を彩りて見ゆ。此の畫けるようの斑點の森かげに、必らず「神秘」を藏せずんばあらざるべし。此の勇ましき山姿は、其の山脚に青草の短き袴を著けたり。

●青々たる祖母山の連山は、此の九重山の獨立したる山彙と對峙しつゝ、姿態美に於ても、文學的に於ても對照の興味を發揮しつゝあり。祖母山は青綿亘しつゝ、飽くまで上品に、美麗なれども、常型を逸せず。九重山は、山彙、突立して、傍若無人の勢を示す。祖母山は神話に富み、九重山は近世の英雄的傳說を有す。

●英雄的傳說の舞臺は大仙山なり。地誌には大船山と記す。吾輩、特に大仙山と書す。大仙山の山容を以て、山神の靈衣を象徵するものなりせば、希臘の勇士の、武裝に似たる觀を爲す可し。

其九

●九重山彙は舊火山なり。大仙山の頂に舊火坑を有す。極めて美しき硫黃を產し、盛んに米國に輸出しつゝありと聞く。則ち此の勇壯なる山は、昔、其の壯年時に、燃ゆる思を湛えつゝ、今尙ほ當年の英氣を、其の面影に遺すものなるべし。

●此の山の、山腹の、神秘なる森かげに、入山公の英魂を瘞むといふ。入山公は竹田の藩主、名は久清。豪邁の君として、尊王の志逞しく、岡山の新太郎少將と肝膽相照し、特に熊澤蕃山を招聘し、幕府に對し、何等かの雄圖を抱き、大仙山の高原に、兵馬を練り、幕譴を蒙りて隱居し、尙ほ此の山を愛して渝らず、偏體を以て此の山中に葬るといふ。

●入山公は竹田人の尤も崇拜する英君なり。彼に干する傳說は、餘りにローマンチックにして、史實的の研究、未だ精明ならず。史實らしからざる事も少からず。然れども其の人、一箇の英雄たるは疑を容れず。

●竹田は舊藩僅に七萬石。千山萬峯の中の一邑のみ。如何に英雄の君主、出現すればとて、此の位地に居て、天下の世に、千人の兵を提げて、雄心を逞しくせんと

するは、餘りに、ドン、キ、ホーテたるを失はず。

●吾輩、想ふ。入山公の雄圖に干する傳說は、誇張と謬誤を交うるなるべし。然れども九重山際に來れば、氣象雄偉、人をして忽然として雄圖を生ぜしめずんばあらず。此の山上に立てば、高青邱の所謂、坐覺蒼茫萬古之意、遠自ニ荒煙落日之中一來の感慨、胸を衝いて沸くならん。

●入山公は、小領土に不似合の大略を有せしなるべし。彼の雄圖といふは、畢竟、九重山彙の氣分を表現するものならずんばあらず。

●吾輩、竹田の碧雲寺に、彼の遺像を寫せし事あり。風骨奇偉。其の眼は、世の所謂重瞳なる者。而して肉瘠せ、鬚尖り、胸に大野心を蓄うるらしく、大膽不敵の表情を爲す。是ほどの面魂を有する者、太平の大名に有る可しとも思はれず。惜哉、此の人をして、戰國に生れて、風雲に際會するを得しめざりしを。

●彼には、尙ほ艶やなるロヲマンスあり。此の山下の里に、彼の眼中に映ぜし美女あり。彼が、此の女に眷戀して、此の女の里を望むを得るの處に、魂を留めん事を希ひしは、則ち此の山上に、彼の墓ある所以といふ。

●此の奇人に、此の[illegible]ならず、ますく創作的ならしむ。此の事實の眞否は詳ならず、恐らくは想像の話なるべし。

●此の稀世の奇雄が、英姿を現はし、此の山腹に立ち、千兵を高原に操縱したるの、如何に、詩的なりしよ。吾輩は大仙山を望んで、空想の痛快を貪ぼりつゝあり。

●溪回り、道旋りて、九重山、其の莊大なる全面を呈露し來る。馬車、久住の町に入る。氣象、宛然、富士の裾野の須走驛を憶出す。

其十

●吾輩、久住に到りしに欻然として須走を憶出す。蓋し裾野の古驛、趣味自ら相似たるものあり。此の町、昔、肥後街道に當り、肥後領たり。邑學も亦た肥後藩の手に成る。今、豐後に屬し、山も久住山と書す。古來、文人、九重山の雅名を用ひ、竹田生も、其の自畫題語の中に、九重山と記せり。彼は九重山を畫きし事あるべし。

●此の日、旅亭、まさき屋に投ず。主人を深といふ、種畜場の書記なりと聞く。此の樓上、一室、最も九重山を望むに可し。九重山の大概殆んど一樓に集る。

山、軒に當り、山顚より裾野に到る、林木、草色、悉く辨ずべし。吾輩試に題して、九重亭といふ。

●此の一室、廣き山に面して、椽を設け、殊に、欄干をも作らず。欄干も尙ほ且つ山色を遮るあらん事を恐るゝなるべし。吾輩、此に投じ、障子を開けば、九重山、則ち熟友の如く、寬濶に、軒に入り來る。

●久泉は、此の町の人、九州アルプスの爲に、力を盡して皷吹す。吾輩の爲に、頗る斡旋す。吾輩、白茅、久泉、櫻草諸人と櫓端に坐し、山を看て飽かず、語つて盡きず。

●暮色、漸く到る。山、樓を去ること一里に充たず。夕陽の寸々、遲々として下る毎に、山色、微妙に變化す。靑々たる草色、漸く陰影の幕を垂る。

●吾輩、諸友と、杯を擧げて、遙に山靈に勸め、且つ酌み、暮景の情趣を惜み、此の游の、大に、吾が心胸を皷舞するものあるを喜ぶ。夕陽、全く沒するに及びて、九重山全く墨畫の如くに、夕空に浮ぶ。

●此の山、豐後路に向ひ、正面を示せり。吾輩は竹田より來りしが故に、吾輩と山と、顏と顏と、相面したるなり。肥後路より來らば、まさに此の山の背後より

●顏と顏と相面して逢ふ時、兩情早く相通ず。眼と眼と、心膽、互に輝く。吾輩、車窓の中、始めて此の山を見たる時、這般の情懷無くんばあらざりき。其の背を見る時は、則ち情懷、寂寞の感無き能はず。然れども其の背後より旋回し來つて、顧眄、以て、兩眼相照らすの刹那、人笑ひ、山亦た嫣然として笑ふ可し。

●吾輩、既に、此の山の正面を見る。更に、肥後路より其の背面を見ん事を思ふ。賴山陽は竹田生を尋ねて肥後路より來り、此の山の背後を見て、詩を作れり。然れども惜むべし、彼は山靈と契合するに到らざりき。

●吾輩の眼前に見る九重山は、新綠萌えつゝあり。山の裾野、高原一帶、新らしく張れる玉突臺のコシンよりも、綠、更に、照り輝きつゝあり。山陽は、乃ち、秋晩、高原の烈風に、笠を傾けて、吹かれて此の山腹を經過したるなり。

●肥後路より此の高原に來るの途、阪梨峠（サカナシ）あり。絕頂の展望、九州アルプスの諸山を双眸に收む。就中、阿蘇山を望むに宜しといふ。山陽も詩あり。路繞二阿蘇腰一、不レ見二阿蘇首一。今朝雨霽雲又開、日照二三峯一覩二皴皺一。一峯尊嚴是丈人、一峯肩隨在二其右一。別有二一峰似二

彙を形容せり。

◉阿蘇山は衆峯の山彙にして、別に、一峯、鋸牙に似たりといふものは所謂猫嶽なり。今日、吾輩、車窓より時々、蘇山と猫嶽とを望む。遠く見れば、二山、太だ高低無し。明日、九重山上より大觀するの興味を思ふ。

其十一

◉九州の山、古來、阿蘇山尤も名あり。霧島山、彦山、溫泉嶽など之に次ぎ、海門嶽また之に次ぐ。地僻なるものは顯れず、形勝に據るものは名を爲す。山靈亦た幸、不幸あり。

◉九州の水は筑後河、第一とす。山陽は筑後河を歌ひて傑作を留め、耶馬溪を推稱して、耶馬溪山天下無の一句を留む。彼、能く九州の水を鑑賞したるも、山に於ては阿蘇山の名、一世に震爆するを以て、其の高大を想ひて、九重山を見ること重からず。祖母山には一篇の詩無かりし。彼は、九州の山を見ること精ならず。

◉彼は、九州の山經を叙して、阿蘇山を以て其の大宗とし、九州アルプスを以て、其の餘勢なりとせり。蘇嶽大隆起、散漫餘勢長といへるもの是なり。

◉彼、晩秋に、阿蘇山の[illegible]つて、[illegible]山に向つて北上し來る。篠、薄を穿つて、曠野を經過し、旅館の響つねに耳に在り。回望すれば、阿蘇山の噴烟、直上するを見て詩あり。

◉彼は、九重山の高原を記して曰く、地高無草木、彌望唯黃茅。居民食蜀黍、行客避封狠、名曰九重嶺。風力四時狂と。彼は、九重裾野の蕭條、凄壯たるを見て、其親しむ可きを見ず。黃茅の散落するを見て、新綠の美しきをいはず。

◉彼は、九重の裾野に、晩秋の風に吹かれ、其の觸興は吹き奪はれんとせし事あり、詩興飄搖して定らず。彼の句に、譬如上龍脊、冷然凌大荒、といへり。其の吹かれたるさまを想像すべし。

◉彼は、龍脊に騎つて大荒を凌ぐが如く、飄搖して九重山を過ぐ。彼の才を以てして遂に、九重山の美なるを識らず。却つて、耶馬溪に至つて、九州風景の精華、此こに在りと思へり。安んぞ知らん、九州山經の宗は九重山なる事を。

◉彼、但だ此の山に來つて、形勢の雄偉なるに、其の精神を動かす。中原覺可望の一句は、偶、此の山の雄大なるを語るものなり。

●種畜場の設備、近年に屬す。山陽の時、此の山腹に、未だ牧場無し。彼をして再生して、今日に在らしめて、新綠に、九重山の草色を眺め、此の草色に、牛馬の閑に游べるを見ば、彼は、耶馬溪を歌ふの前、先づ、九重山の草色の圖卷を作つて歌ひしならん。

●九重山を、四時風力狂と詠せしは山陽の誤なり。然れども、山の大風の時、壯觀、蓋し想像するに餘あり。九重山の美觀は、晩秋に在らずして晩春より夏に在り。初秋の黃葉も華やかなりといへど、恐らくは綠草の美に若かず。九重山の美、到底、其の草色の綠に在り。平和の光景に在り。

其十二

●吾輩、久住の町に、九重亭に、春風に、月夜に、九重山を仰望せし室に寐ぬ。夢魂、九重山に飛ぶ。

●夜、天晴れ、山空しく、月明らかなり。仰いで星斗を望めば、皆、光大にして濕ひ、適さに、人の頭上に在るが如し。白茶と共に、町を歩するに、高原の山氣冷やかにして肌に透る。月明に、九重山を望むに夢の如し。藜杖を弄しつゝ、微吟して行く。

●夜、三更、冷落にして、皆眠らず、戸を閉さし、卓に倚り、首を集めて繪葉書を認む。窓外、竹、數十竿、相摩戞して、遠く切々の聲を送る。雨來るかと疑ふ。或は言ふ、風聲なり、乃ち戸を排すれば、天、漸く陰もり、九重山を見ず。

●翌六日、立夏の日、曉來、天、大に雨。九重山、雲烟の中に隱る。僅に山脚を見るのみ。雲烟、變化極り無し。時に、大仙山、露はれ、黑岳露はる。九重山は雲深くして見ず。裾野の青草を打つの雨、水晶の箸を投げるが如し。

●美人は、概ね千呼萬喚するに非れば簾外に出で來らず。天、此の名山を以て、容易に、輕々しく人間に示す事を躊躇するにやあらん。昨夜までの晴容、忽ち風雨を起すは何事ぞや。

●朝、久泉等來り話す。吾輩、無聊、一箇の竹印を執つて、自ら一鞭千里の四字を刻す。蓋し一鞭千里は吾黨の理想なり。今年、吾輩、理想を實現する能はずば、明年、再び、此の山に來らん。

●雲烟の九重山を望みつゝ、話す。昨日、馬車を驅つて上り來りし時、何處よりかを忘る、牧馬二頭、吾が馬車に追隨し來る。吾行き、彼行き、吾停まれば彼停まる。終に相離つて久住の町に來る。

●此の二馬は、頸に、唯だ細き麻紐に木札を繫げるのみ。九重山の裾野、放牧馬が遠く己が厩に往來するなり。彼等は山に在つて、鹽を求むる時、已が厩に歸る。十里を隔つと雖、誤らず。

●彼等の顔には平和の光、滿てり。東京の町を行く馬と、其の馬相、風采を異にす。眼は優さしく、體は暢びたり。桃源の馬はかくあるべしと思ふ。

●此の馬、人を避けて行き、物と爭はず。吾が馬車、駐まるに及び、徐ろに、吾等の後を回つて山に向つて上り行く。山腹を望めば、青草に、馬群、蟻の如し。太古なる哉、天國なる哉、大なる「自然の懐」は此の如くに、寛厚に、平和なり。

●牧場は、九重山の維新ならずんばあらず。牧場、一たび創設せられて、平和光、ます〳〵此の山に滿てり。山陽は、此の山の維新前に經過したるを以て、此の光景を見ず。唯だ風力の山を驚嘆したるのみ。

●今の人は、九重山を讃嘆せざるは無かるべし。昔の人は、今人ほどに思はざりしやも知れず。啻に、山陽と竹田生とのみに非ず。

●古來、牧場の、凄涼、摯悍の氣象を涵養するもの無きに非ず。勅勒歌の如きは是なり。天蒼々、野茫々、風吹草低見ニ牛羊一といふを聞けば、何となく悲壯なり。今、吾輩の見る九重山は、雲烟、如何に變化を示して其の山容をして豪宕ならしむとも、山色駘蕩、滿山の新綠、平和の光に燃えつゝあるなり。

其十三

●五月雨の夜の月の如く、雲烟中の九重山、時々、其の玉顔を見する事あり。朝十時頃、雨少しく晴る。種畜場より馬車を送つて、吾が一行を迎ふ。則ち裝を促がして上る。

●道程一里に足らず、七合許、種畜場に著く頃、雨霽れ、雲烟、少しく散じ、九州アルプスの連山、稍、其の大觀を露はす。彼の山、此の山、概ね其の名を指點すべし。阿蘇山も僅に見ゆ。

●種畜場に來り、近く、九重山を見れば、山容の莊嚴なる、草色の妍美なる、吾が詩魂を動かす。此の山巓、黒岳は奇峻にして滑稽的、大仙山は眞面目にして殊に英爽、此の三嶽、三人の大なる「自然」の役者たるを失はず。黒嶽、大仙山ともに千兩役者、而して最後に、眞打(シンウチ)の大立者らしく、九重山堂々として吾が前に現はれ來る。

●偉大なる人格が、平和的大精神の象徴たるが如く、九重山の山相、草色、則ち寛厚、溫柔にして、宇宙の「平和」を象徴しつゝあるかと見ゆ。一見、極めて柔和なり。裾より頭に到る唯だ青草の山なり。然れども頭大に、胸廣がり、腰張りて、山骨、定めて地軸と貫穿するらしく、其の顏は柔和なれども、其の山勢、乾坤を睥睨しつゝ、限無き大磐石の威儀を示す。

●吾輩は、此の茫大なる山勢が美しき青草を纏へるを尤も嬉しと思ふ。黑岳の奇峻無く、大仙山の嚴樹無く、唯だ青草のみにして、而して九重山の瑰偉なる、言ふ可らず。

●此の山彙は、悉く平地より、崛然として特立し、青一峯、欝然として九州アルプスの大宗と爲る。若し其の青草の美觀を言はゞ、碧玉臂、青羅帶などの語、或は近からん。

●吾輩、先年、高野山の樹色を望みし時、紺青の一大塊なるかの感を爲せり。九重山の草色は、遠く見て碧玉の如く、高野山よりも軟美の感を與ふ。

●吾輩、偶、想ふ。此の裙野より、九重山腹の青草に向つて、遍ねく幾千萬の凌霄花を種えしめば、盛夏、[illegible]の季節、七彩然として、[illegible]トするならん。

●吾輩、九重山に憧憬するは、其の平和的精神の偉大なる表現に在り。其の山は海門岳の如くに精練的ならざるも優美を失はず、淺間山の如くに原始的ならざるも太だ豪宕なり。而して美しき草色は、九重山の總べてを印象せしむ。

●九重山の性命は、其の魄力に在り。其の輪廓の線の瑰偉なるが、無限の魄力を示す。此の山、一見して、人をして、其の魄力を直覺せしむ。平和的精神の表現の權威を爲すものは、則ち此の山の魄力ならずんばあらず。

其十四

●雨雲開闔し、霽れて又た小雨來る。晴を待つ間、種畜場の諸君と、九重山の草色を眺めつゝ話す。草色、窓下より湧きて、限り無く、青波を湛へつゝ、山腹に連る。斯の身は、恰も草の波、草の雲に棲む。

●種畜場の諸君は、快活にして天眞爛熳、彼の草木を見るが如く、彼の山を見るが如し。皆、大なる小兒なり。彼等は、大なる自然の懷に居り、牛馬と、山雲と、[illegible]、朝夕、能く大なる「自然」と同棲しつ

ゝ、此の山腹に枕臥して、眼に人界を見ず。古仙人といふも、是等の「大なる小兒」に外ならざるべし。

◉彼等と談笑しつゝあれば、人界の煩雜、形式、虚禮、策略、御世辭渾べてあらゆる嫌惡すべき人間の煩惱は忽然、蟬脫して、彼等の無邪氣の胸に、吾等の天眞を映出せずんばあらず。「山の精」「草の精」彼等に憑つて、吾等を靈界に導く乎。

◉彼等は、元と悉く善人なるべし。然れども此を下界に降して、尙ほ此の如く無垢なるを得る乎。吾等が凡夫なるを以て、此に來つて、卒然として煩惱を捨てゝ、悟脫するを得るを見れば、此處、則ち天界の靈境ならずんばあらざる也。

◉吾輩も諸君と、談笑、嬉語して、計らず一箇の小兒となれり。此の時、一疑は人間に在り、天に僞は無きものを一の境遇、浸み〳〵と身に浸むを覺ゆ。諸君、頻りに馬を語る。窓前、一溪を隔てゝ、大仙山に牛馬の放牧するを見る。風景、閑にして畫くが如し。諸君の語るは種馬の事なり。

◉諸君、豐かに豆腐を買ひ、新菜を準備して、酒を供す。酒氣、沸々として散して山雲となる。此の如き山腹の仙界に在つては、豆腐も亦た非常の御馳走たるを失はず。況んや諸君の深情、能く客を醉はしむるをや。此の御馳走は吾輩、此の長旅行の、尤も印象的なるものゝ一なりし。

◉午餐、畢るの後、雨少しく晴る。諸君、駿馬を引き來る。悉く千里の逸物、蘇東坡のいへる振鬣長鳴、萬馬皆瘖の慨あるものゝみなり。此の馬、唯だ見たるのみにして、人意を爽涼にす。主客、皆、欣然として鞍に倚る。斷脚の白茅も亦た白馬に跨り、山を望んで馳す。

其十五

◉吾輩、生來、始めて鞍に倚つて顧眄するの時來れり。吾輩の馬は、此山の第一駿、プリオン、エルド、ライドといふ。駿にして順、雄姿、實に群を拔く。吾輩、未だ畵ける馬に、此の如く颯爽たるものを見ず。天下、或は名馬あるべし。吾輩、親睹するは此の馬を始とす。

◉此の馬、丈、頗る高く、吾輩は肥短。馬に乘るは山に登るが如し。鞍高く、脚低くして、攀ぢて登る。既に鞍に登れば、生來、初めて馬上に天下を見る。雄心、勃然として生ず。

●吾輩、未だ能く此の名馬に跨り、一鞭千里の志を逞しくする能はざるを恨む。然りと雖、此の馬に跨り、九州アルプスを大觀し、遙に中原を望むの慨無くんばあらず。

●雲烟、蒼茫として九重山を包み、山脚より湧きて、山を捲いて、天に向つて舞ひ上る。雲烟の舞ひ上る後より青草、層々として現はれ來る。再び雲烟、山脚に生じ、此の如くにして、繰返し、山姿を變化し、望眼を喜ばしむ。

●九重山は海拔僅に六千尺。これを日本アルプスに比すれば其匹敵に非ず。然れども低き地盤に突立するを以て、頗る俊偉の觀を與ふること、日本アルプスに讓らず。

●雲烟出沒する中に、九州アルプスの山系を、馬上より望む。祖母山は九重山に及ばざること僅に四十尺、阿蘇山、亦た鼎立の一脚を爲す。三山鼎立の間、群山、悉く其の脚下に雌伏し、高原起伏して、氣勢、横逸すること、洪濤の奔るが如し。今、烟雲、低く其の上に垂れ、雲と濤と、相擊ち、滿天の壯觀、すべて、吾が鞍邊に捧げ來る。

●九州アルプスの大觀は此の如し。此の光景は、徒步して目擊すとも相逢あること無からん。但だ鞍に倚るに非れば、此の感興無く、此の雄心無し。

●馬を驅つて、種畜場より漸く山腹に向ふ。裾野の高原に、一條の松並木あり。昔の肥後街道を標示す。七八町を上れば、展望、頗る快濶、右に九重山の胸腹あり、左に、遠く、低く、九州アルプスの群山見ゆ。豊肥の國、瞻望の雄壯なること、此の處に若くもの無し。入山公が大志を起し、山陽が、東坡の青山一髮是中原の句を憶起せしも、皆、此の處なり。

●吾が馬、鬣を振ひ、青草の濤を踏んで行く。青草は高原に漲つて、山腹に及び、地盤の高低に隨ひ、蜿蜒抑揚して大波瀾を爲し、風の吹き、戰ぐごとに、草の梢、靡き渡つて、吾が鞍下より直ちに山腹に到るまで波瀾洶湧して、青海原の觀を爲す。而して其の極處には雲烟、低く抹し、或は掠めて飛ぶ。吾輩は、今、駿馬に乘つて、雲濤溶渤たる青海原を渡るならずんばあらず。

●鞍上、遠く祖母、阿蘇を望み、仰いで九重山を見る。感慨極無し。阿蘇の噴烟薄しと雖、雲捲いて、噴烟かと疑ふ。太古、此の青草の美しき青海原の上に、九重山が、噴烟せし時の光景の、如何に夢幻的なりし

は、彼の青草、昔より在り。彼の山に、噴烟せし昔には烟は此の青草に映じて、碧海に、青磁の大香爐を浮べたらんよりも美しかりしなるべし。

●景行天皇西征の時、阿蘇山の噴烟は盛んなりしなるべし。九重山の噴烟は、神武東征の以前に在らん。九州アルプスの三山、鼎立して、各、噴烟して、以て、此の高原に映發したりし神代の美しさを、冥想す。

●此の美しき神代は、昔に在り、將來に、又た出現す可き乎。吾輩は、此の山に來り、此の馬に乗り、以て遼焉たる古今を想像するを得るの樂を、皇天に感謝す。是れ實に、吾生の一の清福事たらずんばあらず。

●嗟、斯生、眞に滄海の一粟、萬古の一瞬のみ。然れども微軀、能く高處に大觀して「永遠」を感ず。人生は朽ちざるなり。吾輩、鞍上、雄心を生ず。雄心やがて「永遠」に想到し、「死」に覺得す。高原の長風に、駿馬を驅りつゝ、暗に、涙を催うす。

●原上、所々、細泉あり。青草を穿つて、潺々として鳴つて流る。時に、吾馬を飲ましむべし。水、清淺、石出で、飛沫、草頭に飛ぶ。

其十六

●九重山の一日、牧場の一日を記念す。顧るに技手安藤、調教を掌る、吾輩の爲に、ブリオンを控馭す。彼の青々たる牧草を統理する者は、技手渡邊、而して場長加藤、技手山口は再游の時、始めて相逢ふ。是等の諸君、其の名を列ねて、永く記念と爲す。

●吾輩は鞍を下り、ブリオンの顔を撫で、以て別を告ぐ。卿は佛蘭西の產、二歳にして吾國に來り、帝國の丹平に浴すること既に十年。今、卿の故國は戰塵に蔽はる。卿の父母、同胞、幸にして恙無きを得るや、否や卿は、尙ほ故國の風物を記憶するや、如何

●吾輩又た謂ふ。卿は、今、九州の第一峯に居り、鬣を長風に靡かせ、九州アルプスに雄視す。身幹五尺五寸五分。雄姿、堂々として、九州の馬群、卿の前に容し。日本の詩人、未だ能く馬を描きて、卿の神駿に似たるもの無し。東洋の詩聖、杜子美、好んで馬を詠ず。馬の詩、彼に及ぶ者無し。彼が一洗萬古凡馬空の一句は、豫め卿の爲に作れるに似たらずんばあらず。

●杜子美は能く馬に騎りしやを知らず、然れども彼は馬を好むこと甚だし。若し卿を見るを得しめば、其の詩興橫溢すること奈何ぞや。能く卿を詩く者あらば

斯須にして、紙上に眞龍を出さん。卿は書く可く歌ふべし。卿は九州アプルスの誇なり、寶なり、詩なり、畫なり、健在なれ！　ブリオン。

●吾輩はブリオンに告別し、諸君が萬歳の聲に送られ白茅等諸君と共に山を下り去る。回顧すれば、九重山雲中に沒し、微雨來る。

其十七

●吾輩、九重山より竹田に歸るの日、天、快晴、遠く山姿を望む。是より後、吾輩、豊後に淹留すること五旬。山に登る毎に九重山を憶ふ。

●九重山の草色、我魂を招く。吾輩、豊後を去るの前、別府を發して、再び久住山に游ぶ。途、竹田を過ぎ、會心の諸君と伴ふ。

●再游の時、天、再び雨を造つて九重山をして變化極無からしむ。初、青草、山脚にのみ凝りしも、今、薫風、青を吹き上げて、山嶺に至るまで皆青し。山靈、我魂を招くもの豈、滿山の青を誇示せんとするが爲乎。

●吾輩、種畜場の諸君と握手して、共に、大に喜ぶ。相逢ふ二回、既に、渾然として百年の熟友となる。再游の高興逸懷、初游を壓倒す。若し吾輩をして歌を善くせしめば則ち大に歌ひしならん。

●九重山の青草は皆、牧草。牧草の濃、密、而して毒草を混ぜざる、實に理想的の牧場とす。此の如き牧場天下に無し。則ち九重山は天下の名山にして、名牧場なり。此の事、再游して、場長加藤に聞く。彼は南部の人、則ち「馬の國」に生れて馬と牧場とに精通する者なり。

●安藤、渡邊諸君、再び駿馬を拉して分列式を行ひ、諸友もまた馬を擇んで乘る。ブリオン雄姿、昨の如し。眼、柔さしく、顏和なり。尚ほ吾輩を記せしや如何。

●九重山、萬里の涼風、青草の海原を渡る。又た人間炎熱界あるを知らざるもの丶如し。秋晩、冬雪の寒威憶ふべし。夏は則ち天下ハ樂土なり。仙郷なり。平和に滿ち、希望に滿ち、緊張に滿てり。

●暮風到る。再び此の山、此の人、此の馬と別る。溪を隔て丶、遠く大仙山の牧場の、牛馬動かず、目送するもの丶如し。遠林の山鶯、高鳴すること數聲。

●吾が馬車、夕闇に包まれ、詩を包みて、山を下り、竹田に向ふ。溪樹に沿ひ螢火亂れ飛ぶ。大なる「ヌキ」

を出でし時、一螢、殊に大なるが、高く飛んで光を放ち、九州アルプスの輪廓、夢の如くに見ゆ。

日本海岸の吾が郷里に、老母の病を護り、其の漸く同春に向ふ時、枕頭に、且つ語り、且つ稿了す。

大正六年七月廿日

黒頭巾再記

九重山の感興、此に盡きず。東都に還るの後、遙に九重山の草色を憶ふ。此の山彙の植物帶の記事を添加せんと欲す。筆を執つて、紙に臨むに、再覩、先きの九重山頭に禁ぢず、此の山頂の火口と、高山植物帶と、躬ら經過し來らず。黒岳の複式火口及び其の登路は殊に奇、ナ船山の風穴、又た聞くだけにても人を涼ならしむ。三伏の炎天、零度に上らず。風穴に悠游するの快游思ふべし。

九州の輪廓の複雜なると共に、其の地形も亦た複雜を極むと雖、大別して南北の二と爲す可く、則ち島原半島と天草島との間の早崎海峽より別府灣に向ひ、斜に一線を劃すべく、此の一線より以南を九州山系とし、以北には[illegible]、山彙の最高峯にして、爆發、創成の時、最後に噴出したるが九重山なるべし。數十萬年前、此の大火山彙の噴出の大なりし、想像するに堪えたり。櫻島噴火の時に、其の灰雲は遠く東都を過ぎ、東北の天に向へり。其の飛灰、再覩の書齋をも襲ひき。此の大火山彙、噴出の時、火柱、天に騰り、灰長、世界を蔽ひしならずんばあらず。再覩、明年の再游を期して、阿蘇山に登り、肥後路より九重山に來り、此の大火山彙を大觀して、其の爆裂、創成の昔を想像せん事を期す。

歐洲人は屢、九重山を記して、其の高山植物を傳ふ。却つて日本人の記事には九重山少し。山陽は耶馬溪に心醉せしも、九重山を觀察せざりき。竹田生は則ち九盤仙史の號あり。再覩、未だ彼の九重山の誌を見ずと雖、其の詩を見たり。九盤仙史は則ち九重山に憧憬するなり。再覩、彼の靑眼を多とす。

八月十三朝

東京に於て

黒頭巾三記

華かなる成金國裏面の悲慘

田中貢太郎

この頃アメリカで發行した英語の辭書にナリキンと云ふ語があるさうだ。ゲイシヤ、サムライ、ハラキリ

など云ふ世界的日本語が又一つ増した譯だ。成金とは將棋の駒の歩や銀や香や桂やが、敵陣に入つて金の効力を發揮する場合を云ふので、素寒貧が一躍して富豪の列に加はるのを指した物であらう。併し日本で成金と云つても、アメリカなどの成金に比べると、所謂九牛の一毛にも足りない。近い譬がこの頃ニューヨークか何處かで勞働者のストライキがあつて、一日七十ドルの勞働賃を百ドルにして、勞働時間の八時間を六時間にせよと云ふの要求をした。七十ドルと云へば百四十圓である。日本の勞働者最高の日給と云はれてゐる八圓に比較するに、アメリカの勞働者二日間の所得に足りないのを見ても、この懸隔の程が思ひやられる。それでも戰爭のお蔭で貧乏な日本に相應な金が這入つて、隨つて船舶業者、鑛山業者、鐵物業者、化學品業者、棉花綿糸業者などが主としてこの福分に有付いて、それ相應な成金になつたものであるが、畢竟するにこの好況も戰爭中の事で、若し一度媾和が成立して經濟界に變調を來たした曉には、負け將棋の慘めな姿が今から眼の前に見えてゐるが、當人達はそんな事は平氣で、初めて手にした金の光に眩惑されて、豪奢に日もこれ足りない有樣である。

日本第一の大成金と云はれた久原某は、借切りの一等車に花氷を積んで、車中を氷殿として鹽原に避暑した。彼は本年の二月から三月にかけて熱海溫泉に行つて、富士屋の別館の三階を三千圓に借り切つて、千圓の茶代を置いた。今は又富士屋別館を敷地ぐるみ三十萬圓で買うてこれに二十萬圓を投じて熱海第一の宏壯な別莊にすると云つて改築に著手した。

福岡の石炭王安川某は、能樂界の耆宿寶生太夫と野口政吉の二人を伴れて修善寺に行き、養氣館の別館に陣取り、毎晩土地の若者を集めて角力を催し、勝力士には纒頭をとらした。晝は寶生太夫を相手にして謠曲の稽古。引上げの前夜は舊館の演藝場へ滯在客を招待して、兩太夫の素謠天鼓を開かして、あとで『皆樣のも、』とやつて小成金の天狗どもを痛めつけたが、その時の一切の費用が三千圓であつた。

神戸の成金連は、同市の常盤華壇へ集つて、一人前五百圓と云ふ贅澤な宴會をやつた。この膳の上には、皆明石から取り寄せた生き鯛を硝子張の生洲に入れて置いてあつた。

四千萬圓の船成金山本某は、大正三年の秋の文展に北村四海の出品した大理石の彫刻『水の精』を二千圓で買つて、池上の新邸の庭園にある噴水の傍に据えて作者を苦笑せしめた。彼は又箱根舞子熱海などにある別莊の粧飾品として、毎月支那の骨董を七八萬圓で買入れてゐる。

一千萬圓の某成金は、修善寺に行つて一菜主義を取り、訪問客の置いて行く土産なども女中にくれてやつてゐたが、たちぎはには五百圓の茶代を置いて行つた。

郵船株で巨利を博した兜町の某仲買人は、熱海滯在の徒然に番頭をつれて下田に行き、銛で突かした鮪を取つて來て滯在客に振舞つた。

三井物産の成金連は、新橋の藝妓三十名を伴れて伊香保に行き、二日二晩騒いだ結局、花駕籠行列をやつて榛名山に登つたが、その費用は五千圓であつた。

箱根、熱海、修善寺、鹽原、日光、伊香保などの避暑地温泉地から來る成金の噂は、數へ來ると果てしもないが、その成金の十中の九分九厘までは、ぱつと開いてぱつと消える線香花火のやうな短い運命を持つてゐる寧ろ哀れむべき人々であるが、世間の多數からは羨望の的となつてゐる。又底無し昇りの物價騰貴の爲に、下級官吏、巡査、敎員、車掌などの安月給取は、それを背景にして、尚更慘めに見える。私はこの際を利用して、安月給取の實世活を報告して、心ある人の參考に供したい。

一、巡査諸君

物價騰貴の爲に、官吏、公吏、會社員、敎員、職工の別なく、安月給取安日給取には、そぞれ給與が行はれ、或は行はれんとしてゐる。大藏省でも官吏一般の增給案を議會に提出する事になつて調査に着手した。東京府でも懸案となつてゐた增給を可決して、關係吏員に八九十の三ヶ月間一齊に二圓の增給をする事

となつた。有るは無いに勝るが、こんな僅な手當では、安月給取の生活は依然たる物である。

　安月給取の中で、責任と勤勞の上から云つて、大に同情すべき者は巡査である。巡査と云へば、日露戰爭のすこし前、　某演説會場で聞いた某氏の演説を思ひ出す。それは何んでも勞働問題に關する講演會であつたやうに思はれる。講演者は、色の白い、小柄な身體に背廣の服を着た男で、薄い品の好い髭が朱い唇の上にあつた。『實に巡査諸君の勞働たる、炎日に曝され寒風に劈かれて、街頭に徘徊佇立した上に、洪濤の中に入り、猛火を侵し、ときに或は白刃砲彈の下に驀進するの危險を侵さねばなりません。然るに唯だ一言の上官の怒りに觸れ、一毫の法規に合せざるものが有れば、直ちに職を褫はれて、窮途に泣かねばならんと云ふの有樣であります。而してその勤務によつて得る所を問へば……嗚呼、實に言ふに忍びないのであります。今や天下各種の勞働をあげて、その境遇の悲慘でない者は無く、その生活の困難でない者は無いけれども、併かもその地位職分の名譽高貴なるに比して、その境遇生活の悲慘困難なること、未だ巡査諸君の如く而く甚しい者はありません。況んや他の勞働者に至つては、猶ほ思想の自由があります。言論の自由が有ります。その上、運動の自由、住居の自由があります。諸君に至つては、精神的にも物質的にも、兩つながらその自由は全く束縛せられて殆んど一個の器械と異なる所が無いではありませんか、吾人は想うて此所に至ると、坐ろに諸君の爲めに一掬同情の涙なきを得ないのであります。』某氏は斯う云ひながら演壇の左右を見廻した。其處には十餘人の警官が椅子に腰をかけて物々しく控へてゐた。某氏の唇には冷な笑ひが浮んで消えた。聽衆は警官の顏と講演者の顏とを見比べて拍手した。警官はくすぐつたいやうな顏をして眼を伏せてゐた。私は演者の冷たい笑ひに反感を抱いて見てゐた。某氏は又云つた。『嗚呼かくの如きの苦痛、かくの如きの束縛、かくの如きの窮乏、是れ君諸君の堪へ得る所でありますか、……（中略）……諸君は何故にその不安なる生活を保障する所以の

法を講じないです。吾人は官吏としての諸君に向つては何の求むる所はありませんが、併し吾人は吾人の同胞としての巡査諸君に向つては、切にその境遇生活の改善の爲めに、努力せられんことを勸告します。」

この講演があつてから既に十三四年になるが、今以て巡査の所得の薄い事と自由を束縛せられてゐることは、その當時と變らない。唯だ月給に二三圓の差はあるが、これとて物價に比較すると、寧ろ某氏の慨歎した當時の生活が幾らか緩かであつた位である。すこし誇張した云ひ方であるが、今、この五千萬の同胞の生命財産の安寧を双肩に擔つてゐる巡査諸君の所得を調べてみると、先づ第一に月給であるが、巡査部長なれば二十八圓にまで行けるけれども、普通の巡査は、最高が二十五圓と云ふ事になつてゐるから、隨つて二十五圓の月給を取つてゐる者は一署に一人居るか居ない位、二十二三圓の月給に有りつくには、二十餘年は勤續しなければならぬ。月給の最下は十三圓で、これは教習所を出る時の相場である。教習所を出る時には、九十點以上の成績のある者は十五圓、八十點以上九十點以下の者は十四圓、その他は十三圓と云ふことになつてゐるが、多いのは十三圓で、十五圓十四圓は僅にしかない。そして一圓位宛刻み昇つて、十八九圓の月給を取るやうになるには、五六年勤めなければならぬ。

月給の次に給與と云ふものがある。それは住宅料で、土地の狀況によつて少し宛違つてゐる。東京市內で云へば、神田京橋麴町の三區が四圓、本所深川が三圓、その他が三圓五十錢と云ふ事になつてゐる。この住宅料を受けてゐる巡査は、住居の自由が無く、勤務してゐる警察の所在區內に住まはされてゐる。

給與の次は賄費である。これは前日の朝から翌日の朝まで一晝夜ばさみに勤務する日の辨當料で、內勤の者は一回五錢として三回分十五錢の支給を受け、外勤の者は二回十錢の支給を受ける。月の內にはこの賄費が二圓四五十錢位はある。

靴、靴下、手袋などに用する被服費と云ふ物もあ

年額十五圓で、それを四回位に分けて支給されるが、月に割ると一圓二十幾錢になる。

被服費の他に手當と云ふ物がある。この手當には種々の種類があるが、普通の巡査では、休み日即ち非番の日に勤務を命ぜられると、四時間を一切りとして、その手當が十五錢と、それに一回五錢の辨當料を添へて支給せられるが、それは月の中に四度ばかりの物で些細な物である。もし非番勤務の時間が四時間の一切りを過ぎて八時間になると五錢の增しがある。淺草區内では、この非番勤務の手當を年末に一所にして支給してゐるが、十圓位はあると云つてゐる。

非番勤務以外の手當はと云ふと、刑事、高等視察、通譯、武道助手などに對する手當で、刑事は二圓以上四圓以下、視察は二圓以上六圓以下、通譯は三圓以上十圓以下、武道助手は二圓以上四圓以下と云ふ事になつてゐる。

その他巡査の所得としては、四圓以上八圓以下の年末賞與があるが、それは一週間以上の缺勤者は與ることの出來ない恩典である、强竊盜を捕へるとか、水火の中に入りて人命を救助するとかした者に對する賞與の項目もあるが、それは所得の中に入れる性質の物でない。

以上あげた所によつて計算すると、月給十八九圓位の者は、二十四五圓の收入があることになるが、それが皆生活費に使用することが出來るかと云ふに、さうは行かない。義務貯金とか、共同醵金とか云ふ三圓位の支出があつて、結局生活費になるのは二十一二圓位の物である。淺草區で十八圓取つてゐる一巡査の本年七月の所得を調べてみると、俸給十八圓、給與三圓五十錢、賄費二圓七十錢、手當九十五錢、合計二十五圓拾五錢の收入に對して、義務貯金九十錢、協會費拾錢、弔慰金拾錢（これは年末や中元などに小使にやる心付も含む）、演武費九錢、時報代五錢、奬武會費三錢、共同醵金十錢、貯金九十五錢（年末まで引殘す手當）等二圓二十九錢の支出があるから、差引二十二圓八十六錢の生活費が殘る譯である。

この二十二圓八十錢へ二圓の增俸があつた所で何の足しになる。五六圓の家を借りて、家內の二三人もあれば、家賃と米代に十五圓は無くなる。あと十圓で、お茶を買ひ、日用品を買ひ、子供の菓子を買ひ、被服は支給せらるゝから好いとして、靴を買ひ、靴下を買ひ、襯衣を買へば、とても十圓で足りる筈はない。街頭に砂を擠ひ。鶴嘴を振つてゐる土方よりも、その所得は劣つてゐる。人生巡査となるほど悲慘なものはあるまい。

二、巡査の實生活

それは暑い茹られるやうな日であつた。二時頃の炎のやうな陽の光は、赤煉瓦の壁に燃付いてゐた。入口の左側の窓には、上著を拔いで襯衣と洋袴になつた白い巡査の姿が二つ三つ見えてゐた。私は巡査の生活を調べる爲めに、××署に勤めてゐる友人を尋ねたのであつた。

入口の土間には、左の板壁に寄つて、酩酒屋のお神さんらしい瘦せた女が、二人の若い女と一所に腰をかけて、塗骨の小さな扇を使つてゐた。受付は直ぐ右側にあつた。十人位の巡査がそれ〳〵事務を執つてゐる前の臺の上には、三角の黑い木の片に、白く係り係りの名を記してあつた。『受付』と書いたのは、手前から二つ目にあつた。私はその前に行つて、名刺を出して友人に取次を賴んでゐると、背後の方の衝立の蔭手から襯衣を著た半身を露はした者があつた。顏の脹れた優しい眼付をした友人であつた。

私は友人に隨いて、煉瓦を敷いた廊下を通つて、入口から左側になつた四疊半位の汚い疊を敷いた部屋に行つた。部屋の中には三つの机を並べて、その上に、煙草盆、馬蹄の形をした灰皿、禿び筆を入れた硯箱などが亂雜に置いてあつた。廊下を距てた向ひは刑事部屋で、和服を著た五六人の者が始終何かしてゐた。サーベルをガチャ〳〵云はせながら廊下を往來する巡査もあつた。大きな風呂敷包を提げた小娘が向ひの刑事部屋を出て行く姿も見えた。友人は風俗係で、其所の隣の私が這入つて來る時に巡査の姿を見付けた窓のあ

る部屋が自分の部屋であると云つた。友人は小使を呼んで、苺の液をかけた氷水を取つてくれたりした。『今日は一つ君の生活向を調べに來たよ、』と云つて私は笑つた。

友人が巡査になつてからもう六年になる。彼が內勤にならずに、交番の前に立つてゐる時分、他の友人などとその前を通つて行くと『三人の時には、一時間立つて、一時間巡廻して、一時間休むと云ふやうに都合好く行くが、二人の時には、二時間立たなければならん、そんな時に君等の遊んでゐる所を見せられると、つく／＼厭になるよ、』と云つたりしたものだ。

『月給は大分好くなつたらうね、』と聞くと、『たつた十八圓さ、いろ／＼の物を集めて二十三四圓にはなるが、子供があつちや、米代位にしかならないよ、』と友人は吐き出すやうに云つた。

『家賃は幾等だね、』と云ふと、『六圓だが、二階を三圓に貸してあるから、まア三圓のやうなもんだ。』

路次の內にある二階建の三軒長屋、上も下も同じやうに四疊半と二疊の二間しかない狹い部屋が眼の前に浮んだ。高等文官試驗に希望を置いてゐる友人は、その下の部屋の隅に剝げちよろけた机を据ゑて、その上でクロース製の厚い書籍を開いてゐた。知人が行くとその机を食卓にして、酒を出した。大柄な勝氣らしい細君は、次の二疊で豆腐汁をこさへた。小さな女の子が鹽煎餅を噛りながら、おづ／＼と顏を出して、珍らしい客の方を見たりした。

『子供が幾人になつたかね』

『三人になつた。子供の無い時には、女房が內職をしたが、子供があつちや出來ないしね、』

『左樣だらう、僕も三人あるが、物質以外の世話だけでも大變だよ、』

『それに子供は好く病氣するね、君とこは知らないが、僕の所なんかは、何人か一人は、何處かが惡いよ、』

『僕の所も同じだ。子供は病氣が一番困るね、』

二人はそれからそれと話した。と、刑事部屋で大きな聲がした。『何處で搔拂つたんだ。何故早く白狀しな

いッ」

私はふと刑事部屋の方を見た。小柄な黒い縮みを著た刑事が、刑事部屋の上口に胡坐をかいた脊のひよろ長い頭の禿げた老人を調べてゐる所であつた。老人は井筒の中に慈の字を染め拔いた印半纏を著てゐた。

老人の聲は小さかつた。「何、何」と刑事は面倒臭さうに問ひ返した。老人の聲は矢張り小さかつた。「今まで何處にゐた。」と刑事は又聞いたりした。

間もなく老人は、刑事に連れられて、廊下を向ふの方へ行つて了つた。

「あれは何處へ行くかね、」と私は友人に聞いてみた。

「留置場さ、此所の留置場には何時でも八十人ばかり彼樣な奴がゐるよ、」と友人は云つた。

「君も彼樣な事をやるかね、」と聞くと、「僕は風俗係だから、酩酒屋の姉さん達を調べるが、期する所は矢張り生活問題だね、」と云つた友人は、私の爲めに二度目の氷水を命ずるべく部屋を出て行つた。

堀割の多い場末の町には、一昨年教習所を出た友人が住んでゐた。私は巡査の生活を見る爲めに、その友人を訪うて見た。電車通りから折れて、堀割の上に架した小さな橋を渡つて行くと、橋の向ふ側には、材木倉らしい大きな倉庫が八棟ほど並んでゐた。倉庫の前の水際に繋いだ澤山の材木は、滿潮に近い澄んだ水に靜に浮んで、その上を鳶口を手にして二三人の勞働者が歩いて何かしてゐた。友人の家はその倉庫の裏手にあつた。

風の無い暑い日であつた。正午まで非番勤務をやつて歸つて來て午睡をしてゐた友人は、肥つてづんぐりした身體に、糊のゴワ〳〵した洗ひ立ての浴衣を引かけて私を迎へた。

障子も襖も取拂つた三間ばかりある座敷は、人いきれで惱ましく見えた。玄關には五つ位の女の子と三つ位の男の子とが睡り、友人と私と話してゐる部屋の片側には、お産をしたばかりだと云ふ友人の妹が小さな蚊帳を著せた嬰兒と並んで睡つてゐた。勝手の方に

長火鉢を中にして、友人の兩親と細君の三人が何か内職の手を切々と動かしてゐた。勝手の先の庭には、傘の骨を建てゝそれに朝顏の蔓を這はせてあつた。靑々とした實をつけた無花果の木もその傍にあつた。一疋の鹽辛蜻蛉が無花果の葉から傘の骨に移つたりした。

「――さんの所へもゐらしたですか、左樣ですか、――さんは、好いでせう。」と友人は云つた。

「矢張り好くないさうだ。月給は、十八圓と云つてゐたよ。」

「左樣ですか、二十圓の月給になるには、十年以上かゝると云ひますから、それでも――さんは僕より好いです。僕は日は淺いが、まだ十六圓しかないから。」

友人の母親は、思ひ出したやうに玄關に來て、二人の子供の顏に這つてゐる蠅を團扇で追つてやつた。

「靴下なんかでも可成り入るだらうね。」と云ふと、「二日位履くともう穴が開きます。それを繕ひ繕ひして履いても三足は入りますよ。」と友人は笑つた。

「幾等位するかね。」

「僕は一番安いのを買つて居りますが、それでも十八錢はしますよ。」

産婦の頭をやつてゐる方には、小さな平床があつて、柄を白い糸で卷いた短刀を載つけた刀掛けが置いてあつた。刀掛に添うて一升入り位の正宗の空壜もあつた。友人は話しの切目に平床の方に行つて、その空壜に手をやつた。

「君、君 僕は今晩會があるから、それは廢してくれ給へ。」と云つた。

「本當ですか、少しは好いでせう。」と云つて友人は振返つた。

私は或る宴會の席上で衝突した先輩と感情を一洗する爲めに、その夜、神田あたりで晩餐を共にするの約束をしてゐた。「今晩は妙な事で飯を喫う事になつてゐるから、この次まで預けて置く。」

「左樣ですか、本當ですか。」と云つて友人は壜から離れて來た。

私は扇を懷んで歸る仕度をはじめた。

三、小學教員

地方は別として東京市の小學校教員は、巡査から比べると餘程俸給が好い。平均額は三十圓で、准教員の端くれでも十七八圓はくれる。主席になると五六十圓が普通で、本年あたり池袋や青山の師範學校を卒業した者でも、二十圓の口は動かない。二十圓と云へば、巡査が生命を賭して十餘年勤續した後に貰へる俸給である。それに三四圓の住宅料があり、日本橋京橋あたりの夜學校のある所で、一ヶ月二回も出れば、一回四圓として八圓の手當がある。二部教授のある所では、それを一人で受持つなれば、これ又八圓位の手當がある。その上五年以上勤續すれば年功加俸がある。とても巡査との比ではないが、要するにそれは最安月給の巡査との比較で、今回の物價騰貴には、大打撃を受けてゐると云ふ所から、市內の各區では、二圓三圓の範圍に於て、增俸したり手當を給したりしてゐる。

我が光森先生は、日本橋某小學校の訓導として、物價騰貴の影響を受けて、生活上の不安と壓迫とを感じてゐる一人である。先生の俸給は三十五圓、それに三圓五十錢から五圓になつた住宅料があり、年額二十四圓の年功加俸がありして、月收は四十二圓になり、普通の巡査の二倍の收入があるが、それでも先生は困つてゐた。先生には七人の子供があつた。

先生はもう四十五六歲である。脊の高い頑丈な男で、教員になつてから十五六年になるが、滅多に缺勤もしないので、每年の年末賞與は人より多かつた。若い時には酒が好きで、友人と交際もしてゐたが、何時の間にか廢して、たまに宴會などに行く事があつても、盃は手にしなかつた。もとは國漢文の檢定を受けて中等學校の教員になる積りで、漢籍などを讀んでゐたが、これ又何時の間にか廢して、もう何の希望もない人のやうに、每日草色の風呂敷にくるんだ辨當包を持つて、學校に來て、コツ〳〵受持の生徒を敎へた。

私が光森先生を傳通院脇の住居に訪うたのは八月の初の朝であつた。杉の生垣のある小さな家で、家の背後は石碑のゴチャ〳〵と並んだ墓場で、境界には割竹

の垣根が朽ちかゝつてゐた。烏瓜の蔓がその垣根に絡みついてゐた。墓場の中には、桐の木や槙の木があつた。

先生は机に向つて、罫紙のやうな物へ、何か切々と書いてゐた。十二三になるらしい男の子と、八つ位の女の子が玄關になつた二疊の所に机を据えて、複習をしてゐた。背の低い圓顏の細君は、奥の縁側の方に向いてミシン臺に倚りかゝつて足袋らしい物を縫つてゐた。勝手の方で嬰兒を背にした十四五の小娘が五つか六つばかりの二人の子供を相手にして玩具を弄つてゐた。

『暫く又お暇ですね、』と私が云ふと、先生は、『いや、學校が休みになりや、又家で内職をするし、とても叶ひませんね、』とそればかりは廢さずにゐる煙草を煙管に詰めながら云つた。

先生は某博士から依頼せられて、古文書の寫字をやつてゐると云つた。細君は一心になつてミシンの針を動かして脇目もしない。十八ばかりの娘が茶を入れて持つて來た。

『あれが總領です。あれに炊事をさして置いて、夫婦して一生懸命になつて居りますが、僕とこのやうに子供が多くちや、とても追付きませんよ、』と先生が云つた。

『それに物價が高くなりましたからねえ、』と私が云ふと、『僕とこなんかは、物價が安くても足りない所ですからね、』と先生は云つた。

『七人でしたかね、』

『貧乏人の子澤山ですよ、』

『併し子供を持つなら多い方が好いでせう、さきで樂しみがありますから、』

『樂しみがあるやうな子供なら好いが、反對に厄介をかける奴であつたら、七人もぢや叶ひませんよ、』と先生は苦笑した。方になつた頰骨の出た顏は、蒼黑くすんで見えた。

四、バーの稅務屬君

夜の九時頃であつた。その日の夕方珍らしく夕立が

あつたので、通りの埃は靜まつて、街路樹の馬の鈴懸の葉に映へる電燈光も非常に綺麗に見えてゐた。銀座の歸りに須田町の唯あるバーに這入つて、冷たいビールを飲んでゐると、食卓の向ふ側に來て『やア、』と云つた者がある。

冷たい寒水石の上に片肱を衝いて、洋盃に口をつけてゐた私は、機械的に顔をあげてみた。麻の詰襟を著た若い男が、片手を頭の麥稈帽の縁にかけて立つてゐる。稅務屬をやつてゐる知人であつた。

『やア、暫くであつたね、景氣はどうだね、』と私は笑ひながら云つた。

稅務屬君は寄せてあつた椅子を引出して、それに腰を下ろしながら、『どうもかうもあるもんか、燒けになつて飲んでゐる所さ、』と云つて、女中が注文を聞きに來ると、『酒だ、酒だ、ビールを持つて來い。』と云つた。もう可成り飲んでゐるらしかつた。

『君、お母さんは機嫌は好いかね、』と云ふと時、女中がビールの洋盃を持つて來て、稅務屬君の前に置いた。

稅務屬はそれに手をやりながら、『婆さん、機嫌が好すぎて仕末が惡い。』と云つてチウと女中の顔を見返つて、『ねえ、姉さん、』と笑顔をした。女中は莞爾と笑ひながら離れて行つた。

『矢張りいくかね、』と私は盃を口のふちに持つて行く手眞似をして見せた。十八圓の月給に出張の手當を合せて月收二十三四圓の稅務屬君の家には、細君と一人の男の子と、母親との三人がゐたが、母親はその若しい生活の中で、平氣な顔をして每晩二合の寢酒を飲んだ。細君が子供の守をしながら賃縫をしても、とても母親の寢酒の費用にも足りなかつた。家庭が面白くないので、稅務屬君も燒けになつて飲んで歩いてゐた。

『飲んで管卷きやがつて、仕末に困る。』と稅務屬君は殘りの洋盃を口にして、二杯目を注文した。

『卷くのは君だらう。』と私が笑ふと、『親子が卷くさ、』と稅務屬君も笑つた。

稅務屬君はビールの洋盃を三杯位かへると、あと二杯ばかりをウヰスキーにした。

『官吏は增俸があると云ふから、君も飲み代が豐富になるね、』と私は思ひ出したやうに云つた。

『一圓二圓あがつた所で何になる、それよりや金を儲けなくちやいけない、金儲けぢや、』と右の手を握つて、それで輕く寒水石の上を打つた。

私は、ふと、稅務屬君が發明品を拵へて金儲をすると云つてゐた事を思出した。水道の水を冬暖にする器械とか、チヂを用ゐて石の代りにする漬物桶とかの考案を聞かされた事もある。

『何か好い發明でもしたかね、』と私は眞面目な顏をして云つた。

『今、一つ考へてゐる。』と稅務屬君は自信のあるやうな口振をする。

『何かね、』

『夜、暗がりにも見える眼鏡さ、』

私は、『猫の眼のやうなもんだね、』と云はふとしたが、相手が眞面目な顏をしてゐるので口には出さなかつた。

五、賭博をやる職工

早稻田の鶴卷町に住んでゐる知人の家は、風呂屋と八百屋との間に通じた路次の奥にあつた。通りから少し高くなつた路次を這入つて行くと、廓內には小さな平家がゴタ／＼建つてゐた。知人の家は、その路次を行詰めて、共同栓の傍を左に折れ曲つて行つた所にあつた。

路次の入口で車を下りて、十一時頃の暑い日を翳した扇に除けながら這入つて行つた所で、共同栓の傍まで行くと、その共同栓に勝手口を向けてゐる角の家に何か人聲がするかと思ふと、白い浴衣を着た若いお神さんが跣足で勝手に飛び出して來て、片足を戶外に踏み出しながら內の方を覗いた。ふと見ると裸體で腰卷一つした若い男が座敷の中に衝立つてゐる。お神さんを毆かうとした所だなと思つてゐると、隅の方から老婆が出て來て、何か云ひながら若い男の前に立つた。

私は知人の家へ行つて、洋盃に入れた冷たい麥湯を

飲みながら、『あすこの勝手の前に共同栓のある家は、どうした家です。』と云つて其所の細君に聞いてみた。

『何かあつたんですか、』と細君は何か好奇心を動かしてゐるらしい。

『今、お神さんが跣足で勝手口に飛び出して來たから、内を見ると、裸體の若い男が衝立つてゐるんです。』

『さう、それぢやお神さんに八つ當りをしたもんでせう、何んでも旦那は鉛筆工場とかへ行つてゐるさうですが、賭博が道樂で、昨日金を貰ふと賭博に行つて、一厘なしになつて夜遲く歸つて、金を泥溝へ落したつて云ふんですつて、そそであすこのお婆さんとお神さんが、探しに行くから所を云へと云つても、なんとかかとか云つて、云はないですつて、賭博に負けた物が泥溝を探したつてあるもんですか……』と細君は笑つた。

『工場へ行つて幾何位收入があるもんでせうね、』

『二十圓位はあるんですつて、それにお婆さんとお神さんが、マニラ麻を繋いで、三圓位とれるから、馬鹿な眞似なんかしなけりや、苦しい事はないですがねえ、』

『他の道樂はしないでせうか、』

『賭博以外には何にもしないですつて、主はおとなしい好い方ですよ、』

一日間をおいて、正午過ぎ又知人の所へ行つて見ると、共同栓の傍の家は戸が締つてゐた。

『奧さん、戸が締つてゐますね、』と云ふと、知人の細君は、お神さんがその日の夕方に千葉の方の里へ行くと云つて出て行き、昨日になつて老婆が淺草の親類へ行つて二人とも歸らないので、今朝は旦那一人で飯の拵へをしてゐたのを見たと云つた。知人の細君はそれに付け加へて、『二人で金の工面にでも行つたでせうよ、』と事もなげに云つた。

初めて上京せる學生同志の對話

生方敏郎

景

東京は神田の電車通りから狹い小路を右へ折れて、更に狹い露路へ入り、それより更にセヽコマしい家と家の廂合を行くと、道には板が敷いてある。一等道路にすらアスファルトや石材や煉瓦などを敷詰めたところは甚だ少く、それも漸く昨今のことであるのに、此那狹い廂合の道路は何故板を以て敷詰められてあるかと感心しつゝ歩いて行くと、此板のよろけてゐるところから踏抜けば、下は溝が流れてゐる。また道の兩側の所々には正直爺さんが雀のお宿で土産に貰つた葛籠の樣な、黑塗の函がある。何んなお寶がその中にあるかと蓋を開けば川合のはきだめと同じく、魚の骨や胡瓜の尻尾等で詰つてゐる。全く都會の象徵である。さてその小道を突當つて二つ三つ曲つて行詰めたドン尻に秀才館と入口に額を懸けたやにつこい三層樓の下宿屋がある。周圍は大抵しもた屋だが、間口は定つて二間乃至一間半、生命保險申込所の招牌を吊した家も有れば、婦人に好き内職有りと認めた貼紙をした家も有り、按摩と招牌を出した隣りには淸元の師匠が住んで、朝から近所の青年を集め、藝者買ひの入學試驗準備として日本音樂を敎授してゐる。其隣りには天理敎々師が住んでゐる。其隣りは煙草屋で娘を招き猫にして專賣局製造の六億萬本の一部分を賣つてゐる。

秀才館の入口には硝子戶が四枚立てゝある。それには蠅の糞が數多付いてゐる。之を甚だ美的な裝飾と思ふかして、夏蠅がひりつけた物を冬迄大事に保存して置く。玄關の右手の壁には額が懸けてある。それは黑い小さい札に赤く細字で「山野孝作　群馬」

「鼻糞まるむ　靜岡」といふ樣に止宿人の姓名と本籍地の府縣名とを横に並べて記したものである。履脱の土間には爪革の無い足駄やら鼻緒の太い駒下駄やら三々五々と散かつてゐるが、何れも垢と泥とで薄ぎたなくよごれてゐる。止宿人を訪問する客があつて、此土間に立ち「今日は」とか「御免」とか案内を乞ふても、仲々一言や二言では誰も應じない。出て來たところを見ると、此所の女中にも矢張耳は二つあるのであるが、それは他人の惡口と食物と活動辯士の噂の方にのみ敏感であつて、呼リンや來客の案内には鈍感に出來てゐるのだ。玄關から奧の方へ眞一文字に狹い廊下があつて、其兩側には恰度げじ〳〵の足の樣に止宿人の小さい部屋がならんでゐる。廊下は何時歩いても足あとがつく樣に、手習をしやうと思へば何時でも出來るやうに細かい砂埃が滿遍なく蒔き散らされてあるところは、さすがに學生を止宿する下宿屋だけある。玄關にはまたヘナ〳〵した梯子が附いてゐる。その梯子を二つ昇つた三階の奧の四疊半は即ち對話の主人公愚生徒の部屋だ。部屋の隅には勸業場物の小机が据へてある。机の上には二三種の雜誌がある。インキ壺でもペンでも割合にハイカラのが載せてある。机とならんで同じく勸業場物の本箱がある。中には中學の教科書が入れてある。座敷の中に新聞が散らかつてゐる。天井からは電氣がぶら下りその笠にはほこりが積もつてゐる。

人

愚生徒。或田舍中學の卒業生。年齢二十五歳前後。今度第七回目の一高入學試驗に落第す。外貌は落第とさへ聞かなければ秀才らしく見ゆ。彼と對座する青年は東北地方の中學卒業生。年齢十八九歳。今年はじめて一高の入學試驗を受けて落第したる者也。二人は趣味も同じからず、また互ひに敬愛してゐるのでもないが。同樣に入學試驗に落第したので即ち同病相憐れむの諺の通り、それ以來仲が好くなり、互ひに訪ひつ訪はれつしてゐるのである。併し

愚生徒の方は年長者にして、且つ落第の經驗惡友よりも甚だ多きを以て、常に經驗の尊ばれる此國の事なれば、惡友は對話の言葉使に於て大いに敬意を表しつゝあり。敬意は口ばたにのみうろついてゐると思はれてゐる東京の事なれば。

二人の間には深い友情はないが、その代りに灰皿がある。二人は喫煙を學籍なき今の身の特權と心得て先刻から卷煙草を盛んにふかしてゐる――勿論官製の値段の高い安煙草を。

時

向陵の菓子舖一高屋さんが、一萬二千の受驗生を裏漉にかけて、見事漉し出した四千若干粒の官僚餡子の上澄を取り、殘りを地方の二高屋より八高屋まで餡分比例で分配し、さてこれからソロ〳〵型につめ込まふといふ頃。又大隈村の私立牛込學士製作所では天野組の職工等月給値上のストライキに狂熱しつゝある日。

其惡友 暑いですなあ。

愚生徒 暑いさ。下宿屋だもの。

其惡友 北國から來たせいか、東京の夏は暑くてしのぎきれません。

愚生徒 東京の夏は暑いなんといつても、凌ぎやすいのだよ。しのぎきれないのは、學生の夏さ。ことに下宿屋住ひの落第生の夏さ。

其惡友 如何に流動體の風でも我々の處まで曲りくねつて吹いて來るには、交番で少くとも二三度問ひ合せなけりやあなりますまいからね。

愚生徒 風にはとてもそんな親切氣はないよ。君、風と太陽と力くらべをした話を君は知つてゐるだらう

其惡友 あの旅人の外套をぬがせた話ですか。あれおやあ太陽が勝をとりましたね。

愚生徒 力ぢやあ風より勝つたかも知れないが、不人情にかけちややや太陽だつて風だつて變りはないさ。

其惡友 そんな事はないでせう。帝王でも乞食でも日は平等に照らし、雨は平等に降るでせう。

愚生徒　うそを付け。あれはダイオジエニイスの負け惜しみさ。太陽は夏になると乞食を照らして冬は成金を照らすのだよ。成金の家へさす時は南から光線をなげるし、落第生の下宿屋の窓へは西の方から照りつけるんだ。貧乏な月給取りなんぞがなけなしの金で避暑をすると、早速宿屋の西日にお灸をすえられるんだ。だから惡いことはいはない。落第生は東京の下宿屋で蚤に喰はれてゐりやあ好いんだ。

其惡友　でも君の部屋なぞは西日が當るだけまだ好いですよ。僕の下宿なぞと來た日にやあ窓を明けると隣りの家の破目板です。全く何の爲につけた窓かと思ひますよ。大方壁の險約からでも來たのでせうよ。

愚生徒　壁一升金一升だといふ洒落からだらう。僕の部屋だつて夏は西日の、冬は北風が當るばかりさ。窓を明ければ錢湯の煙突の煙りが遠慮なく遊びに來るよ。煤烟はいくら金剛石の御親類だといつても、こんな炭素は閉口だね。それから（と窓を明けて外を見ながら）此通り瓦ばかりが見えるのだ。東京の鳥瞰圖はあまり結構なものでもないね。此瓦が燒けて來ると風も一緒に燒けて來る。そして此部屋は上下から火を焚かれるやうなものだよ。

其惡友　それでも彼處に赤い物が見えるぢや有りませんか。

愚生徒　あれはお三どんの腰巻きだよ。君は幸に近眼だから赤い色だけを見てゐるんだが、それが腰卷きぢやあたまらないやね。

其惡友　どうりで幅が廣いや。僕は毛氈かと思ひましたよ。ではあの白いのは何んです。

愚生徒　ありやあ子供のおしめさ。

其惡友　あの青いのは。

愚生徒　あれは隱居のいぢる植木鉢だらう。老年でも子供でも女でも色彩で區別がつくから面白いね。

其惡友　それから彼の入道雲のやうなのは何ですね。

愚生徒　ありやニコライだよ。朝つぱらからあの鐘を矢かましく叩きたてられるのには閉口するよ。それ

がまた何うしても諸行無常とは響かないのだからね。鐘は矢張「花曇り鐘は上野か淺草か」といふ邊がうれしいね。ニコライのやうにギャン〱やられちやあ、まるで犬の嚙合を囃してるやうなものだから。

其惡友　それで君達の樣な朝寐坊を起してくれる爲めなのでせうか。

愚生徒　そればかりではない。神樣にお祈りをする爲めなんだよ。

其惡友　神樣も餘程寐坊と見えますね。そんな鐘を叩かれてから耳の穴をほじるところをみると……それとも聾なのですか？

愚生徒　聾で無いつたつて、いくら神樣でも狸寐入がしたくならうぢやないか。實に勝手な事ばかし人間は祈るんだもの……第一に「儲けさせて下さい」だらう。それも然う卒直には言はないや。表面は「罪深き我等を惠み玉へ」と來るのさ。儲けてその上、善人で世の中に通用して、その上天國へやつてくれといふんだもの。ずいぶん蟲のいゝ話さ。

其惡友　その代り神樣にだつてずいぶんコムミッションを出すのでせう。今日コムミッション無しに他人に物を賴むのは、無利息で金を借りる樣なものですからね。それは祈願では無くして强請です。

愚生徒　ニコライぢや香をたいたり蠟燭を立てたりするよ。禁酒禁烟を呼び物にしてゐる金溜主義の新敎の方では、それさへしない。全くのロハだ。藝者がドラ息子を欺す時だつて、最う少し資本を卸して對手を優遇するぜ。まあ、それもいゝとして、此頃のやうに戰でも有つてみろ。イギリスの敎會はイギリス、フランスはフランス、ロシヤはロシヤ、ドイツはドイツでめい〱勝たせろ〱と祈るだらう。それで何れもこれも國家の爲め人道のため神のためと、一々お爲めごかしだから呆れるよ。それも羊羹色のフロックコートを着た活辯よろしくと言ふ日本の牧師かなんかの祈りなら、神樣の方でも見事にハネつけられるだらうけれどBishop of Londonとかカンターベリーの大僧正といふやうなのに、英語やラテン語で祈られちやあ一寸困

るだらう。イギリス人が子供ならドイツ人だつて子供だもの。そして何れも自分の方が正義だと告白してゐるんだもの。

其惡友　そりや、造作も無い事でせう。皆なに勝せりやあいゝでせう。各國の御用新聞は皆なそれをやつてるぢやあ有りませんか。ところで僕もそんな都合の好い神様があるなら一高の入學試驗を祈つて置くところでしたねえ。僕こそ實に正義の爲めなのです。そして第一に僕の中學校長の爲めなんです。僕等の中學校長が僕等を薫陶した目的は、學問を覺えさせる爲めではなくして、僕等を高等學校へ入れる爲めだつたのです。校長は丁度守錢奴が貯金をする樣に、會社員が決算報告をする樣に、高等學校入學者の數を年々計算して悦んだり心配したりしてゐます。

愚生徒　だから先達て僕は君を教會へ案内したぢやあないか。然るに君は婦人席ばかり見てゐるから……

其惡友　冗談はよして下さい。人聞きが惡いから。同じ婦人席でも音樂會の婦人席とは玉が違ひますよ。それで同罪にされちやあ大に迷惑ですね。婆さんか、でなければ……

愚生徒　平凡な女だといふのだらう。若い男で眞面目に説教を聞いてる奴は油斷のならぬ僞善者だし、若い女で眞面目に説教を聽くやうなのはコムマ以下の美貌の持主だ。だが君、幸せなことには東京の教會には眞面目で説教を聞いてる靑年も少女も無い。それ故たゞ惜しいのはあの牧師の巧妙な説教だね。

其惡友　あの時の演説使ひは活辯ぢやなかつたのですか。それにしては演説が巧すぎますね。金持の方を向いては「求めよ。さらば與へられん」とやつてましたねえ。

愚生徒　求めずとも金持は常に與へられてゐるよ。金持には金も與へられるし、女も與へられるし、男爵も與へられる。すべての與へらる可き機會が與へられてゐる。況んや之を求むるをやだ。牧師も隅には置けないなあ。

其惡友　それから貧乏人の席へ向いては「生きて

の所有物を賣り、貧しき者に施せ」と命じましたよ。だから命ぜられた貧しい男は大變悦んで「貧しき者に施せ」と鸚鵡返しにやつてゐました。實に牧師は如才無いです。それにあの教會の禁酒會員と禁煙會員とは生れつき酒嫌ひの人と、生れ付き煙草の吸へない人なのだ相ですね。實に理想的な禁慾主義者です。成程彼等が高慢に成る筈です。

愚生徒　それから若い男の隣りにゐた若い寡婦さんに向つて「隣人を愛せよ」は愈よ當意卽妙だと思つたね。大方ドイツの兵隊は蹂躪せられたベルギーの少女に「爾の敵を愛せよ」と囁いたらうよ。

其惡友　成程、宗教つてずいぶん好いものですね。それに都合も好いものですね。

愚生徒　何だつて、人間の發明したものは皆な都合の好いものさ。だが浮つかりキリストのキリスト教を信じるなよ。十字架にかけられるか、でなければ乞食に成る。尤も昔から眞面目に之を信仰した者は、幸せと一人も無かつたやうだ。人間は宗教よりもつと好都合に出來てゐるんだね。

其惡友　之に反して不都合極まるものは今の試驗制度ですよ。

愚生徒　なあに結構だよ。一高の入學試驗に落第するばかりで、僕は東京見物を八年もしたよ。不都合なのは及第と卒業とだよ。卒業の後は僕といへども働かなけりやあなるまい。何かゞ出來るやうになれば、人は何かをさせられる。門番が勤まれば、まして虱をつぶし乍ら門番が勤まれば、人は何時までも門番をさせらる。法螺を吹く事と借金をする事が出來れば人は政事をさせられる。若い女を抱く事と他をゴマかすことが出來れば、人は實業をさせられる。生徒の愚問に愚答を與へることゝ校長にペコ〳〵する事とが出來れば、人は教育家をさせられる。だから、人は何事も出來ぬ方がいゝ。さうすれば僕の樣に、ゴロ〳〵したり、將又帝王の樣に悠然としてゐられる。

其惡友　僕などはまだそこまで度胸が据りませんね。軟かい石でも何度も落ちると遂には堅くなるので

せうけれど僕の落ちたのは初めての經驗ですからね。少しは胸騷ぎがしましたよ。

愚生徒　だが若し君は及第したら一層胸騷ぎがしたことだらう。昨日あたりの新聞を見ると、一高の入學試驗及第者は、天下の大罪を犯したるかの如く、殺人犯や放火犯と同欄に肩を並べて書き立てられてゐた。何とかいふ及第者などは寫眞入りで親まで引合に出されてゐたぞ。

其惡友　そんな惡事に成るでせうか。一高へ入學するといふ事は。

愚生徒　僕はさうは思はない。けれども世間では惡事と思つてゐるらしい。何となれば善い事をした場合に曾て一度も悅んだことの無い親類共が嬉しがり、惡事を犯した時の他には滅多に賞めた事の無い世間の奴等が讃めてゐるのだから。

其惡友　だが一高の入學者は秀才の譯なのでせうか、一高の健兒といへばミルクホールの女に持てる相ですから。

愚生徒　一高の學生が女に持てるといふ事實が、果して彼等の顏面にニキビの吹き出す如く左樣に、確實性を持つや否や、門外漢の僕等の知らざるところだ。しかし假に持てるとするならば、それは彼等が確に秀才らしい學生たるの證據と成るのだ。何となれば、女は常に豪い男に戀せずして豪ら相な男に戀し、眞の秀才者を認めずして、秀才らしい男を認めるものであるからだ。

其惡友　ですがその秀才らしいといふ名譽を擔ふ一高の學生諸君が、牛飮馬喰して、デッカンショを自分の學校の名譽の産物であるかの如く、大聲で唄ふのは何うしたものでせう。それとも、あれは彼等の春情覺醒期を世間及び自分に對して胡麻化す爲めの變聲でせうか。

愚生徒　マサカ、一高の學生は奇聲を張上げてデッカンショを唄ひもしまい。彼等は恐らく秀才らしく如何なる場合にも「君が代」を唄ふだらう。デッカンショは寧ろ不良少年、落第生黨の物ぢやあないか。

デカンショ、デカンショで半年やくらすヨイ〳〵
後の半年や寐てくらす
そんな呑氣な眞似が彼等に出來るかい。
夕べ大學赤門の前で、おでんかん酒稲荷ずし
どてら質に於いてシャモ喰つて寐たらしやもくて
〳〵寐られない
デカンショどころか、今日此頃は五厘煙草が吸ひかねる
こりや、少々官僚のお孫さん達には過分な心意氣――イヤサあられも無い氣焔ぢやないか。

其惡友　そうでせうか。僕はたゞデッカンショの變風を崇拜する爲めにのみ入學したかつたのだが。それでは一高も詰らんですね。そんなに骨を折つて行くほどのところでも有りませんね。

愚生徒　何故、そんなことは無い。平家の時代には平家に非ざれば人にして人に非る也さ。徳川時代には武士に非ざれば人にして人に非る也さ。明治に於ては薩長氏に非ざれば人にして人に非ざる也さ。大正の御代に於いては官僚氏に非ざれば人にして人に非ざる也といふ景氣サ。

其惡友　では官僚とは何でせう。

愚生徒　官僚とは禽獸魚類我々平民及び其他の有脊髄動物(但し硬骨の)等の決して所有しないものを所有してゐる哺乳動物だ。人爵といふものを持つのがそれだ。位記勳等といふものを誇るのがそれだ。

其惡友　では位記勳等とは何でせう。俺は小使や給仕よりも豪いぞといふ符牒でせうか。

愚生徒　然ではない。私は上役の官僚よりも豪くないといふ記章だ。私は上役に頭が上らないといふ記號だ。

其惡友　所が此頃の知事さんには從五位相模守たりし鎌倉の執權職よりも遙に位の高いお歷々が澤山あるでせう。楠正成が若し今日あたりの日曜に上野公園をうか〳〵散歩してゐるならば、必ず名も無い詰らぬ陸軍大佐につかまつて「コラ、貴樣上官に敬禮をせんちう事があるかッ」と叱責せられてゐる事でせう。可愛相

に、正成の方が手柄が多少餘分に有る事にしても、筋や星の數は少々不足してゐるかも知れませんからね。尤も忠勇武烈といふ點では現代の軍人樣を正成如きと比較するのは愈よ以て勿論冒瀆罪に當りませうけれど。

愚生徒　誰に對して？　あゝ、解つた。〱。だが比較研究をして二三の例を引くと、熊公、八公と音訓相似たる侯爵大隈八太郎源(？)重信閣下と六十六國總追捕使征夷大將軍正二位左兵衞佐源(之は確實)朝臣賴朝との位記はほとんど伯仲の間に在り、民間政治家として聞ゆる犬養國民黨總理平(？)毅君すら人皇五十代垣武天皇九代の後胤正一位大政大臣入道相國平（之は確實）淸盛の嫡孫三位中將維盛と位に於いては略同級であつたと思ふ。殊に笑ふべきは素町人たる大倉喜八郎藤原(？)鶴彥男や三菱男爵楠(？)久彌君等でも位比べては百萬石の大名とあんまり相違しはすまい。

其惡友　こりやあ一體何うしたわけでせう。

愚生徒　さあ。多分物價騰貴の結果だらうよ。素町人が華族にまでセリ上る時勢だ。此所の下宿の細君なぞは鼻左衞門尉から一躍して關白に成り、下女君又一躍して左衞門尉の位の權式に納まつてござる。そこで買喰ひ朝寢坊、主人の譏訴「それでいやだら、妾らいくらでも口サ有るんだから」と大氣焰だからな。ラムネがアイスクリームに成り、劍舞が新らしい芝居に成り木村屋の五錢一袋の餡パンでやつたコムパニイはバウリスタでコーヒーを啜りながらやることに成り、紺飛白は銘仙に成り、天ぢくのグル〱卷は羽二重若しくは綿紗に成り、二錢のホークが十錢の敷島に成つた。

其惡友　成程。さうですね。僕は今此所へ來る道の車屋で、子守兒ともつかず令孃ともつかぬ女性を見て來たが、ありやあ一體何でせう。

愚生徒　ウム、頭は束髮、人造ダイヤをちりばめた櫛をさし浴衣に白足袋、ポンジーのパラソルといふのが外出のいでたち、家へ這入ればもう肌ぬいで横に成り、ふかし芋の横かぢりだよ。それは車夫君の息女お茶ッピイ子が將に女工に成り上らんとする進化の過程に在るところだらう。それから君、君は東京へ來て第

一に眼についた女は何だね。

其惡友　電車の中で見る女學生です。

愚生徒　電車の中にはいろ〳〵の種類の女學生が乘つてゐるよ。それからいろ〳〵の種類の令孃がね。

其惡友　いろ〳〵の女學生……

愚生徒　會社の女事務員、モシ〳〵の交換手、女店員それからカッフェの女の歸りも乘るさ。それが一括して女學生と令孃なんだ。

其惡友　それらは、車夫君の御息女の如くそれ〴〵進化の過程には無いのですか。

愚生徒　若い女は常に悉く進化しつゝあるのだよ。之に反して男の運命は鬮できまる。大臣に成る者は大臣の鬮を引き、腰辨になる者は腰辨の鬮を引き、小使になる者は小使の鬮を引いたのだ。けれども女には進化して遂に到達す可き目標が有る。だから本當の理想主義者は女だ。女は毎もマグダラのマリヤだ。

其惡友　はあ。　進化して止まないのですね。男が中學を卒業して不良少年になる時に、女は女學校を出て才媛と成り――少くとも新聞の花嫁花聟欄には然ありますよ――男が溺れて土佐衛門と卑稱せられる時に女は水死美人と傳へられ、男が配遇を失つて男後家には蛹が湧くと周圍から厭はれる時に、女は亭主に別れて「花が咲く」と言はれ、殊に軍人の良人に別れた場合には、唯再婚しないといふだけの理由で貞女として表彰せられるのも其理に依るのでせうね。何だか、此夏は本鄉の大學でも特に女子の爲めに赤門を開放したといふぢや有りませんか。女は之から何處まで進化するでせう。

愚生徒　昔フランスの或聖者が北海に航して或島へ近づくと、海岸に數多の人が見えるから、彼はそれに向つて十字を切り直に說敎を始めたといふ。然るに愈よ船を岸邊につけていざ彼等を祝福しやうとすると、その群集はペンギン鳥であつたとやら。君のいふのはその話の翻案ではないのかい。近頃新智識派とやらいふ看板でアナトール、フランスの歷史物の翻案が大分流行してゐるやうだから。

其惡友　いや、〳〵、そんな小說氣など微塵も有るんぢや有りませんよ。私は新聞でみて來たことなんですから。

愚生徒　さうか。新聞にあつたことなら、若し違つてゐたとしても、差支なからう。毎日の新聞紙に於いて、我々は常に無數の誤報に接するにもかゝはらず、矢張つゞけて購讀してゐるところを見ると、誤報は餘り多く迷惑ではないのだらう。

其惡友　少くとも讀者にとつては然でせう。

愚生徒　そして書かれた方に取つては尙更ら難有い話だ。天氣豫報は毎も必ず違ふのだといふよりも、むしろ天氣豫報は違ふのが本當で、當る時こそ間違ひだと言つて宜しい。それでも、諸君はそれを見るぢやないか。欺される事は度重なるに從つて、心地よさの度を增して來る。だから一度しか戀せぬといふ男は初めから戀をせぬ男だ。人は一度でも戀をしたら幾度もその甘さを繰り返す。

其惡友　それだから誤報する爲めの使命を以て生れた新聞紙は多くの讀者を持つてゐるのに、誤報の無い官報は世間で餘り見ないのですね。

愚生徒　さうだ。あれはミルクホールの汚點の着いた食卓掛の上に放り出して有る時にのみ、人々の眼に觸れる物であるが、實は牛乳屋の機關雜誌では無い。官報とは、誤謬を誤謬無しに記した印刷物だ。事實ですらそれを誤報すれば新聞として賣れもし權威も保てる世の中に、折角の誤謬も、之を誤謬無しに記す時は誰も顧みる者が無いのだ。

其惡友　そんなに誤謬は尊い物でせうか。

愚生徒　尊貴卽誤謬、至善卽虛僞だ。それほど虛僞は善い物だ。曾て僕のところへ賢い女が近づいて來た事があつた。そして二人は互に誤謬を交換して樂しんでゐたが、僕に尙ほ其上の虛僞をあがなつて誤謬を粉飾する丈けの錢が無かつた爲めに、二人は遂に、遠ざかる樣に成つたよ。その時俺はしみ〴〵感じたな、男に錢有れかし、女に手管有れかしと云ふことを。

其惡友　虛僞は購ひ得るものですか。

愚生徒　眞理は誰しも錢を出して買ひはしない。けれど虚僞ならば——にせ物らしい虚僞でさへも、又は印刷せられた虚僞でさへも皆さんが買ふぢやあないか。人間の頭から分泌するものゝ中で、單り價値有る物は虚僞ばかりだ。男は錢を有つて初めて虚僞を買ひ得るのだが、女は初めから手管を持つてゐる。愚かなる靑年が赤裸々の心を以て美德也と思ひ込む時に、美しい少女は猫をかぶる事に依つて、一層自分を魅力有る者にする。

其惡友　成程。それでは僕も何より先づ虚僞の研究でもしませうか。

愚生徒　虚僞の最も上乘なるものは、自ら知らずして行ひ、自ら識らずして言ふ虚僞である。世に謂ふ天衣無縫とは其れだ。あらゆる物の中で、虚僞は最も天才を要するものだ研究してからやるやうな虚僞には、乾度馬脚を現はすに終る可き缺陷が有る。

其惡友　では、いつそのこと虚僞無しで通しませうか？

愚生徒　人はパンのみにして生くるものに非ず。虚僞に依つて生き、且虚僞に依つて死ぬ。世の中は狐狸の化けくらべ、穴より出でゝ穴に入るまで、然うぢやないか。君みたいな虚僞を持たぬ男は到るところで落第し、天衣無縫の虚僞家なる都會の女に微笑まれるぞ。

其惡友　してみると今回本鄕の大學で赤門を女子の爲めに開放したのは、之に依つて博士先生等が虚僞の哲學でも講義しやうといふのでせうね。

愚生徒　虚僞に關する哲學は博士先生は御存知ないよ。あの連中が造詣の深さうな顏をするのは虚僞に關する哲學ぢやあなくして、虚僞せられたる哲學だよ。

其惡友　そんな哲學ぢやあ、博士にされても有り難か有りませんね。

愚生徒　博士に成つてもと言つて貰ひ度いね。日本にはされた博士なんか殆んど一人も有りやあしなからうからな。皆な成つた博士だよ。それでみても博士號の有り難いことは解る。だから官僚學者は手盛の八杯さ。自分の創見を出すには常に遠慮深い彼等も、博士飯に

有りつく時には手盛の八杯をきめるから面白いよ。だが博士其人は今日餘り有り難くも無い。その點は正に君の言はれる通りだ。だが虚僞せられたる哲學の方は一名之を曲學阿官とも言つてな、極めて貴重なものだ。

其惡友　成程、それで年俸がつき高等官二等がつき勅任が附き位記勳等が附き手盛八杯博士が附くのですか。

愚生徒　然うだ。併し曲學阿官の尊いところは、唯そんな外面的屬性のみの爲めではない。曲學阿官は實に我大日本帝國の特產物であるからだ。

其惡友　それでは一つ、國產奬勵とやりますかな。最う一つ名譽ある大日本帝國の國產として世界に誇るに足るものは、南洋へ輸出する密航婦でせう。そして双方とも好い商賣ですね。それで解りました。曲學阿官の博士たちが赤門を女子に開放したのは、彼等を教育して益々國產を奬勵しやうといふのでせう。

愚生徒　早合點してはいけない。女學生も女の中から出た。淫賣婦も女の中から出た。それ故現代東京の女學生と淫賣婦とが、互に酷似してゐるのに不思議は無い。けれども大學教授が女を教育するといふのは誤聞だらう。何となれば、女子を教育するといふ事は必要な事には相違ないけれども、必要な事は決して教育し得られるものではないからだ。男が女に働きかけ得られることは、唯欺すことゝ欺されることに限られてゐる。

其惡友　はゝあ。では大學が此夏女子を迎へたのはこないだ道普請(みちぶしん)をした後を、地固めさせる目的を以て彼等のお尻の重量と靴底の幅員とを利用しやうとしたものでせうよ。

愚生徒　でなければ、女子は教授の講演の時、何分間までよく彼等の欠伸と居眠とを忍ぶことが出來るか。淑德なる現代日本婦人の身だしなみを試驗する爲めだらうよ。

其惡友　成程。さうかも知れませんね。教師と稱する人間は、自分の全く知らない問題を以て、他人を試驗する以外には、他人に對して何等の興味をも持たな

いものですから。

愚生徒　いや、それ以外の興味を持たれたら大變だ對手は兎も角も婦人だからな。

其惡友　けれど、婦人を試驗の材料に供するのは、餘りに殘忍な興味ではないでせうか。

愚生徒　そりやあ、然さ。殘忍は殘忍その物だけで旣に上乘の興味だもの。少くとも、松葉の先でお玉杓子の頭を突つく程の殘忍性を持たないと、此世を面白く渡ることは出來ない。そして多くの女は幸に皆多量の殘忍性を持つてゐる。殊に自ら美しいと思ふ女は。

（自ら美しいと思はぬ女が世に有らうか）

其惡友　そりやあ、然です。しかし、女性に對して之を用ひるのは如何でせう。纖弱い女性は恤つてやるのが道ではないでせうか。

愚生徒　女を決して恤ることをするな。彼等は贅澤に成るか怠け者に成るか。さも無くば病氣になる。それに、惡友君、女は元來弱い者ではない。弱いのは現代婦人の下駄の緒だ。

其惡友　とは又、何故？

愚生徒　現代婦人の下駄は、その造られたる目的に適ふべく、三越へ行き白木へ行きその他多くの吳服屋小間物屋へ行き、同級生の何子さんが海岸へ行くと聞けば、現代婦人の下駄も亦た鎌倉や大磯へ行く。帝劇へも行き活動へも行く。それだから、金屬にて製造せられざる限り、世界で何よりも弱いものは現代婦人の下駄の緒だ。

其惡友　そして近年めつきり弱く成つたもう一つのものは、東京の學生の足でせうね。此頃の學生にはタキシイに搭乘したがる者こそ有りますが、自分の脚を自動車と思ふ連中は稀でせう。

愚生徒　男は智慧なくして自動車に乘らんとし、女は操無くして玉の輿に乘らうとしてゐる。誠に現代的な事だ。尤も之は女の總ての理想の中で、最も高いものなのだ。

其惡友　女が進化して到達する目標は正にそれですか。

愚生徒　然だ。女の最終の目標は妻となるか、妾に成るかだ。

其惡友　妻は全く好い地位ですね。亭主が外で他人に頭を見苦しく下げて働いてゐる時に、細君は下女を使役し子供を統卒して女王の如く暮してゐます。男は大臣宰相と言つても、國家の奴僕にすぎないが、女は九尺二間の裏店の嬶でも亭主の留守中は一家の君主ですからね。けれど妾が何で女の進化の到着點に成るでせう。あれは奴隷の女性では有りませんか。

愚生徒　馬鹿なことを言つてゐらあ。若し俗務を執らぬのが高貴であるといふ事なら、妾はエヂプトのパロの如くに遊んで暮し、若し孔雀の如く粧ふ事が女の幸福であるとするならば、彼女はシバの女王の如く裝つてゐる。さればこそ、現代の賢い貴婦人達は皆な妾の樣に生活し、妾の樣に語つてゐるではないか。

其惡友　如何にも、さうのやうですね。勞働は神聖と言はれてゐますが、勞働者は必ずしも神聖とはされてゐませんね。その爲めでせうか。僕が上京して特に眼に付いたのは勞働者や職工の風俗ですが、彼等はその勞働に從事しつゝある事を隠さんとするものゝ如くその風俗を學生に眞似てゐます。恰度學生が紳士の風俗を眞似てゐるやうに。それが一層勞働者を餘分に働かねばならぬやうにし、學生を益々非紳士的にするのではないでせうか。

愚生徒　それは面白い觀察だ。だが僕の見たところでは、紳士が却つて學生の粗暴と大食を眞似、學生が却つて職工の下賤な言葉使ひや安價な遊蕩を模倣してゐる樣に思はれるよ。すべてに於いて、現代は價値の倒錯をしてゐるのだ。

日が暮れかゝつたので愚生徒は電氣のスキッチを捻り、

愚生徒　どうだ。高等下宿の下等な夕飯を喰べて行かないか。會食は人間のみの營むことだ。獸類は自分の喰物を友に奪はれはせぬかとの疑ひから、別れ〳〵に成つて食事をするし、人間は友人を喰物にしやうといふ己惚から好んで會食をするものだ。

其惡友　御馳走に成りませうかね。喰ふと云ふ事に於いて一つの樂みがあり、更に他人の物を喰ふといふ事に於いて二重の樂みが御馳走には含まれてゐますよ。

愚生徒　さうだ。他人の物を喰ふのは愚かなる快樂の一つだ。併し他人に物を喰はせるのは一層愚かなる快樂の一つだ。そして他人に物を喰はせて、そして此愚かなる快樂を味はぬ男があつたら、彼は必ず野心を持つてゐる。

其惡友　しかし、自分の物を喰ふのも亦快樂ではないでせうが。人は田舍にゐる時、必要の爲めに喰ひ都會へ來て唯快樂の爲めに喰ふやうにも思はれますよ。

愚生徒　本當に面白いのは口だ、人間の五官の中、面白いのは口だ。それは物を言ひ又物を喰ふ。極めて大切なる二重生活者は口だ。

其惡友　そして俗惡な富める男は、巧い喰物を喰べて賤しむ可き言葉を吐き、貧しくして愚かなる哲人はまづい喰物を口から入れて美はしい言葉を口から出してゐる。

愚生徒　時に君は上京してから、何かうまい物を喰べたかね。東京には山海の珍味が有るからね。

其惡友　駄目です。下宿の食物は、宿料を拂ふ三日以前と、それを拂つた三日以後とだけ、多少膳の上に艶氣が有りますが、それから次第に消極の方へ近づくのです。毎月かうした鹽梅ですから、膳の上で月日の推移が知れる位ですよ。恒産無き者は恒食すら喰べられないのですね。それでも東京へ來て喰物の趣味を覺えた位までには、うまい物を喰べました。聞いたり見たりした御馳走で、これから喰べやうと思ふものは澤山有ります。

愚生徒　僕も少さい時分、よく大人に成つて、小使を自由に使へる樣になつたらウンと喰べたいと思ふものが有つた。けれども、大人に成ると、その慾望を失つてしまつた。だから慾しいと思ふ時、やり度いと思ふ時に何事も得、何事もやつて置く事だ。之は僕の先生の愚教師も常に言つてゐる事だ。百聞一見に如かず

といふけれども、一見亦た一喰に如かずである。今の人々は外から見たゞけで直に物に關するお手輕な意見を築き上げてしまひ、之を喰べて見るところまで進まない惡癖を持つてゐると、愚教師も言つてゐた。之から東京といふ君に取つて新らしい土地で暮すに方つて、此言葉は少しは參考に成りはしないだらうか。

其惡友　では僕も之から、何でも見付け次第喰ふ事にしやう。だが實際人間はよく喰ひますね。そして何物でも喰ひますね。けれど喰ふといふ事は自分がそれに依つて生きて、他を殺すといふ事にも成りますね。

愚生徒　と言つて植物のやうに活きるのも面白くは有るまい。蔓を伸してはひこつたり、ひねくれたり、日向きのいゝ方へばかり立廻つて枝をさしたり、中がうつろの癖に高く秀でた顏がしたかつたり。そんな生活も面白くない。遠慮することはない。活き物を喰つて肥る事だよ。

其惡友　だが、動物を喰はず、菜喰を以て人道主義の實行の一つと考へてゐる人も有りますね。

愚生徒　人間が菜物ばかりした日には、菜物動物の喰扶持を横取りする事に成らうぢやないか。その上、人間の口から脱れた動物が他の動物なり植物なりを喰ひ立てやうぢやないか。春秋の筆法で行けば、之も人間のところへ責任が返つて來るのさ。だから二重の他殺になるのだ。

其惡友　では身を殺して仁を成すの本文通りに、何も喰べなかつたら何うです。

愚生徒　その時は、前の二重他殺の結果を來す上に自分が死んで近親を悲ませ困らせ生活の道を狹めるから、之れこそ三重の他殺だ。そんな考へは何かと喰ひ飽きた果に起る空想なのだ。君なぞは、まだ之から喰ひたてる時期だ。いゝ兒にばかり成りたがらずに、遠慮無く盛んに飲み且つ喰ふ可しだ。デカンショに曰く

　飯は喰ひたし朝寢はしたし
　　飯と朝寢の板ばさみ

その兩方とも實行するさ。

其惡友　たが人間が一日に喰ふ喰物は何んな位に登

るでせう。東京へ來てつく〴〵感心することは、人間の多いことですね。僕は緣日だの淺草の觀音樣へ行つたりすると、人間もよく生まれもし生みもしたと思ひますね。雜草の野原へ生え擴がつた樣に、何處が際限かと思ひますね。淺草の觀世音菩薩は古往古來、自分のところへ來た人の數と、懸けられたる人間の願望の樣々とを思ひ浮べたら坐ろに微笑まれるでせうね。

水國をさすらひて

子爵　田中阿歌麿

ゼネバ湖の風景

瑞西のゼネバ湖の北側、湖岸から少しく隔つた所の葡萄園の多い小高い丘の上にローザンヌといふ都會がある。此處は湖の北側の大部分を占めてゐるボー州の首府で、古く羅馬時代より起り、今は人口六萬餘もあるといふことだが、私が滯在當時は約三萬程であつた。町から南方を望むと、前面に一碧鏡のやうな湖が展開して、其の靜かな波の上を、日每に、諸國の遊觀客を乘せた汽船や、ゼネバ湖固有の三角形の帆を張つた大きな荷船が、黑鳥白鳥のやうに彼處此處に往復してゐて、言ふばかりなき舒やかな快感を與へ、其の背景には佛蘭西の山々が重疊し、東の方には稍高い瑞西の山が其の巔に雪を戴いて美しい景趣を呈してゐる。

ローザンヌから索線鐵道によつて湖岸に出ると、其處にウシイといふ小さな町がある。此處はローザンヌの港で、兼ねて外人の遊樂地である。町の内には小綺麗なホテルなどがあつて、夏季は夕方になると、時折音樂會などの催しがある。で、ローザンヌの人は夕涼

みがてら遊びに來るので、町は常に繁昌してゐる。遠く湖上からローザンヌの市街を望むと、町の小高い丘の上に千二百年代に建てられたゴヂック式の寺院があつて、其の尖塔が巍然として空に聳えてゐる。此の町は素朴な瑞西の片田舍であるが、風色の美しいのと、教育の進歩してゐるとで知られた所で、殊に中等教育の發達してゐることは、最も其の誇としてゐる。そしてゼネバの如く都會化してゐないから、青年男女の佛語を學ばうとする者が世界の各方面から集つて、是等に對する設備も、また頗る行屆いてゐる。英吉利やアメリカや乃至獨逸から女學校を卒へた女の子達が嫁に行く迄の間、佛語を學びに來る者も少くない。そしてその多くは專ら婦人を世話する私塾のやうな所に入つて、何れもゼネバ湖の風光に浸りながら勉强するのである。私は此處に一年餘り滯在して、佛語を學びながら中學に通つてゐた。

四季の探勝

此間に於けるゼネバ湖畔の生活は私の一生を通じて忘れ難い印象を貽してゐる。實にゼネバ湖畔の四季の眺めは一として鮮かならざるはない。春三月頃にはシメ／＼と濕つた湖畔の牧場の青々とした雜草の中に、黄いろい櫻草が繪の具を零したやうに咲き亂れて、それを摘みに來る女子供の彼處此處に見る景色の長閑る。彼等は摘んだ花をサラードの中に入れて食用に供するのだが、どういふわけか土地の者は之を「日本サラダ」と呼んでゐる。それからポカ／＼溫かになると、湖岸は西洋水仙の花盛りで、青草の中に無數に白い花が首を擡げてゐる姿はまた更に得も言はれぬ趣がある。其の頃には「水仙の祭」といふのがある。けれども私はそれを目のあたりにする機會は無かつた。

夏になれば、土地の人たちは殆んど日曜毎に散歩に出るのが常で、殊に青年は好んで遠足する。湖邊には鐵道あり、湖上には汽船あつて、何れの方面へ行くも便利で、且つ旅人相手の土地柄なので、旅宿でも休息所でも農家でもよく旅人を歡待して、旅費の如きも、歐羅巴諸國中比較的低廉の方である。一枚の往復切符

を求めて汽車に投ずると、歸途は其の切符で舟に乘るも自由である。そして到る所安直に風景を探ることが出來る樣な設備になつて居るのである。秋は年中行事の一つとして葡萄收穫の祭禮が行はれる。私は此の土地の風俗を觀察する上にそれを最も興味あるものに思つた。

葡萄栽培と收穫祝ひ

ゼネバ湖畔の平地は一面の葡萄園である。歐羅巴諸國に於いては一般に葡萄を栽培するに、棚を設らへずに、柱を幾本となく立てゝ一本毎にそれを卷きつけるのが普通だが、彼地には竹がないので、それが日本のやうに簡便には行かない。普通は日本の丸太ほどの木を四つ割にして之を支へて居る。瑞西の南部で見たものゝ如きは、石塔のやうに花崗石の柱を用ひてゐるので、宛然墓場のやうな觀があつた。有機物質を用ゐれば、腐つて再び取換へなければならぬ手數を要するからではあるが、私等の目には、其れが極めて異樣で且つ沒趣味に見えた。

元來葡萄は歐羅巴南部に於ける耕作物中最も重要なものとして、之れに對する栽培法は頗る周到を極め、特に彼等は氣候の影響を厭れて日當りの好い南向の傾斜地に田畑を作るやうに段々に植付けてゐる。そして收穫期に近づくと、泥棒が遣つて來るので、其の周圍には人間の身長より高く土塀を築いて、通行人には決して園内を覗かせない。それで葡萄の耕作地は道路の兩側ともに何等の展望もなく、甚だ鬱陶しい感じがする。伊太利の葡萄耕作地には、收穫期になると、其の地方で組織した一種の畑巡査とも云ふべきものが居つて、鐵砲を擔いで二人づゝ見廻ることにしてゐる。若し葡萄園に飛び込むものを發見すると、盜む盜まぬを問はず、單に葡萄園侵入といふ丈けで銃殺しても差支へないことになつてゐる。私はそれが怖ろしいと云ふので再三注意されたことを今でも記憶してゐる。斯くして愈々收穫期が來れば、學校は一週間ばかりの間全く休暇になつて、農家では一樣に其の收穫に從事するのである。その時は葡萄園主の親戚知己が手傳ひに行

くのが一般の常習で、當時私も學校友達の所に手傳ひに行つた一人である。此の時には葡萄を採りながら幾らそれを頬張つても差支へないので。私等葡萄國の産でない者には非常に愉快であつた。少し話は墮ちるが私が思ふ存分葡萄を喰つたのは此の時で、大きく云ふと空前絶後であつた。若い同志で無暗に喰べたのだから、一粒宛皮を吐き出しながら口にしては堪らないので、一房の葡萄を二度か三度かに齒で扱いで、皮も種子も同時に顎と舌とで壓搾して、其の液汁卽ち葡萄酒の原料を咽喉から腹へ傳へ、滓を吐き出すといふ贅澤な喰方をした。此の賑やかな收穫が數日續くと今度は葡萄を器械で壓搾し、其の葡萄液をば、樽に詰め、そして酒庫に收める。かうして數週日の後に新酒の酒庫開きがあつて、親戚知己が數多招待され、雇人などが其の手傳に出掛けて來る。此の時は既に葡萄液が醱酵してゐるので、其のお祝ひの席で好むに任せてうつかり飲むと大變なことになる。此の葡萄酒といふのは、黄色な美しい色で、所謂白葡萄酒なるものである。赤葡萄酒は卽ち之を山午蒡の根で色付けたので、何れも酒倉の中に長く貯藏したものほど好酒家には賞美されるのである。一般に此の地方に醸造される葡萄酒をラボーの酒と稱して、ブルゴーキの本場のそれと稍似て劣るものである。

葡萄收穫者の祝日

ローザンヌから湖邊を東へ約十里程行つた處にブベといふ小市街が在る。此の地方には十五年乃至二十年目毎に土地固有の葡萄收穫の祭禮が行はれて、ローザンヌ地方のそれとは全く趣を異にした風俗が見られるのである。滯在當時私が之を目擊するを得たのは實に千載の一遇であつた。此の祭禮は「葡萄收穫者の祝日」と云つて多くの詩人に歌はれ、古代から行はれて來たもので、土地の人たちは農業の發達を祈り、野外勞働を樂しむものとして、今も猶ほ古代の儀式そのまゝを傳承してゐる。此の日は之を見ようとして歐羅巴各方面より集まる者二三萬を超え、非常の盛觀を呈する。定められた祭場は、湖を隔てた遠山を背景とする町

中央なる町場の大廣場で、約千二百人の町人――主に葡萄の耕作者、職工、勞働者等が其の日は藝人になつたり歌うたひになつたりして、希臘神話中の酒神バレス、セレス、ヴアキウスなどに象どつた活人畫を山車に乘せて町中を練りながら歌つたり踊つたりして騷ぐ。そして葡萄收穫の繁昌を造物主にお禮を申上げるといふ式を行ふのである。

太陽を探して!

私が此のローザンヌを中心として湖畔生活を送つた一年半餘りは、私には最も幸福な時代で、鮮かに記憶に存するものが頗る多い。ローザンヌに在りて「太陽を探しに行つた」ことも今は忘れ難い追憶の一つである。一體ゼネバ湖畔の冬は霧ふかくして天日を見ざることが幾日も續いて、鬱陶しさに堪らぬほど氣分が惡くなることがある。斯うした日は、土地の人達は「太陽を探しに行く」と云つて日曜などに山に遠足するのである。山と云つても、此の邊のは大して高いわけではない。町より一二里の間だら/\上りの麥畑や或は林の木蔭を縫つて、百尺乃至百五十尺の高所に登ると霧は薄らいで、四邊は漸く明るくなり、太陽の姿が其の狭霧の中に白い球のやうに光つて見えるのである。と、女子供は「太陽が出た、太陽が出た!」と叫んで雀躍する。斯くて勇氣を鼓して、更に登ると、身は全く雲裏に出て、赫奕として太陽の碧空に跳るを見、脚下には漠々たる雲の海が漂うて壯絶快絶今までの不快も疲勞も拭はれたやうに消えて了ふ。そして此の邊りは路上一二寸一面に雪に包まれて、四邊に繁茂する針葉樹の森は木々悉く凍つて宛ら氷の木のやうで、雲の搖曳してゐる間に太陽のキラ/\と輝くさまは譬へようなき壯觀である。遠方を眺めると、ゼネバ湖の邊は雲の海で閉されて、湖の向側には雪を頂いた佛蘭西の山々が高く低く並み走る景色の美しさ、實に忘我の境を彷徨する想ひがある。私は屢々此の地を友人と共に訪れて、此の快感を恣にした。そして晝食には途中百姓家から麵麭を求めて、自家製の蜂蜜を副へ、牧場から牛乳を購ひ求めて飲料水に代へたりした。

私はローザンヌに在つて、斯ういふ景色に浸りながら、屢々モルジユなるフオーレル先生を訪れるのであつた。その後私は佛蘭西の巴里を經て白耳義に移り、此の地に最も長く滯在したのであるが、第二の祖國とも云ふべきは白耳義ではなく、寧ろ瑞西であるとしたい。誠に瑞西の地は風景絶佳なるに加へて、私等にとつては湖沼學上好個の實驗場たるゼネバ湖があり、現在、自らの智庫を開閉する鍵を與へられて、日夕千變萬化の湖に親み、且つ時折フオーレル博士の門を叩くを得たのであるから、私には永く忘るべからざる心の故郷である。

ベルンに向つて

私はローザンヌに滯在すること一年有餘、未だ學業を卒へずして、僅かに語學に頭を惱まして居た事とてフオーレル先生の十分なる指導を受けることを得なかつたのは甚だ遺憾であつた。其の後白耳義に轉じた私は、更に通信方法によつて懇篤なる指導を受けた。で瑞西に滯在中はゼネバ湖ばかりでなく、此の國の處々に散在する幾多の湖沼を屢々探つた。

一年の夏、中央アルプス方面の湖沼めぐりを思ひ立つて、ローザンヌから汽車に投じた私は、瑞西聯邦の首府たるベルンに向つた。此の間凡そ三時間半、此の線路はローザンヌから東へ向つて段々小高い所に上つて、遂には瑞西の高原に通過するのである。此の邊は遠く山々を背景とする一帶の麥畑で、其の間には部落が散在し、又針葉樹の森が點綴してゐる。瑞西としては格別人目を喜ばせる景色ではないが、只ローザンヌを出で、一時間餘りの間は、右手にゼネバ湖を俯瞰するのが此の線路中最も美しい眺めである。ローザンヌとベルンとの間の中頃にフリーブウルヒといふ小市街がある。私等の一行は先づ此處に下車した。

獨佛語の境界街

フリーブウルヒは一千七十五年、サリーヌの深い谷に跨る高臺にたてられた同名の州の首府で、人口一萬餘、市中には歐羅巴中古の多くの小都會のやうに、主なる建物としては州廳、會堂等がある。中にも州廳は

昔の大名大名の居城の跡であるが、規模が小さいながらも、一個の獨立した共和國の政府で、其の前に周圍四米突半の大なる菩提樹がある。稀に見る古木で、幹は空洞になつて、其の枝は僅かに建物の石柱に支へられそして如何にも片田舍の小市街の氣分を漂はしてゐる。州廳を中心として兩側に連なる家々は至つて陰暗で、街路は狹く、紆餘曲折し、市人は皆な戸外に出て色々な仕事をしてゐる。市中を貫流してゐる谷川には釣橋が架けてある。其の長さ二百四十六米突、谷底から五十一米突の上にあつて、一千八百三十四年に開通したものである。釣橋から溪川を見下ろすと、底深く處々碧潭を湛へて水は淙々として流れてゐる。土地の者の話には、昔、此釣橋の架けてなかつた時分は、一旦谷に下つて、舟を渡し、更に對岸の谷を上つて、人家に出るまでは少くとも一時間を要したといふ。當時は交通上斯く不便であつたので、今猶ほ同じ市の内で言葉が佛語の所と獨語の所とがある。卽ち停車場より、市の目拔の部分を貫流してゐる此の河の邊に出るまでは獨語が用ひられ、川を渡れば佛語が使はれてゐるのである。

ベルン市見物

一行は一時間ばかりにして殆んど全市街の見物を了へ再び汽車に乘つてベルンに向つた。ベルンの市街はフリーブルヒと同じく、アール川が深い谷を作つて紆曲して流るゝ其の内側に位置を占めて、川緣より高きこと約三十五米突、三方は川に圍まれ、一方は陸地續きで、而も其の市街の形式と云ひ、風景と云ひ、まつたくフリーブルヒその儘である、歷史家ならば私には此の市街の沿革などを云々する資格はないが、市街が三面自然の濠で取圍まれて小高い丘陵上に在るのは、中世紀時代、外敵を防禦するに屈竟の位置で、都市の發達は其の半島地の外鼻が舊い部分で、それより次第に放射線狀に擴がつて行く傾がある。そして主なる道路は東西に長く、此の町に入ると、直に目に付くのは家並の兩側の步道が軒下になつて、アーチの中を行くごとく、恰かも明治初年、東京銀座街に見る煉瓦地の

やうな觀があつたと微かに記憶してゐる。市街の處々に噴水塔があつて、一種の特徴を表はしてゐる。是は昔、水道の敷設されなかつた時代に使用された共同水汲場の遺物である。

ベルン市の表徵

殊に旅人の目を惹くのは、市の中央に設らへられた古風の時計臺である。時計臺は昔獄舍として使用されてゐたコヒッルンの建物の一部に置かれたもので、現今の時計臺といふのは、一千七百七十年に再建したものである。時計臺の東向に時計があつて、此處に二人の像と、又鷄と熊との像がある。鷄が時を報ずる時、熊の群が一方から出て來て二人の像の前を通過し一方に入つて行くといふ仕組である。是はベルンを代表した象徵で、町の名のベルンといふは卽ち獨逸語のベャから來たもので、彼の地で熊を記章としてゐるのはそれがためである。其の他重なる建築物には市役所、會堂等あり、何れも皆中古の遺物で、建築から云つても有名なものらしい。中に見遁がしてならぬのは政廳である。政廳と云へば大建築のやうに思はれるが、其の實は間口百二十二米突、奥行五十米突の極めて狹小な建物で、一千八百五十七年に竣成したものである。一般旅人の縱覽を許して居るので、一行は門番に案內されて中に入つた。外部內部共に質素で、これと云ふ見るべきものもなく、廳內にある聯邦議會の議事堂の規模の如きは頗る小さい。その筈である、國が小さいから上下兩院ともに議員の數は少ない。議會の招集されるのは每年七月で、議會では獨語、佛語の兩樣を用ひて居るといふことである。開會中、一般の參觀を許してゐるが、當時は八月であつたので、遺憾ながら見られなかつた。それから大統領の面會室を見た。此處も亦極めて質素な一小房で、室內の裝飾の如きは殆ど皆無である。偶々日本の岩倉大使が日本政府から齎らした蒔繪の箱が卓上を飾つてゐた。面會室の傍より露臺(バルコニー)に出ると、アール川を隔てゝ市街の一小部分を表はした美しい風景が展望された。

博物館見物

此の國の大統領といふは、任期は一ヶ年で、偏鄙な片田舍から選ばれて出て來るのだから、官邸に引移るといふやうなことをしない。本人は下宿屋の三層樓から四層樓どころの一室に住み込んで、毎日徒歩で出勤するといふ風で其の平生も亦極めて質素である。質素と云へば此の以前私はローザンヌからベルン博物館を訪づれ、例の湖沼學の泰斗フォーレル先生の嚴父がゼネバ湖から採集して陳列された杭上生活の遺物を見るべく出掛けた時のことであつた。博物館は州廳の建物の一部分であると聞いてゐたので、此の邊を探つたが、其の場所は一向見當らない。鵜の目鷹の目で廳内の其處此處を探し廻つてゐるうちに、漸く幅一尺五寸ばかりの入口を見付けた。扉は固く閉ざゝれて、傍の柱に文部省とある板の下に、それよりも稍小さい博物館とある板が掲げてある。そして其處には呼鈴の綱が下つて傍に「所用ある者は此の綱を引くべし」と張札してある。更に掲示板を見ると、博物館は公開してゐるのでなく、係りに頼めば、參觀を許すといふ意味のことが書いてある。で、平生參觀者は極めて稀で、偶に特志者が訪づれるに過ぎないらしい。試みに綱を引くと、内から何の挨拶もない。些か訝に思ひながら幾度となく引いてゐると、軈て羊羹色のフロックコートを着た白髮の老人が扉の中からぬつと顏を出した。取敢ず用向を通ずると、老人はニッコリして「君は日本人だらう、よく來てくれた」と愛想よく迎へて、「今朝はまだ小使は見えないけれど、博物館は此の階上だから、此の鍵を持つて隨意に開けて見てくれ給へ、そして歸る時には、此の廊下の右手の所を一寸叩いてくれると私が居るから鍵を返してくれゝばよい」と親切に言つて鍵を私の掌に渡した。私は厚く禮を述べて、細い扉口を横向に通つて、敎へらるゝまゝに廊下を抜け、階上の博物館に入つた。博物館と云つても、僅かに小さい部屋が二間あるだけで、寧ろ博物室と云ふべきものであるが、採集品の配列の整然として、分類の正しいことは實に意想外で、之を巨細に研究したら、容易に見足らぬだらうと思つた。素より人類學の智識が乏しい私に

は、是等を能く觀る用意がなかつたので、僅か二時間ばかりにして一通り見終へ、それから直ちに歸ることとにした。歸るに際して先に云ひ置かれた通り老人の居室の扉を叩くと、老人が再び現はれたので、改めて禮を言つた所が、「復た氣の向いた時には何時でもお出なさい、そして其の時には是非私の許を尋ねさつしやい」と言つて、一葉の名刺をくれた。豈圖らんや此の老人は時の文部大臣であつた。私は一介の書生が文部大臣閣下の案内を受けて、博物館を見物したのは實に空前絶後であると思つた。

凡てが斯ういふ體で、ローザンヌに滯在してゐた時の如きも知名の士の茶話會や、懇親會などに招待されて、前大統領の三四人ぐらゐ紹介されることは此の國には稀らしくない。而も中央政府の大統領以外、州の大統領と來たらザラにある。而も瑞西二十四州の大統領は一年毎に改選されるのであるから、前、現大統領の數は實に夥しいものである。

インテルラーケンまで

ベルンの市街見物を終へた一行は、其の日午後、更に汽車に投じてベルンアルプスの山地に向つた、これより道はアール川に沿うて次第に山にかゝつて、汽車は速度を弛めつゝ徐々と山に入るのである。かくて一時間ばかりにしてツウルの町に入つた。此處はツウル湖より流れ出すアール川の兩岸に跨つた人口約五千餘の古風な小市街で、有名な瑞西國立の士官學校がある。斯かる小國の學校であるから、何れ規模の小さい建物だらうが、那翁が嘗て在學してゐたといふので、土地の自慢になつてゐる。一行はツウルの佳景を車窓より眺めて更に進むと、間もなくツウルの湖畔に出た。此處に鐵道は全く盡きて、これよりは湖上の連絡船に依つて對岸に行くのである。ツウル湖の長さ十六粁、面積四千七百九十ヘクタールの大なる湖で、其の深さ二百十六米、ベルンアルプスの北麓に在る秀麗の地として、瑞西見物の旅人には必ず見るべきものゝ一つに數へられてゐる。概して、北側の山が急で、湖の周圍は一面蔚然たる森に包まれ、其の間には別莊が點綴して、

湖上を走つて行く汽船の窓からは彼處此處の岸邊に舟の客の上り下りする樣や、散歩の人々が木立の間にちらくするのが鮮やかに見える。一行は一時間餘りにして軈て對岸に上陸した。そして復た更に汽車に乘つた。汽車は二階造りの展望列車で、階上に上ると、ツウル湖の風光は一眸の下に收められる。それより十分時程行くと、インテルラーケンといふへ着いた。此處は其の名の示す如く「二つの湖の間」の狹い平地に在る。即ち平地の東方にはブリエシツ湖があり、西方にはツウン湖がある。そして南方はローテルブルネンの谷深くベルンアルプスの氷河から其の解氷を流してゐる。固と此の川はツウル、ブリエシツの二つの湖の繋がつてゐた一つの大きな湖の中央に泥土を齎らして、遂に今日の如く湖を兩斷したのであつて、インテルラークの町は斯くして出來た平原の中央に位置を占めてゐるのである。私は此處に數日間滯在することになつた。

所謂アルプス趣味

瑞西の山中に在る市街のことなれば、誰しも寒いやうに思はるれるけれども、山間の低地の遊覽場としては最も溫暖で、植物の如きも寧ろ南國的であると云はれてゐる。そして日中は太陽の光が强烈で、夜になつても格別寒氣を覺えない。市街には歐羅巴各地の旅人相手の大きなホテルが軒を並べて、旅人に對する設備は凡て整うてゐる。市街は部落の集合から成立つて、部落は殆んど何れもホテルの集合から成立つてゐる。地理學上斯く旅宿の集合より成る部落を旅館村と稱して、其の原因はまつたく其處にはホテルを中心として日常品を供給する店と旅人を相手として記念品を賣る店とがある。記念品といふのは土地の名物で、謂はゞ土產物である。別に此の地特產物といふのではなく、瑞西の他の遊覽地で賣つてゐる品と殆んど大同小異で、主に小さな木製の細工物——日本でいふ骨細工とか手箱とか寫眞立とか筆軸とか額緣とかいふ類で、多くは木で作つて、それに色々な彫刻をしたものである。筆軸の如きはそれに小さな穴があつて、其處から中を覗くと、有名な瀑などの寫眞が透して見える工合にな

つてゐる。又店には杖(ステッキ)の類を並べてあつて、その一端にはシャモアといふ鹿の足などを取付けてある。その他繪はがきは無論のこと、又色々の高山植物――殊にエーデルワイスの押花を貼つた繪葉書や、(此のエーデルワイスは日本でも北國の高山即ち鳥海の山上にも見られる。)スシャレイと云つて、アルプスに遊んだものゝ直ちに目に止まる高い所の牧場内にある雅致ある木造の小舍模型などのある小さな裝飾品などがある。其の裝飾品は大低小舍の屋根が蓋になつて、それを開けると、中は物入れになつてゐたり、オルガンなどの仕掛などをしてある。要するに是等記念品はアルプス趣味とも云ふべきもので、凡て皆なアルプスに因んだ意匠が施してある。

瑞西山中の理想鄕

市中を散歩すると、各國の人種が思ひ〳〵の服裝をして、氣持のいゝ朝夕には、各國人各樣の國語で此いゝ地の風景を賞してゐる聲が聞かれる。殊に目を惹くのは婦人連の服裝である。色彩の華美な最新流行の盛裝をしてゐるもあれば、貴やかに高雅なるもあり、瀟洒にして楚々たるもあり、何れも各國の風俗を夫々代表してゐるもので、一たびホテルの食堂に出ると、それらの國々の人々が食卓を圍んだ圖は宛然小なる世界で、少くも文明國分布圖を鳥瞰するの觀がある。斯ういふ異種人の會合は、歐羅巴の遊覧地に設けてあるクルサルといふ倶樂部やうのものや音樂會などで屢々見られるのである。

此の邊りの風景は悉く色彩の濃い、溫かな南國的の氣分が漲つて、遠く南方にはロートブルネンの谷深くインフラワ其の他ベルンアルプスで有名な山々の相重つて嶺に白雪を戴いてゐる風景を望んで避暑するに好適地であるばかりでなく、一つは登山や遠足の出發點として旅人を吸收するので、夏季は其の數實に二千五百乃至三千人に達するといふことである。そして是等多數の旅客の重なる遠足の目的はベルンアルプスの最高の峯と云はる、ユンフラワに登山することで、處女と云ふ獨逸語の名ある如く、山嶺に雪を頂いた秀麗な

姿は雲表に聳立して、此の地方の山々の仁王ともいふべく、又此の大なる眺望の女傑とも仰がれるのである、此の山はロートルブルネンの谷奥にあつて、旅人は皆な此の谷を見物して、更に山に上るのである。私が行つた時は此の谷の風景のみを賞して、アルプス登山者でさへ健脚でなければ此の山には上らなかつたが、今は此處に登山鐵道が敷設されて、何の苦もなく眺望を恣にされるので、インテルラーケンを訪るゝものは必ず登山することになつてゐるやうである。而も登山鐵道によつて冬の高山の風景を樂しみ得られるのは實に果報と云はねばならぬ。汽車が徐々と上る間にはところ／＼大きな崖や雪の吹溜りなどを避けてトンネルを潜り拔けて行くのであるが、車室は暖房管を以て暖めてゐるから、更に寒氣を覺えないと云ふ。

「清潔な泉」の村

一日私はインテルラーケンの停車場より小一里先の此の谷の入口に在るウエルデルスウエルといふ小部落の同行者の知人の家に滯在して、此處を根據にロートブルネンの谷底を探るべく日歸旅行を試みた。當時は汽車の便が無かつたので、徒歩であつた。谷は氷河の遺した特徴としてU字狀をなし、その谷底は平坦で、幅十町より十五町內外もあらう。そして其の兩端は高く削り立つて長壁を成し、更に其の上に急峻な山々が屛風のやうに繞てゐる。眞面に見る谷の突當りは肌美はしき少女のやうなインフラワの白峰がアルプス山系の袖を擴げて綽約として紺碧の空に兀立して知らず識らず自然の莊嚴に魅せられる。それより谷を上れば、間もなくルッチン川の畔に出て、道は此の川に沿うて溯るのである。そして黑ルッチン、白ルッチン兩流の合する所に達する。黑ルッチン川は有名なるグリンデルワルドの氷河より流れ出て、インテルラーケンより凡そ二十粁の高さにある。そして其の氷河の終端は一千〇五十七米の高さにあつて、此の地方に於ける氷河のうちで最も低く、旅行家が此の地の勝を探るには馬車の便もあつて、毫も旅行の困難を感じない。私の行かうとする所は此の谷でなく、白ルッチンの谷で、此の兩流の

會合點から少しく先のロートブリネンといふ小部落を通ずるのである。家は深い溪川の兩岸に散在して、四邊は寂しい陰氣な眺めである。U字狀に深く窪んだ谷底の平地であるから、一帶に日當りが惡く、七月頃になつて、太陽は朝七時過ぎでなければ姿を見せない。總じて瑞西山中の谷底の部落は日光冥く、且つ其の間を流るゝ河川は汎濫しやすい。そして一たび浸水すると容易に乾かないので、地面はジメ／＼して絕えず病人を生ずる。午後三時過ぎにもなれば、最早日は陰つて憂鬱な暮色に村は閉されるのである。此の谷間の夏は遊覽客を迎ふべく悉く新裝して、懸崖三百米より五百米内外の靑葉の間より糸緞(ねりぎぬ)を亂しかけたやうな細瀑小瀑の珈々として濺ぐもあり、或は空山の雷の白光を放つて頹れ落ちるやうな大瀑布もある。ロートブリネンの名は全くそれから出たもので、卽ちロートルは清潔の義で、ブルネンは泉の義である。淸潔なる泉とは卽ち此の瀧を指した代名詞である。此の瀑は四時共にロートルブルネンの風趣を飾つてゐるのではない。氷河が强い眞夏の日光に解けて流れ出すのであるから、恰かも盛裝を凝(こら)して遊覽者を迎へる態である。ロートルブルネンの村の附近には殊更に瀧が多い。中に其の最も有名なのはフトーバハの瀑である。村にある同名の旅宿から五分間ばかりで行かれる。

天然名所の觀覽料取立

此の瀧は宛ら白布のやうに絕壁に垂れて、其の高さ三百米、日光の華嚴の瀧の約三倍である。太鼓の間斷なく音するやうに鞺鞳として落下する姿はたゞもう見事であるが、瀧は白茶けた崖に露出して、林泉の眺めに乏しい憾みがある。そして風の强い日は瀧は吹き飛ばされて斜に落ち、時には其處に虹を作るといふ風である。此の瀧壺近く、最も眺望に適する所は板塀を取繞らして、其處に入るには觀覽料を拂はなければならない。人を愚弄してゐるやうにも思はれるが、瑞西のやうな旅人相手の地方には斯うしたところは稀(めづ)らしくない。天然物を取圍んで、强いて之を見ようとする者から金を取るのは、金儲としては此上ない好い手段で、

實際我國に於ても、瑞西に於けるが如く、天然名所の觀覽料取立を實施してはどうかと思ふ。華嚴瀧の傍にも茶店があつて、以前は此の瀧を此の茶店から眺めて茶を啜つたりしたものだが、今は瀧を眺めて、繪葉書の二三枚を買つて、それにスタンプを捺させるのが既に上等の客で、多くは茶店の前に突立つて瀧を眺めて其儘歸つて了ふ。此處の茶店は瀧を眺める者の便宜を思つて設備をしたのだから、茶は欲しくなくともちよつとでも足を止めて、多少金錢を投じないのは、心ない業であらう。で、私は斯ういふ特殊な所には垣を作つて、之を強いて見物しようといふ者から觀覽料を取立てゝも差支へないと思ふ。華嚴瀧ならば十錢ぐらゐが相當かと思はれるが、之が有名な瀧として、而も日光より程近い所を徒な金錢を費して見物する者が多いから、學生又は地方の徒歩者を除いて、人力車に乘る者は少くとも五十錢ぐらゐ取立てゝ宜い。

妙な乞食と花賣少女

一行はロートルブルネンの瀧を見物して、晝食を喫し、歸途に就くと、向ふから老いた一人の乞食が來た。此の乞食の風體はアルプス固有のもので、頭に汚れた鳥打帽を戴き身には襤褸を纏つて、獸の皮で作つた大きな袋を背にしてゐる。彼は私どもの前に近づくと、其の袋の端に附いてゐる丸い管を口へ持つて、法螺貝のやうな大きな音を吹立てるのであつた。すると其の音が時を經て遠近の山々に反響して、傍に居る者の笑顏を買ふのであつた。實に山彦一聲五十三チームといふ乞食である。かくして一行の滯在してゐるインテルラーケンの村の入口に來ると、其處にはロッドデンドロンと稱する石楠のやうな丈の低い小さな紅い花の束を手にした村の子供が私どもを取圍んで、切りに其の花束を勸めるのであつた。此の花は石楠科に屬するもので、高山の岩間に生えてゐるのを村の子供が内職に採つて賣るので、一束の價は十錢、道を急ぐ旅人や足のない連中などは、之を買つて押葉にし、自分の採つて來たものゝやうな顏をして國へ歸るのである。

ブリエンツ湖畔の風景

一行はそれより更にルツセルンに向ふことにした。朝早くインテルラーケンを出て、前日ツウン湖から來た線路の汽車に乘ると、やがてボニンゲンといふへ着いた。此處はブリエンツ湖畔に在つて、これからは汽船で渉るのである。其の間の航程約一時時餘り、湖はツウン湖より百米の高さにあつて、長さ十四粁、幅二粁乃至二粁半、其の面積は二千九百九十ヘクタールで、湖底の深度は二百六十二米を算へる。汽船は湖の南側エツセルワルドといふへ寄航して、間もなくギスバハといふへ着くと、此處より眺める景は實に秀絶である。此處は固と嶮しい山岳が水に臨んで舟の便もなかつたが、一千八百十八年、或學校の教師が開鑿して以來、ツウン、ブリエンツ兩湖汽船會社が專ら經營して遊覽地としたので、遊覽客の杖を曳くものが頗る多い。此の汽船發着所より直に長さ三百五十米の索線鐵道がある。一行はそれより再び車中の人となつて、山坂を上つた。此の間の傾斜は甚だ急で、百分の二十八といふ勾配がある。上り詰めて汽車を離れると、其處に規模の小さなホテルがあつて、傍には可なり大きな涼臺が設らへられてあつた。此の涼臺は湖面より九十四米の高さにあつて、極めて展望に適してゐる。又此の近くには瀧が見られる。瀧は岩から岩へ七段にかゝつて、全長三百五十米、末流は直に湖に落ちて居る。そして周圍は一面に樹木が繁つて、一段の風景を添へてゐる。一行は次の汽船を待つ間に此處に遊び、再び汽船に投じて湖の西端にある湖名そのまゝのブリエンツといふへ達した。

人口僅かに二千五百餘りの小さい部落で、此處から馬車が出る。それは聯邦政府の郵便局の直營になる乘合馬車で、郵便物の輸送と同時に乘客の運搬に用ひられて、之が冬には橇に代へられる。所によつて發着回數は一定しないが、ブリエンツから出るのは一日三回で、そして、此の旅行をするには、日本で云へば郵便局へ行つて、係りの窓から行先の切符を求めるのである。一臺の乘客定員は大抵七八人で、乘客が多ければそれに準じて出す。詰り局では旅客の爲めに臨時に

車を雇つてくれるのである。私等が通つた時は八月の避暑客の多い時で、一時に五六臺出た。先頭は裝置の完全な政府常用の乘合馬車で、二番目以下は何れも臨時雇入の襤褸馬車であつた。途中は一定の停車場に馬車を着けて、乘客を上げ下ろしするが、その停車場といふは卽ち郵便局で、此處に乘客は十分時休憩し、其の間は馬の附替などをする。

官設馬車に乘つて

一行は此の官設馬車に投じて、ブリエンツの驛を出ると道は次第にメーリンゲンの谷の北側を上るのであつた。其の間にはところ〴〵果樹に取圍まれた牧場内の村が綴られ、一方にU字形をなすメーリンゲンの谷底深く流るゝアール河を見下ろし、懸崖高く幾筋も白糸を垂れたる瀧を眺められた。遐かに來し方を振り返ると、パノラマのやうに展開された山や森の間に、ブリエンツの湖は水晶のやうに光つてゐた。軈て道はブルユックといふ峠へ差蒐つた。頂上の高さ一千三百米突、どちらかと云へば低いけれども、葛折に幾廻りも上つて行く景趣はまた捨て難かつた。此の峠を越したところはオーベルワルド州で、其の名は森の州といふ義である。それよりサルネンの川を傍うて下る道すがら到る處に樹木の群が見られた。一行は間もなくチュンゲンといふ村に入つた。此處は一つの深い谷の中に在つて、北ロルーグルンと稱する小い湖を控へてゐる。村は嘗て其の湖畔にあつたが、一千六百三十六年以來、湖は縮少して平地が作られ、其の間今日の如く隔離したのである。やがて馬車が此の村のホテル、ルーブといふへ着くと、時に晝食時刻で、既に午餐は用意され、一行は直に食堂に案内された。卓に並べられた料理は味觸を喜ばするに足らなかつたが、給仕をしてくれる者は村の娘たちで、何れも柔かみある美しい肌をもつて、此の土地固有の風俗として、白い帽子に黑のコルセットを締めた綺麗な風姿はまことに氣持がよかつた。

ルッセルン湖を渡りて

其處に午餐を終へて、再び車上の人となりルーグル

ンの湖邊に沿うて行くと、其の湖水の湛ふる南端にヌギスベルといふ村がある、それより更に北すれば、サルネンといふ湖があつて、此の村は一千六百二十九年ロイバハの川の大洪水に殆んど破壊されて、此處に湖を生じ、百三十年の久しきに亘つて存在してゐたが、其の後湖水はサルネン湖に排水されて、再び此處に此の部落が作られるに至つたのである。サルネン湖といふは長さ六粁、幅二粁の細長い湖で、ルーグルン湖の面積よりは稍大きく、見渡す景色は雄大とは云へぬが、湖は谷底に深く美しく光つて爽快な感を與へる。道は此の湖邊の左側を傳つて下れば、湖は盡きて、サルネンといふ市街に出る。此處はオーベルワルド州の首府で、人口僅かに四千、それよりまた更に谷を下つて遂にルッセルン湖の枝葉なるアルプナハといふ湖の南端に達するのである、其處にはアルプナハといふ市街がある。有名なるペラシウス登山者の根據地で、これより更にルッセルン行の汽船が出る。一行は馬車を離れて、それに乗つた。此の湖の面積はどれだけあるか今は記憶に上らないが、幅は頗る狹く、其出口は兩岸より山が逼つて、此處に小さい橋が懸り、舟の出入には其都度取り外す仕組になつてゐる。湖上はこれまで見た湖沼と全く趣が異つて、これとして賞すべき眺望もなく恐らくルッセルンの湖沼中最も寂しい景色であらう。時に日は漸く西に陰つて、四邊は水蒸氣の群にたそがれかゝつてゐた。汽船は東側の一二に寄航したのみで、間もなく一行は灯に染めたルッセルンの市街に上陸した。そしてその夜は其處にやすらかな夢を結んだ。

秋の夜の星を觀る人の爲めに

東京天文臺　河合章二郎

『もの知りに星の名を問ふ凉かな』

此れは夏の夕、晝間の勞役にだら〳〵流れた肌の汗を行水で洗ひ去つて、江戸式浴衣姿で庭先や、戸外の緣台に出て、浮世噺しに花を咲かせて居る中に、日は追々に暮れて、暗黑な空に、一つ、二つ、……と星の光が見え始めた時の句であらう。

然し言葉が少し大げさの樣であるが、現今我が日本の所謂『もの知り』で星の名、星座の名を完全に實物に對照して云へる人が幾人かある。特別な專門の學者は別として通常の人で日常目に觸れて居る現象を、科學的に注意して觀察する習慣がないからして、毎夜の樣に空を眺めて居りながら、星の配列の模樣卽星座などのことに就て何等の常識を持つて居る物知りは殆んど居ないであらう。

夏から秋に至る間の宵に見える天界の光景は實に美事なものである、余は强いて讀者に勸告するのである、已に星座に精通せる人でも又、未だ注意して天界を觀察した事の無い人でも、視界を妨ぐるもの丶ない場所、廣き原野、高山、大河の畔でも海濱でも、屋上でもよい、適當な場所を撰んで、成るべくならば仰臥するがよい。然して天體に注視すれば一種雄大なる感想が起る。又其光景の宏大なるに驚くならん。而して此等の天體は永遠の昔卽我地球の創造の時代より今に至る迄少しも變りなく輝き居りしや、尚今後永久に輝き居るものなりや。又宏大なる宇宙の大さ、宇宙の構造等に迄考へ及はゞ、人生の歷史が此永劫なる宇宙の生命に比して如何に短かき一瞬時なるか、又宇宙の大さは我々の知れる凡ての大なるものに比して如何に廣大である

か、眞の無限大なる感想が湧出するのである。

星の光度

星を見て最初に氣の付く事は其光輝の多様なることである。或るものは他の星に比して非常に強い光を放ち、丸でダイヤモンドか、アーク燈を見るが如く、又或るものは光が非常に微弱で健眼の人でも殆んど其存在を認むるに苦しむものがある。若しも星自身の大さが全く同じ位であるとしたならば、光の強いものは最も我々に近く、光の最も微弱なものは我々に最も遠いのであるが、實際は星自身の大さが異なつて居るからして、必ずしも光の強いのが近く、光の弱いのが遠い星であると斷定する譯には行かぬ。

通常肉眼で見て光の最も強いのを一等星、之に次ぐ光のを二等星、其亞ぎを三等星……とし、健眼の人でやつと見得る最小の星を六等星として、光の等級を六等に區別した。然し近來、光度を數量的に測定する樣になつてから此樣な簡單な區別では科學的に滿足が出來なくなつて、假りに一等星平均の光の强さを、六等星の平均の光の强さの百倍として各等級の間に一定の比を持たせる樣にした。卽ち五等星の光は六等星の光の約二・五倍、四等星の光は五等星の光の約二・五倍……とする。卽等級が一級上れば光の强さは約二・五倍となる。斯くの如くすれば一等星の光の約二・五倍の光を有する星を零等星、零等星の約二・五倍の强さの光を有する星を、負一等星とし、漸次斯くの如く擴張して月や太陽の樣に光の强いもの丶光輝を測定して恒星と同じ樣な等級で云ひ表はす必要も起つて來る。滿月の光約負十二等星、太陽の光は約負二十七等星と稱して居る。

近來望遠鏡の進步と天體寫眞撮影術が進步して以來肉眼で見えない少さな星の數が多數に發見されて、七等星……八等星……十七等星など丶云ふのもある。

又各等級の間を細別して一等一、一・二等、一・三等と云ふ樣に等級を小數にて云ひ表はして居る。あまり話が深入りをしたが次に星の數に就て、

星の數

星は一體幾つあるのかと云ふことは誰しもの頭腦に起る問題であるが、一寸見て無數にある樣に見えるが實際數へて見ると、割合に少ない、一等星より六、五等星迄の即肉眼で見得る星の總數は全天で約六千である。然し一時に天の全體を見ることが出來ない故に、一時に見得る數は其半數の三千位である。今星の數を等級別にして見ると次の表の如くである。

等級	星數	累計
〇—二	三九	三九
二—三	九三	一三二
三—四	三〇四	四三六
四—五	一〇一四	一四五〇
五—六	三二三〇	四六八〇
六—七	一〇一二〇	一四八〇〇
七—八	三〇九〇〇	四五七〇〇
八—九	九二三〇〇	一三八〇〇〇
九—一〇	二六九〇〇〇	四〇七〇〇〇
一〇—一一	七六八〇〇〇	一一七五〇〇〇
一一—一二	二〇六五〇〇〇	三三四〇〇〇〇
一二—一三	五六七〇〇〇〇	八九一〇〇〇〇
一三—一四	一四四九〇〇〇〇	二三四〇〇〇〇〇
一四—一五	三八三〇〇〇〇〇	六一七〇〇〇〇〇
一五—一六	九三三〇〇〇〇〇	一五五〇〇〇〇〇〇
一六—一七	二三四〇〇〇〇〇	三八九〇〇〇〇〇〇

右の表によれば零等星より十七等星迄の總數は約四億である。研究學者の計算によりては、宇宙間に存在する星の總數は約十一億なりと云ひ、又他の學者は總數を八億とも十八億なりとも云ふ。兎に角精密に其數を決定することは今の學問の程度では出來かねるが、其總數に關する概念は是れで充分である。

星宿

太洋中に於ける島嶼が、自然と群島を形成するが如くに、星も所々に群をなして配列されて居る。原始時代の人類は此光景を形象的に表示する爲めに、數多の動物、器具、英雄等の形を想像し、星が丁度其等の物の要所に當る樣な形を作りて、其等の星に其動物器具等の名を以て命名して、之れを星座と稱した。然し現今の如くに望遠鏡的の小星が多數に發見されたる時代には舊式の星座にては間に合はず、其等の中間に何れの星座にも屬せざる星が多數に存在するから、現今では

天に任意の線を引いて星座の境界とし、其境界内に含まるゝ古來の星座名を付して、各星座に命名して居る。現今使用して居る星座の數は約九十一である。

星辰配列の模様を書き表はした圖は、星圖又は天圖とも稱す。玆に初秋及初春の宵に見得る星圖の見本を掲げた。第一圖は九月一日午後七時に見得る天の部分で、第二圖は三月一日午後七時に見得る部分である。

星圖の簡單なものを作るには、天を見て寫生すれば出來るが、精確な物を作るには一寸した寫生位では間に合はない、小さな星迄も精しく書き寫さうとして永く天を見て居ると、天球は日週運動卽地球自轉の爲めにだんだんと東から西へ移動して行くから、一夜の中に星座の形を精密に書き寫すことは出來ない。故に晴夜毎に一つ一つ星の位置を精密に測定して、星の位置、光の強さ、星の名稱等を記載する所の表卽ち星表と稱するものを作り、此れに據つて、星の圖を作るのである。此仕事は理窟は簡單であるが、實際やるには中々困難のものである。星の位置と稱するは、地球上の地點の位置を測るのと同樣に經度、緯度を以てする。卽天球の赤道からの距離を星の赤緯、天球の赤道上の一點、春分點から東方へ測つた角距離を以て測つた赤經を以て云ひ表はす。

星の名

或る一つの星を他の星と區別する爲めに一つ一つの星に特別な記號を付すると、卽星に命名する必要が起る。此れは星座が始めて行はれた時代より行はれたものであつて、稍大なる星には一つ一つ固有名が付せられてあるが、十七世紀頃にバイエルと云ふ人が新に一の命名法を用ひた。此方法は星座の中の最大の光を持つて居る星に希臘語のアルファベットのα、其次の星にβ、其次をγ…とし、其星の屬する星座名に冠して呼ぶのである。然し必ずしも此規則に從つて居ないものもある。又非常に少さな星になるとアルファベットの文字丈けでは不足であるから、數字を用ひたり又は其星の記載してある星表の名と、其星表に記してある番號とを以て其星を呼ぶのである。まだ此外にも他の

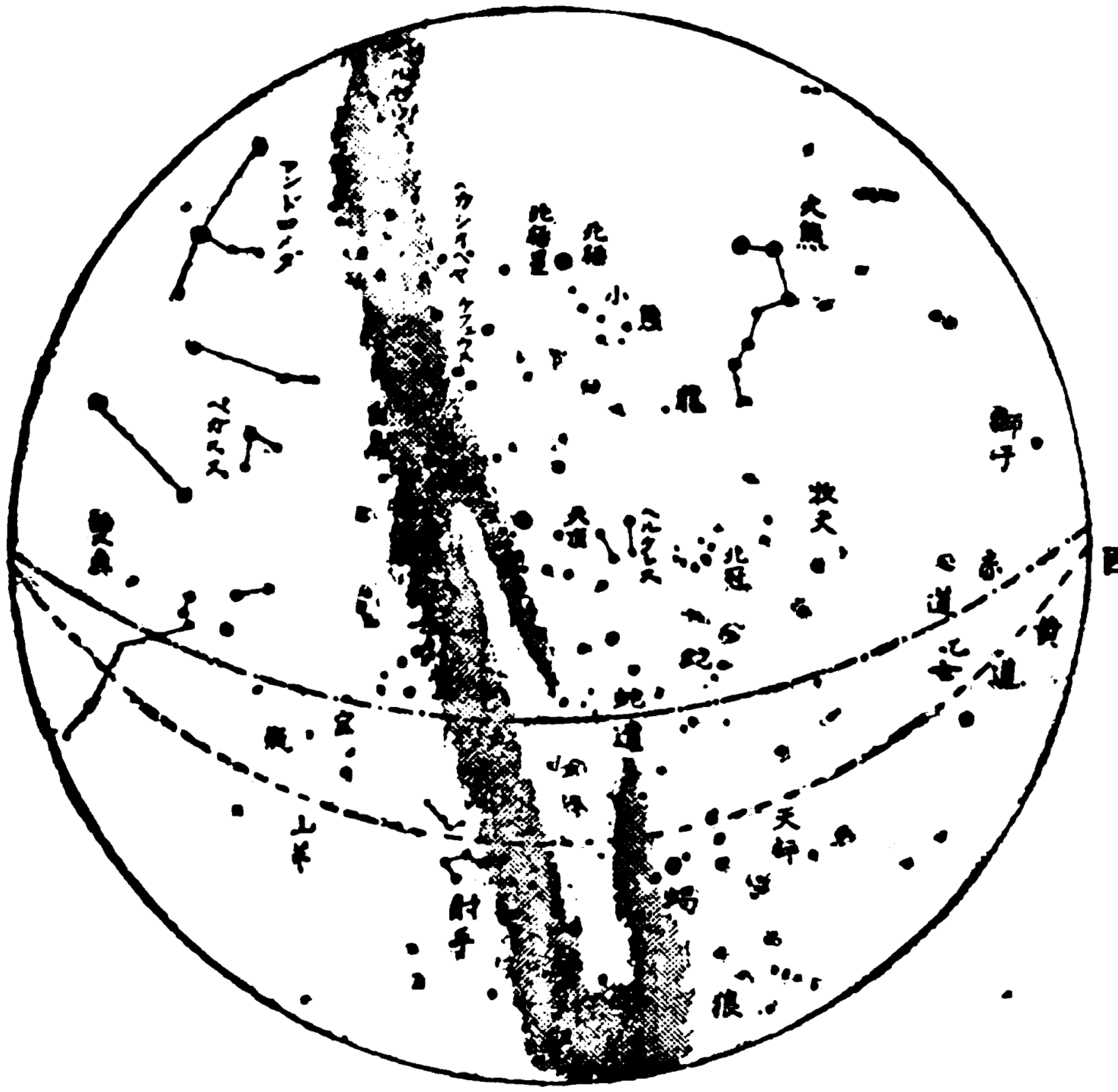
名命法がある。

星の位置の變化

今星圖を持ちて、星と對照して見れば次の如き事が解る。天の星の配列の有樣は日々少しも變化が無い。否數年間見て居つても、數十年間見て居ても何等の變化を認め得ない。古代に作られた星の圖と較べても一見して認め得べき程の變化は無いのである。然し實際は年週視差、歳差、固有運動等の爲めに微少ながら其位置が變化して居るのである。其

第一圖　秋の天

八月一日午后九時
九月一日午后七時



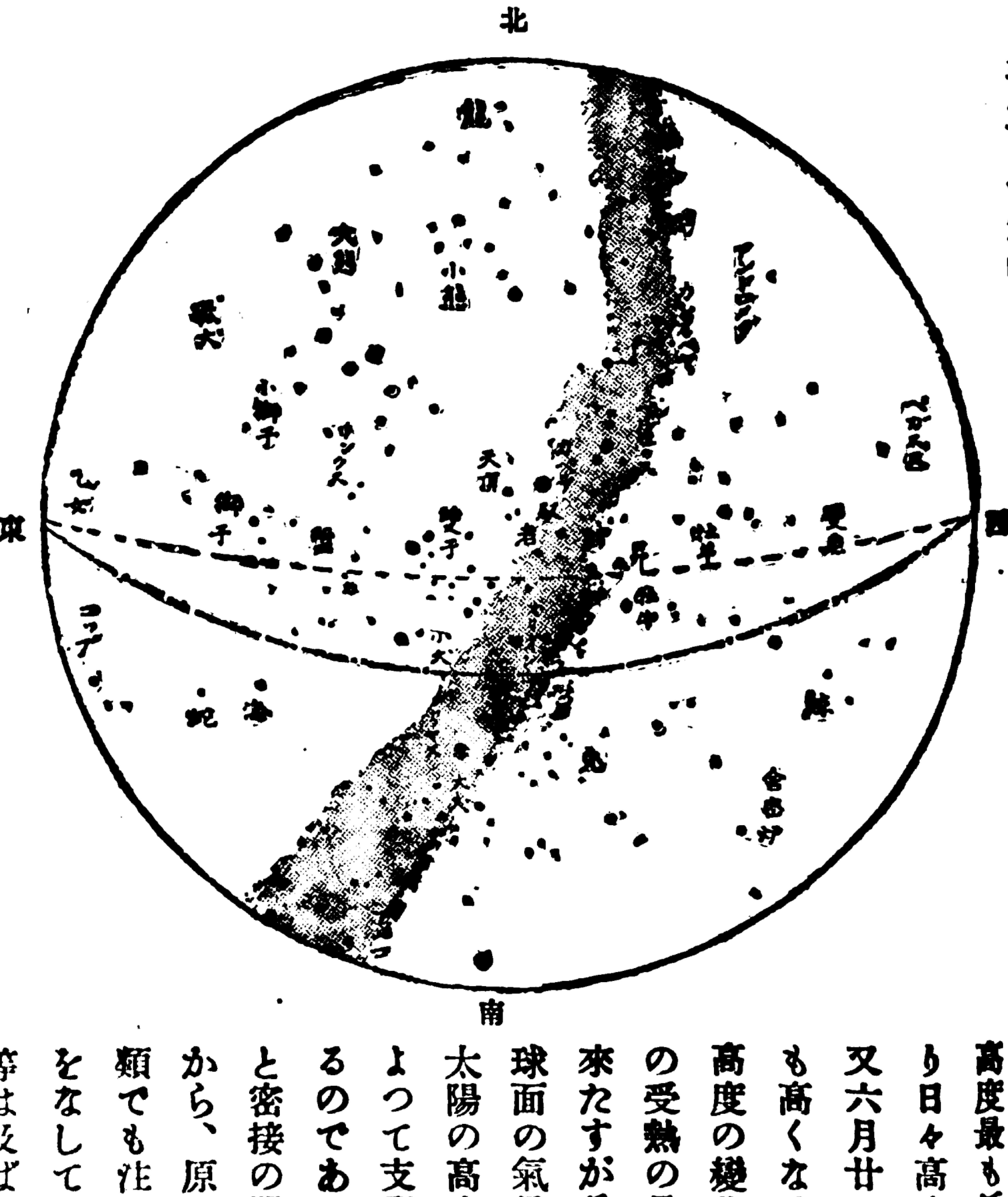
變化の量は極めて微少にして、精巧なる觀測器械を用ひて永年測定して始めて知れるのであるが、其微少な變化は學術上極めて重要なものであつて、此量を精測することによりて、地球の運動、地球が太陽の周圍をめぐる軌道より、星の距離、太陽系全體の運動、星の運動等よりして、宇宙の構造、進化等を推論するのである。

太陽の運動

地球は太陽の周圍を公轉して居る故、地球より見れば太陽は一年間に地球の周圍を一周する。卽太陽は天球上の或る星宿の中より出立して、星座間を移行し一年の後は元の星座へ戾る。此太陽の通路を黃道と名くるのである。今北半球に於て一年間毎日正午に太陽の高度を測りて此れを表に作つて見ると、六月廿二日頃は太陽の高度最も高く其れより漸次減少し

第二圖
春の天

二月一日午后九時
三月一日午后七時



注意　周圍の圓形は地平線を示し中央に天頂とあるは吾人の眞上の所に當る本圖の東西が通常の地圖と逆になれるは之れ仰視するが故也

て十二月廿二日頃に高度最も低く其れより日々高度が增して又六月廿二日頃に最も高くなる。太陽の高度の變化は、地面の受熱の量に變化を來たすが爲めに、地球面の氣候の變化は太陽の高度の變化によつて支配されて居るのである。卽人生と密接の關係があるから、原始時代の人類でも注意して觀察をなして、其結果彼等は及ばずながら宇宙の眞理を發見しよ

うと努力した。又或物は季節を表はす爲めに、太陽の居る所の星座の形を畫いたり、或は彫刻したものが現今でも存在して居る。（天文月報八卷、十、十一號參照）

一年間に於る太陽の高度の丁度平均の高度に達した時は、即太陽が赤道上へ來た時であつて、太陽が南より北に行く時に赤道上へ來る時が即春分で、北より南に行く時は秋分である。春分點は白羊宮中の一點と稱せられてあつたが、歲差と稱する現象即赤道と黃道との交點が移動するので今は、太陽が白羊宮中へ入るのは春分の約一ヶ月後である。現今の測定によると春分點の移動は約一ヶ年五十秒なる故、春分點が約二十九度移動するに要した年度は約二千百年である。斯くの如き簡單な計算にて、獸帶の制定せられたる年代や、彫刻等の作られた年代を考證することも出來るし、古代彫刻の年代が明了であれば之れによりて、春分點移動の分量を計算することも出來る。今より廿一世紀前にヒッパルカスは、獸帶創定時代（今より約廿五世紀前）より當時に至る間に於て春分點が退行せることによりて現今の所謂歲差なる現象のあることを發見したのである。

獸帶とは黃道上にある星座の名稱である。支那にては之れを黃道十二宮と稱して居る。

太陽が春分點に來た時は即春分で、太陽が最も北に來た時（即北半球にて太陽の高度が最も高き時）は夏至で、太陽が秋分點へ來た時は秋分で、太陽が最も南によつた時は冬至である。此等の季節は皆暦に記載してある。

太陽は斯くの如く星座間を移動するから、同一時刻に行て見得る所の天の部分は、季節によりて異なり、例へば現今日沒頃に、琴座の織女星は天頂の近くにあるが約一ヶ月後になれば日沒頃に白鳥座のαが天頂の近くにある。又一ヶ月程を經れば、ペガススのβが約天頂の少し南の子午線上へ來る樣になる。

北極星によつて方位を知ること

星の日週運動によりて時を知ること

星座の名を知り置くことは、專問の學者以外の人に

は一寸無益の様に考へらるゝが、其實中々そうで無いと思ふ。一般の人でも其大體を知つて居ると中々趣味のあるものである。只趣味ばかりでは無い。實益の多いものである。古來藝術家が、星のことや、期節の事を引合ひに出すが、全く知識無しに詩歌に詠み込むのと少し注意して詠むのとで其間に中々の差異がある。夜景を描いた繪畫にて直接星を書いたものは少ないが、月は常に書かれてある。特に三日月などになると其向き方が全く不自然のものが描いてあるのが多い。詩豪チャーレス・ウルフが書いた英將ジョンムーアの埋葬（ムーアは一八〇九年一月十六日西班牙コルンナーの戰に砲彈に當りて戰死した人）と云ふ詩に於て大なる誤謬を來たした。

　夜深くして荒土に將軍を葬る、唯か圖らん銃槍の犁鋤に代ふるを、雲霧慘膽月色を掩ひ、却つて見る燐火の寂寥を照らすを。

所がムアを葬れる紀念の日は無月の夜であつたので、折角の名詩も全く價値が無くなつた例もある。

惑星の中で金星（ヴイナス）は特別な時期になると其光最も强く且つ色も美麗であるから、古來藝術家は此れを女神に形象して、理想的の美人を作り出さんとして隨分苦心の作も見える。希臘の全盛時代は即ちヴイーナスの時代であつた。彫刻の中ではミロー島のヴイーナスは最も有名なものであることは唯も知つて居る。又ヴイーナスは美の神、愛の神、嫉妬の神、接觸慾の神として種々の神話に持ち出されてある。樂聖ワグナルのタンホイゼルの中にも出て居る。又月の光を唱つたビトーヴエンのソナタなどは最も有名なものである。我國には星に關する歌は七夕の歌を除いては全く無いと云つてもよからう。

「—此關守には毎年七夕祭りが、其祭りになぞらへてあなたは牽牛、お前は織女ヲ、それ／＼、秋と冬とは變れども、年に一度の天の川、とわたる星になぞらへて、七夕祭りにかゝらうか、實に織姫の簪の袖
　秋の錦おり機の—」常盤津、關扉

「—酒にうつらふ星の影、此盃中にちん星の、閃く影

は寅の一天、」――同

「一軒の葱に消えやすき、露の身にしもならまほし、
ならまく星の光すら、絶えてあやなくなるまでも、
八夜九夜とおもひあかし」

琴歌度々の星

話が少し横道へ入つたが、現今夕刻西北の地平線の近くを注意すると、七つの星が群をなして居る。此星は六つの二等星と一つの三等星より成つて居つて各星を連結して見ると丁度杓子の様な形になる。西洋では大熊星座と稱して居る。此杓子の頭の所が丁度熊の體で柄の方が尾になつて居る。此杓子の頭の二つの星を結び付けた線を眞直に延長して、見ると其處に一つの二等星がある。此れは有名な北極星であつて、天球の北極のすぐ近くにある、地球の北極へ行つて見ると丁度天頂に見える。北極と云つても精密に北極にあるのでは無いが、北極の極めて近くにあるから、磁針が無くとも此星によりて方位を知ることが出來る。否或る意味に於て磁針よりはもつと精確に知れるのである。

我々が長い間星を見て居ると凡べての星は東より西の方へ動いて行く。西の方に有るものは地平線の下に入り、又新しいのが東の方の地平線から上り、子午線上へ來て漸次西の方へ動いて行く。北極星の附近を注意すると凡べての星は北極星を中心として時計の針と反對の方へ廻つて居るので、大熊星も宵には西北の天にあるが、深夜になると北極星の下方卽眞北の地平線に來り、夜明けの近くになると東北の地平線の近くの天に見得る。故に此星の位置に注意すれば期節さへ知れて居れば概略の時間が知れる。否精密な測量機械を用ひて星の位置を測定すれば精確な時刻が知れる。天文臺は此様な原理で、主に子午儀と稱する器械を用ひて星が子午線を經過する時刻を精測して、標準時計の誤差を正し一般社會及精密な時を必要とする場所へ電信に依る信號を用ひて日々報時の事務を執るのである。又航海者は或る方法（標時球、無線電信に據る信號）によりて天文臺より精密な報時を得て、自己の有する經線儀（クロノメートル）の誤差を正し、航海中、六分儀によりて、天體

の高度を測り、艦船所在の經緯度を測りて、以て船の進路を定めるのである。

星の種類及運動

今望遠鏡を以て星を眺むれば、肉眼で見て一個の星の如くでも、二つの星から成り立つて居るのがある。斯くの如きは通常一方の星が光が強く、他の方は稍光が弱いのが常である。然し殆んど同一の光を持つたものもある、斯くの如き星を二重星と稱へる。二重星の中で二つの星の間に何かの關係がある場合、即ち一の星が一方の星を中心として廻轉して居る樣な時は之れは聯星と稱す。三つの星から成立つて居る時は三重星、四つの星から成立つて居る時は四重星……と稱す。

又澤山の星が集合して一團を成して居るのがある。是れは星群、星團と稱して居る。星群の中には肉眼にて見えるものがある。プレヤデズ、ハイヤーヅ等は其有名なものである。

星團の中には小さな望遠鏡で見ては一つ一つの星が分れて見えないものもあるが、精良な望遠鏡にて見れば個々の星を見ることが出來る、然し如何なる精良な望遠鏡を用ひても個々の星を見ることの出來ず、只ボンヤリと輝いた雲の樣に見ゆる星がある。此れは星雲と名づくるものである。星雲は其形不規則であるが、其中に稍規則正しい螺旋狀、即渦卷の樣な形をしたものが近來多數に發見された。此螺旋狀星雲に就ては宇宙構造に關する新しき學說が澤山に出て居る。

此外星の中には光の强さが一定して居ないで時々變化するものがある。不規則に變化するものもあるが、一定の期間に同じ有樣が繰り返さるゝもの、週期的變光星と稱するものがある。週期的變光星の中、週期の極めて短かいものは、多くは聯星であつて一方の星が主星を廻つて居る間に食を起すので、變光するのであると云はれてある。不規則變光星は其變光の原因が更に判らないのである。

星は如何なる物質から出來て居るか、又如何なる狀態にあるかと云ふことは分光器によりて知ることが出來る。分光器は天文學上最も重要な器械である。近

來分光器によりて星の光の振動數、波長を測定することによりて星の視線の方向の運動を測定することが出來るが、食變光星などは望遠鏡にても二つの星に見ることが出來ないが、分光器によりて其星の視線上の運動を測定して聯星であることが確められたのである。

此外分光器によりて多數の星の視線運動(我々に近づきつゝあるか、遠かりつゝあるか)を測定して、太陽系全體が天の一方へ向つて運動して居ること、及其運動の速さを測定することも出來るし。又星の運動及螺旋狀星雲の運動等を測定して大宇宙の構造等を研究して、天文學上一新紀元を作らんとしつゝあるのである。

主な星座の位置

秋の宵の空は、天の最も美しき部分が見ゆるのである。銀河は東北の地平より起り天頂を過ぎて西南の天に流れ、其附近に最も美しき輝いたる星が集合して居る。東北の地平線の附近の銀河の上にある星座はペルセウス座で、其上のがカシオペイヤ、其南にペガスス座は四邊形に列んだ星があるのですぐ判る。其南に寶瓶座がある。又天頂の附近には銀河の西岸に殊に著しく輝いた星、織女星のある琴座があり、之れと相對して東岸に白鳥座がある。此二つの星座の南方銀河の東岸に鷲座があり、其南に射手座、又、琴座の西にヘルクレス座、其西に北冠、牧夫座あり、ヘルクレスの南に蛇遣ひ座、蝎座等がある。又北方には、北極星のある小熊座、西北の地平の近くに大熊座がある。夜がだん〳〵更けて來るとペガススの東北アンドロメダ星座に續いて牡羊座、牡牛座、ペルセウスに續いて銀河の東にある馭者座、其東の雙仔座、牡牛座の南のオリオン座が見える。夜明けになるとオリオンの南方の大犬座や雙仔座の東の蟹座や獅子座も見えて來る。秋の曉方見える星は春の夕方に見えたる星である。以上は我々の緯度の地から見える星座の主なものである。

銀河

銀河、又は天の川。天漢等とも書く西洋人はMilky-way と呼んで居る。肉眼で見るとぼんやりした雲の

様なものだが、其實無數の星の集合して居るものである、實に大規模の星群である。今東北の方ケフェウス座の中に於て銀河の中央に圓形をなせる暗黑部あり、又白鳥座には銀河を横斷せる暗黑部がある。此邊にて銀河は二岐に分れ西方の枝は一時消滅し蝎座に至りて再び明白に認めらる。鷲座、蛇遣ひ座、射手座の邊は其構造最も複雜な場所で非常に光強き部分があるかと思へば又通常の空間よりも、ずつと暗黑な部分がある、月なき晴夜之れを望めば實に美事なものである。又現今曉方見える部分卽冬の夜に見得る部分はペルセウセ星座中に著しき星群あり、馭者座、オリオン座、大犬座等に至りて其幅最も廣くなるが、光輝はあまり著明ならず。南半球に至りてはケンタウルス、十字架座の附近に於て其幅最も狹く、光輝大なる星が銀河の中に集合して居るのを見ることが出來る。

天球に於ける星の分布の有様に注意すれば多數の星特に光強き星は銀河の附近に多く分布されて居る。今天球に於ける、星群、及銀河を構成して居る物質を除き去れば、多數の星は銀河の附近に近づくに從つて其數を増す。ウイリヤムハーシエルは次の如きことを云ふた。星辰の存在して居る宇宙の形は扁平なものである、銀河は其周圍の方を圍繞して居るのである。我太陽系は此星辰界の中央より稍一方に偏した場所に位置を占めて居るのであると。

又近來の學者は、天界に見得る凡べての星及、銀河は一の螺測狀星雲であつて、我々の見て居る螺旋狀星雲も亦、此銀河系の様に一の宇宙を形成して居るのではあるまいかと考へて居る。

主なる星座に就て

琴座（Lyra） 現今夕刻天頂の附近銀河の西岸に輝いて居る星がある。其名を Vega 支那名織女、青白色の光輝強きを以て有名である、學名は α Lyra、西洋人は此れを天界の金剛石と稱して居る。

Vega Lyra

Alone-unrivalled-midst its jewelled Lyra
A sun of summer crowns the stary sky

And in the splendor of its sparkling fire
Surveys our world like blue and brilliant eye:
Mid night,s long watches it doth never time
When men and women wrapped in slumber lie
Through peace or war, in death or danger dire
It shines the same as youth and years roll by
(Holmes)

琴座は面積が大きく無い。又著しき星の數も多くないが主星たるヴエガの光輝を以て著名である。此星は見掛上光輝が強い計りでなく實際の光輝も强大なのである。太陽の光の數百倍も强い光を放つて居るのである。今から一萬五千年前には此星は北極星であつたが歳差と稱する現象の爲め、地軸の方向が年々變化するから今は北極から非常にはなれて仕舞つたのである。ペルシャ人は此星座に琴座と命じた。ブリトン人はアーサー王の琴と名づけた。有名な變光星βやγ、εζ等は琴の弦である。βとγとの中間には、環狀星雲がある。εライラは四重星である。

白鳥座(Cygnus)　琴座の東銀河の中にある青白色の光を放つ星、織女よりは光が劣つて居り標準の一等星よりは稍光が弱いが、白鳥座中の主星αCygniである、固有名はデネブと呼ばれてある。紀元前三世紀頃迄は白鳥座は只、鳥と呼ばれて有つた。東洋でも鳥に形象した、鳥は翼をひろげて南方へ飛んで行く形に畫かれてある。デネブは丁度其首に當つて居る。

鷲座(Aquila)　琴座及白鳥座の南方銀河の東岸にありて前二星座のαと丁度三角形となす所に一の一等星がある。固有名アルテエヤー、此れが鷲座の主星αAquilaでβ及γと共に三つ並んで居る。色は稍赤色を帶びて居る。αは鷲の首ζは鷲の尾に當つて居る。

七夕祭りに祭られる織女は即αライラで、牽牛星に就ては確說は無いがαアクイラで、七夕の夜鵲を擲げて天の川に橋を渡す鵲は白鳥座である。

七夕に今日は手向る琴の緒のたえぬや秋のちぎりなるらん
(年中行事歌合)

七夕祭りに就ての古事や、歌などは澤山にある。今でも或地方へ行くと盛んな祭事をやつて居る。種々の變

つた風習も見ることが出來る。

ヘルクレス座(Hercules) 此星座はあまり大なる星を持たぬが。ηζとπの四星が不規則な四邊形になつて居るので、此星座を探り出す役に立つ。ηとζとの間に有名な星團がある。肉眼にても注意すれば其位置が分るが。望遠鏡を用ひて見ると二千個以上の星が集合して居る。

蠍座(Scorpio) 黄道十二宮の一つで支那名天蠍宮、西洋でも其配置の形よりして蠍に形象して居る。希臘神話にオリオンと呼ぶ勇者が怪物と格闘した時、オリオンの踵を刺した蠍であると云はれてある。此星座の中の輝いた星はアンタレスと呼ぶ。支那にては此星を大火と呼ぶ。其色赤きが故なり。

射手座(Sagittarius) 黄道十二宮の一つ、磨羯宮と呼ばれてある。此星座中には著しき星は無いがζτσφλμの六個の星を連ぬると丁度北斗七星と同じ様な形になる。支那では此六星に斗と命じた。有名な「月は斗牛の間を徘徊す」とあるは即此星座である。

此星座の中には肉眼でも見得る星團が二つある。此星座及蛇遣座(Ophiuchus)、蛇座(Serpens)等は銀河が其中にあり、且つ其構造の最も複雑した場所であるから、望遠鏡的の觀望物が中々多い。

カシオペヤ座(Cassiopein) カシオペヤと云ふ女神が座した椅子であると云ふW形に列んだ星がある。此星は北極星に對して大熊星座と反對の側にある故、大熊星が見えぬ時に北極星を探し出す案内者となる。

アンドロメダ座(Andromeda)は海の怪物である。此星座中に肉眼にて見得る大なる螺旋狀星雲がある。

ペルセウス(Perseus)星座中には有名な食變光星アルゴール(βペルセイ)がある。又此星座中銀河の中に有名なる二重星團がある。

牡羊座(Aries) は黄道十二宮の最初にある白羊宮である。今は歳差の爲め春分點が此星座の中に無い事は前に述べた。

鯨座(Cetus)の中には長週期變光星ミラがある。

牡牛座(Taurus) 此星座は其中にある有名な二星群ハイヤーヅ(Hyadeo)、プレヤーデス(Pleiades)(昴)の有るので有名である。黄道十二宮の一つ金牛宮である。此星座の主星アルデバランは

一等星で牛の眼に當つて居る。稍赤味を帶びた色である。プレヤデスは六個の三等星と多數の小星とより成る。昔は此星群中の大なる星が七であつたと記錄されてあるが、實際一個消滅したものか否かが不明である。通常の人は六個の星さへも個々に別けて見るには困難であるかも知れぬが、外國に此星群中の八十個の星を肉眼で見らると云ふ人があるさうである。

オリオン座(Orion) 此星座は其中央に天の赤道が通つて居つて其赤道上にあるδεζと共に三つ一直線上に列んで居り、其直線と直交する直線上にα(ベテルギース)βリゲルの二つの一等星がある。配列の有樣が著しいので、著名である。此星座はオリオンと稱する勇者に形象されてあつて三つ星は其帶に當つて居る。勇者の帶劍に相當して居る所、卽三つ星の左の端の南方に少し計りの星の集群がある。其中央に有名な星雲がある。オリオン座の星雲は其形狀は不規則であるが、光輝が最も強いのと其構造が甚だ複雜であるので有名である。此星雲は肉眼でも見ることが出來るが、小望遠鏡を用ひて見ても中々美事である。長い時間露出して撮つた天體寫眞で見ると此星座全體が極めて薄い星雲にて包まれてある。眞に天界の壯觀である。

Orion

When Golden Capella is reigning on high
And sirius sparkles with firely light
The Sun of Orion bespangle the Sky
Like jewells set deep in the Vast dome of night.
Tere Rigel and Betelgeuze glitter and glow
Bellatrix burns dimly with wan yellow blaze
And stars of the belt shine as gems in a row
Above the faint gleam of the Nebulae's haze
Orion the Hunter!—gigantic and bright
Below the red glint of Alde baran's eye
When sirius sparkles with firry light
And Golden Capella is reigning on·high

馭者座(Auriga) はオリオンの北方に在つて五つの主なる星より成る。其中の最大光輝を有する星はα Aurigaで固有名 Capella である。黃色の輝いた星であ。る

大犬座(Canis Major) オリオン星座の南方に非常に輝いた明星がある。此は大犬座の主星αで固有名をSirius(シリヤス)と呼ぶ。支那名天狼星、望遠鏡を以て見ると其光は紫白色で丁度アーク燈の光を見る樣である。シリヤスは其光非常に強く一等星の光の四倍、六等星の光の約五百倍である。有名な哲學者カントはシリヤスの光が強いから此星は宇宙の中心ではないかと考へたが、現今の學問から云ふと決してそんな事は無い。距離が比較的近いから光が強く見えるので、太陽に最も近い恒星、αケンタウルスの二倍で、地球と太陽との距離の約五十萬倍の距離にある。昔の記錄にシリヤスの色を赤しと書いてあるのがあるが、實際星の色が變つたのとは思はれない。地平線の近くにある爲に赤く見えたのか又は光が強い事を形容して赤いと書いたのか。兎に角變色したのは事實で無いらしい。又文章家が餘計な形容をするのも害になる場合がある。凡ての星は自分自身で固有運動と云ふ運動をして居る。然し其量は僅めて微少で、千年や二千年の樣な短かい時間では、肉眼で見てすぐ氣の付く程の運動はしないと云ふことは前に一寸述べた。シリヤスの動いた事に就て次の樣な詩がある。

Since Sirius crossed the Milky way
Full sixty thousand years have gone,
Yet hour by hour and day by day
This tireless star speed on and on.

シリヤスが銀河を渡つたのは宇宙の神がシクヤスに面白い話をしたのださうだ。シリヤスはをかしくて〳〵たまらなくなつて、銀河の向岸まで笑ひころげたためであると云ひ傳へられてある。

シリヤスは河を渡つたのと、七夕の夜牽牛が河を渡るのと東洋、西洋好一對の神話である。

太陽系の運動

前節にも一寸話したが、太陽は太陽系と稱する家族即ち水星、金星、地球、火星、小惑星、木星、土星、天王星、海王星等の諸星を從へて、天の一方へ進行して居るのである。其運動の方向を向點と名づけて居る。其向點の位置はヘルクレス星座と琴座との間、約琴座

の織女星の附近である。大犬座のシリヤスは約織女星と正反對の所にある。故に我太陽系は、一秒時間に十九キロメートル(約五里)の速度を以てシリヤスより遠ざかり、織女星の方へ進行しつゝあるのである。

尙其他の星座に就ても、惑星や月や太陽に就ての神話もあるが一先づ筆を擱くことにした。

本社發行婦人公論秋季特別號
(十月一日發行)

『家庭悲劇號』

の豫告は、本誌公論の終りの折込廣告に委し。就いて御覽ありたし。

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

家庭醫學叢書

全部五十册完成　定價各册十五錢　郵税各册二錢

吾妻醫學博士述●お産の話
唐澤醫學博士述●小兒病の話
千葉醫學博士述●耳鼻咽喉病の話
山田醫學博士述●神經衰弱の話
額田醫學博士述●肺結核の話
岡村醫學博士述●皮膚病の話
佐藤醫學博士述●婦人病の話
廣川醫學博士述●淋病の話
佐藤病院長述●黴毒の話
森肛門病院長述●肛門病の話
杉江醫學博士述●ヒステリーの話
南醫學博士述●胃病の話
中原醫學博士述●外科療法の話
森醫學士述●呼吸器病の話
竹中ドクトル述●性慾教育の話
森醫學士述●病人看護の話
中村醫學士述●精神病の話
菊地醫學士述●脚氣とリウマチスの話
齋藤ドクトル述●寄生蟲の話
豐福醫學博士述●小兒傳染病の話　上巻
豐福醫學博士述●小兒傳染病の話　下巻
竹中ドクトル述●感冒と肋膜炎の話
岡崎醫院長述●有益危險食物の話
阿久津醫學士述●男子生殖器病の話
森醫學士述●良藥と毒藥の話
高橋醫學士述●姙娠と避姙の話
杉本醫學博士述●便泌と下痢の話
森醫學士述●注射の話
井上醫學士述●眼病の話
落合ドクトル述●科學的美容法の話
額田醫學博士述●糖尿病と腎臓病の話
土田醫學博士述●腦病の話（上卷）
同●腦病の話（中卷）
同●腦病の話（下卷）
岡崎醫院長述●有效漢藥療法の話
竹中ドクトル述●肺病有效療法の話
衞生新報社編纂●物理的健康增進法話
同●化學的健康增進法話
同●精神的健康增進法話
同●滋養食物と滋養劑話
同●兒童健康增進法の話
同●婦人健康增進法の話
同●黴菌と消毒の話
同●生殖衞生の話
同●營養療法の話
同●癌の話
橫手醫學博士述●理想的飲食物の話
小川醫學博士述●心臓病の話
宮原ドクトル述●理學的療法の話
森醫學士述●九種傳染病の話

訂正縮刷 みゝずのたはこと

蘆花 德富健次郎先生の著にして版を重ぬる事實に七十版 其内容には村落生活の即興寫生あり短篇小說あり、日記の斷片あり、長短の手紙あり、紀行あり、著者居村の風物を撮影したる印畫數葉を挿みて趣を助く。（定價壹圓、郵税八錢）

著者自費出版の引受

印刷、製本、出版、廣告、販賣等總て書籍出版に必要なる手數一切を引受く、御依頼御希望の方は原稿御送附あれ、見積書提出す

組合せ本箱

東久邇宮家、梨本宮家、香宮家を初め奉り德川公爵家、大隈侯爵家、伊藤公爵家等の諸名家より御注文の榮を辱ふせる最善最良の本箱……八種類 價格並に構造を示せる目錄……郵税二錢封入御申越の方へ進呈す

書籍雜誌小賣販賣

新刊月報（九月號） 雜誌目錄、圖書分類目錄、新橋堂出版目錄郵劵十錢封入御申越の方へ即時發送す

衞生新報改題 **保健** 特別號

人体主要機關之健康法

▲腦の明快强健法（佐野博士）▲毛髮の官能と養生法（竹田學士）▲皮膚の官能と健康法（岡村博士）▲眼の官能と其健康法（井上學士）▲耳の官能と其健康法（千葉博士）▲鼻の官能と其健康法（千葉博士）▲咽頭並に喉頭の健康法（千葉博士）▲口腔（齒）の健康法（松井ドクトル）▲胃の健康法（深瀬ドクトル）▲腸の官能と其健康法（深瀬ドクトル）▲肝臓の機能に就て（木村博士）▲腎臓の官能（額田博士）▲呼吸生理と肺の健康法（竹中ドクトル）▲心臓の官能と健康法（小川學士）▲骨及關節の摂養（中原博士）▲筋肉の官能と健康法（伊藤主幹）

菊判三百五十頁　定價金五十錢　郵税二錢五厘

●發賣元　東京市銀座通新橋際　振替東京二〇〇番　電話新橋一九九一　**新橋堂**

（中付二の一）

信用ある老舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

激増する人生の悲哀

△腦神經衰弱、ヒステリー、生殖器障害等を一掃せよ

△五年の月日が確効を裏書した田中博士の神惠錠!!!

近頃新聞に雜誌に盛んに稱へらるゝは國民精力の衰耗能力發揮の不充分と云ふ事である。是は實に國家社會の消長に關する大問題であつて、原因は個人としての向上發展、快樂を根底から打碎く處の男女の腦神經衰弱、ヒステリー、生殖器神經衰弱等である。文明の進歩と共に激増する此病――人類悲哀の種――の蔓延を深く憂ひて發見せられた靈効藥神惠錠は前東京帝國大學教授醫學博士田中友治先生が多年苦心研究せられた努力の結晶物である。普通一般の賣藥類と異る偉効は博士が親しく多數の實驗を經て確證するのみならず、發表以來五年の長日月間に神惠錠の靈効に浴して全治輕快の上、活社會に活動し復活せられた人は無數である。是明らかに確固不拔にして優秀なる効力を裏書するものである。滔々たる新藥新劑の中に在つて發表以來常に燦然たる光を放つ最大靈藥は實に田中博士の神惠錠である、如何なる重輕症患者も本劑に由り必ず復活快癒の喜に接する事が出來る。

田中博士著最新治療法進呈――神經諸病の最大有效藥神惠錠の發見者田中醫學博士は更に深遠なる學識を傾けて、精神、肉體の兩方面より研究したる腦神經衰弱、ヒステリ、生殖器障害其他神經諸病に對する最新治療法を種々研究の結果、一冊を編纂し、救生濟民の目的を以て廣く世に頒布して居られるが、本書一度び發表せられて以來、申込者續るが如く瞬く間に數十版を重ねて今回更に六十版を發行するに至る。以て如何に本書が世に歡迎せられつゝあるかを知り得るであらう。本書は神經系諸病の病狀現象原因等より豫驚豫防治療に至る迄の學説實際を詳細平易に且つ深切に記述し盡したもので、本病者は勿論、健康者と雖も必ず常識の一端として一讀し置くべき必要のある大文字に滿ちて居る。故に本病に惱む人又は其他の理由で本書を讀まんと希望する人は、神惠錠の使用如何は兎も角、先づ速に**ハガキ一本**を投じて本書一讀の申込をなし給へ。申込端書に中央公論讀者と必ず書て送れば直刻**秘密無代**にて送呈すべし。

東京京橋築地橋際　**橋本德次郎**

專修大學

學生募集

■大學部經濟科
■專門部經濟科
■大學豫科

（●大學部及專門部甲種入學志望者は授業開始後卅日以內に手續を要す●●大學部入學試驗、九月一日、八日、廿一日の三回●中學又は同程度の學校卒業者は專門部甲種及大學豫科に無試驗●專門部乙種は何時にても入學許可●新學期開始九月十一日●學則申込次第送附）

●專門部經理科

（經理士養成のために此科を新設す八月より授業開始豫定（目下認可申請中）●入學資格甲種に同じ）

●高等豫備校

■高等學校
■高等商業學校
■各種專門學校

（入學受驗者のため特別なる準備教育を施す模擬試驗を行ひ答案は精細に批評添刪●圖書館に受驗用書備附）

■六ケ月卒業 專修大學附屬專科

（●中學卒業程度●簿記、珠算、商用英語、タイプライチング、商用文習字及漢文）

■甲種程度 實業學校

（●本科一年、豫科一二年補缺募集●入學試驗九月一日午前八時●新學期開始九月六日）

■乙種夜學 商業學校

（●一期生滿十四歲以上無試驗●二期生補缺募集●入學試驗九月一日午後六時●新學期開始九月一日●）

神田今川小路 電本 二四四〇・四二四二番

學生募集

新學期九月十一日授業開始

大學部

專門部

法律科
政治科

○中學校卒業者及同檢定合格者ハ大學部豫科專門部正科ヘ無試驗入學ヲ許ス、其他ノ者ハ別科ヘ入學ヲ許ス
○大學部本科及專門部ノ授業ハ午後五時半開始トス
○上級編入試驗ハ九月十七日ヨリ施行ス

（學則ハ申込ニヨリ送附ス）

大學部豫科

○法律科○政治科○商科

東京高等豫備校

（受驗準備教育）

○獨逸語科開設

（中付二の四）

法政大學

東京九段坂上

電話番町一七四、四六六二

北研と傳研の人々

人物評論（八十六）

▽北研の人と傳研の人

梅澤清風

「北研の人と傳研の人」といふても、敢て兩者の人物を比較するのではない。今でこそ私立の北研と官立の傳研と岐れて居るもの丶、北研の所長である博士北里は何といふても世界の北里であり、又た傳研の創立者であり、其下には北島、志賀、秦、梅野などいふ一流の人々を網羅して居るが、傳研の方は三年前大隈内閣の御蔭で、官學派が北里派の手から横取りしたもの丶、肝腎な事業の中堅を成して居る血清、ワクチン、苗痘等の方面が西澤、城井など全く北里の門下で、今の北研の部長副部長連から指導を受けた言はば北里の孫弟子であり、之に東大派の二木、芳我などいふ助教授級の二流所を加へた寄合世帶に過ぎない。名稱の通り東京帝國大學附屬研究所であるから、此處の人を捉えて北研の人々と比較するのは、餘りに段違ひの感があるからである。この點は前以て斷つて置く。

▽北研の人物

北研の人物を觀よふとするならば、先づ所長たる博士北里の人物を觀なければならぬ。彼れの往年獨逸に留學してコッホ研究所にあつた間、彼れの業績である

「破傷風の培養」や、「血清療法の發見」や、先人未發の研究によつて彼の名聲は忽ちに世界的となり、獨逸皇帝は特に彼を引見して贈るに「普魯西王國プロフエッソル」の學位を以て、彼を表彰した。彼は斯くの如き名譽を荷ふて歸朝したが、歸來斯學の普及振興を謀る爲に傳染病研究所の設立を企てた處、大學を以て最高學府となせる官學一派は、盛に之を嫉視して妨害を策し、果ては「市の中央に於て傳染病の細菌を取扱ふは危險なり」などゝ衆愚を煽動したので、一時彼が身邊は無智の聲の爲に幾度か危難を受けんとした事がある。彼は此間敢然所信を取て動かず、故福澤諭吉、森村市左衞門等の同情者出でて、彼れの事業は彼れの箇人的事業より大日本私立衞生會の事業となり、更に國立になつて遂に白金臺上世界三大研究所の一と言はるゝ傳染病研究所となつたが、學閥の彼に對する反感は彼の聲望の高まると共に高まり遂に大隈内閣に至つて彼れの事業は學閥の呪詛の下に斃れ、彼は潔く職を辭して野に下るに至つた。彼は今や全く野の人となり、全國開業醫を統轄せる大日本醫師會長として、醫界と政界とに隱然たる勢力を示して居る。

彼と共に血清療法を發見したベーリングは、この夏、血清によりて利益した數千萬圓の產を遺して獨逸に於て逝いた。彼にして若し日本に歸朝以來、其發見に係る血清の製造を私に經營したならば、恐らく彼も亦數千萬の產を積んだ富豪となつたかも知れぬ。然かも彼はこの有利する事業を最初より政府に獻じて一毫も自ら利する處がなかつた。而して彼が半世の心血を灑いで築き上げた傳研を破壞せられて野に下り、部下の學者と共に私立北里研究所を興し、血清の製造を開始して研究の資に自給する計畫も、當時の閥閣が言を左右に托して殆んど一年に近い間之が許可を與へなかつた間、彼は多くの部下を遊ばせて平然時の來るを待つて居た。移管の時である、或人が彼を訪ふて「嘸殘念で」と慰めた時、彼は平然として「日本の樣な政府には往々ある、二十五年前傳研を建てる時の反對と較べれば何でもない」と語つたそうであるが、聞けば今の北研は、彼が故福澤先生の言により、萬一を用意して蓄へ來つたもので彼れの獨力建築したものであると云ふ。

彼は彼れの過去が語る如く、斷へず學閥の嫉視と迫害と戰つて來た。彼は吾が學界に於て最も激烈なる學閥に對する闘士であり、醫學界に於ける學問の自由獨立の爲の奮闘者である。故に彼は官學の出であるに拘

らず、些しも學閥的關係を顧慮しない。彼は大學出身たると、非大學出身なると、將た非學校出身たるとに論なく、彼の門に集まる者にして、苟くも用ゆるに足ると看破した以上は、その出身の如何や其の經歷の如何を問ふことなく、之を拔擢し、指導し、愛撫して至らざるなき有樣である。故中井兆民の甥で兆民の著『一年有半』の中に「範彥は吳服屋の帳面にあらず」と記されたる『腸チプス診斷液』の發見者故淺川範彥は、僅かに濟生學舍を出た許りの醫者であつたが、彼の眼鏡に叶ふて拔擢され、指導されて斯の如き業績を遂げた。今の北研部長獸醫學博士梅野信吉は、これ亦僅か開業試驗出の獸醫に過ぎなかつたが、早く彼れの門に走り、彼の指導拔擢によつて『純牛痘苗』の研究に成功し、學閥的關係の最も複雜なる獸醫學界の記錄を破つて學位を得た。また部長博士秦佐八郎は岡山醫專出の秀才であつたが、彼の拔擢と指導とによつて、故エールリッヒと共に有名なる梅毒藥『六百六號』の發見者として世界に名を成して居る。北米ロックフェラー研究所部長として名ある博士野口英世また彼の指導推挽により今日あるを致したのである。其他一々枚擧に遑ないが、此一班は以て博士北里の人格を彷彿たらしむると共に、以て北里研究所の人物を彷彿たらしむることが出來る。

斯くの如く、北研の人物は博士北里がその學閥的關係に頓着なく、人物本位を以て或は大學より或は非大學より或は非醫學者より、自由に大膽に擢用し來つた者のみである。博士北島多一は、現に同所の副所長として各部長の首位にあり、僅か二十八年首位を以て東大を出て、直に北里門下に馳せ參じた人で、傳研移管以前は內務省防疫課長を兼ねて居た。その人格と兼ねて行政的材幹に於て臺灣總督府の博士高木友枝と並び稱せられ、近く出現せんとする本邦唯一の私立醫科大學たる慶應醫大は博士北里を補けて熱心彼れの劃策しつゝあるものである。彼れの大なる研究は就中抗毒素の研究であつてヂフテリヤ、破傷風等の血清が、日本に於て獨米其他に比し、遙に强力なる逸品を製出し得るに至つたのは、彼れの研究に基礎を爲し、彼れの十餘年來の助手にして今の副所長たる肥田音市の功績である。

部長の博士志賀潔は東大の出、『赤痢病菌の發見とその血清療法との發見』によつて、彼の名は早く世界に知られて居る。一昨年渡來した米のロックフェラー研

究所長博士フレキスナーは三十一年一度吾國に渡來して彼に就て赤痢菌發見の法を究め、間もなく米國に歸りて彼の法に則り米國の赤痢も亦た志賀の赤痢菌によつて起ることを確めた。然るに獨逸の大學教授にクルーゼなるものがあつて志賀より二年後れて同じ樣な菌を發見し、志賀の菌は自家の菌と異るもので自分こそ赤痢病原の發見者だと主張し、結局コッホの主唱で各專門學者を網羅して調査委員を組織し調査した結果、クルーゼのものは志賀のと全然同一のものと確定し、同時に獨逸の赤痢も志賀の菌で起ることが確定して、彼は遂に赤痢病原の發見者として世界的に承認され、現に今度の戰爭に於ても赤痢の豫防接種、血清療法皆彼の發見とその方式に則つて行はれて居る。彼は辯舌爽快にして文章佳麗、數年前獨逸に遊びて隨筆『二度目の獨逸』を書いた。間もなく傳研の移管が行はれて當局後任所長に彼を物色し、彼を誘ふに大學教授にして兼ねて傳研所長たらんことを以てし、文相一木百方辭を設けて彼に懇請した。彼れ卽ち其懐にせる所の『二度目の獨逸』を出し、中のエミールフキッシエルが、ウヰルヘルム皇帝研究所の開所式に於ける演說の一節を示して、學術の研究が教授の片手間に行はるべきものでないことを以てし、移管の失當を明かにすると共に文相の請を斥けたことがある。豫防液殊に感作ワクチンは專ら彼の研究に成り、近く『感作結核ワクチン』の研究に成功して結核療法の上に一進境を發現せんとして居る。

博士志賀の外、部長に秦佐八郎、宮島幹之助、梅野信吉、草間滋、照內豐、古賀玄三郎、大谷彬亮、副部長に高野六郎、肥田音市あり。博士秦はエールリッヒと共に六百六號の發見者として誰知らぬ者もない。彼は岡山醫專の出にして、頭腦明晰、同校開校以來の俊秀として知られて居る。彼れの在學中教師の講義を了へて將に教壇を下らんとするや、彼は直に手を擧げて一々其講義中の疑義を質し、着々これが急所に當るので、飜譯的講義專門の教師は常に彼の爲に惱まされた。彼の當時の師にして今の京大總長たる博士荒木は、彼の卒業の日、人に語つて「若し滿點が百點ならば秦には百二十點をやりたい」と語つたとか。白面無髯、寡言にして多く語らず、而かも其明晰なる頭腦を有するよりして彼の學會の討論は敵手の最も畏るゝ所である。

醫學者ならざる部長に理學士にして醫學博士なる宮

島群之助、獸醫學博士梅野信吉あるは前に述べた。宮島は動物學専攻の理學士にしてマラリヤ蚊の研究によりて學位を得、病原性原生動物學のオーソリチーである。嘗に京都醫科大學の講師であつたが深く博士北里に私淑して研究所に入つた人。頗る武士的氣慨に富み、傳研の移管に關しては最も其不當を鳴らし、之が爲め幾度か政壇に獅子吼した。熱辯と雄辯とに於て北研部長中隨一である。梅野は同所第一の古參で、博士北里が歸朝後始めて研究を開始する頃より師事し、腺疫豫防接種の研究と『純牛痘苗』の製造に成功して、痘苗に關しては國内彼の右に出づる者がない。傳研移管により所長以下一同辭職と決するや、政府痘苗の製出に苦しみ、遂に彼の親友たる農大教授獸醫學博士勝島仙之助をして彼を説かしむるに決した。勝島旨を享けて一夕彼を彼の家に訪ね、彼に請ふに東大教授を兼ねて留任せんことを以てした。が、彼れ默々として諾否を言はず。勝島力辯反覆遂に夜半の十二時に及んで、彼れ漸く口を開いて「君は吾輩を九太夫にする積りかな」とやつたので、勝島亦一語なかつたといふ。

博士草間は病理學専攻の士で東大の教授長與と同窓で、文親善の中である。彼は長與の如き一種の才氣なきも、その篤學で、而して其業績の學界に信任あるに於て京大の博士清野謙二と共に最も有望な人である。昨年來問題となつたチアノクプロールは彼によりて實驗的に的確に結核に偉効あることを確認され、彼の實驗によりて東大並に傳研一派の攻撃の鋒は挫けたのであつた。博士古賀は長崎醫專の出、始め外科を修めて久しく岩手の病院に奉職して居たが、發奮勵精、脫疽の療法に關して學位を得、更に青酸含有の植物藥の治病的効果に着目して結核治療劑古賀液所謂『チアノクプロール』を創製した。年齒未だ不惑に達せず。學閥の外に生れて今日の地歩を開拓した彼の半面には傳ふべき多くの美談がある。

博士照内は細菌化學を擔當して化學室の別天地に立て籠り、十有餘年間、東大在學中のニッケル縁の眼鏡と時計とを携へて孜々として研究室裡に沒頭して居る。部長大谷は診療部長として臨床方面を擔當して居るが、彼が數年研究を續けて最近その一部を發表して居る『喰菌現象に關する業績』は、從來困難なりし結核や進んでチブス、赤痢其他の傳染病の診斷及び豫後を判定する新たなる示針を與へること期待されて居る。

副部長高野は東大出の新進で、昨年コレラ醱作ワクチン問題に於て、同僚の學士矢部と共に國家獎學會に、或は衛生學會に、傳研の二木一派と討論し、傳研が自家豫防液の反應激烈の非難を免れる爲め、中途より竊かに之を三倍に薄めたる事實を精査しながら、討論壇上「他に猶ほ論ずべきことあり、必要なる證據は現にポッケットにあれども、學會の神聖を損ぜんことを慮り」と暗に諷して敵手を狼狽せしめたなど、新進の活動家として囑目されて居る。

北研の特徴と見るべきものは、彼れ北里が人を求むるに其出身と閲歴とに關係なく、四方に拔擢せると共に、北里の門に集る者も亦、專念彼を慕ふて集るの一事である。故に彼所の人物は殆ど同心同體、『大なる北里』となつて一致して活動して居る。傳研移管の決定した時、北里は部下の部長を一室に招きて其旨を傳へ且つ「余は既に國家に盡すべきを盡した。故に此機を幸に野に下りて靜かに餘生を樂まんとす。諸君は猶ほ春秋に富めり、宜しく止まつて益々國家の爲に盡さるべし」と述べた刹那、部長の一人宮島は「吾々は實に先生を慕ふて今日に至つた。吾々の意志は始めより決定して居る」と叫んで、別席に於て部長一同直に辭職と決したが、之を耳にした助手以下傭婦、當丁の末に至るまで、各部長の慰撫も聽かばこそ「死なば諸共」と一人殘らず辭職と決し、互に明日から浪人の身の憂き目も物かは、悲憤の涙を揮つて一同進退を共にすることになつたが、文部當局と學閥一派の狼狽は今更の如く、後任の物色に殆んど一月を要した間、露國より注文の血清や、一切の準備を濟して引渡を了した上一同潔く城を明渡したなどは、『學界の赤穗事件』と言はれただけ、それだけ、如何に團結の氣風の旺盛であるかが察せられる。この氣風こそ恐らく北里研究所の特徴で又一番の强味であらう。

▽傳研の人物

北里時代の傳研と、これが東大の附屬になつた今日のとは、全く内容が違つて居る。北里時代には、所長の聲威内外を壓して居た上に、部長には何れも一流の俊秀な學者を選び、それが各方面から集つた靑年助手と共に、不思議な程一致して活動して居たが、移管後は第一所長の椅子に着くものがなく、行政官である福原文部次官が所長となり、これも長く續かず、遂には移管裏面の責任者である博士靑山が逃ぐるに逃げられ

ず所長となつたが、それも居たたまらず、部下の教授である博士林春雄が代つて今日に至つたが、林は元來藥物學が專門で、傳染病や細菌學には全然無智識である。所長にして既に然り。部下の技師以下が如何なる人を以て充ちて居るからは推想に難くない。

傳研の人物といへば、先づ隈伯の家庭醫として、隈閣をして傳研移管を行はしめた影の人、前の同所長にして今の「傳染病研究所勤務」の博士青山を擧げなければならぬ。彼は長面長身、其容貌の語るが如く頗る神經的であり、感情家である。彼は其先輩たると同僚たると、將た後輩たると、彼れの感情に觸るる者は、必ずや之を排斥せねば止まぬ執着心を有つて居る。病理の教授故三浦守治は彼れによつて逐はれた著しい人である。内科の助教授であつた橋本節齋もそれだ。傳研の移管が彼が北里の聲望を嫉んで隈伯を動かして行つた仕事であることは公知の事である。彼が如何に感情的で女性的であるかは、彼の古賀液の討論に對する彼の態度で證明される。昨年四月の内科學會で彼は會長として座長を勤め、傳研の芳我其他一派をして古賀液を攻擊せしめたが、當日北研の古賀善戰最も努め、芳我を逆襲して完膚なからしめたので、彼は會員外の藥博石津を勝手に登壇せしめて側面攻擊を古賀に加へしめたが、味方の形勢甚だ危急と見て急遽討論中止を宣して古賀軍の口を鉗した。更に本年四月の同學會で、北研の古賀が同問題に就て演說を申込んだので、彼は部下の演說係に命じて古賀の演說を午前八時の開會劈頭に持ち來らせ、傍聽者の集らぬ中に切り上げさせ樣とした。之を去七月下旬北研で發疹チブス討論の時、座長であつた博士北里が、傳研の二木や芳我に十分に討論させた上「御苦勞だ、君等もモット勉强し給へ」などと褒めて歸へしたのとは全然反對で、この一事で兩者の性格の相違がよく判る。

所長の博士林は青山の寵兒で東大では藥物の教授である。三十年頃東大を出で福岡大學の藥物講座を有つて居たが、東大の藥物を擔當して居る博士高橋順太郞の跡釜に据ゆるべく青山が連れて來たと噂されて居る。故に彼は東大教授中青山直系の子分で從つて傳研移管後は一々青山の指揮を受けその機密に參じて居た關係上、青山の後を襲ふて所長の椅子に着いたものの、素より專門違ひであつて、寧ろ所長として事務を執るといふ方が當つて居る。昨年の春、ヂフテリヤ抗毒素の研究に成功したとて都下の各新聞に自家の發

の如く吹聽し、それのみならまだよいが、此研究は佐伯博士も試みたが成功しなかつたといつたので、當の佐伯から突き込まれ、新聞に取消を約しながら、俄かに關西旅行に托して佐伯の鋭鋒を避けたが、間もなく其成功したといふ抗毒素は、實は危險な黴菌の混じて居る不良品であることが博士遠山椿吉によつて發見され、大騷ぎを演じたことがある。今度のルーマニヤ行の醫師團は、彼が文部省を笠に團員の大部を自家東大一派で占めようと擔ぎ廻つた處、策士策に敗るで內紛擾に、進退兩難の苦境に陷つて居る。

傳研の今の技師級は、何れも東大の出身のみであるが、それが大體に於て、三の系統に分れて居る。第一は軍醫系で血清の西澤行藏、痘苗の城井尙義で、二人共曾て北里時代に研究所に講習に來て居たもので、西澤は今の北研部長北島に、城井は同梅野に就て敎を授かつたもので、從つて今の傳研の血清、痘苗は北研部長等の弟子が擔當して居るわけである。第二は東大系で其中でも所長の林と技師兼務の博士長與又郎と技師の眞鍋嘉一郎は、靑山系で、技師兼務の博士橫手千代之助と同石原喜久太郎は緒方系に屬し、第三は駒込系で博士二木謙三之に屬し、別に博士芳我石雄は無所屬として靑山系に準じて居る。

西澤と城井は現役軍醫にして、北里門下より靑山派に轉籍した人であることは前に述べた通り。傳研移管後、當時部長助手一同連袂野に下ることとなつて、移管の策士博士靑山の最も窘窮したのは血淸、豫防液、痘苗の製造であつた。東大の何處を物色しても其人はない。一木文相を介して血淸、豫防液に關しては博士志賀に交涉したが物にならず、痘苗に關して同樣博士梅野に交涉したが拒絕された。トドの詰り、西澤も城井も以前、研究所にありて北島、志賀、梅野各部長の下に講習を受けたことのあるより、靑山は豫て同志である醫務局長の鷗外森を介して現役のまま二人を傳研の技師に取つた。部長から內命があつた時、二人は驚いて其儘恩師北里の邸を訪ふて意見を聽いた處、北里は「君等は軍人である、上官の命は決して背くべきでない」と諭して吳れたので、二人は淚を揮つて傳研に身賣りをしたなどの說もあるが、愈々傳研引渡しの時に於ける西澤の態度はがらりと變つて試驗管が一本不足だとか鼠が一疋どうとか先の師である前傳研の部長連に細かく矢釜しかつたので、傍で立合つた福原次官なども苦い顏をしたといふことである。西澤はお蔭で

間もなく博士になり三十六年卒業の若輩を以て東大の無任所教授になつた。道途の説では彼は最初青山より「緒方の後は君だ」と言はれ有頂天になつたといふことである。例の問題になつた傳研血清の免疫單位不足や昨年コレラ豫防液を中途から竊かに水で三倍に薄めて物議を醸したのも、責任者は彼れである。彼は權勢に倚つて榮達を求むる當世的學徒の標本である。

傳研の病室を擔當して居る者は二木と眞鍋である。眞鍋は東大を優等で出て小兒科の教授弘田の婿に選ばれ、その專攻は理學的療法で傳染病方面には全く關係がない。頭腦もよく、自信の强い男で、昨年コレラ流行の際、北研では、豫防液を製造して盛に之を世に出したので、傳研も二木等の主張により豫防液製造を始めんとした處、彼は是に反對し、反對意見書を書いて東大教授連に廻はした爲め、遂に教授會を開いたことがあつた。結局製造することになつたが、若し彼の意見に從つて製造しなかつたならば或は中途に竊かに薄めて賣るなどの失態もなかつたかも知れぬ。二木は眞鍋と反對に最も世才に長じ、曾つて「二木式腹式呼吸法」などいふものを主張して、世人の歡迎を受けたが之を行つて胃の下垂症を起す者が段々出來て來たといふ。駒込病院の副長で居たが、傳研に人がなくて困つて居た矢先、院長宮本から青山に推薦した處、青山は「自今腹式呼吸などいふ山師めいた事をやらぬなら入れてもよい」といふ事で技師になつた。が、性格の相違から同じ病室受持の眞鍋と最も惡しく、交代に病室を回診しながら、互に處方の書き直しをやるので助手と看護婦の間には自ら二派を生じ、患者は今日は溫められ、明日は冷やさるゝ有樣、兩方の軋轢は追々亢じて來たが、先般二木が永樂病院に轉じて眞鍋の勝に歸した。

技師横手は衞生學が專攻で、篤學の士、林よりも故參で、從て傳研の所長としては寧ろ此人こそ適任であつたが、彼は緒方系であるのと自ら進んで之に就かんことを望まなかつたのである。彼は北里の副部長北島と最も親善で、この私交に於て骨肉も及ばぬ程である。同じく博士石原は緒方直系の人で、鼠咬症のスピロヘータは二木よりも實は彼の方が早く見出して居る。西澤を無任所の教授としたのは、青山が西澤を引き入るる好餌であつたにせよ、萬一緒方の後を彼を措いて西澤が据はることとならば緒方系は緒方自身の隱退によつて全く凋落することとなるのである。兼技師の博士

長與は故長與專齊の第二子で、東大を北研の草間と共に出で、共に教授山極の教室に學びて親善の間柄である。彼は專齊の長所、惡るく言へば短所を取つて生れた。移管の際、青山の命を受け九太夫となつて北里の許に行つたが忽ち北里に看破されて、「そんな使者などをせずに勉强し給へ、」と諭されて歸つたといふ話であるが、駿河臺邊では、親父の事を考へたらそんな眞似が出來た義理ぢやない、といふものがある。けれども博士北里は彼の父と親善の間であつた爲め心から彼の出世を喜んで居るといふ。

傳研の現狀と今の人物を最もよく彷彿たらしめたものは、最近同所から雨後の筍の如く出た病原發見の報告と之に對する報告者各自の態度である。去六月十六日、博士二木は先頃發疹チブス患者及同病に罹つた猿の尿中より一種のスピロヘータを發見し、直に之を「發疹チブスの病原」として發表した。時恰かもルーマニアより同病豫防の爲め我醫師の傭聘を交渉し來つた際であり、新聞は一齊に彼の大成功を讃した。彼は多くの醫事雜誌に寄稿すると共に各種の學會に於て之を發表し、所長林は波の報告を内相と文相に致して其發見の確實と併せて豫防治療の途も日ならず成功すべしと報告したのである。

二木のこの大發見？に刺戟せられて傳研に於ては俄然として病原發見の大競爭が始まつた。即ち博士芳我石雄は猩紅熱患者の尿中より一種のスピロヘータを發見して之を「猩紅熱の病原體」なりとなし、七月二十一日に發表し、未だ一週間を經ざる同月二十八日には麻疹患者の尿中に一種のスピロヘータを發見して之を「麻疹の病原體」として發表した。

一方にはまた馬の傳染性貧血病に就て、技師の博士宮川米次と技師の城井尙義と學士の吉澤惟雄といふ三人が、お互に一つ食卓で飯を食ふ間柄であるに拘らず互に秘密に研究を始め、互に隱れて目黑の獸醫學校に行つて同じ馬の腎臟を材料に貰ひ受け、殆んど同時に同じスピロヘータ様のものを發見して、宮川と吉澤は之を「馬の傳染性貧血病の病原體」なりとし、城井だけは「今日直に病原體とするものにあらず」と斷定はせず、然しながら後日病原となつた時の用意に「然れども」の文句を附けて「研究の歩を進めんとす」とし、互に其最初の發見者たることを競ふて、大急ぎに報告書を認め之を『陸軍獸醫團報』に掲載を求むべく、馳せて獸醫學校に校長博士武藤喜一郎を訪ひ、息せき切

つて原稿を渡した。この報告は載せて七月十三日の「陸軍獸醫團報」にあるが、この三者のマラソン競走的發表に對する武藤獸醫校長の紹介が最も振つて居る。

七月十三日午後灼くが如き陽炎に際し、殆んど同時に三種の報告に接す。驚くべきは何れも一室內の學者にして日常一卓の午餐を喫する者が、一重の壁を隔てて互に獨立して研究し、同日に發表したることとす。（中略）今日又其の眞の病原體にして疑を存し、深く研究を遂行すべき價値あるスピロヘータを殆んど同時に同一の研究所の三室より各別に發表せられ、一時に余の掌中に入りたる瞬間は驚喜に堪へざりしが、詮するに皆吾邦學術の進歩を表示するものなり。即ち郊外世田ヶ谷村の本校の窓より、遙に吾帝國大學傳染病研究所の方に面し滿腔の敬意を表し、本誌の劈頭に以上三種の報告を、分秒の遲速の差を以て落掌せる順序に掲載する事とせり。

日夕壁を隔てて同一所に研究し、同一食卓を共にして居る學徒等が、醜くも功を爭ふて世田ヶ谷村まで驅けつけたる樣が目に見える樣である。

功を爭ふは啻に室を異にして居る三人許りではない。猩紅熱病原發見と發表した博士芳我の助手梅本某は最近郷里の「馬關每日新聞」に「猩紅熱病原發見の報告」と題して書いて居るが、其劈頭に

本猩紅熱病原の發見報告は、余と芳賀博士の共著なれども、眞の發見者は實は余なるを以て玆に發表す

云々

と書いて居る。「芳我博士との共著なれども眞の發見者は實は余なり」は隨分振つたもので、之を郷里の新聞に態々發表するなど思ひ切つたものである。偖て斯く迄「發疹チブス」「猩紅熱」「麻疹」「傳染性馬貧血病」と何れも其病原はスピロヘーテなりとて僅々二ヶ月間に傳研より發表されたが、氣の毒にも二木の發疹チブス病原體も、芳我の猩紅熱病原體、麻疹の病原體何れも病原體でも何でもなく、人間にも猿にも、陰部を不潔にして居る者の局部の垢の中に打重つて居る「恥垢スピロヘータ」であるといふ事が、北研の博士草間、古賀等によつて看破され、昨今學界の噴飯的一話柄になつて居る。「馬の傳染性貧血の病原」も、世田ヶ谷村邊の話では發見者其者が「馬の傳染性病原病」に罹つたのだといふ話である。これが今日の傳研の外部に顯はれた有樣である。（八・二一）

▽北研傳研の人々

陸　壯三郎

北研の總大將博士北里柴三郎氏の事業と名聲と其閱歷とは、啻に日本帝國の津々浦々まで知れ渡り居るのみならず、獨逸に於ては農村の小童にまでもプロフエッソル北里の名を知らざるものなく、北里あるが爲に日本帝國なるものゝ存在を彼等小童の腦裏に印象せしむる程なり。此點に於て北里は稍や大隈侯と儔を比すべく、眞に世界的の人たり。青山學長と之を比するか如きは單に小局部面間の評のみ、世界共通のことにあらず。況んや青山の前には些の權威だになき傳研の所長林春雄氏と之を比するが如きは餘りに非常識なり。北里氏の德を瀆すものなり。

予は此意味に於て北里氏を除外すると共に、亦た林氏をも除外せんと欲す。蓋し兩氏に對して敬意を表する所以なりと思惟すればなり。

北研の總大將北里博士を助くるに、他に其儔を見る能はざる、貞淑にして賢明なる女房役あり。博士北島多一氏其人たり。

博士北島は溫・良・恭・謙・讓の美德を具有す。予の博士を知ること玆に十五六年、未だ曾て博士の怒れるを見たることなく、博士の憂へたるを聞きしことなし。之に接すれば則ち溫乎として玉の如く、藹然として常に春風の吹き渉るが如し。其人格の崇高なる當代賢人中一ありて二あるべからず。而も學識の超倫、經營の才能亦た人に過ぐるものあり。今や其非凡の精力を傾注して慶應醫科大學及び病院の設計に日も維れ足らざるの狀あるを見る。往年移管前の傳研が博士によりて能く其盛を致したると同じく、新設せる北研が博士をして副所長たらしめ、萬般の施設經營を一任し、而して籌策其宜しきを得て事業の發展頗る觀るべきものある所以なり。一に博士の力なり。乃ち知る慶應醫科大學の前途は夫れ洋々として春の海の如くならん。

博士は予と其鄕關を同ふし、百萬石の城下金澤の產なり。予は鄕國より木越瓜生等の武人を出せしを誇りとせず、中橋德五郎早川千吉郞等の成金あるを喜ぶ者にあらず、唯だ雪嶺博士あるを喜び、而して實に北島博士を產せしを以て天下に誇らんとするものなり。惜しむらくは傳研に斯くの如き人なし。德を以て衆

を率ひ、學を以て他を導く博士の如きは得んと欲するとも得べからずと雖も、傳研に斯くの如き人を欠くは乃ち所內の不統一を來せる源泉にして、又偶ま林所長の不運なるところなり。

博士志賀潔氏は東北の重鎭獨眼龍政宗の世臣たり。其篤學にして精力亦た絶倫なるは、能く東北人の固有性を帶ぶるものと謂ふ可く、其業績として往年赤痢菌の發見を爲せる後暫らく聞く所なかりしも、夙に結核に對するツベルクリンの改善に腐心し、五七年以來潜かに思を凝らして苦心慘憺たるものあり、幾たびか蹉跌せしも雄志爲に挫折することなく、客歲以來略ぼ曙光を認むるものありて、所謂『結核のワクシン療法』なるものを公表せり。結核の治療及免疫に向つては殆ど理想的のものにして、用法と適應症とを誤まらされば、效驗能く他を壓するに足るものありと稱せらる。

博士志賀の名は、殆ど同時に赤痢菌を發見されたる博士クルーゼの名よりも能く世界に聞へたり。之れ志賀博士が獨逸文に巧にして、該發見を本邦の學界に發表すると同時に、獨逸細菌學時報に詳報せしに基づくといふ。傳研の二木博士亦た之に倣ひ、先に發疹チブスの病原として自己の見たるスピロヘータを擬するに當り、米國の某醫事週報に其病原を載するの意ありしも、中途思ひを飜して之を爲さゞりしと云へり。蓋し自から信ずる所に輕重の別あるが爲なりし也否や。

志賀博士の能文なるは世既に定評あるところ、彼の歐洲の戰亂起りて後、本邦に於ける學術の進步を彼の地に紹介するの途絶ゆ。博士乃ち英文に堪能なる同學の士宮島博士、及び佛文の巧みなる慈惠醫專校の錦引ドクトル等と協同して、獨英佛の國語を以て記せる醫學雜誌を發刊し、專ら本邦に於ける業績を世界に示さんことを企て、既に其第一號を發行し、米國を經て之を歐洲に致せり。之れ實に本邦に於ける空前の試みにして、他の專門學界に對して誇るに足るべきは固より言を俟たず、而も之れが爲に又北里インスチユートの名をして世界の學術界に重きを致さしむるものあるべく、既に世界的なる博士志賀の名も、亦た愈々其大を加へたりと謂ふ可きなり。

博士秦佐八郎氏の名も亦た既に世界的に著るし。苟もサルウバルサンの名を知れる者にして博士エールリ

ヒの名を知らざる者なく、エールリヒの名を知れる者は其共同作業者にして殊に動物試驗を擔當し、毒力檢定を一任せられたる博士秦の名を記らざるものあらず。即ち或る意味に於ては博士秦の名は、本邦に於けるよりも寧しろ獨逸に於て著聞せられたるものあるなり。

北研の部長にして、醫學者として學士たらざる者は博士秦と博士古賀とあるのみ。博士秦は實に岡山醫專の出身なるなり。由來岡山には教授其人に天下の異材あり。荒木蒼太郎髙橋金一郎及び上阪熊勝の如きは今尙ほ在り。現京大の總長たる荒木博士も曾ては其一人者たり。御歌所の寄人を勤め、香川景樹の第二世として自ら許し、右文左武の落欵を用ゐるだけ、講道館の柔道四段格なりと稱へらるゝ井上通泰大人も亦た其一人者たり。斯る偉人(異人?)を教授に戴ける學生は、亦た多少尋常人に超へたるところあらざるべからず。第一相互の矢野恒太の如き、三共の古田宗二郎の如き日新醫學社の山谷德次郎の如き、北研の秦博士の如き、其中の尤なるものにして、亦た天下の偉器と稱するに足るものなり。

博士秦は年齒に於て北研部長中の若輩なり。而も若輩なるだけ、精悍の氣宇胸臆に漲るものあるを見るべく、言はんと欲するところを言ひ、爲さんと欲する所を爲し、縱横無盡、四角八面に切り廻すところ、鋭鋒眞に當るべからざるものあり。傍若無人に、遠慮會釋もなく、己れの勝手氣儘に振舞ふところは、故人柴山五郎作の再生なるやを想はしむるものあり。御大北里に對しても、副將北島に對しても、尙ほ己れの友人に對するが如く、一向其間に隔てを置かず。此點に於て彼れ秦は北研部長中他に其類例を求むべからず。

要するに博士秦は北研に於ける唯一の大茶目なり。而して同時に唯一の大酒豪なり。苟も宴席に於て彼れを見んか、彼れは常に先登の第一人にして、而して又實に殿戰を爲すものなり。斗酒尙ほ辭せずとは、未だ以て彼れの酒量を言ひ現すべき形容詞にあらず。三日三夜流連し痛飮して、而も尙ほ能く學術演說をなして誤まらざるもの、當代果して彼れに對抗するものありや否や。宜なる哉北里御大の彼れを愛し、彼れに聽き、彼れを遇する事恰も己れの子を遇するに異ならざるや。

或は曰く、北里御大百年の後、能く北研の事業を繼承し、其名聲を失墜せざるものは夫れ秦博士かと。好

冀希くば自重せよ。

博士草間滋氏は傳研の長與博士より後るる事一年、同じく東大出身の病理學專門家たり。眞摯篤學溫厚の長者にして、師たる山極博士を偲ばしむるの餘あり。其孜々として倦まず撓まざるところ、形容の枯稿せるあたり、何となく山極博士を其儘に移したらん樣なり。

長與博士が學者にして世故に通じ、人情に厚く、而も磊々落々として光風霽月の趣あるに比すれば、草間博士の超俗世間的たるの態度は、一見稍や見劣りするが如き觀あるも、之れ或は其位置と境遇とが、之をして然らしむべく餘儀なくされたるにあらずや。加ふるに長與博士が忠實にして且つ學殖深き幾多の好助手を有するに比し、草間博士の之を欠くは、正に千秋の恨事たりと謂ふべし。

博士宮島幹之助氏も亦た北研の珍物たり。獨り北研の珍物たるのみならず、實に本邦の學術界に於ける奇材なり。何となれば醫師に非ずして醫學博士の學位を得たる人なり。動物學者にして醫學の方面を闡明すべき抱負を有する人なり。辯論の雄たるは醫學社界に於て比儔すべき人なく、通俗講演に於ては誰れ人も其前に俯伏せざるはあらず。

昔し鷹山公を出せし米澤の地、斯る奇材を出せる事決して偶然とは稱すべからざるも、而も餘りに縁遠きことなり。予は宮島博士が何故に政治的方面に其志を暢べざりしかを怪しむものなり。若し博士にして其姻戚たる大場博士の如く、早く專門を選びしならば、十年以前に於て既に知事として令名ありしならんを思ふ。

博士が動物學に於ける薀蓄は夙に世の知るところ、殊に恙蟲病の原因たるべき赤蟲の發育環を究め、又十二指腸蟲病の中間宿主たる片山貝の驅除に螢の幼蟲を使用する所説は、實に斯學界を益し人類の幸福を增進する所以にして、學者の取りて以て模範とするに足るものあり。

博士の辯舌は能く人の胸臆に徹底するものあり。然れども時に餘りに露骨なる、餘りに皮肉なる言辭を弄するより、動もすれば則ち他の嫉忌を招くものあり。寧ろ尙ほ一段の修養を積み、修辭を巧にして以て臨まば、眞に斯界の第一人者たるを得べし。夫子果して能

く予の苦言を容るゝの雅懷ありや否や。

博士古賀玄三郎氏は、秦博士と同じく北研部長中の學士ならざる人なり。博士古賀は實に長崎醫專の出身にして、夙に外科を以て身を立てんと欲したるもの、中道にして志を變じ、有利の地位たる盛岡病院を退きて再び學生となり、京都大學に遊ぶ事六七年、其間結核治療の研究に從事し、所謂チアノクプロールなるものを案出して之を天下に呼號し、能く肺結核を治癒せしむと稱す。結核に艱める天下の子女、恰も大旱の雲霓を得たらん如くに狂喜し、相爭ふて其治を受くるに至り、爲に博士古賀の名は一時北島・志賀の名以上に喧傳せられたるも、彼のコッホ氏のツベルクリンが一時名聲を博して一時又頓挫せるが如く、現時に在りては又チアノクプロールを言ふものなし。然れども恐くは後年に至り又彼のツベルクリンが其效果を認められたる如くに、チアノクプロールを認むるに至らん事豫想するに難からず。而して此時に於て博士古賀の名は再び天下の人心を聳動せしむべきなり。彼れ、豈に當年の操軒先生を以て、得々として止むべきものならんや。

博士古賀は體格偉大、胸宇廣濶。佐賀人の型に特有なる古武士的、豪傑的、山塞の統領的なる典型を有す。加ふるに辯舌爽快音吐朗々、聽く者をして倦まざらしむ。就中他を攻撃するの所に至りては、殊更に悠揚迫らざる態度をとり、莊重犯すべからざるの言辭を以てし、他をして其前に拜跪せしめざれば已まざるの慨あり。此點に就て彼れ古賀は、北研中に於ける唯一無二の闘將として欠くべからざる者たるなり。

博士照内豐氏は福島市の名醫温良氏の嫡男なり。乃父の性格を受けて極めて温良の質を有す。夙に郷黨の先輩隈川博士の下に醫化學を專攻し、後渡歐して更に其術を深ふせり。此種專門家の常として其名は甚だ著聞せずと雖、而も隱れたる功績は斯界人士の知るところたり。

博士照内の性格より言はゞ、敢て榮達を求めず。又聲譽を欲せず。唯だ己れの欲する所に從ひ、學を勵み業に盡せば則ち足るものあるべしと雖も、予は此機會に於て、篤學眞摯なる奇人、照内博士を世に紹介するの光榮を得たるを喜ばざるを得ざるなり。

北研に於ける痘苗製造の主腦者として、將た又血精採取用馬匹の診査を司どる者に獸醫學博士梅野信吉氏あり。所謂穉體繼種による純牛痘苗の製出者にして、其博士號を得、勳章を受けたるも亦た此業績に因る。

由來痘苗の製出は、民間事業としては利益を得る事少なく、從て苟も打算的の事業としては之を爲すべからざるものなり。而も北研が尙ほ且つ之に因る損失を顧みずして、痘苗の製出に從事する所以のものは實に博士梅野あるが爲のみ。博士たるもの其知已北里博士の雅量に對し、宜しく應に大努力を爲すべきなり。

聞くならく、移管の當時、博士の先輩たる陸軍獸醫監某氏、博士をして傳研の痘苗製造を司どらしめとせり。博士此時泣いて曰く、乞ふ我をして九太夫たる事なからしめよと。其人乃ち再び言はずと。博士梅野も亦た九州男兒なる哉。

博士の鄕國は福岡にして、玄洋社は其少時學を受けたるところなり。頭目頭山滿、能く人を感化すといふ。予は博士梅野に於て眞に其然るものあるを見るなり。

傳研には官制上專任技師七人ありと雖、移管以來尙ほ年處を經る事久しからず。從て其爲せる作業未だ以て天下の耳目を聳動するに足るものあらず。從て其人の聲譽亦た以て世界的なるものなし。況んや北研の北島博士に比すべき者なきに於てをや。

既に其人なく、其業績の傳ふべきもの亦たあるなし。若し强て之を求むれば則ち唯一人の長與博士あるのみ。而も長與は兼任なり、本職は東大醫科の病理敎授たる事世の知るところなり。

博士長與又郎氏は故專齋翁の二男たり。家に巨萬の富を藏して毫も內顧の憂なし。基礎醫學者の通有するところの米鹽の資に苦しむことは、彼れ長與に於ては些の知るところにあらず。大學より得たる俸祿は擧げて之を其助手に分與し、研究に要する資料にして、豫算の關係より之を購ひ得ざるものは、私費を投じて之を求め、以て彼等助手と共に孜々として倦まざるを見る。此點に於ては彼れは誠に基礎學に從事すべき使命を有するものと觀るを得べきなり。

純粹なる學究から見れば世故に長ずるところあり。而も純粹なる江ッ子氣質ありて、能く折花攀柳の情事をも解す。此點より言ふも傳研に於ける第一人者たり。

而も學問該博、作業緻密にして他の半疊を入るゝの餘地なし。寄留籍を傳研に入れてより以來、恙蟲病の研究に腐心し、年々山形縣下の病毒地を踏破して、近く其病原發見の曙光を認め得たるは世の知るところなり。

極めてお坊ッチャン育ちなる彼れ長與は、人に接するに極めて不遜の狀あり、無愛想なり、時としてはケンもホロゝの挨拶を爲す事あり。彼れの聲名が博士二木の下に在る所以のものは、或は此無愛想に因るにあらずや。然れども予は博士の前途が頗る光明あるを想ふと共に、更に何時までも其學者的態度を失はざらんことを祈る者なり。

博士二木謙三氏は今の世の中の寵兒なり。腹式呼吸法を唱へては、兒童走卒も能く二木博士の名を知り。官邊にありては帝國大學東京醫科大學助敎授、傳染病研究所技師、防疫官たり。駒込病院の前院長にして、永樂病院の內科醫長たり。法性寺入道も三舍を避く可き長き肩書を有する人なり。而も尙ほ其上に侯爵前田家の殿醫として、將た又二三富豪のお出入醫者として、日夜常に東奔西走し、其家に任るは僅に一週五六時間に過ぎずといふ。精力絶倫の人にあらざれば能く堪る所にあらざるなり。

二木博士は秋田の產なり。東北六縣の中に於て多く才人を出すは秋田に如くものはなし。博士も亦其御多分に洩れざる人なり。敏捷俊銳の四字は正に博士に於て之を見るべく、一寸得がたき代物なり。而も古へより才人兎角才の爲めに身を誤まる者あるに比しては、斯の人の才能は尙ほ一段上に在りと覺しく、未だ曾て餘り大したボロを出さずして、聲名依然として高きものあり。

然るに客年コレラの流行あるや、其ワクチン問題に就て兎角の風評あり。爾來鼠咬症の病原發見に就ても亦た同學の士より茶々を入れられ、今年は又發疹チブスのスピロヘータに就て北研の大攻擊を受くるに至り、從來の名聲は少しく下た火となれるやの感を抱かしむ。而して是等諸問題の當否は、固より第三者の實驗的研究に俟たざれば其解決々見ん事難く、從て今に於ては尙ほ博士二木の業績に對して、兎角惡評を爲すを許さず。

然れども博士二木の作業は、稍や功を急ぎたる形跡あり。少くも他より半疊を打ち込まるだけの隙あるな

り。博士長與の作業の如く緻密ならざるの憾みあり。之れ或は才人才を恃みて、才の爲に身を滅すの因をなすなからんや。博士の爲に惜まざるを得ざるなり。

博士芳我石雄氏は夙に結核の研究者として知られたる人なり。傳研移管の後、專任技師として結核研究の爲に迎へられたる人なり。其人となり及學殖の如何は予不幸にして未だ詳細を知る事能はず。唯近時猩紅熱及痲疹の病原體に關係あるべきものとして、一種のスピロヘータを該患者等の尿中より發見せし事を報ぜしを知るのみ。而も其價値に就ては未だ世界の耳目を集むるに至らず。

傳研に二人の偉材あり。學士眞鍋嘉一郎氏及博士宮川米次氏即ち是なり。

眞鍋學士は方今の醫界に於ける理學的療法の權威者として世に傳えらる。ラヂウム及X光線に就ては斯の人の右に出づる者なしと稱す。勿論夙に博士たるべく豫期せらるゝと雖も、而も學士の抱負は更に大なるものあるなり。曰く『學位は請求して後に與へらるべきものに非ず。國家が學位を與ふべしと認むるものに對しては、宜しく之を與ふべし。予は世間貪名の徒の如く自から之を求むる事をなさず』と。此言既に時流を超越す。從て亦た學士の學殖が如何に深く、其自信が如何に强きやを察するに足るものあり。

故に其性格に於ても亦た時流と相距り、稍や仙骨を帶ぶものあり。少くも凡俗とは大に其趣を異にす。從て時流を追ふて轉々する者を惡む事頗る甚しく、就中博士二木との間は犬猿啻ならざるの狀あり。博士二木が所長林博士の寵を恃みて、自から傳研の副所長を以て任ずるを快とせず、事毎に之に反抗するの態を以てし、隱然一敵國を爲せり。而も其學殖の深きは到底博士二木の企及する能はざる處なるも、唯之を世間に應用するは、又學士の遠く博士に如かざる所なり。天二物を與へざる誠に妙と稱すべし。

博士宮川米次氏は昆蟲學に於ける大家なりと稱せらる。昆蟲學に於ける本邦の大家には、何故に斯くも宮の字を冠する者多きや。曰く福岡の宮入慶三郎氏あり曰く北研の宮島幹之助氏あり。曰く傳研の宮川米次氏あり。此三人者中博士宮川は尤も年少なるだけ、ソレ丈け前途は尚ほ多望なり。予は此篤學にして勤勉なる少壯學者の爲に其前途の益々多幸ならん事を祈るもの

なり。

傳研には尙博士石原君、技師城井君、竹内君等（今洋行中）ありと雖も、何れも特に擧ぐ可きものあらざるを如何せん。

▽予の觀た兩研究所の先生達

某醫學博士

北里といふ人は世間も知つて居る通り、以前は多少學問上の心掛けもあつたが、洋行して歸つて來てからといふものは、何等學問上の研究を發表した事はない。氏は學者たるよりは寧ろ政治家に適して居るやうである。其政治的手腕に至つては、靑山氏などの到底も相撲になるところではない。北里氏の遺口といふものは、總て獨斷的で、我儘で、傍若無人であつて、一度思ひ立つたら理が非でも通うさうとする。今日澤山の資産を作り、世間一般からは多大の聲望を得て居るに拘らず、醫學社會の一部からは隨分と非難されて居るやうである。氏の性格を觀れば、此一部の非難も强ち無理な非難ではない。氏は斯かる頭の人であるか、惡くすれば一度遣り出した事は罰を喰つても構はず遣るといふ風がある。

之に反して靑山といふ人は、一見よく口には政治を說き昔の英雄豪傑を言ふが、其内心は實に小心翼々たるものである。然し今日醫科大學には、此人を措いて他に學長となるやうな人物は一人も居ない。新聞雜誌を操縱する事を辨へぬから、世間からは大部誤解されて居る。然し近頃になつて多少其必要を知つたやうである。學問上の研究については、一見粗雜な頭のやうであるが、非常に忠實なところがある。生來敗けぎらひで、若い者にも敗けずに細かい物でも熱心に調査する。忙しくても必ず本を讀んで居るところなどは、北里氏に較べて學者らしいところがある。

北里氏も靑山氏も、今日の新らしい學界から觀れば、二人共決して花形ではなく、何うしても元老以上と言はねばならぬ。

今の傳研所長である林といふ人は、一寸見ても分かるが、利口な才子である。殊に語學に秀れて居る。獨語なり英語なり其他何語でも出來る。才子である丈け膽魂は細いかも知れない。今の研究所を統括して行く

事位は出來やうが、自分の意見通りに改革するといふやうな事は到底も出來まい。今日は俗務が多いから、學問をする暇はなからうと思ふ。此人を斯んな忙しい地位に置くのは甚だ氣の毒であるが、今日の醫科大學には他に適當な人がないから致方もなからう。

北里研究所の副所長である北島といふ人は、何方かと言へば極めて德望のある人で、學問にも相當に努力する人である。人を統御して行くのに北里氏のやうに決して無理をしない。後來北里研究所を率ゐて行く人は、蓋し此人であらうと思ふ。氏が所長になつた場合には、今日のやうな殺伐なものでなく、極めて穩健着實なものであらうと思ふ。移轉問題があつた時、北里氏丈け一人去つて、實は氏が殘つて其後に据れば最も都合がよかつたのである。其年輩といひ其性格態度と云ひ、最も適當な人物であつたのである。

以下先づ北里派の方からいふて見よう。第一に志賀潔といふ人、この人もかなり頭のいゝ才物である。色々と苦心して研究して居るが、赤痢菌を發見した丈けでまだ十分な成績がない。何か仕出かさう仕出かさうと、非常に焦つて居るやうに見受ける。世間評から言つても、人物から言つても、總ての點からして北島氏には一歩を措かねばならぬ。

宮島幹之助といふ人、之は一方醫學社會の智識階級から、殆ど鼻つまみものである。今度の事件では參謀長の地位に立つて居つたやうであるが、氏の所謂軍略なるものが、果して北研の本當の地位を高めたか、但しは低めたかは大なる疑問である。北里氏の義弟に當る柴山氏が若し生きて居つたなら、此場合乾度參謀長の役に立つのであるが、此人であつたなら、もつとうまく遣つた事であらうと思ふ。

秦佐八郎氏。なか〳〵の才物である。例のエールリッヒ六〇六號で名前を揚げた人で、頭も相當にあれば勉强も相當にする。只キザな點があつて、時々人から誤解される。

照内豐氏。化學方面の受持、可もなし不可もなしといふ人物である。

草間繁氏。病理學の方面で、技師の中で一番若い。極めて正直で小心な人である。近來よく傳研派との議論の衝に當つて居るやうであるが、烈しい演說などをした其晩は大方眠りが惡いことゝ思ふ。

古賀玄三郎氏。學問の點はよく知らないが、例の有名な古賀液は大失敗であつた。北里派の名聲を落し、

事頗る大である。

梅野信吉氏、獸醫學の方面で、これ又可もなき不可もなき好々爺に過ぎない。

以上で大體北里派の重なる人々は濟んだが、是から傳研派の方を見るといふと、此方は全體に於て、人と爭ふとか勢力を張らうといふやうな所謂政治家肌の人は極めて少ない。之は詰り大學を出てやつと助教授になつた許りといふやうな人が行つて居るからであらう。

林所長の次ぎに立つて喧嘩の相手をするのは二木謙三氏である。此の人は全く傳研派の唯一の鬪將である。努力する事は隨分と努力する。徹夜しても平氣といふ大元氣である。然し悲しいかな、頭がよくない。頭がよくないといふ事は、周圍の人の皆認めて居るところである。從つて文献を調べたり、本を廣く讀むといふやうな事は不得手である。恐らく偶然思ひついてひよいつこり遣り出すのではあるまいか。然し遣り出したら非常に熱心である。近頃色々な方面へ出て、兼職を三つも四つも有つて居るやうであるから、勉强する暇はない事と思ふ。只さへ讀書の不得手なところへ時間がないのであるから、傳研派の代表者として北里派と爭ふのは、實際耻を掻く恐れがある。然し傳研派には此人より他に表面へ出て喧嘩をする男は一人もないのだから仕方がない。

若し喧嘩をしに出る人があるとすれば、それは芳我石雄氏一人であらう。氏は頗る德望がない。又人と喧嘩をする丈けの智識もなければ才能もない。假令表へ出すにしても、恐らく失敗に終るであらう。

石原喜久太郎氏。之れは全くいゝ叔父さんで、鼠や蚤などを研究さしたり、講習の先生にでもさして置けば一番適當して居る。新らしい研究や喧嘩をする人ではない。

長與又郎氏は名家に生れた人で、頭もよく、常識もあり、なか／＼の才物である。が、然しまだ大した論文もなく、何等の成績も上げて居らない。近頃焦りに焦つて居るやうであるが、大した望みはなからう。恙蟲の病原については非常に努力をして居るが、本當の成績が上るか何うかは友人共の皆危むところである。要するに才子でお坊ちやんであつて、内部で人を煽てたり、人心を收攬して人を使ふ事は出來ようか、決して大人物ではない。行政的手腕はかなりあるから、林所長の後位は取れようと思ふ。

西澤行藏氏は移管問題のあつた時、周章てゝ陸軍か

ら雇つて來た雇兵に過ぎない。

眞鍋嘉一郎氏は學校の成績は非常によい。高等學校は何時も一番で通うして居る。其代り卒業以後は一向振はぬ。まだ論文一つ發表してゐない。極めて小心翼々で、非常に細かい。近來先輩などに對して何か不平を言ふて居る樣であるが、それは氏の柄にないからやめた方がよからう。氏は氏の特長を發揮して矢張りコツ／＼と細かい事を研究して居ればよろしい。決して大事業をする人ではない。

宮川米雄氏はまだ未知數であるが、然し大した發見や研究をする人でない事丈けは確かである。

これでザット兩派な主な人物評は濟んだ譯であるが、要するに北里派には政治家肌の人、手腕の人が澤山居るから、喧嘩をした場合に巧みに輿論を起して、理が非でも通さうとする風がある。之に反して傳研派には才子は居る。利口物は居る。然しなるべく憎まれぬやう憎まれぬやうにと心掛けて居つて『さはらぬ神にたゝりなし』といふ小心翼々の人が多い。然し兩方共通の點は、これから大研究大發見をするやうな偉い人物の居ない事である。若しそんな人が出るとすれば、それは極く下級の隠れた人の間からであらう。それでも名義丈けは著名な人が乘取つて發表するかも知れない。然し何れにしても、前に評した人々の間からは決して出て來る事がないと斷言するに憚らぬ。

▽北研と傳研

工藤日東

○**好個の對照批評物**　歴史的事實より觀察するも、又其勢力の相拮抗する關係より見ても、更に又其處に包容する人物のタイプを比較して考へても、舊巣を追はれて新たらしき巣構をした北里研究所と、其舊巣をまんまと占有した傳染病研究所との比較批評は、吾邦の學界に於て稀れに有する好個の對照物である。門戸を同ふし、學統を同系に受けたる青山胤通博士と、北里柴三郎博士とは、前生どんな因果關係があつて終生爭を結んで解けないのであらうか。北里博士は官命を帶びて獨逸に留學し多年研鑽の結果は世界的名聲を荷ふて母國に錦を誇らんとしたるに母校の鐵門は固く鎖ざゝれて、青山博士等は、彼れに一個の椅子を與ふる事を拒んだのは抑この原因となつて、爾來約三十年間

吾國の醫界を縱斷する二大對抗勢力を助成し、青山博士は官醫即ち官僚派の頭目となり、文部省を背景として要害堅固なる地歩を占め、北里博士は民間の力を藉りて巍峨たる堡壘を築きて之に對抗し、其研究所は、後ちに政府に移管せられたるも、民間的野氣は依然として保たれ今は再び原始生活に立戻りたるも、横逸せる野氣は優に官僚閥又の名は學閥醫閥に當るに足るので、此二大勢力の交戰的現象は、吾邦學界の集閥多しと雖ども之に比ぶべき偉觀を見ることが出來ないのである。

青山博士は北里博士程の山氣はないけれども、今の醫人中稀れに見る覇氣の稜々たる性格で、包容力や、懷柔力は迚も北里博士に及ばぬけれども、最も健質なる學風の下に人材を養成し、官僚思想の醫的代表者として好個の典型である。北里博士は利益に明敏なる頭腦を有し一たび利害問題に觸るゝや極めて精細なる用意を以て事に當るが、其風格の悠然たると、野趣の溢るゝが如き外裝は、能く卑下なる利害打算の性格を包裝して人心を收攬するに足るものがある。青山博士の長くして瘠せたる體質と、北里博士の肥えて丸き體質とは、一方は神經質を表徵し、一方は寛容力を體現するので、此風貌の差異を偶然にも其事業と施設の上に現はれ來れるは、是れ即ち好個對照の一つである。

○教育の青山、事業の北里　凡そ人傑の運命程奇なるものはない、世界の學界の耳目を聳動して歸つた北里博士は、赤門に教鞭を執ることを拒まれて事業的方面に發展したが、青山博士は臨床家として遂に學を後進に授くる人となつた。若し北里博士にして青山博士と同徑路に入りたらば彼は果して今日の如く偉大なる業績、施設を吾國家に寄與する事が出來たであらうか。夫れは別問題として、北里博士が其修得したる研究力をば直接に一國の防疫施設に注いだ爲めに、學者的事業家に化し、青山博士は教育家と爲つた、此教育家たり事業家たるに相分れたる點は即ち兩家の學風に特殊の色彩を示すことゝなつた、即ち其現實的の事業を趁ふものを目して卑下にして俗臭多しと嘲けり、小天地に跼蹐して學究的に沒頭するものを目して世に迂濶にして時務を解せずと罵り、互に相反撥するところは當さに是れ、青山博士、北里博士の兩門に對する批評である、學窓に沒頭して人材を養成するものは、其結果をば百年の後ちを期すべきものが多い、之に反して事業を追求するものは近く其結果を現實するが爲め

に其活動も陽性であつて、人の耳目を驚駭するものがある。北里博士派の遣り口が陽性的であるのに青山博士派が何時も陰性的であるのは斯る原因のあることは爭はれぬ點であらう。世間往々北里學風を目して山師的なりとして、青山學風を誹りて因循なりとする所以で此學風が軈て社會的勢力となつて體現するに當つては全く時間的に大なる消長を伴ふ。

即ち教育に依りて勢力を得るものは、即時的に其効果を見られぬけれども、恒久的にして不斷性を帶び、歳月を經るに隨つて益々牢固たる勢力となり又底力がある。併し事業を主としたるものは勢力の消長は事業に伴ひて增減し、併かも時間的に收めらるゝ結果は、教育の力の偉大なるに及ばないのであつて、大學派勢力と、北里派の勢力との性質の異なる點は全く玆にある。民間醫の思想を代表する勢力として北里派の主張は歳とゝもに大學派の爲めに壓せられて志を伸ふる能はざるものは、大學教育の効果は近年勃々として顯はれ來り、社會各方面に於ける諸機關に、其思想と人材とは普ねく配當せられて居るを反證するもので是れ實に侮るべからざるものがある。

◎兩派の勢力範圍　官立醫科大學の少數なる時代には、醫學士の勢力が盛々たるものであつて、現に官界も多く非大學派の醫師によりて占領せられ、殊に北里博士時代の傳染病研究所は研究又は講習の途を開きて地方醫の衞生技師にも又民間醫にも其勢力を及ぼしたるも、近年に至りて大學出身及醫學專門學校出身者は、兎角國定試驗免許の醫師團と衝突し、地方の醫師會等にも其弊害は甚だ多い、此間にあり主として北里派の中堅となるもの試驗派であつたけれども、歳月と時勢とは此一派を淘汰する傾を生じ、所謂新醫人は地方の都邑に相當に幅を利かす様になつた爲め、從來内務系統から自家の勢力の下にあつた地方に於ける北里派の勢力は、是等新醫派の逆襲を受くることゝなつて漸次勢力は傾いて居る。大正三年に大隈内閣が暴横なる手段を以て北里一派を傳染病研究所から追ひ出す事の出來たのも、又十年前醫師法制定の際に從來の主張を悉く大學派の爲めに覆へされたのも、内務行政の取締上必要なる醫師を試驗する醫術開業試驗を文部省に移したなどは、既に其勢力の衰微を示したるものにて是が北里派とも謂ふべき民醫派即非大學派の勢力が昔しの如くであつたならば大隈侯が如何に力瘤を入れても、傳研移管などの實現すべき筈のものぢやない。即ち不斷性

の教育の力は大學派の勢力を累加して一時性の事業方面の代表勢力を壓したのである。

大學派の主張する醫育方法は果して吾邦に理想的醫人を多く作り得べきや否やは今は斯界の大問題となつて居るけれども「多數は勢力」なりとの言葉の如く、歲を追ふて官學を増加し、多くの醫人を社會の各方面に供給する時代となつては、其勢力益々蔓こりて北里派の社會的勢力が漸次蠶食せらるべきは自然の趨勢の免れざるところである。今試みに兩派の勢力を案ずるに、北里派は近來稍頽勢を示すも其對抗力は依然舊態を保ちて容易に下らざるものあり、況んや二百萬圓の金額を擁して既に準備成れる慶應義塾の醫科大學は、北里派を中心にして組織せられ、大學派の官僚的學風に對抗して起つ決心なりと謂へば、此大學の完成して人材を社會に供給する時は、即ち非大學派に復活を與ふる時である。

□兩派の政黨的色彩　日本に學藝的團體多く、又各派の間に互に競爭的活動を示すものも少なくないけれども、北里研究所と傳染病研究所との如くに、其思想、意見、感情の甚しく相違ありて明截なる色彩と態度を以て相對抗する團體は外にない。兩團體とも究極の目的は、人類界の幸福に貢獻し、國家の進運に資するところあらんとするにあるけれども、之に到達する徑路に於て、又互に學究的生活を送る上に於て自然に論爭が起る。而して其論爭方法は、黨派的感情、黨派的鬪爭方法、黨派的對戰法で政黨の爭ひに酷似して居るのは、其鬪爭手段の倫理的なるや否やは別問題として兎に角學界の一大偉觀たるを示して居る。競爭は事物進步であるから此點には何人も異論がないけれども、其黨派的觀念は、公明なるべき學術界を浸潤して研究的態度は黨派的態度となり、其功績、技能を以て第一の目的とせねばならぬのに却つて其團體又は同志の勢力と信用消長のみを念として正義と眞理に殉するの感情を遲鈍ならしむることが往々出來し、公的生活を萎微せしめ個人の性格を惡化せしむるに至る恐れがある。斯る黨派的鬪爭方法は、獨り政治界や其他の社會のみでなく學術界も往々之に陷ゐるので近時兩派の研究上に關する論爭は稍もすれば識者の間に顏々皺めしむる材料となるものは之れが爲めである。それ故に其論爭方法を少しく改めて、黨派的感情を去り、手段を倫理化して行ふたならば、學界に大なる効顯がある。

元來醫界は、昔から別天地の如くに見做され、學術

上の研究などで互に意見を異にするものがあつても、匿名で或紙上で辯ずるか、然らざれば蔭口を以て之を罵るに過ぎぬから兎角、無責任ょ陰險に流れて其弊風は全く御殿女中流であつたけれども、數年前から聯合醫學會などが起りて每年主要なる都邑にて討論の風を導びいてより、稍々公正なる手段を以て學術上の所見を公然闘はす樣になつたので、是は明かに斯界の大進歩である。此學風は大學派と北里派との間には近年於も露骨に行はれ、大膽に計畫せられ、殊に傳研移管以來は一層黨派的感情が加はりて一發見のある每に互に其長短を指摘し、其發見者又は主張者を面前に置いて兩家の秀才が智力を盡し辯力を極めて相爭ふさまは全く學界に於ける政黨的論爭の現象である。

◎兩門秀才多し　北里博士の北研所長たる地位に對して傳研所長たる林博士を並べ論ずるは好對照とはならぬ。如何となれば林博士は年齡の上から見ても、業績の上から見ても、經歷材幹の點より觀察するも、人の首領となりて衆を率ゐる力量を較ぶるも到底北里博士の壘すら摩することが出來ぬ。巧慧なる才は青山博士の寵を買ひ得たのであるけれども、輕佻にして重味なく名を求め功を急ぎて稍もすれば官立研究機關の名

を[illegible]しむることが多い、[illegible]る人物を北里博士の後に据えたが問題であるが之れ全く適材をば大學內に得ることが出來ぬ爲め、一時の應急として之を任命したので、事情已むを得なかつたとの事、夫れは當初北里博士の高弟北島博士をば、直繼の所長にせんとて、文部省でも八方手を盡したるも之を拒まれて全く第一の當が外れ、次には福岡の宮入博士を慫慂したけれども是又承諾を得なかつた、其他文部や大學の欲する人は何分にも强奪的移管の跡であつた爲め、之に臨んで盤根錯節に當らんとするものがない。已むを得ず福原次官之に當り、次で青山博士は當初の發頭人たる責任上一時之を兼攝し、漸く地均しを加へて寵弟子林博士に跡目を讓つたのだが、所長の適任者には青山博士もほんとうに苦くなつて物色したとの事である。元來所長は矢張り細菌學者又は衞生學者でないと、部下の統率、部外の交涉等に故障があるので此方面よりの人物を得ん爲め、衞生學者の日大學教授横手千代之助博士に交涉した。

横手博士は名利に恬淡で、又友誼にも厚い、北島多一博士とは、同期の卒業であつて又同年に博士となり、平常互に刎頸の間柄であるから、北島博士の境

に同情を有する彼は、親しき友の作りたる窠集を狙ふて自ら晏如たるが如きを潔しとせずして斷然之を拒絶して就任せず、只だひら部員として學者の本務を盡す事になつた。横手博士は、格別學問に造詣深しとするにあらざるも、長者たる緒方博士を除けば東大の醫科に於て衞生學の先輩である、性質恬淡なるが故に研究心衰へたりと雖ども、功名に走りて人をして己れの淑慝を議せしむるを好まず、平々淡々、三年後れたる後進者林博士、併かも藥物學を專攻したる所長の下に、不關焉の態度を以て好むところの圍碁を恣まゝにして世を忘れたるものあるを見る外別に可も不可もない人で彼も亦一風流人である。

以下論ずべき人物多くあれども筆者に急用あり、稿を繼ぐ能はざるを以て一先づ筆を擱く。

▽大學派・北里派の軋轢と兩派の人物

員外郎

北里派、青山派といふ二つの派が出來たのは、二十年の昔の事である。それ丈け長年月間、互に睚み合つて競爭をして來たのであるが、それが著しく世人の眼に映ずるやうになつたのは、數年前に傳研が内務省の管轄から文部省の管轄に移り大學の一部となつて、北里氏が所長を辭職して別に私立の研究所を建てゝから である。最初青山氏と北里氏とが睨み合ふやうになつたのは、香港に於けるペスト研究の一件からである。當時兩人共官命を帶びてペスト研究の爲めに香港に出張した。互に功を爭ふて早く病原を發見せんとした。餘りに急だ結果、北里氏は青山氏に先きんじて病菌を報告した。青山氏は不幸にして病氣に罹つたが、北里氏は少しも之を顧みなかつた。其上青山氏の報告を罵倒し、自己の發見した黴菌こそ正當な病原であると主張した。後になつて、北里氏の報告した病原菌は間違ひである事が分つたのであつたが、其の當時青山氏は非常に苦しめられた。そんな關係で青山氏も北里氏を面白く思はず、北里氏も青山氏に邪魔されて自分の學說の成り立たなかつたのを口惜しく思つた。爾來互に睚み合ふて今日に至つたのである。尤も北里氏が嫌ふ

北里氏は大學卒業後衛生學教室の緒方博士について研究して居つたのであるが、行跡の事から間違ひが出來て大學を追ひ出された。而して洋行するやうになつたので、其時から緒方博士が憎く、必ず仇を酬ゐねば已まないといふ根性を有つたやうである。そこへ同じ大學の青山といふ奴が出て來て、自分の說に茶々を入れるのであるから、大學全體を非常に憎く思ふやうになつたのも無理はない。然し二人が睨み合つて居るのは、一面から見ると學術の進步上に利益でもある。が、又一面から見れば學術の進步を害さぬとも限らない。競爭するといふ事は、進步の上に利益な筈であるけれども、競爭の結果功を急ぐといふ事になり、まだ確かでないものでも確かであるやうに報告したり、確かであるものを報告しても感情上茶々を入れて見たりするといふ事があるから、學問の進步を却つて阻害するのである。そこで、今二人の睨み合ひが、學問の進步の上に利害いづれが多いかといふと、何うも害の方が多いやうである。故に、二人の仲直りをさしたらよからうといふ議論があつて、二三の人が仲介になつて、確か明治三十四五年頃、柳橋の一旗亭に二人を會合さして一席の快談をなし、互に積年の怨みを捨て丶學界の爲めに協同努力しようとせつたので[illegible]時表面は仲直りが出來た筈であつたし、又内心でも二人は多少感情をやはらげ得たのであつたが、『三ッ子根性百まで』とやらで、最初に受けた印象が何うしても頭の底から拭ひ去られぬものと見えて、折角融和しかけた感情も日の經つに從つて次第に元へ逆戻りをした。而して事々物々互に反對するやうになつた。それは學界の爲めに慶ぶべき事であるか、悲しむべき事であるか、一概に斷ずる事は出來ない。

二

最も北里氏の感情を刺戟した研究所の管理替への問題は、北里が怒つたのも無理のない話である。同所は內務省の管轄內の一官衙ではあつたけれども、本來をいへば、北里氏の物といふ方が適當な位のものであつた。北里氏が獨逸のコッホ先生の下から歸つて來ると、故長與先生だの後藤新平男だのいふ人達の後援を得て、微々たる研究所を設けたのであつたが、其後福澤諭吉翁の盡力で芝の愛宕下へ建て丶細菌學の研究に從事して居つた。それを明治二十七年と思ふが、內務省へ寄附したのであつて、即ち根本をいへば、北里氏が創立したものである。其上內務省の管轄に移つてからも、

內外總ての事は北里氏が所理して居つたのは勿論の事、國庫からは多くの支出を仰がずして、其研究所の收入によつて經費の大部分を支持して來たのであつた。北里氏が創立して內務省へ寄附をして、猶自分の力によつて國庫に多くの厄介をかけずに立派な物に作り上げたのである。それをそつくり其儘北里氏の手から奪ひ取つて、大學へ持つて行かうといふのは決して人情ではない。隨分思ひ切つた壓制である。お膳立は北里氏にさしておいて、箸を取つてサア食べようといふ段になると、お前には食べさせないと言つたやうな形である。之は北里氏でなくたつて誰れだつて怒る問題である。然し、管轄替えした大學側の方では、實際それ程までには思つてゐなかつた。學問上管轄の系統から論ずれば、學問を研究する傳研所は文部省の管轄であるに極まつて居る。だから、文部省の一部として北里氏に依然所長どして其研究を續けて貰ふ積りであつたらしい。人の作つたお膳を食つてやるといふやうな惡い氣ではなかつたのであらう。其證據には、北里氏が奮激して部下一同と共に袂を連ねて辭職をすると、文部省の方では非常に狼狽し、大學の方では恥か

北里を追つ排つて其後を占領するなどゝいふ準備は一つもしてなかつた。案外に城を明渡されたので驚いた位であつた。大學の方では只大學の一部として、北里の鼻を折て遣らう、北里の横暴を矯めて遣らうと位は考へて居つたらしい。然し北里氏の身になつて見れば、今まで對立して來た青山の管轄下に屬してをめ〳〵と所長の椅子を守つて居られるものではない。辭職するのが當然である。多少でも男子の意氣を有つて居る者なら、喧嘩をして去るべきである。其邊の人情を考へなかつた大學派は、何處までも學者で、迂遠極つた話である。

三

管轄を替へたといふ主なる原因は、內務省の下では北里氏を監督する事が出來ない。內務省の衞生局が傳研所を監督するのであるが、事實は北里氏が衞生局を監督して居るやうで、內務省の衞生局でなくて北里の衞生局といふ觀があつた。故に、北里氏を監督するといふ者はなく、氏には天下にコハイ者がない。それに名聲は隆々として兒童走卒の間にも唱へられて居つた。故に氏は思ふまゝを振舞つた。白金三光臺といふ

事を遣つて居る處であるから、監督がしたくても監督のしやうがなかつた。會計などは非常に紊れて居つた。管轄を替へた後、曲事を營んで居つた爲めに、繩付を出したのに見ても、如何に紊れて居つたかゞ知れる。北里氏の爲めに辯ずる者は、氏が百萬の富を積んだのは不正を營んだからだと認められて、それで管轄替をされたのであるといふ世間の評判は誤つて居ると言ふ。それは其通りで、氏の富を積んだのは利きもしないツベルクリンを結核患者に注射して、幾百千萬の憐れむべき患者を詰り注殺した結果であつて、研究所で不正を營んだのではない。又それと同時に、移管をして廓正せねばならぬ程に紊亂して居つた事も事實である。斯く紊亂したのは、北里氏は少しも知らなかつたかも知らない。然し所長たる以上其責を逃れる事は出來ない。移管といふ事になつたのは、寧ろ氏が其責を盡さなかつた結果で、其必要を或一部の有力者に感ぜさせたといふ事は、詰り氏の不注意に基くものである。大學派の遣方も慘酷だと思ふが、北里氏の不注意も見逃す事は出來ぬ。何れにしろ、斯様な結果になつたのは非常に遺憾な事に思ふ。

四

傳研所移管後は、相互の排斥は[illegible]て甚しくなつた。北里派が結核の新治療法たる青[illegible]を古賀液の名で發表すると、大學派はヤッキとなつて攻擊して、天下の人心をして疑惧せしめた。北里派がコレラの感作ワクチンを出して、コレラ成金とならうとすると、大學派でも同じく感作ワクチンを製出しながら、餘り功力がないものだなどゝ演說して歩く。大學派の二木謙三氏が發診チブスの病原體スペロヘータを發見すると、北里派は總掛りで反駁をし、大學派をして完膚なからしめんとする。北里派のヂフテリヤ血精の品質が惡いと認めると、大學派はヂフテリア血精檢定規則を設けて、北里派の小股をすくふたりする。官立研究所の血精が怪しいと見た北里派は、米國から多量のヂフテリア血精を輸入したのは何故であるか、と詰問したりする。事々物々斯様に對抗して居る。學問上に於て眞に愼重なる態度を取り、感情を捨てゝ冷靜に研究したところを發表し闘論するならば結構であるが、昨今の有樣は全るで感情の喧嘩で、輕卒不正實を極めたものである。斯様な狀態が長く續くといふ事は、學問界の爲めに餘り慶ぶべき事ではない。彼等には[illegible]萬斤の氷を送つて、其熱して居る頭を冷やしてや[illegible]

いと思ふ。

五

實際の上から見て、北里派と傳研派とは何方が何方がエライのか。

第一總大將たる青山氏と北里氏は、何方が本當にエライのか。名聲は二人共に天下に籍甚して居る。然し其實質を捉へて見ると、二人共大した代物ではない。北里氏は九洲阿蘇の產で、遺憾なく熊本の特質を具備して居る。面色が渥丹の如く、豚の如くに太りきつて、見るから精力絕倫であり、何んとなく獰猛なところがある。彼が今の地位を得たのは、全く其精力の賜である。獨逸から歸つて來た當時は細菌學の勃興時代で、細菌の開祖コッホの下から歸つたのであるから、世の中からは、非常に珍らしがられたものである。然し歸つて以來如何なる業績を發表して居るかと言へば、殆ど成功したものはないといふ位である。成功し得たものは只功能のないツベルクリンを注射して、百萬の富を積み得たといふ丈けである。學術上には何んのなすところもない。勿論研究所として報告した物には、價値あるものもある。然し夫等は皆門下の秀才によつて研究され成就されたものである。彼の手によつて成つたものは皆無と云つてよい。然るに彼の名か天下に高く、其信用が社會に厚いのは何が故であるかと言へば、彼が最初の細菌學者であるといふ爲めで、獨逸のコッホを笠に着て虛名を博して居る丈けである。「虎の威をかる狐」といふ有樣である。だから、先年コッホが來遊した時には、彼は全力を盡くしてコッホを擔ぎ廻り、其威力によつて將に地に落ちんとしたところの自己の名聲を支持したのであつた。彼の頭は學者には適當してゐない。政治家としたらば、もつと發達し行たかも知れない。其新聞雜誌を操縱する事の巧みな事や、押しの强い事や、人を御するの道を知つて居る事や、腕力のある事や、よく忍び得る事や、何んにでも相當に通じて居る事や、人情の機微を知つて居る事や、相當の蛙法螺を吹く事の出來る事や、平氣で噓を吐く事の出來る事や、政治家としての資格は殆んど總てを具へて居る。彼が長與專齋の知遇を得、後藤新平を捉へ、其他石黑忠直だの高木兼寬だの、大抵な元老といふ元老は皆捕虜にした如き、政治家的質素を十分に表はして居る。傳研所の成り立つたのも、名聲を博したのも、皆此政治家的手腕より得たところのものである。學者として眞面目に學問丈け研究して居つたのでは、業績

天台宗大學教授
東洋大學教授
島地大等先生虔修

漢和對照 妙法蓮華經

好評第九版發賣

クロス製天金 定價金壹圓七拾錢
總革製三方金 定價金貳圓拾錢
小包料各八錢

附錄＝法華大意・法華略科・法華字解の外、第五版よりは更に法華歌集八十餘頁を増補す

東京朝日評

法華經が、佛教經典中殆んど第一に重要の位置を占むるものなることは人の熟知する所なるも之が一般研究讀誦の用に供せらるべき形式にて公刊せられたるものは、未だ之を見ず。本書は上欄に漢譯を掲げて、所謂棒讀み流の振假名を施し、下欄に完全なる和譯文を載せたり。蓋し經典中の金言名句は多く棒讀みにて知らるゝと共に、佛前讀誦者の便利よりいふも、棒讀みは今なほ決して捨て難きものあり。和譯文には、特に經文解譯上の段落を示し、之が注意研究者にも大なる便宜を與ふるの用意をなせり。なほ卷末には斯經研究者に要する教義の略譯を加へ各品の科段を系示し、且つ親切に經中の語句を解釋せる字典を添ふ。近時法華和譯等の書出づるもの少からざるも、本書の如きは其の最も完全なるものとして最初に世に推奬すべき者也。

落合直文先生著

萩之家遺稿

（第十版）

クロス製全一册 定價壹圓五十錢 送料十二錢

落合先生唯一の文集にして長短歌二百餘篇を添ふ

簡野道明先生著

和漢名詩類選評釋

（第九版）

クロス天金全一册 定價壹圓七拾五錢 送料八錢

和漢古今の著名なる漢詩千餘首を選び評釋す

（中付三の一）

東京神田錦町一丁目十番地
株式會社 明治書院
振替東京四九九一番
電話本局二四三八番

再刊

西宮藤朝氏著

哲人 高山樗牛

杉浦非水氏裝釘

樗牛は實に近代日本文明に偉大なる足跡を殘したと共に現代に於いても尚幾多の青年の熱情に新しき生活の焰を投じつゝある哲人である。新進評論家西宮氏は彼の生活や思想を縱横に評傳したのが本書である。

四六判三百頁布裝函入

定價金壹圓送料八錢

新刊

西宮藤朝氏著

歐米文藝家辭典

歐洲文藝を知る唯一の……

此の十數年間の我文壇は殆んど歐州文藝との接觸に依つて進展して來たと言つてよい、されば歐州文藝家を口にせざれば文藝を談ずるに足らずといつた有樣である、本書は英、佛、獨、露、伊、墺、西、米等殆んど全歐米の併も古代から現代に至る……

■四六判三百頁ポイント組布裝函入

■定價金壹圓貳拾錢

(中付三の二)

發行所 神田區淡路町一丁目一番地 泰山房 振替口座東京九〇七九

文章學の參考書

新刊

現代日本文章軌範

模範的作文の好資料

明治中葉以後、大正現代に到る迄、文壇諸大家の名文數百章を擇出し以て本書一卷となせり、採錄の文章は、記事文‖敍事文‖敍景文‖抒情文‖論議及說明文‖書翰文の七項に分ち何れも代表的文章を組織的に排列し從來世に存する散漫なる文集と異り作文研究の資料として教育的見地より眞の意義に於ける名文、玉章を選び一々句を指摘して說明を加へ且一章の終り每に於て文章學の上より批評を與へ以て研究者を指導し文章練磨に資せる等未だ曾つて類例なき組織によりて編纂したるものなりされば學生參考書たるは勿論初等教育に從事せらるゝ諸師の參考として又一般人士の讀物として絕好のものなるべし。

四六判洋裝美本 正價金八拾五錢 送料六錢

天覽台覽

第三高等學校教授文學士 折竹錫先生著

詳解佛蘭西文典

四六判四百頁 正價一圓五十錢

第三高等學校教授文學士 片山正雄先生著

獨逸文法辭典 附詳解獨逸文典

四六判千頁 正價貳圓八十錢

早稻田文學士 內山舜先生著

現代女子作文

菊判上製 正價一圓四十錢

文學士 中村久四郎先生・文學士 島田增平先生共著

事項詳解東洋歷史年表

三六判上製 正價五拾錢

文學士 村川堅固先生閱・文學士 [illegible]田增平先生著

事項詳解西洋歷史年表

三六判上製 正價五拾錢

文學士 [illegible]先生閱・文學士 [illegible]田增平先生著

事項詳解日本歷史年表

三六判上製 正價五拾錢

東京神田錦町一ノ二 博育堂 電話本局四三八六番 振替東京二三三九三番

(中付三の三)

眞摯の研究と興味ある記事とに満つ　九月號

早稻田文學

■剃刀と鋏（小説）…田山花袋

■浴室（旅役者の手記）…坪内士行

■金婚式（小説）…湯山昇

◆性的道德の根本問題…本間久雄

◆ロシヤ革命は世界的革命…アンドレーエフ

◆朝鮮から（黄のページ）…島村抱月

◆カアペンタアの藝術觀…宮島新三郎

◆良寛遺跡めぐり（2）…相馬御風

▼二詩人の追憶……（篤夫、星湖、幸太郎、精二、）

現代の女流作家

◆女流作家に就いて　廣津和郎

◆女流作家に對する要求…小川未明

◆容易に拾って容易に捨てる…田中純

◆思ふがまゝに　秋田雨雀

時評

◆再び技巧派に就て　中村星湖

◆美術館設立問題　森口多里

◆似而非なる建設的傾向　西宮藤朝

最近思潮

歐米及び我國の社會文藝思潮の紹介と批評十數項。いづれも興味ある讀物を網羅す。

▼忙しき日…兒島義久

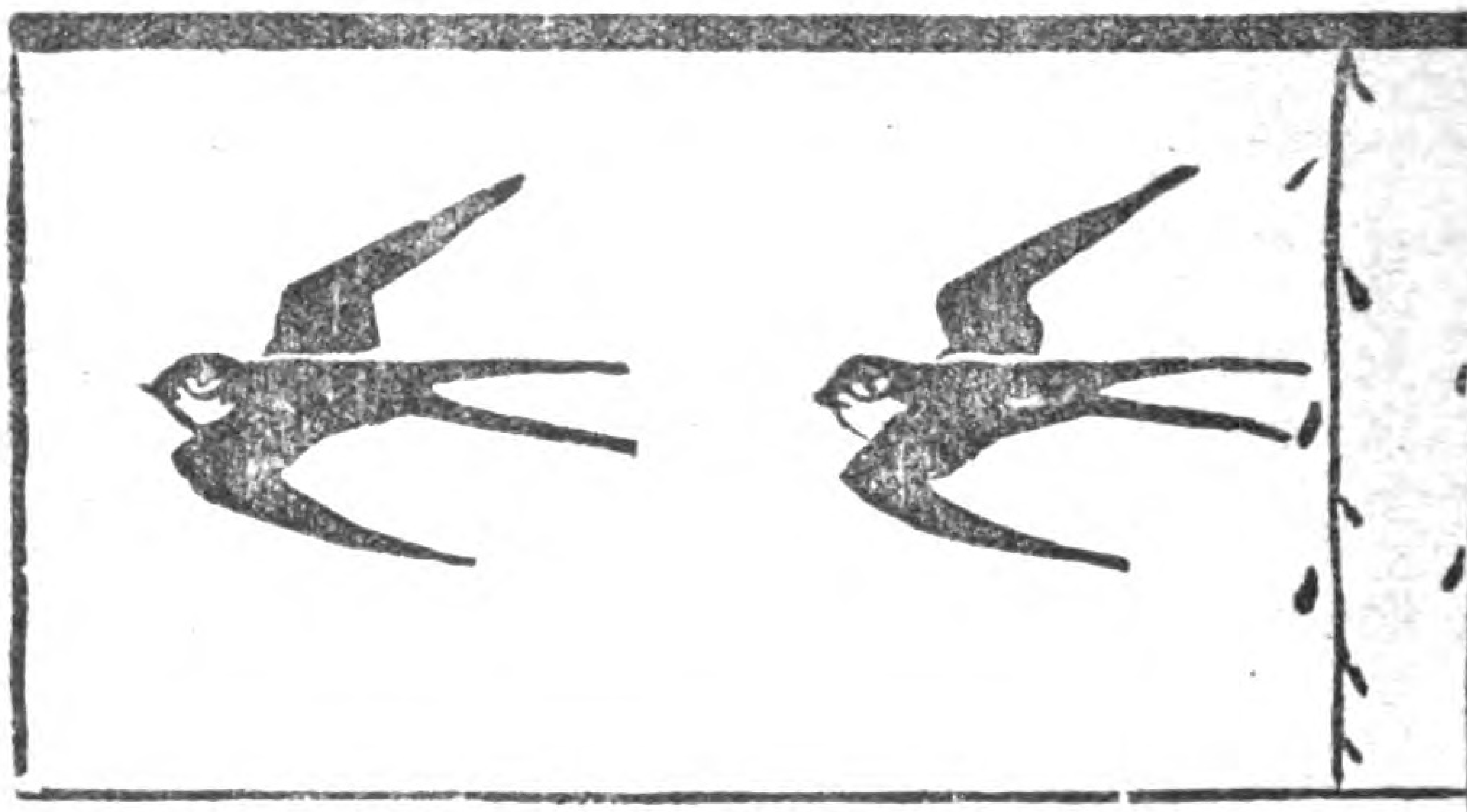
▼狂死の姉…村山至大

▼久世山より…兒玉花外

▼暗き影（俳句）…井泉水

九月號　定價二十八錢・郵税一錢五厘　東京神田區神保町・振替東京二七〇番　東京堂

（中付三ノ四）




燕のごとく歸る

島崎藤村

一

とつぷり日が暮れた。何となく磯臭いにほひが紛と鼻の先へ來た。私は暗い知らない外國の町を歩きながら、そのにほひを嗅いで見た。何處からそんな海草の乾くにほひが傳はつて來るのか、さうした暗夜の空では港町らしい何物をも見ることは叶はなかつた。しかし海に近く來たことだけは感じられた。

實に足掛四年振りで私はそんなにほひを嗅いだ。もう一度あの海の方へ歸つて行くことを切に感じさせたのも、そのにほひだ。いよ〳〵歸國の途に上る日が來て、その夜のうちには佛蘭西の土を離れやうとして居ることを感じさせたのも、そのにほひだ。そこは佛國、下セエヌ州のアーヴルの港だといふ。白耳義假政府の所在地として聞えたその港町に、燈火一つ泄れる窓も見ないのは、恐らく戰時のためであつたらう。私は眼にアーヴルを見ないで、唯鼻でアーヴルを嗅いで見た。

海へ。私にとつては待ちに待つた日が來たわけだ。降誕祭の前には既に來る筈であつたその日も半年ほど延びて、旅で迎へる三度目のあの祭と、翌年の正月とをも私は巴里の客舍の方で送つた。私がいろいろにその日を想像しつゝ樂みと不安とで歩き廻つたあの羅甸區の界隈では、芽出しの遲いプラタアヌの並木が愚圖々々して居る間に、逸早くサン、ゼルマンの通りにあるマロニエの枝は青々として新芽を着けるやうに成つた。もう四月の下旬だ。漸くのことで私の待侘びた日が來た。遠く故郷の方に殘して置いて來た子供のことも心にかゝり、巴里サン、ラザアルの停車場から私はあの三年の都を辭して來た。

一日の汽車旅も樂しい方であつた。ずつと國まで同行を約したM君は巴里で初めて知るやうになつた畫家で、歐洲開戰以來同じ記憶に繋がれて居る間柄だ。M君の外に、倫敦まではS君N君の二人の好い道連れもあつた。われ〳〵は同胞四人きりで一室を占領して來たし、車中で國の言葉を出して思ふさま話さうと笑はうと好勝手であつた。おまけに、車窓に映る樂しい眺望があつて、一日の話材にも事を缺きはしなかつた。殊にあの名高いルアンの町を初めて見て來た時。美しいセエヌの下流に川舟を望んで來

た時。しかしわれ〳〵は多く默し勝ちに車中の時を過して來た。互ひに言葉すくなに對ひ合ひ、何か話が出ても何時の間にかまた默つてしまつた。斯うした四人のものが暗くなつてアーヴルの停車場に着いたのだ。

　われ〳〵は互ひに助け合つた。手を分けて、荷物の番をしたり、一臺の荷車を探したりした。ガラガラ音のする荷車の響を心あてに、波止場を指して出掛けて來たのだ。朦朧とした夜の空氣は見知らぬ町町を籠めて居た。われ〳〵は四つの黒い影のやうに動いた。何となく海岸に近づいたと思ふ頃は、私はもう可成歩いたやうな氣がした。

　次第に荷車の響が遠くなつた。一番背の高く一番足の疾いS君は眞先に車のあとを追つて驅出した。荷物の紛失を氣遣ふよりも、連に離れるのが第一に氣遣はれて、皆な暗い道を急ぎ始めた。その邊は何となく貧しい町つづきらしいところで、暗の中を透かし〳〵辿つて行く狹い人道の敷石も凹凸として居た。一番後になつた私は自分の前に動いて行くM君の暗い影を見失ふまいとした。

　われ〳〵は渡り鳥の群のやうに互ひに呼びかはした。

「まるで命掛けでしたね。」

と串談のやうにして笑ふことの出來た頃は、われ〳〵の荷物が無事にアーヴルの税關に着いて居た。四人のものは互ひに顏を見合せた。

「M君、君の荷物は。」

と私は佛蘭西人の税關吏の前で、國の言葉を出して聞いた。專門が專門だけに、畫布の包みの大きなの

なぞが有つて、M君の荷物は一番場所をとつた。M君はいくつかの鞄や行李を數へて見せた。

荷物の檢査は割合に寛大ではあつたが、一應開けて見せるに手數が要つた。旅の着物などをつめた私の鞄の中からは、稅關でやかましい煙草が出て來た。私は好きで吸ひ慣れた佛蘭西の卷煙草を幾袋か着物の間に忍ばせて置いたからで。

「へえ、大分仕入れて來ましたね。」

と稅關吏は笑つて、私の貯蓄を見遁して吳れた。そして白墨で大きく私の鞄の上に檢査濟の印を書いて吳れた。

そこここには英吉利行の旅人の群が集つて居た。驚くばかり神經質な、そして物々しい光景がやがてわれ〳〵の前に展けた。そこでわれ〳〵は旅券の檢査を受けた。連の一人でも、すこし檢査が遲れるとか、姿が見えないとか言へば、直ぐ他のものは心配した。瑞西旅行の記念を旅券の裏にとゞめて持つて居たN君は一番後廻しにされた。われ〳〵は積重ねた荷物の側に旅人らしく佇立みながら、四人顏が揃ふまでは安心しなかつた。

英吉利海峽の定期船ノルマンニア號は暗い波止場でわれ〳〵の乘組を待つて居た。私はもう一步佛蘭西を離れて、英吉利の空氣の方に移つたことを感じた。何故といふに、そのノルマンニアは英國船であつたから。三年見慣れた佛蘭西人のかはりに、そこには英吉利の水夫が働いて居た。聞慣れた佛蘭西語のかはりに、そこにはアクセントの強い英語が話されて居た。飲み慣れた佛蘭西の珈琲のかはりに、そこには英吉利の紅茶が用意してあつた。

闇を衝いて定期船がアーヴルの港を離れた頃は、戰時の不安がひし／＼と身に迫つて來た。われ／＼は萬一の場合を慮り、すつかり旅仕度も解かず、靴足袋のまゝで船床の上に横になつたが、眼に見えない敵の潜航艇を待受ける心はおち／＼四人のものを眠らせなかつた。

二

巴里よ。私は歐羅巴を去らうとするにのぞみ、一語の別れの言葉もなくこのまゝ遠く離れて行くことは出來ない。私が出發の日は、私は朝早くお前の町を歩き、ソルボンヌの古い禮拜堂の横から岡つゞきの町に添ふてパンテオンの前に出、あのルッソオの銅像の周圍をめぐりにめぐつて、立去るに忍びぬ程の思をして來た。私はまたもう一度住み慣れた天文臺の附近をも見て行かうとして、細長いサン、ジャックの通りをヴアル、ド、グラアスの寺院へと取り、產科病院の角へ出、朝に晩によく往つたり來たりしたあのポオル、ロワイアルの並木町を歩いて來た。私が辻待の自働車に旅の荷物を載せ、セエヌ河を渡り、サン、ラザアルの停車場を指して急いだ時は、お前の町々が一目見る毎に車の窓から消えて行つた。私はあの停車場を離れてからも、汽車の窓からお前の方を振返つて見た時、遠くサクレ、カアルの高塔に日の映るのを望んで來た。あだかもあの古い石造の寺院がわれ／＼の歸國を見送るかのごとくに。それが私の最後に望んで來たお前であつた。近代の羅馬とも言ふべき都よ。「藝術の都、文明の泉源、風俗の中心、流行の中心」として曾て佛蘭西の作家が誇つた都よ。「システマチックで、冷靜で、意思によつたものである」とまで同じ作家をしてお前の文明を誇らしめた都よ。建設と破壞とを同時に有する都よ。詩と散文とを同時に有する都よ。羅馬舊敎と科學とを同時に有する都よ。帝王の意志と革

命家の理想とを同時に有する都よ。私はお前からかず〱の醜いもの、濁つたもの、澱んだもの、厭はしいものを感知したけれども、また一口に言つて見やうならお前の印象は冷かつたけれども、それにも關らず私はお前を忘れることが出來ない。遠い昔のダンテの夢が近代のたましひに生きながらへ得ることを私にさゝやいて呉れたのもお前だ。私はお前を見た眼で、もう一度自分の國の都を見直したいと思ふ。なんと言つてもわれ〱の國はまだ若い。私は若い日本を夢みつゝ遠くこれから歸つて行かうとして居る。過ぐる三年の間、私の寂しい旅情を慰めて呉れたお前のセエヌの水。私は長くお前のセエヌをも忘れることはあるまい。さらば。船で夜が明けた頃は、われ〱はもう英吉利の陸を望んだ。

　サウザンプトンに着いたのは朝の十時頃であつた。われ〱は互ひに一夜の航海の無事を祝した。そこでもまた旅券を取出して見せる必要があつた。S君、N君、それから私の旅券の檢査は簡單に濟んだが、M君が手間取れた。

「どうしたらう、まだM君が見えない。」

としまひには君の爲に心配し出した程であつた。一同の荷物は既に赤帽に頼んで取纏めてあつたし、倫敦行の列車は今にもそこから動き出しさうな様子を見せて居た。同じ船で海峽を越して來た旅客の多くはもう汽車に乘組んでしまつた。一體、私の道連れは巴里の英吉利領事館でも、アーヴルの税關でも、さつさと通過して來たことを自慢にした程で、それを君は誰の眼にも認められ易い美術家の德に歸して居た。英吉利の役人も眼が無い、君のやうな人をそんなに引留めるとは。

「どうしました、君は。」

と私は暫く檢査の濟んだM君の側へ走り寄つて尋ねた。するとM君は笑つて、
「別の部屋へ連れて行かれて、いろ／＼なことを聞かれちまつた。美術家なら、何か描いて見せろなんて……僕はその役人の顏を描いてやりましたす。」
「もう汽車が出ますぜ。君の荷物も來てますぜ。」
と私はM君を促して、一緒にプラットフオムの方へと急いだ。
背の高い英吉利人の巡査があちこちと構内を歩き廻つて居るのを見た丈でも、何となく私の旅情をそゝつた。なんと言つても少年の時分から學んだ言葉はなつかしかつた。私は倫敦行の汽車の中でも、他の乘客の話に耳を傾けて、思はず獨りでほゝゑんだ。
海一つ越せばそこにはもう全く別の言葉があり、別の歴史があり、別の風俗があつた。

三

テエムス河口に碇泊中なる日本郵船會社の熱田丸が歸航の途に就かうとして居ることを聞いて、更に長い船旅に上るべくわれ／＼二人のものは倫敦までの道連れと手を分つた。S君やN君はもと／＼倫敦から巴里の方へ出掛けて、そこから瑞西、以太利の方までも旅して來た人達であつた。S君は臺灣總督府の農事試驗所の學士で、昆蟲の研究を君の視察の目的として居た。N君はまた若いおとなしい東京生れの紳士で、巴里滯在中マチスの新畫を二枚も買入れたほどの餘裕のある身の上であつた。
旅を續けて來た巡禮のやうな、底疲れのした氣持で居りながら、私は更に旅仕度にいそがしかつた。M君と一緒に倫敦の警察署へも出頭した。倫敦での陽氣はまだ外套を着て居るほどであつたが、船で冠

るための夏帽子をも一緒に町へ行つて探して來た。船へは、私は何をもつて行つて讀まうかと考へた。煙草も私には忘れることの出來ないものであつた。巴里から鞄の中に入れて持つて來た青い包紙の「カポラル、オリヂネエル」、あの佛蘭西の紙卷煙草は好きで私もよく吸つたものだが、一袋減り、二袋減り、九日ばかりの倫敦滯在中に船まで持つて行く樂みは無くなつてしまつた。僅かに殘つた佛蘭西の銀貨や銅貨も、最早日用の必要品でなくて、忘れがたい旅の紀念物と成つた。それにしても三年の異鄕の月日は私を變へたらうか。最後にあの巴里を、ソルボンヌの町を、アウギユスト、コントの石像の横手にあつた客舍を引揚げて來る頃には、私の髮は自分ながら驚くほど白かつた。

倫敦フエンチヤアチの町の停車場には熱田丸行の乘客らしい人達がポツ／＼集つて來て居た。まだしばらく英國に留るといふN君はその停車場までM君や私を見送りに來て吳れた。そこで私は巴里馴染のK君夫婦にも落合つた。K君は佛蘭西での三年の任期を終へて、われ／＼と同じやうに歸國の途に上らうとして居る人であつた。開戰の當時以來、巴里在留の同胞のために、すくなからぬ面倒を見て吳れたのも君だ。

「ではMさんも同じ船で――好いお連れがあつて心强うございますこと。」

と夫人もK君の側に立つて挨拶した。われ／＼の旅とちがつて、君等夫婦は二人まで子供を引連れて居た。その末の方は佛蘭西人の乳母に抱かれて來て居るほどまだ極く幼かつた。

「「今日は」しないか。」とK君は父親らしい調子で、姉娘の方の子供の顏を覗き込むやうにして言つた。

「お前の知つてるムツシユウだよ。」

『こちらのムッシユウにも。』と夫人も言葉を添えた。

巴里育ちらしい六つばかりに成る女の兒はM君や私の方を見て右の手を差出した。握手がこの女の兒にとつては『今日は』であつた。佛蘭西人の乳母に育てられたこの子供は、自分の國の言葉よりも先に佛蘭西語を覺えてしまつた。K君夫婦が話しかけるにしても、佛蘭西語でなければ斯の子供には通じなかつた。

その時、佛蘭西人の乳母はちいさい子供の方を抱いて來て見せて、自身でも眼で一寸われ〳〵に會釋した。

『これはまだ日本を知りません。』とK君はその兒の幼い額を私に撫でゝ見せた。

『乳母も御一緒なんですか。』と私が聞いて見た。

『いえ、とても其樣なわけには參りませんが、是非船まで送らせて呉れろと言ふものですから、一緒に連れて參りました。』と夫人が答へた。

斯うした幼い人達をわれ〳〵の道連れに加へたことは、一層遠い旅立ちらしい思をさせた。姉娘の方は膝まである子供らしい着物に小さな靴を穿き、皆なに連れられてプラットフォムの方へ步いて行つた。『ママン、ママン』と事毎に眼を圓くして、母親を呼ぶ樣子もいぢらしげであつた。

郵船會社の副支店長の案內で、一同はフエンチヤアチの停車場からチルビユリイの船着場まで汽車に乘つた。英吉利風の建築物の見える岸へ行つて集つた時は、一緒に海を越して行かうとする旅人の群も少いことが知れた。同胞としては、K君の家族にわれ〳〵二人のもの、其他には出稼ぎの歸りらしい二

三の人達を見かけるに過ぎなかつた。私が料理人かと鑑定したそれらの人達の中には、和服にコオトを着たやうな風俗の一人の婦人の姿をも見かけた。

寒い細い雨が時折やつて來るやうな日であつた。M君が着けて居た英國製の灰色の脛巾も、私が旅の外套も、雨や汐風のために濕つた。テエムスの河口に浮ぶ熱田丸では、船員の多くが甲板のところに集つて、斯うしたわれ〳〵を待受けて居て呉れた。われ〳〵は小蒸汽から順に一人づゝ大きな汽船に乘移つた。

四

到頭私はテエムスの河口を出て行く熱田丸の甲板の上に、船長から水夫までを同胞に有つた自分の國の汽船の中に、海の魚が鹹水にでも有付いた樣な氣樂さを見つけた。人種の相違から來る種々な煩ひは、そんな骨折が結局何の役に立たうと思はれるにも關らず、過ぐる三年の間一日も私の心を休ませなかつた。

M君も私もまだ倫敦を發つて來たまゝの旅仕度で――外套なしには甲板の上は寒かつたから――二人並んで、濁つた波の上へ來る五月の雨を眺めた。英吉利風の赤い暗い色彩はあちこちに見える帆船の帆の上にもあつた。チヤイルド、ハロルドの詩人があの「巡禮」の中に歌つたはあれは斯の鳥のことかと思はせるやうな海の鷗もわれ〳〵の船に近く來て鳴いた。動揺する波のかなたには、沈沒した船の帆柱と煙筒とだけが物凄く水の上にあらはれて居るのもあつた。船客の一人らしい英吉利人が私の側へ來てその沈沒した船を指して見せて、それとなく斯の航海の危險なことを仄かしたが、しかし私は佛蘭西から英吉利へ渡つて行つたあの暗い夜のやうな恐ろしい不安は感じて居なかつた。

船で食事をする最初の時が來て、私はM君と一諸に食堂の方へ行かうとした。その食堂の入口のところで、給仕頭らしい人が私の前に立つて、至極慇懃な調子で言つた。

「御食事は御部屋の方で差上げることに致しましたから。」

斯ういふ掛りの人の言葉に、思はず私は手を揉んだ。

「會計の方の都合も御座いまして、御食事だけは御部屋の方へ差上げることに致しました。」

とまたその人が言つた。

M君と別れて、私は獨りで食堂に近い自分の船室へ行つた。私は人知れず自分の顔を赤めなければ成らないことが有つた。何故といふに、二等船客としての往復切符を所持したM君とも違ひ、私は實際のところ其船室に入るべき客ではなかつたから。

巴里を出發する頃から、私はある旅の計畫を立てゝ居た。往きには不慣のことでもあつたから、船でも汽車でもすこしゆつくり出來るやうな方針を執つたが、そのかはり還りは極く簡素にと。倫敦の郵船會社の支店で私のやうな乘客に割引の無いことを聞いて、私は特別三等の切符を求めて來た。事は意外に運んだ。私はあのチルピユリイの船着場から出掛けるといふ際に、熱田丸まで皆なを送つて來て呉れた郵船會社の副支店長が別れぎはに私に向つて、「御便宜を計りますやうに、船長にもよく話して置きました。」と言つたことを思出した。「さあ、是方へ。御荷物はもう御部屋の方へ參つて居ります。」と言つて船のボオイが案内して呉れたのは、思ひがけない斯の二等室であつた。初めて見た時の斯の船室の入口には英語でもうちやんと自分の名前まで掲げてあつた。

「御食事は御部屋の方へ差上げることに致しましたから。」

私は感謝と羞恥の心とで、あの給仕頭らしい船員の言葉を讀んだ。もう少しで私は二等船客らしい顔をして、皆なと一緒に食卓に就くところであつた。

部屋付のボオイが大きな硯蓋を見るやうな膳を私のために運んで來た。萬事心得顔なボオイはその膳を手早く船室の片隅に置き、皿を並べ、珈琲にデッセエルの林檎まで添えて置いて、部屋の入口にある緑の幕を一ぱいに引いて出て行つた。あだかもその廊下の外を通過ぎるものゝ眼から私の部屋を隱して呉れるかのやうに。私は小さな腰掛を引寄せた。戰時らしく黒布の掛けてある丸い船窓から僅かに光線の射して來て居るところで、心づくしの膳に就いた。

私がまだ食事を終らないうちに、M君は入口の緑の幕を開けて笑顔を見せた。

「へえ、これがあなたの部屋ですか。」

とM君は額に垂れる赤味勝ちな髮を掻揚げながら入つて來た。その髮の赤味勝ちなのが何時でも好い光澤をして居る君の頬の色に好く調和して見えた。

「なんだか御馳走が有りますね。」

斯うM君はまた私の方を見て、半分冷かすやうな調子で言つて笑つた。私が膳を片付ける間、君は私の船床に腰掛けて話した。

「時にM君、結局僕も船で割引をして貰つた形に成りましたよ。」

「左樣ですな。まあ大いに優待された譯なんでせう。」

「こんなにして部屋を宛行はれるよりか、三等船客として寢轉んで行つた方が氣が利いてるかも知れません。」

「しかし、船から言へば斯樣なことは何でもないのでせう。特三の客を二等に乘せやうが、二等の客を一等に移さうが、部屋さへ明いて居れば奈樣にでも都合のつくものだそうです。そりやもう、船の中のことは船長の意見一つでからに……」

「僕は君、子供の時分からずつと長いこと人の家に食客をして來ました……斯うして船に乘つてまで、今だに僕は食客です……」

私は自分で自分を嘲るやうな調子に成つて行つた。開戰の當時以來、旅で一緒に苦勞したM君の前だから、こんなことも言へたのだが。

斯うした私の特別の事情にも關らず、船の會計まで來て何呉れとなく私をいたはつて呉れた。船で「敷島」が燻せることなぞも半ば國に歸つた思をさせた。夕方には、英國海上の警備船が熱田丸に近づいて來て、夜間の航海を戒めて行つたので、われ／＼の船はそのまゝ英吉利海峽に停つた。甲板の電燈は消され、船室々々の燈火も黑布で掩はれた。その晩は私は非常に疲れて、前後も知らずに深い眠に陷つた。

三

M君の部屋は喫煙室に接した甲板の上にあつた。窓も四つあつて、左舷に面したその二つからは海を望むことも出來た。君は船に弱くて、往きの航海には殆んど醉ひつゞけて行つたといふ程であつたから、

すこし船が揺れでもすると兎角部屋に籠り勝ちであつた。私は心配してよく君の部屋を覗きに行つた。

「M君。」

と聲を掛けて私が部屋の入口の幕を開けて見た時は、君は私がそこに立つたことも知らないほどよく眠つて居た。

私はその足で左舷の甲板の方へ出た。白いペンキで塗つた通風筒がある。柱がある。碇綱を卷く鐵製の船具がある。あたかゝい霧のために濕つた、長い廊下を見るやうな板敷がある。船室の窓の外に近く藤倚子を並べて海を眺める殖民地行の英吉利人の客もある。形式こそ違へ、色彩こそ異なれ、すべてが曾てあつたと似よりのものゝみだ。あの佛國汽船エルネスト、シモンが、よく往つたり來たりした甲板の上が、一切のものから離れやうとして海へと急いだ往きの船旅が、それらの記憶があだかも昨日のことのやうに私の胸に歸つて來た。

私は太い綱や船具の積重ねてある側を通つて艫のところへ出た。フォクストーンの附近で望んで來たあの白く光つて見えた英吉利の沿岸も、遠く／＼後方に成つた。私は水深を測量するための器械が装置してある艫の欄の側に立つて、そこから波間に沒入れてある一條の長く細い綱の絶間なくクル／＼廻るのを眺めながら、遠く國を出てから以來のことをしみ／＼と胸に浮べた。

もう一度私がM君の部屋の方へ引返して行つて見た時は、入口のところにボオイが出たり入つたりして居た。眼をさましたM君は船床に腰掛け、旅疲れの出たらしい顔付で私を呼留めた。

「まあ、お入りなさい。このボオイさんはH君を知つてるんですとサ。」

H君とは私も巴里で懇意になつた美術家仲間の一人だ。あのサン、ラザアルの停車場で君の歸國を送つた後も、よくわれ〳〵の噂に上つた人だ。

「え丶。」とボオイは立働きながら話した。「Hさんは往きも還りもこの熱田丸でしたよ。え丶、え丶、私も御懇意に願ひましたが、それは面白い方でね。あの方は往きには二等でしたが、お還りの時は三等でした。」

このボオイの話はわれ〳〵二人のものを悦ばせた。H君と私とは同じやうな旅の方針を執つて來たことをも知つた。唯H君の方はそれに徹底し、私は徹底しないといふ相違は有つたが。

ボオイが出て行つた。私の部屋から見ると、そこは位置も好し、それに廣くもあつた。乘客も少い時だから、M君は一人でその部屋を占領し、壁にはセザンヌやマチスの畫の複製を掛けて、船床に寢ながらでもそれが眺められるやうにしてあつた。巴里のシテエ、ファルギエールの畫室の方で私がよく見掛けた模様更紗の薄い掛蒲團は、そこの船床の上にもひろげてあつた。

「煙草でもあげませうか。」

とM君は慰め顔に、黄色い包紙の卷煙草を探して來て、その二十本入の口の切つたやつを私に勸めて呉れた。

「へえ、「マリイ、ラン」がまだ有りましたね。佛蘭西の煙草は、僕のところにはもう殘つて居ません。」

「それが一袋だけ殘つて居ました。」

「よくそれでも是が有りましたね。なんだか吸つてしまふのは惜しい。一體、君は物を大切にして、

く凝つて置く方ですね。あのリモオジユへ行つた時でも、君と一緒に買つた菓子が僕の方には無くなつてる時分に、まだ君のところには有りましたよ。僕がもう忘れてしまふ時分になつても、まだ君のところには殘つて居て御馳走になつたことなんかゞ有りましたよ。」

われ／＼二人のものは斯様な言葉を交しながら、僅かに殘つた煙草の香を嗅いだ。

六

テエムスの河口から英吉利海峽へ。英吉利海峽からビスケエ灣へ。斯うした旅の空は、やがて私の行くべき道であつた。三年前海へと私を導いた力は復た斯うした波の上へと私を導いた。

あるひはもう神戸の港も見納めかとさへ思つたあの過去つた日のことを振返つて見ると、すくなくも私はある悲しい決心を抱いて自分の生れた國を離れて來た。私は一切のものを忘れたかつた。愛する同胞を忘れたかつた。愛する歴史を忘れたかつた。私は全く知らない人の中へ行かうとした。しかし斯の私の決心はそれほど鞏固なものでは無かつた。私が國を離るれば離るるほど、餘計に私の心は國の方へ向ふやうに成つた。巴里の客舍にある間、一日も私は日本なしには生きられなかつた。堪へがたい私の鄕愁は旅の月日を可成長いものゝ思はせた。ある月日のいかに短くて、ある月日のいかに長いかは、人の屢經驗するところである。過ぐる三年はすくなくも私に取つて可成長いものであつた。歐洲開戰の當時、私は巴里の混亂を避けて、M君等と一緒に佛國オートヰエンヌ州のリモオジユへ行つた。その頃に異鄕で暮した十五ヶ月が早や三年にもあたる思をした。その頃に私はもう隨分長い月日の間、故國を見ずに暮した思をした。その間、日頃親しかつた人の誰の顔をも見ず、誰の聲をも聞くことの出來

なかつた思をした。私は一すじの旅の細道を辿りに辿つた末、あだかも舊い軒端をさして遠く歸つて行く燕のやうに、異郷で子供までまうけたK君夫婦やそれからM君達の行く方へ、一緒に斯の波の上を急いで來た。

「國の方では、どういふものが吾儕を待つて居て呉れますかサ。」

何かにつけて私はM君にその噂をした。

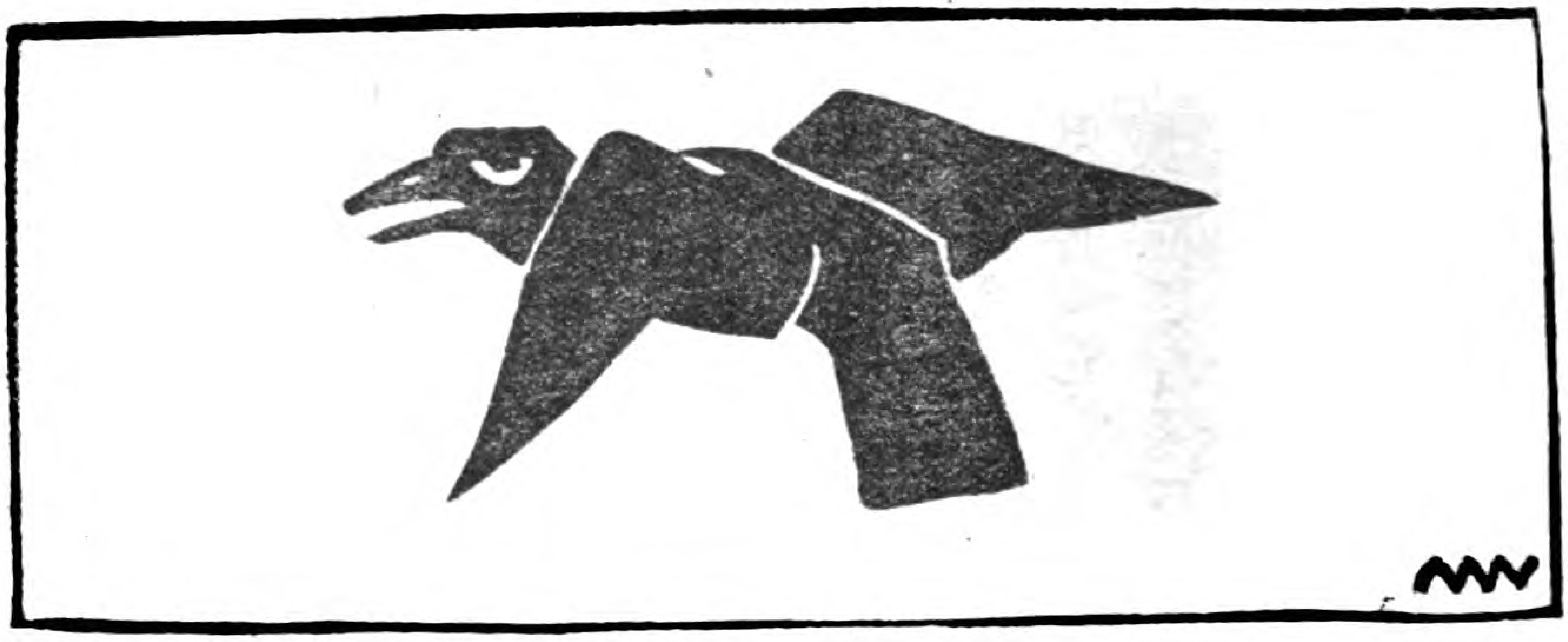
進めば進むほど私は明るい空へ出て行つた。氣候も溫暖になつて來た。われ／＼の船では舳に立つ見張番の水夫があつて絶えず浮流水雷に注意して居たし、艦橋には雙眼鏡を手から離すとの無い運轉手があつて僅かな水平線上の煙でも見逃すまいとして居た。萬一の危急に具へるためとあつて、救助用の小舟には、水、食料、磁石、其他小道具の類を用意した。最早危險區域も通過したと言はれる頃には、外套なしに甲板の上を歩くことも出來た。私はもう何方を向いても陸を見ることの無いやうな、驚くばかり美しい海の眞中にあつた。日が輝いて來た時は、海は譬へやうのない青さに光つた。

そよ／＼とした西北の風をうけて熱田丸は日に三百十五六哩を駛つた。M君はスケッチ用の畫布や調色板を取出して、氣分の惡いのを忘れて行かうとして居るらしかつた。そろ／＼やつて來る海上の無聊をまぎらすためにデッキ、ビリヤアドなどを取出す向きもあつた。高い帆柱を隔てた彼方の甲板には、幼い子供等を分擔してサロンの窓の外を往つたり來たりするK君夫婦の姿をもよく見かけた。

「K君の旅も容易ぢや無いね。」

M君と私とは斯う言合つた。

試みに私は喫煙室の横手に日毎に貼出される船長の掲示の前に立つて、その前日の正午に於ける船の位置を讀んで見た。北緯四十三度三十八分。西經十一度三十五分。その日の位置は葡萄牙の南端の一角に近いことをも知つた。實に日本は遠かつた。私はその前日までに四日かゝつて倫敦から七百八十五哩の海上を乘つて來た。戰時のことで、東洋の空へとこゝろざすものは遠く南亞弗利加の果を廻り、赤道を二度も越さなければ成らなかつた。そこから喜望峯まで、五千四百七十五哩もあつた。(をはり)



心中後日譚（室内劇三幕）

久米正雄

人物

江藤利太郎。　實業家。

同　ひで子。　その妻。（もと藝妓）

川田新吉。　ひで子の知人。

おたみ。　ひで子の實母。

溫泉宿の主人。番頭。女中。按摩。洗濯婆等。

醫師。看護婦。巡査等其他。

時代

現代。—第一幕及び第三幕は現在。第二幕はそれより二十年前の過去に屬す。

場所

東京に近き或る有名なる溫泉場。三幕ともすべて其溫泉宿の一室にて

起りし出來事。

第一幕

或る有名なる温泉宿の古びたれど瀟洒なる一室なり。正面は廊下を隔てゝ欄干、晝ならば欄干を越えて、前山の風色を見るべし。今は其處の閾に硝子をはめたる障子を閉づ。右手は床、違ひ棚など宜しく、左手は襖にて限らる。

靜かなる秋の夜なり。遠く水音聞ゆ。――幕あきたる時、舞臺には人無く暗し。やがて一人の女中急いで入り來り、電燈を點じ、四邊を見巡して去る。しばらくして此家の番頭、年老いたる夫婦の客を案内し來る。客は卽ち江藤夫妻なり。

番頭。(襖をあけて導き入れる。)ではどうぞこちらへ。

江藤。(後ろに居るひで子を顧みて)さあ、そんな處に愚圖々々してゐないで、おまへから先にお入り。

ひで。(默つたまゝ入り來る。)

番頭。二階の端の座敷と申しますと、先づ此處でございますが、誠にむさ苦しくてお氣の毒さまでございます。それでも此處は手前共の方で宜しい方の座敷になつて居りますので、へい、もつと何でしたら、あちらの離屋の方に宜しい部屋もございますが……

江藤。いや、此處で澤山。こゝが望みなのだ。それでわざ〳〵二階の端と指定したのだよ。

番頭。へえ、左樣でございますか。それならどうぞ御我慢遊ばして下さいまし。

江藤。(四邊を見巡して)此の家も昔しと餘り變りはないね。

番頭。左樣でございます。此の舊館の方はなるたけ手を入れずに、增築の方を多く致しますので、此家も大分古びて參りました。

江藤。時代がついて却つてよくなつたよ。(妻に向つて)ねえおまへ。おまへもさうは思はないか。

ひで。(ちつと物思ひに沈み乍ら)さようでございますね。(物倦げに四邊を見巡し、)昔とちつとも變りませんね。

江藤。變つて行くのは人の方が早いわけだね。

ひで。（淋しく微笑むのみ、答へず。）
番頭。では旦那様は昔から此家を御贔負下さいましたので――。
江藤。うむ。俺たちのもつと若かつた時代にな。此のお婆さんも其時分は美しかつた。――さうだ。もうざつと二十年も昔になるかな。ねえおまへ。
ひで。さようでございますね。――
番頭。へえ、左様でございましたか。毎度どうも難有うございます。で、其時は御新婚旅行とでも云ふやうな譯でございましたのですな。
江藤。（淋しく笑つて）まあそんな處さ。
番頭。新婚旅行においで下すつた方は、後々にもよくおいで下さいます。矢張りあの時分の事が、一番忘れられないと見えますな。
江藤。樂しくつても、樂しくなくつても、ね。俺達のは樂しいと云ふ譯には行かなかつた。
番頭。御冗談でございませう。はゝゝゝ。――で、早速御湯は如何でございます。お浴衣はすぐ後から持たせて參りますから。
江藤。さうだね。入つてもいゝね。
番頭。では御ゆつくり。御免下さいまし。（出て行く。）
江藤。秋もそんなに深くない癖に、冷々するぢやないか。矢張り山の中だね。
ひで。此處の障子を閉めませうか。
江藤。もう少し靜かな夜景色を見てゐようよ。星が一つぱいだね。
ひで。河鹿はもう鳴かないのでせうか。
江藤。何も聞えなければ鳴かないのだらう。（耳を傾けて）餘り四隣（あたり）が靜かすぎるね。何だか心の中までしんとして來る。秋は老人の季節だと云ふが、全くほんとだ。――おまへ今日の運動で、いつものリヨーマチは起りやしないかい。
ひで。何だか左の二の腕が硬ばりますけれど、お湯にでも入つたら癒るでせう。――お湯と云へば浴衣は

どうしたのでせう。氣がきかない家ですわね。

江藤。吾々が泊るには丁度結構だ。(ごろりと横になつて) あゝ靜かだなあ。(ふと起き上つて) 湯から出たら久しぶりで三味線でも引かないかい。

ひで。厭ですわ。そんな氣になれやしませんもの。——ほんとに何をしてゐるのだらう。早く浴衣を持つて來ればいゝのに。

江藤。さう急がなくてもいゝぢやないか。どうせ此處へ來て泊ると定つた以上は。——氣を落つけて靜かに昔の事でも思ひ出すのさ。もう吾々も慌てないで濟む年になつてるのだからな。

ひで。誰も急いてやしませんわ。

江藤。そんならそれでいゝけれど。——俺はおまへを苦しめに連れて來たのぢやないのだからな。只昔しの紀念の場所を、二人で靜かに眺めて見たいばかりなのだ。

女中。(入り來る。) お待遠さまでございました。少し今夜は冷々致しますので、どてらも持つて參りましたから、どちらでもお召し下さいまし。

ひで。それはどうも難有う。早速着ますよ。

江藤。老人だと思つて大變氣をつけて呉れる譯だね。

女中。いゝえ。どう致しまして、誠に氣がつきませんで。

江藤。時に姉さんは此家へ來てから何年になるかね。

女中。もう六年になります。

江藤。六年か。短いやうでゝ長いものだね。姉さんなぞも此家では古い方だらう。どうだい、此家に二十年も前にゐた人が在るだらうかね。

女中。さうでございますね。二十年前と申しますと、只今の旦那の代にならない前でございますからね。

江藤。あゝ成程、主人が代つたのだね。さうだらうね、もうあの時分年輩だつたから。いつ頃亡くなつたのだね。

女中。もう十三回忌が來年とやらでございます。

江藤。ほう、それも一と昔の事だね。——さうかい。

ふうひ、物の解つた、親切な、いゝ主人だつたがね。あの人もそんなに昔死んで了つたのかねえ。

ひで。あの人には隨分世話になりましたつけねえ。

江藤。併し俺にはどうしても顔が思ひ出せない。何しろ二た昔も後だからなあ。――で、その頃の事を知つてゐる人は誰もゐないだらうかね。

女中。左様でございますね。洗濯番のお兼婆さんは先の旦那の時分から女中をしてゐたさうでございますから、ひよつとしたら知つて居るかも知れません。何なら、お呼び申しませうか。

江藤。いや、別にわざ〳〵呼ばなくてもいゝ。たゞ明日にでもゆつくり會つて見たいと思つたのさ。

女中。ではあとでさう申し傳へて置きませう。

江藤。わざ〳〵さうして呉れるにも及ばないが、手隙だつたら話をして見たいつてね。

女中。畏りました。（女中去らうとする。）

江藤。鳥渡待つて下さい。まだ用があるのだから。（妻に向つて）お前按摩を頼んぢやどうだい。その方が疲れもよく取れるぜ。

ひで。さうですね。湯から上つたら、一つ揉んで貰ひませうかね。

江藤。ぢや一つ按摩を呼んで置いて下さい。それからもう湯から出たら休みますから、そこらを片附けて、床を敷いといて下さい。

女中。畏りました。では御緩り(ゆつく)り睡まつてゐらつしやいまし。御湯壺は御解りでございますか。

江藤。さあ、忘れて了つた。おまへ知つてるかい。

ひで。私も忘れて了ひましたわ。

女中。では御案内致しませう。

江藤。ぢやさつと浴びて來るとするかな。

（女中に伴はれて二人廊下へ出て行く。長い間。女中一人で再び登場。そこらを片附け、寢床を敷く。それから欄干の外に雨戸を閉める。だん〳〵閉てゝ行くに作れて、其戸の軋る音が遠ざかつて行つて、遂に聞こえなくなる。再び長い間。どこやらで時計が眠げな十時を打つ。）

江藤。(手拭をさげた儘再び入り來る。)

女中。(あとから從いて來て)大變お早うございますね。お湯はいかゞでございました。

江藤。いゝ湯だつた。浸つてゐると疲れが指の股からぬけて行くやうだ。底冷えのするこんな晩の湯の味と來たら全く忘れられないものだよ。溫泉は秋に限るね。今も湯壺から硝子戸越しに眞つ白い天の川を眺めて、つくづくさう思つた。溫泉は全く秋に限るね。

女中。ほんとうでございますわ。ほんとうのお湯治は何と云つても今頃でございますよ。夏は賑かなばかりで、少しも實になりや致しません。

江藤。もう雨戸を立てゝ了つたのだね。

女中。あら、もつと開けて置くのでございましたか。氣が附きませんで、つい——。

江藤。なにいゝよ。閉てたら閉てたでいゝんだ。

按摩。(老いたる盲人、靜に入り來る。)今晩は。按摩でございます。お呼びはこちら樣で。

女中。さうですよ。按摩さん。今夜はよく早く來られましたね。

按摩。難有うございます。此頃は滅切りお客さまが少くなりましたので、私の身體もひどく暇でございますよ。

女中。ではゆつくり揉んで上げて下さいよ。ようござんすか。では御免下さいまし(出て行く)

江藤。按摩さん、こんなに晩くどうも御苦勞だつたね。揉んで貰ふのは私の家内だが、今湯から上つて來るから、暫らく待つてゐて下さいよ。

按摩。これは旦那樣ですか。どうも每度難有う存じます。こちらへは長く御滯在でございますか。

江藤。いや、直ぐ歸るつもりだ。別に身體がわるいと云ふ譯でもないのだからな。

按摩。もう二三日で紅葉も染まるだらうと云ふ話でございますから、御ゆつくり御逗留なすつておいでに

なつたら宜しうございませう。紅葉の何のと申した處で、私どもには何の係りも御座いませんが、之から少し奥の湖の方へ入りますと、大變美しいんださうで御座いますよ。
江藤。おまへさんは兩眼とも全く見えないのかい。
按摩。左樣でございます。
江藤。いつ頃から潰れて了つたのだい。
按摩。私が十五六の時ですから、もうかれこれ四十年にもなりますかな。
江藤。それでいつ頃から按摩になつたのだい。
按摩。さうですな。二十五の時ですから、もう三十年も此商賣で暮しました。
江藤。ずつと此溫泉場にゐたのかね。
按摩。はい。ずつと此處で商賣をして居りました。
江藤。さうかい。ふうむ。さうすると僕どもが此前に來た時も、おまへさんは此處にゐた譯だね。
按摩。考へて見ますと、隨分古いものでございますよ。
江藤。さうだらうねえ。一所に三十年もゐれば、古いものだからねえ。だが三十年の間には此處も隨分變つたらう。其間には面白い話もあつただらうね。いろ／＼なお客が來るだらうから。
按摩。あると云へばある、無いと云へば無いやうなものでございますねえ。世間話なんてものも、聞いて見れあ大抵同じやうなものですよ。
江藤。たまには變つたお客もあるだらう。
按摩。さう。無いこともありませんね。
ひで。(靜かに入り來る。)只今。
江藤。よく暖まつて來たかい。
ひで。えゝ、大變いゝお湯でしたから、いつもよりつい長湯をして了ひました。
按摩。今晩は。奥さまで御座いますか。毎度御贔負に預ります。
ひで。おや、按摩さんですか。もう來て下すつたの。

ぢや早速横にならうかね。
按摩。へえ、此の湯の後の按摩と云ふのは、特別に効くものでございますからな。どうぞ早速揉ませて頂きます。
ひで。ぢや、あなた御免なさいよ。
江藤。あゝいゝとも。勝手におやり。
ひで。ぢや按摩さん。お頼み申します。
按摩。へえ、湯上りですから、一つ軽く揉んどきませう。
（ひで子は横になり、按摩にかゝる。間。）
江藤。（按摩に話しかける。）ほんとに静かな晩だね。此頃はいつもかうかい。
按摩。今晩は特別に静かでございますよ。山に風のないせいでもございませう。
江藤。若い男女同志ででもあれば、心中でもしたくなるやうな晩だ。
按摩。全くさうした晩でございますな、――當節は諸所方々で心中々々つて流行りますが、此の界隈では近年とんと噂を聞かなくなりました。あの心中にも矢張り流行地があると見えますな。
江藤。さうかも知れない。
按摩。只今の心中と云ふ言葉で思ひ出しましたが、此處にも大分昔しの心中話がございましたよ。何でも二十年も昔の事ですがな。所は、旦那方は氣味惡くお思ひなさるか知りませんが、丁度此の家でしてな。――今でも秋になると私はちよく／＼その話を思ひ出しますよ。まだ私も若い時分でした。
江藤。ふむ。どんな心中つて、どんな心中だつたのだね。
按摩。どんな心中つて、心中に別段な變りはございませんでしたが、――これは奥さんはひどく左の肩が凝つておいでゞすな。――何しろ心中なんて事がまだ私には珍らしかつた時分なので、まだ覺へてゐるのでございませう。（間）女は何でも藝妓上りの美しい女で、其時はある商人に落籍されて、いづれ正妻

になるのだつたさうです。處がその女がまだ藝妓でゐる時分に、固く云ひかはした一人の男があつたのださうです。

江藤。ふむ。よくある話さね。

按摩。何でも小さな呉服屋の若旦那とかで、色の白いすつきりした若い男だと云ふ話でした。

江藤。如何にも心中をするにはお誂向きな男だね。それから。――

按摩。私は眼で見た譯ぢやありませんから、一々保證は出來ません。只女中や其他の人たちから聞き合せたばかりなんですからな。――が兎に角、さう云ふ畫のやうな男女が、今日のやうな秋の晩に、此處へ泊り込んだとお思ひなさいまし。

江藤。ふむ、それから。――

按摩。帳場の人たちから見れば、眞正(ほんと)の夫婦づれだかさうでないかは、一目見れば直ぐ解ります。しかし其男女(ふたり)はそれ迄も度々此處へ泊りに來たのださうで帳場ではまだ普通の藝妓とお客の遠出だとばかり考へてゐたものですから、まさかに心中までしやうとは夢にも考へてゐなかつたのださうです。

江藤。それがどんな風にして心中したのだね。

按摩。心中の仕方は何でもありません。いづれ湯からあがると女は綺麗に身仕度でもして、二人で別れの盃でも交はした事でせう。惚れた同志の事だから、さう云ふ場合の可哀さうでもあり、又憎らしい情景(ありさま)は、いゝ加減に想像されますさあ。先づ酒を呑んでも醉つては來ず、話は益々滅入るばかり。いつ迄經つても名殘は盡きないから、人目にかゝらぬ今の中に早く、――と云ふやうな事で、二人の身體をつなぎ合せ、持つて來た毒藥を二人でぐつと飲んで了つたのです。――二人はやがて苦しみ初めました。通りがゝりの番頭さんが此の有樣を見つけたのはそれから三十分許りの後の事だつたさうです。

江藤。可哀さうに。二人は死んで了つたらうね。

按摩。いゝえ。いろ〳〵と手當をした結果、二人はやつと其場の生命だけは取りとめましたが、男の方は藥を多量に飲んだせいか、翌朝にならぬ中に死んで了つて、女ばかりが殘つたのです。

江藤。はゝあ、女だけが殘つたのだね。

按摩。話と云ふのは是からです。――其中に電報に接して東京から女の旦那がやつて來る。女の母親がやつて來る。と云つたやうな騷ぎでしたが、此の旦那と云ふのが一風變つた人でしてな。

江藤。ふむ。その旦那こそいゝ面の皮だね。さぞ間拔けた顏をしてゐたらうな。

按摩。でつぷりした赤ら顏の、仕事にかけては可なり働き手らしい人だつたさうですが、此人が餘程女に惚れてゐたものと見えましてな。女にそんな踏付けな眞似をされても腹を立てゝ緣を切ると思ひの外、女が生き殘つたのを大變喜んで、猶其上の介抱を加へ、恢復するのを待つてすぐ家へ引き取つたのださうです。何しろ餘り男の威嚴にかゝはる仕草だてんで、暫らく此處らの評判でした。私共それを聞いて世の中には餘つ程の馬鹿もあるものだと思ひましたよ。

江藤。それから先きはどうなつたらう。

按摩。どうなつた事ですか解りません。が、そんな男の事ですから、又女房に間男でもされて知らないでゐるかも知れませんね。

江藤。さうかねえ。其男は餘程鈍馬らしく見えたと見えるね。

按摩。馬鹿でなければあ、普通の人にあ解らない偉物だつたのでせうな。偉物でも何でも、さう云ふ亭主にはなりたくないものですね。

江藤。全くさうだよ。はゝゝ。(間)

按摩。奥さん。いかゞでございます。こゝはもう少し強く揉んで置きませうか。もし〳〵、奥さま。(返事なし)揉んで居る中にお眠みになつたと見える。で

は今日は此位にして置きますかな。(按摩をやめる。)

江藤。御苦勞だつたね。まあ一ぷく付けて行きなさい。今夜はお蔭で面白い話を聞いて、旅の憂さを慰められたと云ふものだ。難有かつたよ。

按摩。どう致しまして。御禮なんぞ仰れちやあ恐れ入ります。

江藤。(財布から金を紙へ包んで)これは今夜の療治代だよ。みんな取つて置いてお呉れ。

按摩。(受取つて調べてみる)こんなに澤山頂いては濟みません。

江藤。まあいゝさ。又これから何度も厄介になるのだから。

按摩。では難有く頂戴致します。では晩くなりますから、これで御免を蒙ります。どうぞ奥さまにも宜しく。

江藤。左樣なら。御苦勞さまでした。一人で行けるかね。

按摩。永年馴れて居りますので、少しも心配はございません。では左樣なら。ごゆつくり休みなさいまし。

(廊下へ出てゆく。しばらくたど/\しい足音聞ゆ。)

(江藤獨り燈下に座り居る。煙草に火を點じ、靜にそれをふかす。長い間。按摩の笛聞ゆ。)

ひで。(そつと首を上げて)あなた、まだ起きてゐらつしやるの。

江藤。おまへも起きてゐたのかい。而して今の按摩の話を聞いたかい。

ひで。いゝえ。初め少し聞いてゐたやうでしたが、餘程疲れが出てゐたと見えまして、ついうと/\寢入つて了ひました。

江藤。聞かなければそれでいゝよ。なあに、よくある世間話と云つたやうな物さ。

ひで。さうですか。(間)あなたももうお寢なさいよ。大分晩いでせう。

江藤。さうだね。ぢやあ俺も寢るとしやうか。電氣は

消さうかね。點けて置かうかね。
ひで。眩しいから消して下さいよ。
江藤。ぢや消すよ。いゝかい。
（江藤電燈をひねる。室暗くなる。暗の中に）

幕　下りる。

第二幕

二十年前の出來事。——
舞臺は殆んど前幕に同じ。只室の造作のまだ新らしきと、諸調度の變れるのみ。
幕あくと舞臺は暗黒、やがてだん〳〵光りを増し來り、遂に次の場面を現出する。

第一場

前の幕と同じやうな靜かな秋の夜。座敷の中には洋燈が寂しく點つてゐる。而して既に夜具が敷かれてある。
初め舞臺は空虚。やがて湯から上つた二人の若い男女が入り來る。
これがそのかみのひで子と其情人川口とである。

川口。大分夜も更けて來たやうだね。
ひで。まだそれほどでもないのでせうけれど、四邊が靜かだから、更けたやうに思はれるのですわ。先刻お湯に行く時帳場の時計の鳴るのを聞いたら、やつと九時でしたもの。
川口。まだそんなかしら。（床の間に置いた自分の時計を見て）ほんとにまだ十時にならないんだね。早いねえ。
ひで。時間の經つのは成るたけ遲い方がようござんすわ。どうせ私共の樂みは今夜一晩なんですもの。
川口。（歎息をして）さうだね。短いねえ。
ひで。いくら無理をしたつて、會へないんですもの、厭になつて了ふわ。一緒に泊るのはこれが初めておやなくつて。
川口。さうだ。おまへがあそこへ行つてから初めてだね。
ひで。今日だつてやつとこさと口實をこしらへて出て

來たのよ。實家の父の七週忌だからつて、やつと一晩泊りのお暇が出たのよ。ほんとにもつと會へるといゝんだけれど。――

川口。旦那が出來て了つちやあ、さう自由にできないのは知れた事さ。會にでもかうして會へれば、俺なんざあ本望と云はなくちやなるまいよ。

ひで。あら又そんな厭味はよして下さいよ。私にして見れば、おまへさんにそんなことを云はれるのは、身を切られより辛いんだからさ。

川口。此處で辛くても、あとで家へ歸ると旦那が撫ぜて吳れるだらうよ。あゝ考へるとつまらない。俺はおまへがさうしてゐるのを見ると、何だか身體中が自烈つたいもので一ぱいになるやうな氣がするよ。

ひで。(身をすり寄せて)ぢやあどうすればいゝつて云ふのさ。

川口。どうもかうもない、俺一人のものにしたいと思ふだけの事だ。

ひで。なつてるぢやないの。

川口。駄目だ、駄目だ。そんなことを云つたつて。俺は永久に俺のものにしたいんだから。

ひで。ぢやどうすればいゝのさ。

川口。どうするつて、外に道はないよ。

ひで。だからどうするのよ。わたしこれでもあなたのために隨分盡してゐる積りだわ。

川口。それはさうだらうけれど、私にはそれで滿足が出來ないんだ。因果な男心さね。私はかうしてゐると自分の嫉妬や、會ひたい一念や、會はれない事情やらの責め苦で、燒き殺されるやうな思ひだよ。

ひで。と云ふのは私に今の旦那と緣を切れと云ふことなの。

川口。さうぢやないんだけれど。――

ひで。だつておまへさんは家の都合で、私がたとへ自由になつた處で、一緒に世帶を持つ譯にゆかないと云ふぢやないの。

川口。だから何もそんな事を要求しちやゐない。僕の云ふのはそんな些細な事ぢやないんだ。もつと大きな、——何と云つたらいゝかねえ。——まあ二人の心も身體もぴつたり一つになつて永久に離れないと云ふやうな事なんだよ。

ひで。それは私も、そんな風になれたら、いくらいゝか知れないと思ふけれど。——

川口。おまへもほんとにさう思つてお呉れかい。

ひで。えゝ、さう思つてよ。思つたつてなれないんだから仕方がないわ。ほんとに世の中つて云ふものは、つまらない所だわねえ。

川口。（決然と）ひでちやん。——

ひで。なあに？

川口。おまへ僕と一緒に死んでお呉れでないかい。一そ此の場で一と思ひに。——

ひで。（蒼ざめて唇をふるはすのみ。）

川口。強ゐてとは云へた義理ぢやないけれど、どうせ添はれぬ身體なら、俺は一人でゞも死ぬ氣だつたのだ。おまへが一緒に死んで呉れたら、俺あどんなに嬉しいだらう。

ひで。（突然泣き崩れる）

川口。（冷かにその様を見乍ら）ひでちやん。俺は今迄すぐおまへが承知をして呉れるかと思つてゐたよ。

ひで。私だつて、……私だつて。……いつでも死ぬわ。いつでも……死ぬわ。

川口。死んで呉れるかい。

ひで。えゝ死にますとも、あなたと御一緒なら、いつでも死んでよ。

川口。今夜一緒に此處で死ぬのだよ。

ひで。えゝ、ようござんすとも。

川口。ひでちやん難有う。私は御禮を云ふよ。

ひで。いゝえ、私こそ。それほど思つて下さるのが、いくら嬉しいか知れませんわ。

川口。だがねひでちやん。おまへほんとに死ぬのが厭

ぢやなからうね。

ひで。えゝ。――

川口。厭かい。

ひで。厭ぢやないわ。

川口。嘘だ。――おまへはきつと私に無理強ゐにされて、でなければ私が氣の毒だからと云ふので、死にたくないのを死ぬんだらう。きつとさうだよ。――いゝえ、それなら遠慮に及ばない。どうか關はないで歸つてお呉れ。

ひで。今になつてまだそんな事を疑つていらつしやるの。いくら私だつて生きてゐられゝば生きてゐたいわ。而して今あなたに死ねと云はれた時は、一時死にたくないと思つたに違ひないわ。けれどもそれはあなたを思ふ心が薄いからぢやなくつてよ。人は誰れだつて生き度いと思ふのが眞實ぢやないの。けれどもそれを思ひ返して、死なうと決心するのは、たとへ人の本心に逆つた嘘にしたところが、當人に取つては眞劍だわ。死にたいと云ふのは、それはあなたの云ふ通り、嘘かも知れないけれど、當人にとつては眞劍の嘘だわ。――それを疑はれては立つ瀨がないぢやありませんか。私ほんとは生きたくなくはないけれど、眞實（まつたく）死ぬ氣ですわ。えゝ、立派に死にますわ。あなたの爲ならきつと死んで見せますわ。無理強ゐをしたなんて、全くあなたの僻みよ。二人は死ぬんですもの。死ぬ前に何の思惑もないぢやありませんか。只あなたに死ぬと云はれて、私も死ぬ氣になつた迄だわ。それでいゝぢやないの。――男つてものは何故さう邪推深いのでせう。

川口。これは俺が惡かつた。成程嘘にしろ一緒に死んで呉れると云ふのを、疑つちや濟まなかつた。――だが俺は何だかおまへを手にかけて、殺すやうな氣がしてならないんだよ。何だか二人で一緒に死ぬのだと云ふ氣がしないんだ。

ひで。いゝぢやありませんか。殺して下さい。それが

わたしも本望だわ。

川口。ぢや濟まないが甘んじて殺されてお呉れ。――(獨語のやうに)どうせ何の心中でも、主になる者と從になる者とがあるのだらうからねえ。こんな事にくよ〳〵迷ふだけが弱いんだ。だが何だかおまへを道連れにするのが、濟まないやうな氣がしてならない。

ひで。又そんな事、今更何を云つてるのよ。

川口。だが全く濟まないものは濟まないよ。俺はどうせ小さな呉服屋の次男ぼうで、家の金も大分費ひ込んだし、そろ〳〵借金で責められかけてるし、此先も生きてゐたところがさう幸福はありさうもない。思つた人とかうして死ねれば、冥加に餘る身の上なんだ。がおまへは決してさうぢやないからな。なるほど此處で死ねのも幸福かも知れん。俺はさう思ひたい。けれども此處で死なゝくたつて、此の世の幸福が待つてゐる身體だ。現に立派な旦那があるんだから、そつちへ行つて安樂に世を送る事も出來る身體だ。

ひで。厭だわ。誰があんな人と。猫可哀がりにばかり可哀がつて。―― 厭なことだ。あんな人と一生暮らすなんて。

川口。いや、さう惡口ばかり云つたものでもない。死ぬ前なんだから御禮の一つも云つて置くさ。

ひで。もうあんな人の事を云ふのはよして頂戴。私ほんとに厭なんだから。

川口。おまへもひよんなキッカケで、こんな俺のやうなやくざ者と云ひ交したのが、身の誤りさなあ。考へれあ全く濟まないよ。

ひで。もう解りましたつてばさあ。―― そんな事よりか、もつと昔の話でもしませうよ(戀に強ゐて醉ひたいやうに)二人が初めて會つた時分の。――

川口。さうさねえ。酒でも飲んで少し浮々して見やうか。

ひで。それがようございますわ。私も三味線でも引きませうか。

川口。だがよさう。そんな事したつてつまらない。それより話でもしやうよ。

ひで。さうですねえ。——(間)時にあなた取つておいくつでしたつけねえ。

川口。俺か。俺は子の七赤で、二十九だ。おまへは確か二十二だね。

ひで。えゝ。——あなたは男の厄年だわね。何故私になんぞ思ひついたの。

川口。何もかも縁だね。——おまへ何か書置きでもしなくていゝのかい。

ひで。私、私はいゝわ。誰にも云つて置く事はないわ。

川口。でも今の旦那に一言位は何か云つた方がいゝね。

ひで。さうでせうか。でも書く事がありませんもの。

川口。さうかい。おや僕も別にないから、只此の宿の主人に一言お詫びをして置かう。鳥渡そこの机と料紙を取つてお呉れ。

ひで。(渡す。)これでようござんすか。

川口。もうそろ／＼お前も仕度をしてお呉れ。

ひで。はい。—— ですけれど、一體どうして死ぬの。

川口。(書き乍ら)薬を持つて來たよ。

ひで。あなた今日はもとから死ぬ氣で出て來たのね。

川口。あゝさうさ。

ひで。それで毎ものやうに浮々なさらなかつたのね。さうとは知らずに汽車の中であんなにはしやいだりして、私済まなかつたわねえ。勘忍して頂戴(着物を着かへる。)

川口。あゝいゝよ。何もおまへは知らなかつたのだ。(手紙を書き終へて)先づこれでよしと。——おまへの方の仕度はいゝかい。

ひで。待つて頂戴、着物をちやんとしますから。

川口。(カバンから紙包をとり出して)薬と云ふのは、

れだ。白いちかちかした粉だ。
ひで。効かないやうな事はないでせうね。もし効かなかつたらいゝ恥ざらしだわ。
川口。そんな事は萬々無い筈だよ。ちやんと分量を間いて置いたのだから。おまへが半分、俺が半分。おまへの方は女だから少し輕目にして置くんだ。――仕度はいゝかい。
ひで。もう飲むのですか。
川口。どうして。氣遲れでもするのかい。
ひで。でも……いゝえ。
川口。ぢや此方へおいで。此の洋燈の傍に來て。もう一度顏を見せてお呉れ。
ひで。はい。（二人はお互の顏をぢつと見合ふ。）
川口。おまへの左の眉毛の中に肉黑（ほくろ）があるね。今初めて見つけたよ。
ひで。あら、あなたの右の眉毛にも在つてよ。不思議だわねえ。

川口。二人は前世から死ぬやうに出來てゐたのかも知れない。
ひで。あなた。――
川口。何だい。――
ひで。いゝえ。何でもないの。只悲しくて。
川口。泣くのも今の中だよ。――さあ、藥を飲まうか。
二人の身體を離れないやうに結びつけて、飲んだら直ぐ床の中へ入らうね。
ひで。はい。――
川口。もう何も云つて置く事はないね。
ひで。ありません。
川口。ぢや飲まうか。
ひで。鳥渡待つて頂戴。少し前がはだけてゐるから。
川口。もう何も心殘りはないね。
ひで。えゝ。―― あの人は今時分どんな顏をしてゐるでせう。
川口。あの人つて。

ひで。私の旦那よ。どんな顔をしてゐるか見たいわ。

川口。さあ、どうしてゐるかね。

ひで。わたし今ふいとあの人が寝乍ら穏な顔をして煙草を吹いてゐる様が浮んだのよ。

川口。そん事どうでもいゝぢやないか。今になつて。もう飲んで了はうよ。

ひで。さうだわね。ぢや皆さん左様なら。

(ひで子先づ飲み、ついで川口も無言で飲む。それから燈火をふき消す。舞臺暗くなる。長い間。遠く夜の鳥が啼いて渡る。しばらくして廊下の方に足音聞え、番頭が室の外から話しかける。)

番頭。(室の外から)御免下さいまし。もうお休みでございますか。晩く誠に相濟みません。どうか鳥渡お起きを願ひたいので。まだお宿帳をつけ忘れて居りましたので、鳥渡お記しを願ひたいのでございますが。――もし〳〵、折角お休みの處をお起し申して濟みません。もし〳〵。――よつぽどよくお眠りになつたものと見える。もし〳〵、お客様恐れ入りますが鳥渡――變だな。もし〳〵――(戸を開ける)もし〳〵。鳥渡お起きなすつて下さいまし。(答なし)――變だぞ。ひよつとすると、(愕然として)――(手を叩いて)おうい。お瀧どん鳥渡灯りを持つて來な。早く、早くだよ。

(遠く「はーい」と云ふ返事の聲。暗がりの中に)

急に　幕　下りる

第二場

直ちに幕あがると、第二場となる。初めは例によりて舞臺暗黒、やがて脚光の光りと共に此處にその翌朝の場は初まる。室の中には今は只ひで子のみ横臥し、絶えず譫語(うはごと)を吐きて、苦悶する體なり。ひで子の枕頭には醫師、看護婦等附添ひたり。醫師は色々と手當を施す。番頭入り來る。

番頭。先生いかゞでございませう。一命は取りとめましたでございませうか。

醫師。さうだね。まだ何とも云へないが、ひよつとすると大丈夫かも知れない。此の人事不省の狀態が長く續くと、まづ駄目だが――。

番頭。併しこゝで死んだ方が當人のためですね。なまじ生き返るのは可哀さうでさあ。

醫師。さうかも知れんね。併し吾々の職務は職務だから、心情を汲み分けて殺すと云ふ譯にも行かない。まあ成るやうに成らして置くのだな。

番頭。さうですね。此儘殺して了ふのも惜しいし、生かすのも可哀想ですからね。併し私共の商賣から行くと、なるたけ死なしたくはないものです。

醫師。此度の事は君の處の迷惑にもなる事だが、又廣告にもなるだらう。何しろ評判にはなるだらうからな。

番頭。さうなつて呉れなくては、ましよくに合ひやしません。心中されたからつて、餘り無慈悲な眞似も出來ませんしな。――併し男女とも綺麗なので、私共も何だか小說にでもありさうな氣がして、厭な氣はしませんよ。

醫師。全く鳥渡奇麗だね。

番頭。相手の奴あ、うまくやつてますよ。何でも前からの情夫だつて云ひますがね。

醫師。さうかい。それは一種の果報者だね。――相手と云へば男の方はどうしたい。

番頭。向うの座敷に寢かしてありますが、相變らず苦しがつて居ります。

醫師。男の方が多量に飲んだらしいから、どうも助からないかも知れんな。

番頭。先生、助けるなら兩方助ける。殺すなら兩方殺すつて工合にやつて頂けないものですかな。

醫師。醫術ではさう甘くは行かんね。人情で處方箋は書けないからね。

番頭。それもさうですねえ。

（主人、臨檢の巡査を伴ひて入り來る。）

主人。こゝです。

巡査。皆に會釋をした後、（四邊を見巡して）ふむ。こゝだね。（手帳に書きとめる。）それからこゝにゐるの

が本人だね。

主人。はい。女の方でございます。

巡査。(興味を以てちらと瞥見し乍ら)ふむ。(醫師に)まだ生きてゐるのですな。

醫師。えゝ。人事不省ですが、命脈は保つて居ります。

巡査。癒りますかな。

醫師。そこの處はまだ請合ひ兼ねます。

巡査。で、男の方はどうした。

主人。向うの室に移しました。醫師の勸告に從ひまして。

醫師。精神上又治療上其方がよからうと存じましたので。

巡査。あゝさうですか。宜しい。—— で、その情死遂行の時間は何時頃だつたかね。

主人。昨夜十時頃でございます。さうだつたなあ善吉。

番頭。はい。私の起しに參りましたのが、十時半頃でしたから、多分そんな見當と存じますので、へい。

巡査。(手帳へ書きとめ乍ら)で兩人の宿泊したのは何時頃か。

番頭。左樣。かれこれ五時頃かと存じます。

巡査。泊つてから別に異狀はなかつたかな。

番頭。今から考へて見ますと、普通の連れ込みにしてはどうも樣子が變だとは思ひましたが、これ迄もよくいらしつた方で、少し見覺えもございますものですから、又だなと萬事飲み込んだ積りで通しましたのが、此の座敷でございます。今度と云ふ今度は、私の眼識(めがね)も全く失敗りやした。

巡査。それから十時まで何をしてゐたかな。

番頭。いつもの通り夕飯を上つて、——尤も酒は僅か一本でおよしになりました、——お湯に入つて、靜にお話をしてゐた位で、私どももつい粋をきかせた積りの遠慮をしてゐたものですから、別に變つた樣子も見受けませんでした。

巡査。さうか。で、どうして又その情死を發見したの

かね。

番頭。それも私の落度でして、へい、實は昨夜も申上げた通り、宿帳を附けるのを忘れましたので、それを書いて頂くために、遲くなつて此室へ來て見ますと、どうも樣子が變だから、女中を呼んで燈をつけさせて見ると、まあ此の仕末なのでございます。

巡査。うむ。さうか。だから宿帳は注意しなくちやいかん。で、本人たちの宿所姓名は解つてゐるだらうな。

主人。はい。それは此處に私へ宛てた遺書がございまして、兩人の身許が簡單に書いてあります。

巡査。どれ、見せろ。……えゝ何だと、死なねばならぬ事情有之と……色々御世話に相成り……ふむ、こんな處はどうでもいゝとして……あゝさうか。男は芝區新錢座町一三川口新吉、（手帳にかく）女は、麻布區笄町二六番地江藤利太郎方ひでと。（書く）——この各々の實家へはそれぞれ知らせでもしたか。

主人。昨夜の中に電報を打たせました。やがて誰かゞ來るでございませう。

巡査。さうか。では追つて其時調べるとしやう。

（女中急いで入り來る。）

女中。あの先生。あちらの病人の樣子がどうも變でございますから、すぐいらしつて下さいつて。

醫師。さうか。（立上る。）男の方は危いかも知れないのです。

巡査。さうですか。おや向うへ行つて見ませう。

主人。ではどうかこちらへ。

（主人、醫師、巡査、番頭、女中皆出て行く。長い間。暫くすると、女中に伴はれてひで子の旦那、江藤が急いで入つて來る。）

女中。こちらでございます。

江藤。（いきなり枕許に近よりて）おゝ、まだ息があるのだな。助かりますか、看護婦さん。

看護婦。先生は助かるかも知れないと仰つてゞございます。

江藤。何か云つてゐるやうですね。唇を動かしてゐますよ。

看護婦。何も仰つてゐるのではございません。尤も先刻までは色々な譫言を仰いましたが。——

江藤。(少し躊躇して)ど、どんな事を申しましたか。

看護婦。川口さんとやらの名を呼びつゞけでございました。

江藤。さうでしたか。

看護婦。それから旦那様に濟まない／＼と時々仰つてゐた様でございます。

江藤。さうですか。濟むも濟まないも、こんな事をして呉れた後では、仕方がありませんよ、ねえ。

看護婦。ほんとに御氣の毒様でございます。御心持はお察し致しますわ。

江藤。皆さんさう仰つて下さいますけれど、陰では嘲や間抜けな男だと、嗤つてゐることでございませうな。が、併し、それも仕方がありません。かう云ふ女を棄て得ないのが私の因果で、惚れた男心の馬鹿らしさですからな。

看護婦。さぞ憎らしいとお思ひでせうねえ。

江藤。それが耻かしい話ですが、私はどうしても此の女を憎めないのですよ。成程、初め知らせを聞いた時には、出し拔かれて腹も立ちましたが、どう云ふものだかそれつきり憎く思へないのですね。男の甲斐性がどこか缺けてゐるのかも知れません。汽車で此處まで來る道々も、憎い、踏みつけても飽き足りない、と云ふやうな心持を引立てゝ、恨みつらみの數々を云ふ氣でゐても、此處へかうして來て見ると女の生きてゐた事が、何より嬉しいと云つた始末です。いやはや、吾乍ら不甲斐なさに腹が立ちますよ。

看護婦。御尤もでございますね。

江藤。かう云ふと何だか一種の負け惜しみのやうですがね、看護婦さん、私は一體これが今の男と出來てゐるのは、前から承知してゐたのですよ。承知はして

ゐたが、そこは私の度量で許してゐました。實は今に目がさめて、私のほんとの愛情に歸るだらうと、たかを括つてゐたのです。まさかこんな事にならうとは、全く思ひもかけなかつたのですが、こんな洒落た眞似をするといふのは、ちよつと小憎らしいぢやありませんか。だが私は何だか憎いよりは、却つて可愛らしい氣がしてならないです。これと云ふのも惚れぬいた、男心の馬鹿らしい處なんでせう。はゝゝゝ。

看護婦。(仕方なしに)さやうでございますかねえ。

江藤。まあいゝ。他人は何と嗤つても、私は此の女の主人に違ひないんだから。

(間。女中入り來る。)

女中。(小聲で)看護婦さん。あちらの男の方はとうとう駄目でございました。只今息を引とつたらしうございます。

看護婦。まあさうですか。(暗然とする。)

江藤。死んだのかい。さうかい。可哀想だね。(間)おひでは死なしたくないものだ。今死ぬ方が當人に幸福かも知れんが、私はもう一遍生かしたい。而して立派に江藤の家のものとして死なしたい。

看護婦。この方はきつと助かりますわ。

江藤。(獨語のやうに)さうだ。きつと生かして見せる。生かして、やがて私のほんとの愛を受けさせてやるのだ。

舞臺暗くなり、速に　幕　下りる

第三場

幕直ちに上がる。暗の中から徐ろに次の場を照らし出す。前場から數日を經たる、よく晴れし秋の晝にて、室中の病床は既に撤せられあり。

舞臺にはひで子の實母おたみ、一人で物など縫ひ居る。女中茶器を持ちて入り來る。

女中。奥さまはどちらですか。

たみ。お湯に行きましたよ。二三日前までは人に顔を

見られるのが耻かしいなぞと云つて、夜晩くか何かでなければ、お湯に入るのさへ厭がつてゐましたが、今日はどうしたのか、い丶鹽梅に一人で行つたのですよ。

女中。おや、さやうでございますか。それは結構でございますね。何しろこんなに早く快くおなりになるとは思ひませんでした。

たみ。ほんとですねえ。正氣づいてからはめそ〱泣き續けで、此分なら又すぐ死んで了ひでもするかと思ひましたつけが、皆さんの御親切な介抱で、もう大丈夫でございます。

女中。もうお身體の方は大丈夫ですけれど、お心持から申しましたら、さぞお辛いことでせうねえ。

たみ。何もかも忘れて了へばい丶のですよ。本人もやつとその氣になつて呉れたやうです。これで尼寺へ入つて尼になるなぞと云はなくなれば、もう大丈夫ですがねえ。矢張り死んだ男の事が氣になると見えます。

女中。それも無理はありませんわ。いくら忘れろと云つたつて。忘れられるものぢやございませんもの。

たみ。でもその忘れられない處を忘れなければ、これからの境涯は生きられませんよ。

女中。だからなほお可哀さうですわねえ。

たみ。それでもよくあなた方は、あれの方に同情して下さいますのねえ。私不思議でなりませんわ。私は只心中した二人よりも、江藤の旦那が一番お氣の毒に思ふのですけれど。——

女中。旦那様と云へば旦那様も變つた方でございますわねえ。さう申しちや失禮でございますけれど、よほどあの方を深く思つておいでだと見えますね。でなければあ丶平氣でお許しになる譯がございませんもの。

たみ。ほんとに旦那様はお心の廣い方ですよ。ひでなぞも初めから大人しくあの方に頼つてゐればよかつ

たのです。あゝ云ふ方がほんとの男ですよ。
女中。さうでせうかねえ。
たみ。さうですとも。
女中。で、奥様は又あそこへお歸りになるのでございますか。
たみ。それを何とも云はずに歸らして下さるから、お偉いと申すのですよ。
女中。さう云へばさうですけれど。――で、奥さまもお歸りになる氣でせうか。
たみ。さあ、それが困りものですよ。大人しく歸つて呉れゝばいゝと思つてるのですがねえ。
女中。さやうですねえ。(間)
たみ。二三日の間にこゝらの山もすつかり紅葉して了ひましたね。
女中。さうですね。それにいゝ御天氣ですこと。――あゝつい長話をして御邪魔致しました。
たみ。いゝえ、どう致しまして。私も退屈してゐるのですから。又お話にでもいらして下さい。
女中。難有う存じます。では御免下さいまし。(去る。)
(入れ違ひにひで子登場。)
たみ。割りに早かつたね。
ひで。だつて人が入つて來るんですもの。
たみ。でもお湯に入ると、いくらかさつぱりおしだらう。
ひで。えゝ今日は大變氣分がいゝの。
たみ。さうかい。それはよかつたね。お母さんもおまへがさうして早く元氣になつて呉れたので、大變安心しましたよ。
ひで、あのねお母さん。
たみ。何だい。
ひで。私もうよくなつたから、早く此處を去きませうよ。私もう今にもどこかへ行きたいの。――どこか人の知れぬ處へ。而して百姓でも内職でも何でもして、人手を借りずに食つてゆくのよ。ね、いゝでせ

う、お母さん。

たみ。おまへの今の心持では、そんな事も考へられるだらうけれど、迚も出來る事ぢやないよ。それよりか又思ひ直して、もう一度江藤さんへ歸る氣はないかい。わたしは此間からさう思つて、おまへに勸めやう／＼と思つてゐたのだよ。

ひで。だつてお母さん、いくら何でも歸れないぢやないの。そんな事をする位なら死ぬ方が增しだわ。

たみ。と云ふのはおまへ江藤さんが死ぬほど厭だと云ふのかい。

ひで。いゝえ、さうでもないけれど。今更のめ／＼歸るなんて、そんな圖々しい眞似をするのが、いくら何でも私には出來ませんわ。

たみ。それぢや江藤さんが許して下すつても、歸る氣はないのだね。

ひで。許して下さるつたつて、心から許して下さる譯がないぢやないの。もしか許して下さると云つても、それは今迄の意地か、それでなければ計略だわ。許して私を歸らして置いて、きつとひどい目に會はせるのだわ。——どうしても私行かなくつてよ。

たみ。さうおまへも强情では困るねえ。どうせ死んだ身だと思つたら、もう一度歸つたつていゝぢやないか。

ひで。どうせ死んだ身だと思へば、どんな苦勞をしてでも獨りで生きて行けてよ。

たみ。そんなに厭ならたつて勸めはしないけれど——まあよく考へてお吳れよ。

ひで。幾度考へたつて同じですわ。

（二人は思ひ／＼の沈默に陷る。長い間。暫くすると廊下に足音聞え。女中入り來る。）

女中。あの只今江藤の旦那樣がお着きでございます。

たみ。おや、さうですか。

ひで。あら、どうしませう。わたしお目にかゝりたくないわ。お母樣、どうしませう。

たみ。そんな事云つたつて仕方がないぢやないかね。一と思ひに會つてお詫びをして了つた方が、いくらいゝか解らないよ。おや、さう云ふ中においでのやうだよ。

（ひで子、行き場を失してうつむいた儘座つて了ふ。江藤快活に入り來る。）

江藤。いや、今日は。急に思ひ立つてやつて來ました。

たみ。ほんとによくいらつしやいました。

ひで。（默つて下を向いた儘お辭儀をする。）

江藤。ひで子もすつかり快くなつて結構だね。どうだい。もう家へ歸れるだらう。お母さん、私は今日何ならひで子を連れて歸らうと思つてやつて來たんですがね、どうでせう。山の中にくよ／＼して許りゐたつて初まらないし、東京でも何やかやで矢張り不自由ですからね。歸れたら歸つて貰ひ度いんだがなあ。どうだいひで子。

ひで。私お宅へは歸れません。

江藤。なぜ。

たみ。そんな强情お云ひでないよ。

ひで。でも私歸れません。

江藤。そんな事云はずにお歸りよ。私が賴むからさ。どうか歸つてお呉れ。私が可哀想ぢやないか。

ひで。…………。

江藤。此の通り手をついて賴むよ。どうか歸つてお呉れ。おまへがゐなくては、私は生きてゐられないやうな氣がするんだ。

ひで。（決然と）ぢや今迄の事は何とも仰らないで下さいますか。

江藤。そんな事を私が氣にかけるものかね。

ひで。私はあの事を詫まりも何も致しませんよ。それでようござんすか。

江藤。いゝともさ。

ひで。そしてあの事のために、これから身がひけるやうな事があつちやあ厭ですよ。

江藤。そんな事があるものか。決して無いよ。私はもと通りお前を待遇するよ。

ひで。ほんとですか。

江藤。ほんとうとも。まだ疑つてゐるのかい。お前ももつと素直になつて呉れたらいゝぢやないか。而してもつと素直に人の親切を受けて呉れたらいゝぢやないか。おまへはまだ僕のこの心持に、何か魂膽があるのだとでも思つてるのだらう。それでこの男の心と云ふものが、どんなに大きいものだと云ふ事が解らないのだらう。下らない邪推や、見えを棄てゝ、素直な心に歸つて私の腹を見てお呉れ。そしたらそんな下らないさぐりや、條件なぞは入れられない筈だよ。

ひで。濟みませんでした。私、生れ返つた積りで、もう一度お傍へ歸つて見ます。

江藤。さうか。歸つて呉れるか。それで私も安心したよ。歸つて厭だつたら又出るさ。尼になるのはそれからでも遲くはない。

たみ。やつとこれで私も安心しました。

ひで。けれどもまだ、ほんとに私にはお心持と云ふものが解りません。

江藤。なあにもつと後になつて見れば解るさ。――さうさな。もう二十年も經つたら、おまへにも少しは飲み込めるだらう。其時になつて初めて、どつちが眞實の勝利者だつたかゞ解るのだからな。

（二人の女は江藤の言葉を解し兼ねて、ぼんやり男の顏を眺むるのみ。）

舞臺だんだんに暗くなりゆき、暗の中に 幕 下りる

第三幕

舞臺は第一幕と同じ。時は第一幕の翌朝。幕あくと江藤夫妻は茶を喫しながら話をしてゐる。

江藤。昨夜はよく寝られたかね。

ひで。そんなによくは寝ませんでした。

江藤。私はよく寝た。久しぶりでよく寝たせいか目が

はつきりして、遠くの山までありありと見えるやうな氣がする。

ひで。まさか。――朝で空氣が澄んでゐるせゐでせう。

江藤。大方さうだらう。がわしにはどつちでもいゝ。――此分では今日の湖水行は大當りだぜ。紅葉はまだ淺く染まりかゝつただけで、毒々しい色はないし、空が澄んでゐるから、水も澄んでゐるだらうし。今日は一つ思ひきり澄んだ心持になり切るかな。

ひで。人間いつもさう云ふ心持でゐられたらようございませうねえ。

江藤。なかなかさうは行かんて。――が、さうは行かない處が人間の味だ。人間はいくら年をとつても、矢張り煩惱は脱れられないよ。いくら靜かな心でも曇る。

ひで。だから私をこんな處へ連れて來る氣になるんだわねえ。あなたはこんな處へ來て、それで氣持がよくつて。

江藤。さうさな。實を云ふとさういゝと云ふ譯ではない。

ひで。それ御覽なさい。

江藤。だが俺はもうすつかり靜かな氣持で、此處が見物できるやうになつてゐたと思つたのだ。老將軍が古戰場を見舞ふやうな心持でな。

ひで。ところがさうなれなかつたのでせう。

江藤。まだもう少し。――このもう少しがなかなかだ。

ひで。でもよく寢られゝば結構だわ。

江藤。寢られると云つても、老人の眠りは淺いものだからね。朝方になつてから。下の深川の音が耳について困つた。

ひで。水の音位で寢られないなら結構だわ。

江藤。ぢや矢張りおまへは昔の幽靈に惱まされたのだね。

ひで。だつて女ですもの。それにあなたと違つて、私はあんな事をした當人なんですもの。

江藤。昨日の按摩の話は面白かつたね。俺はまるで他人の事のやうに聞くことができたよ。

ひで。わざと白らばくれたりなすつて、惡るい冗談ですよ。私のやうに嘘にでも寢て了つた方がいくら罪が輕いか知れません。

江藤。それもさうだね。さう云へば此處へ來てからの勝負では、俺はどうやらおまへに敗けてるやうな氣がする。矢つ張り俺は弱かつた。强ゐて虛勢を張つてゐても、張り通す譯には行かないらしい。俺はもつと勝利者の快感で、此處の景色が眺められるつもりで來た。

ひで。あなたは昨日私を此處へ連れて來るのを前から計畫してゐらしたのね。

江藤。いや、昨日の朝ふいと思ひついたのだ。一つ老後の冒險をして見やうとな。

ひで。なぜ來る前に私にさう云はなかつたの。

江藤。云ふと面白くないと思つたからさ。

ひで。いゝえ。云へなかつたのでせう。でなければ云ふと私が來ないとでも思つたのでせう。

江藤。なか〳〵機鋒鋭どくやつて來るね。そんな事どつちでもいゝぢやないか。

ひで。いゝけれど、あなたの遣口が少し卑怯めいて見えますからさ。

江藤。これは一本參つた。

ひで。だからもうこんな老人の冷水はおよしなさい。あなたは矢張り宅で碁でも靜かに打つてるに限りますよ。——私だつて何だか心の底を試されてるやうで無氣味ですわ。

江藤。ぢや序でにもつと試めしてやらう。——おまへはまだあの男の事を思ひ出すかね。

ひで。(わざと白らばくれて)あの男つて誰。ちやんと名をお云ひなさいよ。

江藤。あの川口とか云つた男さ。無遠慮に云ふと、おまへが心中して殺した男さ。

ひで。やつと今になつて二十年來の本音が出たのね。あなたはあれ以來一度もあの人の事をきゝなんぞしなかつたわ。心では矢張り聞きたかつたでせうね。

江藤。死んだんだから氣にもしなかつたさ。生きてゐれあ無用心だがね。

ひで。死んだんだから、私は氣にしたわ。

江藤。矢つ張り滋々と思ひ出したかい。

ひで。えゝ滋々思ひ出してよ。町の人混みで似た人を見つけたり、夢の中で會つたり。

江處。そんなに度々會つたのかね。

ひで。あの一二年後は暗がりをぢつと見凝めてさへゐれば、あの人の顏が浮んで來ました。此頃ではすつかり忘れて了ひましたけれど。——

江藤。昨夜は見なかつたかい。

ひで。見ようとして見ましたが、忘れたと見えてどうしても思ひ出せませんでした。私も耄碌しましたわね。

江藤。何しろ古い事だからねえ。俺たちが先づ平氣で話が出來る位古い事だからねえ。

ひで。一體私はあの時死んで了つた方が幸福だつたのでせうか。かうしてあなたと一緒になつてゐる方が幸福だつたでせうか。

江藤。さあ、俺にはどつちだか解らないね。おまへはどう思ふ。

ひで。私にも解りませんわ。——人の一生なんて解らないものだわね。けれども解らないなりに、いろいろな思ひをして來たから、それでいゝのかも知れませんわね。そこが幸福と云へば幸福ですわ。

江藤。先づさう諦めて置くさ。ずつと通り過ぎて見れば、不幸も不幸でないし、幸福も幸福ぢやない。

ひで。ほんとですわねえ。

（洗濯婆お兼廊下より入り來る。）

お兼。御免下さいまし。今日はよいお天氣でございます。私が廿年前にこゝにゐた者でございますが。何

か御用でもございますか。

ひで。あら、お兼さんぢやないの。

江藤。あの時の女中さんぢやないか。珍らしいね。まあお入んなさい。

お兼。あら、あの時の、まあ、旦那さまでゐらつしやいましたか。奥さんも。ほんとにまあお珍しい。

ひで。さあそんな處にゐないでまあお入んなさいよ。でもよくまあ思ひ出したわねえ。

お兼。いえ〱、忘れるものですか。餘り突然なので、ちよいと解らなかつたのでございますよ。覺えて居りますとも、はい。よく覺えて居ります。

ひで。あなたも隨分變つたわねえ。それでもどこかに昔のお兼さんが殘つてますよ。

お兼。あなた方こそお變りなさいましたよ。名乘つて頂けばさうと解りますけれど、道でお出會ひしたつて迚も解りやしませんわ。

江藤。俺だちも年を取つた。取りすぎる位取つた。

お兼。それでもよくいらつしやいましたねえ。お二方揃つていらつしやるなんて。——

江藤。不思議に思ふ位だらう。

お兼。全くでございますよ。

江藤。昨夜按摩が來て俺たちの事を話して行つた。まるで他人(ひと)事のやうだつた。

お兼。まあ左樣でございますか。

江藤。そして俺たちの事を、どうせ末永く添ひ遂げやしなかつたらうと云つて行つた。——おまへさんもあの當時、さう思つたらうね。而して俺を此上ない馬鹿な男のやうに思つたらうね。

お兼。さうでしたね。そんな風に思つたかも知れませんね。私も若うござんしたから。

江藤。今の俺たちを見てどう思ふかね。

お兼。お幸せな方々だと思ひますわ。

江藤。人が幸福と見て呉れゝば、それで俺の本望は遂したわけだ。

ひで。ではあなたは二十年前の汚名を雪ぎにいらした譯だわね。

江藤。さう見てもいゝさ。

お兼。二十年振りで御覽になつたら、此處の景色も格別でございませうね。

江藤。悲痛な意味で曾遊の地だつたのだから、少くとも俺だけには意味が深いさ。

お兼。どんなお心持でせう。

江藤。さあ、說明が出來ないね。敗軍の將があとで戰爭の在つた場所を見渡すやうなものかね。

ひで。嘘仰しやい。凱旋の將がでせう。

江藤。それでも同じことだ。この場合昔の勝敗は問題ぢやないからな。

お兼。なぜもつとお早くいらつしやらなかつたのでございますか。

江藤。來たいけれど來られなかつたのだよ。やつとの思ひで昨日來た譯だ。これでも少々早過ぎたと思ふ位ゐだ。まだ悟りが足りないのだよ。

ひで。でも來てようござんしたわ。幾分か私も人間と云ふものゝ悟りが開けたから。

江藤。漫然と景色だけ見て歸つたにしても、來たゞけの事はあらうと云ふものさ。

ひで。是から私ゃ落ついて山でも見ませう。

お兼。あの今日は湖水の方へでもいらつしやるのでございますか。

江藤。あゝ行く。先刻駕籠を頼んどいたから、もう來る筈だ。

お兼。今度は長く御逗留でございませうね。

ひで。いゝえ。すぐ歸る積りですよ。此處でするだけの事はしたのですから、もう澤山なんです。

江藤。いづれ又五年も經つたら來るからね。その時は大いに昔話でもしやうや。

お兼。昔話はようございますね。

江藤。その中にあんな事も立派な昔話になるよ。さう

すると本卦踊りをした子供が、それを聞き乍ら安らかな眠りに就くんだ。―― むかし／＼或る處に若い男と女とが居りました。するとその女にもう一人の男が思ひついて、金の力で自分のものにして了ひました。さあ思ひ合つた同志は其儘別れてはゐられません。或夜二人は相談して、或る溫泉場に參りました。而してとう／＼毒藥を飲んで心中して了ひました。

ひで。それから。――

江藤。ところが氣の毒にも、意久地のないのは第三の男でした。そんな踏み付けな行ひをされても、惚れた弱味で怒ることも、憎むこともできませんでした。男はすぐに女の罪を許しました。いや許るしたのではなくて、罰することすら出來なかつたのかも知れません。兎に角意久地のない腑ぬけな野郎でした。

ひで。それから。――

江藤。まあお聞きよ。―― 彼は却つて願ふやうにして女に歸つて貰ひました。而して前にも增して女を可愛がりました。がとう／＼女もその男の愛が解(わか)つて逆に惚れて來るやうになりました。而して不思議な事には、その意久地のない男が、最後の勝利を占めて了ひました。話と云ふのは是でお終ひ。

ひで。まあ馬鹿々々しい。

江藤。このお終ひの方は少し誇張があるがね。それはお伽噺の性質上さう云はなければ、「落ち」にならないのだ。

ひで。そこが落し噺と眞實の話との違ひですわね。

江藤。(笑ひ乍ら)何とでも云へ、おたふくめ！

お雁。まあ、あんな事を仰つて。――

江藤。どうだい。いゝお噺だらう。

お雁。ほんとに結構なお噺でございますわ。

江藤。(妻に)それ見ろ。おまへなぞにはかう云ふ噺の難有味が解らないのだ。

ひで。なぜでせう。

江藤。女だからさ。(もう一度力を入れて)女だからだよ。

(番頭急いで入り來る。)

番頭。どうもお待遠さまでした。只今お駕が參りました。

江藤。さうかい。——どれ、一つ湖水でも巡つて來やうか。今日はいゝ天氣だなあ。

番頭。全く御見物には持つて來いのお天氣でございますよ。へい。

江藤。ぢやあおひで、おまへもお仕度をおし。

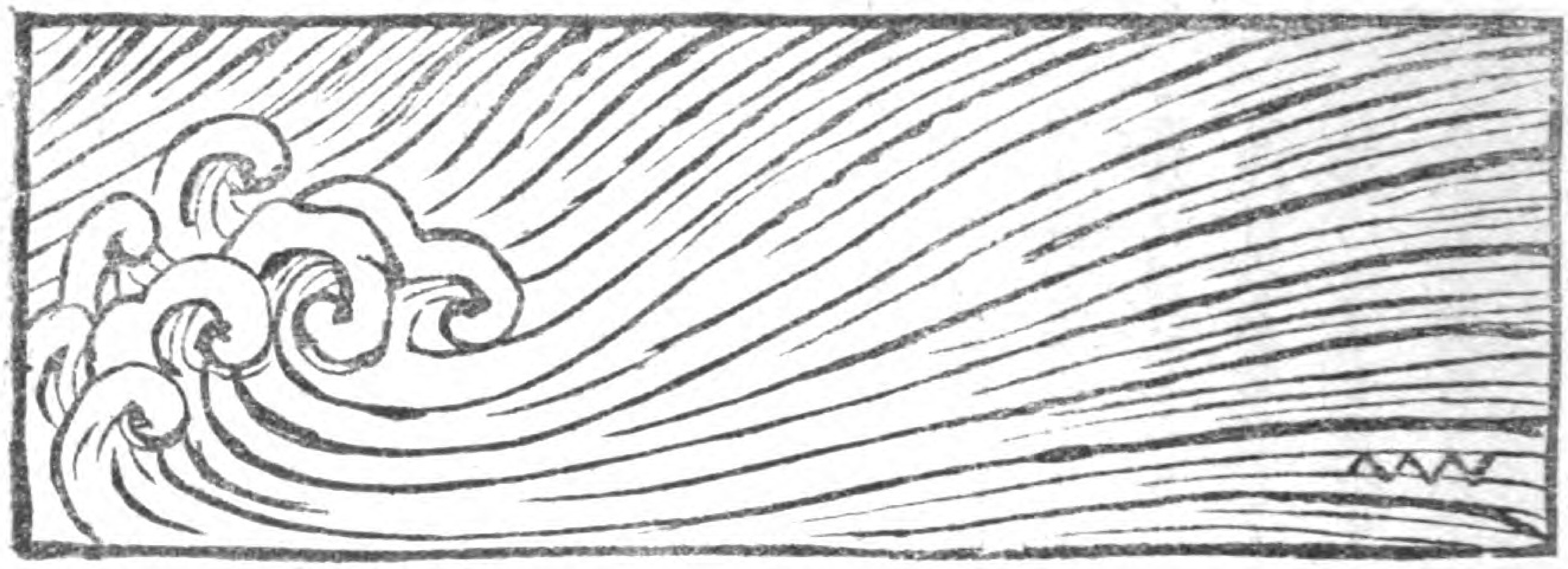
ひで。(おとなしく)はい。

(二人は徐ろに立ち上がる。)

靜かに 幕

——(大正六年八月稿)——





實驗室

有島武郎

兄と彼れとは又同じ事を繰返して云ひ合つてゐるのに氣がついて、二人とも申合せたやうに押默つた。

兄は額際の汗を不愉快そうに拭つてせはしく扇をつかつた。彼れは顯微鏡のカバーの上に薄らたまつた埃を隻眼で見やつて、實驗室に出入しなかつたこの十日間程の出來事を、涙ぐましく思ひかへしてゐた。

簡單に云ふと前の日の朝に彼れの妻は多量の咯血をして死んでしまつたのだ。妻は彼れの出勤してゐる病院で療治を受けてゐた。その死因について院長をはじめ醫員の大部分は急激な乾酪性肺炎の結果だらうと云ふに一致したが、彼れだけはそう信ずる事が出來なかつた。左肺が肺癆に罹つて大部分腐蝕してゐるのは誰れも認めてゐたが、一週間程前から右肺の中葉以上に突然起つた聽診的變調と、發熱と、腹膜肋膜の炎症とを綜合して考へて見ると粟粒結核の結果に相違ないと堅く信じたのだ。咯血が直接の死因をなしてゐると云ふ事も、

病竈が血管中に破裂する粟粒結核の特性を證據立てゝゐるやうに思はれた。病室で死骸を前に置いて院長が死亡屆を書いてくれた時でも、院長は悔みや手傳ひに來た醫員達と熱心に彼れの妻の經過を論じ合つて、如何しても乾酪性肺炎の急激な場合と見るのが至當で、斃れたのは極度の衰弱に起因すると主張したが、彼れはどうしても腑に落ちなかつた。妻の死因に對してさへ自分の所信が輕く見られてゐる事は侮辱にさへ考へられた。然し彼れは場合が場合なのでそこに口を出すやうな事はしなかつた。而して倒さに着せられた白衣の下に、小さく平べつたく、仰臥さしてある妻の死骸を眺めて默然としてゐた。

默つて坐つてる中に彼れの學術的嗜欲はこの死因に對して激しく働き出した。自分は醫師であり又病理學の學徒である。自分は凡ての機會に於て自己の學術に忠實でなければならない。こゝに一個の死屍がある。その死因の斷定に對して一人だけ異説をもつものがある。解剖によつてその眞相を確める外に途はない。その死屍が解剖を不可能とするのなら是非もないが、夫れは彼れ自身の妻であるのだ。眞理の闡明の爲めには他人の死體にすら無殘な刄を平氣で加へるのだ。自分の事業の成就を希ふべき妻の死體を解剖臺の上に運んで一つの現象の實質を確定するのに何の躊躇がいらう。よし、自分は妻を學術のために提供しやう。そう彼れは思つた。暫く考へてから彼れは上の考へにもう一つの考へを附加へた。妻は自分が解剖してやる。同じ解剖するなら夫に解剖されるのを妻は滿足に思ふだらう。自分としては自分の主張を實證するには自分親ら刀を執るのが至當だ。その場合解剖臺の上にあるものは、親であらうが妻であらうが、一個の實驗物でしかないのだ。自分は凡ての機會に於て學術に忠實であらねばならぬ。

彼れは綿密にこの事をも一度考へなほした。彼れにはそこに一點の非理もなかつた。しつかりとさう決心が出來ると、彼れは夫れを院長に告げて許可を受けた。その晩彼れは親族兄弟の寄合つてゐる所で所存を云ひ出した。云ひ出したと云ふより宣告した。親族は色々反對したが甲斐のないのを知ると、せめては肺部丈けの解剖にしたらどうだと云つた。若し死因が粟粒結核なら他の諸機關も犯されるのだから肺部だけですますわけには行かないと彼れは云つた。夫れなら他人に賴んでして貰へと云つた。彼れは自分のするのが一番いゝんだと云つた。そんな不人情がよくも出來るものだと涙を流して口惜しがる女もゐた。彼れは妻の介錯は夫がするのが一番いゝのだと云つて動かなかつた。妻の里の親達は勿論、親族の大多數は、その場の見えばかりからでも、彼れの決心に明らさまに反對な色を見せた。學術に對する俗衆の僻見をこれほど見せつけられると、彼れは意地にも初一念を通さずには置けなかつた。而して妻は自分に嫁いだ以上は自分のものだから、その處置については他人を煩はさないと云ひ切つてしまつた。列坐の人々は呆れたやうに口をつぐんだ。

愛惜を盡かした人々の中に、彼れの兄だけは何處までも彼れの決心を飜へさうとした。今朝も兄はわざ〳〵彼れの實驗室までやつて來て、色々と話し合つてゐたのだ。

「お前は自分の生活と學術とどつちが尊いと思つてゐるんだ」

兄は扇をたゝむと、粘氣のある落付いた物言ひをして又こう論じ始めた。彼れは顯微鏡のカバーの上の埃から物惰氣に眼を兄の方に轉じた。

「僕は學術を生活してゐるんです。僕の生活は謂はゞ學術の尊さだけ尊いんですよ。……もういくら、

じたつて同じぢやありませんか」

そう云つて彼れは立上つた。而して壁際のガラス張りの棚の中から、ミクロトームのメスを取り出して剃刀磨にかけ始めた。滑らかな石磨に油を滴して、その上に靜かにメスを走らせながら、彼れは刃物と石との間に起るさゝやかな音にぢつと耳をすましてゐた。手許から切先まで澄み切つた硬い鋼の光は見るものを寒く脅かした。兄は眼をそばたてゝ、死體にしろ妻の肉に加ふべき刃を磨ぎすます彼れの心を惡むやうに見えた。

「そんなものを使ふのか」

彼れは磨ぐ手をやめて、眼近くメスを見入りながら、

「解剖に使ふんぢやない、是れはプレパラートの切片を切る刃物です。慣れつてものは不思議で磨いでると音で歯の附具合が分りますよ。生物學者は物質的な仕事が多いので困る」

「俺れはこの際になつてもお前の心持ちにはどこか狂つた所があるやうに思ふがな。お前は今學術を生活するんだと云つたが、自然科學は實驗の上にのみ基礎を置くのが立場だのに、生活は實驗ぢやないものな。話があんまり抽象的になつてしまつたが、お前は妻の肉體に刃物を加へてどこか忍びない所がありはしないかい。少しでもそんな心地があつ……」

そこに小使が這入つて來て、死亡室に移してある彼れの妻の處置を如何したらいゝかと彼れに尋ねた。九時から解剖をするからすぐ用意をして置けと彼れは命じた。兄は慌てゝそれはもう少し待つてくれと云つたが、彼れは敵意に近い程な激しい態度で兄の言葉を遮りながら小使を死亡室に走らした。

兄は歎息して默つてしまつた。彼れも默つた。部屋の隅の瀬戸物の流槽に水道の龍頭から[illegible]水[illegible]けがさやかに聞えた。病院の患者や看護婦の騒がしさも、研究部の彼れの實驗室の戸の内には押よせなかつた。彼れは解剖後の研究に必要な用意をするために忙しかつた。整溫器にパラフィンを入れてアルコール、ランプの灯をともしたり、ヘマトキシリン、イオシン、ホルマリン、アルコホール、クロロホールム、石油ベンジンなどの小瓶を順序正しく盆の上に列べたり、〇、一〇ミクロの切片を切り出すやうにミクロトームを調節したり、プレパラート、グラスをアルコホルに浸したりしてゐる中に、暫く打捨てゝあつた習慣が全く元にもどつて、彼れは研究者の純粹な心持ちに這入つて行つた。彼れの前にもう妻はなかつた。興味ある患部の縱斷面や横斷面が想像によつて彼れの眼の前にまざ〳〵と見えるやうだつた。半ば化膿した粟粒が肺の切斷面や腹膜やに顯著に見られたら愉快だらうと彼れは思つた。先刻から考へる力を失つたやうに默つたまゝ、うつむいて、扇をつかつてゐる兄が弱々しい殉情の犧牲の如くに憐れまれた。

眞黑に古びてはゐるが極めて正確な懸時計の針が八時五十分を指した時、小使がまた現はれて解剖室の用意が出來てゐる事を報告した。彼れは一種の勇みを感じた。上衣を脱いで眞白な手術衣に手を通しながら、

「兎に角仕度が出來てしまつたから僕は行きます。人間はいつか死ぬんですからね。死んでしまへば肉體は解剖にでも利用される外には何の役にも立ちはしないんですからね。Y子なんぞは死んで夫に解剖されるんだから餘榮ありですよ。……兄さんはすぐお歸りですか。お歸りなら葬式の用意を……」

「俺れは立合はせて貰はう」

この兄の言葉は彼れにも意外だつた。「どうして」とその理由を聞かずにゐられなかつた。

「お前と俺れとは感情そのものが士臺違つてしまつたんだ。假りにも縁があつて妹となつてくれたものを、お前はじめ冷やかな心で品物でも取扱ふやうに取扱ふ人達ばかりに任せて置く氣にはどうしてもなれないんだ。お前はお前で、お前の立場を守るのなら、それを俺はもうどうとも云はないが、俺れの立場もお前は認めてくれていゝだらう」

「無論認めますがね、解剖と云ふものは慣れないと一寸我慢の出來ない程殘酷に見えますよ。それでよければいらつしやい」

そう云つて彼れは兄にも手術衣を渡した。

死體解剖
三谷
9h. A. M.
Aug. 2.
關口 花田 } 内科解剖室ニテ

と彼れ自身が無造作に書いた半紙の掲示が、廊下をふきぬける風にそよいでゐるのを見て、二人は廊下の出口で解剖室用のスリッパに草履をはきかへた。薄暗く冷たい準備室に兄を待たして、彼れは防水布の胸あてをし、左の手にゴムの手袋をはめた。兄弟は互に顔を見合せて、互にひどく血色が惡いと思ひ

合つた。

不思議な身ぶるひが彼れを襲つた。彼れはいつの間にか非常に緊張してゐた。手を擧げて眼の前にもつて來て見ると、いつになく震へてゐた。意志の强い彼れはそれを不愉快に思つた。而してたしなめるやうに右手を二三度嚴しく振りまわしてから、解剖室に這入つて行つた。

解剖臺の二つ置いてある廣やかな解剖室の白壁は眞夏の朝日の光と、靑葉の射翠とで靑み亙るほどに淸々しく準備されてゐた。助手と見學の同僚とが六人ほど彼れの來るのを待ちかまへてゐた。あるものはのどかに煙草を燻らし、あるものは所在なげに室の中を歩きまはつてゐたが、這入つて來た彼れの姿を見ると一寸改つて挨拶した。

一體彼れは醫者に似ず滅多に笑はない口少なゝ男だつた。内科の副醫長の回診だと云ふと、看護婦などはぴり／＼した。人をおこりつけるやうな事は絶えてしなかつたが、彼れは何處にも他人を寄りこませるやうな隙を持つてゐなかつた。高い額と、高く長い鼻と、せばまつた眉の下でぢつと物を見入る大きな隻眼とを持つた彼れの顔は、その日は殊更らに緊張してゐた。何所にか深い淋しさを湛へた眞劍な表情は、この晴れやかな解剖室を暗くするやうにさへ見えた。

彼れは兄に椅子を與へて置いて死屍の乘つてゐる解剖臺のそばに來た。若い二人の醫學士は煙草を窓からなげ捨てゝ、机について記録の用意をした。見學の人達もそろ／＼臺のまわりに集つた。彼れは二人の助手と二人の記錄者とに「今日は御苦勞を願ひました」ときつぱり挨拶して解剖臺の上に鋭い眼をやつた。死んだ妻の前に立つ彼れを思ひやつて、急にヒステリックにむせび出した二人の看護婦の泣き聲

が後ろで聞えた。

　無造作に死體を被つた白衣の上には小さな黑い汚點のやうに蠅が三四匹とまつてゐた。枕許には型の如く小さなカードが置いてあつた。彼れは夫れを取上げて讀んだ。

三谷Y子。二十歳。八月一日午前七時死亡。病症、乾酪性肺炎。

三谷Y子――その名は彼れの胸をぎゆつとえぐるやうに彼れの網膜に寫つた。彼れは然し自分の感情を人に氣取られるのを厭つた。彼れはせき込む感情を、强い事實で拂ひのけるために死體から白衣を剝いで取つた。

　昨日まで彼れの名を呼び續けに呼んで、死にたくないから生かしてくれ／＼と悶え苦んだ彼れの妻は、悶えた甲斐も何もなく瘦せさらぼへた死屍となつて、彼れの眼の下に仰臥してゐた。顏と陰部とを小さなガーゼで被ふてある外は、死體にのみ特有な支那の桐油紙のやうに鈍い冷たい靑黄色い皮膚が溢れるやうな朝の光線の下に曝されてゐた。永く湯をつかはなかつた爲めに足の裏から踵にかけて、痂のやうに垢がたまつてゐた。肉が落ちたので、手足の關節部は、骨瘤のやうに氣味惡く眼立つてゐた。肺癆に罹つてゐた左胸は右胸に比べると格段に小さくなつてゐた。

　見學の人達は好奇な眼をあげて彼れの顏に表はれる感情を窃かに讀まうとした。彼れの隻眼はいつものやうに銳く輝く外には、容易に自餘の意味を語らなかつた。彼れは冷靜な明瞭な獨逸語で死體の外貌上の報告をしはじめた。彼れの手は冷たい死體の皮膚を蠅を追ひながらあちらこちら撫でまわした。記錄者はフールスキャップに忙しくペンを走らせた。其音だけが妙に際立つて聞えた。

「メス」

彼れのこの一言に、室内は一時小さくどよめいた。助手の一人は解剖臺に取のけてある龍頭をひねると、水は氷柱でもつるしたやうに音もなく磁器製の解剖臺に落ちて、小さな幾條かの溝を傳つて、中央の孔から床の下に流れて行つた。一人の助手は黒塗りの滑らかな臺を死體の兩脚の間に置いた。看護婦は大きな磁盆にしこたま大小のメス、鋏、鋸、楔、止血ピンセット、鉗子、持針器の類を列べたのを持つて來た。牛刀のやうな腦刀も備へられた。膿盆は死體のそこでこゝに幾個も配置された。人々の右往左往する間に、記錄者は机を解剖臺に近く寄せて、紙を改めて次ぎの瞬間を待ちかまへた。

彼れはこの隙に兄の方を見た。兄は眞蒼な額に玉のやうな冷汗を滴らしながら、いつの間にか椅子から立上つて、腕を組んだまゝぢつと死體を見詰めてゐた。「もうお歸りになつたらどうです」彼れは試みにこう云つて見た。兄は返辭をしなかつた。彼れの言葉を聞取り得なかつたのだ。

彼れは靜かに準備の出來るのを待つてゐた。人々がもとの位置に立ちかへると、彼れは手術衣の腕を高々と看護婦にまくらせた。

乾酪性肺炎か粟粒結核か、事の眞相を否應なしに定むべき時が來た。自分の臨床上の技倆と研究上の蘊蓄とを、院長はじめ他の人々のそれと比較すべき時が來た。そう思ふと彼れの隻眼は光つた。何んと云つても未だ漸く三十の彼れは、少くとも老練と云ふ事を誇り得るまでに多くの經驗を積んだ反對意見の人々の壓迫を感じない譯に行かなかつた。誰れも彼れの内心の葛籐を知らないのが一つの便利ではあつたけれども、彼れの不安を人に氣取れまい爲めには、彼れの意志を極度に働かせねばならぬ程のものだ

つた。

「解剖上の現象」

こう彼れは記錄者に報告しておいて、メスを死體の喉許にあてがつたと思ふと、覺えのある腕の冴えを見せて、まつすぐに引きおろした。こんな事には慣れきつた二人の看護婦も思はず兩手を顔にあてゝ下を向いてしまつた。兄は二三歩後ろによろけて、部屋中に響きわたるやうな鈍い呻聲を立てた。兄の眼は然し寸時も死體から離れなかつた。

どす黒い血が解剖臺の眞白な表面のあちこちを汚し始めた。睡さうな音を立てゝ窓際でまわつてゐる蠅取機の甘酸い香を離れて解剖臺の方に飛んで來る蠅の數はふへた。牛肉屋の前を通つた時のやうな一種の血なまぐさい香が忽ちに清淨な空氣をきたなくした。

彼れの解剖の手際は水際だつてゐた。見る見る中に胸部から腹部にかけての諸機關は個々に取除けられて、左胸部に肺癆の爲めに潰滅した肺の殘塊が核啖様の粘液に取りまかれて殘つてゐるのと、直腸部に填充した脱脂綿が所々血に汚れて、うねくつて露出してゐる外には何も殘らなかつた。內臟は椽の高い圓い盆に盛られて死體の足許に置かれた。若し比喩が許されるなら、夫れは珍らしい果物でも盛つたやうだつた。尖端を上にむけて置いてある心臟の如きは殊に桃を聯想させた。

內臟が抉出されてしまつて見ると、見學の人々は死體に對して本能的に感ずる一種の遠慮も、今朝の解剖に限つて存在する死體と執刀者との異常な關係なども、忘れてしまつて、學術的の興味に釣り込まれた。あるものは强直した死體の手の指を強いてまるめて拳固を造り、心臟を持出して大さを較べて見

たゞ而して、
「隨分この心臟は小だねえ」
と云つて彼れに示したりした
「どつちだらう、小だと肺が犯され易いのか知らん、肺が犯されると心臟が小さくなるのか知らん」
そんな事を云ひ合ふ人々もあつた。

彼れは內臟を一つ／＼黑塗の滑らかな臺の上に乘せて腦刀で縱橫に斷割つて見ながら、綿密な報告を落付いた言葉で記錄者の方に云ひ送つた。著しく擴大した脾臟を割いて見ると粟粒狀の結節を到る所に發見した。彼れは心の內で飛上るやうな勇みを感じた。然し彼れは落付いてゐた。

「脾臟。形狀普通。著しく擴大。色普通。中部到る處に粟粒狀結節あり」

彼れは冷靜に報告した。腹膜にも肋膜にも多數の結節を認めた。この上は肝腎の右肺部を檢査しやうかと思つたが、粟粒がどの位廣く結成されたかを確めるために頭蓋骨を開いて腦膜を調べて見たくてたまらなくなつた。彼れは始め妻の首から上には手を觸れまいと思つてゐた。まだ乙女の純潔と無邪氣とをどこかにそのまゝ持つてゐた妻の顏にメスをあてゝ支離滅裂にするのはとても忍び難い事だつた。どうせ腐るにしても彼女の顏はなるべく長くそのまゝにして置きたかつた。それだけの理由からでも彼れは妻を火葬にしまいと思つた程だつた。妻が少しも疑はない信賴と尊敬と戀慕とを以て、よく彼れの頸に手をまいて、近々と彼れの顏の前で他人には見せない蠱惑に滿ちた微笑をほゝえんだ、さう云ふ記憶は現在の事のやうに鮮かに殘つてゐた。

彼れは大膿盆に置かれた肺臓に手をかけながら、貪るものゝやうに死體の頭部に眼をやつた。顏は雪白のガーゼに蔽はれてゐて見えないが、髪の毛は、艶をこそは失つたけれども、漆のやうな黒さで木枕から解剖臺の上に乘り餘るほど豊かだつた。彼れは夫れを見ると鋭利なメスを頭蓋骨に達するまで刺透して、右の顳顬から左の顳顬にぐつと引きまはしたい衝動に襲はれた。彼れの感じたその衝動は研究心以外の不純なある感情——Sadistic と言ふ言葉でゝも現はさなければならないやうな——が湧いたのではないかと思ふほどに強いものだつた。彼れは今までの通り、見た所は冷靜であつたが、その心の中には熱い一種の欲望が燃えて來た。彼れは助手に指圖して脳の抉出に取りかゝつた。

又ざわ〳〵と一しきり人々が動いて位置をかへた。助手は根元で無造作に結へてある元結を切つて、兩耳の後ろと旋毛の邊にかけて前頭部と後頭部の髪を二束に分けた。分け目には青白い一筋の皮膚が冷やかな青白さをもつて現はれた。

その準備が出來ると彼れは死體の枕許に立つた。而してメスを右の耳の下の髪の分け目の所につき刺した。顏の上には前頭部の髪の毛がもつれあつて物凄く被ひかぶさつてゐる。突然彼れのメスを持つた右手が、しつとり冷たい手のやうなもので握りしめられて自在を失つた。緊張し切つた彼れの神經は不思議な幻覺に働かれて、妻のこわばつた手が力強く彼れの無謀を遮ぎるやうに思つた。と、冷水を脳の心に注ぎこまれたやうに彼れの全身はぞつとした。

「氣でも狂つたのか、亂暴にも程がある」

かすかな、然し恐ろしい程力のこもつた聲が同時に彼れの耳を打つた。見かへる鼻先きに眞蒼になつ

て痙攣的に震ふ兄の顔があつた。驚きもせずに大きく彼れを見詰めてる兄の眼は、全く空虚な感じを彼れに與へた。彼れにはそれが虚な二つの孔のやうに見えた。その孔を通じて腦髓までも見やうと思へば見通せそうだつた。

たゞ瞬間の奇怪な妄想ではある。然し彼れは兄が彼れの妻と道ならぬ關係があつたのを直覺したと思つた。次ぎ來るべき狂暴な動作を頭にたくらみながら、彼れは兄の握りしめてゐる右手を力まかせに拂ひのけやうとした。その瞬間に彼れの手はひとりでに自由になつた。兄は眼を見開いたまゝ棒倒しにセメントの床の上にどうと倒れたのである。

彼れの命令によつて、兄は看護婦に附添はれて、失神したまゝ病室に運ばれた。

「あれは僕の兄です。看護で頭が疲れてゐる所に、見た事のないこんな有樣を見たもんだから……餘計な御心配をかけました。……僕は少し疲れた。關口君、君一つやつてくれ給へ。腦膜が見たいんだから注意してなるべく完全に剝離してくれ給へ」

こう彼れは助手に云つた。彼れはもう元の冷靜に回らうとしてゐた。然し手に震へを感じたので、夫れを人々に知られるのを惡んだ。

實際手を洗つて窓際に來て見ると彼れは相當に疲勞してゐた。彼れは衣嚢から卷煙草を出して火を摺りながら、四方を建物で圍はれた中庭に眼をやつた。

八月の日は既に高く上つて、樹々の蔭を小さく濃く美しい芝草の上に印してゐた。卵色のペンキが眩しく光る向ひの建物の壁際のカンナの列は、燃へるやうな紅と黄の花を勢よく陽に擡げてゐた。あちの

木の周圍には羽のある一群の小虫が飛びかひながら、集つては遠ざかり集つては遠ざかりしてゐた。その間を大きな蜻蛉が襲撃するやうにかけぬけた。看護婦が間遠に眞白な印象を殘して廊下に輕やかな草履の音を立てた。虫が一本調子に靜かになき續けてゐた。彼れの吐き出した青い煙は、中庭の空氣の中をゆるく動いて行つて、吹きぬけの亘廊下の所まで來ると、急にあわてたやうに揺れ動いて消え失せた。凡てのものはしん〳〵と暑さに蒸れた。向ふの建物の燃えるやうな屋根瓦の上には、眞靑な火のやうに雲のない大空が輝いてゐた。そこから電車のきしみ走る音が幽かに聞えた。

彼れは庭から來る照り返しを避けるやうに隻眼を細めながら、生氣の充ち溢れた自然の小さな領土を眺めやつた。

解剖臺からはごし〳〵と鋸で物をひく音が聞えた。彼れの妻の頭蓋骨は今椀の形にひき割られてゐるのだ。彼れは見返へらうとはしなかつた。

日影になつた建物の窓に二人の看護婦の姿が現はれた。二人は彼れが解剖室から見てゐる事には氣が付かないで、さも親しげにより添つてゐた。忙しい仕事から漸く暇を得たやうに、二つの若々しい健康さうなその顏は上氣して汗ばんでゐた。美しくさへあつた。中でも若い方の一人が懷から小さな桃色の書簡紙に書いた手紙を取出して、二人は互の顏が觸れるほど寄り合つて熱心に讀みはじめた。二人は時々おかしさうに微笑んだり、嬉しさうに眼を見合せたりしてゐた。眞夏の光の中で、凡ての情熱を初めて經驗してゐるらしいこの二人の處女の姿は、彼れに何とも云へぬ美しさと可憐さとを味はした。

解剖臺からは鋸の音と違つたある鈍い音が又聞えて來た。夫れは鋸の切れ目に鐵の楔子をさし入れ

て、椀狀の頭蓋を離すために、木の槌で輕くたゝく音だ。彼れは自分の頭にその槌子をさし込まれたやうな苦痛を感じ始めた。

彼れは現在華やかな眞夏の景色を眺めながら、それと少しの關係もない自分を見出した。一度後ろを振向けばそこに彼れの世界があるのだ。まざ〳〵と何事も明らさまな晝の光の下で、最愛のもの丶腹を割き頭を抉る……そうする事が自分の事業に對して一番忠實な處置であるのを信ぜねばならぬ彼れの世界はすぐその背後に廣がつてゐるのだ。「自分の生活と學術とどつちが尊いと思つてゐるんだ」と今朝兄の云つた言葉が突然恐ろしい意味を持つて彼れの懷ろに飛び込んで來た。「自分は學術の爲めに全力を盡すべき一個の學徒である。自分は自分の學術に十分の信頼と十分の興味とを持つてゐた。然し自分が人間として要求し又要求せねばならぬものは生活する事だ。生活を生活して見る事ではない。經驗する事だ。實驗する事ではない。然るに自分の奉事する學術は一から十まで實驗の上に立脚してゐる。自分の一生は要するに最小限の生活と最大限の觀察から成立たねばならぬ。自分は生活をそれほど局限して學術に奉事する滿足と覺悟とをほんとに持つてゐるのか」そう彼れは嚴しく自己に詰問した。「生活と學術とどつちが尊い。我れを見失つてどこに學術がある」彼れは今まで自己の立場をはつきり辯解すべき術を知らなかつた。

いゝいゝむしやくしやして彼れは吹殼を芝生になげ捨てやうとしたが、ふと窓際で手紙を讀みつゞけてゐる少女だちを驚かしてはいけないと思つて、室内の床の上に落して踏みにぢつた。彼れの心には、今その二人の少女は彼れの及びもつかない美しい存在のやうに見えたからだ。

「出來ました」

助手が彼れの方にこう呼びかけた。默想は破れてしまつた。彼れは今までの慣習に引きずられてその先きを辿らなければならないのを知つた。再び解剖臺の方に進んで行つた彼れの顏には前の通りな冷靜な緊張した色が漲つてゐた。人々は暑がつて顏や手をハンケチで拭つたが、彼れの顏には汗一つ見えなかつた。

彼れは然し死體の頭部に眼をやる事はしなかつた。而して黒塗の臺の上に置いてある腦膜を取上げた。脾臟程に顯著ではないけれども結節は可なり明瞭に觀察された。妻が死前に激烈な頭痛を訴へて、思想に一種の混亂を來した理由も説明せられるやうだつた。

もう疑ふべき餘地は全くない。彼れの診斷は院長はじめ多數の醫員の所見を壓倒して勝利を得たのだ。彼れの隻眼はまたひとりでに輝いた。窓際で休息してゐた時彼れを犯した不安は、いつの間にか忘れられて、彼れは又熱意をこめて目前の仕事に沒頭して行つた。

次に彼れは敵の本城に逼るやうな勢で大腦盆から肺臟を取上げた。人々も亦非常な興味をもつてそのまはりに集つた。今日の解剖の最頂點はこゝにあるのだ。彼れは外部の記述が終ると、腦刀を持ち直して縱にづぶりと刀を入れた。彼れが診斷した通り中葉以上の患部の稍粗雜な海老茶色の表面には、核喫様の色をした栗粒がうざ〳〵する程現はれ出た。

「是れはひどい」

と誰れかゞ驚歎する聲がすぐ起つた。彼れは思はず、最愛の妻の肺臟を、戰利品でもあるかの如く人々

の眼の前に放り出した。
「死因。粟粒結核の結果と見るを至當なりとす」
昂然として彼れは記錄者の方に向いてこう云つた。
列席者の中でそれに異議を稱へやうとするものは一人もなかつた。
「胃」
彼れは破竹の勢でべちや／＼に潰れた皮袋のやうなものを取上げて臺の上に置いた。彼れの目的が遂せられると、彼れの熱心は急に衰へて一時も早く悲しい孤獨に歸りたかつた。彼れは心の底にすゝり泣きのやうな痛みを感じた。然し濟すべき事は順序通り濟してしまはねばならなかつた。見學者の中にも欠伸をしながら、患部の切片を入れたガラス瓶を衣嚢にしまつて、そろ／＼歸仕度をするのがあつた。
胃の解剖から何の結果も得べき筈はない、そう彼れは思ひながらも、型の通り鋏を取つて一方を切開いて見た。その内部からは既に胃壁に凝着した血液が多量に黑々として現はれ出た。
「咯血を嚥下したんだな」
思はざる所に不意におもしろい事實を見出したやうに、一人の將員は、死體が同僚の妻である事も忘れて、こう叫んだ。
彼れはこの有樣を見ると思はず、手の甲で眼をかくしながら二三歩たぢろいて後ろを向いてしまつた。この有樣を見た瞬間に、妻の斷末魔の光景が、彼れの考へてゐた學術の權威、學徒の威厳、男の沈着、その外凡ての障碍物を爆彈のやうにたゝき破つて、いきなり彼れの胸にまざ／＼と思ひ浮べら

からだ。

それはまだ三十時間とはたゝない昨日の明方の事だ。彼れの妻の病室は醫員や看護婦の出入でごつた返した。その日一日の壽命はないと家族の人々も覺悟してはゐたが、こんな變調が突然起らうとは思ひもよらなかつたのだ。丁度夏の夜が早くも東明にならうとする頃、熱の爲めに浮されて囈言を云ひながら、うと〳〵と眠つてゐたY子は、突然はつきり眼をあいて床の上に起き上つた。

「氣がちがいそうに頭が痛みます。私の腦は破裂するんぢやないでしやうか。私はもつと生きてゐたいんですから、先生、どうか助けて下さい。殺さないで下さい。どうか〳〵……あゝ痛い〳〵〳〵……死ぬのはいやです……私は死にたくないんです」

そう云ひながら彼女はそこに居合はした醫員にすがり附かうとした。醫員は惡靈にでも追はれたやうに顏の色をかへて飛び退いた。眞蒼に痩せさらぼへたY子の顏の二つの眼だけに凡ての生命が死に追ひつめられて立籠つたやうに見えた。彼女はその眼で少しでも生命のあるものは引よせて食はうとした。隅の方に坐つて彼女の不幸を悲しみながらも、自分の研究の中挫したのを殘念に思ふ程の餘裕を有つてゐた彼れは、この有様を見て、そんな事を思つてゐた薄情さを悔むと共に、ほんとに眞劍な同情が勃然として湧き起るのを感じた。彼れは始めてのやうに自身の生命を自覺して、死の本統の恐しさに震へ上つた。而してたまらなく妻が憐れまれてその寢床にかけよつた。次の瞬間に二人は堅く抱きあつてゐた。は熱に燃へる眼を見開いて、彼れの顏を見入つても〳〵飽き足らないやうに凝視した。

「あなたゐて下すつたのね。私死んではいけないわね。私、死ぬやうな事はしてゐませんよ。助けて頂

戴、ね、ね。私本統に死ぬのはいやなんですもの。怖いんぢやない。いやなんです。胸が苦しくなつた。どうしたんでしやう、火が付いたやう……あゝ、苦しい……」

その時彼れはかたびらの胸許にどつと生暖いものを感じた。見ると夫れは火のやうな鮮血だつた。妻の顏は一段と蒼ざめて、瞳はつり上つて急に生氣を失つてゐた。やゝともすると居睡りでもするやうに彼女の顏は彼れの胸にもたれかゝつて來た。

「Y子。氣をしつかりお持ち。何んでもないんだからな」

彼れは思はず妻の耳もとでこんないゝ加減を叫んだ。而して彼女を靜かに臥かした。

暫くすると彼女はまた前のやうに異常な活氣を現はして起上つた。而して又多量の咯血をした。そう云ふ事が二度も三度も續けて行はれた。

何時の間にか世の中は眩しいやうな朝の光になつてゐた。

「こんなぢや……血が無くなるだけでも死にます……コップ……コップを下さい」

看護婦が水をついでコップを持つて來ると、彼女は別に飲むでもなく、それを枕許に置かした。而してコップを見入りながら何かを考へてゐるやうだつたが、やがてむく／＼と身を起すと又咯血した。然し彼女は瀕死の病人に似もやらず、素早くもコップの水を床にあけて、それを口許に持つて行つた。コップには八分目程血が滿ちた。

Y子は暫らく恨しげにコップを見やつてゐた。と、いきなりそれを唇にあてゝ自分の血をぐッ／＼と飲みはじめた。

坐にあるものは思はず片唾を飲んで、平手打ちでも喰はされたやうに後ろにたぢろいだ。一人として彼女からコップを奪はうとするものがなかつた。

彼れが正氣を取かへしてコップを妻からもぎ取つた時にはもう虚になつてゐた。

是れが彼女の最終の激しい死に反抗する努力だつた。彼女の意識はだん〳〵不明瞭になつたが、咯血する度毎にその血を吐き出さずに嚥みこんだ。而して激しくむせた。頭の毛をかきむしつた。

「アッ……」

やがて凡ての執着を、帛を裂くやうな鋭く高い一聲に集めて絶叫すると、その途端に彼女は死んでゐた。

胃を鋏で開いて見た瞬間に、是れだけの記憶が一度にまざ〳〵と彼れの心を襲つたのだ。最後の絶叫を彼れはもう一度たしかに聞いたと思つた。三日も不眠不休でゐた彼れの腦は輕度の貧血を起して、胸許に嘔氣をさへ覺えた。見學の人々は彼れが突然よろけて後ろを向いてしまつたのを見て怪顔の眼を見張つた。

「くだらない事を想ひ出したらもう解剖がいやになつた。關口君、花田君勝手ですが跡の始末を君等にお頼み申します。夕方には僕が引取りに來ますから」

こう彼れは後ろを向いたまゝで云つた。人々はさすがにいかにも氣の毒さうに彼れを見やつた。

彼れは僧侶になる武士が武器を捨てるやうな心持ちでゴムの手袋を脱ぎ捨てた。匆々に手を洗ふと、助手が用意してくれたいくつかのガラス瓶に入れた内臟の斷片を興味もなく受取つて解剖室を出た。

凡ては彼れの前で空に見えた。妻の死因が粟粒結核であるのを確めて、たつた先刻心ゆくまで味つた近頃にない喜び――一つは自分より熟練だと考へられてゐる多數の先輩に對して見事に占め得た勝利の喜び、一つは自分の妻の病症の眞相をしかと確めて何にともなく復讐をしおほせた喜び――その喜びは跡方もなく消えてしまつた。彼れの心は眞底から哀愁に揺り動かされ、自暴自棄にさいなみ苦しめられた。

揭示場の前を通ると彼れが自分で今日の解剖の廣告をした半紙がぶら下つてゐた。彼れは力をこめて引剝すと、いま／＼しげに夫れを丸めて庭に投げ棄てた。

「稚氣、衒氣、……而かも嚴肅に取あつかはねばならぬ、妻の死體と記憶とをめちや／＼に踏みにぢつて、心窃かに得意を感じた稚氣、衒氣！恥ぢて死ね」

部屋に歸つてからしつかりと考へる積りでゐながら、急性な彼れの本心は瞬時も彼れに餘裕を與へて置かなかつた。彼れは足早に廊下を歩きながら絶間なくこんな考へに驅り立てられた。

自分の部屋に這入ろうとするところに小使が來て、彼れの兄の腦貧血はもう回復して先刻家に歸つたと云つて封書を渡した。

實驗室――彼れの庵室とも、城廓とも、宮殿とも昨日まで思つて、この六年間立籠つてゐた實驗室を彼れはいま／＼しげに見まわした。そこは機械と塵埃との荒野だつた。今朝、妻を解剖する可否を兄と論じながら、彼れが自信と興味とに心をおどらして、殘りなく準備したミクロトーム、染色素、その外のもののきちんと一つの机の上に列べてあるのが、積み重ねられた枯枝のやうに今の彼れには見えた。

棚の中に[illegible]ープパラートもてあ[illegible]るまで一つとして命あるものはなかつた。彼れとは何の關係もない[illegible]かごつたかへし[illegible]なくこ[illegible]がつてゐる間に、龍頭から絶えず流れ出る水の、水だけが、ただ一つがくし、威[illegible]た。それほど室内は彼れに厭はしく汚く見えた。魔術師の法力を失つた自己瞞着の世界が彼れの眼の前でがらくくと壊れた。

手術衣を脱いで床になげ捨て、內臓の切片を入れたガラス瓶を厭はしげに机の隅に放り出し、綿のやうに疲れ果てゝ、放心したやうに彼れは椅子に身をなげかけた。而してぢつと考へた。

凡ての科學者が疑はしげもなく自分の研究にいそしんでゐる、夫れは彼れに何物をも說明しない。彼等にどんな安心があるのか、まただどれ程自己を省察する眞劍さを缺いてゐるのか、そんな事はどうでもいゝ。彼等は彼等だ。彼れは彼れだ。彼れの妻の胃の中に凝固した咯血を見出した時、妻の死を思ひ出した。妻の死を思ひ出した時、生命の尊嚴にぴつたりとぶつかつた。中庭を見やりながら彼れが考へた事は、理屈としてではなしに、實感として否應なしに彼れに迫つた。實際を云ふと妻の死因を實證した時にも、彼れの勝利の念の中にはどこかに空虛があつた。夫れを實證したとて夫れが妻と彼れとの生活を少しも充實しやしないと說明したのでは物足りないが、そう云ふやうなさびしい實感が彼れを脅かした。そう云へば解剖を思ひ立つた時にもどこかに隙があつた。そう云へば、實驗室で研究に熱中してゐる最中にも、ある重大な研究結果を發表する喜びに際會した時にも、彼れはある不滿足を拒む事が出來なかつた。そう云へば科學的研究に一生を委ねやうと決心した時にも、彼れは自己を或る程度まで殺し

てかゝる覺悟をした苦痛を覺えてゐる。六年間彼れは心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやらなかつたのだ。而して夫れをあるべき事のやうに自己の瞞着をしてゐたのだ。砂の上に立てられた三十年の空しい樓閣——夫れは今跡方もなく一陣の嵐に頽れた。彼れの雙眼は押へ切れぬ悲痛の涙を堪へてまじ／＼と實驗室を見廻した。

徒らに正確な懸時計は遠慮なく時を刻んでゐた。その音と、龍頭を流れ下る水の音とが、森閑とした眞夏の暑い沈默を靜かに破つた。

死よりも淋しい失望の淵に沈みはてゝ彼れは時のたつのを忘れてゐた。

突然……突然、彼れは言葉通りに火の洗禮を受けた。あの時から何分を過ぎたのか、何時間を過ぎたのか……。何んにもない空虛のどん底に彼れは言葉通りに眼もくらむやうな火焔の燃々立つのを見た。彼れは生れかはつて椅子からおどり上つた。彼れの前には院長はゐなかつた。院長に調子を合せる醫員はゐなかつた。科學の强權もなかつた。研究に對する好奇心もなかつた。自己の力量に對する矜恃もなかつた。意地も張りもなかつた。

そこには自分の生命と血の通ひ合ふ人類の生活があつた。涙ぐましいまでになつかしい大きな人。が彼れを抱きつゝんでゐた。彼れを失望のどん底に投げ込んだものが、又彼れをこの甦生に導いてくれたのだ。彼れは空虛な言葉で學術を生活するのだと傲語してゐた。今、彼れは本統に學[illegible]生活する[illegible]知つた。彼れの實驗室は再び生命を囘復した。

彼れは小兒のやうな鮮やかな心であたりを[illegible]

械が、有機物のやうなしなやかさと親しさをもつて眺めやられた。何物を見ても彼れの心には大きな、氣取らない、ありのまゝの暖い愛が湧き上つた。彼れは物珍しげに机の上の顯微鏡を見た。ツアイス製の、無駄な飾りのない、然しいかなる點にも綿密な親切と注意との行き屆いた、從つてたくらまないで美しい直線や弧線の綜合を成就したその機械は、彼れの眼に何んとも云へない親しさの涙を誘ひ起した。彼れはまた窓の外の並木を見た。二階から見るので梢だけが鳥瞰的に眼に映つた。夫れは今まで全く氣が付かないでゐた珍らしい樹の姿だつた。一つの葉も光に向いてゐないのはなかつた。而して無邪氣に快活に手をつなぎ合つて夏の光の中に戯れてゐた。彼等はあの無邪氣と快活とを以て、風にでも雨にでも小跳りするのだ

彼れは又机の前に腰かけて、解剖臺から持つて來たガラス瓶に眺め入つた。小さな五六の肉片が一つ一つ薄いアルコホールの底に浸つてゐた。妻の形見と云つてはこれだけになつてしまつたのだ。それを見てゐると昨日から今日にかけての、彼れと妻との不思議な交渉がつぎ／＼に頭に浮んで來た。彼れを殺さうとしたのも彼女だつた。彼れを生かしたのも彼女だつた。彼女の眞實が、今まで虐たげに虐たげてゐた彼れの眞實をとう／＼勝たしてくれたのだ。凡ての眞實が人を本統に生かすのではない。眞實が愛に結付いた時に始めて人を生かすのだ。彼れはこの事實を妻によつて知らされたのだ。彼れは妻を徒死（いたづらじに）させせまいと思つた。

彼れは祈るやうな心になつて、その瓶を自分の額にあてた。妻が死んでから今まで彼れの強い意志でせきとめてゐた涙が、燃えるやうにその一つの眼から流れ落ちた。（一九一七、八、一九、輕井澤）



或日の大石内藏之助

芥川龍之助

立てきつた障子にはうららかな日の光がさして、嵯峨たる老木の梅の影が、何間かの明みを、右の端から左の端まで畫の如く鮮に領してゐる。元淺野内匠頭家來、當時細川家に御預り中の大石内藏之助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた儘、さつきから書見に余念がない。書物は恐らく、細川家の家臣の一人が借してくれた三國誌の中の一冊であらう。

九人一つ座敷にゐる中で、片岡源五右衛門は、今し方厠へ立つた。早水藤左衛門は、下の間へ話しに行つて、未だにここへは歸らない。あとには、吉田忠左衛門、原惣右衛門、間瀨久太夫、小野寺十内、堀部彌兵衛、間喜兵衛の六人が、障子にさしてゐる日かげも忘れたやうに、或は書見に耽つたり、或は消息を認めたりしてゐる。その六人が六人とも、五十才以上の老人ばかり揃つてたせいか、まだ春の淺い座敷の中は、肌寒いばかりにもの靜である。時たま、しはぶきの聲をさせるものがあつても、それは、かすかに漂つてゐる墨の匂を動かす

程の音さへ立てない。

内藏之助は、ふと眼を三國誌からはなして、遠い所を見るやうな眼をしながら、靜に手を傍の火鉢の上にかざした。金網をかけた火鉢の中には、いけてある炭の底に、うつくしい赤いものが、かんがりと灰を照らしてゐる。その火氣を感じると、内藏之助の心には、安らかな滿足の情が、今更のやうにあふれて來た。丁度、去年の極月十五日に、亡君の讐を復して、泉岳寺へ引上げた時、彼自ら「あらたのし思ははるる身はすつる、うきよの月にかかる雲なし」と詠じた、その滿足の情が歸つて來たのである。

赤穗の城を退去して以來、二年に近い日月を、如何に彼は焦慮と畫策との中に、費した事であらう。動もすればはやり勝ちな、一黨の客氣を控制して、徐に機の熟するのを待つただけでも、並大抵な骨折りではない。しかも讐家の放つた細作は、絶えず彼の身邊を窺つてゐる。彼は放埒を裝つて、これらの細作の眼を欺くと共に、併せて又、その放埒に欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかつた。山科や圓山の謀議の昔を思ひ返せば、當時の苦衷が再心の中によみ返つて來る。——しかし、もうすべては行く處へ行きついた。

もし、まだ片のつかないものがあるとすれば、それは一黨四十七人に對する、公儀の御沙汰だけである。が、その御沙汰があるのも、いづれ遠い事ではないのに違ひない。さうだ。すべては行く處へ行きついた。それも單に、復讐の擧が成就したと云ふばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と、殆完全に一致するやうな形式で成就した。彼は、事業を完成した滿足を味つたばかりでなく、道德を體現した滿足をも、同時に味ふ事が出來たのである。しかも、その滿足は、復讐の目的から考へても、手段

から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の滿足があり得ようか。……

かう思ひながら、内藏之助は眉をのべて、これも書見に倦んだのか、書物を伏せた膝の上へ、指で手習ひをしてゐた吉田忠左衞門に、火鉢のこちらから聲をかけた。

「今日は餘程暖いやうですな。」

「さやうでございます。かうして居りましても、どうかすると、あまり暖いので、睡氣がさしさうでなりません。」

内藏之助は微笑した。この正月の元旦に、富森助右門衞が、三杯の屠蘇に醉つて、「今日も春恥しからぬ寢武士かな」と吟じた、その句がふと念頭に浮んだからである。句意も、良雄が今感じてゐる滿足と變りはない。

「やはり本意を遂げたと云ふ、氣のゆるみがあるのでございませう。」

「さやうさ。それもありませう。」

忠左衞門は、手もとの煙管をとり上げて、つつましく一服の煙を味つた。煙は、早春の午後をわづかにくゆらせながら、明い靜かさの中に、うす青く消えてしまふ。

「かう云ふのどかな日を送る事があらうとは、お互に思ひがけなかつた事ですからな。」

「さやうでございます。手前も二度と、春に逢はうなどとは、夢にも存じませんでした。」

「我々は、よくよく運のよいものと見えますな。」

二人は、滿足さうに、眼で笑ひ合つた。――もしこの時、良雄の後の障子に、影法師が一つ映らなかつたなら、さうして、その影法師が、障子の引手へ手をかけると共に消えて、その代りに、早水藤左衛門の逞しい姿が、座敷の中へはいつて來なかつたなら、良雄は何時までも、快い春の日の暖さを、その誇らかな滿足の情と共に、味はう事が出來たのであらう。が、現實は、血色の好い藤左衛門の兩頰に浮んでゐる、ゆたかな微笑と共に、遠慮なく二人の間へはいつて來た。が、彼等は、勿論それには、氣がつかない。

「大分下の間は、賑かなやうですな。」

忠左衛門は、かう云ひながら、又煙草を一服吸ひつけた。

「今日の當番は、傳右衛門殿ですから、それで余計話がはづむのでせう。片岡なども、今し方あちらへ參つて、その儘座りこんでしまひました。」

「道理こそ、遲いと思ひましたよ。」

忠左衛門は、煙にむせて、苦しさうに笑つた。すると、しきりに筆を走らせてゐた小野寺十内が、何かと思つた氣色で、ちよいと顏をあげたが、すぐ又眼を紙へ落して、せつせとあとを書き始める。これは恐らく、京都の妻女へ送る消息でも、認めてゐたものであらう。――内藏之助も、眦の皺を深くして、笑ひながら、

「何か面白い話でもありましたか。」

「いえ、相不變の無駄話ばかりでございます。尤も先刻、近松が甚三郎の話を致した時には、傳右衛門

殿なども、眼に涙をためて、聞いて居られましたが、その外は――いや、さう云へば、面白い話がございました。我々が吉良殿を討取つて以來、江戸中に何かと仇討じみた事が流行るさうでございます。」

「ははあ、それは思ひもよりませんな。」

忠左衞門は、けげんな顏をして、藤左衞門を見た。相手は、この話をして聞かせるのが、何故か非常に得意らしい。

「今も似よりの話を二つ三つ聞いて來ましたが、中でも可笑しかつたのは、南八丁堀の湊町邊にあつた話です。何でも事の起りは、あの界隈の米屋の亭主が、風呂屋で、隣同志の紺屋の職人と喧嘩をしたのですな。どうせ起りは、湯がはねかつたとか何とか云ふ、つまらない事からなのでせう。さうして、その揚句に、米屋の亭主の方が、紺屋の職人に桶で散々撲られたのださうです。すると、米屋の丁稚が一人、それを遺恨に思つて、暮方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤を向うの肩へ打ちこんだと云ふぢやありませんか。それも「主人の讐、思ひ知れ」と云ひながら、やつたのださうです。……」

藤左衞門は、手眞似をしながら、笑ひ笑ひ、かう云つた。

「それは又亂暴至極ですな。」

「職人の方は、大怪我をしたやうです。それでも、近所の評判は、その丁稚の方が好いと云ふのだから、不思議でせう。その外まだ其の通町三丁目にも一つ、新麹町の二丁目にも一つ、それから、もう一つは何處でしたかな。兎に角、諸方にあるさうです。それが皆、我々の眞似ださうだから、可笑しいぢやありませんか。」

藤左衛門と忠左衛門とは、顏を見合せて、笑つた。復讐の擧が江戸の人心に與へた影響を耳にするのは、どんな些事にしても、快いに相違ない。唯一人内藏之助だけは、僅に額へ手を加へた儘、つまらなさうな顏をして、默つてゐる。――藤左衛門の話は、彼の心の滿足に、かすかながら妙な曇りを落させた。と云つても、勿論彼が彼のした行爲のあらゆる結果に、責任を持つ氣でゐた譯ではない。彼等が復讐の擧を果して以來、江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが當然である。しかし、それにも關らず、彼の心からは、今までの春の温もりが、幾分か減却したやうな感じがあつた。

事實を云へば、その時の彼は、單に自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、聊驚いただけなのである。が、ふだんの彼なら、藤左衛門や忠左衛門と共に、笑つてすませる筈のこの事實が、その時の滿足しきつた彼の心には、ふと不快な種を蒔く事になつた。これは恐らく、彼の滿足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行爲とその結果のすべてとを肯定する程、虫の好い性質を帶びてゐたからであらう。勿論當時の彼の心には、かう云ふ解剖的な考へは、少しもはいつて來なかつた。彼は唯、春風の底に一脈の氷冷の氣を感じて、何となく不愉快になつただけである。

しかし、内藏之助の笑はなかつたのは、格別二人の注意を惹かなかつたらしい。いや、人の好い藤左衛門の如きは、彼自身にとつてこの話が興味あるやうに、内藏之助にとつても興味があるものと確信して疑はなかつたのであらう。それでなければ、彼は、更に自身下の間へ赴いて、當日の當直堀内傳右衛門を、わざわざこちらへつれて來などはしなかつたのに相違ない。所が、萬事にまめな彼は、忠左衛門

と聞て、「傳右衞門殿をよんで來ませう」とか何とか云ふと、早速隔ての襖をあけて、氣輕く下の間へ出向いて行つた。さうして、程なく、見た所から無骨らしい傳右衞門とつれ出て、相不變の微笑をたたへながら、得々として歸つて來た。

「いや、これは、とんだ御足勞を願つて恐縮でございますな。」

忠左衞門は、傳右衞門の姿を見ると、良雄に代つて、微笑しながらかう云つた。傳右衞門の素朴で、眞率な性格は、お預けになつて以來、夙に彼と彼等との間を、故舊のやうな溫情でつないでゐたからである。

「早水氏が是非こちらへ參れと云はれるので、御邪魔とは思ひながら、罷り出ました。」

傳右衞門は、座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頰の筋肉を、今にも笑ひ出しさうに動かして、萬遍なく一座を見廻した。これにつれて、書物を讀んでゐたのも、筆を動かしてゐたのも、皆それぞれ挨拶をする。內藏之助もやはり、慇懃に會釋をした。唯その中で聊滑稽の觀があつたのは、讀みかけた太平記を前に置いて、眼鏡をかけた儘、居眠りをしてゐた堀部彌兵衞が、眼をさますが早いか、慌ててその眼鏡をはづして、叮嚀に頭を下げた容子である。これには流石謹厚な間喜兵衞も、よく可笑しかつたものと見えて、傍の衝立の方を向きながら、苦しさうな顏をして笑をこらへてゐた。

「傳右衞門殿も老人はお嫌だと見えて、兎角こちらへはお出になりませんな。」

內藏之助は、何時に似合はない、滑な調子で、かう云つた。幾分か亂されはしたものの、まだ彼の胸底には、さつきの滿足の情が、暖く流れてゐたからであらう。

「いや、さう云ふ譯ではございませんが、何かとあちらの方々に引とめられて、つひその儘、話してんでしまふのでございます。」

「今も承れば、大分面白い話が出たやうでございますな。」

忠左衞門も、傍から口を挾んだ。

「面白い話――と申しますと……」

「江戸中で仇討の眞似事が流行ると云ふ、あの話でございます。」

藤左衞門は、から云つて、傳右衞門と內藏之助とを、にこにこしながら、等分に見比べた。

「はあ、いや、あの話でございますか。人情と云ふものは、實に妙なものでございます。御一同の忠義に感じると、町人百姓までさう云ふ眞似がして見たくなるのでございませう。これで、どの位じだらくな上下の風俗が、改まるかわかりません。やれ淨瑠璃の、やれ歌舞伎の、見たくもないものばかり流行つてゐる時でございますから、丁度よろしうございます。」

會話の進行は、又內藏之助にとつて、面白くない方向へ進むらしい。そこで、彼は、わざと重々しい調子で、卑下の辭を述べながら、巧にその方向を轉換しようとした。

「手前たちの忠義をお褒め下さるのは難有いが、手前一人の量見では、お耻しい方が先に立ちます。」

から云つて、一座を眺めながら、

「何故かと申しますと、赤穗一藩に人も多い中で、御覽の通りここに居りまするものは、皆小身者ばかりでございます。尤も最初は、奧野將監などと申す番頭も、何かと相談にのつたものでございますが、

中ごろから量見を變へ、竊に同盟を脱しましたのは、心外と申すより外はございません。その外、進藤源四郎、河村傳兵衞、小山源五衞門などは、原惣右衞門より上席でございますし、佐々木小左衞門なども、吉田忠左衞門より身分は上でございますが、皆一擧が近づくにつれて、變心致しました。その中には、手前の親族の者もございます。して見ればお恥しい氣のするのも無理はございますまい。」

一座の空氣は、内藏之助のこの語と共に、今までの陽氣さをなくなして、急に眞面目な調子を帶びた。この意味で、會話は、彼の意圖通り、方向を轉換したと云つても差支へない。が、轉換した方向が、果して内藏之助にとつて、愉快なものだつたかどうかは、自ら又別な問題である。

彼の述懷を聞くと、先早水藤左衞門は、兩手にこしらへてゐた拳骨を、二三度膝の上でこすりながら、

「彼奴等は皆、揃ひも揃つた人畜生ばかりですな。一人として、武士の風上にも置けるやうな奴は居りません。」

「さやうさ。それも高田群兵衞などになると、畜生より劣つてゐますて。」

忠左衞門は、眉をあげて、贊同を求めるやうに、堀部彌兵衞を見た。慨慷家の彌兵衞は、もとより默つてゐない。

「引上げの朝、彼奴に遇つた時には、唾を吐きかけても飽き足らぬと思ひました。何しろのめのめと我々の前へ面をさらした上に、御本望を遂げられ、大慶の至りなどと云ふのですからな。」

「高田も高田ぢやが、小山田庄左衞門などもしようのないたはけ者ぢや。」

間瀨久太夫が、誰に云ふともなくかう云ふと、原惣右衞門や小野寺十内も、やはり口を齊しくして、

背盟の徒を罵りはじめた。寡默な間喜兵衞でさへ、口こそきかないが、白髪頭をうなづかせて、一同の意見に賛同の意を表した事は、度々ある。

「何に致せ、御一同のやうな忠臣と、一つ御藩に、さやうな輩が居らうとは、考へられも致しませんな。されればこそ、武士はもとより、町人百姓まで、犬侍の祿盗人のと惡口を申して居るやうでございます。岡林杢之助殿なども、昨年切腹こそ致されたが、やはり親類縁者が申し合せて、詰腹を斬らせたのだなどと云ふ風評がございました。又よしんばさうでないにしても、かやうな場合に立ち至つて見れば、その汚名も受けずには居られますまい。まして、余人は猶更の事でございます。これは、仇討の眞似事を致す程、義に勇みやすい江戸の事と申し、且はかねがね御一同の御憤りもある事と申し、さやうな輩を斬つてすてるものが出ないとも、限りませんな。」

傳右衞門は、他人事とは思はれないやうな容子で、昂然とかう云ひ放つた。この分では、誰よりも彼自身が、その斬り捨ての任に當り兼ねない勢である。これに煽動された吉田、原、早水、堀部などは、皆一種の興奮を感じたやうに、愈手ひどく、亂臣賊子を罵殺しにかかつた。——が、その中に唯一人、大石内藏之助だけは、兩手を膝の上にのせた儘、愈つまらなさうな顏をして、だんだん口數をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めてゐる。

彼は、彼の轉換した方面へ會話が進行した結果、變心した故朋輩の代價で、彼等の忠義が益褒めそやされてゐると云ふ、新しい事實を發見した。さうして、それと共に、彼の胸底を吹いてゐた春風は、再幾分の溫もりを減却した。勿論彼が背盟の徒の爲に惜んだのは、單に會話の方向を轉じたかつた爲ばか

りではない。彼としては、實際彼等の變心を遺憾とも不快とも思つてゐた。が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐みこそすれ、憎いとは思つてゐない。人情の向背も、世故の轉變も、つぶさに味つて來た彼の眼から見れば、彼等の變心の多くは、自然すぎる程自然であつた。もし眞卒と云ふ語が許されるとすれば、氣の毒な位眞卒であつた。從つて、彼は彼等に對しても、終始寛容の態度を改めなかつた。まして、復讐の事の成つた今になつて見れば、彼等に與ふ可きものは、唯憫笑が殘つてゐるだけである。それを世間は、殺しても猶飽き足らないやうに、思つてゐるらしい。何故我々を忠義の士とする爲には、彼等を人畜生としなければならないのであらう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。——江戸の町人に與へた妙な影響を、前に快らず思つた内藏之助は、それとは稍ちがつた意味で、今度は背盟の徒が蒙つた影響を、傳右衞門によつて代表された、天下の公論の中に看取した。彼が苦い顏をしたのも、決して偶然ではない。

しかし、内藏之助の不快は、まだこの上に、最後の仕上げを受ける運命を持つてゐた。

彼の無言でゐるのを見た傳右衞門は、大方それを彼らしい謙讓な心もちの結果とでも、推測したのであらう。愈彼の人柄に敬服した、その敬服さ加減を披瀝する爲に、この朴直な肥後侍は、無理に話頭を一轉すると、忽内藏之助の忠義に對する、盛な歎賞の辭をならべはじめた。

「過日もさる物識りから承りましたが、唐土の何とやら申す侍は、炭を呑んで啞になつてまでも、主人の仇をつけ狙つたさうでございますな。しかし、それは内藏之助殿のやうに、心にもない放埒をつくされるよりは、まだまだ苦しくない方ではございますまいか。」

傳右衞門は、かう云ふ前置きをして、それから、内藏之助が濫行を盡した一年前の逸聞を、長々としやべり出した。高尾や愛宕の紅葉狩も、佯狂の彼には、どの位つらかつた事であらう。島原や祇園の花見の宴も、苦肉の計に耽つてゐる彼には、苦しかつたのに相違ない。……

「承れば、その頃京都では、大石かるくて張抜石などと申す唄も、流行りました由を聞き及びました。それほどまでに、天下を欺き了せるのは、よくよくの事でなければ出來ますまい。先頃天野彌左衞門樣が、沈勇だと御賞美になつたのも、至極道理な事でございます。」

「いや、それ程何も、大した事ではございません。」内藏之助は、不承々々に答へた。

その人に慠らない態度が、傳右エ門にとつては、物足りないと同時に、一層の奥床しさを感じさせたと見えて、今まで内藏之助の方を向いてゐた彼は、永年京都勤番をつとめてゐた小野寺十内の方へ向きを換へると、益〻熱心に推服の意を洩し始めた。その小供らしい熱心さが、一黨の中でも通人の名の高い十内には、可笑しいと同時に、可愛かつたのであらう。彼は、素直に傳右エ門の意をむかへて、當時内藏之助が仇家の細作を欺く爲に、法衣をまとつて升屋の夕霧のもとへ通ひつめた話を、事明細に話して聞かせた。

「あの通り眞面目な顏をしてゐる内藏之助が、當時は里げしきと申す唄を作つた事もございました。」

内藏之助は、かう云ふ十内の話を、殆侮蔑されたやうな心もちで、苦々しく聞いてゐた。と同時に又、昔の放埒の記憶を、思ひ出すともなく思ひ出した。それは、彼にとつては、不思儀な程色彩の鮮な記憶である。彼はその思ひ出の中に、長蠟燭の光を見、伽羅の油の匂を嗅ぎ、加賀節の三味線の音を聞いた。

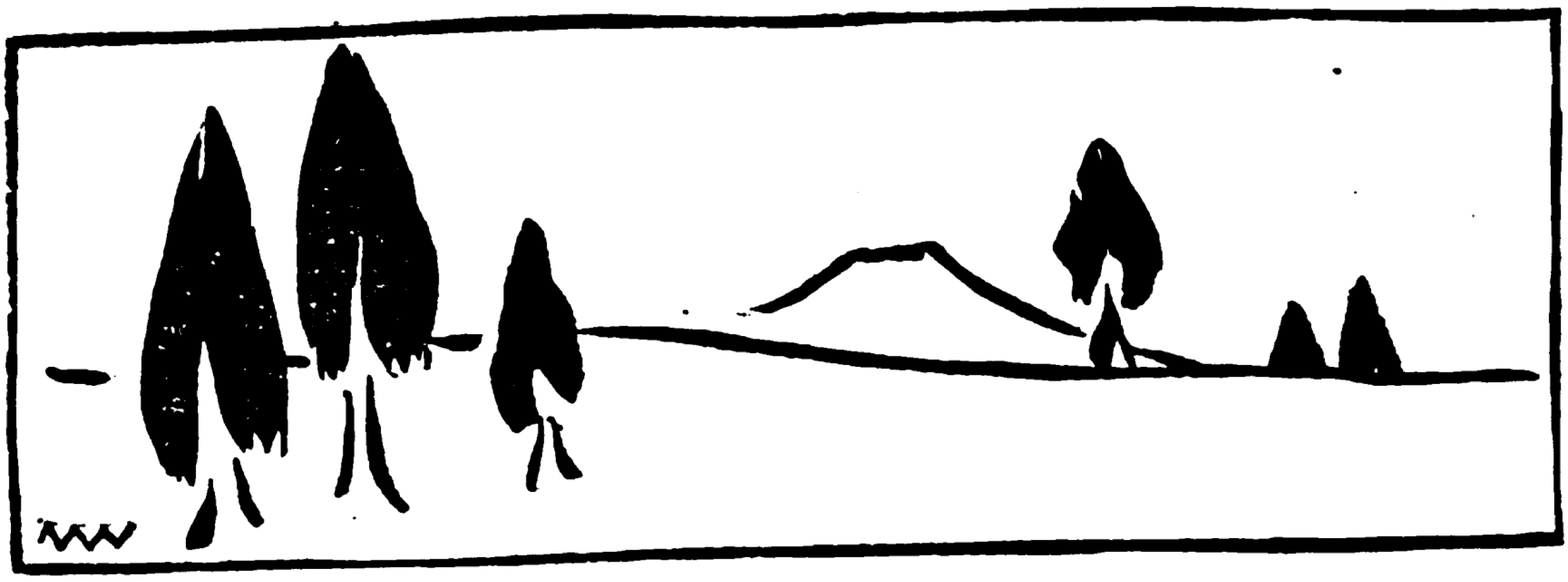
いや、今十内が云つた廓げしきの「さすが涙のばらばら袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめ」と云ふ文句さへ、春宮の中からぬけ出したやうな、夕霧や浮舟のなまめかしい姿と共に、歷々と心中に浮んで來た。如何に彼は、この記憶の中に出沒するあらゆる放埓の生活を、思ひ切つて受用した事であらう。さうして又、如何に彼は、その放埓の生活の中に、復讐の擧を全然忘却した駘蕩たる瞬間を、味つた事であらう。彼は己を欺いて、この事實を否定するには、餘りに正直な人間であつた。勿論この事實が不道德なものだなどゝ云ふ事も、人間性に明な彼にとつて、夢想さへ出來ない所である。從つて、彼の放埓のすべてを、彼の忠義を盡す手段として激稱されるのは、不快であると共に、うしろめたい。

　かう考へてゐる內藏之助が、その所謂佯狂苦肉の計を褒められて、苦い顏をしたのに不思議はない。彼は、再度の打擊をうけて僅にのこつてゐた胸間の春風が、見る見る中に吹きさつくしてしまつた事を意識した。あとに殘つてゐるのは、一切の誤解に對する反感と、その誤解を豫想しなかつた彼自身の愚に對する反感とが、うすら寒く影をひろげてゐるばかりである。彼の復讐の擧も、彼の同志も、最後に又彼自身も、多分この儘、勝手な賞贊の聲と共に、後代まで傳へられる事であらう。――かう云ふ不快な事實と向ひあひながら、彼は火の氣のうすくなつた火鉢に手をかざすと、傳右衞門の眼をさけて、情無ささうにため息をした。

　それから何分かの後である。厠へ行くのにかこつけて、座をはづして來た大石內藏之助は、獨り椽側に佇んで、寒梅の老木が、古庭の苔と石との間に、的皪たる花をつけたのを眺めてゐた。日の色はもううすれ切つて、植込みの竹のかげからは、早くも黃昏がひろがらうとするらしい。が、障子の中では、

益不機嫌な面白さうな話聲がつゞいてゐる。彼はそれを聞いてゐる中に、自らな一味の哀情が、徐に彼をつゝんで來るのを意識した。

このかすかな梅の匂につれて、冴返る心の底へしみ透つて來る寂しさは、この云ひやうのない寂しさは、一體どこから來るのであらう。――内藏之助は、青空に象嵌をしたやうな、堅いつめたい花を仰ぎながら、何時までもぢつと佇んでゐた。(六・八・十五)



初秋

虚子

暦の上に秋の立つたのはもう十日餘りも前の事であつた。けれどもつく〴〵法師の啼いたのは今朝が始めてゞあつた。

コスモスの細かい葉に蜘が網を張つて居るといふことは、其網に雨の玉の輝いで居ることによつて今朝始めて氣がついた。氣がついて見ると一ところや二ところではなかつた。ところ〴〵に白い露の光りが細かい葉の間に棚を釣つて居た。

昨夜(ゆふべ)の雨は大地をも滿遍なく濕ほしてゐた。一匹の白い蝶は其濕つた大地の上をすれ〴〵に飛んで萩の叢(くさむら)の中に隱れた。其は松の梢から落ちて來た雀を逃げたのであつた。

白粉の花はすつかりいたんでしまつた。黄(きいろ)みの勝つた若々しい感じのする葉の上に、花柄の長い花は首を投げたやうに萼から折れて乘つてゐた。中には萼から離れて葉から辷り落ちさうになつてゐるのもあつた。現にすべり落ちて濕つた大

地の上に赤い棒を横へてゐるのもあつた。

芙蓉の葉は大方蝕んで居た。あの廣濶な葉に近江の湖水のやうな大きな穴の開いてゐるのもあつた。又た線香の尖で燒いたやうに小さい穴の群つてゐるのもあつた。此のいたづらな蟲が黒い蝶になつてけば〳〵しく飛び立つのは丁度芙蓉が花をつける頃である。が、今は其蟲は何處に居るのかさへ判らなかつた。大方葉裏にでも潛み隱くれてゐるのであらう。芙蓉は古葉を蟲に食はれた腹癒せに、其梢に更に若々しい薄綠の葉を五六枚も新調してゐた。

芙蓉許りで無く、木の芽は春に出るものと許り思つてゐたのは誤りで、要冬青や槇のやうな常盤木は此頃其の嫩葉を古葉の上に添へ裝ふてゐることに氣がついた。殊に槇は、黒ずんだ硬い古葉が擁護するやうに取り圍んでゐる中に白味を帶びた柔い新葉を品格よく覗かせてゐた。

「此の松林は海岸迄續いてゐるのですか」

とよく來た人が聞く。

「いゝえ、此の向ふに往來があつて、其から數十軒の人家があつて、其から由井ヶ濱になるのです。」

と說明すると、人は皆、

「さうは思へない。際限もなく續いてゐる松原のやうに思へる。」といふ。其松林の梢を赤蜻蛉が縱橫に飛ぶ時が來ると、もう顏を洗ふ朝の水が冷めたくなる頃である。が、今は此の松の梢に、蒼々とした空が澄み渡つてゐる許りであつた。さうして此の松の梢と高さを爭ふやうに丈高く延びてゐるものは唯二本ある棕櫚であつた。此棕櫚がどうして此庭に生えたか其の縱緯は知らない。唯萱のやうなものが芽

を出したと思うてゐるうちに、其がぐん／＼延びて今は松と其高さを爭ふ迄になつてしまつた。他の秋草どもは此の二本の野放圖も無い高蘆に慴伏されて小さく地上に匍匐ふてゐるやうな心持がするのであつた。

獨り此の縞蘆に頡抗するに足るものは葉鷄頭であつた。特に變り種といふものがあるわけで無く唯普通の葉雞頭が譯もなく突立つてゐる許りであるが、其は凡てのものが綠に非れば黃でまだ夏の色を消し惜んでゐる中に、下葉より上葉まで――幹さへも――くすんだ赤い一色に染めて、しかも生れつき持つてゐる丈けの高さに何の屈托も無く延び競ひ群り立つて林を爲してゐるところに縞蘆に負けぬ力があつた。

朝顏は到る所にあつた。或は松の幹を攀ぢ上つたり、櫻の小さい枯木を這ひ包んだり、鷄頭の蔭から顏を見せたりしてゐた。これも變り種は一つもなかつた。赤や紺や白や許りであつた。

「もう確かに秋が來たのだ。」と私は思つた。さうしてまだ身についてゐる夏の匂ひを思ひ出さずにはゐられなかつた。

夏の匂ひ！其は外でも無い、草いきれの匂ひであつた。夜になつて闇が大地を包んでも此の匂ひは消えなかつた。

鎌倉の町をぞろ／＼と人が歩いて居た。平生暗い此の田舍町が夏になると都會の町のやうに明るくなるのであつた。が、私は其の火の衢を離れて田甫の中の徑を歩いてゐた。そこは星の光で僅に足許を辿る位で、避暑に來てゐる都會の人は一人も通つてゐなかつた。平生此の町に住んでゐる私は、都會の人

に交つて火の下を歩くよりも、星の光に此の徑を歩く方が適意であつた。

闇の中に立つて光の町を傍觀することには深い興味があつた。停車場の裏門近く出來た新らしい料理屋は間毎に灯し連ねてガラス張りの光の殿堂のやうに眺められた。其を中心にして灯火は右左に流れてゐた。其中には古い家の火もあつた。此頃建つた許りの新らしい家の火もあつた。停車場には上りの汽車と下りの汽車とが同時に着いた。其も光の長い連りであつた。其が音を立てゝ左右に去つたあとには停車場の火が殘つてゐた。停車場の火も平生よりは明るく見えた。

濱の空には絶えず花火が上つてゐた。

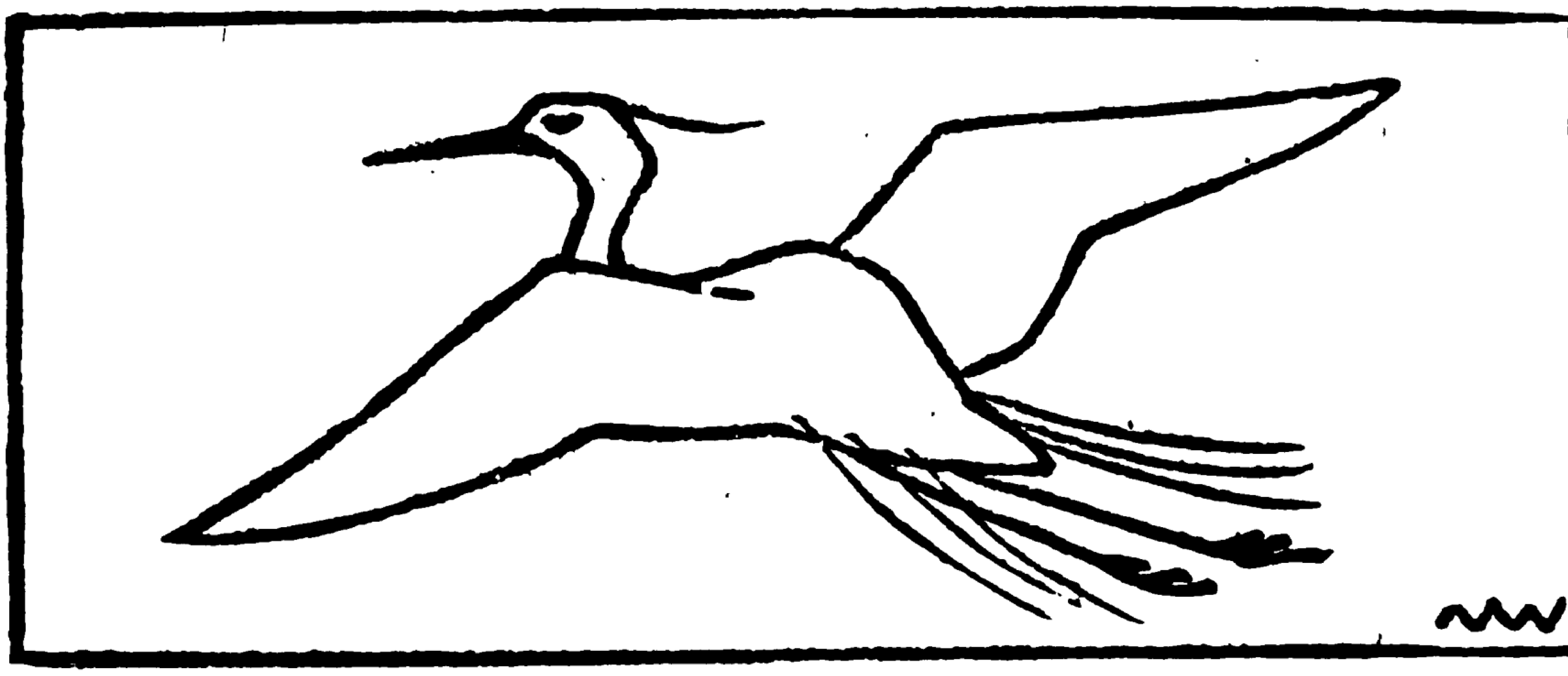
其時であつた私が夏の匂ひを嗅いだのは。其は正しく草いきれの匂ひであつた。若し草いきれといふのが不穩當なら其は夏草の匂ひであつた。闇が今大地を覆ふた許りの夏草は尚ほ蒸せたやうな匂ひを强烈に放つてゐた。

一人の人影が私を追ひ越した。私が二三間歩くうちに其人の影はもう闇の中に消えてしまつた。

小一町も歩いた道傍には一軒の家があつた。私が其前を通つた時に二人の人影は門の内深く消えた。

更に進むと其處には大きな寺の門があつた。

其は僅に十日許り前の夜の事であつた。



戯曲

十五夜物語（二幕）

谷崎潤一郎

人物

浪人浦部友次郎
友次郎女房お波
同妹お篠
名主作兵衛
村の子供四五人

時　徳川時代寛永頃の心もち

所　江戸の町はづれ谷中村

第一幕

谷中村友次郎の寓居

舞臺やゝ上手に茅葺きの一軒家。家の中は二た間に仕切られて、上手の部屋の前方は圓窓、側面は障子にて次の間に堺す。正面の部屋の向つて右は佛壇、左は押入れ、前方は竹の濡れ緣。それより下手は勝手口の土間。土間は家の表から裏へ突き抜けて居るらしく、左手の壁に接して竈、土釜、流しなどが設けてある。家の外前方は枝折戸附きの四つ目垣、後方土間の裏口に近く桔槔の井戸。すべて、わびしい住居ではあるが、さりとて甚しく貧窮しても居ないやうな樣子。

舞臺のずつと下手前方は、薄尾花の生ひ茂つた丘陵の一部にも見ゆり、背景には、森を隔てゝ遠く天王寺の塔を望む。

或る夏の日の夕ぐれのこと、上手圓窓の前の葡萄棚には、葡萄の蔓が青々と伸び、その下に竹の涼み臺が据えてある。下手の四つ目垣には、夕顏の花が咲いて居る。蝉、蜩などの啼く音が、一面に雨の如く聞える。

圓窓や間仕切りの障子を明け放した奥の間では、寺子屋を渡世にする浪人の友次郎が、四五人の寺子を集めて、手習ひを教へて居る。妹のお篠は、次の間の下手の爐端で、針仕事に餘念もない。友次郎は二十七八歲の、色の白い、眉目の秀いでた、品の好い男振り。黃平の單衣に角帶を締めて、嚴格に端座して居るところは立派であるが、口邊には青髭が伸び、何となく面窶れがして浪人臭い風情が見える。お篠の年頃は十七八歲、水々と肥えた、氣のよささうな愛らしい娘。髮を島田に結び、少しく色の褪せた麻の葉の浴衣を着て居る。

幕が開いて暫くすると、下手の丘の蔭から名主の作兵衛が歩いて來て、枝折戸の外に立つ。

(作兵衛)　もし、もし、お頼み申します。お師匠さんは御宅かな。

(お篠)　はい、たゞ今お稽古をして居りますが、どなた樣でござります。

(作兵衛)　わしは名主の作兵衛ぢや。ちよつくら御免下さいまし。(と云ひつゝ、枝折戸をあけて中に這入る。)今日はちと、お師匠さんに話があつて參りましたが、いやどうも毎日毎日、お暑いことでございます。

(お篠)　ほんに、土用明けとは云ひながら、涼風の立つ樣子もなく、きびしい殘暑でござります。さうしてお話と仰つしやいますのは、何ぞ急なことでござんすかえ。

(作兵衛)　なあに、別段急ぎと云ふ譯ではありませ

ぬ。もう直きお稽古が濟みませうから、そのうち此處で一服やつて、休ませて貰ひませう。(濡れ縁に腰をかける。)

(お篠)そこはあまり端近故、此方へお上りなさりませ。(仕事を片づけて、茶を入れ、蒲團を出しなどする。)

(作兵衛)いえいえ、それには及びませぬ。縁側の方が風通しがよくて、却つて涼しうござります。どうぞ篠さん私に構はず仕事をなすつて下さいまし。飛んだお邪魔をいたしました。

(お篠)なんの其のやうな事がござりませう。仕事と云ふのもお耻かしい、たゞもうほんの、散らかすばかりでござります。

(作兵衛)どうしてどうして耻かしいどころか、わしの内の娘などは、暑さにかまけて居眠りばかりして居るが、お前さんは又いつ來ても、よくまあ御精の出なさることぢや。御師匠さんと云ひ、妹御のお篠さんと云ひ、お年の若いに感心な。さすがは御武家の生れだけに、此方等のやうな百姓の子とは違つて居る。

(お篠)まあ私としたことが、庄屋樣のお娘御と、くらべものにはなりますものか。つひ此の程まで兄の所へ、お手習ひにお通ひなされましたが、お美しうてしとやかで、失禮ながら御武家のお孃樣と申しても、耻かしうはござんせぬぞえ。

(作兵衛)あはゝゝゝ、てもお前さんは愛憎のよいお人ぢや。しかし親馬鹿とはよく云つたもので、お世辭にもせよ褒められると、やつぱり嬉しうござるわい。あはゝゝゝ。(目を細くして、喜ばしさうに笑ふ。)それはさうと、今の話の、お武家で思ひ出しましたが、一體お前樣がたは、以前は誰方の御家中でござります。お二人さんとも、言葉づかひに上方訛りがおありなさるが、いづれ西の方のお生れでござりませうな。

(お篠、奥の間の兄の方を見やりて、氣をかねる樣子。)さあ、私共の生國は、仰つしやる通り西の方でご

ざりまするに……

（作兵衛）さうして、いづこの御家中でござるかな。

（お篠）外ならぬあなた様のお尋ねなれば、お話し申しても差支へはござりませねど、つね〴〵兄が申しますのに、以前はともあれ今のやうに落ちぶれて、村の衆の情に縋り、やうやう暮らしを立てゝ行く浪人の身の上では、生國を人に知られるのも、つまりは御主のお名前を汚す道理ぢやと、警められて居ります故、此ればつかりはお許しなされて下さりませ。

（作兵衛）成る程なあ、御武家様の心がけは格別なもの、いかさま御尤もでござります。これほど忠義な御家來に、御暇をお出しなさると云ふのは、お主様のなされ方が聞えませぬ。

（お篠）これにはいろ〳〵仔細のあること、かりにもお主のなされ方を、お恨み申す筋合などはさらさらないのでござります。

（作兵衛）いやいや、お隠しなされても、私にはちやんと分つて居る。あのそれ、よく世間にあるやうに、お氣に入りの悪い侍が、お主様へ讒言したのでござりませう。大方さうに極まつて居る。

（お篠）決してさうではござりませぬ。兄が浪々の身になり果てましたは、それだけの落度があつてのことでござります。（さしうつむいて、沈鬱な調子になる。）此れも此れも、みんな時の運り合はせ、云はゞ前世の約束ごとゆゑ、今更誰を咎めせう。……

お篠の打ち萎れた姿を見て、作兵衛も術なげに默してしまふ。奥の間の友次郎は、子供に習字を教へながら二人の話に其れとなく耳を傾けて居たらしかつたが、此の時漸く、「皆の衆、今日は此れだけにして置きませう。」と云ふ聲がして、次の間に立ち出でる。

（友次郎　作兵衛の傍に据わり、慇懃に會釋しながら、）作兵衛どのようお越しなされました。先程からお聲を聞いて居りましたが、お待たせ申して相濟みませぬ。

（作兵衛）　いや、私こそお忙しいのに、大變お邪魔をいたします。今お妹御と話をして居りましたが、此の暑いのに毎日毎日、子供たちが御厄介になりまして、御苦勞なことでござります。

（友次郎）　そのお禮では痛み入ります。暑いとは申せ家の中で、子供を相手にいたすこと、骨は折れず氣兼ねはなし、拙者のやうな人間には、性に適つた渡世でござります。

此の時までに、子供等は取り散らした奥の間を片附け、天神机を壁の一方に積み上げた後、各々草紙を抱へながら、縁側の上手に脱ぎ捨てた草履を穿いて、枝折戸の方へ歩いて行く。

（作兵衛）　これ子供たち、お前がたも感心に、精の出ることだなう。いつもお稽古が濟んだらば、お師匠樣にようくお禮を云ふのだぞ。

（子供の一）　お師匠さま、有り難うござります。

（子供の二）　有り難うござります。

子供一同、行儀よく列んでお辭儀をする。

（作兵衛）　さうだ、さうだ。もう日の暮れに間もないから、道草を喰はずに、みんな眞直ぐに内へ歸んなさい。

（子供の三）　お師匠樣、ではまた明日參ります。

（子供の四）　左樣なら、

（子供の五）　左樣なら、

子供等再びお辭儀をして、下手へ走り去る。遠く入相の鐘が鳴る。

（友次郎　團扇もて身の周りを扇ぎながら、）　大分蚊が出て來たやうぢや。これおしの、蚊遣りを焚いたがよいぞ。

（お篠）　はい、畏まりました。

お篠立ち上つて縁側に蚊遣りを焚き、佛前に燈明を上げ、それから勝手口に降りて夕餉の支度にかゝるらしく、端がけで水を汲み火をおこしなどする。いつしか蟬、ひぐらしの聲が止んで、蛙の啼く音が絶え間なく聞えて居る。

（作兵衛）　しかしまあ有り難いことに、お前さんが私の村へ來て下すつてから、子供たちが大分行儀

がよくなつて、お手習ひを勵むやうになりました。私がところの娘なども、どうやら物の本が讀めるやうになつたので、お師匠さんのお蔭ぢやと、いつも喜んで居りますわい。

（友次郎）いや拙者こそ、浪人の身の糊口を濕ほすよすがもなく、此の谷中村へ流れついて、明日が日のたつきにも困じ果てゝ居た折から、ふとした緣で寺子屋を始めるやうになりましたのも、みんなお前さまのお骨折りでござります。それに妹のお篠が、用の合間に村の衆の針仕事を賴まれてくれますので、今ではまあ、どうなりかうなり樂に暮らし居りますが、此れも偏へに作兵衞どのゝお情でござります。

（作兵衞）さう云はれては困ります。お前様のやうな學問のあるお侍が、子供を敎へて下さるのは、村の爲めに此の上もない仕合はせぢや。此の後長く此の村に、住んでお貰ひ申したいが、考へて見れば年の若いお前さまが、生涯こんな片田舍でお果てなされる譯はない。やがて御歸參がかなふのは知れたこと、其方の運が此方の不運で、どうも仕方のないものぢや。

（友次郎）歸參がかなふ道理はなけれど、たとへどのやうな運が向いて參らうと、拙者はもう、二度と再び主人持ちにはならぬ覺悟。お役に立つものならば、生涯此處に居を定めて、及ばずながら子供衆に讀み書きを敎へて暮らしませう。

（作兵衞）はて、それではお前様は、此の草深い片田舍に、埋れておしまひなさる御所存かな。

（友次郎）いかにも。仔細あつて世の中に望みを絕つた友次郎、この田舍家の風月を友として、のどかに淋しく世を送る所存でござります。

（作兵衞）さうなさるのは惜しいことぢやが、私の方では好都合。——なう友次郎どの、お前様の所存を聞くからは、少しお賴み申したい事がござりますが、なんとかなへては下さるまいか。

（友次郎）拙者で出來る事ならば、何なりとかなへ

て進ぜませう。どうぞ仰つしやつて下さりませ。

(作兵衞) 實はその話で、今日はわざ／＼伺ひましたが、改まつて尋ねられると、ちつと申しにくい次第がある。

(友次郎) 御遠慮には及びませぬ。どうぞ仰つしやつて下さりませ。

(作兵衞) 賴みと云ふのは、わたしの口から云ひ辛い話ぢやが、內の娘をお前樣の嫁に貰つては下さるまいか。

(友次郎 びつくりして) 何と仰つしやいます。

(作兵衞) 藪から捧にこんな相談を持ち出して、あまり無躾かは知れませぬが、疾うから私は考へて居たことぢや。お前樣にしたところが、なんぼ世の中に望みを捨てゝ、田舍に朽ち果てる御所存でも、まさかに一生鰥夫(やもめ)をお通しなさる譯には行きますまい。

(友次郎) ……さあ、それはさうでございますが、末始終は兎も角も、お羽打ち枯らした今の暮しでは、兄妹二人の口を過すがやうやうのこと、なか／＼妻を迎へるまでには參りませぬ。

(作兵衞) 暮らしむきのことならば、失禮ながらどのやうにでも、面倒を見て進ぜませう。もともとふつつかな娘故、たつて貰つて下されとは云ひませぬが、どうぞ曲げて聞き屆けて下さいまし。なう友次郎どの、私が折り入つてのお願ひでござります。……

友次郎、腕組みをして、ぢつと考へ込んだまゝ、溜息をついて居る。

(作兵衞)……それともまた、お侍が百姓の娘を貰ふ譯には行かないとでも、仰つしやりますかな。成る程わしは百姓ぢやが、先祖代々此の村の名主を勤めて、土地ではまあ、相應に由緒の正しい家柄でございます。腰に大小はさしませぬが、滿更の水吞み百姓ではない積りでござります。

(友次郎) それはよく分つて居りまする。名主樣のお家柄が氣に入らぬなどゝ、拙者は假りにも申した

えはござりませぬ。
(作兵衞) それなら何が御不足なのぢや。本人の娘の氣だて、器量がお氣に召しませぬか。
(友次郎) いゝえ、あの娘御に何の不足がござりませう。拙者のやうな瘦せ浪人には、勿體なうござります。
(作兵衞) では納得して下さるか。家柄にも本人にも不足がなくば、別段故障はござりますまい。
(友次郎) 日頃お世話になりまする名主樣のお賴み故、すげない返辭をお聞かせ申すのは、拙者も辛うござりますが、これにはいろいろ込み入つた仔細のあること、此の緣談ばつかりは、どうぞあきらめて下さりませ。
(作兵衞) あきらめろと仰つしやるなら、あきらめないものでもないが、込み入つた仔細と云ふのは、どのやうな事でござります。どうなりとして、其の故障を取り除けられるものならば、わしが身に代へても力を添へて進ぜませう。譯も云はずに、たゞあきらめろと仰つしやられては、わしも思ひ切りが惡うござります。
(友次郎) 御道理ではござりますが、その仔細を打ち明けられる程ならば、拙者も苦勞は致しませぬ。いづれ長い月日の間には、お分りになる時節も來るでござりませう。不肖ながら友次郎は、僞りを申しはいたしませぬ。
(作兵衞) それ程迄に深い仔細がおありなさるなら、わしもあきらめねばなりますまい。――お前樣がたが此の村へ移つておいでなされてから、我が子のやうに面倒を見て上げて、蔭になり日向になり、隨分爲めを思つた積りぢやが、今さら其れを云ひ出したとてせんないこと。――ようござります。ではさつぱりとあきらめてしまひませう。
(友次郎 兩手をついて詫び入る。) 定めし恩を知らぬ奴ぢやと、御立腹でござりませう。それもこれも覺

悟の上でござります。拙者の苦しい胸の中を、どうぞ御推量下さりませ。

（作兵衛）年寄りの愚痴っぽい、云はずともよい事まで、つい口走つてしまひました。今のは私の云ひ過ぎぢや、氣を惡くして下さりますな。——しかしなう友次郎どの、斯うまでお頼み申すには、私の方にも譯がありましたのぢや。耻を云はねば分りませぬが、私の娘は、お前様を焦れ慕うて、添ひ遂げられぬものならば、淵川へ身を投げると、云ひ暮らして居るのでござります。

（友次郎）ゑゝつ、そりやほんたうでござりますか。

（作兵衛）ほんたうどころか、その爲めに私も婆も、どれ程案じたか知れませぬ。大事な一人娘の身に、間違ひがあつてはならぬと、子の可愛さにひかされて、お願ひに出たのでござります。

（友次郎）その御執心は忝うござりますが、たゞ今も申し上げたやうな仕儀。かへす〴〵も身を投げるなどの不了見は、お止まりなさるやう、こなたからよく娘に意見をなされたがようござります。

（作兵衛）いかにも意見は致しませう。だが娘のあの樣子では、なか〳〵聞き入れる筈はありませぬ。お前様を前に置いて、斯う申すのもおかしうござりますが、お武家育ちの、お年は若し器量はよし、娘は愚か此の爺でも、婿にして欲しい人品骨柄、戀ひ焦れるのは當り前ぢや。身持ちの正しいお前様故、御存知ではござるまいが、此の村中で、お前様に思ひを寄せぬ娘は、一人もないくらゐでござります。

（友次郎、迷惑らしい顔つき）はてまあ、そんな話は置いて下さりませ。

（作兵衛）娘の頼みを聞いた時に、若しひよつとしてお前様に斷はられたら、どうしようかと胸を痛めて居りましたが、困つた事になりました。何と云うて意見をしたらよいものか、娘の身に萬一の事でもあれば、私も生きては居られませぬ。くどいやうでも、もう

度、命にかへてお頼み申しますが、やつぱり聞き入れては下さりませぬか。これ、此の通りみ拝みます。

（友次郎）それでは拙者が、返答に困ります。どうぞ其の手をお上げなさりませ。——もし、作兵衛どの、たとあきらめろと申しましたは、拙者が悪うございました。さうまで仰せ下さるものを、聞き入れられぬ仔細と申すは、何をお隠し申しませう、拙者にはもう、定まつた妻があるのでござります。

（作兵衛　不思議さうに相手を見詰めて）御内儀様があらつしやると？　私はついぞ、お見かけ申した事はないが、何處においでなさるのでござります。

（友次郎）その御不審は御尤も、——耻かしながら拙者の妻は、吉原と云ふところに、身を沈めて居りまする。

作兵衛、呆然として、猶も相手を見詰めて居る。

（友次郎）拙者は國を流浪してから、長らく麻布の狸穴に住んで居りましたが、妻が苦界に落ちたのは、ちやうど一昨々年の秋のこと。それや此れやで近所の手前も耻かしく、此の谷中村へ越して參り、圖らずもお前様の御恩を受けたのでござります。したが年期は三年故、今年の秋になりますれば、勤めを終へて戻つて來る筈。拙者も妹も、ひたすら其の日を樂しみに、かうして明け暮れ待ち詫びて居りまする。

お德、勝手口の用を濟ませて、家の後ろから上手へ廻り、葡萄棚の下から縁臺に腰をかけながら、蚊遣りを焚いてちつとうつむいて悲しげに聞いて居る。夕闇がだんだん濃くなつて、田圃の蛙がいよいよ頻りに啼く。

（作兵衛）なるほど、さうでござりましたか。さうしてまあ、御内儀さまの御難儀は、どうした譯でござります。大方悪者にかどわかされて、そんな憂き目に遇ひなされたのでござりませう。

（友次郎）いえいえ、さうではござりませぬ。申し上げれば長いことでござりますが、妻が身を賣りましたのは、拙者の母の難病を直したい爲めでござりまし

た。貧しい浪人の身の上で、病苦に惱む母を抱へ、藥餌を調ふる術もなく、途方に暮れて居りました折、妻は拙者へ義理を立てゝ身を賣つたのでござります。

（作兵衛）　さて、さて、それはまあお傷しい。さうして其の後お母様は、どうなされました。

（友次郎）　身代金で藥を買ふことは買ひましたが、折角の心づくしも手後れになり、その年の秋に亡くなりましてござります。

お篠、話を聞きながら貰ひ泣きをして、そつと袂をしぼる。

（作兵衛）　聞けば聞くほど哀れな話。身を賣つてまで、親御の命をお助けなさらうと云ふ、御内儀さまの眞心が通じないとは、何と云ふ意地の惡い世の中でござりませう。

（友次郎）　今更嘆いても及びませぬが、それも此れも、もとは云へば皆拙者の心がら。お主に背いて國を捨てた、不忠の罰でござります。

（作兵衛）　知らぬ事とは云ひながら、さう云ふ仔細がおありなさるのに、どうでも妹を貰つてくれと、先程から難題を云ひかけたは、餘りと云へば心なしでござりました。

（友次郎）　夫の嘆を見るに見かねて、我から苦界に落ち込んだ女を捨てゝは、拙者も男の一分が立ちませぬ。それのみか、母が彼の世へ參ります時にも、わが亡き後は早くお波を救ひ出して、母、思うていたはつてやれと、くれぐれも拙者への頼みでござりました。その遺言に背きましては、重ね重ねの不孝の罪が恐ろしうござります。

（作兵衛）　いや、さうでござりませうとも。さうなうてはならぬ事ぢや。

（友次郎）　亡き母の菩提所は、天王寺でござります故、朝な朝なの墓參りが出來ますやう、此の谷中村に家を持ちましたが、地獄に等しい境涯の、妻の體が救はれぬうちは、母も地獄に居はせぬかと、たゞそればかりが案じられてなりませぬ。

(作兵衛) しかしまあ、今年の秋といへば、もう二た月とは間のないこと。まゝならぬは浮世の常でも、さうさう不仕合はせが續くものでもござりますまい。お前様も御内儀様も、昔の苦勞を思ひ出して、笑つて話の出來るやうな時節が來るでござりませう。――わしも先から身につまされて、つい貰ひ泣きをしましたが、てもこんな悲しい事は、早く忘れてしまひたうござります。

(友次郎) 面白くもない身の上話を、長々とお聞かせ申して、定めし御迷惑でござりませう。――さう云ふ譯ゆゑ縁談の儀は、平にお斷り申しますが、返す返すも短氣な眞似をなさらぬやう、お前様から娘御へ、御意見をなされて下さりませ。

(作兵衛) 仰しやる迄もござりませぬ。いかほど聞き分けのない娘ぢやとて、今のお話を伺つたら、さつぱりとあきらめるでござりませう。

(友次郎) あゝもし、今の話は拙者どもの恥辱になること、娘御の外には誰方にも、御内分に願ひます。

(作兵衛) よろしうござります。きつと承知をいたしました。(再び鐘の音が鳴る。) さう云ふうちにもう暮れ六つ、それでは私は、此れでお暇をいたしませう。

(友次郎) 左様ならば作兵衛どの、御内儀殿にも娘御にも、どうぞ宜しうお取りなしを願ひます。

お篠、涼み臺を離れて、枝折戸口へ作兵衛を送つて出る。

(作兵衛) ではお篠さん、お暇の節にわたしの内へも、ちと遊びに來なさるがよい。

(お篠) 有り難うござります。いづれ其のうちお邪魔に上ります。

作兵衛會釋して下手へ去る。お篠は、まだ鳴り已まぬ鐘の音に、ほんやりとなつて、枝折戸に凭れたまゝ、表の闇を打ち眺める。作兵衛の歸つたあとで、友次郎は佛壇の前に、暫く額づいて居たが、やがて涼臺に立ち出でゝ、何事をか考へながら空の葡萄棚を見上げて居る。鐘の音の全く止みたる頃、ふと心づいてお篠は家の中に這入り、行燈の灯を入れ、夕餉の膳を座敷に運び、緣端

に出て友次郎に聲をかける。

(お篠)、兄上さま、夕餉の支度が出來ました。どうぞ召し上つて下さりませ。

(友次郎) 拙者はこゝで少し涼んで居るほどに、そなたは先にたべたがよい。

(お篠) でも折角、装つたものが冷めます故、召し上つて下さりませ。

(友次郎) さうでもあらうが、まあそなただけ濟ましたらよいではないか。拙者は今宵はどうしたものか、一向物がたべられない。

(お篠 急に打ち萎れて) それでは一旦片附けて、後ほど御一緒に頂きませう。

お篠、膳を下手へ片寄せ、自分も庭に降りて兄の傍にうづくまる。

(友次郎 物思ひに沈みながら、上の空で)……そなた、此處へ何しに來たのぢや。

(お篠) はい、何の用でもござんせぬが、內の中が私一人で、淋しうござりました故、……

(友次郎) それはさうと、大きう表が暗いやうぢやが、月の出るのは何時であらうな。

(お篠) 今宵はたしか廿日の筈、月の出は遲うござります。それにまあ、日が落ちてからぱつたりと風が止んで、何と云ふ蒸し暑い晩でござりませう。

(友次郎) 廿日と云へばもう今月も程なく明ける。——早く涼風が吹いて欲しいが、今年は去年に比べると、一と入夏が長いやうぢや。月日の立つのが待ち遠しいなあ。

(お篠) 待ち遠とは云ひながら、待ちに待つた三年も、あと一と月か二た月足らず、姉上様の御無事なお顏を、やがて見る事が出來まする。

(友次郎) その一月か二た月が、わしにはどうも待ち遠で、もどかしうてならぬわい。

(お篠) そのやうにいつもいつも、姉上様の事ばつかり、思ひ詰めて居らしつては、御氣分にも障りませ

う。何はともあれ、彼方で御饌を召し上つてはいかゞでござります。

(友次郎) いや、構はずに置いてくれ。――作兵衛どのに責められて、身の上話をしたせゐか、急にいろいろの事を想ひ出して、わしは胸が一杯になつて來た。

(お篠)大方さうでござりませう。私も先ほど、あのお話を聞いて居て、溜らなくなつて參りましたが、返らぬことをくよくよと考へてもせんないことゝ。姉上樣がお歸りになるまで、昔の話はふつつりと止めにいたしませう。

(友次郎) お波の歸つて來る時分は、ちやうど母上の三回忌。御存生であつたなら、どんなにお喜びなさるであらうに、それを思ふと口惜しうてならぬわい。

(お篠) はて、まあ、もうお止しなされませ。

(友次郎) わしは話をした方が、却つていくらか氣が紛れる。お波が戻つて來るまでは、せめてお波の噂だけでもして居たい。

(お篠) さうして若し、姉上樣がお歸りになりましたら、やつぱり此の谷中村で、お暮らしなさる御所存でござんすかえ。

(友次郎) 世を捨てた身が、何處に住まうと同じこと。あの天王寺の塔の見える此の村に、母上の墓守りをして、お波と一緒に暮らして行けば、わしは其れで滿足ぢや。外に此の世に望みはないのぢや。

(お篠) でもこのやうな片田舍に、埋れてしまひなされては、姉上樣がお可哀さうでござりまする。

(友次郎) いやいや、お波とても、きつと滿足するであらう。彼(あれ)の心は、わしにはようく分つて居る。たとへどのやうな草深い山奥でも、夫婦で睦じく暮らすなら、淋しいとは思ふまい。わしはたゞ、娘盛りの年頃を、かうして過して行くそなたの身の上が、氣の毒でならぬのぢや。

(お篠、ほろりとして) 何のまあ、そのやうな事が

ござりませう。母さまのない後は、姉上様を母と思うて居る私、一生お側に居て、孝行をつくしたうござります。

（友次郎）わしは自分の心から故、たとへどれほど落ちぶれても、誰を恨まう筋はなけれど、一人の兄が惡い爲めに、母上のみかそなたにまでも苦勞をさせるが面目ない。ほんにそなたは、不仕合はせな女子ぢやなあ。

（お篠）私はまた、姉上様がお氣の毒でなりませぬ。連れ添うてからまだ半年も立たぬうち、飽きも飽かれもせぬ仲で、吉原へ身をお賣りなされたとは、何と云ふ不仕合せでござりませう。それを思へば私などは勿體ない、なぜあの時にお身代りをせなんだかと、いまだに濟まない心地がいたして居ります。

（友次郎）わしもあの時お波とは、片時も別れたうなかつたが、なんぼ身勝手な兄ぢやとて、そなたを身代りにはさせられぬ。――是非ともお波に、母への義理を立てさせる場合であつたのぢや。

（お篠）したが、私のためにも掛け換へのない、大事な母さまでござります。姉上様に孝行をさせて、私が默つて見て居るのは、ほんに辛うござりました。

（友次郎）親は親でも、お波に取つては義理ある母上、――それを云ひ出すと長いことぢやが、そなたも定めし知つてであらう。わしが此のやうに浪人して、母上やそなたに、思はぬ憂き目を見させるやうになつたのも、もとはと云へばあのお波からぢや。

（お篠）さう仰つしやつては濟みますまい。それではどうやら、姉上様がお惡いやうに聞えませうが。

（友次郎）わしは決して、お波が惡いと云ふではない。お波は勿論わしのした事は、過ちにもせよ自分たちで後悔しては居ないのぢや。わしもお波も、あの時御家中の侍に、若氣の至りぢやの不屆きぢやのと、罵られるのは覺悟の前、命を捨てゝも惜しうないと思つて居たのぢや。それをまあ、殿のお慈悲で、すでにお

手打ちになるところを、お目こぼしに與つたのは意外の仕合はせ、――全く二人は仕合はせぢやつた。殿樣から永のお暇が出た後は、世間に憚るものもなくなり、たとへ貧しい暮らしをしても、二人は結局本望を成就して互ひに喜び合うて居たのぢや。

(お篠) さあ、それ故私は、猶更姉上樣の義理立てが、おいたはしうござりました。

(友次郎) そなたでさへ其のやうに思ふものを、私の胸の中はどんなであつたらう。二人が意地を通した爲めに、繋がる緣で難儀をなされる母上を、見殺しにしては天罰が恐ろしい故、血の涙でお波を出してやつたもの丶、わしはあれから毎夜毎夜、泣かない晩はなかつたわい。

(お篠) せめて、母上のお命でも助かることか、あへなくおなくなりなさらうとは、姉上樣もつくづく御運の惡いお方でござります。

(友次郎) あ丶、私は早うお波に會ひたい。私の心は、三年前の八月も、今も少しも變らぬばかりか、會はずに居れば居るほどに、一と入戀ひしさか身に泌みる。

(お篠) 姉上樣とて同じやうに、年期の明くのを待ち焦れておいでなさりませう。たとへ體は汚れても、お心は汚れはいたしませぬ。

(友次郎) 何の汚れてよいものか。此の間よこした文にも、體は廓に住んで居るが、心は明け暮れ谷中の里に通うて居ると、しみじみ書いてあつたわい。――それにつけても、今宵は月のないのが淋しい。わしは月を眺めると、二人の魂があの大空の鏡に映つて、互ひの胸を照らすやうな氣がするのぢや。

(お篠 ふと下手の方を見て) お丶、御覽なさりませ。東の空が、あれ、あのやうに明うなつて參りました。もう直きお月樣が、お昇りなさるので ござります。

(友次郎) 成る程月が昇ると見える。こよひは空が

晴れて居る故、やがて此處にもすゞしい影がさすであらう。・・・・

兩人、葡萄棚の下を離れて、枝折戸の方へ歩み寄り、遠くの森かげを眺めて佇む。空がだんだん薄明るくなる。

（お篠）あれ、天王寺の森が、くつきりと見えて居りまする。あのお寺の塔の側から、お月樣が出なさるのでござりませう。

（友次郎）ほんに、母上のお墓の上から、月が此方へ昇つて來る。冥途においでの母上が、二人の心をいつまでも結びつけて下さるのぢや。

（お篠）きつとさうでござります。草葉の蔭で母上樣が、お二人のお身の上を、お守りなさるのでござります。（うづくまつて合掌しながら、塔の影を伏し拝む。）――母上樣、母上樣。姉上樣が一日も早く、御無事でお歸りになりますやう、どうぞお願ひ申しまする。

友次郎は無言のまゝ、猶もうつとりと向うを視詰めて居る。

森のうしろが愈々明るくなつて、月が將に出ようとして居る。

第二幕

第一幕から三月ほど過ぎた九月十五夜のゆふべ。同じ場所。上手の葡萄棚には房々と葡萄が實り、下手の丘のすゝきは穗に出でゝ、あたりは蕭條たる秋の景色に變つて居る。

第一幕と同じ時刻で、友次郎は奥の間に子供を敎へて居るらしいが、兩方の障子が締めてある爲めに、中の樣子は分らない。正面の部屋の爐の傍に、女房のお波が病人らしい靑白い顔をして、膝を立てゝ据わりながら、長煙管で煙草を吸つて居る。品のよい、優れた器量の女であるけれど、さすがに雛妓上りらしい面影がつゝみ切れず、ぱつちりとした、潤ほひのある大きな瞳には、惱ましげな疲勞の色がたゞよひ、動作や素振りにも何處となくしどけない風情が見える。さうして時々、さもさも氣分が欝陶しさうに、頭痛膏を貼つた左右の蟀谷を叩いたり、煙管で額をぐりぐりと揉んだりして居る。

お篠は臺所に降りて、夕餉の支度に忙しさう。

（お波）もし、お篠どの。用のところをお氣の毒でござんすが、どうぞ私に、お湯を一杯汲んで下さりませ。

（お篠）はい、畏まりました。

お篠、爐の上に吊るしてある鐵瓶の湯を茶碗に注ぎ、お波の傍へ持って行く。

（お波）毎度毎度、無精をして濟みませぬが、あまり體が大儀故、惡いとは思ひながら、つひつひそなたを使うてばかり居りまする。

（お篠）姉上樣とした事が、此れはまあ改まった御挨拶でございます。さうしてあの、今日もやっぱり御氣分がすぐれませぬかえ。

（お波）何處と云うて別段に、惡い所もござんせねど、たゞもう體の節々が觧れるやうに惰くて、頭痛がしてなりませぬ。廓を出てから今日で一と月餘りになるのに、かうして明け暮れぶらぶらと、煩ひつゞけ、内の人にもそなたにも、面目なうござんする。

（お篠）何の面目ない事がございませう。長い間憂き艱難をなされたのに、たまには骨をお休めなさるが當り前、まして御病氣なら是非ない事でございます。御用は私がいたします故、どうぞお樂においでなさりませ。

（お波　お篠の話の途中から、煙管を杖にぐつたりと體を崩し、片手で額を抑へたまゝ俯向いて居る。）そなたの言葉に甘へるやうでござんすが、どうにも私は手足がだるうて、斯うして居るのが切なうてなりませぬ。勝手ながら半時ばかり、横にならせて貰ひませう。

（すぐ其の場に倒れるが如く、ごろりと寢てしまふ。）

お篠、呆れたやうにして眺めて居たが、ふと心付いて押し入れから搔卷と枕とを出し、默ってそっとお波に與へた後、勝手口へ去らうとする。

（お波　枕もとの煙草盆を引き寄せ、煙草に火をつけながら）それはさうと、寢て居てそなたに指圖をしては濟みませぬが、今宵は母上樣のお逮夜故、何か御佛前へ供へる物を、拵へては下さんせぬか。

（お篠）はい、それは私も心付いて居りましたれど、何を云ふにも不自由な田舍のこと、立派なお盛り物も出來ませぬ故、母上樣が大好きな白味噌のお汁を供へ

る積りで、今しがた支度にかゝつて居りまする。

(お波) それはまあ、よう思ひついて下さんした。母上様も、嘸かしそなたの心づくしを、お喜びなさるでござんせう。

(お篠) どうせ私の手料理で、お口には合ひますまいが、姉上様も宜しかつたら召し上つて下さりませ。

(お波) 私もあとで御馳走になりませうほどに、たんと拵へて貰ひますぞえ。

(お篠) はい、はい、承知いたしました。

お篠、臺所へ降りて、味噌を摺り鍋をかけなどする。その間にお波は奥へ入つてしまふ。

暫く經て、奥の間の障子が明き、四五人の子供たちが、「お師匠様左様なら」「左様なら」と口々に挨拶して出で來り、お波の様子を不審さうに窃み視ながら、庭に降りて枝折戸の外へ駈けて行く。

(子供の一) おい、おい、此の間來たお師匠さんの内の伯母さんは、いつもごろごろ晝寝ばかりして居るね。

(子供の二) ほんとにあの伯母さんは行儀が悪いや。

(子供の三) そりやあさうさ。あの伯母さんは吉原の華魁なんだとさ。

(子供の四) お師匠さんは己たちにはやかましい癖に、伯母さんにはちつとも小言を云はないで、馬鹿に優しくして居るぜ。よつぽどおかしいなあ。

(子供の五) よせよ、よせよ、そんな大きな聲を出して聞えると悪いぢやないか。こんな所でしやべつて居ないで、もう歸らう。

(子供の一) あゝ、もう歸らう。今夜は十五夜のお月様だ。早く日が暮れるといゝなあ。

(子供の二) 己は此れから内へ歸つて、月見團子をたべるんだ。

(子供の三) 己もお團子をたべるんだ。早く歸らう。

(子供の四、五) 歸らう、歸らう。

子供等一様に空を見上げて、「お月様いくつ、十三七つ――」と歌ひながら、下手に歩み去る。歌の聲が長く長く舞臺に殘つて、

だんだん微かに消えて行く。

夕ぐれの日の光が次第にうすれ、あたりは漸く夜の色になる。きりぎりす、蟋蟀などの啼く音が、ぢいぢいと悲しげに聞え、勝手口の竈の煙が軒端を白く立ち籠めて、庇に渦を巻きながら這つて居る。お篠は小いさな黒塗りの膳に、焚きたての飯と味噌汁とを盛つて佛前に供へ、燈明をあげて再び臺所へさがる。

友次郎が奥の間から出て來る。佛前に跪いて禮拜し、お波の寢姿を苦々しさうに顧みて腰をかける。

（友次郎） お波はまた寢たのか。これ、お波、お波。

（お篠） つい先程まで、お眼ざめでございましたが、今しがたお休みになつたと見えまする。

（友次郎 不愉快さうな溜息をする。） いつもいつも、氣分がすぐれぬと云うて居るが、ほんとに困つたものぢやなう。

（お篠） 御自分でも、何處が惡いのやら分らぬと、仰つしやつてゞござります。折角樂しみにして居りました、姉上様がお歸りになつても、この御様子では心配でなりませぬ。

（友次郎） わしは何だか、此のごろ一向面白くない。朝に晩に、力拔けしたやうなお波の顔を見て居ると、自分も氣分が塞いで來て、がつかりしてしまふわい。

....

お篠、土間の降り口に腰をかけて、無言のまゝ項垂れて居る。

（友次郎） なうお篠、わしにはどうやらお波の素振りが、昔と變つて居るやうに見えるが、そなたはさうは思はぬかの。

（お篠） お變りなされたやらなされぬやら、私にはよう分りませねど、お病氣とあれば據ん所がござりませぬ。

（友次郎） 病氣とは云へ、格別の事もない樣子。起きて居れば居られるものを、なんぼ體の節々がだるいとて、此のやうに寢そべつてばかり居られては、人に見られても耻かしい。散々苦勞をかけた故、今日まで知らぬ振りをして、いたはつては居たものゝ、あまりと云へば勝手過ぎる。

（お篠） さう仰つしやれば私にしても、腑に落ちぬ

事がござりますが、長い間廓の風が身に泌みついた姉上様、この上ともにいたはつてお上げなされば、いづれ追ひ追ひにお直りなさるでござりませう。まあまあ御勘辨なさりませ。

(友次郎) 廓の風に馴染んだとは云ふものゝ、もとは立派な武家育ち、御殿奉公まで勤めた身で、寢ながらそなたに用を云ひつけ、煙草は愚か私に隠して寢酒までも飲むらしい。こんな事にならうと知つたら、勤めをさせねばよかつたになあ。……(暫く腕組みをして考へ込んで居たが、やがて何事か氣が付いたらしく。)さう云へば今日は母上のお逮夜、何ぞ佛に供へたいと思うて居たが、ちやうど幸ひ、十五夜の月見團子を上げたい故、そなた御苦勞でも、隣村へ往て、買うて來てはくれぬかいな。

(お篠) 先程私の手料理を、ほんの少しお供へ申して置きましたが、十五夜のことはとんと忘れて居りました。そんならちよいと、買ひに行つて參りませう。

(友次郎) では賴んだぞえ。(佛壇の下の抽き出しから財布を出し、錢を掴んでお篠に渡す。)もう日が暮れた程に、氣をつけて行くがよい。

(お篠) 畏まりました。急いで行つて參りませう。

門口へ出て空を仰ぎ、家の中をふり返つて、

(お篠) 兄上様、御覧なさりませ。お月様がお昇りになりますぞえ。

(友次郎 下手の縁先に立ち上つて) おゝ、月が出たやうぢや。夜路とは云へ今宵は外が明るからう。

(お篠) では、直ぐに戻つて參ります。

(友次郎) さ、さ、早う行つて來やれ。

お篠、急ぎ足に下手へ這入る。

友次郎が縁先に立つて居る間に、お波はゆるゆると起き上り、そ知らぬ顔で煙草を吸つて居る。

十五夜の月が、森の向うから徐かにさし昇る。

(友次郎 お篠の姿が見えなくなると、ちらりとお波を一瞥して、上手の席に戻る。) そなた、今日は氣分がどうぢやの。

（お波）はい、有り難うござんすが、今日もやつぱり、手足がひだるくものうくて、さつぱり浮き浮きしませぬわいな。（云ひつゝ興ざめた面持ちで、相變らず煙草を吸ふ。）

（友次郎）何にいたせ困つたことぢや。――常とは違うて母上の三回忌のお逮夜に、肝腎なそなたがそのやうでは、親と思うて大事にせよと云ひ遺された佛様にも、わしが第一申譯がない。なうお波、どうぞ頼むほどに、もうちつと元氣を出してくれぬかいなう。

（お波）私ぢやとて胸の中では、濟まぬ濟まぬと思ひながら、どうしたことやら元氣がなくて弱ります。まあ許して下さりませ。

（友次郎）外ならぬそなたのこと、許すも許さぬもないけれど、わしはつくづく――（云ひかけ伏目になり、かすかな、遠慮がちな聲で）そなたを吉原へやつたのが、口惜しうてならぬわい。――

（お波）私が吉原へ身を賣つたは、母上さまの御病氣を直したさ。――今になつて口惜しいと仰つしやるのは、どう云ふ譯でござんする。

（友次郎）あの時そなたを出してやるのは、身を切るよりも辛かつたが、もともと二人は命を的に契つた戀仲、三年が五年別れて居たとて、互ひの心はよもや變るまい、變る筈がないと信じて居たのぢや。わしは考へ違ひをしたのぢや。……

草葉の露にすだく虫の音、ますます繁く細やかになる。背戸の外に昇つて行つた月は、中天に懸つたらしく、水のやうな青白い光が、皎々と舞臺一面に冴へ返る。

（お波）それでは私が、誰か外に、思ふ男を持つてでも居るやうに、仰つしやるのでござんすかえ。

（友次郎）いや、いや、さうは思ひませぬ。噂に聞けば、そなたは廓で全盛を歌はれたとか云ふ話ぢやが、外に男のあるものなら、此の谷中村のあばら家へ、戻つて來てはくれますまい。

（お波）廓で逢つた川口のことは、想ひ出しても嫌

でござんすが、多勢のお客から、身請けをせうと攻められるのを斷りつゞけ、毎度々々、文に書いて上げたやうに、體は苦界に沈めても心はお前の傍に居る氣で泣いて暮らして居りました。

（友次郎）此方も其れと同じやうに、三年の間そなたの事ばかり思ひつゞけ、早くことしの秋が來て、無事な顏を見たいものぢやと、明け暮れ祈つて居たけれど、今になつて考へれば、わしは長いこと、夢を見て居たのぢやわい。

（お波）ではお前こそ、心變りをしなさんしたのでござんせう。

（友次郎）わしは未だに、そなたの爲めに世を捨てた、昔の心をなくしはせぬ。そなたと云ふものがあればこそ、斯うして此の世に生きて居るのぢや。

（お波）いえ／＼、何と仰つしやつても、變らぬとは云はせませぬ。長い間色里の水に漬かつて、男心の裏おもてを知りつくした私には、ようく分かつて居りまする。お前は變らぬつもりでも、お前の心は變つて居るぞえ。

（友次郎）わしが變つて居るとしたら、それはそなたが變つたからぢや。わしはそなたが男心の裏おもてを、知りつくしたのが嫌なのぢや。そなたが此處へ歸つて來てから、わしは何だか、急に自分と云ふ者が淺ましくなつて來た。男と生れて、そなたより外に女を知らぬ私の心が、私の體が、遊里へ通ふ男たちと、違はぬやうに思はれて來た。そなたの眼にも、定めしわしが其のやうに見えるであらう。

（お波）わたしも廓へやられるまでは、お前の外に男を知らぬ淸い女でござんしたが、三年の間の憂き勤めで、男の醜さ卑しさがしみじみ胸にこたへました。男に屍骸を預けても、魂までは汚されまいと、一途に思ひ込んで居るうちに、私はどうやら屍骸ばかりで魂のない、腐つた女になつてゐたのでござんする。

（友次郎）それ故わたしは口惜いと云つたのぢや。

そなたを腐つた女にしても、母上をお助け申すことが出來たら、せめて少しは慰む術もあらうものを、大事な親と戀人とを、一度になくしたのが口惜しいのぢや。

（お波）魂だけはお前の所へ、預けて置いた積りで居たのに、谷中村へ歸つてからもう一と月になるけれど、一旦腐り果てた體には、二度と再び、昔の心が蘇生つては來ないさうな。

（友次郎）自分の心が頼りにならぬ世の中に、人の心の變るのは當り前、わしはそなたを恨みはせぬ。恨むどころか、氣の毒に思うて居るぞえ。

（お波）その氣の毒はお互ひの事でござんする。お前にもお篠どのにも、親のやうに大切にして貰ひながら、頭が痛いのだるいのと我儘を云ひ張るのを、ようまあ今日まで堪へて居て下さんした。廓で覺えた怠け癖を、直さう直さうと思つて居ても、ふつつり世の中が厭になつて、生きて居るさへ大儀でならない今日此のごろ、かうして居るだけが私には、やうやうの事でござんする。

（友次郎）そなたもわしも、なぜ此のやうに心に緩みが出來たであらう。昔が夢か今が眞實か、夢だとすれば私は覺めねばよかつたわい。

（お波）どちらが夢でも眞實でも、互ひの心が斯うなる日には、もう此れぎりでござんせう。男の醜さを私が知り、女の醜さをお前が知つてしまつては、むかしの戀は戻つて來る筈がござんせぬ。

（友次郎）二人の戀をつなぐものは、魂と魂ぢやと信じて居たのに、實は屍骸と屍骸ばかりだつたのぢや。互ひに淺ましいと思ひながら、その淺ましさに引き擦られて、いつまで斯うして居るのであらう。

（お波）此の世に生きて居る間は、その淺ましさを逃れる譯には行きませぬ。お前もわたしも、世間知らずの若い頃には、戀の美しさが眼について、淺ましさに氣が付かなんだのでござんせう。

（友次郎）そなたの云ふ事がほんとうなら、わしよ

どうしたらよいであらう。侍の意地を捨て、浮世を捨てゝかゝつた戀を、此のまゝには濟まされぬ。戀の命の長さ貴さを信ずればこそ、そなたの心を頼めばこそ、わしは樂しく生きられたのぢや。

(お波) 魂と魂との、變らぬ戀を樂しまうと仰つしやるなら、此の忌まはしい屍骸を捨てゝしまふより外に、よい思案はござんせぬ。醜い影を此の世に殘して、あの世へ行けばお前も私も、きつと清淨な人間に生れ變るでござんせう。

(友次郎) そんならそなたは、わしと一緒に死んでくれるか。

(お波) 私は今も云ふやうに、此の世に未練はござんせぬ。生きて居ればお互ひに、愛憎をつかされるばかり故、お前さへ得心なら、死んで未來で添ひたうござんす。

(友次郎) そなたの心を聞いた上で、わしも死なうかと思つて居たが、かうまで二人の氣が合うたは、あの世でめでたく添ひ遂げられる證據であらう。

(お波) ちやうど今宵は母上のお逮夜、之れも佛の手びきでござんする。

(友次郎) そなたをこゝで殺しては、親と思つていたはれと云ふ、いまはの際の母上のお言葉に、背くやうで勿體ないが、冥途でお詫びをするとしよう。

(お波) 浮世が厭はしうなつて見れば、三年前におなくなりなされた母上が羨しい。生き殘つた私等こそ、却つて不運でござんした。

(友次郎) そなたが廓に居るころは、毎夜毎夜、天王寺の森から上る月を便りに、樂しい行くすゑを夢みて居たが、今宵の滿月は二人の爲めに來世を示す眞如の光。——どうせ死ぬならあの月かげの曇らぬうち、母上の命日に間に逢ふやうに、最後を急ぐがよい分別。

(お波) 冥途の闇と戀路の闇を、限なき月が照す宵に、お前と行けば迷ふこともござんすまい。二人の仲は此れからでござんする。

(友次郎) そなたと一緒に道の邊で、變らぬ戀を語り合ふのぢや。——それではお波。

(お波) 友次郎さま。

(友次郎) お篠が戻つて來ぬうちに、早く支度をしたがよいぞえ。

(お波) でも氣の毒なはお篠殿、私等二人が亡い後はよるべのない女の一人身、どんなに嘆くでござんせ

う。

（友次郎）妹には可哀さうでも、継の爲めには換へられぬ。二人が死んだら、お篠のことは、日頃親切にしてくれる作兵衛殿に頼むとしよう。わしは疾うから覺悟をきめて、ゆふべの内に書き置き迄も認めておいたのぢや。

（お波）私も覺悟はついて居るほどに、さうきまつたら直ぐに此れから、一緒に行かうではござんせぬか。

（友次郎）こよひの内に冥途に行つて、先立たれた母上に、早う會ひたうなつて來た。（佛壇に向つて合掌する。）——もし、母上様、お跡を慕うて、此れから二人で參りまする。

（お波、夫の傍に跪いて）どうぞ待つて居て下さりませ。

（兩人）南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

禮拜が終むと、友次郎は佛壇の下の扉から脇差を取り出し、お波にそれと目くばせして奥の間に去る。お波は輕く頷いて、行燈の明りを吹き消した後、夫につゞいて部屋に這入り、境の障子を徐かに締め切る。

行燈を消すと同時に、氷のやうな名月が屋内にさし込み、部屋の中には纔かに佛壇の燈明が陰鬱にまたゝくばかり。やゝ長い間、寂寞無音。たゞ咽び泣く虫の音のみ喧し。

稍經てから、奥の間で夫婦の呻く聲が仄かに洩れる。同時に[illegible]の音。

お篠が下手から戻つて來る。家の中が暗いのを怪しみながら、

（お篠）兄上様、姉上様、どちらでござります。どちらにおいでなさります。唯今歸つて參りました。

と云ひつゝ、手さぐりで室内を歩き廻り障子を開けて奥の間に這入る。

間もなく、殆んど虫の音に紛ふやうな、月の光に融け込むやうな、微かな、顫へを帯びたお篠の歔欷の聲が、次第に繁く激しく聞えて來る。さうして、其れが帛を裂くやうな强い調子の泣き聲に昂じて來た時、お篠は次の間へ驅けて出て、佛壇の前にばたりとひれ伏してしまふ。

（お篠）お二人様とも、そりやあんまり御勝手でござります。御自分たちの爲めばかりを考へて、跡に殘つた妹の身を、どうなさるのでござります。せめて私に一と言ぐらゐ、知らせて下すつてもよいものを、あんまり酷いではござんせぬか。……

お篠、口惜しさうに齒をもがいて泣き崩れる。

（幕）

幸福人

里見弴

近頃の彼は兎に角善良だつた。そして、日々の生活は兎に角幸福だつた。——作者は今この二つの句を繋ぐのに、「そして」と云ふ接續詞を用ゐたが、然し實際彼——この小篇の主人公——が漠然と感じてゐる所に忠實であるためには、寧ろそこに、「だから」を置いた方がよかつた。

嘗て彼は、自分が人並はづれて幸福好きに生れつきながら、——或は、さう生れついてゐるために、日々の生活が幸福であることを嫌つた。女房でも貰つて、すつかり幸福になつて了つた彼の放蕩（あそび）仲間などを見ると、馬鹿にしたい衝動を抑えられなかつた。「人間も、あゝ幸福になつちやアお仕舞だ」などゝ、警句めかして、他の友達のところへ、その納り返つた容子を喋りに出かけたりした。云ふまでもなく、その頃の彼自身は不幸だつた、——少くも、だと思つてゐた。始終、何か彼（か）にか不平を云つたり、不満を抱いたりしてゐた。

假令それが浄財であらうが、惡錢だらうが、兎に角、貧しいものが富んでゐるものを餘りよく思はないのは人情だ。「幸福」でも同じことだ。惡人が幸福であるのを見ると、彼は義憤——と云ふほどでなくとも、癪にさはつた。善人が幸福であるのを見ると、彼はセヽラ笑ひたくなつた。萬人の幸福を一度沒收して了つて、それを頭數に、平等にして渡してくれるのでなければ、彼は自分から「幸福」に手を出す氣になれなかつた。

幸福の平民である吾々の主人公は、憚りながら宵越しの幸福などに戀々とはしなかつたが、然し洗ふが如き赤貧に甘んじてゐたわけでもなかつた。幸福にも小仕事があつて、日給ぐらゐのはした幸福をセッセと稼いでゐたのだ。

その内に、いつの間にか、彼は自分が相應の幸福人であるのを見出した。もう別段不平も不滿もなかつた。つい近頃のことではあるが、いつを區切ともなく、さう云ふ結構な身分になつてゐた。

「好きな女は女房にするし、文壇の流行見にはなるし、お父さんが亡つて遺産は貰へるし、××は仕合な男だ……」

文壇第一の苦勞人を以て聞えた某大家までが、こんなことを云つてゐたと云つて、彼の友達が話して聞かせた。

「さうだね、儲かに幸福な方かも知れないね」から彼は、少しの皮肉もない、すなほな心持で答へた。さう答へる自分が、相手の目に、馬鹿げて映りさうだと思ふ不安もなく、その不安のないことが、こりやアちつと納り過ぎるかな、と云ふ自嘲にもならなかつた。

「……俺が、昔からかう云ふ身分だつたと思つちやア間違ふぞ。十六の年に、東京——その頃はまだ江戸だ、——江戸へ出て來た時には、褌一貫、着換を入れた行李がたつた一つあつたきりだ」と、亡つた彼の父が、小言の序に時々それを云ひ出した。

「お前がた、よオく伺つてお置きよ。その行李は、今だにちやんと藏つてあるがね……」これが、側から母親の云ふ十八番だつた。

父の清廉を信じ、その刻苦勤勉や質素節儉を目のあたり知つてゐる彼が、それでも、さう云ふ話になると、何んだか少し擽つたかつた。

——そのくせ彼は、自分の「幸福」の場合には、ムズリとも感じなかつた。

(俺の今日あるは、俺が善良であつたからだ。人格的努力の賜だ。偶然ぢやアない。)かう云ふ氣が、心のどこかにあつた。たゞそれを傲然と放語するには、彼の幸福の額があまり少なかつた。——二三百圓の財産では、立志談も榮ないやうに。——けれども兎に角、彼の幸福が「淨財」であることだけは信じて疑はなかつた。

——それでは、今度は云ひ直さなければなるまい、——近頃の彼は兎に角善良だつた。だから、日々の生活も兎に角幸福だつた。と。かう聞けば、吾々の主人公と、幸福の財産家である讀者の多くが、初めて會心の笑を洩して頷くだらう。さうして、幸福の貧乏者である讀者には、この物語は、頭から氣に入らうが筈がない。

然し、幸福なる吾々の主人公も、他人の幸福の場合になると、いくらか自負してゐる彼の世間智から推して、「善良だから幸福」と云ふ斷定を、無條件に肯ふことは出來なかつた。世間には「不仕合な良い人」や「仕合な惡人」の例が腐るほどあつた。芝居で見ても、良い家來は大抵不仕合で、奸臣佞人がきつとうまい汁を吸ふことになつてゐる。尤も大詰に來ると、パタ〳〵と片がついて、決局「勸善懲惡」が明白になり、善玉の勝利に歸する仕組みにはなつてゐるが、然し實世間では、仲々さう仕組んだやうなうまい譯にはいかなかつた。彼の短い既往から、乏しい知人交友のなかゝら、下らない例を擧げるまでもない。現に、かの勸善懲惡の教を亡ぼしたものは、世にありふれた事實の仕業ではないか。人を殺しても榮達しやう、牛肉の代りに小石を賣つても金を得やう、――それで實際大臣にもなれば、富豪にもなる。勸善懲惡でなければ作のつゞまりがつかなかつた時代でさへも、大勢の人々の幸福のために、蘆の湖の水を三島の方に引かうとして、兄弟二人で、一生かゝつても足らないほどの大工事をコツ〳〵とやつてゐたばかりに、彼等の首が胴を離れて了つたと云ふのだから、恐ろしい世の中だ。然し恐ろしがつてばかりもゐられない世の中だ。一體だれがそんな世の中を拵へたのだ。人を拵へたものが神樣なら、その神樣だらう。が、直接の下手人は矢ッ張り人間だ。人の心が、さように住みよく、さように住み憎い世の中を拵へ上げたのだ。棚から牡丹餅のやうに、惘然と幸福の來るのを待つてゐると、餓死になる。と云ふのは體ばかりの話ではなく、あたまでも心でも、腹をへらすに變りはない。そこで幸福を見つけに、鐵の草鞋をはいて、人が立ち上らなければならなかつた。善良に、極惡に、敏捷に、薄愚に、丹念に、大まかに、そして、見當よく、或は見當違ひに、遠くまで、ついそこらまで、樂々と、或は骨身を

碎いて、——人それ〴〵の探し方があつた。若しも勸善懲惡の教に人心が歸嚮して、誰一人それを疑ふもののない時代があつたとすれば、誰が惡の道を辿つて幸福を探しに行かう。それを敢てした第一人者は、狂者でなければ、大勇であつた筈だ。

然し道が從横無盡になつて了つた今の世の中では、そして幸福が飽まで個人的になつて了つた今の世の中では、釋迦や孔子や基督の踏み拓いた大道もくそ喰へと、己が目指す幸福へ、どこでもかしこでも、遮二無二押して行くことになつた。運さえよければ、どこから、どう云ふ方法を取つても、望む所へ行きつける。——かう云ふ實用向きの教が成り立つてゐる世の中に、吾々の主人公が生れてゐた。

年のいかない彼にも、少しは勸善懲惡の文學に養はれた時代がある。また、學校の修身はその類を以て集められてゐた。ところで、ぶちこはしは科學だつた。一に一を合して、二でもよし三でもよさゝうな話では承知できなくなつた時には、既に彼は自然人とは全く別の人種だつた。神の存在を、善が善であり惡が惡であることを、立派に證明して見せる方定式も、實驗の方法もないのだ。一寸したことなら、母も兄も嘘をつくくらゐ平氣だつた。監督者にさえ見つからなければ、どんな惡いことをしても、必ず惡い報ゐが來るわけではなかつた。善いことをしても、陰でするのでは、誰も褒めてはくれなかつた。子供が、幸福と云ふものは何んでも外から來るもの、かう考へるのは當り前だ。「おとなしく待つてたら、いゝおみやを買つて來てあげる」この形をほかにして、善とその報ゐとを說く親はない。良心の愉悅だ、良心の苛責だ、安心立命だ、不安だ、さう云ふものが、小供にないとは云へない、たゞそう云ふものが「幸福」そのものであ

り、「不幸」そのものであるなどゝは、彼等は思ひもよらない。惡事をして得た幸福の威が、良心の苛責よりも大きくて、全く後者を覆ひ盡してゐたからとて、その子の道義心を疑ふ親もあるまい。

中學の一二年の時、吾々の主人公は、友達と近縣へ鳥打ちに行く約束をしたことがある。その時分彼の父は或る私設の鐵道會社の重役をしてゐたから、そつちの線の汽車には、彼等家族のものまでいつも上等のパスでたゞ乘りが出來た。そこで連れの友達のために、兄の名儀でもう一枚パスを貰つて、二人で大威張で上等の車室に踏ン反り返つた時には、彼は限りなく幸福だつた。鳥打ちも面白かつた。所が、翌日電報で呼び返されてみると、父は、今からさう云ふ不正直なまねをするやうでは、碌なものにはならないぞ、と以ての外の立腹だつた。實にそれは、彼にとつて晴天の霹靂だつた。叱られてみれば、ワア／＼泣いて自分の罪を後悔するやうな氣にはなつたが、然し、どこかに不平があつた。父に對してゞはない。彼の素晴らしい幸福をメチャ／＼にしたのは、人を僞つてはならぬと云ふ掟だつた。翌日父の嚴命で、運輸課長のところへ謝罪に行くことが、小供らしい負惜みからばかりでなく、どうしてもイヤだつた。誰にもあやまるわけはない、と思つた。豫め良心の苛責と云ふ警戒を與へもしずに、折角得た幸福を、だしぬけに捥ぎ取つたばかりでなく、罪の重荷までも降りかけたやつが、飽までも恨めしかつた。

さうかと思ふとまた、六つか七つ位の時分に、良心の苛責でヒドイ目にあつた覺えもあつた。茶簞笥の引出しから驗溫器を見つけ出して、水銀を下ろすつもりで、人眞似に振つてゐるうちに、火鉢の角へ打ち當て、見事に毀して了つた。あたりを見廻して、誰も見てゐる者がなかつたのを知ると、こりやア叱られないで濟むぞ、と云ふ氣が、微かに彼を捉えた。大急ぎで、然し注意深く硝子の破片を集めて附

に納め、そつともと通り引出しに藏つて置いた。その次に驗溫器の必要が起る時まで彼は無事だつた、——そとからは無事だつた。けれども、この最初の罪の意識は、彼を苦しめぬいた。誰か側に人がゐて「まア、何をなさるんですねえ……」と、立つて來て、母親に告げでもした結果の方が、どれほど樂なものであつたか知れない。そのことも感じられてゐながら、一旦人を誤魔化すつもりで、綺麗に破片を片づけて了つたことが、——時機を失して了つたことが、どうしても今更ら白狀する氣にさせなかつた。暫く後に、それが發見されて、誰のしたことだらうと云ふ評議になつた時にも、彼は白を切り通さなければならなかつた。驗溫器を毀したことは罪とは云へないほどのことだつたが、それを誤魔化さうとし、そのことに就いて人を僞つたために、段々自分から苦みのなかへはまらなければならなかつたのは、慥かに彼の不幸だつた。彼は可なり大きくなるまで、この秘密な苦みを背負い込むで了つた。

惡いことをしても幸福を得ることもあつた。また惡いことをしたゝめにそれを失ふこともあつた。——

——要するに彼には解らなかつた。

他力本願の佛敎徒である彼の母親は、よく寢物語りに、地獄極樂の話しをして聞かせたから因果應報の理は、幼い彼の耳にも熟してゐた。後の世で、牛や馬に生れて、苦しい思ひをすることは、慥かにイヤだつた。恐ろしいとに思はれた。然しそれは、これから大人になつて、年寄りになつて、それから死んで、そのまたさきのことだ、と云ふ遠く隔てた感があつた。その上、よく「南無阿彌陀佛」を繰り返しさへすれば、わけなく遁れることが出來ると聞かされてゐたから、それほど驚かなかつた。大低毎晩、母親の背後にチヨコナンと座つて、阿彌陀經をあげる間、小さな蠟燭の光や、香の煙の立ち騰るのを、ポンヤリ

眺めてゐた彼は、そのうち、若一日、若二日、若三日、……と若七日まで云ふ所などは、待ちうけてゐて、一緒に聲を合せるやうになり、仕舞には殆ど全部あとをつけられるやうになつて了つた。句調のいゝ所や、繰り返して何遍も同じことを稱へるやうな所は、今だにどうかすると彼の唇に滑り出るほどだつた。そんな風で、彼はもう一かど極樂行きの資格を得て了つたやうに思つてゐた時代もあつたのだけれど…。

學校へ出るやうになつた當時の彼は、新入生と云ふものをヒドく虐待するその頃の學習院の風習と、二三の餓飢大將の下に、それ／＼の黨派を組むでゐた同一級生の氣風とで、可なり辛い思ひをした。初めて「荒い風」にあたつたのだ。理由のない不幸のあることを知つたのだ。中學に移る頃からは、然し、彼もそろ／＼古顔になつて、羽根を延しだした。隨意課であつた柔道をやる。片瀨の水泳場へ行く。同好の者と回覧雜誌を起す。運動會でも負けてばかりゐる方ではなかつたし、相應に惡戯をして罰も受けた。級中でも、ゐるのかゐないのかわからないやうな學生ではなかつた。殊に彼には年上の友達が多かつたせいか、いつも年よりは早熟てゐた。芝居、錦繪の蒐集、小說、旅行、こんな「趣味」が夙から彼に現はれて、じみちな課業の勉强を怠屈なものにした。そのうちで旅行錦繪とは、うちでもヤカマしく云はなかつたが、小說と芝居とは、どうしても「かくしごと」にするよりほかなかつた。兄が小說本を澤山有つてゐたから、その方は、手當り次第持ち出して來て、勉强部屋でソッと讀んでゐるに差支はなかつたが、芝居の方は、電車も今のやうではなかつたから、兎角夜が晩くなるのでバレやすかつた。よく、一刻も早くと、電車の來るのを、丁度試驗の答案をみんなズン／＼出して了ふのに、自分ばかり出來

ないであとに殘つた時の、肉體のあたりからムズ／＼と寒くなるやうなワク／＼した心持で待つてゐたりした。然しそれも好きな芝居を見る幸福と比べれば、云ふに足らないほどのことだつた。

若葉のやうに萠え出る好奇心で、幸福の破片を、次から次へと漁りだす時が來た。喫煙、玉突、落語、女義太夫、――かうなるともう、食物の贅を云ひ、酒のよしあし、女の醜美、着物の縞柄から着丈の寸法にまで、ぬからず氣がつくやうになる。乳のなかに、釦のやうなグリ／＼したものが出來たり、肩がはると云ふ味を覺えたりする年ごろだ。嚴しい母親の目を盜むで、乏しい小使と、僅かな世間智との許す範圍で、コソ／＼と、ガツ／＼と漁り始めた「幸福」は、不思議に、暗いところ、よくないところ、本能的に人前の恥ぢらはれるところにあつた。――或る種の日本紙に、抵抗すべからざる誘惑を感じさせる或る悦樂。――これは實に、常時の彼にとつて、幸福と不幸との峠だつた。何ものにも代え難い快味の坂を登りつめては、慚愧後悔の暗い谷底へ轉げ落ちる、――これが生活の沸騰點だつた。幸福とも不幸とも片づけて了ふことの出來ないものだつた。

更にこの沸騰點が騰つた。陷らなければならなかつた谷の暗さも深さも増した。それをいやが上にも、暗く深く見えたものは、トルストイの「復活」だつた。この本は彼の心にとつて、實に恐るべき搾木だつた。

「惡行は悔ゆるを得べし。されど惡心は悔ゆるを得べからじ。そは總ての惡行の母なり……」この言葉で彼は頸ッ玉を押へられて了つた。童貞の頃、彼は恣な空想に身も心も委ね盡しながらも、それを「罪」とも「惡」とも感じなかつた。それは、誰にも尻ッ尾を押えられッこのない。無形のものだつた。そし

てその「母」から、次第にヒドイ生活が生れ、「惡行」となつて現はれた時に、始めて彼は「悔ゆる」心を識つた。併も、その「母」である、蛇のやうに住生ぎはの惡い「惡心」の頭をつぶして了ふことが出來ないでゐた彼は、トルストイの云ふやうに、それに向つては、後悔の刀先を向けることすら出來なかつたと云ふことが出來る。

所で、その蛇の頭をつぶして、再びのたくり出さないやうにして了ふと云ふことは、彼にとつては、生活から、その沸騰點を奪つて了ふことだつた。その上彼はまだ、放埒な若旦那ネリユウドフが享樂したやうな、若くて美しいマスロワの戀やからだを享けたことはなかつた。今に見ろ、と舌舐めづりをしながら、それを待ち構えてゐるくらゐなもので、いゝ加減何も彼もし盡して來たネリユウドフとは、年齢にしたつて半分行つてゐるかゐないかだつた。併も彼は、どう反抗しやうもないほど善良な、眞面目な、ネリユウドフの嚴命によつて、母にして丁度いゝほど年上の、賤しく醜い「マスロワ」の前に、總ての我慾を捨てゝ、懇ろに赦しと愛とを乞はなければならないハメになつたのだ。

(……それ位なら……死んだ方が餘ッ程ましだ……)

後悔を素通りに通り越して、彼はもう自棄くそだつた。夏休に、四五人の友達と自炊生活をやつてゐた別莊の一室で、或る晩、彼は蚊帳の裾をまくつて出た。もの置き場にしてあつた袋戸棚の上には、帽子や鑵詰や、彼の頸ッ玉を抑えつけたモウドの「復活」の英譯その他の書物や、髭剃道具などが亂雜に載せてあつた。そのなかゝら、手さぐりで、彼は西洋剃刄を把つた。恐ろしくて、體が顫えた。ケースのまゝそれを膝の上に持つて、眞暗な部屋の隅に、安座をかいて坐つたきり、それから先へは、どうする

にもかうするにも、身動一つ出來なくなつて了つた。暫くさうして顫えてゐるうちに、いつの間にか死なうなど丶云ふ氣は、拭ひ捨てたやうに消えて了つた。

(明日東京へ歸つて、これまでのことを赦して貰つたら、それきりもう必ずこれまでの生活から脱け出して了はう)かう思つた。「惡心」は殺しきれないまでも、「惡行」だけはきつと自制してみせる。――それ位の所で勘辨して置いて貰はう、と云ふ所に妥協が成り立つたのだ。

夜通しマジ／＼ともの思ひに耽つて、明方、お伽噺の勇者が不思議な劍で武裝でもするやうに、久し振りで或ることをして、それからマスロウの前に、覺醒したるネリュフドフとして歸つて行つた。いかにだらしなく終つたとは云へ、兎に角死なうとまでした彼が、そこにどう云ふ結果を見出したか。――呪禁が行はれて、不思議な利劍もバラ／＼に打ち砕かれて了つたのだ。――有繋に、(俺のはマスロフが惡いんだ。あいつに理解がないから……)とは考へてゐられなかつた。つく／＼自分のだらしのなさにめいり込んで了つた。

その翌晩、彼は或る尊敬してゐる先輩と二人で往來を歩いてゐると、急に雨のない大雷鳴が鳴り破めいて、市の西北に當る暗い空に、紫色に光る筋が、顫えながら現はれて消えた。その一と筋が、二人の頭の上へ落ちて來ることを、自殺を斷念した彼は、心の底から祈つてゐた。みじめな心が頓死を祈るまでになつてゐながら、併もまだ、尊敬する友達を、冥土の道連れに欲してゐた。

かう云ふ心にまで墮ちながら、(それは僅かな間に、雜作もなく墮ちて了つたのだが)尚ほまだ「良心」にと手が切れない彼は、望み通り、自分を不幸な人間だと思ふに、充分理由があつた。

吾々の主人公は、徐々に價の下つて行く幸福と、段々量の増して行く不幸との供給者である老つた醜い下婢との關係を、「秘密」の袋に入れて、首縄のさきの錘として、ヅル／＼引摺つて行つた。そしてそれを、始終、苦しい、恥づべき、情ない、堪へがたいことゝ感じさせる「良心」と手を携へてゐた。

併も彼には、その縄を斷ち切る力が萎えてゐた。自然、錘の自滅を希ふ心が折々頭を擡げた。高い熱で、囈言に何か喋られでもしやうものならと云ふ怕れから、女が病氣に侵されることは心配したが、頓死が來ることは、幾度心に描き念じたか知れなかつた。さう云ふ彼の目前に、女が三月に亘つて見るものを見なかつたと云ふ事實が現はれて來た時には、彼は頭の毛を掴むで悶えながら、（いよ／＼破滅だ！）と思つた。そして、あゝ云ふ何んのために生きてゐるのだか解らないやうな女のために、自分のやうな、若い、これからどんなことを仕でかすかも知れない男の一生が、メチヤ／＼にされるとは、あんまり人類經濟を思はないやり方だ、と、さう云ふわる惡戯を企てた何ものかに向つて、烈しい憤りをもつた。所が、彼が「一生」と信じた、――その實は、彼一人のつまらないヴアニテイー――を脅したものは、遂にその「父」を證明しない肉塊として終つた。云ふまでもなく、彼は勇み立つた。小ざかしくも彼を脅したものに向つて、「へゝン、どんなもんだい」とせゝら笑つてやりたくなつた。然し、程經て後に、それが自然にさうなつたのではなかつたことゝ、それの「親権」を、同時にまた「親責」を有つてゐたものが、彼以外にもう一人あつたことゝを知つた彼は、自分の吐いた唾が、顔の上へ落ちて來た思ひに、銷氣返つて了つた。自分ほど、輕薄で、馬鹿で、それで傲慢な、イヤな人間はないと思はなければならな

かつた。

かの「秘密」の大袋は、次第に綻びかけて來るし、内味は、「不幸」ばかり多くなつて、「幸福」はヒドく貧弱なものになつて了つた。丁度そこに彼の放蕩時代が始まる。

芝居や落語や小説などでばかり名染深くなつてゐた遊里の、「小道具」の多い遊びが、彼を有頂天にした。僅かな金で、奴隷のそれにもました屈服や阿諛を購ふことの出來る男女や、一夜のうちに幾度も會つたり別れたりする毎の痴話口説や、平常着つけない、襟のかゝつた袢纏や、夜更の陰氣な長い／＼廊下や、時分はづれに突つく鍋や、本部屋がなけりやいやだ、などゝ甘へる寢話や、總ての些細なことまで、面白がり屋の彼には氣に入つて了つた。何よりも第一には、幸福を即金で買つて、あとには何んのいゝ、まつはりも殘さないで濟むところが、これまでの重荷を背負ひ込まなければならなかつた關係とは、比べものにならない自由な氣輕さ氣樂さだつた。その上、同じ額の金でも、時によつて幸福の度に甚だしい差別が生じる所に、投機的な興味を懷くことも出來た。けれども、全く同じ形で、幸福は二度と來ない。だん／＼興味だけの幸福では動けなくなつて來るのが、彼の性分だつた。或る、これも年上の女の所へ、戀ひ心をもつて通ひだすやうになつた。同時に、例の大袋は、相變らずズル／＼と引摺つてゐた。

その時分彼は、文科大學に籍を置いてゐたが、試驗の時以外にはまるで教室に出ないで、ブラ／＼遊び歩いてばかりゐるやうな學生だつた。仲間のものと文藝雜誌を出してゐたが、世間でも相手にしず、彼自身も、まだ力一杯の仕事にかゝるだけの、眞面目さは有たなかつた。いつもたゞ、「サア／＼サア、かうしちやアゐられないぞ」と齒をするばかりで、泥深い沼に陷ちたやうな生活から、どうしやうにも、

かうしやうにもあがきがつかなかつた。親たちの監視するやうな目、小言、こゝさえ締めて置けば大したことが出來る筈はないと云ふ心持を露骨に表はして、內輪に〳〵と渡される小使錢、時々侵される惡疾、女の手紙と見るときつと開封しながら、どうしても醜聞を抑えさせないイヤな執拗の爺、――總てかう云ふことは、彼のあたまには、我慢出來ないほど厭はしい不幸なことゝして映つた。然しさう云ふものゝどれよりも更にイヤなものは、自分自身だつた。彼には、全く必要のない下らないことで嘘をつく習慣があつた。何んでもすぐ解つて了つた氣で、惡く通がりたがるオッチョコチョイがあつた。利己的でヒドクヴァニティが强かつた。凡そありと有ゆるイヤな性分ばかり集めて拵え上げた人間のやうに思はれた。そのくせ友達には、始終自分を一とかどの人間に思はせて置かなければ承知が出來なかつたから、少しでも忠告めいた言葉だと、おそろしく不懌な顏と、沈默とで答へるやうな風だつた。ひとの前の彼と、一人きりの彼との間には、大變な相違があつた。我ながら感心するほど、油斷のない巧な技巧で、始終虛構い人格を操つてゐる彼も、その技巧を保ち續けるだけの緊張を失ふほど、醉つたとか、勞れたとか云ふ場合には、うつかり本性を現はして了ふことがあつた。さう云ふ場合の自己嫌惡は特に烈しかつた。それを、二重にも三重にも感じた。自分の踏みはづして陷つた下等さにまで、相手を引摺り落さうとしたり、自己嫌惡の毒汁を相手に注射しやうとしたり、種々な惡足搔までしなければ、その失策の腹立ちが癒えないやうに思つた。

　部屋住と云ふ境遇に伴ふ不自由よりも何よりも、彼の最大の不幸はこの二重の生活にあつた。自己嫌惡にあつた。旣に生得の性質に澤山の強いもの、イヤなものを自ら認めて、それをどうすることも出來

ないとならば、彼はそれだけで充分不幸だつたが、併も其上に、荷厄介にも、もう一つの世にも不幸があつた。そして彼のヴァニティは、その第二人格を撤回することを、どう云ふキッカケに於ても許しさうもなかつた。——慥かにこれは、不幸な生活だと云へる。

たゞ一つのよいところは、然し、彼の性質のうちに、惡いもの、イヤなものを認める、その心だと考へた。己を嫌惡するその心持は貴いものだと考へた。若しそれがなかつたならば、彼の生活はもつと幸福だつたに違ひない、——少くも不調和はなかつたに違ひない。併もその幸福を嚴然と排けずにはゐられない、不幸な性質が彼にあつた。そして彼の執念深い强みも、矜も、そこから湧いて來る力だつた。——して見ると、人並はづれて幸福好きな吾々の主人公が、不幸を喜び、幸福を厭つたのは、己を悲劇の主人公として感じてゐたいと云ふほどの淺墓な興味からではなかつた。云ふまでもなく、然し、それは當時の彼に意識されてゐたことではない。若しも彼が、意識的に、より安價な幸福よりも、彼の苦しい不幸に價値を認めてゐたのならば、何事にも兎角技巧に走り易い性分の彼にあつては、かのすさまじい自己嫌惡の情も、恐らくは、己を磨き、己を鞭打つ一つの手段として、その興奮と生氣と深さと感激とを失つて了つただらうと考へられる。さうでなかつたゝめに、彼は澤山な時間を浪費し、澤山な精力を消耗し、或る時期には、幾度となく自棄になつて、無理想、無解決を眞の自由だと信じたりしたけれども、要するに、現在幸福でゐる彼から云へば、この不幸こそ、彼に今日あらしめた、大きな幸福の一つであつたと云はなければならない。

やがて、彼には然し、自己嫌惡の暗さ、複雜さ、苛立たしさ、神經質さに、クサ〳〵して了ふ時が來た。上から羽織つた人格の、面倒な取扱ひにも、飽々して了ふ時が來た。

(何んだつていゝぢやァないか、うるさい。惡けりや惡いでいゝぢやァないか。そんなにガッ〳〵しなくつたつて、よくなるものはよくなるし、惡いものは惡いで、それで結構ぢやァないか。)こんな氣になつた。醬汁を五合も飮んだやうに、胸さきの惡い、自己嫌惡の感情に飽々して、もう少し大まかに、おつとりと、小綺麗に暮してみたい心持が起つて來た。

(それが、例の安價な幸福を希ふ心だ。許せない墮落だ。)と云ふ聲は勿論彼のなかにあつた。彼はまた、それに對してかう答へた。

(始まり〳〵。一に反省、二に自己嫌惡、三に泣面、四に自棄くそ。お名染の手順でござァい。己に不滿がある間は必ず進歩がある。そこがお前の覘ひどこだ。俺は始終進むでゐるぞ、——この安心が得たさに、お前は、あゝした、かうした、のべつに自分に難癖をつけて喜んでゐる。「不幸」と云ふ、ちとピリッと來る冷水のなかでは、生々と游ぎ廻る魚も、「幸福」の微溫湯へ放すと、存外腹を上にして浮き上つて了ふものだからね。それが恐さの不幸三昧か。馬鹿々々しい。いゝ加減に尻ッ尾を出しちまへよ。お前は元來、人並はづれた幸福好きなんぢやァないか。)

何年來著通したよそ行き人格を、綺麗に脫いで了ふには、暫く一人でゐることが必要だと思つた彼は、大凡の見當を畿内あたりときめて生れて、初めて、父母の家を離れて住むことにした。

出かけてから、大阪に落つくことにして、彼は或る藝者の住居——方言で「屋形」と云ふもの丶二階

を間借した。階下では老妓と若い妓と、親子して稼いでゐた。

彼は、おつとりと、何ものでも、幸福でも不幸でもすなほに受け入れやうと云ふ心組でゐたが、永い習慣の後に、それは何んだか自分が馬鹿になつたやうな、生活が白紙になつたやうな、氣のぬけた感じがしてならなかつた。そして、相變らずだらしのない、そのくせイヤ味な性分から、どうかすると、手を切らうとしてゐる故の自己嫌惡とも、イヤ應なしに顔を合はせなければならないやうな、フヤケた生活をして居た。それでも、さう云ふ時でも、以前のやうに、さう苛々したり不機嫌になつたりしないやうに努めるだけがいくらか變つた所だつた。

情夫の惚氣ばかり云つてゐる階下の娘に、彼は好意を有つた。彼には、東京をたつ前に、本氣で婚約をして來た若い娘があつたから、こゝにまた別な戀をしやうとは毛頭思はなかつた。娘の方では、彼を人のいゝ親切な初心な坊ッちやんのつもりで、時にはいくらか弄ぶ氣かなんかで、情夫の胤を腹にもちながら、きはどいことを平氣で云つたりした。それをも彼は虚心で受け取らうとした。――さう云ふとそこに輕い努力でもあつたやうに聞えるが、實際彼は、この人形のやうに單純な娘を、理屈なしに好きになつてゐたから、どんなことでも平氣で受け取れた。

翌年の或る酷暑の日、彼は東京に歸つてゐて、かの婚約をした娘と、品川の海に近い料理屋と宿屋とを兼ねた家に這入つて行つた。座敷に通つて暫くすると、娘は女中に案内されて、一と風呂あびに立つた。彼も氣持惡く汗になつてゐたが、一緒に行く氣がしなかつた。――娘は殆ど一年ぶりで彼に逢つた喜びと、以前に變つた彼の無感情な容子とで、妙に亢奮してゐた。それを見ると、彼は何んとなくめい

つて了つた。心は靜かだつた、しかし淋しかつた。この――今度こそマスロワと呼んでも似つかはしい娘の前で、彼は今度はもう苦悶するネリユウドフではなかつた。自己嫌惡の代りに、しめやかに、娘の心を悲み想ひやるやうな彼だつた。これから娘に、婚約を取り消すことを申し出やうとしてゐる彼の心には、引き込まれるやうな憂愁のほかには、不思議に罪惡感はなかつた。娘が、債權者のやうに、彼の前言を「證書」に、ガミ／＼と肉迫してくれなければいゝが、この心配よりほかには、彼の靜かな心を亂すものはなかつた。

彼は座布團を枕に、冷々とする廊下に仰向に寢ころんで、足を沓脫の上の庭下駄に置いてゐた。そして午後四時頃の、まだ光り耀いた――然し都會らしく霞むだ空を、細目をして、組み合つた睫の間から見詰めてゐた。その時彼の心は全く空洞だつた。體も、いゝ時計のやうに、どこに一つ故障なく、靜かに血の流を環らしてゐた。「あゝ、幸福だな」とも何んとも思はないほど、いゝ心持だつた。

娘が歸つて來て、部屋を通りぬけて、眞直に彼の枕もとに來て座つた。貸浴衣を着た肥つた膝が、ぼんやりと彼の視野のはづれに映つた。しかし、彼は口が利きたくなかつた。

「寢ていらつしやるの」

風呂の匂ひのする顏が、大きく彼の上に現はれて來た。

「寢てやしない」かう云つて彼は起き上らうと思つたが、今までの無心の境がいかにも名殘惜しくて、もう暫くさうしてゐたくなつた。

「何を考へていらつしやるの」

「何んにも考へてやしない」

「あてゝみませうか。——貴方は、私がイヤにおなんなすつたんでせう。それで、どう云つて断らうかと思つて、それを考へていらつしやるんでせう」

勝氣なこの娘は、(もう我慢出來ない)と云ふ風に、急に感情の堰を切つて落しながらも、もの云ひは、いつものやうに緩しやうと努めてゐた。それは殊勝なことだつた。若しさうしなかつたらば、この、事實を憾めるよりは、道徳上の非難であり詰問である彼女の言葉は、彼の靜まつてゐる神經に、惡い刺戟を與へたに違ひない。

「今は全く何も考へてはゐなかつた」と彼は微笑みながら答へた。「然しそのことは隨分永い間考へた。どうしやうかと思つて考へたんで、どう云はうかと思つて考へてたんぢやアない」

かう云ひながら起き上つた彼の顔を、娘は、我ながら恐れてゐた豫覺の的中に失望した、熱した大きな目で見据えた。

彼のこれまでの經驗で、別れ話が、涙に浸されたことがある、自棄になつて、下等な憎惡に歪まされたことがある、互の要するものを最後の一適まで得讓したと云ふ、我慾の滿足と傲慢な無關心とで落着したことがある。それ等の記憶の絞り汁である不快の念が、不意に彼を脅かした。——娘に云はれたやうに、どう云はうかゞ第一の問題になつて來た。そしてそれには全くあてがなかつた。顫え戰く心で、次の言葉を待ち構えてゐる娘を前にして、彼はそれきり默つて了つた。

「何故急に私がイヤになつたのです」娘がたまり兼ねて、石のやうになつた心を、そのまゝ言葉の調子

に現はして云つた。それは、「ほかに好きなひとが出來たのか」と云ふ質問の、婉曲な云ひ廻として、彼にうけ取られた。直接な答が、早く終決を持ち來たすと感じられた。

「好きなひとが出來た。濟ない、氣の毒なことだけれど、どうも仕方がない」

娘の目に、見てゐてもハッとなるやうな、劇しい影が通つた。嫉妬と憤りと輕蔑と悲みと。

「貴方、それでいゝんですか」

「悪いかも知れないが、いゝと思ふ。心からよかつたと思ふ時が來ることは、もつと慥かだ」

「貴方お一人のことぢやないでせう」

「俺はお前との關係の初めにだつて、自分一人のことを考へてゐた。だから今からなつたとも云へる」

「貴方はそれでいゝでせう。私はどうなるんです。私の身にもなつて下さい」

「お前が俺の女房になつたとしても、どうなるか解らない、――必ず幸福だかどうだか、それは解らない」

「それに何故貴方は約束をなさつたんです。それにおまけに……」娘は口が利けなくなつたが、それでもまだ健氣にも涙は抑へてゐた。

「それはみんな俺がお前を愛してゐたからだ。そのほかに理由のありやうはない。まさか俺もお前を弄ぶために心にもない婚約をするほどの人間ぢやアない」

「何故それほどの愛をお捨てなすつたんです」

「お前を愛したよりもヅッと餘計に愛する女が出來たからさ。一つ愛が別なところへ移つたのぢやアな

い。別に、もつと强い愛が出來たんだ」

「隨分臆面なくおつしやる」

「然し惡意で云つてるのぢやアない。早く解つて貰はうと思つて云つてるのだ」

「いつまでたつたつて解りやしません。私はどうしたつてイヤです。幸福だらうが、幸福でなからうが、私は貴方の——貴方の女房になりたいんですもの」急に、夕立のやうに娘は泣き出した。彼は困つたと思ひながらも、嬉しい氣がした。そして、何故俺はこんないゝ娘を苦しめなければならないのだらうと思つた。慥かに大坂の娘よりも利口で氣丈で緊張してゐる、とも考へた。然し彼の愛する心の方向は、それ等の故を以て易く動きはしなかつた。——烈しく顫えてゐる肩に手を置いて、涙を拭いてやりたい氣は、慥かに、生々と動いてゐた。然し、さうしなかつた。暫く彼は、惘然と眺めてゐた。そのうちに目のなかゞ熱くなつて來た。

(こんな立派な娘を、こんなにまで苦しめながら、エラさうに構えてゐられるやうな權威が、俺のどこにある。暴慢だ。俺が惡かつたんだ。大坂へなんぞ行つたのが仰々惡かつたんだ。)かう思ふやうになつて來た。娘の不幸を、はたから自分の心に感じるだけで、彼はその不幸に堪えられないやうになつて來た。

「貴方はあんまりヒドい……」と娘が涙のなかゝら云つた。

「……ヒドい。ほんとにヒドい……」と彼は、心から同感して呟いた。然、彼の俄かな心持の變化を、泣き伏してゐる娘は、彼の表情から見てはゐなかつたから、彼女はしかしこれを嘲りの言葉のやうに釋

つた。

「……口惜しい。馬鹿にまでされて……。貴方は惡い人だつた……」

「惡い人だつた。然しよくならうとしてゐる人だ。今でもお前が思ふほど惡い人ぢやアないと思ふけれど、それをお前に吹聽するのはいかにも心苦しい。然しかう云ふことは解つて貰ひたい。私がオッチョコチョイにお前と約束した時よりも、かうして慘酷な破約を强いてゐる今の方が、自分ではいゝ人のつもりでゐると云ふことだ」

別れやうとしてゐる人に、彼はこんなことを云はなければゐられない心持になつて來た。娘の苦みも悲みも無駄にはしない。どうか彼が善いと思ふ道を進ましてほしい。曾て娘を幸福に感じさせてゐた、その程度の善さにまで引き戻させてくれるな。かう云ふ歎願が彼の胸にあつたが、然しそれは、自分の善さを目のあたりに示すべき何物も有たない彼の口からは、厚かましくて、とても云へないことだつた。併もそれが通じない間は、彼が望むでゐるやうな、理解のある別れ方は出來ないのだつた。その上、よしそれが通じたとて、娘の苦みと悲みに、いくらの慰めをそれが與へ得るものとも思へないことだつた。——彼の力の頂上が來た。結局この娘との別れ話は、土地と時との隔りに依賴して、弱々とした心に深傷を負つたまゝ、彼は大坂へ逃げて行つて了つた。

大坂の愛人が生むだ彼の最初の(さう云つては、かの肉塊で終つた、父の候補者を二人有つたものを、無視した厚顏だと、吾々の主人公や或る讀者が感じるならば)第二の子が、五十日たらずで死んだ。こ

れは、有ゆる過去を明るく眺め得るほど幸福である現在の彼に云はせても、傷しく感じられる不幸の一つだつた。まして當時の彼は、悉く哀情に殉じつくしてゐた。

人並はづれて子好きな彼が、愛人との間にその子を享けた悦びは、實に、その日から世の中が急に明るくなつたやうな思ひだつた。どんなに愛しても愛し足りないやうな思ひだつた。――その幸福をだしぬけに取り上げられて了つた時には、

（一體こりやどうしたと云ふことだ、親から子が死んで行く、――こりや不思議なことだ。）と、吃驚するやうな心持すら感じられた。

初め彼は「勸善懲惡」や「因果應報」を嘲つて、さう云ふ思想を覆すことを動機（モティフ）としてゐるやうな、當時「深刻」とか「皮肉」とか云ふ評語で傑作に數へられた小説などを讀むと、專ら痛快に感じた。次には、幸不幸は一つに主觀の問題であつて、善をなして幸福を感じるとも、惡をなして幸福を感じるとも、それは全く各個人の素質の如何によるのだ、と思つた。その後だん／＼に、善をなして不幸に感じ、惡をなして幸福であると云ふのは、病的な人間のことで、健全な精神をもつ限り、內心的の因果應報は間違ひのない原則だと、最も平凡に考へ、深くそれを信じるやうになつて來た。

然し、こゝには、愛する子供が死んだと云ふ事實には、誰の善意も惡意も働いてはゐない。そして彼が、理由なしに、譬へるものもないほどの不幸に陷らなければならなかつた。これは全く譯が解らないことだた。――婚約して、處女までも捧げた男が、理由なしに、或は理由として、傲慢に己の善良を吹聽し、己の移り氣から得た次の戀を得意げに高唱して、そのまゝ消えて了つた不幸を、かの娘がどれほ

ど譯の解らないことに思つたか、そこへ持つて行つて想ひ比べてみやうなど丶は、夢にも考へつかなかつたほど、それほど破天荒な、不合理とも理不盡とも云はふやうのない、譯の解らない不幸だと、彼には感じられた。

暫して、然し、かう云ふのがほんとうの不幸なのだと思ふやうになつた。それは抗すべからざる力だつた。假令彼が、愛兒を双手に抱き締めてゐやうとしても、消えて行く生命に縋りつき、引き戻すわけにはいかなかつた。いかに悲しくとも、殘り惜しくとも、また腹立たしくとも、必竟彼は「諦める」より方はなかつた。どこまでも諦めたくはなかつたが、否應なしに諦めさせられた。

これまで、自分を不幸だ不幸だと呟いてばかりゐながらも、運命に對して飽まで傲慢不遜だつた彼が、このどう避けることも出來ない鐵槌に會つて、心から兜を脱ぐ氣になつた時に、初めて、せめて與へられたものだけは、どんなつまらないものでも、それを取り上げられて了ふ最後の瞬間まで、大事に、善くするやうに、保たなければならない、と考へるやうになつた。つまらないもの丶價をほんとに知つた。人間が、——いつ何ん時でも、どんな大切なものでも、運命の命が下ると同時に「死」と「滅亡」と、そして「忘却」との手に、一言半句あらがふこともなく、差出して了はなければならないやうな無力な人間が、あれこれと撰り好みをするなどは抑々僭越な話だ、どんなつまらないものでも、運命に存在を許されてゐる限り、それは地上の寶であり、人がすこしでもよくするやうに、愛しなければならないものだ。——かう感じた。碌でもない自分だが、大切に善くして行かうと思つた。一生を惜もうと思つた。生存を許されてゐる限り、俺も地上の寶だ……と信じた。

やがて彼は、愛人を「妻」と呼びながら、一戸の主（あるじ）として、東京に住むことになつた。玄關のほかに三間しかない、安普請の、暑いうちだつたが、もの珍らしい彼は、可なり得意で、よく友達を食事に招いたりした。そして久し振りに、落ちついて仕事にかゝつた。もう六七年も、文壇と云ふもの、、人目に立たない隅つこに埋もれてゐた彼の名が、「新進作家」のなかに數へられるやうになつて來た。無理な仕事をしないで済む程度で、雜誌社からの注文が來るやうにもなつた。彼は、名こそ新妻であるが、事實はもう三四年來の伴侶である妻の寢息を聞きながら、夜徹し机の前で、ブツ〳〵小言でも云ふやうに、口のなかで文章を云つてみては、書き續けた。

かう云ふ間に、彼はほんの一寸したことで、舊くからの親友の一人と絶交した。友達と云ふ奴、彼にとつては、寧ろ敬愛する先輩で、幾度となく、彼はこの友達の導きと勵ましによつて、或る思想からよりよい思想へと進むで來た恩を深く感じてゐた。殊に自己嫌惡の鞭で己を鞭ち進むでゐる間は、この友達の思想なり感情なり道義なり、總てが、彼の鞭の慥かさを裏づけてくれる力だつた。けれども彼が幸福であらうとした時に、彼の我が儘な幸福が、時々友達の幸福と衝突しなければならなかつた。假令相手に理屈があらうと、善い感情があらうと、彼は兎に角今自分だけの幸福を樹てつゝあつたから、その根を堅める我が儘は、寧ろ自ら奬勵するやうにしてゐた。その上彼は、たゞ「汝けがらはしき者よ」とだけ大事した友達の葉書を手にした時には、憎みと口惜しさとで蒼くなつた。

「どうなすつたの」と妻が云つた。彼は顫える手でその葉書を渡した。そして、（今に見ろ）と思つた。

妻は勿論彼が受け取つたほどの感激を、その句から受け取るわけはなかつた。それでも、「隨分ね」と云つて涙ぐむだ。それから急に晴々しく、「なんだつていゝぢやあないの」と、笑はうとした。彼はもう一度その葉書を見やうとして、手を延ばした。妻は急にそれを顎の下へ兩手で持つて行つて、

「やぶきませう？」と、彼の意向を訊きながら、指の力を保留してゐた。

「いけない」

彼は葉書をひつたくつて、二階へ上つた。そして机の前でまたそれを眺めた。前にも彼はこの友達と喧嘩をしたことがあつたが、然しやがて、前と同じ、或はそれ以上の友達だつた。喧嘩の不快ないきさつなどには、少しもこだはらずにすんだ、けれども、今度の、この葉書から受けた感情は、一生忘れられないものだらう、と思はれた。そしてそれを、來書函でなく、机の引出に藏つた。

それから半年以上たつてからのことだつた。或る時妻が机の引出しを整理してゐて、それを見附け出した。

「これはどうしませう？」かう云つて、要るものと捨てるものを右左に仕分けてゐたその兩方へ、二三度振り動かして見せた。亂暴に筆で書かれた表を見ると、彼れはそれを受け取つた時の不快を直ぐ現在に感じた。けれどもその強度は遙かに違つてゐた。そして、以前の書生が、ランプの、紙で出來た傘などに、已を鞭撻するにいゝ警句をいくつも書きつけてゐたやうに、その葉書を、自分の緩むだ心に見せる刺戟劑にするつもりで、殊に机の引出しに藏つた心持などは、少し可笑しいやうな氣がした。同時に、

可笑がつちやアいけない、と思つた。それが笑へる時が來たら笑ふがいゝ。しかしまだ早い。そこにころか、今ではもう、今に見ろ、と云ふ感激を起させる力が弱くなつてゐるではないか。利用出來る間は利用しなくつちやアいけない。——かう思つた彼は、

「机の引出でなくつてもいゝが、とつといてくれ」と云つた。「それでも、だらけた時には利く藥なんだ。だけども、よしそのおかげで俺が偉くなつたからつて、××にえばられる因縁はないのさ。藥と間違へて石炭酸を飲んで、案外それがよかつたゝめに病氣まで癒つて了つたと云ふ話があるが、それだからつて、その石炭酸を賣つた藥屋は、醫學博士にやアならないからね」

毒々しく、こんなことを云つてゐる彼も、よくその友達と以前のやうな關係にゐる夢をみた。目が覺めて、懷しく思ふことがあつた。また、以前の、友達の前に一目も二目も置いてヒケてゐる心持を、餘りマザ／＼と見た時には、覺めてから業腹なこともあつた。

これと前後して、彼はだん／＼舊い友達と遠々しくなるやうに感じた。以前、まるで倶樂部のやうに、始終彼の書齋には友達が集つてゐた習慣から、彼はそれを淋しく思つた。それはお前が惡いからだ、と云つて妻を責めたこともあつた。暫く話してゐるうちに、相手の心持と反があつて來ると、女房のうちの用事もそつちのけに、彼がまるで夢中になつて了ふのを見ると、妻はその友達に嫉妬を感じて喜ばなかつた。それは直ぐ客の心にも通じるのだ、かう彼は妻に小言を云つた。けれども彼自身が——以前不平ばかり云つて苛々してゐた「幸福の素寒貧」が、この頃成金然と、平和な顔をしてゐるのも、何くからの友達には、勝手が違つたやうな心持をさせてゐた。——どうも仕方のないことだ、と彼も思ふや

うになつた。

或る時彼は、以前婚約してゐた娘の母親と往來で出遇つた。そして、慌てゝ顏をそむけて、逃げるやうに足早やに行く自分を見出した。――これは慥かに、近頃の彼と調和しない擧動でなければならなかつた。この母親の前には、彼は婚約を破つた男であるばかりでなく、もつとヒドい破約者だつた。嘗てこの母親は、娘との婚約を彼に承知した時に、成婚するまでは、交際するのはいゝが、それ以上進むだ關係には這入らないやうにと云ふ條件を附けて置いた。この約束が守れなくなつた時には、遲かれ早かれ結婚するのだもの、と云ふ云ひ譯が、彼の心にあつたから、さして惡いこととは思はなかつたが、破約の話を持つて母親を尋ねた時には、彼の心は全く重しをかけられてゐた。婚約を取り消すことには、一と言もイヤミを云はずに承知した母親も、「念のため伺ひますが、娘の體に間違ひはございますまいね」と云つた言葉には、憎惡をもつた皮肉がむき出しになつてゐた。彼は眞赤になつて、娘の方を見た。娘は敏捷く、云ふなと云ふ合圖に目を繁叩いた。彼は板ばさみになつた。母親の方からは、「貴方はあの約束を守つてくれませんでしたね」と云はれるのよりももつとヅッと辛い言葉で、彼の破約が詰られてゐるし、娘からは、一度その事實を母親の前に否定した私の言葉を噓にしてくれるなと云ふ、歎願の目で見詰められた彼は、肩の間に低く首を垂れて、暫く默つてゐた。それから、

「大丈夫です」と答へた。假令彼が、首を賭けてそれを受け合つたとて、母親がそれを信じないことは、實際何事もなかつた以前から娘が疑はれ通してゐたことを、彼女から聞き知つてゐた彼には明かだつた。

然しその故を以て、彼はこの嘘を自分に是認する氣にはなれなかつた。あゝ云ふ約束はしましたが、どうもさう云ふ譯には行きませんでした」

と答へて、却つて相手の鼻を衝くやうな痛快を味ひたかつた。それをさうしなかつたことは、——自分の男をすたらせたことは、結果から云へば、きつとこの親子の幸福だつたらうと、後に彼はさう信じた。何故なら、親子の者がその事實を忘れたいと願ふ時がきつと來るだらうと思つたからだ。——それは然し、あとからつけた、蟲がいゝと云はれても仕方のない理屈で、その實際の場合では、彼はたゞ、母親よりは娘の意思に從ひたかつたからだつた。

往來で、母親の視線をコソ〳〵と避けた日から二三日たつて、彼はもう一度娘に逢はふと決心して妻に、散歩したくなつたから出かけると云つた。

「こんな雨降りに、散歩なんぞなさらなくつてもいゝぢやアありませんか」

「したつてもいゝぢやアないか」

「今日はいけません。今日だけはどうぞよして下さい。何んだか今日はいやだ」

彼は恐ろしいやうな氣がした。お喋りな彼は、往來を歩くにも誰か連れをほしがつたが、友達の少くなつたこの頃では、大抵妻とつれだつてどこへでも出かける習慣になつてゐたので、妻も普段から一人でうちに殘ることをイヤがるやうにはなつてゐたが、それにしても、これほどに執拗(しつこ)く云ふことはなかつた。俺のどこかに、さう云ふ不安を感じさせるやうなものが現はれてゐるかな、と彼は思つた。

「何んと云つても、行くと云つたら行くよ」

「いよ／＼いらつしやるなら、私もご一緒に行きませう」

「今日は一人の方がいゝ」

「なぜです」

「一人で歩きたい」

散々爭つた末に、殆ど妻を泣かせないばかりにして、彼は出かけた。

貧家に生れた娘は、その時分或る小料理屋に奉公してゐた。午後の三時半頃で、料理屋へ這入るにはいかにも半々な時間だつたが、彼は思ひ切つて飛び込むで行つた。たつた一度、前にもこゝまで娘に遇ひに來たことがあつた。その時には丁度うちへ歸つた留守だつたが、そのまゝ直ぐ出るわけにも行かず食ひたくもないまづい料理を食ひながら、女中に頼んで、近所で借りて電話口まで娘を呼び出して貰つて、用談だけ濟まして歸つた。

彼の方では全く見忘れてゐたが、彼を案内した女中が、その時に電話をかけてくれた女だつた。注文したゞけのものをすつかり持つて來てゐながら、不意に、

「お待ち遠さまですね」と云つたりした。「何がぢやアありませんよ。いくらね、そいつてやつたつても ね、恥かしくつて來られないんですとさ」廊下へ出ながらこんなことを云つて、バタ／＼と行つて了つたきり、彼は一時間近く一人で放つて置かれた。仕方なしに酒を飲んだり、煙草を吃したりして待つてゐた。今日は酒は飲むまいと思ひながら出て來たのだつたが、禁慾にかけては、彼はいつまでもからだらしがなかつた。

たうとう娘が出て來た。敵意にでも、侮辱にでもを彼は用意してゐた。然し娘はあでやかに笑つて、「いらつしやいまし」と一寸手をついたゞけのいかにもかう云ふうちの女中らしい挨拶をして、「電車道の向ふ側から、斜にこつちへ突っ切つていらしつたでせう。私ちやんと見てましたわ。雨が上つてるのに、洋傘をさして」

彼は安心した。――一體彼の意志で、女の運命を大きく左右してから別れた後に、彼がその女に望み得ることは、彼女が人としてエラくなることよりも、ほんとうの生活に這入ることよりも、たゞ苦勞なく、日々の實生活が幸福であれかしと云ふ一事よりなかつた。いくら自惚が強くても、彼が女に與へ得た影響を、それ以上にも延びるほどのものと計算する氣はなかつた。嘗て彼は、ヒドい思ひをして得た金で、女を廓のそとに出してやつたことがあつたが、その結果は、女に、淺草の活動小屋で下座の三味線を彈かせることに終つた。それまでは兎に角氣樂にしてゐた女の老母までが、婆や奉公に出なければならないことになつた。その時に彼は淋しかつた。善意でしたことでも、時に結果は却つて不幸にもなる、――さう云ふことのあり得る世の中だと思ふことが、淋しかつた。その女は、彼が結婚してから、突然手紙をよこして、今では長唄の師匠をして兎に角人の世話にならずに、幸福に暮してゐると、知らせて來た。そして、「人の世話」から離れるのに三年かゝつたとも書いてあつた。云ふまでもなく彼は喜んだ。そこに、「職業に貴賤はないから、今後交際してくれ、貴方は少し有名になつたと思つてお高くとまつてはいけない、」と云ふやうな文句がなかつたなら、彼は心底から悦びに溢れた返事を送ることが出來たらう。かの、彼の最初の女であつた下婢も、田舍の寺の住職にかたづいて行つたが、詳しいことは分らな

いけれども、兎に角幸福らしいので、彼はこれも喜んでゐた。――然しこの娘にだけは、彼はもう少し高價な幸福も期待し得るかと思つてゐた。それは實は、彼にとつては辛い(つら)ことだつた。少しの惡意もなかつたにしろ、彼がこの娘に加へたものは、不幸より他のものではなかつたのに。そのなかゝら、餘り優れた芽生が延びて來ることは、彼一個から云へば「見返えされた」と云ふ形だつた。けれども、若し娘が、日々の貧生活は辛く苦しくとも、心の幸福を得た立派な人間になつてゐたなら、今の彼は、その方をどんなに喜んだか知れない。娘が輕蔑と憎惡との一瞥を投げて、彼の昔日の利己心を責め嘖ふとも、彼はその方をどんなに喜んだか知れない。

併も彼は、娘がいかにも小料理屋の女中然とした落ちつきを得てゐるのを見て、安心した。それと同時に、彼の緊張した心持には、もう壞してもいゝよと云ふお許しが出たやうに、それはだん／＼たはいなくなつて行つた。

娘は彼等の以前と今との間に、不快な別れ話しの一件が挾まつてゐることを、全く忘れてでもゐるやうに見えた。彼はそれを憫れながらも、どう禁めることも出來なかつた。ふと、娘が云つた。

「今度貴方の奥さんを見に行かう」

「うちも知らないくせに」

「知つてますよウだ。こないだうちへ行つた時お母さんに聞きましたよ。お母さんがさう云つてたわ、何も見せつけがましく、あんな近所にうちをもたなくつたつて、よささうなもんだつて」

實は彼は、娘に相談した上で、娘の母親に遇つて以前の嘘を取り消し、往來で遇つて、赤い顏をしない

ですむやうにしたい、と思つて出かけて來たのだつた。それで、
「お母さんは、」と云ひかけたが、急に彼はあとを口にする勇氣がなくなつて了つた。
「お母さん、どうしたのよ」
「お母さん、……に二三日前遇つたよ」
「さう？　どうして？　お辭儀して？」
「しない。俺の方で逃げた」
「逃げなくつたつていゝわ。お母さん、もう何んとも思つてやしないわ」

彼は益々呑氣になつた。(俺の道義心はいつでも世間に必要なだけよりも、餘計すぎるので、そのお剰(つり)だけが、きつと一人相撲になつちまう。)などゝ、闇々しいことを考へてゐた。——二人とも大ぶん飲んだ。彼には、先刻から訊いて見たくてならないことが一つあつた。それは娘の貞操だつたが有繋、ヴァヂニティの有無を見定める目など、ヘンなことに自負をもつてゐる彼も、觀察だけではどつちとも云へなかつた。

それは、すつかり亂れて了つたやうにも、また案外さうでなささうにも思はれた。
「かう云ふ所にゐると、澤山ィャなことがあるだらう？　お客でなくつても、板場とかなんとか……」
たうとう彼はこんな云ひ方をしてみた。
「ありますよ」娘はかう云つて、揶揄(からか)ふやうにカラ〳〵と笑つた。(はゝア、こんなことが報酬か)かう思つて、彼はすつかり肩の荷を下ろして了つたやうな氣がした。然しまさかに彼も、それ以上に踏み込

むで行く氣にはならなかつた。

酒のけを醒さうと、彼は泥濘道を歩いて歸つた。そして妻に、すつかり白狀した。初めからそこへ行くつもりだつたのを、散歩のやうに云つたのだと話した時には、妻はヒドく腹を立て丶、以後彼の言葉が信用されなくても、それは自業自得だと云つた。彼も一緒になつて怒つて、

「俺を信用しないで、お前の生活は一歩だつて成り立ちやアしない」と云ふ意味を、無學な妻に解るやうに話す折の、彼に獨特な言葉で喋つたりした。

けれども、妻の妊娠中には、彼も、餘り信用され過ぎてゐることを辛く思ふやうな場合があつた。――何喰はぬ顏をしてゐればそれでもすんだが、それではまた彼の氣が濟まなかつた。さうかと云つて一々白狀した所で、姙婦に惡い影響を與へこそすれ、全く無益な正直だと思つた。仕方なしに、三度のことを一度のやうに話した。良人の言の上の貞操と云ふことは、彼にとつては、全く妻のための道德で、それ以上の道德――愛を惜むでゐさえすれば、何もさう重く考へるほどのものぢやアない、と思はれた。

妻の感情を愛護する意志でつく嘘などは、尙更彼には、惡い事ではなかつた。友達と一緒に女郎屋へ行つて、男ばかりで雜魚寢をして歸つた時には、茶屋で遊んだまでの話にして置いた。妻として信じ憎いさう云ふ話は、しない方が、妻を愛する彼の本心に添ふものだつた。ついその以前に、鳥屋から待合に轉業したばかりのうちで、友達と鳥を食ひ酒を飮んで歸つて來た彼は、妻に鳥屋へ行つてゐたと話した。すると、彼の小説の愛讀者で、時々彼を尋ねて來る年下の友達が、どこかでその折の話を聞いてゐて、

彼の妻に向つてこんなことを云つた。

「……そんなことは構はないけれど、ね奥さん、例へば待合に行つてゐながら、鳥屋へ行つてたなんて嘘を云ふやうなことは、よくないやね、さうでせう？」などゝ、彼の聞いてゐる前で、調子を強めて云つた。彼は笑つてゐたが、肚では一寸イヤな氣がした。嘘を、人を陥れ己を護る道徳とよりほかに感じられない間だけ、正直のみが美徳だ。――正直を以つても人を苦しめることは出來るし、嘘を以つても人を愛することは出來る。――なにを生意氣云ふんだ、さう彼は肚のなかで呟いた。

そのくせ彼は、以前とは比べものにならないほど正直になつて來た。それだけ、人も信じ易くなつて時々へまなまねをした。

冬の最中に子供が生れて、ドン／＼部屋を煖めるので、急に火鉢が足りなくなつた。彼は仕事に勞れ切つた腦で、夕方、散歩がてら近所の古道具屋へそれを見に行つた。そこは前からの名染で、前には隨分價切りもしたが、兎に角いゝお顧客の方だと自分で思つてゐた。それに、道具屋の方でもこの頃はさう掛價をしなくなつたやうだし、火鉢の價段など彼はよく知らないので、殆ど云ひ價で買つて歸つた。すると、その晩のうちに、その瀬戸火鉢は、二つながらパチリと罅がいつて了つた。翌日彼は、瀬戸物屋に買物に行つて、ふと、それと同じ品の新のがあつたので、價段を聞いてみると、古道具屋の價と少しも違はなかつた。――彼は腹を立てた。罅のいつて了つたものを返す譯にもいかないので、その當分火鉢を見ると癪にさはつた。赤い舌を出してゐる道具屋が憎らしかつた。けれども考へてみると、矢ッ張り自分の方が惡いのだつた。彼はほんとうに道具屋を信用してゐたわけではなく、勞れて、面倒臭い

氣持だつたので、當然あるべきだけ注意深くなかつたのだ。それを、心からの信用で對した者から、虚僞の返戻を受け取つたやうに考へるのは、間違つてゐると思つた。――それからは、それだけのことでも考へさせてくれた鉢のいつた火鉢に、もの柔かな親しみを感じて、人と話をしながらも、彼は、脂手でよく撫で廻してゐた。

けれども、前に書いたOと云ふ青年が、一と言も嘘を云はずに彼を騙してゐたことを知つた時には、腹は立たなかつた代り、或はそれだけ、彼はもう少し不幸だつた。彼がこの友達を信じてゐたことは、もとより道具屋の比ではなかつた。以前のことは兎も角も、彼のうちに來だすやうになつてからのことは、大抵のことまで包まず話してくれると思つてゐた。所が或る時、他の友達が、その年下の友に就いて、かう云つた。

「O君は、中々小説が上手だつて云ふぢやアないか。L君がさう云つてた」

Lと云ふのは、N氏門下の若い作家だつた。そのLがN氏の死ぬ前後のことを書いた文章のなかで、彼はO――と云ふ名前を讀んだことがあつたが、然し幸福な彼は、夢にもそれを自分の所へ來るOだとは思はなかつた。めつたにない姓であるにも拘らず、それを同姓異人だとばかり、頭から思ひ込むでゐた――彼は可なりOに愛され敬はれてゐると自ら信じてゐたし、またOが彼以外に好きな作家として始終擧げる名もきまつてゐて、Lがそのなかの一人でないばかりでなく、殆ど一度も二人の間の話題に上つたこともなかつたから、よもやOが、そこへ原稿を見せに行つてゐやうなどとは思ひよらないのも、無理ではなかつた。で、かう云つた。

「そりや違ふだらう。もう一人同じOと云ふ名の人がゐるんぢやアないか。N氏の追憶號のLの書いたもの丶なかにも、Oと云ふ名前が出て來るが、その人なんだらう」

「さうかしら」

「さうだと思ふがね」

N氏の追憶號を、彼のOから借りて讀んだことを思ひ出した。まさか、自分の名がそのなかに出てゐることを知らなかつた筈はあるまいし、知つてゐて、今まで彼の前に話さなかつたことを、この雜誌を讀んで知れよと云はんばかりに、持つて來て貸すと云ふことも彼れには考へられなかつた。

「違ふんだよ。きつと同姓異人だらう」

から云つた彼は、その後Oが來た時に、

「君はLと云ふ人に原稿を見て貰つてやしまい？」と、全く否定の返事ばかりを期待しながら、極く氣輕に尋ねた。すると、意外にも、Oは眞赤になつて、ヒドくドキマギしながら、

「い丶え、見せたんですよ。然しそのことは、今に私が書きますよ。……そりやア、一寸、今困る……」と云ふやうな、曖昧なことをブツ〳〵と呟いた。彼は可なり慫いた。

「さうかい。J君がこの間そんなことを云つてたが、別の人だとばかり思つてたんだ」から云つたきりで、彼は別な話に持つて行つて了つた。——不愉快と云ふよりも、彼は不幸な氣がした。この年下の友達のなかに、彼の心はよい小說家を見出したがつてゐた。が、それ以上に、よい人間を見出す方を望むでゐた。その目的のために、いくらかの役に立つたと思ひ、立ちたいと希ひ、立ち得ると信じてゐた彼は、

辛く、情なく思つた。

しかし、彼はそれでこの友達に絶望しはしなかつた。何故なら、今、兎に角幸福である彼自身の過去には、もつとヅッとヒドいことがあつたから。似たやうな例で云へば、彼は三年の間、かの近頃絶交した敬愛してゐる友達を、Oよりも遙かに惡い意味で騙してゐた。下婢との關係の内容を、他の女との事件に仕立て直して話し、相談さへも持ちかけた。さう云ふふて／＼しい不良さを有つてゐた彼には、腹を立てる勇氣はなかつた。唯淋しく不幸に感じた。笑つて了ふ氣になれる場合なら、もつと積極的に、惡意を含むだ騙し方をされても、彼は腹は立てゝも、不幸ではなかつたらう——それだけのことで、或はもつとヅつとヒドいことでも、Oを嗤つて了ふことは、彼の過去か許さなかつた、その過去を生かさうとしてゐる彼の現在が許さなかつた。Oを嗤はふするならば、彼の現在も亦嗤ふべきものに外ならなかつた。

子供が出來たことは、彼の日常の生活を、隔段に幸福なものにした。嬰兒の幾重にも縊れた首のところに、鼻の頭を摺り込むやうにして、笑はしてやつたりしてゐる時に、急に、きゆうと、力一杯に締めつけてやりたい衝動で、體も心も顫えて了ふことがあつた。また、靜かに眠つてゐる顏を、ヂッといつまでも見詰めてゐると、この嬰兒が禿頭の爺になつて、孫の寢顏を覗き込むでゐるやうな、彼がいくら長生きをしても見られない筈の、先の世のことが、霞のやうにモウ／＼と彼の心に感じられた。父母の祖父母の、先祖の——心を、總て己のうちに感じるやうに、この子の、その子、またその子の——心のなかへも、己の總てが流れ込むで行く、——さう云ふ心持で、彼は急に生々と、若々しく心が踴つて來

ることがあつた――。親子は一世、夫婦は二世、主從三世、と云ふ言葉がある。主從のことは云はない。彼には、夫婦は一世の氣がしても、親子は永世の氣がした。夫婦は横の線で、親子は縱の線のやうに思はれた。假令彼が今日(けふ)が日死なうとも、五六十年も先の世のことを感じながら、自分を短命とは思はなからうと考へられた。

殆ど智德の教養がないと云つてもいゝ妻をも、彼は心から愛してゐた。

語彙が少いので、少し込み組つたことを話さうとするには、ヒドく骨が折れた。趣味性の涵養がないので、買ひ物の時よく爭ひが起つた。冗談や地口や洒落は大抵通じなかつた。一切の科學めいた話は、い、いろはから說明する煩ひを前以て覺悟するのでなければ、うつかり云ひ出せなかつた。字が碌に書けなかつた。振假名なしでは雜誌も讀めなかつた。(從つて彼の作品も、單行本にした時に、どうかすると讀む位のものだつた。)彼以上に行儀のいゝ方ではなかつた。そして、自己の好惡以外には、道義心から出るやうな道德も、殆どないと云つてよかつた。野蠻人のやうな時があつた。

然し彼は、彼女のなかに、自分に極く近いものを感じた。音樂に譬へれば、一音階(オクターブ)も二音階も隔てゝこそゐれ、同じ音(ね)が彼女のなかに響くのを聞くことが多かつた。なまじ近い音で音色(おんしよく)の違つたのよりは、その方が迥かに心持がよかつた。音階の隔りを、彼は全く問題にしなかつた。今更ひふ、み、よ、をたどつて昇つて來るよりも、そこで、――あるがまゝのところで、音を大きくさせる方を撰むだ。それには、彼自身の音を大きくしなければならないと思ひ。

もう一つ、實生活の上に、小さくはあるが、幸不幸を形造る、「趣味」――「道樂」に就いて書かう。夙くから現はれて、どんなに増長するかと思はれた彼の「趣味」は途中から、餘程足弱になつて了つた。ぶら〳〵怠けてゐること、稀に買ふ極く安い道具、食ひもの、旅行、寄席、たまに象刻、――そんなものだつた。茶の湯をやる、義太夫を習ふ、踊も覺えてみたい、などゝ親しい友達にはよく種々な計畫を話したが、いよ〳〵始めるでもなかつた。ほんとにいゝ繪畫、彫刻、音樂、建築、見る芝居、さう云ものは、藝術を仕事としてゐる彼にとつては「趣味」ではなくて、勉强のうちだつた。なかで、繪畫が一番解るやうに思へた。――彼は自分の「趣味」にも滿足してゐた。

かう云ふ彼に、たつた一つ易く「幸福」を得させないものは、仕事だつた――創作だつた。

某大家も許したやうに、彼はだん〳〵「流行兒」にされて、年中背負い切れないほどの仕事を押しつけられるやうになつた。それは幸福に違ひなかつた――どんなに安く踏んでも、彼の書いたものが、大勢の人の目に觸れ、心に這入る機會を有つと云ふ、その數の多さだけを云つても、充分な幸福に違ひなかつた。然し人に斷りを云ひ惛くがる彼の性分から云ふと、精力以上の仕事で、時々ヒドく不幸な目に遇はされる惧れもあつた。最近の彼には、駄作だと思ひながらも、期日が迫つて、編輯者に渡して了つた作がまゝあつた。

また彼は、初期の作以來、自己嫌惡の鋭い鞭で叩き出し、その後の自分を縛る繩を綯ふやうな心持の

一種の作風を有つてゐたが、近頃幸福である彼はその使ひ馴れた作風では補足出來なくなつてゐた。

それより、一番大きな不幸は、彼が澤山な解らない問題を人生に有つてゐることだつた。よくもあり惡くもあると思へることが澤山あつた。或る人が、よいと云つて絶叫したことでも、彼には、その影によくないもの或はよくなくなるものゝあるやうに思へた。或る人が惡いと斷定しても、彼はそこに、よいもの、或はよくなるものゝ潜むのが感じられた。――これを、彼はよいことだとは思はなかつた。けれどもなまじつかに、きまるよりは、遥かにいゝことだ、强ゐてきめやうとしないでも、だん／＼にきまることだと思つてゐた。――然し、きまらないために、種々な不安に遇ふのは今の彼として止むを得ないことだつた。

――かやうに、彼は、「兎も角も」幸福だつた。その「兎も角も」の内容である、彼の種々の不安こそは、この一篇の主眼でなければならない。――それこそは、この次に來べき「幸福」を生む芽生でなければならない。

永い間彼の幸福は、卵の上に卵を重ね載せるやうな不安定にゐた。惡と云ふ卵の上に載せても、載らないことはなかつたが、その幸福の卵は直ぐグラついた。善の卵の上に置いて見ても、充分な平均はとれなかつた。彼は種々なものゝ上にそれを積み上げやうとした。今、彼の幸福はやゝ据はりのいゝ土臺の上に己を見出したと云へる。――然し始終細かく震えてゐる。その震えから、更に安定な、次の土臺

へ轉げて行く原動力を得なければならない。この大切な震動に就いて作者は、近く稿を改めて書かうとしてゐる――。

――大正六年八月作――

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝 神田區裏神保町	上田屋
仝 京橋區銀座三丁目	東海堂
仝 京橋區元數寄屋町	北隆館
仝 京橋區西紺屋町	良明堂
仝 日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝 東區京町堀	太華堂
仝 北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝 間之町七條	大盛社

○定價 金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

册數／國別	内國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は内國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

本號定價金六拾錢 郵税金四錢

送金注意

一 **誌代郵税** は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 **郵便爲替** にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一 **振替貯金** 口座は**東京三十四番**なり

一 **郵券代用** 必ず**一割增**の事

一 **集金郵便** の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄 金六錢（集金委託料

一金五圓迄 金七錢（及送料）

一 **受領證請求** は必ず返信料を要す

大正六年八月廿九日印刷納本
大正六年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 田駒之助
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 中央公論社
電話局小石川一四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.